



大正十三年七月二日印刷
大正十三年七月五日發行

漢文叢書
近思錄傳習錄

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行者兼印刷者　三浦理

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　有朋堂印刷部

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

（新非製本）

傳習錄 卷

朱子晚年定論一編。執齋從㆓全書本㆒附㆓於錄後㆒。然是編先儒往往議㆔其非㆓晚年㆒。愚案文成答㆓羅整菴㆒書。既自謂㆑不㆔必盡出㆓於晚年㆒。大意委曲調停。以㆑明㆓此學㆒爲㆑重。則其說之晚不㆑晚。今不㆔必須㆓究問㆒也。但世之譏㆓朱子㆒者。率多挾㆓勝心㆒。肆㆓掊擊㆒。而文成不㆑屑㆑爲㆑之。蓋其不㆓敢牴牾㆒者本心也。而不㆑得㆑不㆓牴牾㆒者。道固如㆑是。因采㆘其語之多出㆓於晚年㆒者㆖。姑以示㆑人。庶㆔幾委曲而調㆓停之㆒。無㆑事㆓於掊擊㆒也。然其有㆓異同㆒。豈敢自欺乎。若或謂㆔此決非㆓定論㆒。則文成於㆑是遂將㆑不㆑得㆑不㆓牴牾㆒矣。然非㆓其所㆑欲也。識者宜㆑諒㆑心焉。第今則既有㆓傳習前後之錄㆒。足㆔以著㆓明此學㆒矣。當㆑不㆓復必他求㆒。故愚特以㆓是編㆒還㆓之於全書㆒云。大學問一編。執齋附㆓載於此錄㆒。案鄒謙之。嘗以㆑此附㆓於大學古本㆒。猶㆔晦庵章句之有㆓或問㆒。今附㆓於此㆒。無㆑謂也。執齋又從㆓楊嘉猷本㆒。附載示。徐曰仁應試一篇。論俗四條。客坐私祝一篇。案三篇固佳。然餘姚雜著。皆無㆑不㆑佳。不㆓必刪還錄㆒。執齋所㆑鈔年譜。亦誠畧矣。學者就㆓全文㆒讀㆑之。可也。故今竝去㆑之。

今姑く之に從つて省略に從ふ事とせり。

傳習錄終

被二他一雖。發揮得愈加ニ精神。若ニ顏子ニ聞レ一知レ十。胸中了然。如何得ニ問難。故聖人亦寂然不レ動。無レ所ニ發揮。故曰非レ助。

鄒謙之嘗語ニ德洪ニ曰。舒國裳曾持ニ一張紙。請ニ先生寫ニ拱把之桐梓一章。先生懸レ筆爲書。到下至ニ於身ニ而不上レ知下所ニ以養上レ之者。顧而笑曰。國裳讀レ書。中ニ過狀元ニ來。豈誠不レ知ニ身之所ニ以當上レ養。還須ニ誦レ此以求上レ警。一時在侍諸友。皆惕然。

鄒謙之嘗て德洪に語つて曰く、『舒國裳曾て一張の紙を持ちて、先生に拱把の桐梓の一章を寫さんことを請ふ。先生筆を懸けて爲に書す。「身に至りては之を養ふ所以の者を知らず」に到り、顧みて笑つて曰く、國裳書を讀み、狀元を中過し來る。豈に誠に身の當に養ふべき所以を知らざらんや。還つて此を誦して以て警を求むるを須ふと。一時在侍の諸友、皆惕然たり。』

(一) 陽明の弟子、傳未詳　(二) 孟子告子上の「拱把桐梓、人苟欲レ生レ之、皆知レ所ニ以養一レ之者上。至ニ於身一不レ知レ所ニ以養一レ之者上。豈愛レ身不レ若ニ桐梓一哉。弗レ思甚也」をいふ　(三) 前出の文中の句　(四) 狀元及第に中り來れる人也、狀元とは進士試驗に第一等にて及第せる稱

編者曰く、執齋の標註本には、此次に附錄として『朱子晩年定論』及び『大學問』『王文成公年譜節略』を添ふ。一齋欄外書に曰く、

知恐是無方體的。最難捉摸。先生曰。良知卽是易。其爲道也屢遷。變動不居。周流六虛。上下無常。剛柔相易。不可爲典要。惟變所適。此知如何捉摸得。見得透時便是聖人。

(一) 論語八佾に「其如レ示二諸斯一乎、指二其掌一」又中庸に「治レ國其如レ示二諸掌一乎」 (二) 掌はいつも見てゐるが、其手の筋を問はるれと知らず。以て道の至簡至易と至微至精とに喩ふ (三) とらへがたし (四) 卦の六位をいふ (五) 典は常也、要は求也、之を常法定準として、常に以て求むべからずとの意

問。孔子曰。回也非助我者也。是聖人果以相助望門弟子否。先生曰。亦是實話。此道本無窮盡。問難愈多則精微愈顯。聖人之言本自周遍。但有問難的人。胸中窒礙。聖人

問ふ、『孔子曰く、回や我を助くる者に非ざるなりと。是れ聖人は果して相助くるを以て門弟子に望むや否や。』先生曰く、『亦是れ實話なり。此道本窮盡無し。問難(二)愈々多ければ則ち精微愈々顯る。聖人の言は本自ら周遍(三)なれども、但だ問難(四)ある人は、胸中窒礙す。聖人は他に一難せられ、發揮し得て愈々精神を加ふ。顏子の若きは、一を聞いて十を知り、胸中了然たるを以て、如何ぞ問難し得ん。故に聖人も亦寂然として動かず、發揮する所無し。故に曰く助くるに非ずと。』

(一) 論語先進篇に「回也非レ助レ我者一也、於二吾言一無レ所レ不レ說」 (二) 問難が多ければ多き程いよ〳〵あらはる (三) あまねくゆきわたる (四) 問難を有する人は其爲めに胸中がふさがりとゞこほるも、聖人は彼の一難を受くれば道理を發揮して愈々精神を加ふ

人心本是天然之理。精精明明無纖介染著。只是一無我而已。胸中切不可有。有即傲也。古先聖人許多好處也只是無我而已。無我自能謙。謙者衆善之基。傲者衆惡之魁。

無我のみ ◉ 有我なるべからず

又曰。此道至簡至易的。亦至精至微的。孔子曰。其如示諸掌乎。且人於掌何日不見。及至問他掌中多少文理。却便不知。即如我良知二字。一講便明。誰不知得。若欲的見良知。却誰能見得。問曰。此

又曰く、『此道は至簡至易にして、亦至精至微なり。孔子曰く、其れ諸を掌に示すが如きかと。且つ人掌に於て何の日か見ざらん。他の掌中多少の文理を問ふに至るに及びては、却つて便ち知らず。即ち我が良知の二字の如き、一たび講ずれば便ち明かなり。誰か知り得ざらん。若し良知を的見せんと欲せば、却つて誰か能く見得ん。』問うて曰く、『此知は恐らくは是れ方體無きものにして、最も提摸し難からん。』先生曰く、『良知は即ち是れ易なり。其道たるや屢〻遷り、變動して居らず、六虚に周流して、上下常無く、剛柔相易りて、典要と爲すべからず、惟だ變の適する所のまゝなり。此知如何ぞ提摸し得ん。見得て透る時は便ち是れ聖人なり。』

方枘。此道坦如二道路一。世儒往往自加二荒塞一。終身陷二荊棘之場一而不レ悔。吾不レ知二其何説一也。德洪退謂二朋友一曰。先生誨レ人不レ擇二衰朽一。仁人惻レ物之心也。

を憫むの心なり。』

(一)老學者 (二)本屋形(ホンヤカタ)の上り口にある處也 (三)圓き穴に四角なるほぞ、說の相合はざるに喩へたる也 (四)自ら其道をあらし塞ぎて

先生曰。人生大病只是一傲字。爲レ子而傲。必不孝。爲レ臣而傲。必不忠。爲レ父而傲。必不慈。爲レ友而傲。必不信。故象與二丹朱一俱不肖。亦只一傲字。便結二果了此生一。諸君常要レ體レ此。

先生曰く、『人生の大病は只だ是れ一の傲の字なり。(一)子と爲りて傲れば必ず不孝に、臣と爲りて傲れば必ず不忠に、父と爲りて傲れば必ず不慈に、友と爲りて傲れば必ず不信なり。故に象と丹朱と倶に不肖なるも、亦只だ一の傲の字、便ち此生を結果したるなり。(二)諸君常に此を體するを要す。人心は本是れ天然の理にして、精精明明纖介の染著無し。只だ是れ一の無我のみ。胸中切に有なる(四)べからず。有なれば即ち傲なり。古先聖人(三)の許多の好處も、也只だ是れ無我のみ。無我なれば自ら能く謙なり。謙は衆善の基、傲は衆惡の魁なり。

(一)おごりたかぶる (二)象と丹朱との不肖なるも、只一の傲にて其一生涯を終へて了ひたる也 (三)心の本體は

無レ心俱是實。有レ心俱是幻。汝中曰。有レ心俱是實。無レ心俱是幻。是本體上說二功夫一。無レ心俱是實。有レ心俱是幻。是功夫上說二本體一。先生然二其言一。洪於二是時一尙未レ了二達一。數年用レ功。始信二本體功夫合一一。但先生是時因レ問偶談。若吾儒指二點人一處。不三必借レ此立二言耳。

時に於て尙ほ未だ了達せず。數年功を用ひて、始めて本體功夫合一なるを信ず。但だ先生是の時問に因つて偶〻談ず。吾が儒の人を指點する處の若きは、必ずしも此を借りて言を立てざるのみ。

㈠ 此處の氣を証する事、眞に出づ　㈡ 地名　㈢ 實相は法華經の所說にて諸法實相、幻相は圓覺經の所說所にて事々皆空也　㈣ 心の本體を見つけてするは皆實事にて本心なきは幻空也　㈤ 質問あるまゝに偶々此談あり

嘗見下先生送二二三耆宿一。出レ門退坐二于中軒一。若レ有二憂色一。德洪趨進請問。先生曰。頃與二諸老一論及二此學一。眞員鑿

嘗て先生二三の耆宿を送り、門を出で、退いて中軒に坐するに、憂色ある若きを見る。德洪趨り進みて請ひ問ふ。先生曰く、『頃諸老と論じて此學に及ぶに、眞に圓鑿方枘なり。此道は坦として道路の如し。世儒往往にして自ら荒塞を加へ、終身荊棘の場に陷りて悔いざるは、吾れ其何の說なるかを知らざるなり。』德洪退いて朋友に謂ひて曰く、『先生人を誨ふるに衰朽を擇ばず。仁人物

知充天塞地。中間只有這箇靈明。人只爲形體自間隔了。我的靈明便是天地鬼神的主宰。天沒有我的靈明。誰去仰他高。地沒有我的靈明。誰去俯他深。鬼神沒有我的靈明。誰去辨他吉凶災祥。天地鬼神萬物離却我的靈明。便沒有天地鬼神萬物了。我的靈明離却天地鬼神萬物。亦沒有我的靈明。如此便是一氣流通的。如何與他間隔得。又問天地鬼神萬物千古見在。何沒了我的靈明。便俱無了。曰。今看死的人。他這些精靈游散了。他的天地萬物尚在何處。

散せり。他の天地萬物尚ほ何處に在りや。』

(一)互に相感じ相應ずる上について看よ　(二)天地の中にて其心は何ぞ　(三)人の心とはどのやうなるものか　(四)天地の氣をいふ　(五)以下陽明の語也、此上に「曰」の字を脱せるか　(六)現在也、現に存在す　(七)我の靈明は死するとともに無くなる

先生起行征思田。德洪與汝中追送嚴灘。汝中擧佛家實相幻相之說。先生曰。有心俱是實。無心俱是幻。

先生起行して(一)思田を征す。德洪、汝中と追うて(二)嚴灘に送る。汝中、(三)佛家の實相幻相の說を擧ぐ。先生曰く、『(四)心有るは俱に是れ實、心無きは俱に是れ幻、心無きは俱に是れ實、心有るは俱に是れ幻なり。』汝中曰く、『心あるは俱に是れ實、心無きは俱に是れ幻とは、是れ本體上に功夫を說く。心無きは俱に是れ實、心あるは俱に是れ幻とは、是れ功夫上に本體を說くなり。』先生其言を然りとす。洪是の

人便與體了。禽獸草木益遠矣。而何謂之同體。先生曰。儞只在感應之幾上看。豈但禽獸草木。雖天地也與我同體的。鬼神也與我同體的。請問。先生曰。儞看這箇天地中間甚麼是天地的心。對曰。嘗聞人是天地的心。曰。人又甚麼教做心。對曰。只是一箇靈明。可

豈に但だ禽獸草木のみならんや。天地と雖も也我と同體なるもの、鬼神も也我と同體なるものなり。」請ひ問ふ。先生曰く、「儞看よ。這箇の(二)天地の中間甚麼か是れ天地の心なる。」對へて曰く、「嘗て聞けり人は是れ天地の心なりと。」曰く、(三)「人は又甚麼を心と做さしむるか。」對へて曰く、「只だ是れ一箇の(四)靈明なり。」(五)「知るべし天に充ち地に塞り、中間只這箇の靈明あり。人は只だ形體の爲に自ら間隔せらる。我の靈明は便ち是れ天地鬼神の主宰なり。天も我の靈明ある沒くんば、誰か他の高きを仰がん。地も我の靈明ある沒くんば、誰か他の深きに俯せん。鬼神も我の靈明ある沒くんば、誰か他の吉凶災祥を辨ぜん。天地•鬼神•萬物も我の靈明を離却せば、便ち天地•鬼神•萬物あること沒く、我の靈明も天地•鬼神•萬物を離却せば、亦我の靈明ある沒し。此の如く便ち是れ一氣流通せるなれば、如何ぞ他と間隔し得ん。」又問ふ、「天地•鬼神•萬物は千古より(六)見在す、何ぞ沒了せん。我の靈明は便ち倶に無し。」曰く、「今死せるの人を看よ。他の這の些の精靈は游(七)

則爲二剛善一。習二於惡一則爲二剛惡一。柔的習二於善一則爲二柔善一。習レ惡則爲二柔惡一。便日相遠了。

先生嘗語二學者一曰。心體上著二不レ得一念留滯一。就如三眼著二不レ得些子塵沙一。些子能得二幾多一。滿眼便昏天黑地了。又曰。這一念不二但是私念一。便好的念頭亦著二不レ得些子一。如下眼中放二些金玉屑一。眼亦開不レ得了上。

先生嘗て學者に語つて曰く、『心體上には一念の留滯をも著け得ず。(一)就ち眼の些子の塵沙を著け得ざるが如し。些子能く幾多なるを得ん、滿眼便ち昏天黑地となる。(二)』又曰く、『這の一念は但だ是れ私念のみならず、便ち好き念頭も亦些子をも著け得ざること、眼中に些かの金玉屑(三)を放たば眼も亦開き得ざるが如し。』

(一) 心の本體には一念の滯りをも著けてはならぬもの也 (二) いさゝかの塵沙はもとよりいくらの事でもあり得ざるに、それが爲めにまなこ全體まつくらにする (三) 金玉の粉末

問人心與レ物同體。如二吾身一。原是血氣流通的。所三以謂二之同體一。若於レ

問ふ、『人心は物と同體なりと。吾が身の如き原是れ血氣流通せるものなれば、之を同體と謂ふ所以なり。若し人に於てせば便ち異體なり。禽獸草木は益〻遠し。而るを何ぞ之を同體と謂はん。』先生曰く、『爾只だ感應の幾(一)上に在りて看よ。

意萌時。分明自心知得。只是不能使他即去。先生曰。你萌時這一知處。便是你的命根。當下即去消磨。便是立命功夫。

ち去らしむる能はず。』先生曰く、『爾の萌せる時這の一の知る處は、便ち是れ爾の命根なり。(二)當下に即ち消磨し去らば、(三)便ち是れ命を立つるの功夫なり。(四)』

(一)其私意をして即座に去らしむる能はず　(二)汝が私意の萌す時、自心に知るといふその處が汝の生命の根原也　(三)即坐にそれをもちひ銷磨すれば　(四)天命を立つる工夫也。孟子盡心上に「修身以俟之、所以立命也」

夫子說性相近。即孟子說性善。不可專在氣質上說。若說氣質。如剛與柔對。如何相近得。惟性善則同耳。人生初時善原是同的。但剛的習於善

『夫子の性は相近しと說くをば、即ち孟子は性善と說く。(一)專ら氣質上に在りて說くべからず。(二)若し氣質を說かば、剛と柔との對するが如き、如何ぞ相近くし得ん。惟だ性善は則ち同じきのみ。人生初時の善は、原是れ同じきものなれども、但だ剛なるもの善に習へば則ち剛善と爲り、惡に習へば則ち剛惡と爲る。柔なるもの善に習へば即ち柔善と爲り、惡に習へば則ち柔惡と爲る。便ち日に相違し。』

(一)孔子が性相近し(論語陽貨篇)と說くは、孟子が性善(孟子滕文公上篇・告子上篇)を說くと同じく、本體の性の事なり　(二)程朱の如く、孔子の謂ふ所の性を專ら氣質の性の說として說くべからず

譬如二一塊死肉一。打也不レ知二得痛痒一。恐終不レ濟レ事。回レ家只尋二得舊時伎倆一而已。豈不レ惜哉。

の流るゝ如く、眞劍に工夫を著けよとの意 ㊁只ぼんやりとうか〳〵日を經らば ㊂昔のまゝの功を尋ね得んのみ。伎倆は字彙に功也とあり、蓋し知謀計策といふ如き意の俗語

問近來妄念也覺レ少。亦覺レ不二曾著レ想。定要二如何用レ功。不レ知此是工夫否。先生曰。汝且去二著實用レ工。便多二這些著レ想也不レ妨。久久自會二妥帖一。若纔下二得些功一。便說二效驗一。何足レ爲。一友自嘆。私

問ふ、『近來妄念也少きを覺え、亦曾て㈠想に著せざるを覺ゆ。㈡定めて如何に功を用ふるを要せん。知らず此れ是の工夫なりや否や。』先生曰く、『汝且く著實に工を用ひば、便ち這の些かの想に著すること多きも也妨げず。㈢久久にして自ら妥帖するを會せん。若し纔かに些かの功を下し得て、便ち效驗を說かば、何ぞ爲すに足らん。』

㊀殊更に安排思索することなきを覺ゆ ㊁此後如何に工夫を用ひんとせんか、やはり斯くの如くするのが工夫なりや否や ㊂漸々と自然にしつかり落ちつく事を會得せん

一友自ら嘆ず、『私意の萠す時、分明に自心に知り得るも、只だ是れ㈠他をして即

活潑潑地。先生曰。亦是天地間活潑潑地。無レ非ニ此理一。便是吾良知的流行不レ息。致ニ良知一便是必有レ事的工夫。此理非ニ惟不一レ可レ離。實亦不レ得而離一也。無レ往而非レ道。無レ往而非ニ工夫一。

良知の流行して息まざるなり。良知を致すは便ち是れ必ず事ありの工夫なり。此理は惟だ離るべからざるのみに非ずして、實に亦得て離れざるなり。往くとして道に非ざるは無く、往くとして工夫に非ざるは無し。』

(一) 明道の語を引いて問ふ也　(二) 中庸に語を引いて問ふ所の鳶飛び魚躍ると、孟子の謂へる必ず事ありとは皆同じくいき〳〵として働くところ也　(三) 離れてはならぬ事なるのみならず、實に離れ得ぬことなり

先生曰。諸公在レ此。務要レ立下箇必爲ニ聖人一之心上。時時刻刻須ニ是一棒一條痕。一摑一掌血一。方能聽ニ吾說話一句句得レ力。若茫茫蕩蕩度レ日。

先生曰く、『諸公此に在りて、務めて箇の必ず聖人と爲るの心を立つるを要す。時時刻刻、須らく是れ一棒一條の痕、一摑一掌の血なるべし。方に能く吾が說話を聽いて、句句力を得ん。若し茫茫蕩蕩として日を度らば、譬へば一塊の死肉の如く、打つも也痛癢を知りえず、恐らくは終に事を濟さず、家に回りて只だ舊時の伎倆を尋ね得んのみ。豈に惜まざらんや。』

(一) 禪錄にある語、蓋し宋代の俗語、棒は杖、摑は掌也。杖にて打てば一條の杖の痕あり、掌にて打てば一掌の血

見否。衆曰不レ見。佛說還未レ見レ性。此義未レ明。先生曰。手指有レ見有レ不レ見。爾之見レ性常在ニ人之心神一。只在ニ有レ視有レ聞上一馳騖。不下在ニ不レ視不レ聞上一著實用上レ功。蓋不レ視不レ聞是良知本體。戒愼恐懼是致ニ良知一的工夫。學者時時刻刻。常視ニ其所一レ不レ視。常聞ニ其所一レ不レ聞。工夫方有ニ箇實落處一。久久成熟後。則。不レ須レ著レ力。不レ待ニ防檢一。而眞性自不レ息矣。豈以下在レ外者之聞見上爲レ累哉。

りて、只だ視ることあり聞くことある上に在りて馳騖(五)し、視ず聞かざる上に在りて著實に功を用ひざるときあらん。蓋し視ず聞かざるは是れ良知の本體にして、戒愼恐懼は是れ良知を致すの工夫なり。學者は時時刻刻、常に其の視ざる所を視、常に其の聞かざる所を聞かば、(七)工夫は方に箇の實落の處あるべし。久久に成熟して後は、則ち力を著くるを須ひず、防檢(八)するを待たずして眞性自ら息まず。豈に外に在る者の聞見を以て累を爲さんや。』

(一) 下出の佛家の問答を擧げて問ふ　(二) 或和尚　(三) 大衆、參じたる衆僧也　(四) 指を見る如く向ふの人の心神にのみ目を付け　(五) 無闇とかけ走る　(六) 心の本體の上に在りて也　(七) 工夫は實際に落ちつく所あらん　(八) わざ〳〵防備警戒して檢束するまでもなく

問。先儒謂。鳶飛魚躍。與ニ必有レ事焉一。同一

問ふ、『先儒(一)謂ふ、鳶(二)飛び魚躍ると必ず事ありとは、同一に活潑潑地なりと。』

先生曰く、『亦是れ天地の間活潑潑地にして、此理に非ざる無し。便ち是れ吾が

年。俱是如此。諸君聽吾言。實去用功。見吾講一番。自覺長進一番。否則只作一場話說。雖聽之亦何用。

と雖も亦何の用あらん。』

(一) 實際に工夫を用ゐば　(二) 一段の進歩を覺えん

先生曰。人之本體。常常是寂然不動的。常常是感而遂通的。未應不是先。已應不是後。

一友舉。佛家以手指顯出問曰。衆曾見否。衆曰見之。復以手指入袖問曰。衆還

先生曰く、『(一)人の本體は、(二)常常是れ寂然不動なるもの、常常是れ感じて遂に通ずるものにして、(三)未だ應ぜざる是れ先ならず、已に應ずる是れ後ならず。』

(一) 人の心の本體　(二) 寂然感通の二句は易係辭に出づ、これに常々の二字を加ふ、常々はいつでも也、この二字本章の眼目也　(三) 二句は伊川の語、近思錄道體類に出づ

一友擧ぐ、『(一)佛家手指を以て顯出して問うて曰く、(二)衆曾て見しや否やと。衆曰く、之を見たりと。復手指を以て袖に入れて問うて曰く、衆還見るや否やと。衆曰く、見ずと。佛說く、還つて未だ性を見ずと。此義未だ明かならず。』先生曰く、『手指は見ゆるときあり見えざるときあり。爾の性を見るも、常に人の心神に在

恐良知亦不レ能レ無。先生曰固然。但初學用レ功。却須ニ掃除蕩滌一。勿レ使ニ留積一。則適然來遇。始不レ爲レ累。自然順而應レ之。良知只在ニ聲色貨利上一用レ工。能致ニ得良知一。精精明明毫髮無レ蔽。則聲色貨利之交。無レ非ニ天則流行一矣。

曰く、『固より然り。但だ初學の功を用ふるは、却つて須らく掃除蕩滌(二)して留積せしむること勿からしむべし。則ち適然(三)として來遇するも、始より累を爲さず、自(四)然に順ひて之に應ず。(五)良知は、只だ聲色貨利の上に在りて工を用ひ、能く良知を致し得て、精精明明として毫髮も蔽無ければ、則ち聲色貨利の交も天則(六)の流行に非ざる無し。』

(一) 美聲好色や貨殖利財 (二) はらひのぞき洗ひ去りて胸中に留積せしむる勿れ (三) たまく〱それの來り遇ふ事あるも (四) 自然に之に順應す (五) 良知が其聲色貨利の中にて働きて、精明にして少しのおほひも無き時は (六) 天理の流行也。體よりは天理といひ、用よりは天則といふ

先生曰。吾與ニ諸公一講ニ致知格物一。日日是此。講一二十

先生曰く、『吾れ諸公と致知格物を講ずるや、日日是れ此の講、一二十年倶に是れ此の如し。諸君吾が言を聽いて實(一)に功を用ひば、吾が講一番を見て、自ら長進(二)一番するを覺えん。否らざれば則ち只だ一場の話說を作すのみにして、之を聽く

此則不レ知。今之所三以講習討論一者。更學二何事一。問下致二廣大一二句上。曰。盡二精微一。卽所下以致二廣大一上也。道二中庸一。卽所三以極二高明一也。蓋心之本體自是廣大底。人不レ能レ盡二精微一。則便爲二私欲一所レ蔽。有下不レ勝二其小一者上矣。故能細微曲折無レ所レ不レ盡。則私意不レ足二以蔽一レ之。自無二許多障礙遮隔處一。如何廣大不レ致。又問。精微還是念慮之精微。是事理之精微。曰。念慮之精微。卽事理之精微也。

(一) 中庸の「尊二德性一而道二問學一致二廣大一而盡二精微一極二高明一而道二中庸一温レ故而知レ新、敦レ厚以崇レ禮」について問ふ (二) 朱子の說 (三) 陸象山の字。これ朱子文集所載答二項平甫一書の文を引いて曰ふ。卽ち象山は德性を尊ぶことを以て人を誨ふ、我の人を教ふるは、なんぞ又問學に道るの處に少し多くする事なからんやと也。某は朱子の自稱。朱子の文には「今子靜所レ說、專是尊二德性一事、而熹平日所レ論、却是問學上多了」云々とあり (四) 前出中庸の文中の語を引く (五) 道をきはめつくすこと精微ならざれば

先生曰。今之論レ性者。紛紛異同。皆是說レ性。非レ見レ性也。見レ性者無二異同之可一レ言矣。

問。聲色貨利。

先生曰く、「今の性を論ずる者の、紛紛たる異同は、皆是れ性を說くなり、性を見るに非ざるなり。性を見る者には、異同の言ふべき無し。」

(一) 性を說明するものにて、これを見るものに非ず、よく性を見る以上、事々皆性にして固より異同の論ずべきなきを謂ふ

問ふ、「(一)聲色貨利は、恐らくは良知においても亦無きこと能はざるべし。」先生

所三以尊二德性一也。晦翁言。子靜以レ尊二德性一誨レ人。某敎レ人豈不下是道二問學一處。多中了些子上。是分下尊二德性一道中問學上。作二兩件一。且如今講習討論。下二許多工夫一。無レ非下只是存二此心一不上レ失二其德性一而已。豈有下尊二德性一。只空空去レ尊。更不レ去二問學一。問學只是空空去二問學一。更與二德性一無中關涉上。如レ

是の問學に道る處に、些子を多くするならざらんやと。是れ德性を尊ぶと問學に道るとを分ちて、兩件と作す。且つ如今講習討論し、許多の工夫を下すは、只だ是れ此心を存して其德性を失はざるに非ざるは無きのみ。豈に德性を尊ぶに只だ空空に尊びて更に問學せず、問學するに只だ是れ空空に問學して更に德性と關涉無きものあらんや。此の如くんば則ち知らず、今の講習討論する所以の者は、更に何事を學ぶやを。』(四)廣大を致すの二句を問ふ。曰く、『精微を盡すは、即ち廣大を致す所以なり。中庸に道るは、即ち高明を極むる所以なり。蓋し心の本體は自ら是れ廣大なるものにして、人、(五)精微を盡す能はざれば、則ち便ち私欲の爲に蔽はれ、其小に勝へざる者あり。故に能く細微曲折盡さゞる所無ければ、則ち私意以て之を蔽ふに足らず。自ら許多の障礙遮隔の處無ければ、如何でか廣大を致さゞらんや。』又問ふ、『精微とは還是れ念慮の精微なるか、是れ事理の精微なるか。』曰く、『念慮の精微は、即ち事理の精微なり。』

心不㆓是一塊血肉㆒。凡知覺處便是心。如㆘耳目之知㆓視聽㆒、手足之知㆗痛痒㆖、此知覺便是心也。

以方問曰、先生之説㆓格物㆒、凡中庸之慎獨及集義博約等説、皆爲㆓格物之事㆒。先生曰、非也。格物即慎獨、即戒懼。至㆓於集義博約㆒工夫只一般。不㆘是以㆓那數件㆒都做㆗格物底事㆖。

『心は是れ一塊の血肉ならず。凡そ知覺する處便ち是れ心なり。耳目の視聽くことを知り、手足の痛痒を知るが如き、此の知覺は便ち是れ心なり。』

以方問うて曰く、『先生の格物を説くに、凡て中庸の慎獨及び集義・博約等の説(一)を、皆格物の事と爲す。』先生曰く、『非なり。格物は即ち慎獨即ち戒懼にして、集義博約の工夫に至るまで只だ一般(二)なり。是れ(三)那の數件を以て都て格物の事と做すにあらず。』

(一) 中庸の「君子慎㆓其獨㆒也」と、孟子公孫丑上の「是集義所㆑生者」云々と、論語雍也篇の「君子博學㆓於文㆒約㆑之以㆑禮」と也　(二) 皆同一也　(三) これ等さまざまの事を

以方問㆘尊㆓德性㆒一條㆖。先生曰、道㆓問學㆒、即

以方德性を尊ぶ(一)一條を問ふ。先生曰く、『問學に道るとは、即ち德性を尊ぶ所以なり。(二)晦翁言ふ、(三)子靜は德性を尊ぶを以て人を誨ふ、某の人を教ふるは豈に

伯擯二夷狄一。尊中周室上。都是一箇私心。便不レ當レ理。人却說。他做得當レ理。只心有レ未レ純。往往悅二慕其所一レ爲。要下來二外面一做中得好看上。却與レ心全不二相干一。分二心與一レ理爲レ二。其流至二于伯道之僞一。而不二自知一。故我說二箇心即理一。要レ使下知二心理是一箇一。便來二心上做二工夫一。不ト去レ襲二義於外一。便是王道之眞。此我立レ言宗旨。

(一) 近思錄一に出づ (二)「心在レ物爲レ理」とすべしと也 (三) 齊桓・晉文・秦穆・宋襄・楚莊の五霸が夷狄をはらひて周の帝室を尊びしごとき (四) うはべの體裁よく見榮えあるやうにするを (五) 心とは全然無關係也 (六) 霸道 (七) 心の上に工夫し、義を外よりおそひかぶせしめぬやうにすべし

又問。聖賢言語許多。如何却要三打做二一箇一。曰。我不四是要三打做二一箇一。如下曰二夫道一而已矣一。又曰中其爲レ物不レ二。則其生レ物不上レ測。天地聖人皆是一箇。如何二得。

又問ふ、『聖賢(一)の言語は許多なり。如何ぞ却つて打つて一箇と做さんと要するや。』曰く、『我は是れ打つて一箇と做さんと要するならず。夫れ道(二)は一のみと曰ひ、又其の物たる二ならざれば則ち(三)其の物を生ずる測られずと曰ふが如く、天地聖人、皆是れ一箇なり。如何ぞ二にし得ん。』

(一) 聖賢の言葉は種々なるに、何とて打つて一つにせんとはせらるゝぞ　これに對する陽明の見解前に詳かに出づ (二) 孟子滕文公上の語 (三) 中庸に見ゆ。

之說。程子云。在物爲理。如何謂心卽理。先生曰。在物爲理。在字上當添一心字。此心在物則爲理。如此心在事父則爲孝。在事君則爲忠之類。先生因謂之曰。諸君要識得我立言宗旨。我如今說箇心卽理。是如何。只爲世人分心與理爲二故便有許多病痛。如五

と謂ふや。』先生曰く、『物に在るを理と爲す、(二)在の字の上に當に一の心の字を添ふべし。此心物に在りては則ち理と爲る。此心父に事ふるに在れば則ち孝となり、君に事ふるに在れば則ち忠と爲る如き類なり。』先生因つて之に謂ひて曰く、『諸君は我が立言の宗旨を識り得るを要す。我が如今箇の心卽理を說くは是れ如何。只だ世人心と理とを分ちて二と爲すが爲の故に便ち許多の病痛あり。(三)五伯の夷狄を攘ひて、周室を尊びしが如き、都て是れ一箇の私心なれば、便ち理に當らず。人は却つて說く、他は做し得て理に當るも、只だ心未だ純ならざるあるのみと。往往其の爲す所を悅び慕ひ、(四)外面に來りて看るに好きを做し得んと要し、却つて(五)心と全く相干らず、心と理とを分ちて二と爲すより、其流は(六)伯道の僞に至るも、而も自ら知らず。故に我は箇の心卽理を說けり。心理は是れ一箇なるを知り、便ち(七)心上に來りて工夫を做し、義を外に襲はざらしめんことを要す。便ち是れ王道の眞にして、此れ我が立言の宗旨なり。』

兩件。先生曰。博學只是事事學ㇾ存二此天理一。篤行只是學ㇾ之不ㇾ已之意。又問易學以聚ㇾ之。又言二仁以行一ㇾ之。此是如何。先生曰。也是如ㇾ此。事事去ㇾ學ㇾ存二此天理一。則此心更無二放失時一。故曰。學以聚ㇾ之。然常常學ㇾ存二此天理一。更無二私欲間斷一。此即是此心不ㇾ息處。故曰。仁以行ㇾ之。又問。孔子言。知及ㇾ之仁不ㇾ能ㇾ守ㇾ之。知行却是兩箇了。先生曰。說ㇾ及ㇾ之。已是行了。但不ㇾ能二常常行一。已爲二私欲一間斷。便是仁不ㇾ能ㇾ守。

するを學ばゞ、則ち此心更に放出の時無し。故に曰く、學んで以て之を聚むと。然るに常常此天理を存するを學びて、更に私欲の間斷無ければ、此れ即ち是れ此心の息まざる處なり。故に曰く、仁以て之を行ふと。』又問ふ、『孔子言ふ、(三)知之に及べども仁之を守る能はずと。知行は却つて是れ兩箇ならん。』先生曰く、『之に及ぶと說けば已に是れ行ひ了れるなり。但だ常常に行ふ能はざるは、已に私欲の爲に間斷せられたれば、便ち是れ仁守る能はざるなり。』

(一) 中庸に「博學ㇾ之、審問ㇾ之、愼思ㇾ之、明辨ㇾ之、篤行ㇾ之」とあるにつきて知行を明かに二なりとし、知行合一の說を疑ひ問ふ也 (二) 易乾文言に「君子學以聚ㇾ之、問以辨ㇾ之、寬以居ㇾ之、仁以行ㇾ之」 (三) 論語衞靈公篇に「知及ㇾ之仁不ㇾ能ㇾ守ㇾ之」云々

又問二心即理

又心即理の說を問ふ、『程子云ふ、(一)物に在るを理と爲すと。如何にして心即理なり

是此等工夫。但聖人格物。便更熟得些子。不ㇾ消ㇾ費ㇾ力。如ㇾ此格ㇾ物。雖ㇾ賣ㇾ柴人。亦是做得。雖三公卿大夫以至天子。皆是如ㇾ此做。

或疑二知行不一ㇾ合一。以二知之匪ㇾ艱二句。爲ㇾ問。先生曰。良知自知。原是容易的。只是不ㇾ能ㇾ致二那良知一。便是知之匪ㇾ艱。行之惟艱。

或ひと知行の合一ならざるを疑ひ、『知るの艱きに匪ず』(一)の二句を以て、問を爲す。先生曰く、『良知は自ら知る、原是れ容易なるものなり。只だ是れ那の良知を致す能はず。便ち是れ知るの艱きに匪ずして、行ふの惟れ艱きなり。』

(一) 書の說命に「非二知之艱一行之惟艱」とあるをいふ。欄外書に原文「知之匪艱」とあるをこの本文の如く改めて「非知之艱」に作るべしといへり

門人問曰。知行如何得二合一。且如下中庸言二博學ㇾ之。又說中箇篤行ㇾ之。分明知行是

門人問うて曰く、『知行如何にして合一を得ん。且つ中庸(二)に博く之を學ぶと言ひ、又箇の篤く之を行ふを說くが如き、分明に知行は是れ兩件なり。』先生曰く、『博く學ぶとは只だ是れ事事に此天理を存するを學び、篤く行ふとは只だ是れ之を學んで已まざるの意のみ。』又問ふ、『易に、(三)學んで以て之を聚むと。又仁以て之を行ふと言ふ。此は是れ如何。』先生曰く、『也是れ此の如し。事事に此天理を存

端峰論三童子不レ能レ格レ物。只教以二灑掃應對一之說上。先生曰。灑掃應對就是一件物。童子良知只到レ此便教レ去二灑掃應對一。就是致二他這一點良知一了。又如二童子知レ畏二先生長者一。此亦是他良知處。故雖二嬉戲中一。見二了先生長者一。便去二作揖恭敬一。是他能格レ物以致下敬二師長一之良知上了。童子自有二童子的格物致知一。又曰。我這裏言二格物一。自二童子一以至二聖人一。皆

以てするを論ずるの說を言ふもの有り。先生曰く、『灑掃應對は就ち是れ一件の物なり。童子の良知、只だ此に到りて、便ち灑掃應對するを教ふるは、就ち是れ他這の一點の良知を致さしむるなり。又童子の先生長者を畏るゝを知る如き、此れ亦是れ他の良知の處なり。故に嬉戲の中と雖も、先生長者を見れば、便ち作揖恭敬す。是れ他も能く物を格して以て師長を敬するの良知を致すなり。(二)童子には自ら童子の格物致知有り。』又曰く、『我が這裏に格物と言ふは、童子より以て聖人に至るまで、皆是れ此等の工夫なり。但だ聖人の格物は、便ち更に些子を熟し得て力を費し消ひず。此の如く物を格せば、(三)柴を賣る人と雖も、亦是れ做し得、公卿大夫より以て天子に至ると雖も、皆是れ此の如く做すなり。

(一) 如何なる人か詳かならず、亦格物を以てかけ離れたる難事と思へる人と見ゆ (二) 手をこまぬきうや〳〵しく敬禮する也 (三) 極めて微賤の者の意

的力量。因指亭前竹子、令去格看。錢子早夜去窮格竹子的道理、竭其心思、至於三日、便致勞神成疾。當初說他這是精力不足。某因自去窮格、早夜不得其理、到七日、亦以勞思致疾。遂相與嘆。聖賢是做不得的。無他大力量去格物了。及在夷中三年。頗見得此意思。乃知天下之物。本無可格者。其格物之功。只在身心上做。決然以聖人爲人人可到。便自有擔當了。這裏意思。却要說與諸公知道。

するを以て疾を致す。遂に相與に嘆じて、聖賢は是れ做し得ざるものにして、他の大力量の物に格るもの無きなりと。夷中に在ること三年なるに及びて、頗る(七)此意思を見得たり。乃ち知る、天下の物は本格る可き者無し、其格物の功は、只だ身心上に在りて做すを。決然として聖人を以て人人の到る可きものと爲し、便ち(九)自ら擔當する有り。這裏の意思、却つて諸公に說き與へて知道せしめんと要す(一〇)。」

(八)は「夷中」に付す。

(一) 朱子晩年の說 (二) 做らんとはするもの、實に其說の通りにしては見ざらん、我は著實にその說を用ひて見たりと也 (三) 錢友子といふ人 (四) 今如何で天下の物に窮め至る程の大なる力量を得ん (五) 子は添字・筍(タケノコ)に非ず (六) そのはじめ、そのかみ (七) 凡ての物に窮め至る如き聖人の大力量は我々には難し (八) 正德元年貴州龍場驛に謫せられ、居ること三年、學問上に大悟する所ありしをいふ (九) 格物を以て自己の任に擔ふるものとして自ら擔當する有り (一〇) 知らしめんとす。道は添字

門人有言邵

門人に、邵端峰(一一)が、童子は物を格すこと能はざれば、只だ教ふるに灑掃應對を

惡。便就二這件事上一去レ不レ爲。去レ惡固是格二不正一以歸二於正一。爲レ善則不善正了。亦是格二不正一以歸二於正一也。如レ此則吾心良知。無二私欲蔽一了。得三以致二其極一。而意之所レ發。好レ善去レ惡無レ有レ不レ誠矣。誠意工夫實下レ手處在レ格レ物也。若如レ此格レ物。人人便做得。人皆可三以爲二堯舜一。正在レ此也。

舜たる可きこと、正に此に在る也。』

(一)徹底といふに同じ、遂げとぐく意　(二)實功なく只空に　(三)その事柄の上について善を爲す　(四)その事柄の上について惡を爲さず　(五)格物かくの如く工夫すれば何人にも出來る事也、人皆聖人たるべきはこゝにあり

先生曰衆人只說二格物一。要レ依二晦翁一。何曾把二他的說一去レ用。我著實曾用來。初年與二錢友一同論レ做二聖賢一。要レ格二天下之物一。如今安得二這等大

先生曰く、『衆人は只だ格物を說くに、晦翁(一)に依らんと要す。何ぞ曾て他の說を把りて用ひん。我れ著實に曾て用ひ來る。初年に錢友と同じく聖賢(二)と做ることを論じて、天下の物に格らんことを要せしも、如今(三)安ぞ(四)這等大なる力量を得ん。因て亭前の竹子(五)を指して格り看しむ。錢子早夜竹子の道理を窮格し、其心思を竭すこと三日に至り、便ち神を勞し疾を成すを致せり。當初說く(六)、他は這是精力足らざるならんと。某因つて自ら窮格す。早夜其理を得ず。七日に到り、亦思を勞

所ニ獨知一者。此正是吾心良知處。然知ニ得善一。却不下依ニ這箇良知一便做去上。知ニ得不善一。却不下依ニ這箇良知一便不中去レ做。則這箇良知。便遮蔽了。是不レ能レ致レ知也。

吾心良知既不レ能ニ擴充到底一。則善雖レ知レ好。不レ能ニ著實好了一。惡雖レ知レ惡。不レ能ニ著實惡了一。如何得ニ意誠一。故致レ知者。意誠之本也。然亦不ニ是懸空的致ヒ知。致レ知在ニ實事上一格。如ニ意在ニ于爲ヒ善。便就ニ這件事上一去レ爲。意在ニ于去ヒ

吾が心の良知既に擴充到底する能はざれば、則ち善好むを知ると雖も、著實に好む能はず。惡惡むを知ると雖も、著實に惡む能はず。如何ぞ意の誠なるを得ん。故に知を致すは、意の誠なるの本なり。然れども亦是れ懸空的に知を致すにあらず。知を致すは實事上に在りて格す。意の善を爲すに在る如きは、便ち這の件の事上に就きて爲す。意、惡を去るに在らば、便ち這の件の事上に就きて爲さず。惡を去るは固より是れ不正を格して以て正に歸するなり。善を爲せば則ち不善正し。亦是れ不正を格して以て正に歸するなり。此の如くなれば則ち吾が心の良知は、私欲の蔽無くして、以て其極を致すを得、而して意の發する所、善を好み惡を去りて誠ならざること有る無し。誠意の工夫の實に手を下す處は物を格すに在り。若し此の如くに物を格さば、人人便ち做し得て、人皆以て堯

正レ心。本體上何處用ニ得工ー。必就ニ心之發動處ー。纔可レ著レ力也。心之發動不レ能レ無ニ不善ー。故須下就ニ此處ー著中力。便是在レ誠レ意。如ニ一念發ニ在好レ善上ー。便實實落落去レ好レ善。一念發ニ在惡レ惡上ー。便實實落落去レ惡レ惡。意之所レ發既無レ不レ誠。則其本體如何有ニ不レ正的ー。故欲レ正ニ其心ー在レ誠レ意。工夫到ニ誠意ー。始有ニ著落處ー。然誠意之本。又在ニ于致レ知也。所レ謂人雖レ不レ知而己

力を著くべし。便ち是れ意を誠にするに在り。一念善を好む上に發する如きは、便ち實實落落善を好み、一念惡を惡む上に發すれば、便ち實實落落惡を惡み、意の發する所既に誠ならざる無ければ、則ち其本體如何ぞ正しからざる有らん。故に其心を正しうせんと欲せば意を誠にするに在り。(一)工夫は誠意に到りて、始めて著落の處有り。然るに誠意の本は、又知を致すに在り。(二)所謂人知らずと雖も而も己獨知る所の者は、此れ正に是れ吾が心の良知の處なり。然るに(三)善を知り得るも、却つて這箇の良知に依りて便ち做し去るならず、不善を知り得るも、却つて這箇の良知に依りて便ち做し去らざるならずんば、則ち這箇の良知は、便ち遮蔽せらる。是れ知を致すこと能はざるなり。

(一) 凡ての工夫は誠意に至つて實著なり、誠意上より來らざれば凡て僞となる (二) 大學傳六章朱子註の語 (三) 善を知り得ても良知によりて爲すでなく、不善を知りても良知によりて爲さないのでなくては良知も人欲にさへぎりおほはるゝ也

修レ身便是要ニ目非レ禮勿レ視。耳非レ禮勿レ聽。口非レ禮勿レ言。四肢非レ禮勿レ動。要レ修ニ這箇身。身上如何用ニ得功夫。心者身之主宰。目雖レ視。而所ニ以視者心也。耳雖レ聽。而所ニ以聽者心也。口與ニ四肢ニ雖ニ言動。而所ニ以言動者心也。故欲レ修レ身。在下於體ニ當自家心體。常令中廓然太公。無レ有ニ些子不正處。主宰一正。則發ニ竅于目。自無ニ非禮之視。發ニ竅于耳。自無ニ非禮之聽。發ニ竅于口與ニ四肢。自無ニ非禮之言動。此便是修レ身在レ正ニ其心。

ることと無からしむるに在り。主宰一たび正しければ、則ち竅を目に發して、自ら非禮の視無く、竅を耳に發して、自ら非禮の聽無く、竅を口と四肢とに發して、自ら非禮の言動無し。此れ便ち是れ身を修むることは其心を正しうするに在るなり。

(一) 伊川朱子は格物を解して天下の諸物の道理に究め至る義とす　(二) 程子の言也　(三) 其事物に於て究め至りたる道理を自己の身に反して自己の意を誠にし得んや　(四) 此說前に詳かに出づ　(五) 自己の心の本體をたしかに身に就て、　(六) 心の働きのあらはれ出づる穴

然至善者心之本體也。心之本體那有ニ不善。如今要レ

然るに至善は心の本體なれば、心の本體に那ぞ不善有らんと。如今心を正しうせんと要するも、本體上何處にか工を用ひ得ん。必ず心の發動する處に就きて纔かに力を著く可きなり。心の發動には不善無き能はず。故に須らく此の處に就きて

上實用其力。以學存此天理。思與學作兩事做。故有罔與殆之病。其實思只是思其所學。原非兩事也。

先生曰。先儒解格物爲格天下之物。天下之物如何格得。且謂一草一木亦皆有理。今如何去格。縱格得草木來。如何反來誠得自家意。我解格作正字義。物作事字義。大學之所謂身。即耳目口鼻四肢是也。欲

先生曰く、『(一)先儒は格物を解きて、天下の物に格ると爲す。天下の物を如何ぞ格り得ん。(二)且つ一草一木亦皆理有りと謂ふ。今如何ぞ格らん。縱ひ草木に格り得來るも、(三)如何ぞ反し來りて自家の意を誠にし得んや。我は格を解して(四)正の字の義と作し、物を事の字の義と作す。大學の所謂身は即ち耳目・口鼻・四肢是れなり。身を修めんと欲せば、便ち是れ目は禮に非ざれば視ること勿く、耳は禮に非ざれば聽くこと勿く、口は禮に非ざれば言ふこと勿く、四肢は禮に非ざれば動くこと勿からんを要す。這箇の身を修めんと要せば、身上如何に功夫を用ひ得べきや。心は身の主宰なり。目は視ると雖も而も視る所以の者は心なり。耳は聽くと雖も而も聽く所以の者は心なり。口と四肢とは言動すと雖も而も言動する所以の者は心なり。故に身を修めんと欲すれば、(五)自家の心體を體當して、常に廓然太公、些子も不正の處有

學レ文。其說似レ不二相合一。先生曰、詩書六藝皆是天理之發見。文字都包二在其中一。攷二之詩書六藝一。皆所二以學一レ存二此天理一也。不下特發二見于事爲一者。方爲レ文耳上。餘力學レ文。亦只博學二於文一中事。或問二學而不レ思二句一。曰。此亦有レ爲而言。其實思卽學也。學有レ所レ疑。便須レ思レ之。思而不レ學者。蓋有二此等人一。只懸空去レ思。要レ想二出一箇道理一。却不下在二身心

包在す。之を詩書六藝に攷ふるは、皆此天理を存することを學ぶ所以なり。特に事爲に發見する者を、方に文と爲すのみにあらず、餘力に文を學ぶも、亦只だ博く文を學ぶ中の事なり。』或ひと學んで思はざる二句を問ふ。曰く、『此れ亦爲にするところ有りて言ふ。其實思〔三〕は卽ち學なり。學疑ふ所有らば、便ち須らく之を思ふべし。思うて學ばざる者は、蓋し此等〔四〕の人有りて、只だ懸空に思ひて、一箇の道理を想ひ出さんことを要し、却つて身心上に在りて實に其力を用ひて、以て此天理を存することを學ばず、思と學と兩事と作すなり。故に罔〔五〕と殆との病有り。其實思ふは只だ是れ其學ぶ所を思ふのみ、原兩事に非ざるなり。』

〔一〕論語顏淵篇の「博學二於文一約レ之以レ禮」を先生の說の如く事に隨ひて此天理を存するを學ぶと解する時は、學而篇に「行有二餘力一則以學レ文」と相合はざる如し　〔二〕天理のあらはれたるもの　〔三〕論語爲政篇の「學而不レ思則罔、思而不レ學則殆」の二句　〔四〕斯くの如き人　〔五〕上出論語の文についていふ

爲ㇾ槩也。請ㇾ寘二其所ㇾ逸者一。增二刻之一。若何。洪曰。然師門致知格物之旨。開二示來學一。學者躬修默悟。不下敢以二知解一承上。而惟以二實體一得。故吾師終日言ㇾ是而不ㇾ憚二其煩一。學者終日聽ㇾ是而不ㇾ厭二其數一。蓋指示專一。則體悟日精。幾迎二於言前一。神發二於言外一。感遇之誠也。今吾師之沒。未ㇾ及二三紀一。而格言微旨。漸覺二淪晦一。豈非三吾黨身踐之不ㇾ力。多言有二以病一ㇾ之耶。學者之趨不ㇾ一。師門之教不ㇾ宣也。乃復取二逸稾一。采二其語之不ㇾ背者一。得二一卷一。其餘影響不ㇾ眞。與二文錄既載者一。皆刪ㇾ之。幷下易中卷爲二問答一訛上。以付二黃梅尹張君一。增二刻之一。庶幾讀者不下以二知解一承上。而惟以二實體一得。則無ㇾ疑二于是錄一矣。嘉靖丙辰夏四月門人錢德洪。拜二書于蘄之崇正書院一。

りて寺の稱とす 〔一〇〕 親しく先生の教を受け 〔一一〕 槩也 〔一二〕 しば〳〵するを厭はず 〔一三〕 殆は言はんとするの機微。陽明の未だ言ひ出さぬ内に其機微早くもこちらに移り來ると也 〔一四〕 神知の通ずる所陽明の言葉以外に自然に發明する所あり 〔一五〕 一紀は十二年、三紀は三十六年也。一說に夏に年を紀といふ、故に三年の義なりとす 〔一六〕 たゞしき言葉、深き旨 〔一七〕 しづみて暗くなれるが如し 〔一八〕 言說を事とするの病 〔一九〕 學者の趨く所まちまちなるは、師門の教がゆきわたらぬ故也 〔二〇〕 本集に漏れたる草稿 〔二一〕 影や響にして眞ならざるもの 〔二二〕 倂せ寫しの誤か

黃以方問。博學二於文一。爲ㇾ隨二事學下ㇾ存二此天理一。然則謂下行有二餘力一則以

黃以方問ふ、『博く文を學ぶをば、事に隨ひて此天理を存することを學ぶと爲す。然るときは則ち行ひて餘力有れば則ち以て文を學ぶと謂ふと、其說相合はざるに似たり。』先生曰く、『詩書六藝は皆是れ天理の發見にして、文字も都て其中に

采錄未精。乃爲刪其重復。削去蕪蔓。存其三之一。名曰傳習續錄。復刻於寧國之水西精舍。今年夏洪來遊蘄。沈君思畏曰。師門之敎。久行于四方。而獨未及于蘄。蘄之士。得讀遺言。若親炙夫子之敎。指見良知。若重覩日月之光。惟恐傳習之不博。而未以重復之

を聽いて其數を厭はず。蓋し指示專一なれば、則ち體悟日に精しく、幾、言前に迎へ、神、言外に發す。感遇の誠なり。今吾が師の沒して、未だ三紀に及ばざるに、而も格言微旨、漸く淪晦するを覺ゆ。豈に吾が黨身踐をこれ力めずして、多言して以て之を病ましむる有るに非ざらんや。學者の趨くところ一ならざるは、師門の敎宣べざればなり』と。乃ち復逸稿を取り、其請の背かざる者を采つて一卷を得たり。其餘、影響の眞ならざると、文錄に既載せる者とは、皆之を削る。中卷、問答を爲すの語を幷せ易へ、以て黃梅尹張君に付して、之を增刻す。庶幾はくは讀者たるもの知解を以て承けずして、惟だ實體を以て得ば、則ち是の錄に疑無からんか。嘉靖丙辰夏四月、門人錢德洪、蘄の崇正書院に拜書す。

(一) 嘉靖七年十一月二十九日陽明南安に卒す、年五十七 (二) 嘗て先生に問正せる問答をいふ (三) 當時德洪は蘄に官せしならん (四) 蘄に遊ひて與りたり (五) 既に刻するは續用の事の如し (六) 履行する事を念頭に懸けず (七) 傳未詳 (八) これ下卷の首より續錄に至るを指す也 (九) 影響也、もと響にて人を敎ふる所の術、聲音之を応

同門各以レ所レ記見レ遺。洪擇下其切二於問正一者上。合レ所二私錄一得若干條。居レ吳時。將下與二文錄一並刻上矣。適以レ憂去未レ遂當二是時一也。四方講學日衆。師門宗旨既明。若下無レ事二於贅刻一者上。故不二復營念一。去年同門曾子才漢。得二洪手抄一。復傍爲二采輯一。名曰二遺言一。以刻二行於蘄一。洪讀レ之覺二當時

當り、四方の講學日に衆くして、師門の宗旨既に明かなれば、贅刻（五）を事とすること無き者の若し。故に復營念（六）せず。去年同門の曾子才漢（七）、洪の手抄を得、復傍ら采輯を爲し、名けて『遺言』と曰ひ、以て刻して荊に行はる。洪、之を讀みて當時の采錄未だ精しからざりしを覺り、乃ち爲に其重復せるを删り、蕪蔓を削り去り、其三が一を存し、名けて『傳習續錄』（八）と曰ふ。復寧國の水西精舍（九）に刻せり。今年夏、洪、蘄に來遊せしが、沈君思畏曰く、「師門の敎は、久しく四方に行はるゝも、而も獨り未だ蘄に及ばず。蘄の士『遺言』を讀み得て、夫子（一〇）の敎に親炙し、良知を指見せらるゝが若く、重ねて日月の光を覩るが若し。惟だ傳習の博からざるを恐れて、未だ重復の繁たるを以てせざるなり。請ふ、其逸する所の者を裒め（一一）、之を增刻せんことを。若何。』洪曰く、『然り。師門の致知格物の旨、來學に開示す。學者は躬ら修め默して悟り、敢て知解を以て承けずして、惟だ實體を以て得。故に吾が師終日是を言ひて其煩を憚らず、學者終日是

者。常不下數百人。送往迎來。月無虛日。至有在侍更歲不能遍記其姓名者。每臨別。先生常嘆曰。君等雖別不出在天地間。苟同此志。吾亦可以忘形似矣。諸生每聽講出門。未嘗不跳躍稱快。嘗聞之同門先輩。曰。南都以前。朋友從遊者雖衆。未有如在越之盛者。此雖講學日久。孚信漸博。要亦先生之學日進。感召之機。神變無方。亦自有不同也。

るもの有ればなり。

（一）同志の來るもの少なくして寂し（二）屋をならべて（三）天妃は山の名、光相は光相坊にて越の城下の町の名　これらの地にある寺々の如く多しと也（四）一室の主たる者をいふ（五）歌ふこゑ夜通し絶えず（六）あるいて行く先々（七）皆同志游寓の在る所也（八）月の内一日にても隙き日はなし（九）先生の許に侍し居ること（一〇）此形を忘れて見れば天地間一般にして離たることなし。忘形の字は、莊子讓王篇に「養志者忘形、養形者忘利」とあるより出づ（一一）まこと（一二）人を感じ至らしむるの機（一三）易係辭「易無方而神無體」とある思想也。一本此四字なしといふ（一四）前日と同じからず

嘉靖戊子冬。德洪與王汝中。奔師喪至廣信。訃告同門。約三年收錄遺言。繼後

（一）嘉靖戊子の冬、德洪、王汝中と與に師の喪に奔り、廣信に至りて、同門に訃告し、三年にして遺言を收錄するを約す。繼ぎて後同門各〻記する所を以て遺らる。洪、其の問正（二）に切なる者を擇び、私錄せし所を合して若干條を得たり。（三）吳に居る時、將に文錄と竝び刻せんとす。適〻憂（四）を以て去つて未だ遂げず。是時に

時。朋友蹤跡尚寥落。既後四方來遊者日進。癸未年已後。環二先生一而居者。比屋如二天妃光相諸刹一。每二當一室一。常合食者數十人。夜無二臥處一。更相二就席一。歌聲徹二昏旦一。南鎭禹穴陽明洞諸山。遠近寺刹。徙レ足所レ到。無レ非二同志游寓所一レ在。先生每レ臨二講坐一。前後左右環坐而聽

る者日に進み、癸未の年已後、先生を環りて居る者、(二)比屋、(三)天妃・光相の諸刹の如し。(四)當一室毎に常に合食する者數十人、夜は臥處無く、更〻席に相就き、(五)歌聲昏旦に徹す。南鎭・禹穴・陽明洞の諸山、遠近の寺刹も、(六)足を徙して到る所、(七)同志游寓の在る所に非ざる無し。先生講坐に臨む毎に、前後左右環坐して聽く者、常に數百人を下らず。往くを送り來るを迎ふる月に(八)虚日無し。(九)在侍すること歳を更ふるも遍く其姓名を記す能はざる者有るに至る。別に臨む毎に、先生常に嘆じて曰く、『君等別ると雖も天地の間を出在ず。苟も此志を同じうせば、吾も亦以て(一〇)形を忘る可きに似たり。』諸生、講を聽き門を出づる毎に、未だ嘗て跳躍して快と稱せずんばあらず。嘗て之を同門の先輩に聞けり、曰く、『南都より以前は、朋友の從遊する者衆しと雖も、未だ越に在るの盛なる如き者有らず』と。此れ講學の日久しうして、(一一)孚信漸く博きによると雖も、要するに亦先生の學日に進みて、(一二)感召の機、(一三)神變方無く、亦(一四)自ら同じからざ

惡是意之動。知レ善知レ惡的是良知。爲レ善去レ惡是格物。只依我這話頭。隨レ人指點。自沒二病痛一。此原是徹上徹下功夫。利根之人世亦難レ遇。本體功夫一悟盡透。此顏子明道所レ不二敢承當一。豈可二輕易望一レ人。人有二習心一。不レ敎下他在二良知上一實用中爲レ善去レ惡功夫上。只去二懸空想二箇本體一。一切事爲俱不二著實一。不レ過レ養二成一箇虛寂一。此箇病痛不二是小小一。不レ可レ不二早說破一。是日德洪汝中俱有レ省。

に亦遇ひ難し。本體の功夫一悟して盡く透るは、此れ顏子・明道の敢て承當せ(三)ざる所、豈に輕易に人に望む可けんや。人習心有り。他をして良知上に在りて、實に善を爲し惡を去るの功夫を用ひしめずして、只だ懸空に(四)箇の本體を想ひて、一切の事爲俱に著實ならざれば、一箇の虛寂を養成するに過ぎず。此れ箇の病痛は是れ小小にあらず。早く說き破らざる可からず。」是の日德洪・汝中俱に省ること有り。

(一) 必ず我の敎の本旨を失ふべからず　(二) 上下に徹したる眞の工夫なり　(三) 承け當らざる所　(四) 只空に本體を想ふのみにて著實の工夫なき時は虛寂に陷る

先生初歸レ越

先生初め越に歸れる時(一)朋友の踪跡尙ほ寥落たり、既にして後四方より來遊す

原是箇未發之中。利根之人一悟本體。即是功夫。人己內外一齊俱透了。其次不免有習心在本體受蔽。故且教在意念上實落爲善去惡。功夫熟後。渣滓去得盡時。本體亦明盡了。汝中之見。是我這裏接利根人的。德洪之見。是我這裏爲其次立法的。二君相取爲用。則中人上下皆可引入於道。若各執一邊。眼前便有失人。便於道體各有未盡。

を立つるものなり。二君相取りて用を爲さば、則ち中人上下皆道に引き入る可し。若し各〻一邊を執らば、眼前に便ち人を失ふこと有らん。便ち道體に於て各〻未だ盡さゞること有らん。』

㊀各自其意を擧げて先生の是正を請ふ ㊁我正に汝等の來りて此意を講ぜんことを望める所也 ㊂利根の人に接すると其次の人に接すると二通りの敎あり ㊃利根聰明の人は直ちに本源の上より悟る ㊄人我一致し身心一致して俱に徹底す ㊅かす

既而曰。已後與朋友講學。切不可失了我的宗旨。無善無惡是心之體。有善有

既にして曰く、『已後朋友と學を講ずるに、切に我の宗旨を失ふ可からず。善無く惡無きは是れ心の體、善有り惡有るは是れ意の動、善を知り惡を知るは是れ良知、善を爲し惡を去るは是れ格物なり。只だ我が這の話頭に依り、人に隨つて指點せば、自ら病痛沒からん。此れ原是れ徹上徹下の功夫なり。利根の人は、世

無レ善無レ惡的知○物是無レ善無レ惡的物矣○若說三意有二善惡一畢竟心體還有二善惡在一○德洪曰○心體是天命之性○原是無レ善無レ惡的○但人有二習心一○意念上見レ有二善惡在一○格致誠正修○此正是復二那性體一功夫○若原無二善惡一○功夫亦不レ消レ說矣○

是夕侍二坐天泉橋一○各擧請レ正○先生曰○我今將レ行○正要三儞們來講二破此意一○二君之見○正好二相資爲一レ用○不レ可三各執二一邊一○我這裏接レ人原有二此二種一○利根之人○直從二本源上一悟入○人心本體○原是明瑩無レ滯的○

是の夕天泉橋に侍坐して、各〻擧げて正を請ふ。先生曰く、「我れ今將に行かんとす。正に儞們の來りて此意を講破せんことを要す。二君の見は正に相資けて用を爲すに好し。各〻一邊を執る可からず。我が這裏人に接するに、原此二種有り。利根の人は、直に本源上より悟入す。人心の本體は、原是れ明瑩にして滯ること無きもの、原是れ箇の未發の中なり。利根の人は一たび本體を悟れば、即ち是れ功夫にして、人己內外一齊に倶に透る。其次は習心の在る有りて、本體蔽を受くるを免れず。故に且く意念上に在りて實落に善を爲し惡を去らしむ。功夫熟して後、渣滓去り得盡す時、本體も亦明盡すべし。汝中の見は、是れ我が這裏利根の人に接するものにして、德洪の見は、是れ我が這裏其次の爲に法

丁亥年九月。先生起復征思田。將命行。時德洪與汝中論學。汝中舉先生教言曰。無善無惡是心之體。有善有惡是意之動。知善知惡是良知。爲善去惡是格物。德洪曰。此意如何。汝中曰。此恐未是究竟話頭。若說心體是無善無惡。意亦是無善無惡的意。知亦是

丁亥の年九月、先生起ちて(一)復思田を征す。(二)將に行を命ぜんとす。時に德洪と汝中と學を論ず。汝中先生の教言を擧げて曰く、『(三)善無く惡無きは是れ心の體、善有り惡有るは是れ意の動、善を知り惡を知るは是れ良知、善を爲し惡を去るは是れ格物なり。』德洪曰く、『此意如何。』汝中曰く、『此れ恐らくは(四)未だ是れ究竟の話頭にあらじ。若し心體は是れ善無く惡無しと說かば、意も亦是れ善無く惡無きの意、知も亦是れ善無く惡無きの知、物も是れ善無く惡無きの物なり。若し意に善惡有りと說かば、畢竟心體還つて善惡の在る有り。』德洪曰く、『心體は是れ天命の性にして、原是れ善無く惡無きものなり。但だ人に(五)習心ありて、意念上に善惡の在る有るを見る。格致誠正修は、此れ正に是れ那の性體に復する功夫にして、若し原善惡無くんば、功夫も亦說くを消ひざるなり。』

(一) 退きて鄕に在りしが君の召命により出でゝ思田二州を征す (二) 將に發足せんとす (三) 空虛靈明の謂也 (四) これ未だ究極極致の說に非ず (五) 習はしの心、俗弊にそみたる心

人見二聖人來一。都怕走了。如何講得行。須レ做二得箇愚夫愚婦一。方可下與レ人講上レ學。洪又言。今日要レ見二人品高下一最易。先生曰。何以見レ之。對曰。先生譬如三泰山在二前。有下不レ知レ仰者上。須二是無レ目人一。先生曰。泰山不レ如二平地大一。平地有二何可一レ見。先生一言。剪二裁剖破終レ年爲レ外好レ高之病一。在レ座者莫レ不二悚懼一。

癸未春。鄒謙之來レ越問レ學。居數日。先生送二別于浮峯一。是夕與二希淵諸友一。移レ舟宿二延壽寺一。秉レ燭夜坐。先生慨悵不レ已。曰。江濤煙柳。故人倏在二百里外一矣。一友問曰。先生何念二謙之之深一也。先生曰。曾子所レ謂以レ能問二於不能一。以レ多問二於寡一。有若レ無。實若レ虛。犯而不レ校。若二謙之一者。良近レ之矣。

癸未の春、鄒謙之越に來りて學を問ふ。居ること數日、先生、浮峯に送別す。是の夕希淵諸友と、舟を移して延壽寺に宿り、燭を秉りて夜坐す。先生慨悵(一)して已まず。曰く、「(二)江濤煙柳、故人倏ち百里の外に在り。」一友問うて曰く、「先生何ぞ謙之を念ふの深きや。」先生曰く、「(三)曾子の所謂能を以て不能に問ひ、多きを以て寡きに問ひ、有れども無きが若く、實つれども虛しきが若く、犯せども校せざる、謙之の若き者は、良に之に近し。」

(一) なげきいたむ　(二) なみ立ち、柳けむり、故人謙之はたちまち別れて百里の外に在り　(三) 曾子の語、論語泰伯篇に出づ

日見二一異事一。先生曰。何異。對曰。見二滿街人都是聖人一。先生曰。此亦常事耳。何足レ爲レ異。蓋汝止圭角未レ融。蘿石恍見レ有レ悟。故問同答異。皆反二其言一而進レ之。洪與二黃正之張叔謙汝中一。丙戌會試歸。爲二先生一道。途中講レ學。有レ信有レ不レ信。先生曰。儞們拏二一箇聖人一去。與レ人講レ學。

ざるもの有り。』先生曰く、『爾們一箇の聖人を拏へ去りて、人と學を講ず。人は聖人の來るを見て、都て怕れ走る。(五)如何ぞ講じ得て行くべき。須らく箇(六)の愚夫愚婦と做得べくんば、方に人と學を講ずべし。』洪又言ふ、『今日人品の高下を見んとすれば最も易し。』先生曰く、『何を以てか之を見る。』對へて曰く、『先生は譬へば泰山の前に在るが如し。仰ぐことを知らざる者有らば、須らく是れ目無き人なるべし。』先生曰く、『泰山は平地の大なるに如かず。平地何の見る可き有らん。』先生の一言は、(七)年を終ふるまで外の爲にし高きを好むの病を剗裁剖破す。座に在る者悚懼せざる莫し。

(一) 人を敎ふるに　(二) 欄外書に陳本は「倒看」に作るといへり、從ふべし、倒は「カヘツテ」といふ俗辭なり　(三) 汝止はかどが取れずして人を見さぐる病あり、蘿石はほのかに悟れりといふ意思あり　(四) 進士に及第せんとする諸生を四年に一度都に會して試む、之を會試とす、此四人亦この會試に列りたる也　(五) 汝等一個の聖人になり代りて聖人氣取りにて講學する故、人はびつくりして逃げ走る也　(六) 一個の愚夫愚婦となりきり得ば　(七) 生涯外の爲めに學び高ぶるを好む病をばきりたち剜み破る

有二些子鄉愿的意思在一。我今信二得這良知一。眞是眞非信レ手行去。更不レ著二些覆藏一。我今纔做二得箇狂者的胸次一。使二天下之人都說一我行不レ揜レ言也罷。尚謙出曰。信二得此一過。方是聖人的眞血脈。

先生鍛二錬人一處。一言之下感レ人最深。一日王汝止出遊歸。先生問曰。遊何見。對曰。見二滿街人都是聖人一。先生曰。爾看二滿街人是聖人一。滿街人到看二爾是聖人一在。又一日董蘿石出遊而歸。見二先生一曰。今

先生の人を鍛錬する處、一言の下に人を感ぜしむること最も深し。一日王汝止出遊して歸れり。先生問うて曰く、『遊びて何をか見たる。』對へて曰く、『滿街の人都て是れ聖人なるを見たり。』先生曰く、『爾が滿街の人を是れ聖人と看ば、滿街の人は到つて爾を是れ聖人と看ん。』又一日董蘿石出遊して歸り、先生に見えて曰く、『今日一異事を見たり。』先生曰く、『何の異ぞ。』對へて曰く、『滿街の人都て是れ聖人なるを見たり。』先生曰く、『此れ亦常事のみ。何ぞ異と爲すに足らんや。』蓋し汝止は圭角未だ融けず、蘿石は恍として悟る有るを見る。故に問同じくして答異なり。皆其言に反して之を進む。洪は黃正之・張叔謙・汝中と、丙戌に試に會して歸り、先生の爲に道ふ、『途中學を講ぜしに、信ずるもの有り信ぜ

有レ言ニ先生功業勢位日隆。天下忌レ之者日衆。有レ言下先生之學日明。故爲ニ宋儒一爭ニ是非一者亦日博上。有レ言下先生自ニ南都一以後。同志信從者日衆。而四方排阻者日益力上。先生曰。諸君之言。信皆有レ之。但吾一段自知處諸君俱未ニ道及一耳。諸友請問。先生曰我在ニ南都一已前。尙

志の信従する者日に衆くして、四方の排阻する者日に益〻力むと言ふもの有り。(五) 先生曰く、『諸君の言は、信に皆之れ有り。但だ吾が一段自ら知る處は、諸君の倶に(六)未だ道ひ及ばざるあるのみ。』諸友請ひ問ふ。先生曰く、『我が南都に在りし已前は、尙ほ些子の郷愿的意志の在る有りき。(七) 我れ今這の良知を信じ得て、眞是眞非手に(八)信せて行ひ去り、更に些かの覆藏を著けず。(九) 我れ今纔かに箇の狂者的胸次を做(一〇)し得たれば、天下の人をして、都て我が行、言を揜はずと說かしむるのみ。』尙謙出でゝ曰く、『此を信じ得れば、方に是れ聖人の眞血脈なり。』(一一)

(一) 一同侍坐するにつけて、世人の攻擊盛なるを歎ずる也 (二) 時の帝の一族寧王宸濠を討ちて平定せしをいふ (三) 宋儒即ち朱子等に與し之を是とし陽明を非として爭ふ (四) 陽明が明の武宗正德九年南京の鴻臚官即ち南京學校の長となりてより後 (五) 四方の排斥阻害する者 (六) 自分としてこゝに一つ自ら知る處は (七) 論語陽貨篇に出づ、徒義にして世人に合ふやうにする心持 (八) 眞に是とし非とする所は、はたに構はずどしどしと行ひて少しも我心の見る所をおはひかくさず (一〇) 論語子路に「子曰、不下得ニ中行一而與上レ之、必狂狷乎、狂者進取、狷者有レ所レ不レ爲也」といへり、その狂者の如く信ずる所をどしどしと行ひて顧みざる胸中となりたれば (一一) こゝの處がよく合點し得れば、これ誠に聖人の眞精髓也

世界平旦時。神淸氣朗。雍雍穆穆。就是堯舜世界。日中以前。禮儀交會。氣象秩然。就是三代世界。日中以後。神氣漸昏。往來雜擾。就是春秋戰國世界。漸漸昏夜。萬物寢息。景象寂寥。就是人消物盡世界。學者信ニ得良知一過。不下爲レ氣所上レ亂。便常做ニ箇是羲皇已上人一。

の世界なり。漸漸に昏夜となり、萬物寢息して景象寂寥たるは、就ち是れ人も消え物も盡くる世界なり。學者、良知を信じ得て、氣の爲に亂されずんば、便ち常に(八)羲皇已上の人と做らん。」

(一)古今の世界をはすべて一通り經過す　(二)あはくして物ひの平和なる也　(三)伏羲時代　(四)神氣のやはらぎてひろ〲とせるは　(五)氣象とゝのひて秩序正しきは　(六)夏殷周の時代　(七)心があちらこちらに渉りてみだれごた〲するは　(八)太古伏羲以上の人、天成のまゝにて些の人欲をまじへざるをいふ

薛尙謙。鄒謙之。馬子莘。王汝止。侍坐。因嘆。先生自レ征ニ寧藩一已來。天下謗議益衆。請各言ニ其故一。

薛尙謙・鄒謙之・馬子莘・王汝止侍坐す。(一)因つて嘆ず。「先生が(二)寧藩を征せしより已來、天下謗議するもの益〻衆し。請ふ各〻其故を言はん」と。先生の功業勢位の日に隆にして、天下之を忌む者日に衆しと言ふもの有り。先生の學日に明かなり故に(三)宋儒の爲に是非を爭ふ者亦日に博しと言ふもの有り。先生(四)南都より以後、同

先生曰。用レ功到ニ精處一。愈著ニ不レ得三言語一。說レ理愈難。若著レ意在ニ精微上一。全體功夫反蔽泥了。

楊慈湖不レ爲レ無レ見。又著在無聲無臭上一見了。

人一日間。古今世界都經過一番。只是人不レ見耳。夜氣淸明時。無レ視無レ聽無レ思無レ作。淡然平懷。就是羲皇

先生曰く、『功を用ふる、精處に到れば、愈〻言語(一)を著け得ず、理を說く愈〻難し。若し意を著くること精微上に在らば、全體の功夫は反つて蔽泥せん。』(二)

(一) 言語を著け理を說けば既に第二義に落つ、工夫の極致は體得にあり (二) 若し精微上に意を著くる時は全體の工夫がかはれなづみて滯る

『楊慈湖(一)は見るところ無しと爲さず。又無聲無臭上(二)に著在して見る。』

(一) 名は簡、字は敬仲、象山の門人 (二) 見解はあれど、其見無聲無臭の上に著せり

『人は一日の間に、(一)古今の世界を都て經過一番す。只だ是れ人見ざるのみ。夜氣淸明の時、視ると無く、聽くと無く、思ふと無く、作すと無く、淡然(二)として平懷なるは、就ち是れ羲皇(三)の世界なり。平旦の時、神淸く氣朗かに雍雍穆穆(四)たるは、就ち是れ堯舜の世界なり。日中以前、禮儀交會し、氣象(五)秩然たるは、就ち是れ三代(六)の世界なり。日中以後神氣漸く昏くして、往來雜擾(七)するは、就ち是れ春秋戰國

箇の大槩此の如しと說くのみ。荀子性惡の說は、是れ流弊上より說き來る。也未だ盡く他を是ならずと說く可からず。只だ是れ見得るの未だ精からざるのみ。衆人は則ち心の本體を失へるものなり。』問ふ、『(七)孟子の源頭上より性を說くは、人の功を用ひて源頭上に在りて明徹せんことを要するものにして、荀子の流弊より性を說くは、功夫只だ末流上に在りて救正す。便ち力を費すならんか。』先生曰く、『然り。』

(一) 源泉根本の所　(二) 末流の弊害の所　(三) それ等をすべくゝりて　(四) 或一偏に執り定めて性はかゝるものときめて了ふは是ならず　(五) まつすぐに見すゑる　(六) 目を細めて見る　(七) 孟子が源泉の所より性を說けるは、人々の修養の工夫をなすに、其源泉の所に居て根柢に徹底せんことを要望したるわけなり、荀子の流弊より說けるは、末流にあつて其弊を救ひ正せるわけにて、爲めにひどく努力を徒費せるものならんか

的。發用上也原是可以爲善。可以爲不善的。其流弊也原是一定善。一定惡的。譬如眼。有喜時的眼。有怒時的眼。直視就是看的眼。微視就是覷的眼。總而言之只是這箇眼。若見得怒時眼。就說未嘗有喜的眼。見得看時眼。就說未嘗有覷的眼。皆是執定。就知是錯。孟子說性。直從源頭上說來。亦是說箇大槩如此。荀子性惡之說。是從流弊上說來。也未可盡說他不是。只是見得未精耳。衆人則失了心之本體。問。孟子從源頭上說性。要人用功。在源頭上明徹。荀子從流弊說性。功夫只在末流上救正。便費力了。先生曰然。

地。既扣時也只是寂ㇾ天寞ㇾ地。

問。古人論ㇾ性。各有二異同一。何者乃爲二定論一。先生曰。性無二定體一。論亦無二定體一。有下自二本體上一說者上。有下自二發用上一說者上。有下自二源頭上一說者上。有下自二流弊處一說者上。總而言ㇾ之。只是這箇性。但所ㇾ見有二淺深一爾。若執二定一邊一。便不ㇾ是了。性之本體原是無ㇾ善無ㇾ惡

問ふ、『古人の性を論ずるや、各々異同有り。何者をか乃ち定論と爲さん。』先生曰く、『性に定體無く、論にも亦定體無し。本體上より說く者有り、發用上より說く者有り、源頭上より說く者有り、流弊の處より說く者有り。總て之を言ふも、只だ是れ這箇の性なり。但だ見る所に淺深あるのみ。若し一邊のみを執定せば、便ち是ならず。性の本體は原是れ善無く惡無きもの、發用上も也原是れ以て善と爲す可く、以て不善と爲す可きもの、其流弊も也原是れ一定の善、一定の惡なるものなり。譬へば眼の如し。喜ぶ時の眼有り、怒る時の眼有り。直視は就ち是れ看るの眼、微視は就ち是れ覷ふの眼なり。總て之を言ふも、只だ是れ這箇の眼のみ。若し怒れる時の眼を見得て、就ち未だ嘗て喜ぶの眼有らずと說き、看る時の眼を見得て、就ち未だ嘗て覷ふの眼有らずと說くは、皆是れ執定なり。就ち是れ錯れるを知る。孟子の性を說くは、直ちに源頭上より說き來る。亦是れ

發一。先生曰。只緣下後儒將二未發已發一分說了上。只得劈頭說三箇無二未發已發一。使二人自思得上レ之。若說レ有二箇已發未發一。聽者依レ舊落二在後儒見解一。若眞見三得無二未發已發一。說三箇有二未發已發一。原不レ妨。原有二箇未發已發在一。問曰。未發未二嘗不一レ和。已發未二嘗不レ中。譬如二鐘聲一。未レ扣不レ可レ謂レ無。既扣不レ可レ謂レ有。畢竟有二箇扣與レ不レ扣。何如。先生曰。未レ扣時原是驚レ天動レ

緣り、只だ劈頭に箇の未發・已發無しと說くを得て、人をして自ら思うて之を得しむ。(二)若し箇の已發・未發有りと說かば、聽く者は舊に依りて後儒の見解に落在せん。若し眞に、未發・已發無きとを見得ば、箇の未發・已發有りと說くも、原より妨げず。原箇の未發・已發の在る有ればなり。」問うて曰く、「(三)未發は未だ嘗て和ならずんばあらず。已發は未だ嘗て中ならずんばあらず。譬へば(四)鐘聲の如し。未だ扣かざるに無しと謂ふ可からず。既に扣くも有りと謂ふ可からず。畢竟箇の扣くと扣かざると有るのみ。何如。」先生曰く、「(五)未だ扣かざる時原是れ天を驚かし地を動かし、既に扣く時也只だ是れ天を寂し地を寞す。」

(一) 後儒が中庸の未發已發を分ちて二つの事として說ける爲めに、自分は頭から未發已發は無いと說きて、人をして自ら考へて會得せしむ　(二) 若し未發已發有りと說かば、聽く者は後儒の見解に落ちて之を二つの事に分けて考ふべし　(三) 中庸に未發を中といひ、發して皆節に中るを和と謂ふとなせども、未發も和也、已發も中也　(四) 鐘の字に作して見るべし　(五) 前出の「本體は常に動き常に靜なり」の思想を以て考へば此文愈明かならん

先生曰。知ニ得過不及ノ處。就是中和。所レ惡ニ於上。是良知。毋ニ以使レ下。卽是致レ知。

㊀過不及を知り得る處これ中和にして卽ちこれ良知也

『上に惡む所とは、是れ良知にして、以て下を使ふ毋れとは、卽ち是れ知を致すなり。』(二)

㊁大學の「上に惡む所は以て下を使ふ毋れ」云々を釋す。惡むは良知にして、その惡む所を以て下を使はざるは、卽ち致知也

先生曰。蘇秦張儀之智。也是聖人之資。後世事業文章許多豪傑名家。只是學ニ得儀秦故智。儀秦學術善揣ニ摸人情。無ニ一些不レ中ニ人肯綮。故其說不レ能レ窮。儀秦亦是窺ニ見得良知妙川處。但用ニ之於不善ニ爾。

先生曰く、『蘇秦・張儀の智も、也是れ聖人の資なり。後世の事業文章許多の豪傑名家は、只だ是れ儀・秦の故智を學び得。儀・秦の學術は善く人情を揣摸(一)して、一些も人の肯綮に中らざる無し。故に其說窮むること能はず。儀・秦も亦是れ良知妙用の處を窺ひ見得たり。但だ之を不善に用ひたるのみ。』

㊀人情をはかりさぐりて、眞によく其急所にあたれり

或問ニ未發已

或ひと未發・已發を問ふ。先生曰く、『只だ後儒(一)は未發・已發を將つて分說するに

了。所以教攝不住。

琴瑟簡編學者不可無。蓋有業以居之。心就不放。

先生嘆曰。世間知學的人。只有這些病痛打不破。就不是善與人同。崇一曰。這病痛只是箇好高。不能忘己爾。

問。良知原是中和的。如何却有過不及。

㊀ 食事の例を擧げて、萬事につけて皆然りと知らしむる也　㊁ 目前に何一つの事の存するなきにも　㊂ あくせくとして緊靜ならず　㊃ 心をきめすべて内に住まらざるはこれが爲めなり

『琴瑟・簡編は學者に無かる可からず。蓋し業以て之に居ること有れば、心就ち放れず。』

㊀ 音物也　㊁ 易文言の「修辭立其誠所以居業也」を取りていふ

先生嘆じて曰く、『世間の學を知れるの人には、只だ這の些かの病痛の打して破らざるもの有り。就ち是れ、善、人と同じうせざればなり。』崇一曰く、『這の病痛は只だ是れ箇の高きを好みて、己を忘るゝ能はざるのみ。』

㊀ 孟子公孫丑上に「大舜有大焉、善與人同」とあり。こゝの文意は、善を私し、己の善、人の善とわけへだてをなす心ありと也　㊁ 高より勝つことを好みて

問ふ、『良知は原是れ中和的なるに、如何にして却つて過不及有るか。』先生曰く、『過不及を知り得る處就ち是れ中和なり。』

那心上一來。譬如三大樹有二多少枝葉一也。只是根本上用二得培養功夫一。故自然能如レ此。非下是從二枝葉上一用レ功。做ニ得根本上也。學者學二孔子一。不下在二心上一用ニ功。汲汲然去レ學二那氣魄一。却倒做了。

得るに非ず。學者の孔子を學ぶに、心上に在りて功を用ひず、(二)汲汲然として那の(一)氣魄を學ぶは、却つて倒に做すなり。』

(一) 氣根、精神の働き (二) せつせと孔子の氣根の所を學ぶは、其根本の培養を忘れて枝葉上に功を用ふる也

人有レ過。多於二過上一用レ功。就是補レ甑。其流必歸二於文レ過。

『人の過有るや、多くは(一)過の上に於て功を用ふ。就ち是れ(二)甑を補ふなり。其流るゝところ必ず過を文るに歸す。』

(一) 單に過の上についてのみ色々考へて、過の因つて起りたる心如何を省みず (二) 燒物のこしきのこはれたるを色々つぎ合はせて見るごとき物にて、何の功もなく、其流弊は過をかざりごまかす事とならん

今人於二喫レ飯時一。雖レ無二一事在レ前。其心常役役不レ寧。只緣二此心忙慣

『今の人、飯を喫する時に於てすら、(一)一事の前に在る無しと雖も、其心は常に(二)役役として寧からず。只だ此心の(三)忙しきに慣るゝに緣る。(四)收攝し住まらざる所以なり。』

意何取。先生曰。古人具二中和之體一以作レ樂。我的中和。原與二天地之氣一相應。候二天地之氣一。協二鳳凰之音一。不レ過レ去驗二我的氣果和否一。此是成レ律已後事。非二必待レ此以成一レ律也。今要レ候二灰管一。先須レ定二至日一。然至日子時。恐又不レ準。又何處取二得準一來。

を述べたるものにて、心のゆく所これ聲そのものの本也 歌は言語に節調をつけて詠ずるものにて、これ聲を作るの本也。聲は五聲にて、これ言を永うして詠ずるより生ずる也。律は六律六呂にて、以てこの五聲を和する也 ㊂ 前漢律志に「制二十二筒一以聽二鳳之鳴一、其雄鳴爲レ六、雌鳴亦六」云々 ㊃ その前に先づ冬至の日を定むるを要す、其冬至の子の刻を定むる標準また難からん

先生曰。學問也要二點化一。但不レ如二自家解化者自一了百當一。不レ然亦點二化許多一不レ得。

先生曰く、「學問は也點化を要す。但だ自家解化する者の自ら一了百當なるに如かず。然らざれば亦許多を點化し得ず。」

㊀ 師友其他のものによりて、己がよからぬ所をよくして行くをいふ ㊁ 自己自身の良知によりて自ら化して行けば自然に一了百當なり

孔子氣魄極大。凡帝王事業。無レ不二一一理會一也。只從二

「孔子は氣魄極めて大にして、凡そ帝王の事業、一一理會せざる無し。只だ那の心上より來る。譬へば大樹に多少の枝葉有るが如し。只だ是れ根本上に培養の功夫を用ひ得。故に自然に能く此の如し。是れ枝葉上より功を用ひて、根本を做し

先生曰。古人爲レ治。先養二得人心一和平。然後作レ樂。比如二在レ此歌レ詩。爾的心氣和平。聽者自然悅懌興起。只此便是元聲之始。書云。詩言レ志。志便是樂的本。歌永レ言。歌便是作レ樂的本。聲依レ永。律和レ聲。律只要レ和レ聲。和レ聲便是制レ律的本。何嘗求二之於外一。曰。古人制二候レ氣法一。是

得て和平にし、然る後に樂を作る。比へば此に在りて詩を歌ふが如し。爾の心氣和平なれば、聽く者も自然に悅懌興起(一)せん。只だ此れ便ち是れ元聲の始なり。書に云ふ、(二)詩は志を言ふと。志は便ち是れ樂の本なり。歌は言を永うすと。歌は便ち是れ樂を作るの本なり。(三)聲は永きに依り、律は聲を和すと。律は只だ聲を和するを要す。聲を和するは便ち是れ律を制するの本なり。何ぞ嘗て之を外に求めんや。』曰く、『古人の氣を候ふ法を制するは、是の意何れにか取れる。』先生曰く、『古人は中和の體を具へて以て樂を作る。我が中和は、原天地の氣と相應ず。天地の氣を候ふも、鳳凰の音に協ふるも、我の氣の果して和なるや否やを驗するに過ぎず。此は是れ律を成せる已後の事にして、必ずしも此を待つて以て律を成したるに非ざる也。今灰管(四)を候はんと要せば、先づ須らく至日を定むべし。然るに至日子の時も、恐らくは又準ぜざらん。又何處に準を取り得來らんや。』

(一) よろこびの情おこり樂しむ　(二) 書の舜典に「詩言レ志、歌永レ言、聲依レ永、律和レ聲」と見ゆ。詩は心のゆく所

何以化民善俗。今要民俗反朴還淳。取今之戲子。將妖淫詞調倶去了。只取忠臣孝子故事。使愚俗百姓。人人易曉。無意中感激他良知起來。却於風化有益。然後古樂漸次可復矣。曰。洪要求元聲不可得。恐於古樂亦難復。先生曰。儞說元聲在何處求。對曰。古人制管候氣。恐是求元聲之法。先生曰。若要去葭灰黍粒中求元聲。却如水底撈月。如何可得。元聲只在儞心上求。

ば、却つて水底に月を撈るが如からん。如何ぞ得べけん。元聲は只だ儞の心上に在りて求むべし。』

(一) 最初より問者の語と見るべし、先生嘗て屢〻說きありしが未だ其意を得ず、復教示を乞ふと也 (二) あそびごとの意。俳優などの演ずる俗曲俗樂をいふ (三) 古樂の精神と近し (四) 書經に出づ、九官の樂よりなる故九成といふ、樂の九變も同意也 (五) 舜の一つの遊びごと也 (六) 聖人一生の事實は皆其樂の中に在り (七) 論語八佾に「子謂韶、盡美矣、又盡善也、謂武、盡美矣、未盡善也」 (八) なまめかしくみだらなる調子はとりのけて (九) 洪は問者の名の自稱。私は古樂の出づる元本を求めんと努めども得ず (十) 上卷にも出づ。管の空徑九分、長一尺(但曲尺九寸)の筒(ツヽ)を黃鐘として、之を以て冬至の氣を候ふ、其筒の中に黍粒千二百を入れ、葭の灰を一盃入れて其口を薄片にてふさぎ、密室の地中へ埋め置くなりといふ。下句の葭灰黍粒は即ちその事也 (十一) 求めて得がたき也

曰。心如何求。

曰く、『心、如何にして求めん。』先生曰く、『古人の治を爲すや、先づ人心を養ひ

不レ作久矣。今之戲子。尙與二古樂意思一相近。未レ達請問。先生曰。韶之九成便是舜的一本戲子。武之九變便是武王的一本戲子。聖人一生實事。俱播二在樂中一。所(四)以有德者聞レ之。便知三他盡レ善盡レ美。與二盡レ美未レ盡レ善處一。若二後世作レ樂。只是做二些詞調一。於二民俗風化一。絕無二關涉一。

未だ達せず、請ひ問ふ。』先生曰く、『(四)韶の九成は便ち是れ(五)舜の一本の戲子にして、武の九變は便ち是れ武王の一本の戲子なり。(六)聖人一生の實事は、俱に樂中に播在す。有德の者之を聞きて、便ち他の(七)善を盡し美を盡すと、美を盡し未だ善を盡さゞる處とを知る所以なり。後世の樂を作るが若きは、只だ是れ些かの詞調を做すのみ、民俗風化に於ては、絕えて關涉する無し。何を以てか民を化し俗を善くせん。今民俗の朴に反り淳に還らんことを要せば、今の戲子を取つて、(八)妖淫の詞調を將つて倶に去り、只だ忠臣孝子の故事を取り、愚俗百姓をして、人人に曉り易からしめ、無意の中に他の良知を感激し起し來らば、却つて風化に於て益有らん。然る後に古樂も漸次に復す可し。』曰く、『(九)洪は元聲を求めんと要するに得べからず。恐らくは古樂に於て亦復し難からん。』先生曰く、『儞說け、元聲は何處に在りて求むるや。』對へて曰く、『古人の(一〇)管を制して氣を候ふもの、恐らくは是れ元聲を求むるの法ならん。』先生曰く、『若し葭灰黍粒の中に去りて元聲を求めんと要せ

正ニ他姦惡一。凡文レ過掩レ慝。此是惡人常態。若要レ指ニ摘他是非一。反去レ激ニ他惡性一。舜初時致ニ得象要レ殺レ己。亦是要ニ象好一的心太急。此就是舜之過處。經過來乃知ニ功夫只在ニ自己一。不レ去レ責レ人。所ニ以致ニ得克諧一。此是舜動レ心忍レ性增ニ益不レ能處。古人言語俱是自家經歷過來。所下以說得親切。遺ニ之後世一。曲當中人情上。若非ニ自家經過一。如何得ニ他許多苦心處一。

經過し來りて乃ち功夫の只だ自己に在るを知りて、人を責めざりしは、克く諧ぐるを致し得たる所以にして、此は是れ舜が心を動し性を忍び能くせざるを增益する處なり。古人の言語は俱に是れ自家の經歷し過ぎ來りしところ、說き得て親切に、之を後世に遺して、曲さに人情に當る所以なり。若し自家の經過するに非ずんば、如何ぞ他が許多の苦心の處を得ん。』

(一) 書經堯典の語、これを陽明は、むしろ〳〵て我が德を治め、先方の姦惡を正す事はせずと解せる也 (二) 朱子派の蔡沈の註にて陽明と全く其見解を異にせり (三) 書の舜典に「舜生三十徵庸」 (四) 舜が最初、象の己を殺さうとするやうに仕向けたるは (五) 早く象をよき人物にせんともとむる心の急なりし過ち也 (六) 段々と經驗をつみて、凡ての工夫只自己にあるを知り、黙々として自ら責めてまた人を責めざりしを以て、遂によく諧和するを致したる也 (七) 孟子告子下の「舜發ニ於畎畝之中一」云々の條に出づ

先生曰。古樂

『先生曰く、古樂の作らざること久し、今の戲子も尙ほ古樂の意思と相近しと。

非。便是他本來天則。雖聖人聰明。如何可與增減得一毫。他只不能自信。夫子與之一剖決。便已竭盡無餘了。若夫子與鄙夫言時。留得些子知識在。便是不能竭他的良知。道體卽有二了。

(一)論語子罕篇に「子曰、吾有知乎哉、無知也、有鄙夫問於我、空空如也、我叩其兩端而竭盡」(二)孔子の心中一物もなく空なるをいふ。朱子はこれを鄙夫のぼんやりとして空漠なる意とせり (三)其鄙夫が自ら知れる是非の兩端を叩きてその爲めに一寸たちわけて見すれば。此見解亦朱子と異なり (四)此方に少しにても智識を留めてこちらより教へ込むといふ態度にては

先生曰。烝烝乂不格姦。本注說。象已進進於義。不至大爲姦惡。舜徵庸後。象猶日以殺舜爲事。何大姦惡如之。舜只是自進於乂。以乂薰烝不去

先生曰く、『(一)烝烝として乂めて姦を格さず』といふを、(二)本注に說く、象已に進んで義に進み、大に姦惡を爲すに至らずと。舜に(三)徵庸せられて後も、象は猶ほ日に舜を殺すを以て事と爲せり。何の大姦惡か之に如かん。舜は只だ是れ自ら乂むるに進み、乂むるを以て薰烝して他の姦惡を正し去らず。凡そ過を文り隱れたるを揜ふは、此は是れ惡人の常態にして、若し他の是非を指摘せんとせば、反つて他の惡性を激すべし。(四)舜の初時象の己を殺さんと要するを致し得たるは、亦是れ(五)象の好を要するの心の太だ急なりしなり。此れ就ち是れ舜の過てる處なり。

我。不知自心已爲後妻所移了。尙謂自家能慈。所以愈不能慈。舜只思父提孩我時如何愛我。今日不愛只是我不能盡孝。日思所以不能盡孝處。所以愈能孝。及至瞽瞍底豫時。又不過復得此心原慈的本體。所以後世稱舜是箇古今大孝的子。瞽瞍亦做成箇慈父。

にいふ所と甚だ異なりたるに驚く也 (四) だきかゝへてわらはせて大きくしたるものなりといふ事を覺え居りて。孟子盡心上に孩提之童といふ語あり、註に「二三歳の間、孩笑するを知りて提抱すべき者也」と見ゆ (五) たのしみよろこばしめざるが (六) 慈に慈心が生じたるに非ずして、そのもと／＼有したる慈の本體に復したるまで也

先生曰。孔子有鄙夫來問。未嘗先有知識以應之。其心只空空而已。但叩他自知的是非兩端。與之一剖決。鄙夫之心便已了然。鄙夫自知的是

先生曰く、「(一)孔子は鄙夫の來り問ふ有らば、未だ嘗て先づ知識を有して以て之に應ぜず。其心は只だ(二)空空たるのみ。但だ他が自知の是非の兩端を叩きて、之がために一たび剖決すれば、鄙夫の心便ち(三)已に了然たり。鄙夫の自知の是非は、便ち是れ他が本來の天則にして、聖人の聰明と雖も、如何ぞ與に一毫だも增減し得可けんや。他は只だ自ら信ずること能はず。夫子之がために一たび剖決すれば、便ち已に竭盡して餘無し。若し夫子鄙夫と言ふ時、(四)些子の知識を留め得んには、便ち是れ他の良知を竭す能はずして、道體は卽ち二有るなり。」

其父子相抱慟哭而去。柴鳴治入問曰。先生何言致ニ伊感悔ニ之速。先生曰。我言舜是世間大不孝的子。瞽瞍是世間大慈的父。鳴治愕然請問。先生曰。舜常自以爲ニ大不孝一。所ニ以能孝一。瞽瞍常自以爲ニ大慈一。所ニ以不レ能レ慈。瞽瞍只記ニ得舜是我提孩長的一。今何不ニ曾豫ニ悅

舜は是れ世間大不孝の子、瞽瞍は是れ世間大慈の父なりと。』鳴治(三)愕然として請ひ問ふ。先生曰く、『舜は常に自ら以て大不孝と爲せり。能く孝なる所以なり。瞽瞍は常に自ら以て大慈と爲す。慈なる能はざる所以なり。瞽瞍や只だ舜は是れ我が提孩(五)し長ぜしめたるものなることを記し得て、今何ぞ曾て我を豫悅せしめざるかとし、自心の已に後妻の爲に移されたるを知らずして、尚ほ自家(六)を能く慈なりと謂へり。愈〻慈なる能はざる所以なり。舜は只だ父の我を提孩する時如何に我を愛せし、今日愛せざるは只だ是れ我が孝を盡す能はざればなりと思ひ、日に孝を盡す能はざる所以の處を思ふ。愈〻能く孝なる所以なり。瞽瞍の豫を底す時に至るに及びては、又(七)此心の原慈なるの本體に復し得たるに過ぎず。後世舜は是れ箇の古今大孝の子と稱せられ、瞽瞍も亦箇の慈父と成るを做し〻所以なり。』

(一) そのさばきの辭をいひ終へぬ内に　(二) 感動して聲を立てゝ泣きさけびて去る　(三) 傳未詳　(四) 其言の普通

各自看レ理不レ同。先生曰。聖人何能拘二得死格一。大要出二於良知同一。便各爲レ說何害。且如二一園竹一。只要レ同二此枝節一。便是大同。若拘二定枝枝節節一。都要二高下大小一樣一。便非二造化妙手一矣。汝輩只要三去培二養良知一。良知同更不レ妨レ有二異處一。汝輩若不レ肯レ用レ功。連レ筍也不二曾抽得一。何處去レ論二枝節一。

若し枝枝節節を拘定して、都て高下大小の一樣ならんことを要せば、便ち造化の(四)妙手に非ず。汝輩は只だ良知を培養せんことを要す。良知同じければ更に異なる處有るを妨げず。汝輩若し功を用ふるを肯てせずんば、筍(五)に連るまで、也曾て抽きいで得ず。何れの處にか枝節を論ぜん。』

(一) 彖は卦に繋けたる辭にて文王の作る所、周公は爻辭を作り、孔子十翼を作れり　(二) 死法に拘るべからず、聖人の說く所は皆活法也　(三) その大體大括りが　(四) 一つ〱の枝々節の寸法まで一定して　(五) 筍までもはえ出でられぬ也、何ぞ枝節などを論ぜん、枝節などには及びもつかぬ事也。連の字は至也及也のごとき意の字

鄕人有二父子訟獄一。請レ訴二於先生一。侍者欲レ阻レ之。先生聽二之言一。不レ終レ辭。

鄕人の父子訟獄する有りて、先生に訴へんと請ふ。侍者之を阻まんと欲す。先生之が言を聽き、(一)辭を終へざるに、其父子相抱き慟哭して去る。(二)(三)柴鳴治入りて問うて曰く、『先生の何の言か伊感悔を致せるの速かなる。』先生曰く、『我れ言ふ、

要下依二此良知一去上レ孝。又爲二私欲一所レ阻。是以不レ能。必須レ加二人一己百人十己千之功一。方能依二此良知一。以盡二其孝一。聖人雖二是生知安行一。然其心不二敢自是一。肯做二困知勉行的功夫一。困知勉行的。却要レ思三量做二生知安行的事一。怎生成得。

問。樂是心之本體。不レ知遇二大故一於二哀哭時一。此樂還在否。先生曰。須二是大哭一番了方樂一。不レ哭便不レ樂矣。雖レ哭此心安處卽是樂也。本體未二嘗有一レ動。

問ふ、『樂は是れ心の本體なりと(一)。知らず大故(二)に遇うて哀哭する時に於ても、此樂還つて在りや否や。』先生曰く、『須らく是れ大哭(三)一番し了りて方に樂むべし。哭せざれば便ち樂まず。哭すと雖も此心の安き處卽ち是れ樂なり。本體(四)は未だ嘗て動くこと有らず。』

(一) 中巻の陸原靜に答ふる書中の「樂は是れ心の本體」の條參照 (二) 父母の喪又君主の喪にもいふ (三) 十分に大哭して其時に心樂む也 (四) 心の本體は決して動く事なし

問。良知一而已。文王作レ彖。周公繫レ爻。孔子贊レ易。何以

問ふ、『良知は一のみ(一)。文王は彖を作り、周公は爻を繫け、孔子は易を贊す。何を以てか各自理を看ることの同じからざる。』先生曰く、『聖人何ぞ能く死格(二)に拘り得ん。大要(三)良知の同じきに出づれば、便ち各々說を爲すも何の害あらん。且つ一園の竹の如き、只だ此枝節を同じうせんとせば、便ち是れ大に同じ。

問。聖人生知安行、是自然的。如何有二甚功夫一。先生曰。知行二字。即是功夫。但有二淺深難易之殊一耳。良知原是精精明明的。如レ欲レ孝レ親。生知安行的。只是依二此良知一。實落盡レ孝而已。學知利行者。只是時時省覺。務要下依二此良知一盡上レ孝而已。至二於困知勉行者一。蔽錮已深。雖レ

問ふ、「聖人は生知安行にして、是れ自然的なれば、如何ぞ甚の功夫か有らん。」

先生曰く、「(一)知行の二字は、即ち是れ功夫なり。但だ淺深難易の殊なる有るのみ。良知は原是れ精精明明なるものにして、親に孝ならんと欲する如き、生知安行なるものは、只だ是れ此の良知に依りて、(二)實落に孝を盡すのみ。學知利行の者は、只だ是れ時時に省覺して、務めて此良知に依つて孝を盡さんとするのみ。困知勉行の者に至りては、(三)蔽錮已に深ければ、此良知に依つて孝をなさんと要すと雖も、又私欲の爲に阻まる。是を以て能はず。必ず須らく人一たびすれば己百たびし、人十たびすれば己千たびするの功を加ふべし。方に能く此良知に依りて、以て其孝を盡す。聖人は是れ生知安行なりと雖も、(四)然れども其心は敢て自ら是とせず、肯て困知勉行の功夫を做す。困知勉行のものは、却つて生知安行の事を做さんと思量するも、怎生ぞ成し得ん。」

(一) 生知安行といふその知行の二字。生知安行、學知利行、困知勉行の三分限につきては前に屢々見えたり　(二) 實際的に　(三) 知蔽はれ行ふさがる事深し　(四) 尙且それを以て自ら是とせず

人心合有否。先生曰。喜怒哀懼愛惡欲。謂之七情。七者俱是人心合有的。但要認得良知明白。比如日光。亦不可指著方所。一隙通明皆是日光所在。雖雲霧四塞。太虛中色象可辨。亦是日光不滅處。不可以雲能蔽日。教天不要生雲。七情順其自然之流行。皆是良知之用。不可分別善惡。但不可有所著。七情有著俱謂之欲。俱爲良知之蔽。然纔有著時。良知亦自會覺。覺即蔽去復其體矣。此處能勘得破。方是簡易透徹功夫。

良知を認め得て明白なるを要す。比へば日光の如し、亦方所を指著す可からず。(一)一隙の通明も皆是れ日光の在る所にして、雲霧四塞すと雖も、太虛の中の色象(二)を辨ず可し。亦是れ日光の滅びざる處なり。(三)雲能く日を蔽ふを以て、天をして雲を生ずることを要せざらしむ可からず。(四)七情其自然の流行に順へば、皆是れ良知の用にして、善惡を分別す可からず。(五)但だ著する所有る可からず。七情にして著する有れば俱に之を欲と謂ひ、俱に良知の蔽を爲す。然るに纔かに著する有る時は、良知亦自ら覺ることを會す。覺れば卽ち蔽去つて其體に復す。(六)此處能く勘得し破るは、方に是れ簡易透徹の功夫なり。』

(一) 日の光はどこそこと其方角所在を指し定むべからず (二) 天間の色彩形象 (三) 雲が日を蔽ふからとて天をして雲を生ぜんとせざらしむべからず (四) 七情も自然のまゝに流行するは善惡と分つべきにあらず、皆良知の用也 (五) たゞ執著する所ありては不可也 (六) この處を十分に看破し得れば

曰。是非兩字。是箇大規矩。巧處則存乎其人。

聖人之知。如青天之日。賢人如浮雲天日。愚人如陰霾天日。雖有昏明不同。其能辨黑白則一。雖昏黑夜裏。亦影影見得黑白。就是日之餘光未盡處。困學功夫。亦只從這點明處精察去耳。

「聖人の知は、青天の日の如く、賢人は浮雲の天の日の如く、愚人は陰霾(一)の天の日の如し。昏明(二)同じからざるもの有りと雖も、其能く黑白を辨ずるは則ち一なり。昏黑の夜裏(三)と雖も、亦影影(四)に黑白を見得るは、就ち是れ日の餘光の未だ盡きざる處なり。困學の功夫は、亦只だ這の點の明かなる處より精察するのみ。」

(一) 陰霾土を吹き揚げ濛々として曇りたる天　(二) くらきと明かなると　(三) まつくらなる闇の中　(四) ほのかにうすく

問。知譬日。欲譬雲。雲雖能蔽日。亦是天之一氣合有的。欲亦莫非

問ふ、「知を日に譬へ欲を雲に譬ふ。雲能く日を蔽ふと雖も、亦是れ天の一氣有るべきもの、欲も亦人心に有るべきに非ざる莫きや否や。」先生曰く、「喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲、之を七情と謂ふ。七は倶に是れ人心に有るべきものにして、但だ

限有二不レ同處一。孔子則三者皆長。然孔子之和。只到二得柳下惠一而極。淸只到二得伯夷一而極。任只到二得伊尹一而極。何嘗加二得些子一。若謂二三子力有レ餘而巧不レ足。則其力反過二孔子一了。巧力只是發二明聖智之義一。若識二得聖知本體是何物一。便自了然。

餘有りて巧足らず、是を以て一節聖に至ると雖も、而も知は以て時中に及ばざる也」と。今此朱註の誤を論ぜる也

先生曰。先レ天而天弗レ違。天卽良知也。後レ天而奉二天時一。良知卽天也。

良知只是箇是非之心。是非只是箇好惡。只好惡就盡二了是非一。只是非就盡二了萬事萬變一。又

先生曰く、『(一)天に先だちて天違はずとは、天卽ち良知なればなり。天に後れて天の時を奉ずとは、良知卽ち天なればなり。』

㊀ 易乾文言に「先レ天而天弗レ違、後レ天而奉二天時一、天且弗レ違、而況於レ人乎、況於二鬼神一乎」とあるを說く

『(一)良知は只だ是れ箇の是非の心なり。(二)是非は只だ是れ箇の好惡なり。只だ好惡は就ち是非を盡し、只だ是非は就ち萬事萬變を盡す。』又曰く、『(三)是非の兩字は、是れ箇の大規矩にして、巧なる處は則ち其人に存す。』

㊀ 良知は是を是と知り非を非と知る心也　㊁ 是非の心といふは是を好み非を惡むをいふ也　㊂ 是非の兩字は一個の大なるのりにして、其のりの用ひ方の巧なる處は其人にあり

聖智之說。朱子云。三子力有餘而巧不足。何如。先生曰。三子固有力。亦有巧。巧力實非兩事。巧亦只在用力處。力而不巧。亦是徒力。三子譬如射。一能步箭。一能馬箭。一能遠箭。他射得到。俱謂之力。中處俱可謂之巧。但步不能馬。馬不能遠。各有所長。便是才力分

と。何如。』先生曰く、『三子は固より力有り、亦巧有り。巧・力、實は兩事に非ず。巧も亦只だ力を用ふる處に在り。力ありて巧あらざれば、亦是れ徒力のみ。三子は譬へば射の如し。一は步箭を能くし、一は馬箭を能くし、一は遠箭を能くす。他の射得て到るをば、俱に之を力と謂ひ、中たる處をば俱に之を巧と謂ふ可し。但だ步は馬を能くせず、馬は遠を能くせず。各々長ずる所有り。便ち是れ才力の分限に同じからざる處有るなり。孔子は則ち三者とも皆長ず。然るに孔子の和は只だ柳下惠に到り得て極り、淸は只だ伯夷に到り得て極り、任は只だ伊尹に到り得て極る。何ぞ曾て些子をも加へ得ん。若し三子は力餘り有りて巧足らずと謂はゞ、則ち其力反つて孔子に過ぐるなり。巧・力は只だ是れ聖智の義を發明す、若し聖知の本體の是れ何物なるかを識り得ば、便ち自ら了然たらん。』

〔一〕孟子萬章下の首章に「孟子曰く、伯夷は聖の淸なる者也、伊尹は聖の任なる者也、柳下惠は聖の和なる者也、孔子は聖の時なる者也」又曰く「智は譬へば則ち巧也、聖は譬へば則ち力也、百步の外に射るが由(ゴト)し、其至るは爾の力也、其中るは爾の力に非ざる也」と。朱子之に註して曰く「孔子は巧力俱に全うして聖智兼備す、三子は則ち力

生曰。聖賢只是爲レ己之學。重ニ功夫一不レ重ニ效驗一。仁者以ニ萬物一爲レ體。不レ能ニ一體一。只是已私未レ忘。全得ニ仁體一。則天下皆歸ニ於吾仁一。就是八荒皆在ニ我闥一意。天下皆與ニ其仁一。亦在ニ其中一。如ニ在レ邦無レ怨。在レ家無レ怨。亦只是自家不レ怨。如ニ不レ怨レ天不レ尤レ人之意。然家邦無レ怨ニ於我一。亦在ニ其中一。但所レ重不レ在レ此。

重んぜず。仁者は萬物を以て體と爲す。(三)一體たる能はざるは、只だ是れ己私未だ忘れざればなり。全く仁の體を得れば、則ち天下皆吾が仁に歸す。就ち是れ(四)八荒皆我が闥に在るの意にして、(五)天下皆其仁に與するも、亦其中に在り。(六)邦に在りても怨むこと無く家に在りても怨むこと無きが如きも、亦只だ是れ(七)自家怨まず、天を怨まず人を尤めざるの意の如し。然して家邦の我に怨無きも、亦其中に在り。但だ重んずる所は(八)此に在らず。』

(一) 論語顏淵篇の首章也　(二) 朱子の註に「一日克レ己復レ禮、則天下之人、皆與ニ其仁一、極言ニ其效之甚速而至大一」とあるは卽ち天下仁に歸すを效驗となして說ける也　(三) 欄外書によれば張本には「一體と爲す」とあり、從ふべきに似たり　(四) 此一句呂與叔克己銘に出づ　(五) 前出朱註の文を引きていふ　(六) 論語顏淵篇第二章の語　(七) 自己が怨まぬ也、下の一句は論語憲問篇に出づ　(八) 效驗の方にはあらず

問。孟子巧力

問ふ、『(一)孟子の巧力聖智の說につき、朱子云ふ、三子は力餘り有りて巧足らず

理。天理在㆓人心㆒。亘㆑古亘㆑今。無㆑有㆓終始㆒。天理卽是良知。千思萬慮。只是要㆑致㆓良知㆒。良知愈思愈精明。若不㆓精思㆒。漫然隨㆑事應去。良知便粗了。若只著㆓在事上㆒。茫茫蕩蕩去㆑思。教㆑做㆓遠慮㆒。便不㆑免㆑有㆔毀譽得喪人欲攙㆓入其中㆒。就是將迎了。周公終夜以思。只是戒㆓愼不㆑睹。恐㆓懼不㆑聞的功夫。見得時。其氣象與㆓將迎㆒自別。

應じ去らば、良知は便ち粗なり。若し只だ事上に著在して、茫茫蕩蕩として思ひ去るを、遠慮と做さしめば、便ち毀譽得喪人欲の其中に攙入する有るを免れず。就ち是れ將迎なり。周公の終夜以て思ひ、只だ是れ睹ざるを戒愼し、聞かざるを恐懼するの功夫たるや、(六)見得る時、其氣象は將迎と自ら別あり。」

(一) 論語衞靈公篇に「子曰、人無㆓遠慮㆒、必有㆓近憂㆒」 (二) 孟子離婁下に「周公思㆑兼㆓三王㆒以施㆓四事㆒其有㆓不㆑合者㆒仰而思㆑之、夜以繼㆑日、幸而得㆑之、坐以待㆑旦」 (三) 前出、將迎意必卽ち事に執著するの心と同じからざる理由如何と也 (四) 只茫々としてむやみと思慮を費すに非ず (五) 只心の向くまゝが良知なりとしてぼんやりと深き考へもなく事に應ずる時は粗となる (六) よく其意義が分れば

問。一日克㆑己復㆑禮天下歸㆑仁。朱子作㆓效驗説㆒。如何。先

問ふ、「(一)一日も己に克ち禮に復れば天下仁に歸すと。(二)朱子は效驗と作して說けり。如何。」先生曰く、「聖賢は只だ是れ己の爲の學なれば、功夫を重んじて效驗を

先生曰。惟天下至聖。爲二能聰明睿知一。舊看何等玄妙。今看來。原是人人自有的。耳原是聰。目原是明。心思原是睿知。聖人只是一能レ之爾。能處正是良知。衆人不レ能。只是箇不レ致レ知。何等明白簡易。

先生曰く、『惟だ天下の至聖、能く聰明睿知と爲すと(一)。舊看しとき何等の玄妙ぞ(二)。今看來るに、原是れ人人の自ら有するものにして、耳は原是れ聰に、目は原是れ明に、心思は原是れ睿知なり。聖人は只だ是れ一に之を能くするのみ。能くする處正に是れ良知なり。衆人の能くせざるは、只だ是れ箇の知を致さゞればなり。何等の明白簡易ぞ。』

(一) 中庸の語　(二) もと看し時、其玄妙を歎じ、衆人の得て及ぶべからざる所となしゝが

問。孔子所レ謂遠慮。周公夜以繼レ日。與二將迎一不レ同。何如。先生曰。遠慮不三是茫茫蕩蕩去二思慮一。只是要レ存二這天

問ふ、『孔子の所謂遠き慮(一)と、周公の夜を以て日に繼ぐ(二)とは將迎(三)と同じからざる、何如。』先生曰く、遠慮とは是れ茫茫蕩蕩(四)として思慮するにあらず、只だ是れ這の天理を存せんことを要す。天理の人心に在るや、古に亙り今に亙りて終始有ること無し。天理は卽ち是れ良知なれば、千思萬慮、只だ是れ良知を致さんことを要す。良知は愈々思へば愈々精明なり。若し精思せずして、漫然(五)と事に隨つて

遇變而通耳。良知無前後。只知得見在的幾。便是一了百了。若有箇前知的心。就是私心。就有趨避利害的意。邵子必於前知。終是利害心未盡處。

(一)事の變を察する卽ち聖人也　(二)現在の幾を知れば一事が萬事也　(三)若し前知せんとの心あらばこれ私心也　(四)利にむかひ害を避くるの心がまへ　(五)康節先生也

先生曰。無知無不知。本體原是如此。譬如日未嘗有心照物。而自無物不照。無照無不照。原是日的本體。良知本無知。今却要有知。本無不知。今却疑有不知。只是信不及耳。

先生曰く、「(一)知ること無く、知らざること無し、本體原是れ此の如し。譬へば日の未だ嘗て心有らずして物を照すに、自ら物として照さゞること無きが如し。照すこと無くして照さゞること無きは、原是れ日の本體なり。(二)良知は本知る無きも、今却つて知る有らんと要し、本知らざる無きに、今却つて知らざる有るを疑ふは、只だ是れ信じ及ばざるのみ。」

(一)心の本體もと空虚なれば知ることあるなく、もと靈妙なれば知らざることあるなし　(二)これ良知についての一般人の誤謬の見を正す也

只把二塵尾一提起。一日其徒將二塵尾一藏過。試二他如何設ヒ法。禪師尋二塵尾一不レ見。又只空手提起。我這箇良知。就是設レ法的塵尾。舍二了這箇一。有二何可二提得一。少問又一友請二問功夫切要一。先生旁顧曰。我塵尾安在。一時在レ坐者皆躍然。

べきなし (八) 良知は銘々の身にありと悟らしむる也 (九) 明かに心に思ひ當りたるを形容す

或ひと(一)至誠の前知を問ふ。先生曰く、『誠は是れ實理なり。只だ是れ一箇の良知にして、實理の妙用流行は、就ち是れ神なり。其萌動する處は、就ち是れ幾なり。(二)誠神幾を聖人と曰ふ。聖人は前知を貴ばず。禍福の來るや、聖人と雖も免れざる所有り。聖人は只だ是れ幾を知り、變に遇うて通ずるのみ。良知には前後無し。只だ(三)見在の幾を知り得れば、便ち是れ一了百了なり。(四)若し箇の前知の心有らば、就ち是れ私心にして、就ち(五)利害を趨避するの意有るなり。(六)邵子の前知を必せるは、終に是れ利害の心未だ盡きざる處なり。』

或問二至誠前知一。先生曰。誠是實理。只是一箇良知。實理之妙用流行。就是神。其萌動處。就是幾。誠神幾曰二聖人一。聖人不レ貴二前知一。禍福之來。雖二聖人一有レ所レ不レ免。聖人只是知レ幾。

(一) 中庸に「至誠之道可二以前知一」云々とあるを問ふ (二) 周子通書の文語。誠神幾は三にして一、至誠神妙にして

盡。如何今日轉說轉遠。都不著根。對曰。致良知蓋聞教矣。然亦須講明。先生曰。既知致良知。又何可講明。良知本是明白。實落用功便是。不肯用功。只在語言上轉說轉糊塗。曰。正求講明致之之功。先生曰。此亦須你自家求。我亦無別法可道。昔有禪師。人來問法。

『既に致良知を知れば、又何ぞ講明す可けん。良知は本是れ明白なり。(四)實落に功を用ふれば便ち是なり。肯て功を用ひずして、(五)只だ語言上に在りて轉た說かば轉た糊塗せん。』曰く、『正に之を致すの功を講明せんことを求む。』先生曰く、『此も亦須らく儞が自家に求むべし。我れ亦別法の道ふ可き無し。昔禪師有り、人來りて法を問へば、只だ(六)麈尾を把つて提起す。一日其徒麈尾を將つて藏過し、他が如何にして法を設くるかを試む。禪師、麈尾を尋ぬれども見えず。又只だ空手提起せりと。我が這箇の良知は、就ち是れ(七)法を設くるの麈尾にして、這箇れを舍きて、何の提し得べきもの有らん。』少間にして、又一友功夫の切要を請ひ問ふ、先生旁顧して曰く、『(八)我が麈尾安にか在る。』一時坐に在る者皆(九)躍然たり。

(一) 學問の工夫を問ふに緊切ならず　(二) 只一句にていひ盡せり　(三) 何故に說けば說く程遠くなりて根本卽ち良知に著かざるぞ。これ卽ち問ふ事切ならずといふ所以なり　(四) 實際に、眞實に　(五) 實功を用ひず只言語の上にて說けば、說くにつれていよ〳〵曖昧不明とならん　(六) 拂子（ホツス）也、麈といふ一種の大なる鹿の毛にて作る、之を把つて法を提起する也。蓋し拂子をさゝげて默々の内に法を示す也　(七) 揭げ示すべき拂子にてこれ以外に示す

恐是剜レ肉做レ瘡否。先生正レ色曰。這是我醫レ人的方子。眞是去ニ得人病根一。更有ニ大本事一。人過ニ了十數年一。亦還用得著。儞如不レ用。且放起。不レ要レ作レ壞ニ我的方子一。是友愧謝。少間曰。此量非ニ儞事一。必吾門稍知ニ意思一者。爲ニ此說一以誤レ汝。在レ坐者皆悚然。

病根を去り得、(五)更に大本事有り。人十數年を過ぎて、亦還つて用ひ得著く。儞如し用ひずんば且つ放起せよ。我の(六)方子壞ることを作すを要せざれ。』是の友(七)愧謝す。(八)少間にして曰く、『此量儞の事に非ず。必ず吾が門の稍や意思を知れる者が、此說を爲して以て(九)汝を誤るならん。』坐に在る者皆悚然たり。

(一) 貧々に工夫を用ひざるもの、陽明が敎ふる靜坐の工夫を疑ひて卒爾として之を問ふ也 (二) これ等の病根を一一さがし尋ねて掃除し淨めんとするは (三) 殊更に起りもせぬこれ等の病根をさがし出すことになり、恰も滿足なる肉をゑぐりて瘡をつけたる類ならずや (四) 人の病根を去る一つの手段方法 (五) 病根が去りたる上にて更に大根本の事あり (六) それは十數年の工夫を積みてはじめて用ひ得るもの也 (七) 汝若し用ひずとならばそのまゝ捨ておけ、我が方法手段をやぶらんとはすまじき事也 (八) しばしの後陽明重ねて言ふ (九) この段の事は

一友問ニ功夫一不レ切。先生曰。學問功夫。我已曾一句道

一友(一)功夫を問ふに切ならず。先生曰く、『學問の功夫は、我れ已に曾て一句に道ひ盡せり。(三)如何ぞ今日轉た說けば轉た遠くして、都て根に著かざるぞ。』對へて(二)曰く、『致良知は、蓋し敎を聞けり。然れども亦須らく講明すべし。』先生曰く、

問二殀壽不一レ貳。先生曰。學問功夫。於二一切聲利嗜好一。俱能脫落殆盡。尚有二一種生死念頭。毫髮掛帶一。便於二全體一。有下未二融釋一處上。人於二生死念頭一。本從二生身命根上一帶來。故不レ易レ去。若於二此處一見得破透得過。此心全體。方是流行無レ礙。方是盡レ性至レ命之學。

殀壽貳にせざるを問ふ。先生曰く、「(一)學問の功夫は、一切聲利の嗜好に於て、俱に能く脫落し殆ど盡すも、(二)尙ほ一種生死の念頭の、毫髮も掛帶する有らば、便ち全體に於て、(三)未だ融釋せざる處有り。人の生死の念頭に於けるや、本生身命根上より帶び來る。故に去り易からず。若し此處に於て(四)見得破り透り得ば、此心の全體、方に是れ流行して凝無からん。方に是れ性を盡し命に至るの學なり。」

(一) 孟子盡心上篇の「殀壽不レ貳」について見よ　(二) 學問の功夫により一切名聞利欲上の好みなどはなくなるも　(三) 只一つの生死の少しにても良知の上に纏ひ帶ぶるあらば、此心の全體に於て滯りてとけざる所あり　(四) 徹底的にこれを見やぶり得ば

一友問。欲下於二靜坐時一。將二好レ名好レ色好レ貨等根一。逐一搜尋。掃除廓淸上。

一友問ふ、「靜坐の時に於て、名を好み色を好み貨を好む等の根を將つて、逐一搜尋して、掃除廓淸せんと欲するは、恐らくは是れ肉を剜りて瘡を做るものなりや否や。」先生色を正して曰く、「這は是れ我が人を醫するの方子にして、眞に是れ人の

人一同是愛的。如ニ簞食豆羹一。得則生。不レ得則死。不レ能ニ兩全一。寧救ニ至親一。不レ救ニ路人一。心又忍得。這是道理合該如レ此。及レ至ニ吾身與ニ至親一。更不レ得レ分ニ別彼此厚薄一。蓋以仁レ民愛レ物。皆從レ此出。此處可レ忍。更無レ所レ不レ忍矣。大學所レ謂厚薄是良知上自然的條理。不レ可ニ踰越一。此便謂ニ之義一。順ニ這箇條理一。便謂ニ之禮一。知ニ此條理一。便謂ニ之智一。終ニ始是這條理一。便謂ニ之信一。

をば、便ち之を禮と謂ひ、此の條理を知るをば、便ち之を智と謂ひ、是れ這の條理を終始するをば、便ち之を信と謂ふ。』

(一)天地萬物われと同體也 (二)大學の「其所レ厚者薄、而其所レ薄者厚、未ニ之有一也」を指す (三)手足を以て頭目を守りふせぐ (四)手足を厚くせんとするに非ず、これ理の當然なる也 (五)忍びて之を爲し得 (六)調理し (七)孟子告子上の「一簞食一豆羹、得レ之則生、不レ得則死」を取る (八)共に全うしがたき時は (九)合當といふに同じ (一〇)此親身不分別の所が忍べれば、どの樣なる事にても忍ぶべし

又曰。目無レ體。以ニ萬物之色一爲レ體。耳無レ體。以ニ萬物之聲一爲レ體。鼻無レ體。以ニ萬物之臭一爲レ體。口無レ體。以ニ萬物之味一爲レ體。心無レ體。以ニ天地萬物感應之是非一爲レ體。

又曰く、『(一)目に體無し、萬物の色を以て體と爲す。耳に體無し、萬物の聲を以て體と爲す。鼻に體無し、萬物の臭を以て體と爲す。口に體無し、萬物の味を以て體と爲す。心に體無し、天地萬物感應の是非を以て體と爲す。』

(一)前出、鏡に形なし、物の來るがまゝに其形を映出して偏らずといふ例などによりて考へば此說明かならん

問。大人與レ物同レ體。如何大學又說二箇厚薄一。先生曰。惟是道理自有二厚薄一。比如下身是一體上。把二手足一捍中頭目上。豈是偏要レ薄二手足一。其道理合レ如レ此。禽獸與二草木一同是愛的。把二草木一去レ養二禽獸一。又忍得。人與二禽獸一同是愛的。宰二禽獸一以養レ親。與下供二祭祀一燕中賓客上。心又忍得。至親與二路

問ふ、『大人は物と體を同じうすと。如何ぞ大學には又箇の厚薄を說くや。』先生く、『惟だ是れ道理に自ら厚薄有るなり。比へば身は是れ一體にして、手足を把つて頭目を捍ぐが如し。豈に是れ偏へに手足を薄くするを要せんや、其道理合に此の如くなるべし。禽獸と草木とは同じく是れ愛すべきものなれども、草木を把りて禽獸を養ふに又忍び得。人と禽獸とは同じく是れ愛すべきものなれども、禽獸を宰して以て親を養ふと、祭祀に供して賓客を燕すると、心又忍び得。至親と路人とは同じく是れ愛すべきものなれども、簞食豆羹の如き、得れば則ち生き、得ざれば則ち死す、兩全なること能はざれば、寧ろ至親を救ひて路人を救はざるも、心又忍び得。這れ是の道理合該に此の如し。吾が身と至親とに至るに及びては、更に彼此厚薄を分別するを得ず。蓋し以て民を仁し物を愛するは、皆此より出づ。此處を忍ぶ可くんば、更に忍びざる所無し。大學に所謂厚薄は、是れ良知上自然の條理にして、踰越す可からず、此れ便ち之を義と謂ひ、這箇の條理に順ふ

爲レ然。天地無ニ人的良知一。亦不レ可レ爲ニ天地一矣。蓋天地萬物與レ人原是一體。其發竅之最精處。是人心一點靈明。風雨露雷。日月星辰。禽獸草木。山川土石。與レ人原只一體。故五穀禽獸之類。皆可ニ以養一レ人。藥石之類。皆可ニ以療一レ疾。只爲レ同ニ此一氣一故能相通耳。

(一) 人には虚靈不昧の本體卽ち心あれば方に良知あるべきも、草木瓦石の如きは心なき故良知なかるべしと思ひて問ふ也　(二) 萬物一理一體一氣の思想によりて考ふれば此說明かならん　(三) 一元の氣の發見の最も精しき處

先生遊ニ南鎭一。一友指ニ巖中華樹一問曰。天下無ニ心外之物一。如ニ此華樹一。在ニ深山中一。自開自落。於ニ我心一亦何相關。先生曰。爾未レ看ニ此華一時。此華與ニ汝心一同歸ニ於寂一。爾來看ニ此華一時。則此華顏色一時明白起來。便知ニ此華不一レ在ニ爾的心外一。

先生南鎭に遊ぶ。一友巖中の華樹を指して、問うて曰く、『(一)天下に心外の物無しと。此華樹の如きは、深山中に在りて、自ら開き自ら落つ。(二)我が心に於て亦何ぞ相關せんや。』先生曰く、『爾未だ此華を看ざる時、(三)此華汝の心と同じく寂に歸せるも、(四)爾來りて此華を看る時、則ち此華の顏色一時に明白に起り來る。便ち此の華の爾が心外に在らざるを知る。』

(一) 唯心也、心外に理も無く物もなし　(二) 我心と何等關係する所なし　(三) 此花も汝の心も共に空寂にて何の意なし　(四) 汝來りて此花を看て美しと思へば、此花一時に美しく見え來る

物感上看。便有箇物在外。却做兩邊看了。便會差。無善無不善。性原是如此。悟得及時。只此一句便盡了。更無有內外之間。告子見一箇性在內。見一箇物在外。便見他於性有未透徹處。

㊀善無く悪無きものといふ事に執し定めて看たり　㊁善無く不善なき性は内に在り、物は外に在るとして、内外の二つにして看る、これが告子の性に於て不徹底たるを免れざる所也

朱本思問。人有虛靈。方有良知。若草木瓦石之類。亦有良知否。先生曰。人的良知。就是草木瓦石的良知。若草木瓦石無人的良知。不可以爲草木瓦石矣。豈惟草木瓦石

朱本思問ふ、『人に虛靈㊀有れば、方に良知有り。草木瓦石の類の若きも、亦良知有りや否や。』先生曰く、『人の良知は、就ち是れ草木瓦石の良知なり。若し草木瓦石に人の良知無くんば、以て草木瓦石たる可からず。豈に惟だ草木瓦石のみ然りと爲さんや。天地も人の良知無ければ、亦天地たる可からず。蓋し天地萬物は人と原是れ一體にして、其發竅㊁の最も精しき處は、是れ人心一點の靈明㊂なり。風雨、露雷、日月、星辰、禽獸、草木、山川、土石は、人と原只だ一體なり。故に五穀禽獸の類は、皆以て人を養ふ可し。藥石の類は、皆以て疾を療す可し。只だ此一氣を同じうするが爲の故に能く相通ずるのみ。

動與二不動一。只是集レ義。所レ行無レ不二是義一。此心自然無二可レ動處一。若三告子只要二此心不動一。便是把二捉此心一。將二他生生不レ息之根一反阻撓了。此非三徒無二益。而又害一レ之。孟子集レ義工夫。自是發得充滿並無二欠歉一。自是縱橫自在。活潑潑地。此便是浩然之氣。

(一) 告子は心を動かさじとする上に在つて工夫し、孟子は直ちに此心のもと〳〵動かざるものなりといふ處によりてさとり來る　(二) 孟子公孫丑上の「其爲レ氣也、配二義與一レ道、無レ是餒也、是集義所レ生者、非二義襲而取一レ之也」の一句にもとづく　(三) 告子が此心の動かぬやうに動かぬやうにとのみ求むるは、やがて此心をとらへ、生々息まざる根卽ち良知をはゞみたわます譯也　(四) うゑとぼしき事なし　(五) 孟子公孫丑上に見ゆ

又曰。告子病源。從下性無レ善無二不善一上上見來。性無レ善無二不善一。雖二如此說一。亦無二大差一。但告子執定看了。便有下箇無レ善無二不善一的性在上レ內。有レ善有レ惡。又在二

又曰く、『告子の病源は、性に善無く不善無き上より見來るにあり。性には善無く不善無し。此の如く說くと雖も亦大差無し。但だ告子は執定して看る。(一)便ち箇の善無く不善無きの性は內に在る有りて、善有り惡有るは、又物に感ずる上に在りと看たり。便ち箇の物外に在る有りて、却つて兩邊と做し看る。便ち差ふことを會す。善無く不善無し。性原是れ此の如し。悟得し及ぶ時は、只だ此一句にして便ち盡き、更に內外の間有る無し。告子は一箇の性を(二)內に在りと見、一箇の物を外に在りと見たり。便ち他は性に於て未だ透徹せざる處に有るを見る。』

或問異端。先生曰。與愚夫愚婦同的。是謂同德。與愚夫愚婦異的。是謂異端。

先生曰。孟子不動心。與告子不動心。所異只在毫釐間。告子只在不動心上著功。孟子便直從此心原不動處分曉。心之本體。原是不動的。只爲所行有不合義便動了。孟子不論心之

或ひと異端を問ふ。先生曰く、『(一)愚夫・愚婦と同じきもの、是を同德と謂ひ、愚夫・愚婦と異なるもの、是を異端と謂ふ。』

(一) 道は凡人に通じてかはり無し、殊更に異を立て、愚夫愚婦と異なる條を立つるものこれ異端也

先生曰く、『孟子の不動心と、告子の不動心と異なる所は只だ毫釐の間に在り。(二)告子は只だ不動心上に在りて功を著け、孟子は便ち直に此心の原不動なる處より分曉す。心の本體は、原是れ不動的にして、只だ行ふ所の義に合はざる有るが爲に便ち動くのみ。孟子は心の動と不動とを論ぜず、只だ是れ義を集む。行ふ所是れ義ならざる無ければ、此心に自然に動く可き處無し。(三)告子が只だ此心の不動を要するが若きは、便ち是れ此心を把捉して、他の生生息まざるの根を將つて反つて阻撓す。此れ徒らに益無きのみに非ず、而も又之を害す。孟子の義を集むるの工夫は、自ら是れ養ひ得て充滿し、(四)並びに餒歉無ければ自ら是れ縱橫自在、活潑潑地なり。(五)此れ便ち是れ浩然の氣なり。』

只是還二他良知的本色一。更不下著二些子意一在上。良知之虛。便是天之太虛。良知之無。便是太虛之無形。日月風雷山川民物。凡有二貌象形色一。皆在二太虛無形中一。發用流行。未三嘗作二得天的障礙一。聖人只是順二其良知之發用一。天地萬物俱在二我良知的發用流行中一。何嘗又有下一物超二於良知之外一。能作中得障礙上。

…て生死の苦を出離せんとす　㈢　共に少しの私意私念を加へたり　㈣　眞の虛無に非ず

或問。釋氏亦務養レ心。然要レ之不レ可三以治二天下一何也。先生曰。吾儒養レ心。未三嘗離二却事物一。只順二其天則自然一。就是功夫。釋氏却要三盡絕二事物一。把レ心看二做幻相一。漸入二虛寂一去了。與二世間一若レ無二些子交涉一。所二以不レ可レ治二天下一。

或ひと問ふ、『釋氏も亦務めて心を養へり。然れども之を要するに以て天下を治む可からざるは何ぞや。』先生曰く、『吾が儒は心を養ふも、未だ嘗て事物を離却せず、只だ其天則の自然に順ふ。就ち是れ功夫なり。釋氏は却つて盡く事物を絕たんとし、心を把りて幻相と看做し、漸く虛寂に入りて、世間と些子も交涉無きが若し。天下を治む可からざる所以なり。』

㈠　心はまぼろしのすがたにて眞に非ずとす

時。常如二夜氣一般一就是通二乎晝夜之道一而知。

先生曰。仙家說二到虛一。聖人豈能虛上加二得一毫實一。佛氏說二到無一。聖人豈能無上加二得一毫有一。但僊家說レ虛。從二養生上一來。佛氏說レ無。從下出二離生死苦海一上上來。却於二本體上一加二却這些子意思一在。便不二是他虛無的本色一了。便於二本體一有二障礙一。聖人

先生曰く、『仙家(一)は虛に說き到る。聖人豈に能く虛上(二)に一毫の實を加へ得んや。佛氏(三)は無に說き到る。聖人豈に能く無上に一毫の有を加へ得んや。但だ僊家の虛を說くは、養生の上より來り、佛氏の無を說くは、生死の苦海を出離する上より來る。却つて本體上に於て、却つて這の些子(四)の意思を加へたり。便ち是れ他の虛無(五)の本色にあらず、便ち本體に於て障礙有り。聖人は只だ是れ他の良知の本色に還して、更に些子の意を著けず。良知の虛は、便ち是れ天の太虛、良知の無は、便ち是れ太虛の無形なるなり。月日・風雷・山川・民物、凡そ貌象形色有るものは、皆太虛無形の中に在りて、發用流行し、未だ嘗て天の障礙を作し得ず。聖人は只だ是れ其良知の發用に順ひ、天地萬物は俱に我が良知の發用流行の中に在り。何ぞ嘗て又一物だも良知の外に超えて、能く障礙を作し得るもの有らんや。』

(一) 道家は虛無恬淡を說きて自然に歸らんとす　(二) 虛なる上には一點の實をも加へ得ず　(三) 佛家は無常を說き

昏閉。衆竅俱翕。此即良知收斂凝一時。天地既開。庶物露生。人亦耳目有所睹聞。衆竅俱闢。此即良知妙用發生時。可見人心與天地一體。故上下與天地同流。今人不會宴息。夜來不是昏睡。即是妄思魘寐。曰。睡時功夫如何用。先生曰。知晝即知夜矣。日間良知是順應無滯的。夜間良知即是收斂凝一的。有夢即先兆。

無きもの、夜間の良知は即ち是れ收斂凝一なるものなり。夢有る(九)は即ち先兆なり。』

㊀ 易上係辭の文。晝夜陰陽變化の道に通徹してよく其理を知る意 ㊁ 一叫を聞いて直ちに應ずるは良知の知るが故也 ㊂ 易隨大象に「君子以嚮晦入宴息」と。夜に入れば宴息す、これ即ち天然自然の理にして即ち良知也 ㊃ 夜になれば天地混沌として凡ての形見えずなる ㊄ 身體中の凡ての穴みな閉づ ㊅ 晝になれば ㊆ 孟子盡心上に見えたる語。聖人の德至大にて、上は天に達し、下は地に徹し、其化育、天地と類を同じうすと也 ㊇ さまざまなる雜念妄慮に苦しみ又夢におそはれうなさる ㊈ 夢有ればそは將來の事の兆也との意

又曰。良知在夜氣發的。方是本體。以其無物欲之雜也。學者要使事物紛擾之

又曰く、『良知は夜氣(一)の發するに在りては、方に是れ本體なり。其物欲の雜無きを以てなり。學者は事物紛擾(二)の時をして、常に夜氣のときの如きと一般ならしむるを要す。就ち是れ晝夜の道に通じて知るなり。』

㊀ 夜氣、孟子告子上牛山の章に出づ ㊁ 事物のまぎらはしくごたごたとしたる時

恐懼。不レ曾在二不レ睹不レ聞上一加中得些子上。見得眞時。便謂二戒愼恐懼是本體。不レ睹不レ聞是功夫一。亦得。

問下通二乎晝夜之道一而知上。先生曰。良知原是知レ晝知レ夜的。又問。人睡熟時。良知亦不レ知了。曰。不レ知何以一叫便應。曰。良知常知如何有二睡熟時一。曰。向レ晦宴息。此亦造化常理。夜來天地混沌。形色俱泯。人亦耳目無レ所二

(二)晝夜の道に通じて知るを問ふ。先生曰く、『良知は原是れ晝を知り夜を知るものなり。』又問ふ、『人睡熟する時は、良知も亦知らざらん。』曰く、『知らずんば何を以てか一たび叫びて便ち應ぜんや。』曰く、『良知常に知らば如何ぞ(三)睡熟する時有らん。』曰く、『晦に向ひて宴息するは、此れ亦造化の常理なり。(四)夜來は天地混沌として形色俱に泯ぶ。人も亦耳目に睹聞する所無く、(五)衆竅俱に翕づ。此れ卽ち良知の收斂凝一せる時なり。(六)天地既に開けて庶物露生すれば、人も亦耳目に睹聞する所有りて、衆竅俱に闢く。此れ卽ち良知の妙用發生する時なり。見る可し人心は天地と一體なることを。故に(七)上下天地と流を同じうすと。今人宴息を會せず、夜來是れ昏睡せざれば、卽ち是れ(八)妄思魘寐す。』曰く、『睡時の功夫は如何に用ひん。』先生曰く、『晝を知れば卽ち夜を知る。日間の良知は是れ順應滯

是性。率レ性之謂レ道。性即是道。修レ道之謂レ教。道即是教。問。如何道即是教。曰。道即是良知。良知原是完完全全。是的還二他是一。非的還二他非一。是非只依二著他一。更無レ有二不是處一。這良知還是爾的明師。

『如何ぞ道は即ち是れ教なる。』曰く、『道は即ち是れ良知なり。良知は原是れ完完全全なり。是(一)なるものは他の是に還し、非なるものは他の非に還し、是非只だ他に依著して、更に不是なる處有る無し。這の良知は、還つて是れ爾の明師なり。』

㊀ 是なることは良知の是とするまゝに是とし、非なることは良知の非とするまゝに非とす

問。不レ睹不レ聞是說二本體一。戒愼恐懼是說二功夫一否。先生曰。此處須二信得一。本體原是不レ睹不レ聞的。亦原是戒愼恐懼的。戒愼

問ふ、『睹(一)ず聞かずとは是れ本體を說き、戒愼・恐懼は是れ功夫を說くや否や。』先生曰く、『此の處須らく信じ得べし。本體は原是れ睹ず聞かざるものなれども、亦原是れ戒愼恐懼的なり。戒愼恐懼は、曾て睹ず聞かざる上に在りて些子をも加へ得ず。見得て眞なる時は、便ち戒愼恐懼は是れ本體にして、睹ず聞かざるは是れ功夫なりと謂ふも亦得たり。』

㊀ 中庸の不睹不聞は寂然不動の本體を說き、戒愼恐懼は其本體を失はざる爲めの工夫を說けるかと也

良知未ㇾ眞。尚有二内外之間一。我這裏功夫。不ㇾ由二人急心一。認二得良知頭腦一是當。去二朴實用ㇾ功。自會二透徹一。到ㇾ此便是内外兩忘。又何心事不ㇾ合一一。

(一) 此の知の斷絶する無からんを欲すも (二) 一寸間斷する處があれば其爲めに良知の方に氣づかず、事の方にいろいろと周旋して居る時は良知が見えずと也 (三) 速成的ならんとする心 (四) 着實に (五) 徹底する事に合點が行く (六) 程明道の定性書中の語、何の心もなくて而も良知は儼然として在りとの意 (七) 心と事とが合一せざる事なし、即ち全く内外心事の別なきに至ると也

又曰。功夫不ㇾ是透二得這箇眞機一。如何得二他充實光輝一。若能透得時。不下由二儞聰明知解一接得來上。須二胸中渣滓渾化。不ㇾ使ㇾ有二毫髮沾帶一始得。

先生曰。天命之謂ㇾ性。命卽

又曰く、『(一)功夫は是れ這箇の眞機に透り得ざれば、如何ぞ他の充實光輝あるを得ん。若し能く透り得る時は、儞の聰明知解に由つて接し得來るにあらず。須らく(二)胸中の渣滓を渾化し、(三)毫髮も沾帶有らしめざるべければ始めて得ん。』

(一) 孟子盡心上に「充實之謂ㇾ美、充實而有二光輝一之謂ㇾ大」とあるに取る (二) 胸中の垢をすつかりときれいにし (三) 沾は添也。良知の上に少しの添はるものも無きやうにせよの意

先生曰く、『天の命之を性と謂ふ。命は卽ち是れ性なり。性に率ふ之を道と謂ふ。性は卽ち是れ道なり。道を修むる之を敎と謂ふ。道は卽ち是れ敎なり。』問ふ、

解妙覺一。動二入聽聞一。故邇來只說レ致二良知一。良知明白隨三儞去二靜處體悟一也好。隨三儞去二事上磨錬一也好。良知本體原是無レ動無レ靜的。此便是學問頭腦。我這箇話頭。自二滁州一到レ今。亦較過二幾番一。只是致良知三字無レ病。醫經レ折レ肱。方能察二人病理一。

字には病無し。醫は肱を折ることを經て、方に能く人の病理を察す。』(五)

(一)見解の生ずるあり　(二)知識を以て解し口說上の辯論を旨とし　(三)一寸はなるほど道はかゝるものかと其ありさまを窺ひ得て手近き效を收むる事多かりしが　(四)、遠玄妙の說を爲して人の耳目を驚かす　(五)左傳に「三折レ肱知レ爲二良醫一」とあり、孔叢子には「三折レ臂爲二良醫一」と見ゆ、これ等によりて幾多の苦き經驗の後よく其眞理を得たるに喩ふ

一友問。功夫欲レ得二此知時時接續一。一切應感處。反覺二照管不レ及。若去二事上周旋一。又覺レ不レ見了。如何則可。先生曰。此只認二

一友問ふ、『功夫(一)此の知の時時に接續するを得んと欲するに、一切(二)の應感する處、反つて照管し及ばざるを覺え、若し事上に周旋し去れば、又見えざるを覺ゆ。如何にせば則ち可ならん。』先生曰く、『此は只だ良知を認むるに未だ眞ならず、尚ほ內外の間有り。我が這裏の功夫は、人の急心に由らず。(三)良知の頭腦を認め得て是當し、(四)朴實に功を用ひ去れば、自ら透徹するを會す。(五)此に到つて便ち是れ(六)內外兩つながら忘る。(七)又何ぞ心事の合一ならざるあらん。』

生天生地成鬼成帝。皆從此出。眞是與物無對。人若復得他。完完全全無少虧欠。自不覺手舞足蹈。不知天地間更有何樂可代。

て、完完全全、少しの虧欠だにある無くんば、自ら手の舞ひ足の蹈むを覺えざらん。知らず天地の間更に何の樂か代る可きもの有らん。」

(一)良知は天地根元の一元氣たましひ也　(二)絶對なり

一友靜坐有見。馳問先生。答曰。吾昔居滁時。見諸生多務知解口耳異同。無益於得。姑教之靜坐。一時窺見光景。頗收近效。久之漸有喜靜厭動。流入枯槁之病。或務爲玄

一友靜坐して見るところ有り。(一)馳せて先生に問ふ。答へて曰く、「吾れ昔滁に居りし時、諸生、多く知解口耳の異同を務め、得るに益無きを見て、姑く之に靜坐を教ふ。(二)一時光景を窺ひ見て、頗る近效を收む。之を久しうして漸く靜を喜び動を厭ひ、流れて枯槁に入るの病有り。或は務めて玄解妙覺を爲して、人の聽聞を動かす。故に邇來只だ良知を致すを説く。良知は明白にして、個が靜處に體悟するに隨ふも也好く、個が事上に磨錬するに隨ふも也好し。良知の本體は原是れ動無く靜無きものにして、此は便ち是れ學問の頭腦なり。我が這箇の話頭は、滁州より今に到るまで、亦較ね幾番を過ぐるも、只だ是れ致良知の三

先生。顧而言曰。汝猶學問不ㇾ得二長進一。只是未ㇾ立ㇾ志。侯璧起而對曰。珙亦願ㇾ立ㇾ志。先生曰。難ㇾ說ㇾ不ㇾ立。未下是必爲二聖人一之志上耳。對曰。願ㇾ立下必爲二聖人一之志上。先生曰。儞眞有二聖人之志一。良知上更無ㇾ不ㇾ盡。良知上留二得些子別念一掛帶。便非下必爲二聖人一之志上矣。洪初聞時心若ㇾ未ㇾ服。聽ㇾ說二到此一。不ㇾ覺悚汗。

曰く、『珙(二)も亦志を立てんことを願ふ。』先生曰く、『立てずとは說き難きも、未だ是れ必ず聖人と爲るの志ならざるのみ。』對へて曰く、『願はくは必ず聖人と爲るの志を立てん。』先生曰く、『儞眞に聖人の志有らば、(三)良知上更に盡さゞるなからん。良知上に些子(四)だに別念を留め得て掛帶せば、便ち必ず聖人と爲るの志に非ず。』洪(五)初め聞ける時心未だ服せざりしが若くなりしも、此に說き到るを聽き、覺えず悚汗(六)せり。

(一) 見廻しての意 (二) 李侯璧が自ら名いふ也 (三) 良知の上に於て少しにても盡さゞる所なからん (四) はんの少しなりとも別の念を留めて良知の上に添へ掛くる時は (五) 德洪の胸中に思へる所を附記す (六) おそれ慙づ

先生曰。良知是造化的精靈。這些精靈。

先生曰く、『良知(一)は是れ造化の精靈にして、這の些かの精靈、天を生じ地を生じ鬼を成し帝を成す。皆此れより出づ。眞に是れ物(二)と對無し。人若し他を復し得

靜一曰、元靜少年、亦要レ解二五經一。志亦好レ博。但聖人教レ人、只怕三人不二簡易一。他說的皆是簡易之規。以二今人好レ博之心一觀レ之、却似三聖人教レ人差了一。

好めり。但だ聖人の人を教ふるや、只だ人の簡易ならざるを怕る。他の說くものは皆是れ簡易の規にして、今人の博を好むの心を以て之を觀れば、却つて聖人の人を教ふる差へるに似たり。』

(一) 博く學に通ずること　(二) 孔子が「吾道一以貫レ之」といへるが如く、凡て簡易を旨とす、此事上卷に「愛文中子を問ふ」の條に詳也

先生曰。孔子無二不レ知而作一。顏子有二不善一。未三嘗不二レ知。此是聖學眞血脈路。

先生曰く、『孔子は知らずして作すこと無し。顏子は不善あれば、未だ嘗て知らずんばあらず。此は是れ聖學の眞血脈路なり。』

(一) 論語述而篇に「子曰蓋有二不レ知而作レ之者一我無レ是也」と見え、顏子の事は易繫辭に出づ　(二) 眞髓の意

何廷仁。黃正之。李侯璧。汝中。德洪。侍レ坐。

何廷仁・黃正之・李侯璧・汝中・德洪、先生に侍坐す。顧みて言ひて曰く、『汝輩の學問は長進するを得ず。只だ是れ未だ志を立てざればなり。』侯璧起ちて對へて

中曰。觀下仲尼與二曾點一言レ志一章上略見。先生曰。然。以二此章一觀レ之。聖人何等寛洪包含氣象。且爲レ師者。問二志於羣弟子一。三子皆整頓以對。至二於曾點一。飄飄然不レ看二那三子在レ眼。自去鼓二起瑟一來。何等狂態。及レ至レ言レ志。又不レ對二師之問曰一。都是狂言。設在二伊川一。或斥罵起來了。聖人乃復稱二許他一。何等氣象。聖人教レ人。不下是箇束二縛他一。通做中一般上。只如二狂者一。便從二狂處一成二就他一。狷者便從二狷處一成二就他一。人之才氣如何同得。

目に對へず。都て是れ狂言なり。(九)設し伊川に在らば、或は斥罵し起ち來らんも、聖人は乃ち復他を稱許せり。何等の氣象ぞ。聖人の人を教ふるは、是れ箇の他を束縛して、通じて一般と做すこと(一〇)をせず。只だ狂者の如きは、便ち狂處(一一)に從ひて他を成就し、狷者(一二)は便ち狷處に從ひて他を成就す。人の才氣如何ぞ同じかり得ん。』

(一) 暑中の事と見ゆ、師に對する禮として扇を使はずに只持ちて居りし也 (二) 謙退の辭 (三) 窮屈に束縛して苦しませる (四) 道學先生をよそはひ氣取るものではなし (五) 論語先進篇の最末の章 (六) ゆるやかに大きくして凡てのものを包容する氣象 (七) とんと無頓著にて三人のそこに居るを覺えず (八) 孔子の問ふ條目について對へず (九) 程伊川は嚴格なる人なれば也 (一〇) 皆一樣にせんとはせず (一一) その狂氣じみたる處について其人物を仕上ぐ (一二) 狷介の者

先生語二陸元

先生陸元靜に語つて曰く、『元靜少年にして亦五經を解かんと要す。志も亦(一)博を

劉君亮要下在二山中一靜坐上。先生曰。汝若以下厭二外物一之心上去レ求二之靜一。是反養二成一箇驕惰之氣一了。汝若不レ厭二外物一。復於二靜處一涵養却好。

王汝中。省曾。侍二坐先生一。握レ扇。命曰。爾們用レ扇。省曾起對曰。不レ敢。先生曰。聖人之學。不二是這等綑縛苦楚的一。不三是粧二做道學的模樣一。汝

(一)劉君亮山中に在りて靜坐せんと要す。先生曰く、『(二)汝若し外物を厭ふの心を以て、之を靜に求めんとせば、是れ反つて一箇驕惰の氣を養成せん。汝若し外物を厭はずんば、復靜處に於て涵養するも却つて好し。』

(一) 右は邦采、師泉と號す　(二) 世人を捨つるは驕、俗事を厭ふは惰、外物を厭ひて靜を求めんとすれば此弊あり

王汝中・省曾、先生に侍坐して扇を握る。命じて曰く、『爾們扇を用ひよ。』省曾起ちて對へて曰く、『敢てせず。』先生曰く、『聖人の學は是れ這等綑縛苦楚のものならず。是れ道學的模樣を粧ひ做さず。』汝中曰く、『仲尼が曾點の志を言ふに與する一章を觀て略〻見る。』先生曰く、『然り。此章を以て之を觀るに、聖人は何等寛洪包含の氣象ぞ。且つ師たる者にして、志を群弟子に問ふに、三子は皆整頓して以て對ふ。曾點に至りては、飄飄然として那の三子の眼に在るを看ず。自ら去つて瑟を鼓起し來る。何等の狂態ぞ。志を言ふに至るに及びては、又師の問

問。叔孫武叔毀二仲尼一。大聖人如何猶不レ免二於毀謗一。先生曰。毀謗自レ外來的。雖二聖人一如何免得。人只貴二於自修一。若自己實實落落是箇聖賢。縱然人都毀レ他。也說レ他不レ著。却若二浮雲揜レ日。如何損二得日的光明一。若自己是箇象恭色莊不堅不介的。縱然沒二一箇人說レ他。他的惡慝終須二一日發露一。所丁以孟子說丙有二求レ全之毀一。有乙不レ虞之譽甲。毀譽在レ外的。安能避得。只要二自修何如一爾。

問ふ、『(一)叔孫・武叔、仲尼を毀ると。大聖人にして如何ぞ猶は毀謗を免れざる。』

先生曰く、『毀謗は外より來るもの、聖人と雖も如何ぞ免れ得ん。人は只だ自修を貴ぶ。若し自己にして(二)實實落落に是れ箇の聖賢ならんには、縱然人都て他を毀るとも、(三)也他を說き著けず。却つて浮雲の日を揜ふが如し。如何ぞ日の光明を損し得ん。若し自己にして是れ箇の(四)象恭・色莊・不堅・不介ならんには、縱然一箇の人の他を說く沒きも、他の惡慝は終に一日に發露すべし。(五)孟子が全きを求むるの毀有り、虞らざるの譽有りと說きし所以なり。毀譽は外に在るものなれば、安ぞ能く避け得ん。只だ自修何如を要するのみ。』

(一) この事論語子張篇に見ゆ　(二) 眞實實際に　(三) 彼を毀り盡す事は出來ず　(四) 象恭は容貌恭しくして心卑しきもの、書の堯典に見えたる語。色莊は顏色を立派にして樣子を氣取るもの、論語先進篇に見えたる語。不堅不介は共に貞心の堅固ならぬ意也　(五) 孟子離婁上に出づ

問二志士仁人章一。先生曰。只爲下世上人都把二生身命子一。看得來太重上。不レ問二當レ死不一レ當レ死。定要二宛轉委曲保全一。以レ此把二天理一却去レ丟了。忍レ心害レ理何者不レ爲。若違二了天理一。便與二禽獸一無レ異。便偸レ生在二世上一百千年。也不レ過レ做二了千百年的禽獸一。學者要下於二此等處一看得明白上。比干龍逢。只爲二他看得分明一。所以能成二就得他的仁一。

(一)志士仁人の章を問ふ。先生曰く、「只だ世上の人都べて生身命子(二)を把つて看得來りて太だ重きが爲に、當に死すべきか當に死すべからざるかを問はず。(三)定めて宛轉委曲して保全せんと要す。(四)此を以て天理を把つて却つて丟き去る。心を忍び理を害ふこと何者か爲さゞらん。若し天理に違はゞ、便ち禽獸と異なる無し。便ち生を偸んで世上に在ること百千年なるも、也千百年の禽獸たるに過ぎず。學者は此等の處に於て看得て明白なるを要す。(五)比干・龍逢も、只だ他の看得て分明なりしが爲、所以に能く他の仁を成就し得たり。」

(一) 論語の、子曰く、志士仁人は生を求めて以て仁を害ふこと無く、身を殺して以て仁を成すこと有り」とある章を指す　(二) 身體生命　(三) 定めてとは何時もきまりきつて左樣なりとの意、宛轉はまはること、委曲はまがりまがりてつぶさに行き至ることにて、此方にまはり彼方にまはりあらゆる方法を盡して身體生命を全うせんとするが常なりとの意　(四) この爲めに天理を除却し去り心を忍ばせ理をそこなふ事をば悉く之を爲して顧みざるに至ると也　(五) 比干は殷の紂王の臣、龍逢は夏の桀王の臣、共に其君を諫めて死す

曉得一。如何要二記得一。要二曉得一。已是落二第二義一了。只要レ明二得自家本體一。若徒要二記得一。便不二曉得一。若徒要二曉得一。便明二不レ得三自家的本體一。

の本體を明かにし得るを要す。若し徒らに記し得るを要せば、便ち曉り得ず。若し徒らに曉り得るを要せば、便ち自家の本體を明かにし得ず。』

㊀ 書を讀みても記憶し得ず ㊁ 其道理を理解し得んとするすら既に第一義を失ひて第二義に落つ

問。逝者如レ斯。是說二自家心性活潑潑地一否。先生曰然。須レ要三時時用二致良知的功夫一。方才活潑潑地。方才與二他川水一一般。若須臾間斷。便與二天地一不二相似一。此是學問極至處。聖人也只如レ此。

問ふ、『逝く者は斯の如しと。(一)是は自家心性の活潑潑地なるを說けるものなりや否や。』先生曰く、『然り、須らく時時致良知の功夫を用ひんことを要すべし、(二)方に才かに活潑潑地、方に才かに他の川水と一般なり。若し須臾も間斷あらば、(三)便ち天地と相似ず。此は是れ學問極至の處にして、聖人も也只だ此の如し。』

㊀ 論語子罕篇「子在二川上一曰、逝者如レ斯夫、不レ舍二晝夜一」 ㊁ 人々の心性のいき〳〵として活きて止む事なきを說けるにや ㊂ 一寸の間にても絶え間あらば

問。中人以下不レ可二以語一レ上。愚的人與レ之語レ上。尚且不レ進。況不二與レ之語一可乎。先生曰。不三是聖人終不二與語一。聖人的心。憂レ不レ得三人人都做二聖人一。只是人的資質不レ同。施レ教不レ可レ躐レ等。中人以下的人。便與レ他說レ性說レ命。他也不二省得一也。須下謾謾琢二磨他一起來上。

問ふ、『(一)中人以下には以て上を語る可からずと。(二)愚なる人は之と上を語るすら、尚ほ且つ進まず。況や之と語らずして可ならんや。』先生曰く、『是れ聖人の終に与に語らざるならず。聖人の心は、人人の都べて聖人と做り得ざるを憂ふ。只だ是れ人の資質は同じからず。教を施すも等を躐ゆ可からず。中人以下の人は、便ち他のために性を説き命を説くも、他也省み得ざるなり。須らく(三)謾謾として他を琢磨して起し来るべし。』

(一) 論語雍也篇に、「中人以上、可二以語一レ上也、中人以下、不レ可二以語一レ上也」 (二) 愚かな者には高尚の事を語りきかせてすら進まず、まして語らずしては何とて可ならん (三) ゆる〳〵と也、蓋し漫々の通用ならん。闕外書には漫本「慢」に作るといへり

一友問。讀レ書不レ記得一如何。先生曰。只要二

一友問ふ、『(一)書を読みて記し得ざるは如何。』先生曰く、『只だ暁り得るを要す。如何ぞ記し得るを要せん。(二)暁り得るを要するすら已に是れ第二義に落つ。只だ自家

特三百篇。六經只此一言。便可ニ該貫一。以至レ窮ニ古今天下聖賢的話一。思無レ邪一言。也可ニ該貫一。此外更有ニ何説一。此是一了百當的功夫。

く、以て古今天下聖賢の話を窮むるに至りても、思邪無しの一言もて、也該貫す可し。此外更に何の説か有らん。(三)此は是れ一にして百に當るの功夫なり。』

(一)論語爲政篇に「詩三百、一言以蔽レ之、曰思無レ邪」 (二)かねつらぬく (三)一つ出來れば皆當りかなふの功夫也

問ニ道心人心一。先生曰。率レ性之謂レ道。便是道心。但著ニ些人的意思一在。便是人心。道心本是無レ聲無レ臭。故曰レ微。依ニ著人心一行去。便有下許多不ニ安穩一處上。故曰ニ惟危一。

(一)道心・人心を問ふ。先生曰く、『(二)性に率ふ之を道と謂ふ。(三)便ち是れ道心なり。但だ些かの人的意思を著くれば、便ち是れ人心なり。道心は本是れ聲もなく臭もなし。故に微と曰ふ。人心に依著して行ひ去れば、便ち許多の安穩ならざる處あり。故に惟れ危しと曰ふ。』

(一)書經大禹謨「人心惟危、道心惟微」 (二)中庸の語 (三)性のまゝにするが道、其心すなはち道心也、少しにても人爲の私が著けばやがて人心也

得良知是箇頭腦。方無執著。且如受人餽送也。有今日當受的。他日不當受的。也。有今日不當受的。他日當受的。儞若執著了今日當受的。便一切受去。執著了今日不當受的。便一切不受去。便是適莫。便不是良知的本體。如何喚得做義。（已下門人黃省曾錄）

を受け、今日當に受くべからざるものに執著して、便ち一切を受けずんば、便ち是れ適莫にして、便ち是れ良知の本體にあらず。如何ぞ喚びて義と做すを得んや。』已下門人黃省曾錄す。

〔一〕これより以下六十八條黃勉之の錄する所也、勉之は名は省曾、五岳と號す、陽明に親に師事せり 〔二〕論語里仁篇に出づ。別にこれ〳〵に從ふといふ定めはなく、只義に從ふとの意 〔三〕孟子公孫丑下に出づ。孟子の弟子陳臻孟子に問うて曰く、「前日齊國に於て王が兼金一百を餽(おく)りしに受けず。宋國に於て七十鎰をおくりしに受く。薛國にて五十鎰を送りしに之を受けたり。之に依りて觀るに、孔子が前日齊國の餽送を受けざりしが正しければ、則ち今日宋其他にて受けしは非なるべし。又今日受けしが是ならば、則ち前日受けざりしは非ならん。孔子は其孰れか一の非にあたれり、如何」と。いふ間を引用せり 〔四〕受ける受けぬを定めて拘りたる意にて

問。思無邪一言。如何便蓋得三百篇之義。先生曰。豈

問ふ、『思邪無しとの一言は、如何にして便ち三百篇の義を蓋ひ得るや。』先生曰く、『豈に特に三百篇のみならんや。六經も只だ此一言もて、便ち該貫す可

主在二占卦上一看了上所以看二得卜筮一似二小藝一。不レ知今之師友問答。博學審問愼思明辨篤行之類。皆是卜筮。卜筮者不レ過レ求下決二狐疑一神中明吾心上而已。易是問二諸天一。人有レ疑。自信不レ及。故以レ易問レ天。謂二人心尚有レ所レ涉。惟天不レ容レ僞耳。

易を以て天に問ふ。人心には尙ほ涉る(四)所有るも、惟だ天は僞るべからざるを謂へるのみ。』

(一) 易に關する朱子の著には、周易本義二十卷、周易啓蒙三卷あり (二) 程伊川の易傳四卷をいふ (三) 師友の間答も又中庸の博學以下の工夫もみな疑を決し是非をたゞす所以にて皆是れ卜筮の類也 (四) 私意に涉ることあり

黃勉之問。無レ適也。無レ莫也。義之與比。事事要レ如レ此否。先生曰。固是事事要レ如レ此。須三是識二得箇頭腦一乃可。義即是良知。曉二

(一)黃勉之問ふ、『(二)適も無く、莫も無く、義と與に比ふと。事事に此の如くなるを要するや否や。』先生曰く、『固より是れ事事に此の如くなるを要す。須らく是れ箇の頭腦を識り得べくして乃ち可なり。義は卽ち是れ良知にして、良知是れ箇の頭腦なるを曉り得ば、方に執著無からん。且つ人の(三)餽送を受くるが如し。今日當に受くべきも、他日當に受くべからざるもの有り、今日當に受くべからざるも、他日當に受くべきもの有り。儞若し今日當に受くべきものに執著して、便ち一切

先生曰。凡朋友問難。縱有二淺近粗疎或露レ才揚ヒ己。皆是病發。當下因二其病一而藥上レ之可也。不レ可三便懷二鄙薄之心一。非二君子與レ人爲レ善之心一矣。

問。易朱子主二卜筮一。程傳主レ理。何如。先生曰。卜筮是理。理亦是卜筮。天下之理。孰有下大二於卜筮一者上乎。只爲下後世將二卜筮一專

先生曰く、『凡そ朋友の問難(一)は、縱ひ淺近粗疎(二)或は才を露し己を揚ぐること有りとも、皆是れ病の發するものなれば、當に其病に因りて之に藥すべくして可なり(三)。便ち鄙薄の心を懷く可ならず(四)。君子の人と與に善を爲すの心に非ざるなり(五)。』

(一) 質問論難　(二) あさはかにあらくして　(三) 其病にもとづきて藥を與へる樣にすればよし　(四) 彼をいやしくうすしとさげすむ心を持つべからず　(五) 孟子公孫丑上に「故君子莫レ大二乎與レ人爲一レ善」と見ゆ。鄙薄の心を抱くは君子の人と與に善を爲す心には非ずと也

問ふ、『易に、朱子(一)は卜筮を主とし、程傳(二)は理を主とす。如何。』先生曰く、『卜筮は是れ理にして、理も亦是れ卜筮なり。天下の理、孰か卜筮より大なる者有らんや。只だ後世卜筮を將つて專ら主として占卦の上に在らしめて看んとす。所以に卜筮を看得ること小藝に似たり。知らず今の師友の問答、博學・審問・愼思・明辨・篤行(三)の類は、皆是れ卜筮なるを。卜筮は狐疑を決して吾が心を神明にせんと求むるに過ぎざるのみ。易は是れ諸を天に問ふなり。人疑有りて自ら(四)信じ及ばず、故に

氣責㆑人。先生譬㆑之曰。學須㆑反㆑己。若徒責㆑人。只見㆓得人不㆑是。不㆑見㆓自己非㆒。若能反㆑己。方見㆔自己有㆓許多未㆑盡處㆒。奚暇㆑責㆑人。舜能化㆓得象的傲㆒。其機括只是不㆑見㆓象的不是㆒。若舜只要㆑正㆓他的姦惡㆒。就見㆓得象的不是㆒矣。象是傲人。必不㆑肯㆓相下㆒。如何感㆓化得他㆒。是友感悔。曰。爾今後只不㆑要㆑去㆑論㆓之人是非㆒。凡當㆘責㆓辯人㆒時㆖。就把㆓做一件大己私㆒。克去方可。

反るべし。若し徒らに人を責めば、只だ人の是ならざるを見得て、自己の非を見ず。若し能く己に反らば、方に自己に許多の未だ盡さゞる處有るを見ん。奚ぞ人を責むるに暇あらん。舜が能く象の傲を化し得しは、其機括(二)只だ是れ象の不是を見ざればなり。若し舜にして只だ他の姦惡を正さんと要するのみなりせば、就ち象の不是を見得しならん。(三)象は是れ傲人なれば、必ず相下ることを肯ぜざるべし。如何ぞ他を感化し得ん。』是の友感悔す。(四)曰く、『爾今後只だ人の是非を論ずるを要せず。凡そ人を責辯せんとする時に當りては、(五)就ち一件の大己私なりと把り做して、克ち去りて方に可なり。』

(一) 自己に反る事が大切也 (二) 主意、肝要の意、俗の呼吸といふ語またこれに當る (三) 書の堯典に「父頑母嚚象傲」の語見ゆ、象は傲慢なる者なれば舜に下るを肯ぜざらんと也 (四) 先生更に曰く (五) 彼と我との差別的意思を立てず、一つの大きなる己私として其責め咎むべき過惡に克ちてそれでよしと也

懷二箇遁ㇾ世無ㇾ悶。不ㇾ見ㇾ是而無ㇾ悶之心一。依二此良知一忍耐做去。不ㇾ管二人非笑一。不ㇾ管二人毀謗一。不ㇾ管二人榮辱一。任二他功夫有ㇾ進有一ㇾ退。我只是這致二良知的主宰一不ㇾ息。久久自然有ㇾ得ㇾ力處一。一切外事。亦自能不ㇾ動。又曰。人若著實用ㇾ功。隨二人毀謗一。隨二人欺慢一。處處得ㇾ益。處處是進ㇾ德之資。若不ㇾ用ㇾ功。只是魔也。終被二累倒一。

先生一日出遊二禹穴一。顧二田間禾一曰。能幾何時又如ㇾ此長了。范兆期在ㇾ傍曰。此只是有ㇾ根。學問能自植ㇾ根。亦不ㇾ患ㇾ無ㇾ長。先生曰。人孰無ㇾ根。良知卽是天植靈根。自生生不ㇾ息。但著二了私累一。把二此根一戕賊蔽塞。不ㇾ得二發生一耳。

先生一日出でゝ禹穴(一)に遊ぶ。田間の禾(二)を顧みて曰く、『能く幾何時(三)にして又此の如く長ぜしならん。』范兆期(四)傍に在りて曰く、『此は只だ是れ根有ればなり。學問も能く自ら根を植うれば、亦長ずる無きを患へず。』先生曰く、『人孰か根無からん。良知は卽ち是れ天植(五)の靈根にして、自ら生生として息まず。但だ私累を著けて、此根を把りて戕賊蔽塞(六)するがために、發生するを得ざるのみ。』

(一) 會稽山の支脈宛委山といふに在る既鑿し穴にて古へ之に禹に葬れりと傳ふる所　(二) 稻　(三) どの位の間にて　(四) 傳未詳　(五) 天の植え付けたる靈根　(六) そこなひふさぐ

一友常易二動ㇾ

一友常に氣を動して人を責め易し。先生之を警めて曰く、『學は須らく己に

聖人之理。一起一伏一進一退。自是功夫節次。不可以我前日用得功夫了。今却不濟。便要矯強做出一箇沒破綻的模樣。這便是助長。連前些子工夫。都壞了。此非小過。譬如行路的人遭一蹶跌。起來便走。不要欺人做那不曾跌倒的樣子出來。諸君只要常常

樣を做し出さんと要す可からず。這は便ち是れ助長するなり。前の些子なる功夫を連ねて、都て壞つものなり。此れ少過に非ず。譬へば路を行く人の(四)一蹶跌に遭ひ起ち來りて便ち走るが如し。人を欺きて那の曾て跌倒せざるがごとき樣子を做して出で來るを要せず。諸君は只だ常常(五)箇の世を遁れて悶ゆる無く、是とせられずして悶ゆる無きの心を懷くを要す。此良知に依り忍耐して做し、人の非笑に管せず、人の毀謗に管せず、人の榮辱に管せず、他の功夫の進む有り退く有るに任せて、我は只だ是れ這の良知の主宰を致して息まざれば、久久にして自然に力を得る處有らん。一切の外事にも、亦自ら能く動かざらん。』又曰く、『人若し著實に功を用ひば、人の毀謗に隨ひ、人の欺慢に隨ひ、處處益を得、處處是れ德を進むるの資たらん。若し功を用ひずんば、只だ是れ魔なり、終に累倒せられん。』

(一) 上智は絶えて少なきものなれば、道を學ぶ者が、一足飛びに聖人に入るといふ理のある筈なし　(二) 起伏進退は工夫の節次也　(三) 自分が前には工夫を用ひ得しに今は却て出來ずとて、强ひてつくろひてはころびなき樣子を作り出さんとすべからず　(四) 一つのけつまづき　(五) 此二句易文言に出づ

是依ニ我心性一出來上。此是所レ謂生之謂レ性。然却要レ有ニ過差一。若曉ニ得頭腦一。依ニ吾良知上一。說出來行將去便自是停當。然良知亦只是這口說這身行。豈能外ニ得氣一。別有ニ箇去レ行去一說。故曰。論レ性不レ論レ氣不レ備。論レ氣不レ論レ性不レ明。氣亦性也。性亦氣也。但須下認ニ得頭腦一是當上。

らず。氣を論じて性を論ぜざれば明かならずと。氣も亦性なり。性も亦氣なり。但だ須らく頭腦を認め得て是當すべし。』

(一) 此事の詳細は孟子告子上に見ゆ (二) 生といふ一邊は認めたるが、良知といふ肝心なものを認め得ず、單に生を性といふ時は凡て生きて働く所皆性にして不義不忠の働きも亦性、孟子の論じたる如く人の性も牛馬の性も違はぬ事となる、若し根本即ち良知を握り得たる上ならば斯く說くも亦可と也 (三) 孟子盡心上に出づ。言となり行となりあらはるゝ所即ち耳目鼻口の働は天性なりとの意 (四) 言葉を改めて更に孟子の說の意味を明かにする也 (五) 斯く考ふれば孟子の氣を指して性といへるは告子の生を性と謂へると同じ說き方也 (六) 然るに單に言行の働きのみをいふ時はそれに過差あるや必せり (七) 若し根本の良知を握り、吾が良知の上より說き出し行ひ來れば、その言行は自然にあてはまりて宜しきを得ん、即ち良知を握りての上ならば生を性と謂ひ氣を性ともいふも亦可なる所以也 (八) 程明道の言也

又曰。諸君功夫最不レ可ニ助長一。上智絕少。學者無下超ニ入

又曰く、『諸君の功夫は最も助長すべからず。(一)上智絕えて少なし。學者、聖人に超入するの理無し。(二)一起一伏一進一退は、自ら是れ功夫の節次にして、我が前日功夫を用ひ得しも、今却つて濟さゞるを以て、便ち矯り強ひて一箇破綻沒きの模

徒自苦耳。欲屏棄之。又制於親。不能舍去。奈何。先生曰。此事歸辭於親者多矣。其實只是無志。志立得時。良知千事萬爲。只是一事。讀書作文。安能累人。人自累於得失耳。因嘆曰。此學不明。不知此處耽閣幾多英雄漢。

問。生之謂性。告子亦說得是。孟子如何非之。先生曰。固是性。但告子認得一邊去了。不曉得頭腦。若曉得頭腦。如此說亦是。孟子亦曰。形色天性也。這也是指氣說。又曰。凡人信口說。任意行。皆說此

問ふ、『生之を性と謂ふは、告子も亦說き得て是なり。孟子は如何ぞ之を非とする。』先生曰く、『固より是れ性なり。但だ告子は一邊を認め得たるも、頭腦を曉り得ず。若し頭腦を曉り得ば、此の如く說くも亦是なり。孟子も亦曰く、形色は天性なりと。這は也是れ氣を指して說けるなり。』又曰く、『凡そ人の口に信せて說き、意に任せて行ふは、皆此は是れ我が心性に依りて出し來るを說けるなり。此は是れ所謂生之を性と謂ひしなり。然るに却つて要ず過差有り。若し頭腦を曉り得て、吾が良知上に依りて、說き出し來り行ひ將ち去らば、便ち自ら是れ停當せん。然れども良知も亦只だ是れ這の口說這の身行なり。豈に能く氣を外にし得て、別に箇の行ひ說くもの有らんや。故に曰く、性を論じて氣を論ぜざれば備

有欲速之心不是。即克去之。有誇多鬪靡之心不是。即克去之。如此亦只是終日與聖賢印對。是箇純乎天理之心。任他讀書。亦只是調攝此心而已。何累之有。曰。雖蒙開示。奈資質庸下。實難免累。竊聞窮通有命。上智之人恐不屑此。不肖爲聲利牽纒。甘心爲此。

利の爲に牽纒せられ、甘心(一二)して此を爲し、徒らに自ら苦むのみ。之を屛棄せんと欲すれば、又親に制せられて(一三)、舍て去ること能はず。奈何すべき。』先生曰く、『此事たる辭(一四)を親に歸する者多し。其實は只だ是れ志無きなり。志だに立ち得る時は、良知は千事萬爲、只だ是れ一事にして、書を讀み文を作るも、安ぞ能く人を累さん。人(一五)自ら得失に累ふのみ。』因つて嘆じて曰く、『此學明かならず。(一六)知らず此處に幾多の英雄漢を耽閣することを。』

（一）書は讀むは此心を調へて維持する所以　（二）試驗科目や及落の考　（三）受驗の爲めの課業　（四）良知が、强ひて記憶せんとする心の不是なるを知れば　（五）是ならざるを知る有ればの略　（六）他人と華美を爭ひ合ふ心　（七）心印を得て相向ふ義、佛語に師より悟道を許す印證といふ、其語の轉用なり　（八）書を讀めば讀むがまゝにの意　（九）うまれつき凡庸下劣にて　（一〇）班彪の王命論に「窮達有ㇾ命、吉凶由ㇾ人」と見えたるなどの思想にて困窮利達は天命にして敢て人力もて求めんとせざる者の立場よりいへば、科擧の業を爲すごときは屑しとせざらんと也　（一一）名聞利達に引かれて　（一二）甘んじて之を爲す　（一三）親に奉行を避さんが爲めに　（一四）親の爲めといふ事を言ひわけと爲す　（一五）讀書作文が人を累すに非ずして自己の得失の念が自己を煩はす也　（一六）この爲めに英雄漢を誤らせ爲すなくして終らしめしこと幾人なるを知らず

詩讀レ書彈レ琴習レ射之類。皆所丁以調ニ習此心一使丙之熟乙於道甲也。苟不レ志レ道而游レ藝。却如丁無レ狀小子。不ニ先去レ置ニ造區宅一。只管要丙去レ買レ畫。掛乙做門面甲。不レ知將レ掛ニ在何處一。

問。讀書所三以調ニ攝此心一。不レ可レ缺的。但讀レ之之時。一種科目意思牽引而來。不レ知何以免レ此。先生曰。只要ニ良知眞切一。雖レ做ニ擧業一不レ爲ニ心累一。總有レ累亦易レ覺ニ克之一而已。且如ニ讀レ書時一。良知知ニ得強記之心不レ是。卽克ニ去之一。

問ふ、『讀書（一）は此心を調攝する所以にして、缺く可からざるものなり。但だ之を讀むの時、一種科目（二）の意思牽引し來る。知らず何を以て此を免れんや。』先生曰く、『只だ良知（三）の眞切ならんを要すれば、擧業（三）を做すと雖も心の累を爲さず、總て累有るも亦之を覺り克ち易きのみ。且つ書を讀む時の如き、良知（四）、強記の心の是ならざるを知得すれば、卽ち之に克ち去り、速かなるを欲する心（五）の是ならざる有れば、卽ち之に克ち去り、多きに誇り靡（六）を闘しむる心の是ならざる有れば、卽ち之に克ち去る。此の如き亦只だ是れ終日聖賢（七）と印對するなり。是れ箇の天理に純なる心にして、他（八）の讀書に任せて、亦只だ是れ此心を調攝するのみ。何の累か之れ有らん。』曰く、『開示を蒙ると雖も、柰にせん資質（九）庸下にして、實に累を免れ難し。竊に聞く窮通（一〇）命有りと。上智の人は恐らく此を屑しとせざらん。不肖は聲（一一）

問志於道一章。先生曰。只志道一句。便含下面數句功夫。自住不得。譬如做此屋。志于道。是念念要去擇地鳩材。經營成箇區宅。據德却是經畫已成。有可據矣。依仁却是常常住在區宅內。更不離去。游藝却是加些畫采。美此區宅。藝者義也。理之所宜者也。如誦

（一）道に志す一章を問ふ。先生曰く、「只だ道に志すの一句は、便ち（二）下面數句の功夫を含み、自ら住り得ず。譬へば此屋を做るが如し。道に志すは、是れ念念地を擇び材を鳩め去りて、（三）經營して箇の（四）區宅を成さんと要するなり。德に據るは、却つて是れ經畫已に成りて、據る可きところ有るなり。仁に依るは、却つて是れ常常區宅の內に住在して、更に離去せざるなり。藝に遊ぶは、却つて是れ些かの（五）畫采を加へて、此區宅を美にするなり。（六）藝は義なり、理の宜しき所の者なり。詩を誦し書を讀み琴を彈じ射を習ふ如き類は、皆此心を調習して、之をして道に熟せしむる所以なり。苟も道に志さずして藝に遊ぶは、（七）無狀なる少子の、先づ區宅を置造せずして、只管に畫を買ひ、門面に掛け做さんとするが如し。知らず將に何處に掛けんとするか。」

（一）論語述而篇の「子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝」の一章　（二）「據於德」云々の數句を指す　（三）それぞれ間取に應ずる繩張を爲して　（四）一區の家、一軒の家　（五）繪畫などの色彩を加ふ、卽ち修飾を施す也　（六）藝と義と音の近きによりて之を訓じ、以て內容の思想を明かにす　（七）無分別なる若もの

滓盡去。復得レ清來。汝只要下在二良知上一用上レ功。良知存久。黑窣窣自能光明矣。今便要レ責レ效。却是助長。不レ成二功夫一。

汲みためて置くに　(一)水あか　(二)今妄念の生ぜるを覺ゆるまゝにそれにつけて心中俄に明かならんとの效を責めんとする時は

先生曰。吾教レ人。致二良知一在二格物上一用レ功。却是有二根本一的學問。日長二進一日一。愈久愈覺二精明一。世儒教レ人。事事物物上去二尋討一。却是無二根本一的學問。方二其壯時一。雖二暫能外面修飾一不レ見レ有レ過。老則精神衰邁。終須二放倒一。譬如三無レ根之樹移二栽水邊一。雖二暫時鮮好一。終久要二憔悴一。

先生曰く、『吾れ人を教ふるに、良知を致すには格物上に在りて功を用ひしむ。却つて是れ根本有るの學問にして、日に一日よりも長進し、愈ゝ久しければ愈ゝ精明なるを覺ゆ。世儒の人を教ふるや、(一)事事物物上に尋討せしむ。却つて是れ根本無きの學問なり。其壯なる時に方りては、暫く能く外面修飾して過有るを見ずと雖も、老いては則ち精神衰邁して、(二)終には放倒すべし。譬へば根無き樹を水邊に移栽するが如し。(三)暫時鮮好なりと雖も、終に久しうして憔悴せん。』

(一)根本を忘れて事々物々の上について其理を討尋探求せしむ　(二)精神衰へ、終には放心して道に叶はずなる
(三)しばしの間は鮮かにうるはしけれど、久しくなると終に枯れしぼむ

日光被二雲來遮蔽一。雲去光已復矣。若惡念既去。又要レ存二箇善念一。即是日光之中。添二燃一燈一。(已下門人黃修易錄)

㊀この項以下十一條は黃勉叔の錄する所、勉叔名は修易　㊁空にしてはがらかに大なり　㊂前出、善惡の二念は對立せるに非ざるを說ける條と併看せば更に明かならん

問。近來用レ功。亦頗覺二妄念不一レ生。但腔子裏黑窣窣的。不レ知如何打得光明。先生曰。初下レ手用レ功。如何腔子裏便得二光明一。譬如二奔流濁水一。纔貯二在缸裏一。初然雖レ定。也只是昏濁的。須レ俟二澄定既久一。自然渣

問ふ、『近來功を用ふるに、亦頗る妄念の生ぜざるを覺ゆ。但し腔子裏は(一)黑窣窣的なり。知らず(二)如何にしてか打し得て光明ならん。』先生曰く、『初めて手を下し功を用ふるに、如何ぞ腔子裏便ち光明を得ん。譬へば奔流濁水の如し、纔かに(三)缸裏に貯在す、初は然く定ると雖も、也只だ是れ昏濁せり。須らく澄み定ること既に久しきを俟つべし、自然に(四)渣滓盡く去りて、復淸を得來らん。汝只だ良知上に在りて功を用ひんことを要す。良知の存すること久しければ、黑窣窣なるものも自ら能く光明ならん。(五)今便ち效を責めんとすれば、却つて是れ助長して、功夫を成さず。』

㊀心中は暗黑なり　㊁どのやうにしてか光明ならん。打は俗辭にて作(ナス)の意を含む　㊂それを瓶の内に

逃二了夫婦一。都是爲二箇君臣父子夫婦一。著二了相一。便須二逃避一。如二吾儒一。有二箇父子一。還レ他以レ仁。有二箇君臣一。還レ他以レ義。有二箇夫婦一。還レ他以レ別。何曾著二父子君臣夫婦的相一。

臣・夫婦の相に著せんや。』

(一) 相とは卽ち色相也、三界一切の品類大小美醜有情無情より根塵の諸法に及ぶまで皆形狀あり、之を相といふ。佛氏は之に執著せずと說けども實は之に執著せり (二) 黃以方が其說を請ひ問ふ (三) それより身をひきしりぞけての義と見て意明かなるに似たり (四) そこに仁ありといふが如き意。仁といひ義といひ別といひ、只我が心の誠のみ、良知のみ、之を父子に致して仁と謂ひ、之を君臣に致して義といひ、之を夫婦に致して別といふ、何ぞ曾て父子君臣夫婦の形相に著せんや

黃勉叔問。心無二惡念一時。此心空空蕩蕩的。不レ知亦須レ存二箇善念一否。先生曰。既去二惡念一。便是善念。便復二心之本體一矣。譬如三

(一)黃勉叔問ふ、『心に惡念無き時は、此心空空蕩蕩たるものなり。(二)知らず亦須らく箇の善念を存すべきや否や。』先生曰く、(三)『既に惡念を去れば、便ち是れ善念にして、便ち心の本體に復る。譬へば日光の雲來りしため遮蔽せられしが如し。雲去れば光すでに復す。若し惡念既に去りしに、又箇の善念を存せんと要するは、卽ち是れ日光の中に一燈を添へ燃すなり。』 巳下門人黃修易錄す

嘗非二廓然太公之體一了。故有レ所二忿懥一。便不レ得二其正一也。如今於二凡忿懥等件一。只是箇物來順應。不レ要レ著二一分意思一。便心體廓然太公。得二其本體之正一了。且如三出レ外見二人相闘一。其不レ是的。我心亦怒。然雖レ怒却此心廓然。不三曾動二些子氣一。如今怒レ人。亦得レ如レ此。方纔是正。

る。然るに怒ると雖も却つて此心は廓然として、曾て些子の氣をも動さず。如今人を怒るも亦此の如くなるを得ば、方に纔に是れ正し。』

(一) 大學の「有レ所二忿懥一則不レ得二其正一」の一條　(二) 忿懥の中に大學謂ふ所の恐懼好樂憂患を兼ね說く、故に等件といふ　(三) 人心これ無き能はず　(四) 意思を著けて之をもち居るは不可　(五) 忿懥は自然の情に出づ、若しこれに一分の私意が著けば怒りが過當となる　(六) 不都合なる者に對しては我が心も怒る

先生嘗言。佛氏不レ著レ相。其實著二了相一。吾儒著レ相。其實不レ著レ相。請問。曰。佛怕二父子累一。却逃二了父子一。怕二君臣累一。却逃二了君臣一。怕二夫婦累一。却

先生嘗て言ふ、『佛氏は相に著せずと、其實は相に著す。吾が儒は相に著すと、其實は相に著せず。』(一)請ひ問ふ。曰く、『佛は父子の累を怕れて、却つて父子を逃れ、君臣の累を怕れて、却つて君臣を逃れ、夫婦の累を怕れて、(二)却つて夫婦を逃る。都て是れ箇の君臣・父子・夫婦の爲に相に著し、便ち逃避することを須ふ。吾が儒の如きは、箇の父子有れば、他に還すに仁を以てし、(四)箇の君臣有れば、他に還すに義を以てし、箇の夫婦有れば、他に還すに別を以てす。何ぞ曾て父子・君

文公格物之說。只是少二頭腦一。如三所レ謂察二之於念慮之微一。此一句不レ該。乙與下求二之文字之中一。驗二之於事爲之著一。索中之講論之際上。混作二一例一看甲。是無二輕重一也。

問下有レ所二忿懥一一條上。先生曰。忿懥幾件。人心怎能無得。只是不レ可レ有耳。凡人忿懥著二了一分意思一。便怒得過レ

『文公の格物の說は、只だ是れ頭腦を少く。所謂之を念慮の微に察するが如き、(一)此一句は、之を文字の中に求め、之を事爲の著に驗し、之を講論の際に索むると、混じて一例と作して看るべからず。是れ輕重無きなり。』

(一) 朱子の格物說、大學或問に出づ (二) 朱子格物說に「若二其用レ力之方一則或考二之事爲之著一或察二之念慮之微一或求二之文字之中一或索二之講論之際一」といへるが、其の察二之念慮之微一といふをば他の三つと一例に見るは不可也、これ格物の工夫につきて力を用ふる根原なるに、斯く並立して一例に說きては其間に輕重なき事となる。其說頭腦眼目を缺く所以也

(一)忿懥する所有りの一條を問ふ。先生曰く、『(二)忿懥の幾件は、(三)人心怎ぞ能く無くし得ん。只だ是れ有す可からざるのみ。凡そ人(五)忿懥に一分の意思を著くるときは、便ち怒り得て(四)當を過す。廓然太公の體に非ず。故に忿懥する所有れば、便ち其正を得ざるなり。如今凡そ忿懥等の件に於て、只だ是れ箇の物來りて順應し、一分の意思を著くるを要せざれば、便ち心體廓然太公にして、其本體の正を得。且つ外に出でゝ人の相鬪ふを見るが如し。(六)其の是ならざるものには我が心も亦怒

於ニ中心一照管不レ及者多矣。有ニ太直率者一。先生曰。如今講ニ此學一。却外面全不ニ檢束一。又分ニ心與レ事爲レ二矣。

(一)進退作法甚だ荘重にして威儀をつくろふ者 (二)先生曰く (三)人は只心上に許多の工夫あり (四)中心に於て照料體理の届かぬ事多し (五)飾氣なくつけ／＼と振舞ひて檢束なき者

門人作レ文送ニ友行一。問ニ先生一曰。作ニ文字一不レ免レ費レ思。作了後又一二日。常記在レ懷。曰。文字思索亦無レ害。但作了常記在レ懷。則爲レ文所レ累。心中有ニ一物一矣。此則未レ可也。又作レ詩送レ人。先生看レ詩畢謂曰。凡作ニ文字一。要レ隨ニ我分限所一レ及。若說得太過了。亦非ニ修レ辭立一レ誠矣。

門人文を作りて友の行を送る。先生に問うて曰く、『(一)文字を作るに思を費すを免れず。作り了りて後又一二日、常に記して懷に在り。(二)』曰く、『文字思索は亦害無し。但だ作り了りて常に記して懷に在れば、則ち文の爲に累はされて、心中一物有り。此は則ち未だ可ならざるなり。』又詩を作りて人を送る。先生詩を看畢へて謂ひて曰く、『(三)凡そ文字を作るには、我が分限の及ぶ所に隨ふを要す。若し說き得て太だ過ぎば、亦(四)辭を修めて誠を立つるに非ざるなり。』

(一)文を作る爲めに思を費す (二)胸中に記憶し居りて忘れず (三)詩文は分限相應なるべし (四)易の文言に「修レ辭立ニ其誠一」といへるものに非ず

分。空空靜靜的。只是存二天理一。即是如今應レ事接レ物的心。如今應レ事接レ物的心。亦是循二此天理一。便是那三更時分。空空靜靜的心。故動靜只是一箇。分別不レ得。知二得動靜合一一。釋氏毫釐差處。亦自莫レ揜矣。

(六)釋氏毫釐の差へる處も、亦自ら揜ふこと莫し。』

㊀昔の子の刻即ち夜の十二時頃 ㊁胸中の思慮をはらひ去りて一念の存するなきは ㊂儒佛兩方共に用ひず、佛をなすにも非ず儒を爲すにもあらず只空々靜々也、此時儒と佛と何を以て差別せん ㊃今現に事物に應接して居る心と同一の心にて共に只天理を存し天理に循ふのみ ㊄佛と儒と毫釐の差遂に千里のちがひを爲すその分れ目も明かならん

門人在レ座。有二動止甚矜持者一。先生曰。人若矜持太過。終是有レ弊。曰。矜持太過何如有レ弊。曰。人只有二許多精神一。若專在二容貌上一用レ功。則

門人座に在り。(一)動止甚だ矜持する者有り。先生曰く、『人若し矜持すること太だ過ぐれば、終に是れ弊有り。』曰く、『矜持太だ過ぐれば何如にして弊有るか。』(二)曰く、『(三)人は只だ許多の精神有り。若し專ら容貌上に在りて功を用ひば、則ち(四)中心に於て照管し及ばざる者多し。』太だ(五)直率なる者有り。先生曰く、『如今此學を講ずるに、却つて外面を全く檢束せざるは、又心と事とを分ちて二と爲すなり。』

事。聖人亦修レ道也。但修レ道在二賢人分上一多。故修レ道之謂レ教。屬二賢人事一。又曰。中庸一書。大抵皆是說二修道的事一。故後面凡說二君子一。說二顏淵一。說二子路一。皆是能修レ道的。說二小人一。說二賢知愚不肖一。說二庶民一。皆是不レ能レ修レ道的。其他言二舜文周公仲尼至誠至聖一之類。則又聖人之自能修レ道者也。

き、庶民を說くは、皆是れ道を修むる能はざることなり。其他舜・文・周公・仲尼、至誠至聖を言ふの類は、則ち又聖人の自ら能く道を修むる者なり。』

(一) 中庸の首句「天命之謂レ性、率レ性之謂レ道、修レ道之謂レ教」につきての說　(二) 中庸の後段に於て

問。儒者到二三更時分一。掃二蕩胸中思慮一。空空靜靜。與二釋氏之靜一只一般。兩下皆不レ用。此時何所二分別一。先生曰。動靜只是一箇。那三更時

問ふ、『儒者(一)三更の時分に到り、(二)胸中の思慮を掃蕩して、空空靜靜なるは、釋氏の靜と只だ一般にして、(三)兩下皆用ひず。此時何の分別する所ぞ。』先生曰く、『動靜は只だ是れ一箇なり。那の三更の時分、空空靜靜なるは、只だ是れ天理を存するのみ。(四)即ち是れ如今事に應じ物に接するの心なり。如今事に應じ物に接するの心も、亦是れ此天理に循ふのみ。便ち是れ那の三更の時分空空靜靜たるの心なり、故に動靜は只だ是れ一箇にして、分別するを得ず。動靜合一を知り得れば、

知不覺又夾雜去了。才有夾雜。便不是好善如好好色。惡惡如惡惡臭的心。善能實實的好。是無念不善矣。惡能實實的惡。是無念及惡矣。如何不是聖人。故聖人之學。只是一誠而已。

學は、只だ是れ一の誠なるのみ。

㊀好惡みな本心の誠なるべきをいふ也 ㊁つひ氣付かずに他の念がはさまりまじる ㊂善をば能く實實に好めば念々皆善也

問。修道說。言率性之謂道。屬聖人分上事。修道之謂教。屬賢人分上事。先生曰。衆人亦率性也。但率性在聖人分上較多。故率性之謂道。屬聖人

問ふ、『修道の說に、性に率ふ之を道と謂ふを言ひて、聖人分上の事に屬し、道を修むる之を教と謂ふをば賢人分上の事に屬す』と。先生曰く、『衆人も亦性に率ふ。但だ性に率ふと聖人分上に在りては較や多し。故に性に率ふ之を道と謂ふは、聖人の事に屬す。聖人も亦道を修む。但し道を修むること賢人分上に在りて多し。故に道を修むる之を教と謂ふは、賢人の事に屬す。』又曰く、『中庸の一書は、大抵皆是れ修道の事を說けり。故に後面凡て君子を說き、顏淵を說き、子路を說くは、皆是れ能く道を修むることにして、小人を說き、賢・知・愚・不肖を說

又有二一箇惡一來相對上也。故善惡只是一物。直因レ聞二先生之說一。則知下程子所レ謂善固性也。惡亦不レ可レ不レ謂二之性一。又曰。善惡皆天理。謂二之惡一者。本非レ惡。但於二本性上一過與二不及一之間耳。其說皆無レ可レ疑。

れり。

(一) 善と惡とは兩極端にて其相反すること氷と炭火との如し　(二) 本體に少しでも過當なるあれば惡也　(三) 一つの善があるところへ別に一つの惡があつて來り對するに非ず　(四) 黃以方の名也　(五) 程明道の言也

先生嘗謂。人但得下好レ善如レ好二好色一。惡レ惡如レ惡二惡臭一。便是聖人。直初時聞レ之覺二甚易一。後體驗得來。此箇功夫着實是難。如一念雖レ知二好レ善惡レ惡。然不レ

先生嘗て謂ふ、『人は但だ善を好むこと(一)好色を好むが如く、惡を惡むこと惡臭を惡むが如きを得ば、便ち是れ聖人なり』と。直は初時之を聞いて甚だ易きを覺えしが、後に體驗し得來るに、此れ箇の功夫は着實に是れ難し。如し一念善を好み惡を惡むを知ると雖も、然れども知らず(二)覺らず又夾雜す。才かに夾雜有れば、便ち是れ善を好むこと好色を好むが如く、惡を惡むこと惡臭を惡むが如き心にあらず。善(三)能く實實に好むときは、是れ念として善ならざる無し。惡能く實實に惡めば、是れ念として惡に及ぶ無し。如何ぞ是れ聖人ならざらん。故に聖人の

必知的。聖人自不レ消レ求レ知。其所レ當レ知的。聖人自能問レ人。如下子入二太廟一毎レ事問之類上。先儒謂二雖レ知亦問敬謹之至一。此說不レ可レ通。聖人於二禮樂名物一。不二必盡知一。然他知二得一箇天理一。便自有二許多節文度數一出來。不レ知能問亦即是天理節文所レ在。

㊀ 聖人は本體が明かなる故に、事々にその天理の在る所を知つてそれ〲にその天理を盡す ㊁ 聖人の聖人たるは根柢の明にあり、煩錯なる天下の事物何ぞ盡く知り得ん ㊂ 是非とも知らなくてはならぬ事でない事は ㊃ 論語八佾篇に出づ ㊄ 集註に見えたる尹氏の說也

問。先生嘗謂。善惡只是一物。善惡兩端如二氷炭相反一。如何謂二只一物一。先生曰。至善者心之本體。本體上才過當些子。便是惡了。不下是有二一箇善。却

問ふ、『先生嘗て謂ふ、善惡は只だ是れ一物なりと。(一)善惡の兩端は氷炭の相反するが如し。如何ぞ只だ一物とは謂ふ。』先生曰く、『至善は心の本體にしに、(二)本體上才かに過當なる些子なれば、便ち是れ惡なり。(三)是れ一箇の善有るに却つて又一箇の惡有りて來りて相對するにあらざるなり。故に善惡は只だ是れ一物なり。』(四)直は先生の說を聞きしに因り、則ち程子の所謂(五)『善は固より性なり。惡も亦之を性と謂はざる可からず。』又曰く、『善惡は皆天理なり。之を惡と謂ふは、本惡に非ず。但だ本性上に於て過と不及との間のみ』と。其說皆疑ふ可きもの無きを知

聖人無レ所レ不レ知。只是知ニ箇天理一。無レ所レ不レ能。只是能ニ箇天理一。聖人本體明白。故事事知ニ箇天理所レ在。便去レ盡ニ箇天理一。不下是本體明後。却於ニ天下事物一。都便知得便做得來上也。天下事物。如ニ名物度數草木鳥獸之類一。不レ勝ニ其繁一。聖人須ニ是本體明了一。亦何緣能盡知得。但不ニ

聖人は知らざる所無しとは、只だ是れ箇の天理を知るなり。能くせざる所無しとは、只だ是れ箇の天理を能くするなり。(一)聖人は本體明白なり。故に事事箇の天理の在る所を知りて便ち箇の天理を盡す。是れ本體明かにして後却つて天下の事物に於て、都て便ち知得して便ち做し得來るにあらざるなり。天下の事物は、名物・度數・草木・鳥獸の類の如き、其繁に勝へず。(二)聖人は須らく是れ本體明かなるべきも、亦何に緣つてか能く盡く知り得ん。但だ(三)必ずしも知らざらんものは、聖人は自ら知らんと求むるを消ひず。其當に知るべき所のものは、聖人自ら能く人に問ふ。(四)子太廟に入るや事每に之を問ふの類の如き、(五)先儒は、知れりと雖も亦問ふことは敬謹の至なりと謂へるも、此說通ず可からず。聖人なりとて禮樂名物に於て、必ずしも盡くは知らざらん。然れども他は一箇の天理を知得するをもつて、便ち自ら許多の節文度數有りて出で來る。知らずして能く問ふも亦即ち是れ天理節文の在る所なり。

壞他了。

問知行合一。先生曰。此須識我立言宗旨。今人學問。只因知行分作兩件。故有一念發動雖是不善。然却未曾行。便不去禁止。我今說箇知行合一。正要人曉得一念發動處。便即是行了。發動處有不善。就將這不善的念克倒了。須要徹根徹底。不使那一念不善。潜伏在胸中。此是我立言宗旨。

知行合一を問ふ。先生曰く、『此れ須らく我が立言の宗旨(一)を識るべし。今人の學問は、只だ知行分つて兩件と作すに因り、故に一念の發動是れ不善なりと雖も、然れども却つて未だ曾て行はざれば、便ち禁止し去らざる有り。我れ今箇の知行合一を說くは、正に人をして一念發動の處は便ち即ち是れ行なり(二)と曉り得しめんと要するなり。發動の處に不善有らば、就ち這の不善の念を將つて、克ち倒して、根に徹し底に徹し(三)、那の一念の不善をして、潜伏して胸中に在らしめざらんことを須要す。此は是れ我が立言の宗旨なり。』

(一) 言を立つる根本の精神要旨 (二) 一念の發動する處がやがてそのまゝ行爲なり (三) 其不善の念を克ち倒して根底にまで徹す

先生曰。我輩致レ知。只是各隨ニ分限所ヒ及。今日良知見在如レ此。只隨ニ今日所ヒ知。擴充到底。明日良知又有ニ開悟一。便從ニ明日所ヒ知。擴充到底。如レ此方是精一功夫。與レ人論レ學。亦須レ隨ニ人分限所ヒ及。如ニ樹有ニ這些萌芽一。只把ニ這些水一去ニ灌漑一。萌芽再長便又加レ水。自ニ拱把一以至ニ合抱一。灌漑之功。皆是隨ニ其分限所ヒ及。若些小萌芽。有ニ一桶水在一。盡要ニ傾上一。便浸ニ

先生曰く、「我輩の知を致すは、只だ是れ各〻分限の及ぶ所に隨ふ。今日良知の見在此の如くんば、只だ今日知る所に隨ひて(二)擴充到底し、明日良知又開悟す(一)る有らば、便ち明日知る所に從ひて擴充到底す。此の如きは方に是れ精一の功夫にして、人と學を論ずるも亦須らく人の分限の及ぶ所に隨ふべし。樹の這の些かの萌芽有るが如く、只だ這の些かの水を把りて灌漑し、萌芽再び長ずれば便ち又(三)水を加ふ。(四)拱把より以て合抱に至るまで、(五)灌漑の功は皆是れ其分限の及ぶ所に隨ふ。若し些(六)小の萌芽に一桶の水の在る有りて、盡く傾上せんとせば、便ち他を浸し壞らん。

(一) 良知の現に在る所かゝる狀態なりとすれば　(二) 打ひろめ充實して徹底す　(三) 水の分量を增す　(四) 拱は兩手の拇指と人差指とにて圍む程、把は片手の拇指と、差指とにて圍む程、合抱は兩手にてかゝへる程の太さ　(五) 水をそゝぐは其大きさ相應になす　(六) 一寸した萌芽に、一桶の水があるとてそれをすつかり打ちかけんとすれば其芽を浸し壞らん

乃指レ天以示レ之曰。此如ニ面前見ヒ天。是昭昭之天。四外見レ天。也只是昭昭之天。只爲ニ許多房子牆壁一遮蔽。便不レ見ニ天之全體一。若撤ニ去房子牆壁一。總是一箇天矣。不レ可レ道ニ眼前天是昭昭之天。外面又不ニ是昭昭之天一也。于レ此便見。一節之知卽全體之知。全體之知卽一節之知。總是一箇本體。（已下門人黃直錄）

先生曰。聖賢非レ無ニ功業氣節一。但其循ニ著這天理一。則便是道。不レ可下以ニ事功氣節一名上矣。

發レ憤忘レ食。是聖人之志如レ此。眞無レ有ニ已時一。樂以忘レ憂。是聖人之道如レ此。眞無レ有ニ戚時一。恐不ニ必云ニ得不ヒ得也。

先生曰く、『聖賢は功業氣節(一)無きに非ず。但だ其の這の天理に循著すれば、則ち便ち是れ道なり。事功氣節を以て名づく可からず。』

(一) 事業の功績、氣骨節操ありてそれが天理に循へばこそやがてそれが道なれ、事功氣節をもて道とはいふべからずと也

『憤(二)を發して食を忘ると。是れ聖人の志は此の如し。眞に已む時有ること無し。樂んで以て憂を忘ると。是れ聖人の道は此の如し。眞に戚む時有ること無し。恐らくは必ずしも得ると得ざる(三)とを云はざらん。』

(二) 論語述而篇に「發レ憤忘レ食、樂以忘レ憂」といふは時の間も已むなき聖人の志と、眞に戚む時なき聖人の道とをいへりと解せる也 (三) 朱子は之に註して「未レ得則發レ憤而忘レ食、已得則樂レ之而忘レ憂」といへるも、必ずしも得ると得ざるとを云ふに及ばずと也

也。何以到㆓得溥博如㆑天淵泉如㆑淵地位㆒。先生曰。人心是天淵。心之本體無㆑所㆑不㆑該。原是一箇天。只爲㆓私欲㆒障礙。則天之本體失了。心之理無㆓窮盡㆒。原是一箇淵。只爲㆓私欲㆒窒塞。則淵之本體失了。如今念念致㆓良知㆒。將㆓此障礙窒塞㆒一齊去盡。則本體已復。便是天淵了。

ふ。心の理は窮盡無く、原是れ一箇の淵なり。只だ私欲の爲に窒塞せらるれば、則ち淵たるの本體失ふ。如今念念良知を致し、此障礙窒塞を將つて一齊に去り盡せば、則ち本體已に復す。便ち是れ天淵なり』と。乃ち天を指し以て之に示して曰く、『比へば面前に天を見るが如し。是れ昭昭たる天にして、(四)四外に天を見るも、也只だ是れ昭昭たる天なり。只だ許多の房子(五)牆壁の爲に遮蔽せられて、便ち天の全體を見ず。若し房子牆壁を撤去せば、總べて是れ一箇の天なり。眼前の天は是れ昭昭の天にして、外面又是れ昭昭の天ならずと道ふ可からず。此に于いて便ち見る、一節の知は卽ち全體の知、全體の知は卽ち一節の知にして、總べて是れ一箇の本體(六)なるを。巳下門人黄直錄す

(一) 此說による時は　(二) 此二句中庸に出づ　(三) 心の本體は萬事を兼ぬ　(四) 屋外の廣々と打開けたる所、野原などをいふ　(五) 部屋　(六) 一事の上の知は卽ち全體の知、全體の知は卽ち一事の上の知にて、凡て皆一個の本體なり

這良知人人皆有。聖人只是保全無ニ些障蔽一。兢兢業業。亹亹翼翼。自然不レ息。便也是學。只是生的分數多。所以謂ニ之生知安行一。衆人自ニ孩提之童一。莫レ不レ完ニ具此知一。只是障蔽多。然本體之知自難ニ泯息一。雖ニ問學克治一。也只憑レ他。只是學的分數多。所以謂ニ之學知利行一。

の分數多し。所以に之を生知安行と謂ふ。衆人も孩提の童より、此知を完具せざる莫し。只だ是れ障蔽多し。然れども本體の知を自ら(四)泯息し難し。問學して克治すと雖も、也只だ(五)他に憑る。只だ是れ(六)學的の分數多し。所以に之を學知利行と謂ふ。』

(一) 學知・生知の說前に屢々見ゆ (二) 戒愼恐懼常に勉めて止まず (三) 生知の分量が多し (四) ほろびやむ事あり難し (五) 良知による (六) 學知の分量が多し

黃以方問。先生格致之說。隨レ時格レ物。以致ニ其知一。則知是一節之知。非ニ全體之知一

黃以方問ふ、『先生の格致の說、時に隨ひて物を格し、以て其知を致す。(一)則ち知は是れ一節の知にして、全體の知に非ず。何を以てか(二)溥博天の如く、淵泉淵の如き地位に到り得ん。』先生曰く、『人心は是れ天淵にして、(三)心の本體は該ねざる所無く、原是れ一箇の天なり。只だ私欲の爲に障礙せらるれば、則ち天の本體失

在ㇾ匪曰。誠然。

嘗讀二先生大學古本序一。不ㇾ知二所ㇾ說何事一。及二來聽講許時一。乃稍知二大意一。

于中國裳輩同侍ㇾ食。先生曰。凡飲食只是要ㇾ養二我身一。食了要二消化一。若徒蓄積在二肚裏一。便成ㇾ痞了。如何長二得肌膚一。後世學者。博聞多識。留二滯胸中一。皆傷ㇾ食之病也。

先生曰。聖人亦是學知。衆人亦是生知。問曰何如。曰。

分に其根の存するあり、善を好み惡を惡む一にこの良知に從ふがこれ聖學にして、何等執著する處なきこれ道の根原也。妙合は陰陽五行の妙合にて卽ち人間の形の初めて生ずる時をいふ。將迎は執著の意、事去りて心猶は留在するを將といひ、事未だ來らずして之を期待するを迎といふ。乾元は天道にて道の根源の義也　(三) 詩の一句につきていふ、之に從ふといひても、それが何に從ふかといふ事は此學を講ぜずしては分らぬ事也との意

于中・國裳の輩同じく食に侍す。先生曰く、『凡そ飲食は只だ是れ我身を養ふを要す。食ひ了れば消化するを要す。若し徒らに蓄積して肚裏に在らば、便ち痞を成さん。如何ぞ肌膚を長じ得ん。後世の學者は、博聞多識、胸中に留滯す。皆食に傷けらるゝの病なり。』

(一) たまりて胃の腑の内にあらん　(二) 胃の食物がとゞこほりていたむ病、胃病

先生曰く、『聖人も亦是れ學知にして、衆人も亦是れ生知なり。』問うて曰く、『何如。』曰く、『道の良知は人人皆有す。聖人は只だ是れ保全して些かの障蔽無し。競競業業、亹亹翼翼として、自然に息まざる、便ち也是れ學なり。只だ是れ生的

求一屈レ意從ヒ之。不レ可下因二自己事務煩冗一隨レ意苟且斷セ之。不レ可下因二旁人讚毀羅織一隨二人意思一處セ之。這許多意思皆私。只爾自知。須二精細省察克治一。惟恐此心有二一毫偏倚一。枉二人是非一。這便是格物致知。簿書訟獄之間。無レ非二實學一。若離二了事物一爲レ學。却是著レ空。

たるによりて（七）はたの者のはめそしり、又は謀構によりて、その人の考に從つて處分してはならずと也。羅織は色々に構へ作りて人を罪におとすをいふ（八）以上列記せる如きさま〴〵の意思（九）はんの少しのかたよりにてもあらば（一〇）空虛の義、徒に空想に流れて實學たらざらんと也

虔州將レ歸。有レ詩。別二先生一云。良知何事繫二多聞一。妙合當時已種レ根。好惡從レ之爲二聖學一。將迎無レ處是乾元。先生曰。若未三來講二此學一。不レ知。說二好惡從ヒ之。從二箇甚麼一。敷英

虔州より將に歸らんとす。（一）詩有り、先生に別れて云ふ、『（二）良知何事か多聞に繫らん。妙合當時已に根を種う。好惡之に從ふを聖學と爲す。將迎處無し是れ乾元』と。先生曰く、『若し未だ來りて此學を講ずるにあらずんば、知らず、（三）好惡之に從ふと說くも、箇の甚麼に從はんを。』敷英座に在りて曰く、『誠に然り。嘗て先生の大學古本の序を讀みて、說く所の何事なるかを知らず。來りて聽講許時なるに及び、乃ち稍や大意を知れり。』

（一）訣別の爲めに詩を作りて曰く（二）良知何ぞ多聞に關せん、良知は固有のものにて自己の生成の時より已に自

甚好。只是簿書訟獄繁難不レ得レ爲レ學。先生聞レ之曰。我何嘗教下爾離二了簿書訟獄一懸空去上講レ學。爾既有二官司之事一。便從二官司的事上一爲レ學。纔是眞格物。如レ問二一詞訟一。不レ可下因二其應對無狀一起中箇怒心上。不レ可下因二他言語圓轉一生中箇喜心上。不レ可下惡二其屬託一加レ意治上レ之。不レ可下因二其請

嘗て爾に簿書訟獄を離れて懸空(二)に學を講ぜよと敎へんや。爾既に官司の事有り。便ち官司の事上より學を爲すべし。纔かに是れ眞の格物なり。一詞訟(三)を問ふが如き、其應對無狀(四)なるに因りて箇の怒心を起す可からず。他の言語圓轉なるに因りて箇の喜心を生ず可からず。其屬託(五)を惡み意を加へて之を治む可からず。(六)其請求に因り意を屈して之に從ふ可からず。自己の事務煩冗なるに因り、意に隨つて苟且に之を斷ず可からず。(七)旁人の讃毀羅織するに因り人の意思に隨つて之を處す可からず。(八)這の許多の意思は皆私なり。只だ爾自ら知りて、須らく精細に省察克治すべし。惟だ恐らくは此心一毫(九)の偏倚有らば、人の是非を枉げんを。這れ便ち是れ格物致知にして、簿書訟獄の間も、實學に非ざる無し。若し事物を離れて學を爲さば、却つて是れ空(一〇)とならん。』

(一) 帳簿整理、訴訟裁判等の事件 (二) 只空に (三) 一人の訴への詞を聞ひわくるにしても (四) 其者の應對が禮儀なきに因りて怒心を起すは不可 (五)、屬託は人のたのみ。例へば時の權勢家などより其訴訟當事者の事につきて頼み込まれたる場合の如き、それが頼にさはるとて殊更にひどい處分を爲してはならずと也 (六) うまく頼み込まれ

功一便是。何必如レ此。九川曰。直是難レ鏖難レ知丟レ他不レ去。先生曰。須二是勇上用レ功。久自有レ勇。故曰。是集義所レ生者。勝得容易。便是大賢。

治せんと努力するが如き要なし 〔一二〕 直ちに妄念を鏖らず無くなすこと難し 〔一三〕 氣がつきても其念慮を屏除し去り得ず 〔一四〕 致良知は即ち孟子の所謂集義なりとの說前に見ゆ 〔一五〕 欄外書に、張本には「大勇」に作るといへり

九川問。此功夫却於二心上一體驗明白。只解レ書不レ通。先生曰。只要レ解レ心。心明白書自然融會。若心上不レ通。只要二書上文義通一。却自生二意見一。

九川問ふ、『此功夫は却つて心上に於て體驗明白なれども、只だ書を解くに(一)通ぜず。』先生曰く、『只だ心を(二)解くを要す。心明白ならば書は自然に融會せん。若し心上に通ぜずして、只だ書上の文義に通ぜんと要せば、却つて自ら意見を生ぜん。』

〔一〕 書物を解釋する上に工合わるき所あり 〔二〕 書上の文義に通ぜんとせずして心上に通ぜんことをもとむべし

有二一屬官一。因二久聽上講二先生之學一曰。此學

一屬官有り、久しく先生の學を講ずるを聽くに因りて曰く、『此學甚だ好し、只だ是れ簿書(一)訟獄、繁難にして學を爲すを得ず。』先生之を聞いて曰く、『我れ何ぞ

味。便繾綣難レ屏。覺得早則易。覺遲則難。用レ力克治。愈覺二扞格一。惟稍遷二念他事一。則隨兩忘。如レ此廓清。亦似レ無レ害。先生曰。何須レ如レ此。只要下在二良知上一著中功夫上。九川曰。正謂那一時不レ知。先生曰。我這裏自有二功夫一。何緣得レ他來。只爲二爾功夫斷了一。便蔽二其知一。既斷了則繼二續舊

愈々扞格するを覺ゆ。惟だ稍や遷りて他事を念へば、則ち隨つて兩(五)ながら忘れて、此の如く廓清(六)なり。亦害無きに似たり。』先生曰く、『何ぞ此の如きを須ひんや。只だ良知上に在りて功夫を著くるを要す。』九川曰く、『(七)正に謂へり那の一時知らざらん』を。先生曰く、『(八)我が這の裏には自ら功夫有らば、何に縁りてか他を得來らん。只だ爾の功夫斷ゆるが爲に、便ち其知を蔽ふ。既に斷ゆれば則ち舊功を(九)繼續して便ち是なり。何ぞ必ずしも此の如くせん。』九川曰く、『(一一)直に是れ鑿し難し。(一二)知ると雖も他を丟いて(一〇)去らず。』先生曰く、『須らく是れ功を用ふるに勇なるべし。久しければ自ら勇有り。故に曰く、是れ集義の生ずる所の者なりと。勝ち得ること容易なれば、便ち是れ(一四)大賢(一三)なり。』

(一) 俗語也、思料條理の義にて、色々と考へすぢ道を附けて見るをいふ　(二) 條理正しくして深き味あり　(三) くつれまとひて離れず　(四) 努力して其思を治めんとすればいよいよ防ぎさからひて克ち難きを覺ゆ　(五) 雜念と雜念を克治せんとの念と　(六) 心がからりとして清し　(七) 一時良知の事を忘れて氣づかずに居る時の事を申す也　(八) 自己の心内に工夫あらば、何によりてその如き邪妄の念生じ得べき　(九) 致良知の工夫　(一〇) 殊更に妄念を克

朋友須㆓識規指摘處少。誘掖奬勸意多㆒方是。後又戒㆓九川㆒云。與㆓朋友㆒論㆑學。須㆓委曲謙下寬以居㆑之。

きこと方に是なり。』後又九川を戒めて云ふ、『朋友と學を論ずるには、須らく(三)委曲謙下寬以て之に居るべし。』

(一)互に其惡しきを正し、其誤れるを指摘する事　(二)誘ひ導きすゝめはげます心持　(三)曲げへり下りて。委曲は詳細の義に用ひらるゝ事普通なれども、こゝは身を委し曲ぐと解すべし

九川臥㆓病虔州㆒。先生云。病物亦難㆑格。覺得如何。對曰。功夫甚難。先生曰。常快活便是功夫。

九川病に虔州に臥す。先生云ふ、『(一)病物亦格し難し。覺り得ること如何。』對へて曰く、『功夫甚だ難し。』先生曰く、『常に快活なる便ち是れ功夫なり。』

(一)病も亦物也、之をたゞすこと亦容易の事にあらず

九川問。自省念慮或涉㆓邪妄㆒或預料㆓理天下事㆒。思到㆓極處㆒。井井有㆑

九川問ふ、『自ら省みるに、念慮或は邪妄に涉り、或は預め天下の事を(一)料理す。思うて極處に到れば、(二)井井として味有り。便ち(三)繾綣として屛け難し。覺り得ること早ければ則ち易く、覺ること遲ければ則ち難し。(四)力を用ひて克治すれば、

先生致知之說。莫下亦泄二天機一太甚上否。先生曰。聖人已指以示レ人。只爲二後人揜匿一。我發明耳。何故說レ泄。此是人人自有的。覺來甚不二打緊一一般。然與下不レ用二實功一人上說。亦甚輕忽可レ惜二彼此無一レ益。與下實用レ功而不レ得二其要一者上提二撕之一甚沛然得レ力。

我れ發明(四)するのみ。何故に泄すと説くぞ。此は是れ人人の自ら有するもの、覺り(五)來らば甚だ打緊ならざると一般なり。然るに實功(六)を用ひざる人のために説くときは、亦甚だ輕忽にして、(七)彼此益無きを惜む可し。(八)實に功を用ひて而も其要を得ざる者のために之を提撕(九)すれば、甚だ沛然として力を得。』

(一) 程子易傳の序の語。體と用とは其原一、顯と微とに間(ヘダテ)無しとの說 (二) 天機は道の眞を指す、道の妙處を說き明したるをいふ (三) おはひかくす (四) そのおはひをひらきて之を明かにせるまで也 (五) 覺りて見れば日常平凡の事と何の變りもなし。打緊は緊切の意 (六) 著實の工夫を用ひざる人 (七) 實に功を用ひながら其要領を得ぬ人 (八) 聽く人も說く人も共に (九) 提撕に同じ、扶持する意

又曰。知來本無レ知。覺來本無レ覺。然不レ知則遂淪埋。

又曰く、『知り來りて本知無く、覺り來りて本覺無し。然れども知らざれば則ち遂に淪埋(一)せん。』

(一) 道は之を知り之を覺りて見れば知るも覺るもなき事なり、されはとて之を知らざればしづみ埋れて昏しと也

先生曰。大凡

先生曰く、『大凡朋友は須らく箴規指摘(一)する處少く、誘掖獎勸(二)する意多かるべ

於二致知之說一體驗如何。九川曰。自覺レ不レ同。往時操持。常不レ得二箇恰好處一。此乃是恰好處。先生曰。可レ知二是體來與レ聽レ講不レ同。我初與講時。知二爾只是忽易未レ有二滋味一。只這箇要妙。再體二到深處一。日見レ不レ同。是無二窮盡的一。又曰。此致知二字。眞是箇千古聖傳之祕。見二到這裏一。百世以俟二聖人一而不レ惑。

からざるを覺ゆ。往時は操持するに、常に箇の恰好(一)の處を得ざりしに、此れ乃ち是れ恰好の處たり。』先生曰く、『是れ體し(二)來ると講を聽くとの同じからざるを知る可し。我れ初め與に講ずる時、爾が只だ是れ忽易(三)にして未だ滋味を有せざりしを知る。只だ這箇の要妙、再び深處に體到するときは、日に同じからざるを見ん。是れ窮り盡くること無きものなり。』又曰く、『此の致知の二字たる、眞に是れ箇の千古聖傳の祕にして、這裏に見到れば、百世以て聖人を俟ちて惑はず。』

(一) 心に斯うなりと良知を體認する所　(二) 體認　(三) ゆるがせにかろ〳〵しく考へて

九川問曰。伊川說二到體用一原顯微無レ間處一。門人已說。是泄二天機一。

九川問うて曰く、『伊川(一)が體用一原顯微間無き處に說き到るや、門人已に說きて、是れ天機(二)を泄すなりと。先生の致知の說は、亦天機を泄すの太甚しきこと莫きや否や。』先生曰く、『聖人已に指して以て人に示す。只だ後人の揜匿(三)するが爲に、

先生曰。人若知二這良知訣竅一。隨二他多少邪思枉念一。這裏一覺。都自消融。眞箇是靈丹一粒。點レ鐵成レ金。

先生曰く、『人若し這の良知の訣竅(一)を知り、他の多少の邪思枉念に隨つて、這裏一たび覺らば、都て自ら消融す。眞箇に是れ靈丹(二)一粒、鐵を點じて金を成すなり。』

(一) 祕訣、眞訣　(二) 靈丹金を成す、これ神仙不死の藥方也、以て一點の良知凡人を化して聖人となすの義に喩ふ

崇一曰。先生致知之旨。發二盡精蘊一。看二來這裏一再去不レ得。先生曰。何言之易也。再用レ功半年看二如何一。又用レ功一年看二如何一。功夫愈久。愈覺レ不レ同。此難二口說一。

崇一曰く、『先生の致知の旨は、精蘊(一)を發し盡す。這裏を看來れば再び去り得ず。』先生曰く、『何ぞ言ふことの易き(二)や。再び功を用ふる半年にして如何を看よ。又功を用ふる一年にして如何を看よ。功夫愈〻久しければ、愈〻同じからざるを覺えん。此れ口說し難し。』

(一) 精微蘊奥を發せり　(二) 其言は誤まれるにあらねど、輕卒に言ひ去つて其内に眞實の工夫なきを以て之を戒めし也

先生問二九川一。

先生九川に問ふ、『致知の說に於て體驗するところ如何。』九川曰く、『自ら同じ

却何故謙。起來謙亦不レ得。于中乃笑受。又論良知在レ人。隨二爾如何一。不レ能二泯滅一。雖二盜賊一亦自知レ不レ當レ爲レ盜。喚レ他做レ賊。他還忸怩。于中曰。只是物欲遮蔽。良心在レ内自不レ會レ失。如二雲自蔽一レ日。日何嘗失了。先生曰。于中如レ此聰明。他人見不レ及レ此。

は此に及ばず。』

(一)先生曰く　(二)其言葉につけて　(三)敢て其御言葉に當らずと謙退する也　(四)これは自己にそなはり有るものなれば　(五)推讓せんとすべからず　(六)謙退の辭、御言葉の程心得兼ねますといふが如き口吻　(七)先生論ず　(八)愧づる色あらん

先生曰。這些子看得透徹。隨二他千言萬語一。是非誠僞到レ前便明。合得的便是。合不レ得的便非。如三佛家說二心印一相似。眞是箇試金石。指南針。

先生曰く、『(一)這の些子を看得て透徹すれば、他の千言萬語に隨つて、是非誠僞前に到れば便ち明かなり。(二)合ひ得るは便ち是にして、合ひ得ざるは便ち非なり。(三)佛家の心印を說くが如く相似たり。眞に是れ箇の(四)試金石、指南針たり。』

(一)このちつとばかりのものの意、良心をいふ　(二)其良心に合ひ得るものは　(三)心印は悟道見性をいふ。祖庭事苑に「達磨西來不レ立二文字一、單傳二心印一」　(四)試金石は金銀の眞僞を試驗するに用ふる石、我が那智の黑石は卽ちこの一種といふ、指南針は磁石也。以て標準法則の義に喩ふ

這些眞機。如何去格物。我亦近年體貼出來如此分明。初猶疑。只依他恐有不足。精細看來無些小欠闕。

在虔與于中謙之同侍先生曰。人胸中各有箇聖人。只自信不及。都自埋倒了。因顧于中曰。爾胸中原是聖人。于中起不敢當。先生曰。此是爾自家有的。如何要推。于中又曰。不敢。先生曰。衆人皆有之。况在于中。

虔に在りて于中・謙之と、同じく先生に侍す。(一)曰く、『人の胸中には各々箇の聖人有り。只だ自信及ばず。都て自ら埋倒するのみ。』(二)因つて于中を顧みて曰く、『爾の胸中も原是れ聖人なり。』于中起ちて『敢て當らず』(三)といふ。先生曰く、(四)『此は是れ爾自家有のもの、如何ぞ推すを要せん。』(五)于中又曰く、『敢てせず。』(六)先生曰く、『衆人皆之を有す。況や于中に在りてや、却つて何故に謙するぞ。起ち來りて謙するも亦得ず』と。于中乃ち笑つて受く。(七)又論ず、『良知は人に在りて、爾の如何するに隨ふとも泯滅すること能はず。盜賊と雖も亦自ら盜を爲すべからざるを知る。他を喚びて賊と做さば、他還つて忸怩たらん。』(八)于中曰く、『只だ是れ物欲の遮蔽にして、良心は内に在りて、自ら失ふことを會せず。雲の自ら日を蔽ふが如し。日何ぞ嘗て失はれんや。』先生曰く、『于中は此の如く聰明なり。他人の見

然雖レ尋ニ箇穩當快樂處一。先生曰。爾却去三心上尋ニ箇天理一。此正所レ謂理障。此間有ニ箇訣竅一。曰。請問如何。曰。只是致レ知。曰。如何致。曰。爾那一點良知。是爾自家底準則。爾意念著處。他是便知レ是非便知レ非。更瞞他一些不レ得。爾只不レ要レ欺他。實實落落依ニ著他一做去。善便存惡便去。他這裏何等穩當快樂。此便是格物的眞訣。致知的實功。若不レ靠ニ著

何。』曰く、『只だ是れ知を致すなり。』曰く、『如何にして致すべきや。』曰く、『爾が那の一點の良知は、是れ爾が自家底（五）の準則にして、爾が意念の著く處、他是（六）なれば便ち是と知り、非なれば便ち非と知る。更に他を瞞くと一些（七）も得ず。爾只だ他を欺くを要せず、（八）實實落落他に依著して做さば、善は便ち存し惡は便ち去らん。他の這裏何等の穩當快樂ぞ。此は便ち是れ格物の眞訣にして、致知の實功なり。若し這些（九）の眞機に靠著（一〇）せずんば、如何ぞ物を格し去らん。我れ亦近年體貼（一一）し出で來りて此の如く分明なり。初は猶ほ疑ふ、只だ他に依らば恐らくは足らざる有らんと。精細に看來れば些小の欠闕だに無し。』

（一）主意眼目　（二）おだやかにやすらかなる處　（三）佛家の語、圓覺經に出づ、既に是の理を明かにして又之を執持し却つて其理の爲めに障らる丶をいふ　（四）祕訣、眞訣の意　（五）自己ののつとるべきのり　（六）良知を指す、良知が其意念の是なるをば是と知り非なるをば非と知る、決して良知を欺くべからず　（七）ほんの少し　（八）著實に良知によりつきてなさば　（九）此の眞機、良心をいふ　（一〇）依著といふに同じ　（一一）體認といふに同じ

又問。陸子之學何如。先生曰。濂溪明道之後。還是象山。只還粗些。九川曰。看二他論一レ學。篇篇說二出骨髓一。句句似レ鍼二膏肓一。却不レ見二他粗一。先生曰。然。他心上用二過功夫一。與三揣摹依倣求二之文義一自不レ同。但細看有二粗處一。用レ功久當レ見レ之。

又問ふ、『陸子の學は何如。』先生曰く、『濂溪・明道の後は、(一)還つて是れ象山なり。(二)只だ還つて粗なること些かなり。』九川曰く、『他の學を論ずるを看るに、篇篇骨髓を說き出し、(三)句句膏肓に鍼するに似たり。却つて他の粗なるを見ず。』先生曰く、『然り。他は心上に功夫を用ひ過ぎたり。(四)揣摹依倣して之を文義に求むると、自ら同じからず。但だ細かに看れば粗き處有り。功を用ふること久しうして當に之を見るべし。』

(一) 周茂叔・程明道の後には　(二) 陸象山　(三) 文の說く所皆主眼骨髓にして句々人の最も深き病根に鍼するが如し　(四) 聖人の道をおしはかり、古人の說を摸倣して、道を文義の上に求むる者とは自ら相異なり

庚辰往二虔州一。再見二先生一問。近來功夫。雖レ若三稍知二頭腦一。

庚辰虔州に往き、再び先生に見えて問ふ、『近來功夫稍や頭腦を知るが若しと(一)雖も、然れども箇の穩當快樂の處を尋ね難し。』先生曰く、『爾は却つて心上に箇の天理を尋ね去る。此れ正に所謂理障なり。(三)此間に箇の訣竅有り。』(四)曰く、『請ひ問ふ如

皆有二內外一。卽如二惟濬今在レ此講論一。又豈有二一心在レ內照管一。這聽二講說一時專敬。卽是那靜坐時心。功夫一貫。何須三更起二念頭一。人須下在二事上一磨鍊做中功夫上。乃有レ益。若只好レ靜。遇レ事便亂。終無二長進一。那靜時功夫亦差。似二收斂一而實放溺也。後在二洪都一。復與二于中國裳一論二內外之說一。渠皆云。物自有二內外一。但要三內外並著二功夫一。不レ可レ有レ間耳。以質二先生一。曰。功夫不レ離二本體一。本體原無二內外一。只爲下後來做二功夫一的分中了內外上。失二其本體一了。如今正要レ講二明功夫一。不レ要レ有二內外一。乃是本體功夫。是日俱有レ省。

まば、事に遇ひて便ち亂れ、終に長進する無く、那の靜時の功夫も亦差ふ。收斂に似て實は放溺なり。』後洪都に在りて、復た于中・國裳と、內外の說を論ず。(七)渠皆云ふ、『物自ら內外有り。但だ內外並びに功夫を著くるを要す。間有る可からざるのみ』と。以て先生に質す。曰く、『功夫は本體を離れず。本體には原內外無し。只だ後來功夫を做すに內外を分つがため、其本體を失す。如今は正に功夫を講明せんことを要し、內外有ることを要せず。乃ち是れ本體の功夫なり。』是の日倶に省るところ有り。

㊀ 事に遇ふと其工夫がたえる ㊁ そこでそばからはつと氣を付けて其事の上に於て省察す ㊂ 前の靜坐法を爲すに ㊃ 內心と外事と合して一とならず、工夫支離滅裂となる ㊄ 一つの心が內に在りて照料して管理するといふ譯に非ず ㊅ 殊更に別に念頭を起して注意するといふ要はなし ㊆ 彼等兩人

只是雖二聞見一而不二流去一便是。曰。昔有レ人靜坐。其子隔レ壁讀レ書。不レ知二其勤惰一。程子稱二其甚敬一何如。曰。伊川恐亦是譏レ他。

れ他を譏れるならん。』

(一) 心を收むるに功を用ふる時　(二) 先生曰く　(三) それでは只槁木死灰といふもの也、聾盲の人ならばそれでよし、五體備る人として聞見せざらんと欲する如き事はあるまじき事也　(四) 聲色に心流れ去らずばそれにて可也　(五) 伊川が其だ敬むといへるは、亦彼を譏る意にての言ならん

又問。靜坐用レ功。頗覺二此心收斂一。遇レ事又斷了。旋起二箇念頭一。去二事上省察一。事過又尋二舊功一。還覺レ有二內外一打不レ作二一片一。先生曰。此格物之說未レ透。心何

又問ふ、『靜坐して功を用ふるに、頗る此心の收斂するを覺ゆ。(一)事に遇へば又斷じ了る。(二)旋て箇の念頭を起して、事上に省察し去り、事過ぐれば又舊功を尋ぐに、還つて(四)內外打ちて一片と作らざると有るを覺ゆ。』先生曰く、『此れ(三)格物の說未だ透らざるなり。心何ぞ嘗て內外有らん。卽ち惟濬今此に在りて講論するが如し、又豈に(五)一心內に在りて照管する有らんや。這の講說を聽く時專ら敬むは、卽ち是れ那の靜坐の時の心にして、功夫は一貫なり。(六)何ぞ更に念頭を起すを須ひん。人須らく事上に在りて磨錬して功夫を做すべし。乃ち益有らん。若し只だ靜を好

懼即是念。何分二動靜一。曰。周子何以言レ定之以二中正仁義一而主レ靜。曰。無レ欲故靜。是靜亦定動亦定的定字。主二其本體一也。戒懼之念是活潑潑地。此是天機不レ息處。所レ謂維天之命於穆不レ已。一息便是死。非二本體之念一。即是私念。

非ず。即ち是れ私念なり。』

(一)とりとめもなく只徒に慱からんとする學 (二)さわがしく亂るゝこと (三)正しき念なるを要す (四)前にも詳說見ゆ、動なき靜は虛靜にして所謂槁木死灰なり、靜なき動は妄動にして私欲私念たり、本體は常に動き常に靜なる也 (五)前出、太極圖說の語 (六)中庸に謂ふ所の「其睹ざる所に戒愼し、其聞かざる所に恐懼す」との念は、生氣みち〳〵て活潑きはまりなきもの也 (七)詩大雅、維天之命篇語。天の命は四時流行して少しの間も息むことなき意、以て吾が念の常に活潑して止まざるにたとふ

又問。用レ功收レ心時。有二聲色在一レ前。如二常聞見一。恐不二是專一一。曰。如何欲レ不二聞見一。除是槁木死灰。耳聾目盲則可。

又問ふ、『功を用ひて心を收むる時、聲色の前に在る有れば、常に聞見するが如し。恐らくは是れ專一ならざらん。』曰く、『如何ぞ聞見せざらんとは欲する。除だ是れ槁木死灰、耳聾し目盲すれば則ち可なり。只だ是れ聞見すと雖も、流れ去らざれば便ち是なり。』曰く、『昔人有りて靜坐す。其子、壁を隔てゝ書を讀む。其の勤惰を知らず。程子其の甚だ敬むことを稱す。如何。』曰く、『伊川恐らくは亦是

字。只還他一物字便是。後有人問九川曰。今何不疑物字。曰。中庸曰。不誠無物。程子曰。物來順應。又如物各付物。胸中無物之類。皆古人常用字也。他日先生亦云然。

九川問。近年因厭泛濫之學。每要靜坐求屏息念慮。非惟不能。愈覺擾擾。如何。先生曰。念如何可息。只是要正。曰。當自有無念時否。先生曰。實無無念時。曰。如此卻如何言靜。曰。靜未嘗不動。動未嘗不靜。戒謹恐

九川問ふ、『近年泛濫(一)の學を厭ふに因りて、毎に靜坐して念慮を屏息せんことを求めんと要す。惟だ能はざるのみに非ず、愈〻擾擾(二)を覺ゆ。如何。』先生曰く、『念は如何ぞ息む可けんや。只だ是れ正しきを要す。』曰く、『當に自ら念無き時有るべきや否や。』先生曰く、『實に念無き時(三)無し。』曰く、『此の如きに却つて如何ぞ靜を言ふや。』曰く、『靜(四)は未だ嘗て動かずんばあらず。動は未だ嘗て靜ならずんばあらず。戒謹恐懼は卽ち是れ念なり。何ぞ動靜を分たん。』曰く、『周子(五)は何を以て、之を定むるに中正仁義を以てして靜を主とすと言ふや。』曰く、『欲すること無し故に靜なり。是れ靜にも亦定り動にも亦定るの定の字にして、其本體を主とするなり。戒懼の念は、是れ活潑潑地にして、此は是れ天機の息まざる處なり。所謂維(七)天の命於穆(六)として已まざるものなり。一たび息めば便ち是れ死す。本體の念に

破二數年之疑一。又問。甘泉近亦信二用大學古本一。謂格物猶レ言レ造レ道。又謂窮レ理如下窮二其巢穴一之窮上。以レ身至レ之也。故格レ物亦只是隨レ處體二認天理一。似下與二先生之說一漸同上。先生曰。甘泉用レ功所二以轉得來一。當時與說二親民字不レ須レ改。他亦不レ信。今論二格物一亦近。但不レ須下換二物字一作中理

信用す。謂へらく物に格るは猶ほ道に造ると言ふがごとしと。又謂へらく理を窮むるは其巢穴を窮むの窮むの如く、身を以て之に至るなり。故に物に格るも亦只だ是れ處に隨ひて天理を體認すと。先生の說と漸く同じきに似たり。』先生曰く、『甘泉功を用ふ。轉じ得來る所以なり。當時與に親民の字須らく改むべからずと說きしも、他亦信ぜず。今格物を論ずる亦近し。但だ須らく物の字を換へて理の字と作すべからず。只だ他の一の物の字を還して便ち是なり』と。後人有り九川に問うて曰く、『今何ぞ物の字を疑はざる。』曰く、『中庸に曰く、誠ならざれば物無しと。程子曰く、物來りて順應すと。又物各〻物に付く、胸中物無しの類の如き、皆古人の常に用ひし字なり』と。他日先生も亦云ふ然りと。

(一) 格物は陽明の說にては正物の義也、こゝは造レ道と對すればなは至物と解せざるを得ず、然るに下文に於て陽明が「轉じ得來る所以」といへるを見れば或は正レ物の意かと、先人既に之を疑へり、されど「亦近し」といふより見れば、其見解の一步進めるを稱せるに、之を是認せるに非ざるを知るべく、甘泉の言は矢張り至物の意と解すべからん (二) 大學の親民を新民と改め說くべからずと (三) その物の字をそのまゝにして「處に隨ひて天理を體認す」と謂はずして「處に隨ひて物を體認す」といへばそれてそのまゝ是となるとの意ならん

何與二身心意知一是一件。先生曰。耳目口鼻四肢身也。非レ心安能視聽言動。心欲二視聽言動。無二耳目口鼻四肢一。亦不レ能。故無レ心則無レ身無レ身則無レ心。但指二其充塞處一言レ之謂二之身一。指二其主宰處一言レ之謂二之心一。指二心之發動處一謂二之意一。指二意之靈明處一謂二之知一。指二意之涉著處一謂二之物一。只是一件意。未レ有二懸空的。必著二事物。故欲レ誠レ意則隨二意所レ在二某事一而格レ之。去二其人欲一而歸二於天理一。則良知之在二此事一者。無レ蔽而得レ致矣。此便是誠意的功夫。

れば則ち心無し。但だ其充塞する處を指して之を言へば之を身と謂ひ、其主宰する處を指して之を言へば之を心と謂ひ、心の發動する處を指して之を意と謂ひ、意の靈明なる處を指して之を知と謂ひ、意の涉著(三)する處を指して之を物と謂ふ。只だ是れ一件の意にして、未だ懸空(四)なるもの有らず、必ず事物に著く。故に意を誠にせんと欲すれば、則ち意の某事に在る所に隨ひて之を格し、其人欲を去りて、天理に歸すれば、則ち良知の此事に在る者は、蔽無くして致すを得。此れ便ち是れ誠意の功夫なり」と。

(一) 前に出づ　(二) 身といひ心といひ意といひ知といひ、只一つのものをそれ〴〵の方面より見たる名にて各別に存在する譯には非ず　(三) わたりつく、交涉して其上につく　(四) 空漠なることなく必ず何かの事物に著く

九川乃釋然。

九川乃ち釋然として、數年の疑を破る。又問ふ、「甘泉近ごろ亦大學の古本を

意。自明明德於天下。步步推入根源。到誠意上再去不得。如何以前又有格致工夫。後又體驗覺得。意之誠僞必先知覺。乃可以顏子有不善未嘗不知。知之未嘗復行僞證。豁然若無疑。却又多了格物功夫。又思來吾心之靈。何有不知意之善惡。只是物欲蔽了。須格去物欲。始能如顏子未嘗不知耳。又自疑。功夫顚倒與誠意不成片段。後問希顏。希顏曰。先生謂。格物致知。是誠意功夫。極好。九川曰。如何是誠意功夫。希顏令再思體看。九川終不悟請問。

る所なく工夫なきが如し、されば誠意以前に格物の工夫ある筈なしと (九) 意の誠と僞は先づ良知が知り覺る、されば誠意の前に致良知の工夫あるべき也 (一〇) 易係辭下に出でたる語 (一一) からりと悟り得て疑無きがごとし (一二) その爲めに又更に格物の工夫を多くせり (一三) 格物の工夫が後さきになりてどうしてもうまく誠意の工夫と一致せざるを疑ふ (一四) 九川の同僚ならん、傳未詳 (一五) 其わけを說明せず、再思して自身の身に體驗してよく考察せしむ

先生曰。惜哉。此可一言而悟。惟濬所擧顏子事。便是了。只要知身心意知物是一件。九川疑曰。物在外如

先生曰く、『惜しいかな。此れ一言にして悟る可し。(一)惟濬が擧ぐる所の顏子の事、便ち是れなり。只だ(二)身心意知物是れ一件なるを知るを要す。』九川疑うて曰く、『物は外に在るに、如何ぞ身心意知と是れ一件ならん。』先生曰く、『耳目・口鼻・四肢は身なり。心に非ずんば安ぞ能く視聽言動せん。心、視聽言動せんと欲するも、耳目・口鼻・四肢無くんば、亦能はず。故に心無ければ則ち身無く、身無け

物遺貫。先生答云。但能實地用功。久當自釋。山間乃自錄大學舊本。讀之覺朱子格物之說非是。然亦疑。先生以意之所在爲物。物字未明。己卯歸自京師。再見先生於洪都。先生兵務倥傯。乘隙講授。首問近年用功何如。九川曰。近年體驗得明明德功夫只是誠

天下に明かにするより、歩歩根源に推入し、誠意上に到りて、再び去り得ず。(八)如何ぞ以前に又格致の工夫有らんと。後又體驗し覺り得たり。(九)意の誠僞は必ず先づ知覺す。乃ち顏子(一〇)不善有れば未だ嘗て知らずんばあらず、之を知れば未だ嘗て復行はざるを以て證と爲す可しと。(一一)豁然として疑無きが若し。(一二)却つて又格物の功夫を多くす。又思ひ來るに、吾が心の靈、何ぞ意の善惡を知らざる有らんや。只だ是れ物欲蔽ふ。須らく物欲を格ぎ去るべし。始めて能く顏子の未だ嘗て知らずんばあらざる如きなるのみ。又自ら疑ふ、(一三)功夫顚倒して誠意と片段を成さゞるを。後希顏に問ふ。希顏曰く、先生謂ふ、格物致知は、是れ誠意の功夫なりと、極めて(一四)好しと。九川曰く、如何なれば是れ誠意の功夫なりやと。(一五)希顏再思體看せしむ。九川終に悟らず。請ひ問ふ。』

(一) 陳九川、自稱也 (二) 湛氏、名は若水、字は原明、文簡と諡す、隨處に天理を體認するを以て學の宗旨とせり (三) 舊說の如きは事物の理を心に求めずして外に求むる也 (四) 孟子盡心の章也、その論川に出づ (五) 嘗を先生にゐくりて問ひたゞす (六) 山中に在りて (七) 軍務にいそがはしくして (八) こゝに至つて盡ききはまり他に去

正德乙亥。九川初見二先生於龍江一。先生與二甘泉先生一。論二格物之說一。甘泉持二舊說一。先生曰。是求二之於外一了。甘泉曰。若以レ格二物理一爲レ外。是自小二其心一也。九川甚喜二舊說之是一。先生又論二盡心一章一。九川一聞却遂無レ疑。後家居。復以二格

巻之下（續錄）

正德乙亥、（一）九川初めて先生に龍江に見ゆ。先生甘泉（二）先生と、格物の說を論ず。甘泉舊說を持す。先生曰く、（三）『是れ之を外に求むるなり。』甘泉曰く、『若し物理に格るを以て外と爲さば、是れ自ら其心を小にするなり。』九川甚だ舊說の是なるを喜ぶ。先生又盡心（四）の一章を論ず。九川一たび聞いて却つて遂に疑無し。後家居して、復た格物を以て（五）遺り質す。先生答へて云ふ、『但だ能く實地に功を用ひば、久しうして當に自釋すべし』と。（六）山間乃ち自ら大學の舊本を錄し、之を讀みて朱子格物の說の是に非ざるを覺る。然れども亦疑ふ。先生は意の在る所を以て物と爲す。物の字未だ明かならず。己卯京師より歸り、再び先生に洪都に見ゆ。先生兵務（七）倥偬として、隙に乘じて講授す。首として近年功を用ふる何如を問ふ。九川曰く、『近年明德を明かにするの功夫は只だ是れ誠意なることを體驗し得たり。明德を

童子之心一使中其樂レ習不レ倦而無上レ暇レ及二於邪僻一。教者如此。則知レ所レ施矣。雖レ然此其大略也。神而明レ之。則存二乎其人一。

(一) 書物を伏せて暗誦し (二) 教を施す所を知る (三) 易上係辭の文に取る。其教育をして神の如くして發明效果あらしめんといふ段になれば、そは教ふる人其人に在りと也

徒多。但貴ニ精熟一。量ニ其資稟一。能ニ二百字一者。止可三授以ニ一百字一。常使ニ精神力量有レ餘。則無ニ厭苦之患一。而有ニ自得之美一。諷誦之際。務令下專レ心一レ志。口誦心惟。字字句句。紬繹反覆。抑ニ揚其音節一。寛中虚其心意上。久則義禮浹洽。聰明日開矣。

字を能くする者には、止だ授くるに一百字を以てすべし。常に精神力量をして餘有らしめば、則ち厭苦(二)の患無くして、自得の美有り。諷誦の際、務めて心を專にし志を一にし、口に誦し心に惟ひ、字字句句、紬繹(三)反覆して、其音節を抑揚し、其心意を寛虚ならしむ。久しければ則ち義禮(四)浹洽し、聰明日に開けん。

(一) 兒童のそれ〴〵天より受けたる資質 (二) 書を讀むことをいとひつらがる (三) つむぎ出す意、其意味を探り求むるをいふ (四) 欄外書に、南本には禮を理に作るといへり。浹洽は身にあまねくしみわたるをいふ

毎日工夫。先考レ德。次背レ書誦レ書。次習レ禮。或作ニ課倣一。次復誦レ書講レ書。次歌レ詩。凡習禮歌詩之類。皆所下以常存ニ

毎日の工夫、先づ德を考へ、次に書に(一)背き書を誦し、次に禮を習ひ、或は課倣を作し、次に復た書を誦し書を講じ、次に詩を歌ふ。凡そ習禮・詩歌の類、皆常に童子の心を存し、其をして習ふを樂みて倦まず、邪僻に及ぶに暇無からしむる所以なり。教ふる者此の如くすれば、則ち施す(二)所を知る。然りと雖も此れ其大略なり。(三)神にして之を明にするは、則ち其人に存す。

澄レ心肅レ慮。務ニ其儀節。度中其容止上。毋ニ忽而惰。毋ニ沮而怍。毋ニ徑而野。從容而不レ失ニ之迂緩。修謹而不レ失ニ之拘局。久則體貌習熟。德性堅定矣。童生班次。皆如ニ歌詩。每レ間ニ一日。則輪ニ一班習レ禮。其餘皆就レ席。斂レ容肅觀。習禮之日。免ニ其課倣。每十日則總ニ四班遞ニ習於本學。每朔望則集ニ各學。會ニ習於書院。

須要す。(二)忽にして惰ること毋れ。(三)沮んで怍ること毋れ。(四)徑にして野なること毋れ。(五)從容として之を迂緩に失せず、修謹して之を拘局に失せず。久しければ、則ち體貌習熟し、德性堅定せん。(六)童生の班次、(七)皆歌詩の如し。一日を間つる每に、則ち一班を輪して禮を習はしめ、其餘は皆席に就き、容を斂め肅みて觀る。習禮の日は、其課倣を免じ、每十日則ち四班を總べて、本學に遞習せしめ、每朔望則ち各學を集め、書院に會習せしむ。

(一)其の儀を爲すのかたち態度のよろしきに叶ふことをもとむべし　(二)よい加減にしてなませなことたること勿れ　(三)從容を爲すをはゞかりはづかしがる勿れ　(四)づかづかと無遠慮にやりて野鄙なる勿れ　(五)ゆつたりとして而も迂遠緩漫にならず　(六)をさめつゝしみて而もいじけかゞまることなきやうにすべし　(七)前項詩を歌ふの例にならふと也

凡授レ書。不レ在ニ

凡そ書を授くるは徒らに多きに在らず、但だ精熟を貴ぶ。(一)其資稟を量り、二百

對。有則改ㇾ之。無則加ㇾ勉。教讀復隨ㇾ時就ㇾ事。曲加ニ誨諭開發一。然後各退就ㇾ席肄ㇾ業。

凡歌ㇾ詩。須下要整ㇾ容定ㇾ氣。清ニ朗其聲音一。均中審其節調上。毋ニ躁而急一。毋ニ蕩而囂一。毋ニ餒而懾一。久則精神宣暢。心氣和平矣。每學量ニ童生多寡一。分爲ニ四班一。每日輪ニ一班一歌ㇾ詩。其餘皆就ㇾ席。斂ㇾ容肅聽。每五日則總ニ四班一。遞ニ歌於本學一。每朔望集ニ各學一。會ニ歌於書院一。

凡そ詩を歌ふは、容を整へ氣を定め、其聲音を清朗にして、其節調を均審せんことを須要す。（一）躁いで急なる毋れ。蕩いて囂しきこと毋れ。餒ゑて懾くこと毋れ。久しければ則ち精神宣暢し、心氣和平ならん。每學童生の多寡を量り、分ちて四班と爲し、每日（二）一班を輪して詩を歌はしむ。其餘は皆席に就き、容を斂めて肅んで聽く。每五日に則ち四班を總べて、本學に遞歌せしめ（三）、每朔望（四）に各學を集めて、書院に會歌せしむ。

㊀心さわぎて急ならぬやう、心放逸にしてかまびすしくならぬやう、心氣乏しくしてびく〳〵とせぬやう ㊁一組づゝ輪番に ㊂順々に代り合ひて歌はせ ㊃朔は一日、望は十五日

凡習ㇾ禮。須下要

凡そ禮を習ふは、心を澄し慮を肅み、其儀節を審かにし、（一）其容止を度らんことを

毎日清晨。諸生參揖畢。教讀以次遍詢諸生在家。所以愛親敬長之心。得無懈忽未能眞切否。溫凊定省之儀。得無虧缺未能實踐否。往來街衢。步趨禮節。得無放蕩未能謹飭否。一應言行心術。得無欺妄非僻。未能忠信篤敬否。諸童子務要各以實

教約（一）

毎日清晨（二）に、諸生參揖（三）し畢りて、教讀次を以てし、遍く諸生の家に在りて、親を愛み長を敬ふ所以の心の、懈忽（四）して未だ眞切なる能はざる無きを得るや否や、溫凊定省（五）の儀の、虧缺して未だ實踐する能はざる無きを得るや否や、街衢を往來するに、步趨禮節の、放蕩して未だ謹飭なる能はざる無きを得るや否や、一應（六）言行心術の、欺妄非僻にして、未だ忠信篤敬なる能はざる無きを得るや否やを詢ひ、諸々の童子務めて各々實を以て對へ、有れば（七）則ち之を改め、無ければ則ち勉を加ふるを要す。教讀復た時に隨ひ事に就き、曲に誨諭開發を加へ、然る後に各々退きて席に就き業を肄ふ（八）。

（一）學則といふ類、師弟の俱に遵守すべき規約にして、前の訓蒙に附屬す　（二）早朝の氣爽かなる時　（三）參り合ひて挨拶の禮を爲す、所謂朝禮式也　（四）おこたりゆるがせにして　（五）事のおこなひ也、前に出づ　（六）凡そといふに同じ、概して、總じて　（七）以上に揭ぐるが如き行爲の缺陷あれば　（八）學業を習ふ

縲縛。若レ待ニ拘囚一。彼視ニ學舍一。如ニ囹獄一。而不レ肯レ入。視ニ師長一如ニ寇仇一。而不レ欲レ見。竊避掩覆。以遂ニ其嬉遊一。設レ詐飾レ詭。以肆ニ其頑鄙一。偸薄庸劣。日趨ニ下流一。是蓋驅ニ之於惡一。而求ニ其爲ヒ善也。何可レ得乎。凡吾所ニ以教一。其意實在ニ於此一。恐時俗不レ察。視以爲レ迂。且吾亦將レ去。故特叮嚀以告ニ爾諸教讀一。其務體ニ吾意一。永以爲レ訓。毋下輒因ニ時俗之言一。改中廢其縲墨上。庶成ニ蒙以養レ正之功一矣。念レ之念レ之。

し、偸薄庸劣日に下流に趨る。是れ蓋し之を惡に驅つて、而して其の善たらんを求むるなり。何ぞ得べけんや。凡そ吾が以て教ふる所は、其意實に此に在り。恐くは時俗察せずして、視て以て迂と爲さんを。且つ吾も亦將に去らんとす。故に特に叮嚀に以て爾諸〻の教讀に告ぐ。其れ務めて吾が意を體して、永く以て訓とせよ。輒く時俗の言に因つて、其縄墨を改廢すること毋れ。庶はくは蒙以て正を養ふの功を成さん。之を念へ之を念へ。

(一) 句讀は素讀也、課倣は課業也、これ〳〵の課を了へよと其課程を定めて嚴しく之を課するをいふ (二) 身をしめてそれだけのしるしをあらはすやうにさせる意 (三) きびしく取締ること囚人を待つが如し (四) 學ぶ者の (五) 先生のすきを窺ひ其監視を避け、自分のなす業事をおほひかくして遊びたはむれんとする情を遂ぐ (六) かたくなにいやしき情 (七) 先生のきびしき教へ方によりて兒童を惡しき方に驅り立て (八) この年三月致仕を乞ひしも允されざりし事年譜に見ゆ (九) 規則、おきて (一〇) 易蒙象傳に「蒙以養レ正聖功也」とあるを引く。童蒙をばよく教へ導きて以て其正を養ふの功を成就することを得んと也

幽抑結滯於音節上也。導レ之習レ禮者。非下但肅ニ其威儀一而已上。亦所下以周旋揖讓。而動盪其血脈一。拜起屈伸。而固中束其筋骸上也。諷レ之讀レ書者。非下但開ニ其知覺一而已上。亦所下以沈潛反復。而存ニ其心一。抑揚諷誦。以宣中其志上也。凡此皆所下以順ニ導其志意一。調ニ理其性情一。潛ニ消其鄙吝一。默ニ化其麤頑一。日使中之漸ニ於禮義一。而不レ苦ニ其難一。入ニ於中和一。而不上知ニ其故一。是蓋先王立教之微意也。

（一）たのしみ遊ぶことを喜びて取締まらるゝを憚る（二）のび〳〵として展げばえだが發達してのび生長し（三）くじきたわますれば衰へしぼむ（四）兒童の性質のおもむく向に從つてふるひはげます（五）氷や霜が草木の葉を枯し落す時は草木の生意は衰へて日々に枯れて行くやうになる、以て兒童の眞情に適合せざる嚴格一方の教育の弊にたとふる也（六）子供のをどり立ちよびさけぶ自然の情（七）禮を行ふのさまかたち也（八）心他に馳せずして內にひそみ打返し〳〵其心を存して（九）音の高低を揚しふしを付けて書を誦して（一〇）粗野にしてかたくたなるを默々の內に感化し（一一）微妙にして深きことゝおぼへ

若下近世之訓ニ蒙穉一者上。日惟督以ニ句讀課倣一。責ニ其檢束一。而不レ知ニ導レ之以上レ禮。求ニ其聰明一。而不レ知ニ養レ之以上レ善。鞭撻

近世の蒙穉を訓ふる者の若きは、日に惟だ督するに（一）句讀課倣を以てし、（二）其檢束を責めて、而も之を導くに禮を以てするを知らず、其聰明を求めて、而も之を養ふに善を以てするを知らず、（三）鞭撻繩縛、拘囚を待つが若し。（四）彼の學舍を視ると囹獄の如くにして、入るを肯ぜず、師長を視ること寇仇の如くにして、見るを欲せず、（五）窺避掩覆、以て其嬉遊を遂げ、詐を設け譎を飾り、以て其（六）頑鄙を肆に

舒暢之則條達。摧撓之則衰痿。今教童子。必使其趨向鼓舞。中心喜悅。則其進自不能已。譬之時雨春風霑被卉木。莫不萌動發越。自然日長月化。若氷霜剝落。則生意蕭索。日就枯槁矣。故凡誘之歌詩者。非但發其志意而已。亦所以洩其跳號呼嘯於詠歌宣其

に、必ず其趨向(四)を鼓舞し、中心を喜悅せしむれば、則ち其進むこと自ら已む能はず。之を時雨春風の卉木を霑被すれば、萌動發越して、自然に日に長じ月に化せざる莫く、若し氷(五)霜剝落すれば、則ち生意蕭索して、日に枯槁に就くに譬ふ。故に凡そ之を誘うて詩を歌はしむる者は、但だ其志意を發するのみに非ず、亦其跳(六)號呼嘯を詠歌に洩して其幽抑結滯を音節に宣べしむる所以なり。之を導きて禮を習はしむる者は、但だ其威儀を肅むのみに非ず、亦周旋(七)揖讓して、其血脈を動盪し、拜起屈伸して、其筋骸を固束する所以なり。之を諷し書を讀ましむる者は、但だ其知覺を開くのみに非ず、亦沈潛(八)反復して、其心を存し、抑揚(九)諷誦して、以て其志を宣べしむる所以なり。凡そ此れ皆其志意を順導し、其性情を調理し、其鄙吝を潛消し、其麤頑(一〇)を默化し、日に之をして禮義に漸みて、其難きを苦しまず、中和に入りて、其故を知らざらしむる所以なり。是れ蓋し先王立教の微意なり。(一一)

以二入倫一。後世記誦詞章之習起。而先王之教亡。今教二童子一。惟當下以二孝弟忠信禮義廉恥一。爲中專務上。其栽培涵養之方。則宜下誘レ之歌レ詩以發二其志意一。導レ之習レ禮以肅二其威儀一。諷レ之讀レ書。以開中其知覺上。今人往往以二歌レ詩習レ禮爲レ不レ切二時務一。此皆末俗庸鄙之見。烏足三以知二古人立教之意一哉。

の教亡ぶ。今童子を教ふるには、惟だ當に孝弟・忠信・禮義・廉恥を以て專務と爲すべし。其栽培涵養の方は、則ち宜しく之を誘ひ詩を歌はしめて以て其志意を發し、之を導き禮を習はしめて以て其威儀を肅み、(二)之を諷し書を讀ましめて以て其知覺を開くべし。今の人往往詩を歌ひ禮を習ふを以て、時務に切ならずと爲す。此れ皆末俗庸鄙の見にして、焉ぞ以て古人立教の意を知るに足らんや。

(一) 陽明四十七歳、命を受けて贛の諸賊を平げ、其地に學校を建て、兒童を敎養す、敎讀は其學校の教師にて素讀等を敎ふる者の謂也　(二) 誘はいざなひ引連れる、導は先きに立ち手引す、諷はふしを附けて讀みて其あとに附かせる、何れも師がさきに立ちて遣つて見せる意を含めて見るべし

大抵童子之情。樂二嬉遊一而憚二拘檢一。如二草木之始萌芽一。

大抵童子の情として、嬉遊を樂みて拘檢を憚る。草木の始めて萌芽するが如く、之を舒暢(一)すれば則ち條達し、之を摧撓(二)すれば則ち衰痿す。今童子を教ふる

し。蓋し修身問學の功は、只だ是れ志を立て得るのみ。若し是の説を以て精一に合せば、則ち字字句句皆精一の功にして、是の説を以て敬義に合せば、則ち字字句句皆敬義の功なり。其諸々の格致・博約・忠恕等の説と、脗合せざる無し。但だ能く實心に之を體して、然る後に予が言の妄に非ざることを信ぜん。

(一) 其功を用ふる根本の旨趣に至つては少しの異なりも無く全く同一也 (二) 論語里仁に「曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣」 (三) 中庸に出づ (四) 歸宿する所 (五) どこ迄も不同なる者は邪説也 (六) 其中の一字一句 (七) この立志の説を前出諸聖賢の説に合はするに一としてぴたりと合はぬは無しと也 (八) まことの心を以て之を身に體して

若下人自爲レ説。有中不レ可二強同一者上。而求二其要領歸宿一。合二若符契一。何者。夫道一而已。道同則心同。心同則學同。其卒不レ同者。皆邪説也。後世大患。尤在レ無レ志。故今以レ立レ志爲レ説。中間字字句句莫レ非レ立レ志。蓋修身問學之功。只是立二得志一而已。若以二是説一而合二精一一。則字字句句皆精一之功。以二是説一而合二敬義一。則字字句句皆敬義之功。其諸格致博約忠恕等説。無レ不二脗合一。但能實心體レ之。然後信二予言之非一レ妄也。

訓蒙の大意教讀劉伯頌等に示す(一)

古之教者。教

古の教ふる者は、教ふるに人倫を以てす。後世記誦詞章の習起りて、先王

生。責二此志一。卽不レ慢。妬心生。責二此志一。卽不レ妬。忿心生。責二此志一。卽不レ忿。貪心生。責二此志一。卽不レ貪。傲心生。責二此志一。卽不レ傲。吝心生。責二此志一。卽不レ吝。蓋無三一息而非二立レ志責レ志之時一。無三一事而非二立レ志責レ志之地一。故責レ志之功。其於レ去二人欲一。有レ如二烈火之燎レ毛。太陽一出。而魍魎潛消一也。

自レ古聖賢。因レ時立レ教。雖レ若レ不レ同。其用レ功大指。無レ或二少異一。書謂惟精惟一。易謂敬以直レ內。義以方レ外。孔子謂格致誠正。博文約禮。曾子謂忠恕。子思謂尊二德性一而道二問學一。孟子謂集レ義養レ氣。求二其放心一。雖レ

古より聖賢時に因りて教を立つると、同じからざるが若しと雖も、其の功を用ふる大指は少異あること無し。書に謂ふ、『惟精惟一』と。易に謂ふ、『敬(一)以て內を直くし、義以て外を方にす』と。孔子謂ふ、『格致誠正、博文約禮』と。(二)曾子謂ふ、『忠恕』と。(三)子思謂ふ『德性を尊びて問學に道る』と。孟子謂ふ、『義を集め氣を養ふ』『其放心を求む』と。人〻自ら說を爲し、强ひて同ず可からざる者有るが若しと雖も、而も其要(四)領歸宿を求むれば、合すること符契の若し。何となれば、夫れ道は一のみ。道同じければ則ち心同じく、心同じければ則ち學同じければなり。其の卒(五)に同じからざる者は、皆邪說なり。後世の大患は、尤も志無きに在り。故に今志を立つるを以て說を爲す。(六)中間の字字句句志を立つるに非ざる莫

正レ目而視レ之。無二他見一也。傾レ耳而聽レ之。無二他聞一也。如二猫捕レ鼠。如二鷄覆レ卵。精神心思。凝聚融結。而不二復知レ有二其他一。然後此志常立。神氣精明。義理昭著。一有二私欲一。即便知覺。自然容住不レ得矣。故凡一毫私欲之萌。只責二此志不レ立。即私欲便退聽。一毫客氣之動。只責二此志不レ立。即客氣便消除。或怠心生。責二此志一。即不レ怠。忽心生。責二此志一。即不レ忽。懆心

ち忽にせず。(九)懆心の生ずる、此志を責むれば、即ち懆がず。妬心の生ずる、此志を責むれば、即ち妬まず。忿心の生ずる、此志を責むれば、即ち忿らず。貪心の生ずる、此志を責むれば、即ち貪らず。傲心の生ずる、此志を責むれば、即ち傲らず。吝心の生ずる、此志を責むれば、即ち吝ならず。蓋し一息として志を立て志を責むるの時に非ざる無く、一事として志を立て志を責むるの地に非ざるは無し。故に志を責むるの功たる、其の人欲を去るに於て、(一〇)烈火の毛を燎き、太陽一たび出でゝ、(一一)魍魎の潜消するが如き有り。

(一) 論語爲政篇に出づ (二) 志が立派に立つといふ意 (三) 孟子公孫丑上の語。志の向ふ所に氣が隨ふ即ち志は氣を率ふるの帥也 (四) 其事に一意專心にして他を顧みざる喩也 (五) 心の内に容れ住(トヾ)めおく事出來ず (六) 眞の氣に非ず私欲に生ずるうはべの氣也 (七) 志の立たざるを責むれば也、以下皆其意也 (八) ゆるがせにする心 (九) さわがしくして落著かぬ心 (一〇) 其勢の盛にして人欲はわけなく消え失するに喩ふる也 (一一) 妖怪

人也。猶曰。吾十有五而志于學。三十而立。立者志立也。雖至於不踰矩。亦志之不踰矩也。志豈可易而視哉。夫志氣之帥也。人之命也。木之根也。水之源也。源不濬則流息。根不植則木枯。命不續則人死。志不立則氣昏。是以君子之學。無時無處而不以立志爲事。

して學に志し、三十にして立つ』と。立つとは（二）志の立つなり。矩を踰えざるに至ると雖も、亦志の矩を踰えざるなり。志豈に易くして視る可けんや。夫れ（三）志は氣の帥なり。人の命なり。木の根なり。水の源なり。源濬からざれば則ち流息む。根植たざれば則ち木枯る。命續かざれば則ち人死す。志立たざれば則ち氣昏し。是を以て君子の學は、時と無く處として志を立つるを以て事と爲さゞる無し。目を正しうして之を視て、他見無し。耳を傾けて之を聽いて、他聞無し。（四）猫の鼠を捕ふるが如く、鷄の卵を覆ふが如く、精神・心思、凝聚融結して、復た其他有るを知らず。然る後に此志常に立ち、神氣精明・義理昭著、一たりとも私欲有らば、卽ち便ち知覺して、自然に（五）容住し得ず。故に凡そ一毫私欲の萌すや、只だ此志の立たざるを責むれば、卽ち私欲便ち退聽す。一毫（六）客氣の動くや、只だ此志の立たざるを責むれば、卽ち客氣便ち消除す。或は怠心の生ずる、此（七）志を責むれば、卽ち怠らず。（八）忽心の生ずる、此志を責むれば、卽

夫所謂考諸古訓者。聖賢垂訓。莫非教人去人欲。而存天理之方。若五經四書是已。吾惟欲去吾之人欲。存吾之天理。而不得其方。是以求之於此。則其展卷之際。眞如饑者之於食求飽而已。病者之於藥求愈而已。暗者之於燈求照而已。跛者之於杖求行而已。曾有徒事記誦講說。以資口耳之弊哉。

夫れ所謂諸を古訓に考ふる者は、聖賢の訓を垂るゝや、（一）人に人欲を去りて天理を存するの方を敎ふるに非ざる莫し。五經四書の若き是れのみ。吾れ惟だ吾の人欲を去りて、吾の天理を存せんと欲し、而も其方を得ずして、是を以て之を此に求むれば、則ち（二）其の巻を展ぶるの際、（三）眞に饑ゑたる者の食に於ける飽くことを求むるのみ、病める者の藥に於ける愈ゆることを求むるのみ、暗き者の燈に於ける照すことを求むるのみ、跛者の杖に於ける、行くことを求むるのみなるが如し。曾て徒らに記誦講說を事として、以て口耳に資するの弊有らんや。

（一）人に私欲を去りて天理を存するの仕方を敎ふるもののみ　（二）斯る人の聖賢の書巻をひもとく際には　（三）只それを求むるに精一にして他意なしとの喩也

夫立志亦不易矣。孔子聖

夫れ志を立つるも亦易からず。孔子は聖人なるに、猶ほ曰く、『（一）吾れ十有五に

惟在此心之純乎天理。而無人欲耳。欲此心之純乎天理而無人欲。則必去人欲而存天理。務去人欲而存天理。則必求所以去人欲而存天理之方。求所以去人欲而存天理之方。則必正諸先覺。考諸古訓。而凡所謂學問之功者。然後可得而講。而亦有所不容已矣。夫所謂正諸先覺者。既以其人爲先覺而師之矣。則當專心致志。惟先覺之爲聽。言有不合。不得棄置。必從而思之。思之不得。又從而辨之。務求了釋。不敢輒生疑惑。故記曰。師嚴然後道尊。道尊然後民知敬學。苟無尊崇篤信之心。則必有輕忽慢易之意。言之而聽之不審。猶不聽也。聽之而思之不愼。猶不思也。是則雖曰師之。猶不師也。

生ぜず。故に記に曰く、『師嚴にして然る後に道尊し。道尊くして然る後に民學を敬ふを知る』(七)と。苟も尊崇篤信の心無ければ、則ち必ず輕忽慢易の意有り。(八)之を言ひて之を聽くこと審かならざれば、猶ほ聽かざるがごとし。之を聽いて之を思ふこと愼まざれば、猶ほ思はざるがごとし。是れ則ち之を師とすと曰ふと雖も、猶ほ師とせざるがごとし。

(一) 樹を植うるに根をしつかりとうゑつけずして只々つちかひ水をそゝぐが如し (二) 舊習によりしたがひかりそめにして根柢に徹底せず (三) 程伊川の語、近思錄爲學に見ゆ (四) 前に學問を修め道をさとりたる人 (五) 古の聖賢の訓言即ち聖賢の書也 (六) 其言の我意に合はざるあるも (七) 禮記學記 (八) 師が之を言ひ我之を聽きても其聽くこと審かならぬ時は聽かざると同じ

而卒歸二於汚下一者。凡以二志之弗一レ立也。故程子曰。有下求レ爲二聖人一之志上。然後可二與共學一。人苟誠有下求レ爲二聖人一之志上。則必思。聖人之所三以爲二聖人一者安在。非レ以下其心之純乎天理。而無中人欲之私上歟。聖人之所三以爲二聖人一。惟以下其心之純二乎天理一。而無中人欲上。則我之欲レ爲二聖人一。亦

ば、則ち必ず思はん、聖人の聖人たる所以の者は安にか在る、其心の天理に純にして、人欲の私無きを以てに非ずやと。聖人の聖人たる所以は、惟だ其心の天理に純にして、人欲無きを以てなれば、則ち我の聖人たらんを欲するも、亦惟だ此心の天理に純にして、人欲無きに在るのみ。此心の天理に純にして、人欲無きを欲せば、則ち必ず人欲を去りて天理を存すべし。務めて人欲を去りて天理を存するには、則ち必ず人欲を去りて天理を存する所以の方を求むべし。人欲を去りて天理を存する所以の方を求むるには、則ち必ず諸を(四)先覺に正し、諸を(五)古訓に考ふべし。而して凡そ所謂學問の功なる者、然る後に得て講ず可く、而も亦已むべからざる所有らん。夫れ所謂諸を先覺に正す者は、既に其人を以て先覺となして之を師とすれば、則ち當に心を專にして志を致し、惟だ先覺に聽くことを爲すべし。(六)言合はざる有るも、棄て置くを得ず、必ず從うて之を思ふ。之を思うて得ざれば、又從うて之を辨じ、務めて了釋を求めて、敢て輒く疑惑を

予弟守來文學。告レ之以二立志一。守文因請下次二第其語一。使中得二時時觀省一。且請淺二近其辭一。則易二於通曉一也。因書以與レ之。

弟に示す立志の說（一）

予の弟守文來り學ぶ。之に告ぐるに立志を以てす。守文因つて其語を次第し、時時に觀省するを得しめんことを請ふ。且つ請ふ、『其辭を淺近にせば、則ち通曉し易からん』と。因つて書して以て之に與ふ。

（一）守文、陽明の異母弟也、この時陽明四十四歲也

夫學莫レ先二於立一レ志。志之不レ立。猶下不レ種二其根一。而徒事中培擁灌漑上。勞苦無レ成矣。世之所三以因循苟且。隨レ俗習レ非。

夫れ學は志を立つるより先なるは莫し。志の立たざるは、猶ほ（二）其根を種ゑずして、徒らに培擁灌漑を事とするがごとし。勞苦して成ること無し。世の（三）因循苟且にして、俗に隨ひ非に習ひ、而して卒に汚下に歸する所以の者は、凡て志の立たざるを以てなり。故に程子曰く、『（四）聖人たらんことを求むるの志有りて、然る後に與に共に學ぶ可し』と。人苟も誠に聖人たらんことを求むるの志有ら

此本不是險僻難見的道理。人或意見不同者。還是良知尚有纖翳潛伏。若除去此纖翳。即自無不洞然矣。已作書後。移臥簷間。偶遇無事。遂復答此。文蔚之學。既已得其大者。此等處久當釋然自解。本不必屑屑如此分疏。但承相愛之厚。千里差人。遠及諄諄下問。而竟虛來意。又自不能已於言也。然直戇煩縷已甚。恃在信愛。當不為罪。惟濬處。及謙之崇一處。各得轉錄一通。寄視之。尤承一體之好也（右南大吉錄）

らざる無し。已に書を作りて後、移りて(四)簷間に臥す。偶々事無きに遇うて遂に此に復答す。文蔚の學は既に已に其大なる者を得たれば、此等の處は久しくして當に釋然として自ら解すべし。(五)本必ずしも屑屑として此の如く分疏せず。但だ相愛の厚きを承け、(六)千里人を差して、遠く諄諄の下問に及ぶ。而るを(七)竟に來意を虛しうせん。又自ら言に已むと能はざるなり。然るに(八)直戇煩縷已に甚だし。恃むは信愛に在り。當に罪と爲さゞるべし。惟濬の處、及び謙之・崇一の處、(九)各々一通を轉錄し、之を寄視するを得ば、尤も一體の好を承けん。

右南大吉錄す。

(一) 平常なる道理の皆一途に歸するものにして (二) 良知に少しのくもり、ひそみかくるゝことあれば也 (三) 自然にほがらかにはつきりと分るべし (四) えんばた (五) 本來此の如くこまごまと分け說くには及ばざれど (六) 遠路わざわざ使をよこして (七) 欄外書に虛を反語と看るといへる從ふべきが如し、結局來意を虛しうすべからずと也 (八) 愚かに煩はしく繰返し繰返し陳ぶること (九) 此書狀を此二人の爲めに各一通づゝ寫して

是學レ奔二走千里一之始上。吾方自慮二其不レ能二起立移レ歩。而豈遽慮二其不レ能レ奔二走千里一。又況爲下奔二走千里一者上。而慮三其或遺二忘於起立移レ歩之習一哉。文蔚識見本自超絕邁往。而所レ論云レ然者。亦是未レ能レ脫下去舊時解二說文義一之習上。是爲二此三段書一。分疏比合。以求二融會貫通一。而自添二許多意見纏繞一。反使三用レ工不二專一一也。近時懸空去レ做二勿忘勿助一者。其意見正有二此病一。最能耽二誤人一。不レ可レ不二滌除一耳。

を添へ、反つて工を用ふることをして專一ならざらしむ。近時懸空に忘るゝ勿れ助くる勿れと做す者は、其意見正に此病有りて、最も能く人を耽誤す（四）。滌除せざる可からざるのみ。

㊀ 從來本旨を忘れて文義の末にかゝはり說くの弊習より脫出する能はず　㊁ 文蔚より三段の書を寄せしなり
㊂ 細かにいひ分け又は色々にあつめ合せて著實の工夫なく只空漠に　㊃ 誤らしむ

所レ謂尊二德性一而道二問學一一節。至當歸一。更無レ可レ疑。此便是文蔚曾著實用レ工。然後能爲二此言一。

所謂德性を尊びて問學に道るの一節、至當歸一（一）、更に疑ふ可き無し。此は便ち是れ文蔚の曾て著實に工を用ひて、然して後に能く此言を爲しゝものにして、此れ本是の險僻見難きの道理ならず。人或は意見の同じからざる者は、還つて是れ良（二）知尚ほ纖翳潛伏すること有ればなり。若し此纖翳を除去せば、卽ち自ら（三）洞然た

細觀二文蔚之論一。其意似レ恐下盡レ心知レ天者。廢二却存レ心修レ身之功一。而反爲中盡レ心知レ天之病上。是蓋爲二聖人一憂二工夫之或間斷一。而不レ知丁爲二自己一憂丙工夫之未乙眞切甲也。吾儕用レ工。却須下專レ心致レ志。在二殀壽不レ貳。修レ身以俟上一做上。只此便是做二盡レ心知レ天功夫一之始。正如下學二起立移上レ歩。便

細かに文蔚の論を觀るに、其意、心を盡し天を知る者の、心を存し身を修むるの功を廢却して、而も反つて心を盡し天を知るの病と爲らんことを恐るゝに似たり。是れ蓋し聖人の爲に工夫の或は間斷せんを憂へ、而も自己の爲に工夫の未だ眞切ならざるを憂ふるとを知らざるなり。吾儕の工を用ふるは、却つて須らく心を專にし志を致し、殀壽貳にせず、身を修めて以て俟つの上に在つて做すべし。只だ此は便ち是れ心を盡し天を知るの功夫を做すの始にして、正に起立歩を移すを學ぶは、便ち是れ千里を奔走するを學ぶの始なるが如し。吾は方に自ら其の起立歩を移す能はざるを慮りて、而も豈に遽かに其の千里を奔走する能はざるを慮らんや。又況や千里を奔走する者の爲に、而も其の或は起立歩を移すの習を遺忘するを慮らんや。文蔚の識見は本自ら超絶邁往、而も論じて然云ふ所の者は、亦是れ未だ舊時文義を解説するの習を脫去する能はず。是れ此(二)三段の書を爲り、分疏比合(一)して、以て融會貫通せんことを求め、而して自ら許多の意見纏繞

之功。已在二其中一矣。譬二之行一ㇾ路。盡ㇾ心知ㇾ天者。如下年力壯健之人。既能奔二走往三來於數千百里之間一者上也。存ㇾ心事ㇾ天者。如下童穉之年。使三之學二習步趨於庭除之間一者上也。殀壽不ㇾ貳修ㇾ身以俟者。如ㇾ襁抱之孩。方使二之扶ㇾ墻傍ㇾ壁。而漸學二起立移ㇾ步者上也。既已能奔二走往三來於數千里之間一者。則不ㇾ必更使丙之於二庭除之間一。而學乙步趨甲。而步二趨於庭除之間一。自無ㇾ弗ㇾ能矣。既已能步二趨於庭除之間一。則不ㇾ必更使三之扶ㇾ墻傍ㇾ壁而學二起立移ㇾ步。自無ㇾ弗ㇾ能矣。然學二起立移ㇾ步。便是學ㇾ步二趨庭除一之始。學ㇾ步二趨庭除。便是學ㇾ奔二走往三來於數千里一之基。固非ㇾ有二二事。但其工夫之難易。則相去懸絕矣。心也。性也。天也。一也。故及二其知ㇾ之成ㇾ功則一。然而三者。人品力量。自有二階級一。不ㇾ可二躐ㇾ等而能一也。

傍うて起立步を移すを學ばしめずとも、而も起立步を移すを、自ら能くせざる無し。然れども起立步を移すを學ぶは、便ち是れ庭除を步趨するを學ぶの始にして、庭除に步趨するを學ぶは、便ち是れ數千里に奔走往來するを學ぶの基なり。固より二事有るに非ず。但だ其工夫の難易は、則ち相去ること懸絕す。心や、性や、天や、一なり。故に其の之を知り功を成すに及びては則ち一なり。然り而して三者の、人品力量、自ら階級有り、等を　えて能くす可からざるなり。

㊀ 孟子盡心上篇に「盡二其心一者、知二其性一也、知二其性一則知ㇾ天矣、存二其心一養二其性一所二以事ㇾ天也、殀壽不ㇾ貳、修ㇾ身以俟ㇾ之、所二以立ㇾ命也」とあるを指す此の三節につきては前にも議論見ゆ　㊁ 壯年の達者盛りの人　㊂ こどもをさなご　㊃ 庭は門屛の內、除は門屛の間をいふ　㊄ 襁（ムツキ）にて負ひ懷に抱く程のあかご

盡心知性知天者。不必說存心養性事天。不必說殀壽不貳。修身以俟。而存心養性。與修身以俟之功。已在其中矣。存心養性事天者。雖未到得盡心知天的地位。然已是在那裏。做箇求到盡心知天的工夫。更不必說殀壽不貳。修身以俟。而殀壽不貳。修身以俟

も心を存し性を養ふと、身を修め以て俟つとの功は、已に其中に在り。心を存し性を養ひ天に事ふる者は、未だ心を盡し天を知るの地位に到り得ずと雖も、然も已に是れ那の裏に在りて、箇の心を盡し天を知るに到るを求めんとするの工夫を做す。更に必ずしも殀壽貳にせず、身を修めて以て俟つを說かず。而して殀壽貳にせず、身を修めて以て俟つの功は、已に其中に在り。之を路を行くに譬ふれば、心を盡し天を知る者は、年力壯健(二)の人にして、既に能く數千百里の間に奔走往來する者の如し。心を存し天に事ふる者は、童穉(三)の年、之をして庭除(四)の間に學習步趨せしむる者の如し。殀壽貳にせず、身を修めて以て俟つ者は、繦抱(五)の孩、方に之をして墻に扶けられ壁に傍うて、漸く起立步を移すを學ばしむる者の如し。既に已に能く數千里の間を奔走往來する者は、則ち必ずしも更に之をして庭除の間に步趨を學ばしめずとも、而も庭除の間に步趨すると、自ら能くせざる無し。既に已に能く庭除の間に步趨すれば、則ち必ずしも更に之をして墻に扶けられ壁に

而後明。不ㇾ然則亦未ㇾ免三各有二倚著之病一也。舜察二邇言一而詢二芻蕘一。非下是以二邇言當ㇾ察。芻蕘當上ㇾ詢。而後如ㇾ此。乃良知之發見流行。光明圓瑩。更無二罣礙遮隔處一。此所三以謂二之大知一。才有二執著意必一。其知便小矣。講學中自有二去取分辨一。然就二心地上一。著實用二工夫一。却須ㇾ如ㇾ此方是。

意必有れば、其知は便ち小なり。(八)講學中自ら去取分辨有り。然れども心地上に就きて、著實に工夫を用ひば、却つて須らく此の如くして方に是なるべし。

(一) 前に出づ (二) 前に所謂傍蹊曲徑といへると同義にて、邪道、まはり道の義と見るべきか。但旁行は易繫辭上に、曲防は孟子告子下に出でたる語にて、その原義に基きてこの文を解する時は、あまねく行きわたり委曲に防ぐと見るべからん (三) 前出、かれこれかき集め合する意 (四) 蓋し文蔚の來書中に惟濬の言を引きて論ぜるならん (五) 一方にかたよる (六) 中庸に「子曰、舜其大知也與、舜好ㇾ問而好察二邇言一」又詩大雅板篇に「先民有ㇾ言詢二于芻蕘一」と見ゆ。舜は多くの人に問ひ、手近き話に深く意を留め、薪采りの如き賤しき者にまで問ひはかれりと也 (七) 明かにまどかにて少しのさまたげさへぎらるゝ所なし (八) 學を講ずる者の中に自然程度分限の分ちはあれど、心の上について著實に工夫を用ひんとせば、斯くの如くしてこそ是なりとはいふべけれ

盡心三節。區區曾有二生知學知困知之說一。頗已明白。無ㇾ可ㇾ疑者一。蓋

盡心の三節(二)は、區區曾て生知・學知・困知の說有れば、頗る已に明白にして、疑ふ可き者無けん。蓋し心を盡し性を知り天を知る者は、必ずしも心を存し性を養ひ天に事ふるを說かず。必ずしも殀壽貳にせず、身を修めて以て俟つを說かず。而

可二致得一者上。故曰。堯舜之道孝弟而已矣。此所下以爲二惟精惟一之學一。放二之四海一而皆準。施二諸後世一而無中朝夕上者也。文蔚云。欲下於二事レ親從レ兄之間一。而求中所レ謂良知之學上。就二自己用レ工得レ力處一如レ此説。亦無二不可一。若レ曰下致二其良知之眞誠惻怛一以求レ盡二夫事レ親從レ兄之道一焉上。亦無二不可一也。明道云。行レ仁自二孝弟一始。孝弟是仁之一事。謂二之行レ仁之本一則可。謂二是仁之本一則不可。其説是矣。

億逆先覺之説。文蔚謂。誠則旁行曲防。皆良知之用。甚善甚善。間有二攙搭處一。則前已言レ之矣。惟濬之言。亦未レ爲レ不レ是。在二文蔚一。須レ有レ取二於惟濬之言一而後盡。在二惟濬一。又須レ有レ取二於文蔚之言一

(一)億逆先づ覺るの説に、文蔚謂へらく、『誠なれば則ち(二)旁行曲防皆良知の用なり』と。甚だ善し、甚だ善し。間〻(三)攙搭の處有るは、則ち前に已に之を言へり。(四)惟濬の言も、亦未だ是ならずと爲さず。文蔚に在りては、須らく惟濬の言を取ること有るべく、而して後に盡す。惟濬に在りては、又須らく文蔚の言を取ること有るべく、而して後に明かなり。然らざれば則ち亦未だ各〻(五)倚著の病有るを免かれず。(六)舜が邇言を察して蒭蕘に詢ふは、是れ邇言の當に察すべく、蒭蕘の當に詢ふべきを以て、而して後に此の此くなるに非ず、乃ち良知の發見流行は、光明圓瑩にして、更に罣礙遮隔の處無し。此れ之を大知と謂ふ所以なり。才かに(七)執著

間。皆只是致㆑他那一念事㆑親從㆑兄。眞誠惻怛的良知㆖。卽自然無㆑不㆓是道㆒。蓋天下之事。雖㆔千變萬化、至㆓於不㆑可㆓窮詰㆒。而但惟致㆓此事㆑親從㆑兄一念。眞誠惻怛之良知㆒。以應㆑之則更無㆑有㆓遺缺滲漏㆒者㆖。正謂其只有㆓此一箇良知㆒故也。事㆑親從㆑兄一念良知之外。更無㆑有㆘良知

滲漏有る者無し。正に謂へらく其れ只だ此一箇の良知有るが故なり。親に事へ兄に從ふ一念良知の外、更に良知の致し得可き者有ること無し。故に曰く、『堯舜の道は孝弟のみ』と。此れ惟精惟一(五)の學と爲し、之を四海に放ちて皆準ひ、諸を後世に施して朝夕(六)無き所以の者なり。文蔚云ふ、『親に事へ兄に從ふの間に於て、所謂良知の學を求めんと欲す』と。自己の工を用ひ力を得る處に就きて此の如く說くも、亦不可無し。『其良知の眞誠惻怛を致して以て夫の親に事へ兄に從ふ道を盡さんことを求む』と曰ふが若きも、亦不可無きなり。(七)明道云はく、『仁を行ふは孝弟より始まる。孝弟は是れ仁の一事。之を仁を行ふの本と謂ふは則ち可なり。是を仁の本と謂ふは則ち不可なり』と。其說是なり。

(一) 孟氏の下に「謂」の字を脫落せるかといふ。此語孟子告子下に出づ (二) ひつさげさとして (三) きはめ治むる能はざる程なるに至りても (四) 少しも缺け漏れたる所なし (五) 眞の聖人の學也 (六) 朝となく夕となくいつ如何なる時にも之に從ひて違ふことなき所以也 (七) 論語學而篇の集註に引ける程子の言

良知。便是致二却從レ得足的良知。致二從レ兄的良知。便是致二却事レ親的良知。不丁是事レ君的良知。不レ能二致却。須丙又從二事レ親的良知上。去乙擴充將來甲。如レ此又是脫二却本原一。著二在支節上一求了。良知只是一箇。隨二他發見流行處一。當下具足。更無二去來一。不レ須二假借一。然其發見流行處。却自有下輕重厚薄。毫髮不レ容二增減一者上。所レ謂天然自有之中也。雖二則輕重厚薄。毫髮不レ容二增減一。而原又只是一箇。雖二則只是一箇一。而其間輕重厚薄。又毫髮不レ容二增減一。若可レ得二增減一。若須二假借一。即已非二其眞誠惻怛之本體一矣。此良知之妙用。所下以無二方體一無二窮盡一。語レ大天下莫二能載一。語レ小天下莫中能破上者也。

るを待たず、安排するは中に非ず」とあるに取る　㊅　良知の妙用の方形大小の域を超絶して微妙絶對なるをいふ。

「大を語れば云々」の二句中庸に出づ

孟氏。堯舜之道孝弟而已者。是就下人之良知發見得。最眞切篤厚。不レ容二蔽昧一處上提二省人一。使下人於三事レ君處レ友。仁レ民愛レ物。與二凡動靜語默

孟氏(一)に、『堯舜の道は孝弟のみ』とは、是れ人の良知發見し得て、最も眞切篤厚にして、蔽昧すべからざる處に就きて人を提省し(二)、人をして君に事へ友に處し、民を仁し物を愛すると、凡そ動靜語默の間とに於て、皆只だ是れ他那の一念親に事へ兄に從ひ、眞誠惻怛の良知を致さしむ。即ち自然に是れ道ならざる無し。蓋し天下の事、千變萬化、窮詰(三)す可からざるに至ると雖も、而も但だ惟れ此の親に事へ兄に從ふ一念、眞誠惻怛の良知を致し、以て之に應ずれば、則ち更に遺缺(四)

怛一。以從レ兄便是弟。致二此良知之眞誠惻怛一。以事レ君。便是忠。只是一箇良知。一箇眞誠惻怛。若是從レ兄的良知。不レ能レ致二其眞誠惻怛一。卽是事レ親的良知。不レ能レ致二其眞誠惻怛一矣。事レ君的良知。不レ能レ致二其眞誠惻怛一。卽是從レ兄的良知。不レ能レ致二其眞誠惻怛一矣。故致二得事レ君的

れ本原を脫却し、支節の上に著在て求むるなり。良知は只だ是れ一箇にして、他の發見流行する處に隨ひて、當下に具足す。(五)更に去來無く、假借するを須ひず。(六)然れども其發見流行する處に、却つて自ら輕重厚薄、毫髮も增減すべからざる者有り。所謂天然自ら有るの中なり。(七)則ち輕重厚薄、毫髮も增減すべからずと雖も、而も原は又只だ是れ一箇なり。則ち只だ是れ一箇なりと雖も、而も其間に輕重厚薄、又毫髮も增減すべからず。若し增減するを得べく、若し假借するを須ひば、卽ち已に其眞誠惻怛の本體に非ず。此れ良知の妙用は、(八)方體無く窮盡無く、大を語れば天下能く載する莫く、小を語れば天下能く破る莫き所以の者なり。

(一) 固く持して循ひ守る所 (二) これを自ら實行すれば差支なけれど、之を定說として他人に說き敎へば、藥の爲めに病を起すといふ患害あらん (三) 君に事ふる良知、兄に從ふ良知とて別にあるわけに非ざるを明かにす (四) 君に事ふるの良知が致されないからとて、又親に事ふるの良知の上から擴充してもち來る事を用ふるといふ如きわけ合にあらず (五) そのまゝそこにそなはり足りて居る (六) 何方より來るにも非ず何方へ去るにも非ず (七) 天然自然に固有せる中也。程子の言に「體得すれば卽ち事々物々上皆天然に箇の中の那の上に在る有り、人の安排す

見二近來眞切篤實之功一。但以レ此自爲。不レ妨三自有二得レ力處一。以レ此遂爲二定說一敎レ人。卻未レ免三又有二因レ藥發レ病之患一。亦不レ可レ不二一講一也。蓋良知只是一箇天理。自然明覺發見處。只是一箇眞誠惻怛。便是他本體。故致二此良知之眞誠惻怛一。以レ事レ親。便是孝。致二此良知之眞誠惻

ば、却つて未だ又藥に因りて病を發すの患有るを免れず。亦一講せざる可からず。蓋し良知は只だ是れ一箇天理の、自然に明覺發見する處、只だ是れ一箇眞誠惻怛にして、便ち是れ他の本體なり。故に此良知の眞誠惻怛を致して、以て親に事ふれば、便ち是れ孝なり。此良知の眞誠惻怛を致して、以て兄に從へば、便ち是れ弟なり。此良知の眞誠惻怛を致して、以て君に事ふれば、便ち是れ忠なり。只だ是れ一箇の良知、一箇の眞誠惻怛なり。若し是れ兄に從ふの良知にして、其眞誠惻怛を致す能はずんば、卽ち是れ親に事ふるの良知も、其眞誠惻怛を致す能はず。君に事ふるの良知にして、其眞誠惻怛を致す能はずんば、卽ち是れ兄に從ふの良知も、其眞誠惻怛を致す能はず。故に君(三)に事ふるの良知を致し得ば、便ち是れ兄に從ふの良知を致却す。兄に從ふの良知を致し得ば、便ち是れ親に事ふるの良知を致却す。是れ君に事ふるの良知致却する能はずんば、又親に事ふるの良知上より、擴充し(四)將來るを須ふるをせず。此の如きは又是

尙未二了徹一也。集レ義之功。尙未二了徹一。適足三以爲二致良知之累一而已矣。謂下致良知之功。必須レ兼二搭一箇勿レ忘勿レ助。而後明上者。則是致良知之功。尙未二了徹一也。致良知之功。尙未二了徹一。適足三以爲二勿レ忘勿レ助之累一而已矣。若レ此者。皆是就二文義上一。解釋牽附。以求二渾融湊泊一而不下曾就二自己實工夫上一體驗上。是以論之愈精。而去之愈遠。文蔚之論。其於二大本達道一。既已沛然無レ疑。至二於致知窮理。及忘助等說一。時亦有二攙和兼搭處一。却是區區所レ謂康莊太道之中。或時橫斜迂曲者。到二得工夫熟一後。自將二釋然一矣。

ては、時に亦攙和兼搭の處有り。却つて是れ區區(八)の所謂康莊太道の中、或は時に横斜迂曲ある者なり。工夫熟するに到り得て後に、自ら將に釋然たらんとす。

(一)其言葉はかく樣々なれど (二)其工夫の眼目は皆ぴたりと一致せり (三)其わけは天地間に只一事あるによる也、陽明の說く所は一元說唯心說にして性といひ理といひ良知といひ要する皆同一事也 (四)かれとこれとまぜ合はせかきよせて說かずとも (五)ぴたりと合ひ貫き通らぬはなし (六)彼の說とこの說ととけ合ひ一つにあつまらん事を求め (七)道を去ること愈々遠し (八)拙者の申す所の云々。此語前に出でたり

文蔚謂下致知之說。求二之事レ親從レ兄之間一。便覺レ有レ所二持循一者。此段最

文蔚の『致知の說は之を親に事へ兄に從ふの間に求むれば、便ち持循する所(一)有るを覺ゆ』と謂ふ者は、此段最も近來の眞切篤實の功を見る。但だ(二)此を以て自ら爲さば、自ら力を得る處有るを妨げず。此を以て遂に定說と爲して人を敎へ

節。纔天地之問。原只有此性。只有此理。只有此良知。只有此一件事耳。故凡就古人論學處說工夫。更不必攙和兼搭而說。自然無不合貫通。者。才須攙和兼搭而說。即是自己工夫未明徹也。近時有謂集義之功。必須兼搭箇致良知。而後備者。則是集義之功。

を論ずる處に就きて工夫を說くや、更に必ずしも(四)攙和兼搭して說かざれども、自然に(三)脗合貫通せざる者無し。才かに攙和兼搭して說くことを須ふるは、即ち是れ自己の工夫の未だ明徹せざるなり。近時義を集むるの功は、必ず箇の致良知を兼搭するを須ちて、而して後に備はると謂ふこと有るは、則ち是れ義を集むるの功、尙ほ未だ了徹せざるなり。義を集むるの功、尙ほ未だ了徹せざれば、適に以て致良知の累を爲すに足るのみ。致良知の功は、必ず一箇の忘るゝ勿れ助くる勿れを兼搭するを須ちて、而して後に明かなりと謂ふ者は、則ち是れ致良知の功、尙ほ未だ了徹せざるなり。致良知の功、尙ほ未だ了徹せざれば、適に以て忘るゝ勿れ助くる勿れの累を爲すに足るのみ。此の若き者は、皆是れ文義上に就きて、解釋牽附し、以て(六)渾融湊泊を求め、而も曾て自己の實工夫の上に就きて體驗せず。是を以て論ずること愈〻精しくして、(七)去ること愈〻遠し。文蔚の論や、其の大本達道に於ては、既に已に沛然として疑無きも、致知窮理及び忘助等の說に至り

立レ方。告子強制二其心一。是助的病痛。故孟子專說二助長之害一。告子助長。亦是他以レ義爲レ外。不レ知下就二自心上一集レ義。在二必有レ事焉上一用レ功。是以如レ此。若時時刻刻。就二自心上一集レ義。則良知之體。洞然明白。自然是是非非。纖毫莫レ遁。又焉有下不レ得二於言一。勿レ求二於心一。不レ得二於心一。勿レ求二於氣一之弊上乎。孟子集レ義養レ氣之說。固大有レ功二於後學一。然亦是因レ病立レ方。說二得大段一。不レ若下大學格致誠正之功。尤極精一簡易。爲二徹レ上徹レ下。萬世無レ弊者上也。

若かざるなり。

(一) 集義も致良知も同じ事なれど、集義と說く時は一時眼目を見るを得ず (二) すぐ即坐に實際的工夫を用ふべし (三) 余の (四) 論語子罕篇に「子絶レ四、毋レ意、毋レ必、毋レ固、毋レ我」とあり、意は私意、必は期必、固は執滯、我は私己と朱註に見ゆ (五) 更に「勿レ忘勿レ助」を說くには及ばず (六) 孟子公孫丑上に「我故に曰く、告子は未だ嘗て義を知らず、其の之を外にするを以てなり、必ず事有り、而して正(ア)てゝする勿れ、心忘るゝ勿れ、助長する勿れ」云々とあり、又同篇に「告子曰く、言に得ざるを心に求むる勿れ、心に得ざるを氣に求むる勿れと。心に得ざるを氣に求むる勿れといふは可、言に得ざるを心に求むる勿れといふは不可」と見ゆ。これを引照して本文を熟讀せば其文意明かならん (七) 上文引く所の言にて、即ち告子が强ひて其心を制するの言也 (八) 大體

聖賢論レ學。多是隨レ時就レ事。雖二言若レ是殊一。而要二其工夫頭腦一。若レ合二符

聖賢の學を論ずる、多くは是れ時に隨ひ事に就く。(一)言は是の若く殊なりと雖も、(二)其工夫の頭腦を要するに、符節を合するが若し。(三)天地の間、原只だ此性有り、只だ此理有り、只だ此良知有り、只だ此一件の事有るに緣るのみ。故に凡そ古人の學

工。故區區專說二致良知一。隨レ時就レ事上。致二其良知一。便是格レ物。著實去レ致二良知一。便是誠レ意。著實致二其良知一。而無二一毫意必固我一。便是正レ心。著實致二良知一。則自無二忘之病一。無二一毫意必固我一。則自無二助之病一。故說二格致誠正一。則不三必更說二箇忘助一。孟子說二忘助一。亦就二告子得レ病處一

ければ、便ち是れ心を正しうす。著實に良知を致せば、則ち自ら忘るゝの病無し。一毫の意必固我無ければ、則ち自ら助くるの病無し。故に格致誠正を說けば、則ち必ずしも更に（五）箇の忘助を說かず。（六）孟子の忘助を說きしは、亦告子の病を得る處に就きて方を立てしなり。告子が強ひて其心を制するは、是れ助くるの病痛なり。故に孟子は專ら助長の害を說けり。告子の助長も、亦是れ他は義を以て外と爲し、自心上に就いて義を集め、必ず事有りの上に在りて功を用ふるを知らず。是を以て此の如し。若し時時刻刻に、自心上に就きて義を集めば、則ち良知の體は、洞然明白にして、自然に是は是、非は非として、纖毫も遁るゝこと莫し。又焉ぞ（七）言に得ざるを心に求むる勿れ、心に得ざるを氣に求むる勿れの弊有らんや。孟子の義を集め氣を養ふの說は、固より大いに後學に功有り。然れども亦是れ病に因つて方を立てゝ、（八）大段を說き得しものなれば、大學の格致誠正の功の、尤も極めて精一簡易にして、上に徹し下に徹し、萬世弊無しと爲す者に

何等灑脫自在。今却不レ去ニ必有レ事上用レ工。而乃懸空守ニ著一箇勿レ忘勿レ助。此正如ニ燒レ鍋煑レ飯。鍋内不ニ曾漬レ水下レ米。而乃專去ニ添レ柴放レ火。不レ知畢竟煑ニ出箇甚麼物一來。吾恐火候未レ及ニ調停一。而鍋已先破裂矣。近日一種專在ニ勿レ忘勿レ助上一用レ工者。其病正是如レ此。終日懸空去レ做ニ箇勿レ忘。又懸空去レ做ニ箇勿レ助。渀渀蕩蕩。全無ニ實落下レ手處一。究竟工夫只做ニ得箇沉レ空守レ寂。學ニ成一箇癡騃漢一。才遇ニ些子事來一。卽便牽滯紛擾。不ニ復能經ニ綸宰制一。此皆有レ志之士。而乃使ニ之勞苦纏縛。耽ニ閣一生一。皆由ニ學術誤レ人之故一。甚可レ憫矣。

の如く只一個の空寂を守ることをなし得 (一四) おろか者 (一五) ほんの一寸した事柄 (一六) それに引かれ、その事にとゞこほりてまぎれみだれて、をさめ處理する能はず (一七) 其身を勞苦し束縛されて一生を爲すこともなく無益に過すは

夫必有レ事焉。只是集レ義。集レ義只是致ニ良知一。說ニ集義一。則一時未レ見ニ頭腦一。說ニ致良知一。卽當下便有ニ實地步可レ用レ

夫れ必ず事有りとは、只だ是れ義を集むるなり。義を集むるは只だ是れ良知を致すなり。集義を說けば、則ち一時未だ頭腦を見ず。致良知を說けば、卽ち當下(一)に便ち實地步(二)の工を用ふ可き有り。故に區區(三)の專ら致良知を說くは、時に隨ひ事に就くの上に、其良知を致すなり。便ち是れ物を格すなり。著實に良知を致せば、便ち是れ意を誠にす。著實に其良致を致して、而も一毫の意必(四)固我無

斷。此便是忘了。卽須勿忘。時時去用必有事的工夫。而或有時欲速求效。此便是助了。卽須勿助。其工夫全在必有事焉上用。勿忘勿助。只就其間提撕警覺而已。若是工夫原不間斷。卽不須更說勿忘。原不欲速求效。卽不須更說勿助。此其工夫何等明白簡易。

の内、會て水を漬して米を下さずんばあらず、乃ち專ら柴を添へ火を放たんか、知らず畢竟箇の甚麼なる物をか蠶出し來らん。吾れ恐らくは火候(九)未だ調停するに及ばずして、鍋已に先づ破裂せん。近日一種專ら忘るゝ勿れ助くる勿れの上に在りて工を用ふる者は、其病正に是れ此の如し。終日懸空に箇の忘るゝ勿れを做し、又懸空に箇の助くる勿れを做し、漭漭蕩蕩(一〇)として、全く實落(一一)に手を下す處無し。究竟(一二)の工夫は、只だ箇(一三)の空に沈み寂を守るを做し得、一箇の癡騃漢(一四)を學び成し、才かに些子(一五)の事の來るに遇へば、卽ち便ち牽滯紛擾(一六)して、復た經綸宰制する能はず。此れ皆志有るの士にして、乃ち之(一七)をして勞苦纏縛して、一生を耽閣せしむるは、皆學術の人を誤れるの故に由る。甚だ憫む可きなり。

(一) 取急ぎさづと一二の御返事を申す (二) 山中にて講學する者 (三) 前出、孟子公孫丑上の語 (四) 拙者といふ意の謙辭 (五) 孟子の「必有事焉」に對する見解也、集義の語亦孟子に出づ (六) 必ず事有りて工夫する上について (七) さつぱりとして無造作に自在なる事ぞ (八) 實功と掛け離れて空漠に (九) 火加減 (一〇) 盛に奔流して正道を逸し (一一) 着實に手を下す處なし (一二) 結局の工夫 (一三) 佛氏

問レ之則云。才著レ意便是助。才不レ著レ意便是忘。所三以甚難一。區區因問レ之云。忘是忘二箇甚麼一。助是助二箇甚麼一。其人默然無レ對。始請問。區區因與說。我此間講レ學。卻只說二箇必有レ事焉一。不レ說二勿レ忘勿一レ助。必有レ事焉者。只是時時去レ集レ義。若時時去レ用二必有レ事的工夫一。而或有二時間

忘れ、助くとは是れ箇の甚麼を助くるか』と。其人默然として對ふる無く、始めて請ひ問ふ。區區因つて與に說く。我が此間に學を講ずる、卻つて只だ箇の必ず(五)事有るを說いて、忘るゝ勿れ助くる勿れを說かず。必ず事有りとは、只だ是れ時時に義を集むるなり。若し時時に必ず事有りの工夫を用ひて、或は時に間斷有らんか、此れ便ち是れ忘るゝなり。卽ち須らく忘るゝ勿るべし。時時に必ず事有りの工夫を用ひて、或は時に速かなるを欲し效を求むる有らんか、此れ便ち助くるなり。卽ち須らく助くること勿るべし。其工夫は全く必ず事有りの上に在つて用ふ。忘るゝ勿れ助くる勿れは、只だ(六)其間に就きて、提撕警覺するのみ。若し是の工夫原間斷せずんば、卽ち更に忘るゝ勿れを說くを須ひず。原速かなるを欲し效を求めずんば、卽ち更に助くる勿れを說くを須ひず。此れ其工夫何等の明白簡易ぞ。何等の(七)灑脫自在ぞ。今卻つて必ず事有りの上に工を用ひずして、乃ち(八)懸空に一箇忘るゝ勿れ助くる勿れを守著するは、此れ正に鍋を燒きて飯を煑るが如し。鍋

決不三賺入二傍蹊曲徑一矣。近時海內同志。到二此地位一者。曾未二多見一。審慰不レ可レ言。斯道之幸也、賤軀舊有二咳嗽畏レ熱之病一。近入二炎方一。輒復大作。主上聖明洞察。責付甚重。不二敢遽辭一。地方軍務冗沓。皆輿レ疾從レ事。今却幸已平定。已具レ本乞二回養レ病。得下在二林下一。稍就中清涼上。或可レ瘳耳。人還伏レ枕草草。不レ盡二傾企一。外惟濬一簡。幸達二致之一。

の一箇あり。幸に之を達致せよ。

(一)幾度も繰返して丁寧に見るに (二)一つ二つの明かに徹底せざるあれども (三)五達を康とし六達を莊とす、諸所方々に通ずる大道也 (四)車がよこになりうねくと曲る (五)くつはがとゝのはぬ故也 (六)だましすかされて正道ならぬ小路に入る事はなし (七)嶺南より南は炎暑殊につよし、故に炎方といふ (八)明十二世の主世宗事理に明かにして十分に事態を察し (九)仰せつけられたる職責 (一〇)雜沓多忙 (一一)始終を委細に書き立て上書して (一二)使者歸るに際して也 (一三)病床に在りて何かと取りみだし居りて、心を傾け足をつまだてゝ思慕するの情を盡さず (一四)惟濬に送る書狀。惟濬は陳九川の字、明水と號し、陽門の高才也

來書所レ詢。草草奉レ復二一二一。近歲來。山中講レ學者。往往多說二勿レ忘勿レ助工夫甚難一。

來書に詢ふ所、草草(一)一二を復し奉る。近歲より來、(二)山中學を講ずる者、往往にして多く忘るゝ(三)勿れ助くる勿れの工夫の甚だ難きを說く。之を問へば則ち云ふ、『才かに意を著くれば、便ち是れ助く。才かに意を著けざれば、便ち是れ忘る。甚だ難しとする所以なり』と。(四)區區因つて之に問うて云ふ、『忘るとは是れ箇の甚麼を

得レ書見二近來所レ學之驟進一。喜慰不レ可レ言。諦視數過。其間雖下亦有中一二未二瑩徹一處上。却是致良知之功。尙未二純熟一。到二純熟時一。自無レ此矣。譬二之驅一レ車。既已由二於康莊太道之中一。或時橫斜迂曲者。乃馬性未レ調。銜勒不レ齊之故。然已只在二康莊太道中一。

二

書を得て近來學ぶ所の驟かに進めるを見、喜慰言ふ可からず。諦視數過(一)、其間亦一二の未だ瑩徹(二)せざる處有りと雖も、却つて是れ致良知の功、尙ほ未だ純熟せざればなり。純熟の時に到らば、自ら此れ無けん。之を車を驅るに譬へん。既に已に康莊太道(三)の中に由るも、或時は橫斜迂曲(四)する者は、馬性未だ調はず、銜勒(五)齊しからざるが故なり。然れども已に只だ康莊太道の中に在れば、決して賺(六)して傍蹊曲徑に入れられず。近時海內の同志にして、此地位に到れる者、曾て未だ多く見ず。喜慰言ふ可からず。斯道の幸なり。賤軀舊咳嗽熱を畏るゝ病有り。近ごろ炎方(七)に入りて、輒ち復大に作る。(八)主上聖明洞察して、責付(九)甚だ重し。敢て遽かに辭せず。地方の軍務冗沓(一〇)、皆疾を輿せて事に從ふ。今却つて幸に已に平定す。已に本(一一)を具して回つて病を養はんことを乞ふ。林下に在りて、稍や淸涼に就くを得ば、或は瘳ゆ可けん。(一二)人還る、枕(一三)に伏して草草、傾企を盡さず。外に惟濬(一四)

志之士於天下。非下如二吾文蔚一者上。而誰望レ之乎。如二吾文蔚之才與レ志。誠足三以援二天下之溺一者一。今又既知二其具之在レ我。而無レ假二於外求一矣。循レ是而充。若レ決レ河注レ海。孰得而禦哉。文蔚所レ謂一人信レ之。不レ爲レ少。其又能遜以委二之何人一乎。會稽素號二山水之區一。深林長谷。信レ歩皆是。寒暑晦明。無二時不レ宜。安居飽食。塵囂無レ擾。良朋四集。道義日新。優哉游哉。天地之間。寧復有下樂二於是一者上。孔子云。不レ怨レ天不レ尤レ人。下學而上達。僕與二二三同志一。方將三請二事斯語一。奚暇二外慕一。獨其切レ膚之痛。乃有下未レ能二恝然一者上。輒復云云爾。咳疾暑毒。書札絶懶。盛使遠來。遲留經レ月。臨レ岐執レ筆。又不レ覺累レ紙。蓋於二相知之深一。雖二已縷縷至レ此。殊覺レ有レ所レ未レ能レ盡也。

恝然(一四)たる能はざる者有り。輒ち復して(一五)云云するのみ。咳疾暑毒(一六)、書札絶だ懶し。盛使遠來(一七)し、遲留月を經たり。岐(一八)に臨みて筆を執り、又覺えず(一九)紙を累ぬ。蓋し相知の深きに於て、已に縷縷此に至ると雖も、殊に未だ盡す能はざる所有るを覺ゆ。

(一) うろ／＼とさまよひ、あたりを顧みて　(二) たすけたすけて　(三) 他をそしりねたみ、之に勝たんとの心　(四) 此書を送る相手聶文蔚　(五) 溺を援ふべき具は我にあり、卽ち自己の本體良知也　(六) 其一人の信ずる人といふは君以外に誰にもしゆづりて之を委ねんやと也　(七) 會稽はもとより山水の風景よき所と稱せらる　(八) 一歩踏み出せば皆好風景の地也　(九) 世の俗塵のさわがしさにみださるゝ事なし　(一〇) 良き同志の朋が四方より集り來りて　(一一) 心優游として樂めり。禮記に出でたる孔子の語に取る　(一二) 論語憲問篇に見ゆ　(一三) 身を切らるゝ如き痛、天下の人心の陷溺を憂ふるの痛也　(一四) 孟子萬章上に見え、憂無き貌と註す。心配せずに平氣では居られぬと也　(一五) 御返書を認め斯る事を申上ぐる次第也　(一六) たんせきが暑氣にあたり一層ひどき也　(一七) 御使が遠々と來りて　(一八) 使者を送りてわかれ途に臨む義にて、使者の歸途につく時をいふ　(一九) 思はず知らず數枚書きかさねたり

相與講去其病耳。今誠得豪傑同志之士。扶持匡翼。共明良知之學於天下。使天下之人。皆知自致其良知。以相安相養。去其自私自利之蔽。一洗讒妬勝忿之習。以濟於大同。則僕之狂病。固將脫然以愈。而終免於喪心之患矣。豈不快哉。嗟乎。今誠欲求豪傑同

を一洗し、以て大同を濟さしめば、則ち僕の狂病は、固より將に脫然として以て愈え、而も終に喪心の患を免れん。豈に快ならざらんや。嗟乎今誠に豪傑同志の士を天下に求めんと欲せば、吾が文蔚(四)の如き者に非ざれば、誰にか之を望まんや。吾が文蔚の才と志との如き、誠に以て天下の溺るゝ者を拯ふに足る。今又既に其具(五)の我に在りて、外に求むるに假ること無きを知る。是に循ひて充たさば、河を決して海に注ぐが若く、孰か得て禦がんや。文蔚が所謂『一人之を信じて少しと爲さゞる』(六)は、其れ又能く遜して以て之を何人に委ねんや。會稽(七)素山水の區と號す。深林長谷(八)、步に信せて皆是なり。寒暑晦明、時として宜しからざる無く、安居飽食(九)、塵囂の擾す無く、(一〇)良朋四集して、道義日に新なり。優な(一一)るかな游なるかな。天地の間、寧ろ復た是より樂しき者有らんや。孔子云ふ、(一二)『天を怨みず人を尤めず。下學して上達す』と。僕二三の同志と、方に將に請うて斯の語を事とせんとす。奚ぞ外慕に暇あらん。獨り(一三)其の膚に切なるの痛、乃ち未だ

之知レ我信レ我而已哉。蓋其天地萬物一體之仁。疾痛迫切。雖レ欲レ已レ之。而自有レ所レ不レ容レ已。故其言曰。吾非二斯人之徒與一。而誰與。欲レ潔二其身一。而亂二大倫一。果哉末二之難一矣。嗚呼。此非下誠以二天地萬物一。爲二一體一者上。孰能以知二夫子之心一乎。若二其遯レ世無レ悶。樂レ天知レ命者一。則固無三入而不二自得一。道竝行而不二相悖一也。

同じ ㊄ 子路は禮樂に於て、未だ室には入らざれども堂に升るとは許されたる人物也、然るに、孔子が衞靈公の夫人南子を見んとせし時、子路は南子の淫なるを以て辱として之を悅ばず、又孔子が公山弗擾に招かれ往きて道を說かんとせし時、子路は其の反逆者なるを以て悅ばざりき。又子路篇に「有レ是哉子之迂也」の語見ゆ ㊅ 以下凡て孔子の道を天下に行はんとするの急なるをいふ。汲々遑々は禮記檀弓下に出て、勤めてやすむことなき貌。席を煖むるに暇あらずは、班孟堅答賓戲・韓退之諍臣論等に見え、常に天下を周遊して息まざりしを形容す ㊆ 論語微子篇に出づ ㊇ 同上、上文の次の「子路從而後」云々の條に見ゆ ㊈ 憲問篇に見ゆ

僕之不肖。何敢以二夫子之道一爲二己任一。顧其心亦已稍知二疾痛之在一レ身。是以彷徨四顧。將西求下其有レ助二於我一者上。

僕の不肖なる、何ぞ敢て夫子の道を以て、己が任と爲さん。顧ふに其の心亦已に稍や疾痛の身に在るを知る。(一)是を以て彷徨四顧して、將に其の我を助くる有る者を求め、相與に講じて其病を去らんとするのみ。今誠に豪傑同志の士を得、扶持(二)匡翼して、共に良知の學を天下に明かにし、天下の人をして、皆自ら其良知を致すことを知り、以て相安じ相養ひて、其自私自利の蔽を去り、讒妬勝念の習(三)

且曰。是知其不可。而爲之者歟。鄙哉硜硜乎。莫己知也。斯已而已矣。雖子路在升堂之列。尚不能無疑於其所見。不悅於其所欲往。而且以之爲迂。則當時之不信夫子者。豈特十之二三而已乎。然而夫子汲汲遑遑。若求亡子於道路。而不暇於煖席者。寧以斯人

亡子を道路に求むるが若く、席を煖むるに暇あらざりし者は、寧ろ以て人の我を知り我を信ずるを斬むるのみならんや、蓋し其天地萬物一體の仁、疾痛迫切にして、之を已めんと欲すと雖も、而も自ら已むべからざる所有りしなり。故に其言に曰く、『吾れ斯の人の徒と與にするに非ずして誰と與にかせん』(七)『其身を潔うせんと欲して大倫を亂らんや』(八)『果せるかな之れ難きことなし』(九)と。嗚呼此れ誠に天地萬物を以て、一體と爲す者に非ずんば、孰か能く以て夫子の心を知らんや。其の世を遯れて悶ゆる無く、天を樂んで命を知る者の若きは、則ち固より入るとして自得せざる無し、道は並び行はれて相悖らざるなり。

(一) 論語八佾篇に「子曰、事君盡禮、人以爲諂也」又憲問篇に「微生畝謂孔子曰、丘何爲、是栖栖者與、無乃爲佞乎」 (二) 家語に「魯人不知孔子聖人、乃曰、東家丘者知之矣」と標註に出づ。又說苑にも見ゆ (三) 晨門も荷蕢之徒も論語憲問篇に出づ。子路、孔子に隨ひて石門に宿りしに、晨門曰く「いづれよりする」、子路曰く「孔氏よりす」と。晨門又曰く「是れ其不可なるを知りて之を爲す者か」と。蓋し道の天下に行はれざるを知りて尚は孔子の之を爲すを嘲りしなり (四) 孔子衞にありて磬をうつ。蕢を荷うて孔氏の門を過ぐる者あり。其音を聞きて曰く「心有るかな、磬を擊つや」と。既にして「鄙いかな硜硜乎たり。己を知る莫し。斯に已まんのみ」と。其意蓋し晨門に

人。無二親戚骨肉之情一者能レ之。然已謂下之無二惻隱之心一非上レ人矣。若夫在二父子兄弟之愛者一。則固未レ有レ不二痛レ心疾レ首。狂奔盡レ氣。匍匐而拯上レ之。彼將レ陷二溺之禍一有レ不レ顧。而況於二病レ狂喪レ心之識一乎。而又況於レ斬三人之信與二不信一乎。嗚呼。今之人雖三謂二僕爲一レ病レ狂喪レ心之人一。亦無二不可一矣。天下之人心。皆吾之心也。天下之人。猶有二病レ狂者一矣。吾安得而非レ病レ狂乎。猶有二喪レ心者一矣。吾安得而非レ喪レ心乎。

昔者孔子之在。當時有下議二其爲上レ諂者上。有下譏二其爲上レ佞者上。有下毀二其未上レ賢。詆レ其爲レ不レ知レ禮。而侮レ之以爲二東家丘一者上。有二嫉而沮レ之者一。有二惡而欲レ殺レ之者一。晨門荷蕢之徒。皆當時之賢士。

昔者孔子の在せる、當時其の諂を爲すと議せし者有り。其の佞を爲すと譏りし者有り。其の未だ（一）賢ならざるを毀り、其を詆りて禮を知らずと爲し、之を侮りて以て（二）東家の丘と爲しゝ者有り。嫉みて之を沮みし者有り。惡みて之を殺さんと欲せし者有り。（三）晨門・荷蕢の徒は、皆當時の賢士なるも、且つ曰く、『是れ其不可なるを知りて之を爲す者か』『鄙いかな、（四）硜硜乎たり。己を知る莫し、斯に已まんのみ』と。（五）子路堂に升るの列に在りと雖も、尚ほ其の見る所を疑ひ、其の往かんと欲する所を悅ばず、而して且つ之を以て迂と爲す無き能はず。則ち當時の夫子を信ぜざる者、豈に特に十に二三のみならんや。然り而して（六）夫子は汲汲遑遑として、

之切レ體。而暇レ計二人之非笑一乎。人固有乙見下其父子兄弟之墜二溺於深淵一者上。呼號匍匐。裸跣顚頓。扳二懸崖壁一。而下拯之。士之見者。方相與揖二讓談三笑於其傍一。以爲是棄二其禮貌衣冠一。而呼號顚頓若レ此。是病レ狂喪レ心者也。故夫揖二讓談三笑於溺人之傍一。而不レ知レ救。此惟行路之

る者に在りては、則ち固より未だ心を痛め首を疾ましめ、狂奔して氣を盡し、匍匐して之を拯はずんば有らず。彼將に陷溺の禍をも顧みざる有らんとす。而るを況や狂を病み心を喪ふの譏に於てをや。而るを又況や人の信と不信とを斬むるに於てをや。嗚呼今の人僕を謂つて狂を病み心を喪へる(一一)人と爲す、亦不可無し。天下の人心は皆吾が心なり、天下の人猶ほ狂を病む者有り、吾れ安ぞ得て狂(一二)を病むに非ずとせんや。猶ほ心を喪ふ者有らば、吾れ安ぞ得て心を喪ふに非ずとせんや。

(一) 天道の御蔭を以て (二) 天下の民の邪道におちいりおぼれたるを念ふ毎に (三) 自分の力量を知らぬ者也 (四) 自分の斯くするを見て (五) 今方に疾痛の身に切なるものあれば (六) よびさけび、はらばひになり、はだかはだしになりて、つまづきたふる (七) 断崖絶壁をよぢさがり (八) 傍にて其狀を見てゐる士 (九) 其溺れたる者とは何の緣故もなき路上の赤の他人 (一〇) 孟子已に「惻隱の心無きは人に非ず」と謂へり (一一) まして人の信ずる信ぜざるとの如きは固より顧みる所に非ず (一二) 天下を同體とすれば天下の人の心は皆我が心也、天下の人にして狂を痛み心を喪ふ者ある以上、吾れいかで狂を病み心を喪ふに非ずとする事を得ん

僕誠賴ニ天之靈ー。偶有レ見ニ於良知之學ー。以爲必由レ此。而後天下可ニ得而治ー。是以每レ念ニ斯民之陷溺ー。則爲レ之戚然痛レ心。忘ニ其身之不肖ー。而思ニ以レ此救ヒ之。亦不ニ自知ニ其量ー者。天下之人。見ニ其若ヒ是。遂相與非笑。而詆ニ斥之ー。以爲此病レ狂喪レ心之人耳。嗚呼。是奚足レ恤哉。吾方ニ疾痛

僕誠(一)に天の靈に賴りて偶〻良知の學を見る有り。以爲へらく必ず此れに由りて、而して後に天下得て治む可しと、是を以て斯民(二)の陷溺を念ふ每に、則ち之が爲に戚然として心を痛ましめ、其身の不肖を忘れて、此を以て之を救はんと思ふ。亦(三)自ら其量を知らざる者なり。天下の人、其の是の若くなるを見て、遂に相與に非笑し、之を詆斥し、以爲へらく此れ狂を病み(四)心を喪へる人のみと。嗚呼是れ奚ぞ恤ふるに足らんや。吾れ(五)疾痛の體に切なるに方りて、人の非笑を計るに暇あらんや。人固より其父子兄弟の深淵に墜溺する者を見ては、呼號(六)匍匐、裸跣顚頓、崖壁(七)に板懸し、下りて之を拯ふ有り。士(八)の見る者、方に相與に其傍に揖讓談笑して、以爲へらく、是れ其禮貌衣冠を棄てゝ、呼號顚頓すること此の若くんば、是れ狂を病み心を喪ふ者なりと。故に夫の溺人の傍に揖讓談笑して、救ふことを知らざるは、此れ(九)惟だ行路の人にして、親戚骨肉の情無き者にして之を能くす。然るに已に(一〇)之を惻隱の心無きは人に非ずと謂へり。若し夫れ父子兄弟の愛あ

外假二仁義之名一。而內以行二其自私自利之實一。詭レ辭以阿レ俗。矯レ行以干レ譽。揜二人之善一。而襲以爲二己長一。訐二人之私一。而竊以爲二己直一。忿以相勝。而猶謂二之徇一レ義。險以相傾。而猶謂二之疾一レ惡。妬レ賢忌レ能。而猶自以爲レ公二是非一。恣レ情縱レ欲。而猶自以爲レ同二好惡一。相陵相賊。自二其一家骨肉之親一。已不レ能レ無二爾我勝負之意一。彼此藩籬之形一。而況於二天下之大。民物之衆一。又何能一體而視レ之。則無レ怪三於紛紛籍籍。而禍亂相二尋於無窮一矣。

ひ、(六)險以て相傾けて、而も猶ほ之を惡を疾むと謂ひ、賢を妬み能を忌みて、而も猶ほ自ら以て是非を公にすと爲し、情を恣にし欲を縱にし、而も猶ほ自ら以て好惡を同じうすと爲す。相陵ぎ相賊ひ、(七)其一家骨肉の親より、已に爾我勝負の意、彼此藩籬の形無き能はず。況や天下の大、民物の衆きに於ける、又何ぞ能く一體にして之を視んや。則ち(八)紛紛籍籍として、禍亂の無窮に相尋ぐを怪む無し。

(一) 互にきしり合ふ　(二) 良知なれば萬人の心一心なるに、私智を用ふるを以て萬人の心萬心となる也　(三) かたよりていやしき見　(四) わるがしこくよこしまなる術　(五) 忿怒を以て他を凌ぎて而も之を義に徇ふといふ　(六) 陰險を以て他を傾けて、而も之を惡を疾むといふ　(七) 一家の切つても切れぬ肉親よりして已に汝我と差別を立てて相爭ひ、彼と我との間にへだてを作るの形勢あり　(八) みだれ〳〵て禍亂はてしなく相尋ぐ

若二己出一。見レ惡不三啻若二己入一。視二民之饑溺一。猶二己之饑溺一。而一夫不レ獲。若丙己推而納乙諸溝中上者。非三故爲レ是。而以蘄二天下之信一己也。務下致二其良知一。求中自謙上而已矣。堯舜三王之聖。言而民莫レ不レ信者。致二其良知一而言レ之也。行而民莫レ不レ說者。致二其良知一而行レ之也。是以其民熙熙皡皡。殺レ之不レ怨。利レ之不レ庸。施及二蠻貊一。而凡有二血氣一者。莫レ不二尊親一。爲二其良知之同一也。嗚呼。聖人之治二天下一。何其簡且易哉。

愚も一樣也　(四) 大學の語に取る、好惡みの甚しきをいふ也　(五) 孟子萬章上に「思下天下之民、匹夫匹婦有上不レ被二堯舜之澤一者)若上己推而內二之溝中一」(六) 自己良心のあきたり滿足するを求めんとするのみ　(七) やわらぎたのしみて、のび〳〵と自得せる貌、孟子盡心上の語也　(八) 孟心盡心上に「殺レ之而不レ怨、利レ之而不レ庸、民日遷レ善、不レ知レ爲レ之者一也」(九) 其德がえびすの國までもおしおよぶ。中庸の語也

後世良知之學不レ明。天下之人。用二其私智一以相比軋。是以人各有レ心。而偏瑣僻陋之見。狡僞陰邪之術。至二於不レ可二勝說一。

後世良知の學明かならず。天下の人、其私智を用ひて以て相比軋す。(一)是を以て(二)人各々心有りて、(三)偏瑣僻陋の見、(四)狡僞陰邪の術、勝げて說く可からざるに至る。外は仁義の名を假り、內は以て其自私自利の實を行ひ、辭を詭りて以て俗に阿り、行を矯めて以て譽を干む。人の善を掩ひ、襲ひて以て己が長と爲し、人の私を訐いて竊に以て己が直と爲す。(五)忿つて以て相勝ちて、而も猶ほ之を義に徇ふと謂

疾痛一。無二是非之心一者也。是非之心。不レ慮而知。不レ學而能。所レ謂良知也。良知之在二人心一。無レ間二於聖愚一。天下古今之所レ同也。世之君子。惟務レ致二其良知一。則自能公二是非一。同二好惡一。視レ人猶レ己。視レ國猶レ家。而以二天地萬物一爲二一體一。求二天下無一レ治不レ可レ得矣。古之人所丁以能見レ善不三啻

を同じうして、人を視ること猶ほ己のごとく、國を視ること猶ほ家のごとくにして天地萬物を以て一體と爲す。天下治る無きを求むとも得べからず。古の人の能く(四)善を見ること啻に己に出づるが若くなるのみならず、惡を見る啻に己に入るが若くなるのみならず、民の饑溺を視ること、猶ほ己の饑溺のごとく、(五)一夫獲ざれば、己推して諸れを溝中に納るゝが若き所以の者は　故に是を爲して、以て天下の己を信ぜんことを蘄むるに非ざるなり。其良知を致し、(六)自謙を求めんと務むるのみ。堯舜三王の聖、言ひて民の信ぜざること莫き者は、其良知を致して之を言へばなり。行ひて民の說ばざること莫き者は、其良知を致して之を行へばなり。是を以て其民は(七)熙熙皞皞として、(八)之を殺すも怨みず、之を利するも庸とせず。(九)施いて蠻貊に及び、而して凡そ血氣有る者の、尊親せざること莫きは、其良知の同じきが爲なり。嗚呼聖人の天下を治むる、何ぞ其れ簡にして且つ易なるや。

(一) 人民に取りての困苦害毒は皆吾が身に切なる疾痛也　(二) 是を是とし非を非とし善惡を見わくる心　(三) 啻も

無レ意。相二遭於千載之下一。與三其盡信二於天下一。不レ若三眞信二於一人一。道固自在。學亦自在。天下信レ之不レ爲レ多。一人信レ之不レ爲レ少者。斯固君子不レ見レ是而無レ悶之心。豈世之謭謭屑屑者。知足二以及一レ之乎。乃僕之情。則有二大不レ得レ已者一。存二乎其間一。而非下以計二人之信與一不信上也。

く而も思孟周程自ら出でゝ千載の下に相遭ふとの意　一七　蓋し王氏の說く所、當時そしる者多くして信ずるもの稀なりしを以て、天下に信ぜられんより眞に一人に信ぜられんに若かじと言へるならん　一八　天下盡く信ずるも多とするに足らず、一人之を信ずるも以て少と爲すべからず　一九　此言は固より君子確信する所ありて、人こぞりて非とするも悶ゆることなき心也。易文言に「遯レ世無レ悶、不レ見レ是無レ悶」と見ゆ　二〇　拙く薄き見を抱く者　二一　僕の此說あるは天下の實狀を見て眞に止むを得ずして然るもの、人の信と不信とは全然計る所に非ずと也。蓋し聶文蔚が謂ふ所の天下に信ぜられずして一人に信ぜらるといふもの、立派なる心には相違なきも尙は信不信の閒にあり陽明は信と不信との如き全く問題になし居らざる也

夫人者。天地之心。天地萬物。本吾一體者也。生民之困苦荼毒。孰非下疾痛之切二於吾身一者上乎。不レ知二吾身之

夫れ人は、天地の心にして、天地萬物は、本吾れと一體なる者なり。(一)生民の困苦荼毒は、孰れか疾痛の吾が身に切なる者に非ざらんや。吾が身の疾痛を知らざるは、是非の心無き者なり。(二)是非の心は、慮らずして知り、學ばずして能くす。所謂良知なり。良知の人心に在るは、聖愚を間つる無く、(三)天下古今の同じくする所なり。世の君子、惟だ其良知を致さんと務むれば、則ち自ら能く是非を公にし、好惡

反覆千餘言。讀之無甚浣慰。中間推許太過。蓋亦獎掖之盛心。而規礪眞切。思欲納之於賢聖之域。又托諸崇一。以致其勤勤懇懇之懷。此非深交篤愛。何以及是。知感知媿。且懼其無以堪之也。雖然僕亦何敢不自鞭勉。而徒以感媿辭讓爲乎哉。其謂思孟周程

せずして、徒らに感媿辭讓を以てすることを爲さんや。其の『思・孟・周・程意無(一六)くして、千載の下に相遭ふ、其の盡く天下に信ぜられんよりは、眞に一人に(一七)信ぜられんに若かじ。道は固より自在、學も亦自在なり。天下之を信ずるも多と(一八)爲さず、一人之を信ずるも少と爲さず』と謂ふ者は、斯れ固より君子の是とせられ(一九)ざるも悶ゆる無きの心なり。豈に世の譾譾屑屑たる者、知以て之に及ぶに足らん(二〇)や。乃ち僕の情は則ち大に已むを得ざる者有り、其間に存して、以て人の信と(二一)不信とを計るに非ざるなり。

(一) 雙江と號す、江西永豐の人、陽明の歿後、錢緒山の證にて始めて弟子に列せり (二) 春の頃遠くまはり道をしてわざ〳〵御訪ね下され、ねんごろなる情を明かにすと也（欄外書に、春間は夏閒とある本に從ふべく、顧の字にて句となり、閒は下に屬すべし、全書には願間とありといへり） (三) 滯留すること。欄外書には扳を誤りて板に作るといへり (四) 切磋琢磨の便益 (五) 公務と私事との忙はしさ (六) 別れ去りてより心樂しまずして失ひたる物あるごとき思せり (七) 御手紙 (八) 精神をあらひなぐさむ (九) 其中に我を推し許す事の分に過ぎたるものあるは (一〇) 獎勵誘掖する御心 (一一) 心から親切にたゞしみがきて (一二) 前出、歐陽崇一也 (一三) ねんごろにつとむる心 (一四) 辱くも思ひ恥かしくも思ふと也 (一五) 諄諄勉勵 (一六) 別に思子孟子周子程子に合はせんとの意は無

雖二甚愚下一。寧不レ知レ所二感刻佩服一。然而不下敢遽舍二其中心之誠然一。而姑以聽受云上者。止不二敢有一レ負二於深愛一。亦思レ有二以報一レ之耳。秋盡東還。必求二一面一以卒レ所レ請。千萬終レ教。

聶文蔚に答ふ（一）

春間遠勞二迂途一枉二顧問一。證二惓惓一。此情何可レ當也。已期下二三同志更處二靜地一。扳留旬日。少效二其鄙見一。以求中切劘之益上。而公期俗絆。勢有レ不レ能。別去極怏怏。如レ有レ所レ失。忽承二箋惠一。

（二）春間遠く迂途を勞し顧問を枉げ、惓惓たるを證す。此情何ぞ當る可けんや。已に二三の同志と更に靜地に處り、扳留旬日（三）、少しく其鄙見を效し、以て切劘（四）の益を求めんと期す。而も公期俗絆（五）、勢能はざる有り。（六）別去極めて怏怏として、失ふ所有るが如し。忽ち箋惠（七）を承く。反覆千餘言。之を讀んで甚だ浣慰（八）することを無からんや。中間推許（九）太だ過ぎたるは、蓋し亦獎掖の盛心にして（一〇）、規礪眞切（一一）、之を賢聖の域に納れんと思欲すればならん。又諸を崇一に托し（一二）、以て其勤勤懇懇（一三）の懷を致さる。此れ深交篤愛に非ずんば、何を以て是に及ばん。感を知り（一四）愧を知り、且つ其の以て之に堪ふること無きを懼る。然りと雖も僕亦何ぞ敢て自ら鞭勉（一五）

反覆數百言。皆以レ未レ悉二鄙人格物之說一。若鄙說一明。則此數百言。皆可下以不レ待二辨說一。而釋然無上レ滯。故今不三敢縷縷以滋二瑣屑之瀆一。然鄙說非二面陳口析一。斷亦未レ能レ了二於紙筆間一也。嗟乎。執事所四以開二導啓三迪於我一者。可レ謂二懇到詳切一矣。人之愛レ我。寧有下如執事一者上乎。僕

り。若し鄙說一たび明かならば、則ち此數百言は、皆以て辨說を待たず、釋然として滯ること無かる可し。故に今敢て縷縷(一)以て瑣屑の瀆を滋くせじ。然れども鄙說は面陳口析(二)するに非ずんば、斷じて亦未だ紙筆の間に了了たらしむる能はざるなり。嗟乎、執事の我を開導啓迪(三)する所以の者は、懇到詳切なりと謂ふ可し。人の我を愛する寧ぞ執事の如き者有らんや。僕甚だ愚下なりと雖も、寧ぞ感刻佩服する所を知らざらんや。(四)然り而して敢て遽かに其中心の誠に然るを舍てて、姑く以て聽受すと云はざる者は、正に敢て深愛に負く有るにあらず、亦以て之に報ゆる有らんことを思ふのみ。(五)秋盡きて東に還らば、必ず一面を求めて以て請ふ所を卒へん。千萬教を終へよ。

(一) 今はつぶさに申上げて細末なる事柄の面倒にわたるをば敢てせじ　(二) 直接に面會して口上にて述べ說く　(三) 開發啓導　(四) それにも係らず、愈に我が心中の誠に信ずる所はさしおきて姑く御說に從ふと申さぬ譯は　(五) 秋の終る頃任を終へて東に歸還せば

牴牾者。道固如レ是。不レ直則道不レ見也。執事所レ謂。決與ニ朱子一異者。僕敢自欺ニ其心一哉。夫道天下之公道也。學天下之公學也。非三朱子可ニ得而私一也。非三孔子可ニ得而私一也。天下之公也。公言レ之而已矣。故言レ之而是。雖レ異ニ於己一。乃益ニ於己一也。言レ之而非。雖レ同ニ於己一。適損ニ於己一也。益ニ於己一者。己必喜レ之。損ニ於己一者。己必惡レ之。然則某今日之論。雖下或於ニ朱子一異上。未三必非ニ其所レ喜也。君子之過。如ニ日月之食一。其更也人皆仰レ之。而小人之過也必文。某雖ニ不肖一。固不下敢以ニ小人之心一。事中朱子上也。

過は必ず文る。某不肖なりと雖も、固より敢て小人の心を以て朱子に事へざるなり。(一三)

㊀ 陽明が朱子晩年定論を作りたる所以の意を明かにする也 ㊁ 其中にてといふ意。晩年定論と稱しながら其中には朱子の壯年の論もあり、整庵之を譏したるを以て答書之に及べる也 ㊂ 其大旨は彼我の說をいろ／＼とゆづり合ひて以て聖學を明かにするを重しとせり ㊃ 平生朱子の學說に對しては之を尊信すること恰も神明卜筮を信ずるが如かりしもの ㊄ 晩年定論を ㊅ 詩の王風黍離の語に取る。我が斯く苦心する眞情を知る者は我が心に深き憂ありといひ、我が眞情を知らざる者は何の求むる所ありて斯る者ありやといはん ㊆ 朱子の說と相反しふれあたりあふに忍びざるは我がもとよりの心也 ㊇ 其儘に捨て置きて正さゞれば、道明かに見はれず ㊈ どうしても朱子と見を異にするものは、我心を欺きて、心に異なりと信じながら尙は且つ朱子に從ひ置くがごとき事を爲さず ㊉ 其言にして是ならば己と見を異にすとも己に利益あり (一一) 亦朱子に喜ばれざるとは限らず (一二) 論語子張篇に出づ (一三) 心の內には信ぜざるに外面だけ之に合はするごとき小人の心にて朱子に事へんとはせず

執事所ニ以教

執事の教へて反覆數百言なる所以は、皆未だ鄙人の格物の說を悉さゞるを以てな

晩。誠有ㇾ所ㇾ未ㇾ考。雖ㇾ不三必盡出二於晩年一。固多下出二於晩年一者上矣。然大意在下委曲調停。以ㇾ明二此學一爲中重。平生於二朱子之説一。如二神明蓍龜一。一旦與ㇾ之背馳。心誠有ㇾ所ㇾ未ㇾ忍。故不ㇾ得ㇾ已而爲ㇾ此。知ㇾ我者。謂二我心憂一。不ㇾ知ㇾ我者。謂二我何求一。蓋不ㇾ忍ㇾ牴二牾朱子一者。其本心也。不ㇾ得ㇾ已而與ㇾ之

すに在り。（四）平生朱子の說に於ては、神明蓍龜の如く、一旦之と背馳するは、心誠に未だ忍びざる所有り。故に已むを得ずして此を爲る。（五）我を知る者は、我が心憂ふと謂ひ、我を知らざる者は、我れ何をか求むと謂はん。（六）蓋し（七）朱子と牴牾するに忍びざる者は、其本心なり。已むを得ずして之と牴牾する者は、道固より是の如し。（八）直さゞれば則ち道見はれざればなり。執事の所謂、（九）決して朱子と異なる者は、僕敢て自ら其心を欺かんや。夫れ道は天下の公道なり。學は天下の公學なり。朱子の得て私す可きに非ざるなり。孔子の得て私す可きに非ざるなり。天下の公なり。公に之を言ふのみ。故に之を言ひて（一〇）是ならば、己に異なりと雖も、乃ち己に益あり。之を言ひて非ならば、己に同じと雖も、適に己に損あり。己に益ある者は、己必ず之を喜び、己に損ある者は、己必ず之を惡む。然らば則ち某が今日の論たる、或は朱子に異なりと雖も、未だ必ずしも其の喜ぶ所に非ずんばあらざるなり。（一二）君子の過は、日月の食する（一一）が如く、其更むるや人皆之を仰ぐ。小人の

塞二天下一。孟子之時。天下之尊二信楊墨一。當レ不レ下三於今日之崇二尚朱說一。而孟子獨以二一人一。呶二呶於其間一。噫可レ哀矣。韓氏云。佛老之害。甚二於楊墨一。韓愈之賢。不レ及二孟子一。孟子不レ能レ救二之於未レ壞之先一。而韓愈乃欲レ全二之於已壞之後一。其亦不レ量二其力一。且見下其身之危。莫二之救一以死上也。嗚呼若レ某者。其尤不レ量二其力一。果見下其身之危。莫二之救一以死上也矣。夫衆方嘻嘻之中。而獨出レ涕嗟若。擧レ世恬然以趨。而獨疾レ首蹙レ額以爲レ憂。此其非二病レ狂喪一レ心。殆必誠有二大苦者隱二於其中一。而非二天下之至仁一。其孰能察レ之。

察せん。

(一) 孟子が楊墨の害を論じてその說を明かにしたるは (二) 假に同時代に生れたりとせば (三) 楊墨が爲したる說は以て天下を敗する程に理を滅し常道を亂す事の甚しきものならんや (四) 末流門派の弊 (五) 陸象山の言にて象山集要第一、曾宅之に與ふる書に出づ (六) 洪水猛獸の害と何れか甚しきを知らず (七) 孟子の語滕文公下に出づ (八) 盛に辨論せり (九) 韓退之の文、八家文一に出づ (一〇) 自分が朱說を駁する如きは最も自己の力を量らぬしわざ也 (一一) 易の語にもとづく。衆は皆笑ひさわげる中に已れ一人涙を流して悲みなげく (一二) 世の人は皆安心してそれにおもむく中に、自分一人は頭を痛め額をしかめて、それを以て憂と爲す (一三) 非常なる苦しみが其心の内にかくれてある也

其爲二朱子晚年定論一。蓋亦不レ得レ已而然。中間年歲早

(一)其の朱子の晚年の定論を爲りしは、蓋し亦已を得ずして然り。(二)中間年歲の早晚には、誠に未だ考へざる所有り。必ずしも盡く晚年に出でずと雖も、固より晚年に出でたる者多し。然るに(三)大意は委曲調停し、此學を明かにするを以て重しと爲

亂レ常之甚。而足三以眩二天下一哉。而其流之弊。孟子至レ比二於禽獸夷狄一。所レ謂以二學術一殺二天下後世一也。今世學術之弊。其謂二之學レ仁而過者一乎。謂二之學レ義而過者一乎。抑謂下之學二不仁不義一而過者上乎。吾不レ知下其於二洪水猛獸一何如上也。孟子云。予豈好レ辯哉。予不レ得レ已也。楊墨之道。

びて過ぐる者と謂はんか。吾れ其の(一六)洪水猛獸に於て何如といふを知らざるなり。(一七)孟子云ふ、『予豈に辨を好まんや、予已むを得ざればなり』と。楊墨の道、天下に塞がる。孟子の時、天下の楊墨を尊信するもの、當に今日の朱説を崇尚するに下らざるべし。而も孟子は獨り一人を以て、其間に(一八)呶呶す。噫哀しむ可きなり。(一九)韓氏云ふ、『佛老の害、楊墨より甚だし。韓愈の賢は孟子に及ばず。孟子之を未だ壞れざるの先に救ふ能はず。而るに韓愈は乃ち之を已に壞れたるの後に全うせんと欲す。其れ亦其力を量らず。且つ其身の危き、之を救ふこと莫くして以て死するを見る』と。嗚呼(二〇)某が若きは、其れ尤も其力を量らざるもの、果して其身の危き、之を救ふこと莫くして以て死するを見んかな。(二二)夫れ衆、方に嘻嘻たる中に、獨り涕を出して嗟若たり。(二一)世を擧げて恬然として以て趨るに、獨り首を疾め額を蹙め以て憂と爲す。此れ其狂を病み心を喪ひたるに非ずんば、殆ど必ずや誠に(二三)大苦の其中に隱るゝ有り。而して天下の至仁に非ずんば、其れ孰か能く之を

人得而誅レ之也。而況於二執事之正直一哉。審如レ是(一)世之稍明二訓詁一。聞二先哲之緒論一者。皆知二其非一也。而況執事之高明哉。凡某之所レ謂格物。其於二朱子九條之說一。皆包二羅統三括於其中一。但爲レ之有レ要。作用不レ同。正所レ謂毫釐之差耳。然毫釐之差。而千里之繆。實起二於此一。不レ可レ不レ辨。

說を以て民をあざむき、聖道に叛き正道を亂すもの　㊆　朱子大學或問格物の章に擧げたる九ケ條の程氏の說　㊇　包含網羅して之を總括せり

孟子闢二楊墨一。至二於無レ父無一レ君。二子亦當時之賢者。使下與二孟子一並レ世而生上。未三必不二以レ之爲一賢(一)。墨子兼愛。行レ仁而過耳。楊子爲我。行レ義而過耳。此其爲レ說。亦豈滅レ理

(一)孟子の楊墨を闢くは、父を無し君を無するに至ればなり。二子も亦當時の賢者なり。孟子と世を並べて生れしめば、未だ必ずしも之を以て賢と爲さずんばあらず。墨子の(二)兼愛は、仁を行うて過ぎたるのみ。楊子の爲我は、義を行うて過ぎたるのみ。此れ其の說を爲す、(三)亦豈に理を滅し常を亂すの甚だしくして、天下を眩するに足らんや。而して(四)其の流の弊たる、孟子は禽獸夷狄に比するに至る。(五)所謂學術を以て天下後世を殺すなり。今世の學術の弊は、其れ之を仁を學びて過ぐる者と謂はんか。之を義を學びて過ぐる者と謂はんか。抑々之を不仁不義を學

其是レ內而非レ外也。必謂其專事二於反觀內省之爲一。而遺二棄其講習討論之功一也。必謂其一二意於綱領本原之約一。而脫二略於支條節目之詳一也。必謂其沈二溺於枯槁虛寂之偏一。而不レ盡二於物理人事之變一也。苟如レ是。豈但獲二罪於聖門一。獲二罪於朱子一。是邪說誣レ民。叛レ道亂レ正。

習討論の功を遺棄するなりと。必ず謂へらく其の(二)綱領本原の約に一意にして、支條節目の詳を脫略するなりと。必ず謂へらく其の(三)枯槁虛寂の偏に沈溺して、物理人事の變を盡さゞるなりと。審かに(四)是の如くならば、(五)豈に但だ罪を聖門に獲るのみならんや、罪を朱子に獲るのみならんや。是れ(六)邪說民を誣ひ、道に叛き正を亂すもの、人得て之を誅せん。而るを況や執事の正直に於てをや。審かに是の如くば、世の稍や訓詁を明かにして、先哲の緒論を聞ける者は、皆其非を知らん。而るを況や執事の高明なるをや。凡そ某の所謂格物は、其の(七)朱子九條の說に於て、皆其中に(八)包羅統括す。但だ之を爲すに要有りて、作用同じからず。正に所謂毫釐の差のみ。然も毫釐の差にして、千里の繆、實に此に起る。辨ぜざる可からず。

(一) 執事の御考にては我が說く所は內を是とし外を非とするなりとおもへるならん (二) 道の眼目根柢の要約にのみ專心して枝葉細目の事はのけおろそかにす (三) 老莊佛家の說くが如く凡ての思念を去りて虛無寂寞の偏見におぼれしづみ (四) ほんとにそのやうなる事ならんには (五) ひとり聖門にそむき朱子にそむくのみならず (六) 邪

聚之主宰㆒而言。則謂㆓之心㆒。以㆓其主宰之發動㆒而言。則謂㆓之意㆒。以㆓其發動之明覺㆒而言。則謂㆓之知㆒。以㆓其明覺之感應㆒而言。則謂㆓之物㆒。故就㆑物而言。謂㆓之格㆒。就㆑知而言。謂㆓之致㆒。就㆑意而言。謂㆓之誠㆒。就㆑心而言。謂㆓之正㆒。正者正㆑此也。誠者誠㆑此也。致者致㆑此也。格者格㆑此也。皆所㆑謂窮㆑理以盡㆑性也。天下無㆓性外之理㆒。無㆓性外之物㆒。學之不㆑明。皆由㆘世之儒者認㆑理爲㆑外。認㆑物爲㆑外。而不㆑知㆓義外之說。孟子蓋嘗闢㆑之。乃至㆑襲㆓陷其內㆒而不㆖覺。豈非㆔亦有㆓似㆑是而難㆑明者㆒歟。不㆑可㆓以不㆘察也。

至るも覺らざるに由る。豈に亦是なる(一三)に似て明かにし難き者有るに非ざるか。以て察せずんばある可からず。

(一) 如何なる人にても自ら力を用ふる所、日々之を見るべき地にして決して空漠に外物の理をきはむるごときものに非ず (二) 格物とは心の感ずる所、意の変る所、知の知る所をたゞす也、即ち格物といふも畢竟正心誠意致知也 (三) 正心誠意致知また畢竟格物に外ならざるをいふ (四) こりあつまりたる方面 (五) 其こりあつまりたるものの主宰といふ方面 (六) 其主宰のはたらく動くといふ方面 (七) 其主宰の發動の明かにさとるといふ方面 (八) 其明かなるさとりの感じ應ずるといふ方面 (九) 格物致知誠意正心は畢竟一つの本體に對する方面方面に就きての言葉にて各別々の事に非ずと也 (一〇) 世の儒者が理は外にあり、義は外にありとし (一一) 孟子告子上に出づ (一二) 告子の仁内義外の說の内に陷る (一三) 一見是なる如くにて實非、甚だ紛らはしくして明かにし難し

凡執事所㆔以致㆓疑於格物之說㆒者。必謂

凡そ執事の疑を格物の說に致す所以は、必ず謂へらく(一)其の內を是として外を非とするなりと。必ず謂へらく其の專ら反觀內省の爲を事として、而して其講

致知格物。皆所ニ以脩レ身。而格物者。其所レ用レ力。日可レ見之地。故格物者。格ニ其心之物一也。格ニ其意之物一也。格ニ其知之物一也。正心者。正ニ其物之心一也。誠意者。誠ニ其物之意一也。致知者。致ニ其物之知一也。此豈有ニ内外彼此之分一哉。理一而已。以ニ其理之凝聚一而言。則謂ニ之性一。以ニ其凝

所、日に見る可きの地なり。故に格物(二)とは其心の物を格すなり、其意の物を格すなり、其知の物を格すなり。(三)正心とは其物の心を正すなり。誠意とは其物の意を誠にするなり。致知とは其物の知を致すなり。此れ豈に内外彼此の分有らんや。理は一のみ。其理の凝聚(四)を以て言へば、則ち之を性と謂ひ、其凝聚(五)の主宰を以て言へば、則ち之を心と謂ひ、其主宰(六)の發動を以て言へば、則ち之を意と謂ひ、其發動(七)の明覺を以て言へば、則ち之を知と謂ひ、其明覺(八)の感應を以て言へば、則ち之を物と謂ふ。故に物(九)に就きて言へば、之を格と謂ひ、知に就きて言へば、之を致と謂ひ、意に就きて言へば、之を誠と謂ひ、心に就きて言へば、之を正と謂ふ。正とは此を正すなり。誠とは此を誠にするなり。致とは此を致すなり。格とは此を格すなり。皆所謂理を窮めて以て性を盡すなり。天下性外の理無く、性外の物無し。學の明かならざるは、皆世の儒者(一〇)の理を認めて外と爲し、物を認めて外と爲し、義外(一一)の説は、孟子蓋し嘗て之を闢きしを知らず、乃ち(一二)其内に襲陷するに

工夫之詳密。而要レ之只是一事。此所三以爲二精一之學一。此正不レ可レ不レ思者也。夫理無二内外一。性無二内外一。故學無二内外一。講習討論。未三嘗非二内也。反觀内省。未二嘗遺一レ外也。夫謂三學必資二於外求一。是以二己性一爲レ有レ外也。是義外也。用レ智者也。謂二反觀内省一爲レ求二之於内一。是以二己性一爲レ有レ内也。是有レ我也。自私者也。是皆不レ知三性之無二内外一也。故曰。精義入レ神以致レ用也。利用安レ身以崇レ德也。性之德也。合二内外一之道也。此可三以知二格物之學一矣。格物者大學之實下レ手處。徹首徹尾。自二始學一至二聖人一。只此工夫而已。非三但入門之際。有二此一段一也。

り。用を利し身を安ずるは以て徳を崇うするなり。』(一三)『性の徳や、内外を合するの道なり』と。此れ以て格物の學を知る可し。格物は大學の實に手を下す處、徹首徹尾、始學より聖人に至るまで、只だ此工夫のみ。但だ入門の際にのみ、此一段有るに非ざるなり。

(一) 内心にかへして觀省す (二) 大學の正心誠意にて盡せり (三) 所謂諸學德に入るの門にて即ち聖人の道に進み入り之を學ぶの初をいふ (四) ひたすら、あながち等の意、「便チ困ム二」と分ちて訓ずるも通ずべし (五) 大學の修身の二字だけにても十分也 (六) 工夫の詳密をいへるものにてつまりは只一つの事也 (七) 聖道の惟精惟一の學たる所以はこゝに存す (八) 理は一にて内とか外とかいふ別はなし (九) 學を講ずるとて内を非とする事はなく、内省するとて外を遺する事はなし (一〇) 告子が論ずる所の「仁は内也義は外也」といふ事になりて非也 (一一) 自我の見ある也 (一二) 易下繫辭の文 (一三) 中庸「成レ己仁也、成レ物知也、性之德也、合二外内一之道也」と

夫正心誠意

夫れ正心・誠意・致知・格物は、皆身を脩むる所以にして、格物は、(一)其の力を用ふる

以下學不レ資二於外求一。但當中反觀內省以爲上務。則正心誠意四字。亦何不レ盡之有。何必於二入門之際一。便困以二格物一段工夫一也。誠然誠然。若語二其要一。則修身二字亦足矣。何必又言二正心一。正心二字亦足矣。何必又言二誠意一。誠意二字亦足矣。何必又言二致知一。又言二格物一。惟其

すべきを以てせば、則ち(二)正心誠意の四字、亦何の盡さゞること之れ有らん。何ぞ必ずしも(三)入門の際に於て、(四)便困に格物一段の工夫を以てするや』と。誠に然り、誠に然り。若し其要を語るときは、則ち(五)修身の二字亦足れり、何ぞ必ずしも又正心を言はん。正心の二字亦足れり、何ぞ必ずしも又誠意を言はん。誠意の二字亦足れり、何ぞ必ずしも又致知を言はん、又格物を言はん。惟だ(六)其工夫の詳密にして、之を要するに只だ是れ一事なり。(七)此れ精一の學たる所以、此れ正に思はざる可からざる者なり。夫れ(八)理に内外無く、性に内外無し。故に學にも内外無し。(九)講習討論は、未だ嘗て内を非とせざるなり。反觀内省は、未だ嘗て外を遺せざるなり。夫れ學は必ず外に求むるに資ると謂はゞ、是れ己が性を以て外有りと爲すなり。是れ義外なり、智を用ふる者なり。反觀内省を謂ひて、之を内に求むと爲すは、是れ(一〇)己の性を以て内有りと爲すなり。(一一)是れ我有るなり、自ら私する者なり。是れ皆性の内外無きを知らざるなり。故に曰く、(一二)『精義神に入るは以て用を致すな

失在三於過信二孔子一則有レ之。非下故去二朱子之分章一。而削中其傳上也。夫學貴レ得二之心一。求二之於心一而非也。雖三其言之出二於孔子一。不二敢以爲レ是也。而況其未レ及二孔子一者乎。求二之於心一而是也。雖三其言之出二於庸常一。不二敢以爲レ非也。而況其出二於孔子一者乎。且舊本之傳數千載矣。今讀二其文詞一。既明白而可レ通。論二其工夫一。又易簡而可レ入。亦何所二按據一。而斷下其此段之必在二於彼一。彼段之必在二於此一。與中此之如何而缺。彼之如何而誤上。而遂改二正補三緝之一。無下乃重二於背レ朱而輕中於叛レ孔已乎。

必ず彼に在り、彼の段の必ず此に在ると、此の如何にして缺け、彼の如何にして誤れると斷じて、遂に之を改正補緝せんや、(一〇)乃ち朱に背くを重しとして孔に叛くを輕しとすること無きか。

(一) 陽明が朱子の定めし大學章句の區分を排し、古本大學を是として之に復したる事は (二) 朱子が大學に序次を定め、經傳の章を分ち設けたるを止め、其補ひたる格物致知の傳文を削りしをいふ (三) そのやうなる譯には非ず (四) 我があやまちが孔子を過信するに在りとせばそはこれあらん (五) 自分の心に求めて見て非ならば孔子より出でたる言葉にても敢て是となさず (六) まして孔子以下の者の言葉は尙更の事也 (七) 普通凡人の言にても (八) よりどころ (九) この段はあちらに在り、こちらの段はこちらに在ると斷じて順序を入れかへ、又之は誤れりと斷じて正し、之は缺けたりと斷じて補ふの理由あらんや (一〇) 貫說の如くありては、朱子に反する事を重大とし、孔子に叛することを輕きこととし、孔子よりも却て朱子の方を重んずる事なきか

來敎謂。如必

來敎に謂ふ、『如し必ず學は外に求むるに資らず、但だ當に(一)反觀內省以て務と爲

來教謂。某大學古本之復。以下人之爲レ學。但當レ求二之於內一。而程朱格物之說。不上レ免レ求二之於外一。遂去二朱子之分章一。而削二其所レ補之傳一。非二敢然一也。學豈有二內外一乎。大學古本。乃孔門相傳舊本耳。朱子疑二其有レ所二脫誤一。而改二正補二緝之一。在レ某則謂其本無二脫誤一。悉從二其舊一而已矣。

來教に謂ふ、某(一)が大學古本に之れ復するは、『人の學を爲すには、但だ當に之を內に求むべきに、程朱格物の說は、之を外に求むるを免れざるを以て、遂に朱子の(二)分章を去り、而して其の補ふ所の傳を削ると。(三)敢て然るに非ざるなり。學豈に內外有らんや。大學古本は、乃ち孔門相傳の舊本のみ。朱子は其の脫誤する所有らんを疑ひ、而して之を改正補緝す。某に在りては則ち謂へらく、其本脫誤無しと。悉く其舊に從ふのみ。(四)失、孔子を過信するに在らば、則ち之有らん。故に朱子の分章を去りて其傳を削るに非ざるなり。夫れ學は之を心に得んことを貴ぶ。(五)之を心に求めて非ならば、其言の孔子に出づるものと雖も、敢て以て是と爲さゞるなり。而るを況や其の未だ孔子に及ばざる者をや。之を心に求めて是ならば、其(七)言の(六)庸常に出づると雖も、敢て以て非と爲さゞるなり。而るを況んや其の孔子に出づる者をや。且つ舊本の傳はる數千載、今其文詞を讀むに、既に明白にして通ず可し。其工夫を論ずる、又易簡にして入る可し。(八)亦何の按據する所ありて、其の(九)此段の

能傳習訓詁。卽皆自以爲知學。不復有所謂講學之求。可悲矣。夫道必體而後見。非已見道而後加體道之功也。道必學而後明。非外講學。而復有所謂明道之事也。然世之講學者有二。有講之以身心者。有講之以口耳者。講之以口耳。揣摸測度。求之影響者也。講之以身心。行著習察。實有諸己者也。知此則知孔門之學矣。

爲し、復た所謂學を講ずるを之れ求むること有らず。悲む可し。(二)夫れ道は必ず體して後に見ゆ。(三)已に道を見て而して後に道を體するの功を加ふるに非ざるなり。道は必ず學びて後に明かなり。(四)學を講ずるを外にして、而して復た所謂道を明かにする事有るに非ざるなり。然るに世の學を講ずる者に二有りて、之を講ずるに身心を以てする者有り、之を講ずるに口耳を以てする者有り。之を講ずるに口耳を以てするは、(五)揣摸測度して、之を(六)影響に求むる者なり。之を講ずるに身心を以てするは、行ひて著しく習ひて察し、實に諸を己に有する者なり。此を知れば則ち孔門の學を知る。

(一) 論語述而篇は「子曰、德之不レ修、學之不レ講、聞レ義不レ能レ徙、不善不レ能レ改、是吾憂也」　(二) 體得せざれば道は見えず　(三) 見て了つて後始めて體得の工夫を加ふるといふ譯に非ず　(四) 講學以外に道を明かにするといふ事なし　(五) おしはかりさぐりて　(六) 道の本體ならずして其おもかげひゞきに求む

爲中極則上也。幸甚幸甚。何以得レ聞二斯言一乎。其敢自以爲二極則一。而安レ之乎。正思下就二天下之有道一以講中明之上耳。而數年以來。聞二其說一而非二笑之一者有矣。詬二訾之一者有矣。置レ之不レ足四較二量辨三議之一者有矣。其肯遂以敎レ我乎。其肯遂以敎レ我。而反覆曉諭。惻然惟恐レ不レ及レ救二正之一乎。然則天下之愛レ我者。固莫レ有レ如二執事之心。深且至一。感激當二何如一哉。

然として惟だ之を救正するに及ばざるを恐れんや。然らば則ち天下の我を愛する者、固より執事(一五)の心の深く且つ至れるが如きもの有ること莫し。感激當に如何すべきや。

(一) 名は欽順、字は允升、時の少宰にて博學の人、朱學を信ぜり、困知記を著はす、この時陽明四十九歲也 (二) 書狀を賜りて (三) 此時陽明は贛に征伐に向ふべき出船の矢先なりし也、匆匆は忙はしき貌 (四) 明け方江上を舟にて行くに聊か暇を生じたり (五) 御書面 (六) 江西省の一地名 (七) 世上の俗事いろいろと紛亂雜沓せん (八) 道を體得する (九) 最上至極の法則 (一〇) 我說也。其の字或は某の誤か (一一) そしり惡口す (一二) 捨ておきて硏究論議の値なしとする者あり (一三) 斯る有樣なれば如何で我を敎へんとはすべき (一四) 心に深くうれへいたみて (一五) 閣下などいふに同じ、對敬の語

夫德之不レ修。學之不レ講。孔子以爲レ憂。而世之學者。稍

夫れ德(二)を之れ修めず、學を之れ講ぜざることは、孔子の以て憂と爲しゝところなり。而るに世の學者、稍〻能く訓詁を傳習すれば、卽ち皆自ら以て學を知れりと

某頓首啓。昨承レ教及二大學一。發レ舟匆匆。未レ能レ奉レ答。曉來江行稍暇。復取二手教一而讀レ之。恐至レ贛後。人事復紛沓。先具二其略一以請。來教云。見レ道固難。而體レ道尤難。道誠未レ易レ明。而學誠不レ可レ不レ講。恐未レ可下安二於所一レ見。而遂以

羅整庵少宰に答ふる書（一）

某頓首して啓す。昨教（二）を承けて大學に及ぶ。舟（三）を發すること匆匆にして、未だ答を奉る能はず。曉來（四）江行稍ゝ暇あり。復た手教（五）を取りて之を讀む。恐らくは贛（六）に至る後、人事（七）復た紛沓せん。先づ其略を具して以て請ふ。來教に云ふ、『道を見るは固より難し、而して道を體する（八）は尤も難し。道は誠に未だ明かにし易からずして、學は誠に講ぜざる可からず。恐くは未だ見る所に安じて、遂に以て極則（九）と爲す可からず』と。幸甚幸甚。何を以てか斯の言を聞くを得んや。其れ敢て自ら以て極則と爲して、之に安ぜんや。正に天下の有道に就きて以て之を講明せんことを思ふのみ。而も數年以來、其說（一〇）を聞きて之を非笑する者有り、之を詬訾（一一）する者有り。之を置きて（一二）之を較量辨議するに足らずとする者有り。其れ（一三）肯て遂に以て我を教へんや。其れ肯て遂に以て我を教へ、而して反覆曉諭し、惻（一四）

明矣。自信則良知無所惑而明。明則誠矣。明誠相生。是故良知常覺常照。常覺常照。則如明鏡之懸。而物之來者。自不能遁其姸媸矣。何者。不欺而誠。則無所容其欺。苟有欺焉而覺矣。自信而明。則無所容其不信。苟不信焉而覺矣。是謂易以知險。簡以知阻。子思所謂至誠如神。可以前知者也。然子思謂如神。謂可以前知。猶二而言之。是蓋推言思誠者之功效。是猶爲不能先覺者說也。若就至誠而言。則至誠之妙用。卽謂之神。不必言如神。至誠則無知而無不知。不必言可以前知矣。

て明かなれば、則ち其不信を容るゝ所無く、苟も不信あれば覺る。是を易以て(四)險を知り、簡以て阻を知ると謂ふ。(五)子思の所謂至誠神の如く、以て前知す可き者なり。然るに子思の神の如しと謂ひ、以て前知す可しと謂ふは、(六)猶ほ二にして之を言ふ。(七)是れ蓋し誠を思ふ者の功效を推言す。是れ猶ほ先づ覺る能はざる者の爲に說くなり。若し至誠に就きて言はゞ、則ち(八)至誠の妙用は、卽ち之を神と謂ふ、必ずしも神の如くとは言はず。至誠は則ち知る無くして知らざる無し。必ずしも以て前知す可しとは言はず。

(一) 自ら自己自身の良知を欺かざるのみ　(二) 明は誠を生じ誠は明を生じ、互に生じ合ふ也　(三) 明鏡懸り居りて物來れば美も醜もそのまゝうつりて遁るゝを能はざるが如し　(四) 前川に出づ　(五) この語中庸に出づ　(六) 二つの事として言ふを免れず　(七) 誠を思へばかゝる功效ありといふ也　(八) 至誠の妙用はやがてそのまゝ神といふべく、必ずしも神の如しといふべからず

不レ同。不レ慮而知。恆易以知レ險。不レ學而能。恆簡以知レ阻。先レ天而天不レ違。天且不レ違。而況於レ人乎。況於二鬼神一乎。夫謂二背レ覺合一レ詐者。是雖レ不レ逆レ人。而或未レ能レ無二自欺一也。雖レ不レ億レ人。而或未レ能二果自信一也。是或常有下求二先覺一之心上。而未レ能二常自覺一也。常有下求二先覺一之心上。即已流二於逆億一。而足三以自蔽二其良知一矣。此背レ覺合レ詐之所二以未一レ免也。

君子學以爲レ己。未三嘗虞二人之欺一レ己也。恆不三自欺二其良知一而已。未三嘗虞二人之不一レ信レ己也。恆自信二其良知一而已。未五嘗求四先覺三人之詐與二不信一也。恆務三自覺二其良知一而已。是故不レ欺。則良知無レ所レ僞而誠。誠則

君子の學は以て己の爲にす。未だ嘗て人の己を欺かんことを虞らずして、恆に自ら其良知を欺かざるのみ。未だ嘗て人の己を信ぜざらんことを虞らずして、恆に自ら其良知を信ずるのみ。未だ嘗て先づ人の詐と不信とを覺らんことを求めずて、恆に自ら其良知を覺ることを務むるのみ。是の故に欺かざるときは、則ち良知僞る所無くして誠なり。誠なれば則ち明かなり。自ら信ずるときは、則ち良知惑ふ所無くして明かなり。明かなれば則ち誠なり。明誠相生ず、是の故に良知常に覺り常に照す。常に覺り常に照すときは、則ち明鏡の懸りて、物の來る者、自ら其妍媸を遁るゝ能はざるが如し。何となれば、欺かずして誠なれば、則ち其欺を容るゝ所無く、苟も欺く有れば覺る。自ら信じ

世猜忌險薄者之事。而只此一念。已不可與入堯舜之道矣。不逆不億。而爲人所欺者。尙亦不失爲善。但不如能致其良知。而自然先覺者之尤爲賢耳。崇一謂其惟良知瑩徹者。蓋已得其旨矣。然亦穎悟所及。恐未實際也。蓋良知之在人心。亙萬古塞宇宙。而無

塞りて、同じからざる無し。慮らずして知るは、(四)恒に易以て險を知るもの、學ばずして能くするは、恒に簡以て阻を知るものなり。(五)天に先だちて天違はず。天且つ違はず、況や人に於てをや、況や鬼神に於てをや。夫れ覺に背きて詐に合すと謂ふ者は、是れ人を逆へずと雖も、(七)而も或は未だ自ら欺く(六)無き能はざるなり。(八)人を億らずと雖も、而も或は未だ果して自ら信ずる能はざるなり。是れ或は常に先づ覺らんことを求むるの心有りて、未だ常に自ら覺ること能はざるなり。常に先づ覺らんことを求むるの心有れば、卽ち已に逆億に流れて、以て自ら其良知を蔽ふに足る。此れ覺に背き詐に合するの未だ免れざる所以なり。

(一) 其常時の人の缺陷を救ふにありしと也　(二) 疑ひ深くして陰險刻薄なる者　(三) 才知の穎悟なるより此に及べるにて實に其際に至れるには非じと也　(四) 易の下係辭に「夫乾天下之至健也、德行恆易以知險、夫坤天下之至順也、德行恆簡以知阻」とあり、標注に、險は易の反、阻は簡の反也。吾の德行既に易簡なれば自然に其險阻を知りて疑ひ無し、猶は邪は正の反、而して吾の德既に正しければ一毫の邪も知らざる所無きがごとしと說けり　(五) 易の文言の語を引く　(六) 來書の語を引く　(七) 人の詐を豫察する事はなくとも或は自ら欺く事あるを免れず　(八) 人の己を信ぜざる事をば思ひ疑はずとも、十分に自ら信ずる能はざる事あり

瑩徹乎。然而出入毫忽之間。背レ覺合レ詐者多矣。

不レ逆不レ億而先覺。此孔子因丙當時人。專以三逆レ詐億二不信一爲レ心。而自陷三於詐與二不信一。又有二不レ逆不レ億者一。然不レ知下致二良知一之功上。而往往又爲レ人所乙欺詐甲。故有二是言一。非レ教戊人以レ是存レ心。而專欲丁先覺丙人之詐與乙不信甲也。以レ是存レ心。卽是後

『逆へず億らずして而も先づ覺る』とは、此れ孔子が、(一)當時の人の專ら詐を逆へ不信を億るを以て心と爲し、而も自ら詐と不信とに陷り、又は逆へず億らざる者有るも、然も良知を致すの功を知らずして、往往又人の爲に欺詐せらるゝに因り、故に是言有り。人をして是を以て心を存して、專ら先づ人の詐と不信とを覺らんと欲せしむるには非ざるなり。是を以て心を存するは、卽ち是れ後世(二)猜忌險薄の者の事にして、只だ此の一念、已に與に堯舜の道に入る可からず。逆へず億らずして、人の爲に欺かるゝ者は、尙ほ亦善たるを失はず。但だ能く其良知を致して、自然に先づ覺る者の尤も賢なるに如かざるのみ。崇一の『其れ惟だ良知の瑩徹せるもの』と謂へるは、蓋し已に其旨を得たり。然れども亦(三)穎悟の及ぶ所、恐らくは未だ實際ならざらん。蓋し良知の人心に在るや、萬古に亙り宇宙に

別作二一事一。此便有二是レ內非レ外之意一。便是自私用レ智。便是義外。便有下不レ得二於心一。勿レ求二於氣一之病上。便不下是致二良知一以求二自謙一之功上矣。所レ云鼓舞支持。畢レ事則困憊已甚。又云下迫二於事勢一。困中於精力上。皆是把作二兩事一做了。所二以有一レ此。凡學問之功一則誠。二則僞。凡此皆是致良知之意。欠二誠一眞切一之故。大學言誠二其意一者。如レ惡二惡臭一。如レ好二好色一。此之謂二自謙一。曾見レ有下惡二惡臭一。好二好色一。而須二鼓舞支持一者上乎。曾見二畢レ事則困憊已甚者一乎。曾有下迫二於事勢一困二於精力一者上乎。此可四以知三其受レ病之所二從來一矣。

來書又有レ云。人情機詐百出。御レ之以レ不レ疑。往往爲レ所レ欺。覺則自入二於逆億一。夫逆レ詐即詐也。億二不信一即非レ信也。爲レ人欺。又非レ覺也。不レ逆レ不レ億。而常先覺。其惟良知

來書に又云ふ有り、『人情機詐百出す。(一)之を御するに疑はざるを以てすれば、往往にして僞に欺かる。(二)覺れば則ち自ら逆億に入る。(三)夫れ詐を逆ふるは即ち詐なり。不信を億るは信に非ざるなり。人の僞に欺かるゝは、又覺るに非ざるなり。逆へず億らずして、常に先づ覺るは、其れ惟だ良知の瑩徹せるものか。然り而して出入毫忽の間、(四)覺に背きて詐に合する者多し。』

(一) 種々樣々のいつはりあり　(二) それを治むるに疑はざるを以てすればだまさる　(三) さとれば、人、己を欺くならんと豫め察し、人、己を疑ふならんと疑ひ思ふ事になる。論語憲問篇に「子曰、不レ逆レ詐、不レ億レ不レ信、抑亦先覺者是賢乎」　(四) 一寸でも先づ覺るといふ事を出れば直ちに逆億に入ると也

之所上不レ能者。皆不レ得レ爲レ致二良知一。而凡勞二其筋骨一。餓二其體膚一。空二乏其身一。行拂二亂其所上爲。動レ心忍レ性。以增二益其所上不レ能者。皆所三以致二其良知一也。若レ云二寧不レ了レ事不上可レ不レ加二培養一者。亦是先有二功利之心一。較二計成敗利鈍一。而愛二憎取三舍於其間一。是以レ將レ了レ事自作二一事一。而培養又

ふは、皆是れ把つて兩事と作し做す、此れ有る所以なり。凡そ學問の功、一なれば則ち誠に、二なれば則ち僞なり。(一〇)凡そ此れ皆是れ致良知の意に、誠一眞切を欠くが故なり。大學に言ふ、『其意を誠にすとは、惡臭を惡むが如く、好色を好むが如し』と。此れを之れ自謙と謂ふ。嘗て惡臭を惡み、好色を好みて、而も鼓舞支持を須ふる者有るを見んや。嘗て事を畢へて則ち困憊已に甚だしき者を見んや。嘗て事勢に迫られ精力に困む者有らんや。(一一)此れ以て其の病を受くるの從つて來る所を知るべきなり。

(一) これを兩事となして見れば、其兩事となす所に便ち病弊存す (二) 集義の語孟子に出づ (三) 自己良心の滿足を求むる意、欄外書に、此一節に三つの自謙の字あり、一つは立心扁二つは言扁なるがこれは何れか一つに統一すべし、南本・兪本は皆言扁とし、王本は皆立心扁とすといふ意の文見ゆ (四) 中庸の語 (五) 易の艮大象傳及び論語子罕篇の曾子の語にて、其地位として思ふべき事を思ひ、分外の思を爲さずと也 (六) 孟子告子下に出でたる文に取る (七) 先づ功利心あり、成敗利害を比較して、成利を取り敗害を捨つる譯也 (八) 內心を是とし外事を非とする意あり (九) 孟子公孫丑上の語 (一〇) これ斯る言ある所以也 (一一) これによりて斯る病弊の由來する所を知るべし

是集義一事。義者宜也。心得二其宜一之謂義。能致二良知一。則心得二其宜一矣。故集義亦只是致良知。君子之醻二酢萬變一。當レ行則行。當レ止則止。當レ生則生。當レ死則死。斟酌調停。無レ非レ是致二其良知一以求二自慊一而已。故君子素二其位一而行。思レ不レ出二其位一。凡謀二其力之所レ不レ及。而強二其知

き、當に死すべければ則ち死す。斟酌調停、是れ其良知を致して以て(三)自慊を求むるに非ざる無きのみ。故に(四)君子は其位に素して行ひ、思は其位を出でず、(五)凡そ其力の及ばざる所を謀りて、其知の能くせざる所を強ふる者は、皆良知を致すと爲すを得ず。而して凡そ(六)其筋骨を勞し、其體膚を餓ゑしめ、其身を空乏にし、行其の爲す所を拂亂し、心を動し性を忍ばせ、以て其の能くせざる所を增益する者は皆其良知を致す所以なり。『寧ろ事を了へざるも培養を加へざる可からず』と云ふが若きは、(七)亦是れ先づ功利の心有り、成敗利鈍を較計して、其間に愛憎取舍するなり。是れ將に事を了へんとするを以て自ら一事と作し、而して培養を又別に一事と爲す。此れ便ち內を是とし外を非とするの意有り。便ち是れ自私して智を用ふ。便ち是れ(八)義外なり、便ち(九)心に得ざれば氣に求むること勿れの病有り。便ち是れ良知を致して以て自謙を求むるの功ならず。云ふ所の『鼓舞支持』といひ、『事を畢ふれば則ち困憊已に甚だし』といひ、又『事勢に迫られ、精力に困む』と云

之來。有二事勢一不レ容レ不レ了。而精力雖レ衰。稍鼓舞亦能支持。則持レ志以帥レ氣可矣。然言動終無二氣力一。畢レ事則困憊已甚。不レ幾三於暴二其氣一已乎。此其輕重緩急。良知固未三嘗不二知。然或迫二於事勢一。安能顧二精力一。或困二於精力一。安能顧二事勢一。如レ之何。則可。

顧みん。之を如何にせば則ち可ならん。

㊀前出、周道通に答ふる書中の語也　㊁其事の勢としてどうしても捨て置かれぬ場合ならば　㊂孟子公孫丑上に、夫志氣之帥也、氣體之充也、夫志至焉、氣次焉、故持二其志一無レ暴二其氣一とあるに取る　㊃廿、輕重緩急は良知固より之を知る

寧不レ了レ事不レ可レ不レ加二培養一之意。且與二初學一如レ此說。亦不レ爲レ無レ益。但作二兩事一看了。便有二病痛在一。孟子言二必有レ事焉一。則君子之學。終身只

『寧ろ事を了へざるも培養を加へざる可からず』との意は、且く初學には此の如く說くも、亦益無しと爲さず。㊀但だ兩事と作して看るときは、便ち病痛の在る有り。孟子の『必ず事有り』と言ふは、則ち君子の學は、終身只だ是れ㊁集義の一事なり。義とは宜なり。心其宜しきを得る之を義と謂ふ。能く良知を致せば、則ち心は其宜しきを得。故に集義も亦只だ是れ致良知なり。君子の萬變に醻酢する、當に行ふべければ則ち行ひ、當に止むべければ則ち止み、當に生くべければ則ち生

非邪正。良知無レ有下不二自知一者上。所二以認レ賊作レ子。正爲二致知之學不明。不レ知下在二良知上一體中認之上耳。

來書又云。師云爲レ學終身只是一事。不レ論二有レ事無レ事。只是這一件。若レ說二寧不レ了レ事不レ可レ不レ加二培養。却是分爲二兩事一也。竊意覺二精力衰弱。不レ足二以終レ事者。良知也。寧不レ了レ事。且加二休養一致知也。如何却爲二兩事若事變

來書に又云ふ、『師云ふ、學を爲すは終身只だ是れ一事、事有り事無きを論ぜず、只だ是れ這の一件なり。寧ろ事を了へざれども培養を加へざる可からずと說くが若きは、却つて是れ分ちて兩事(一)と爲すなりと。竊かに意ふ、精力衰弱して、以て事を終ふるに足らざるを覺ゆる者は、良知なり。寧ろ事を了へざるも、且つ休養を加ふるは致知なり。如何ぞ却つて兩事とは爲す。若し事變の來るや、事勢(二)の了せざるべからざる有るときは、精力衰ふと雖も、稍〻鼓舞せば亦能く支持せん。(三)則ち志を持し以て氣を帥ゐて可なり。然るに言動終に氣力無く、事を畢ふれば則ち困憊已に甚だし。其氣を暴ふに幾からずや。(四)此れ其輕重緩急は、良知固より未だ嘗て知らざるにあらず。然れども或は事勢に迫られば、安ぞ能く精力を顧みん。或は精力に困せば、安ぞ能く事勢を

聖。心之官則思。思則得之。思其可少乎。沈空守寂。與安排思索。正是自私用智。其爲喪失良知一也。良知是天理之昭明靈覺處。故良知即是天理。思是良知之發用。若是良知發用之思。則所思莫非天理矣。良知發用之思。自然明白簡易。良知亦自能知得。若是私意安排之思。自是紛紜勞擾。良知亦自會分別得。蓋思之是

思は其れ少く可けんや。空に沈みて寂を守ると安排思索するとは、正に是れ自私して智を用ふるなり。其の良知を喪失すと爲すは一なり。良知は是れ天理の昭明靈覺なる處なり。故に良知は卽ち是れ天理にして、思は是れ良知の發用なり。若し是れ良知發用の思は、則ち思ふ所として天理に非ざる莫し。良知發用の思は、自然に明白簡易にして、良知も亦自ら能く知り得。若し是れ私意安排(三)の思は、自ら是れ紛紜勞擾して、良知も亦自ら分別し得ることを會す。蓋し思の是非邪正は、良知自ら知らざる者有ること無し。賊を認めて子と作す所以は、正に致知の學の不明にして、良知上に在りて之を體認することを知らざる爲のみ。

(一) 二句共に書經洪範に出づ　(二) 孟子告子上に出でたる語に取る　(三) 私意安排の思は自らごたごたと紛はしくみだれがはしきものにして、良知も亦自然にこれは私意なりしと分別し得るもの也

所ㇾ慮。只是天理。更無ニ別思別慮一耳。非ㇾ謂ニ無ㇾ思無ㇾ慮也。心之本體。即是天理。有三何可ニ思慮得一。學者用ㇾ功。雖ニ千思萬慮一。只是要ㇾ復ニ他本體一。不下是以ニ私意一去ニ安排思索一出來上。若安排思索。便是自私用ㇾ智矣。學者之弊。大率非ニ沈ㇾ空守ㇾ寂。則安排思索。德辛壬之歲著ニ前一病一。近又著ニ後一病一。但思索亦是良知發用。其與ニ私意安排者一。何所ㇾ取ㇾ別。恐認ㇾ賊作ㇾ子。惑而不ㇾ知也。

無きを謂ふに非ずと。心の本體は、即ち是れ天理にして、何の思慮し得べきもの有らん。學者の功を用ふる、千思萬慮すと雖も、只だ是れ他(二)の本體に復せんことを要す。是れ私意を以て安排思索し去りて出し來るにあらず。若し安排思索せば、便ち是れ自(三)私して智を用ふるなり。學者の弊たる、大率(四)空に沈み寂を守るに非ざれば、則ち安排思索す。德(五)や辛壬の歲、前(六)の一病を著け、近ごろ又後の一病を著く。但だ思索も亦是れ良知の發用なり。其の私意もて安排する者と、何所に別を取らん。恐らくは賊(七)を認めて子と作し、惑うて知らざるならん。』

(一) 前出周道通に答ふる書中の語をいふ　(二) 自己の心の本體に復すべきのみ　(三) 私意にて無理に考へ求めて出し來るに非ず　(四) 佛家の如く空々寂々を守ることゝなる　(五) 問者歐陽崇一自ら名いふ也　(六) 前の一病とは安排思索の弊を指し、後の一病とは沈空守寂の弊を指す　(七) 前出、本體ならざるものを認めて眞とする意の喩

思曰睿。睿作ㇾ

『(一)思に睿と曰ふ。睿は聖を作す』と。(二)心の官は則ち思ふ。思へば則ち之を得。

頭腦。專以レ致二良知一爲レ事。則凡多聞多見。莫レ非二致良知之功一。蓋日用之間。見聞酬酢。雖二千頭萬緒一。莫レ非二良知之發用流行一。除二卻見聞酬酢一。亦無二良知可一レ致矣。故只是一事。若レ曰下致二其良知一而求中之見聞上。則語意之間。未レ免レ爲レ二。此與下專求二之見聞之末一者上。雖二稍不一レ同。其爲レ未レ得二精一之旨一。則一而已。多聞擇二其善者一而從レ之。多見而識レ之。既云レ擇。又云レ識。其良知亦未二嘗不一レ行二於其間一。但其用レ意。乃專在二多聞多見上一。去二擇識一。則已失二卻頭腦一矣。崇一於二此等處一見得。當二已分曉一。今日之問。正爲レ發二明此學一。於二同志中一。極有レ益。但語意未レ瑩。則毫釐千里。亦不レ容レ不二精二察之一也。

る、正に此學を發明することを爲し、同志の中に於て、極めて益有り。但だ語意未だ瑩かならざるときは、則ち毫釐千里(一〇)なれば、亦之を精察せざるべからず。

㊀ 論語子罕篇の語 ㊁ 曖昧にてはつきりせぬ意、糊塗の字讀みて鶻突となす即ち鶻突は糊塗の如き意に見て可ならん ㊂ 下にいふ所、大抵學問の工夫主意頭腦の是當なるを要すといふ此一間を缺く ㊃ 本旨眼目の意 ㊄ 見聞の應對する所をいふ ㊅ 千殊萬端、種々樣々 ㊆ 見聞酬酢と致良知とは只一事にて二事に非ず ㊇ 來書引く所の論語述而篇の語 ㊈ すでにはつきり分り居る筈也 ㊉ 一寸したる違ひが千里の大差を生ずるもとゐなれば

來書云。師云。繫言何思何慮。是言三所レ思

來書に云ふ、『師(一一)云く繫に言ふ何をか思ひ何をか慮らんと。是れ思ふ所慮る所只だ是れ天理にして、更に別思別慮無きを言ふのみ。思無く、慮

無知也。良知之外。別無知矣。故致良知。是學問大頭腦。是聖人教人第一義。今云專求之見聞之末。則是失却頭腦。而已落在第二義矣。近時同志中。蓋已莫不知有致良知之說。然其功夫尙多鶻突者。正是欠此一問。大抵學問功夫。只要主意頭腦是當。若主意

中、蓋し已に致良知の說有るを知らざるもの莫からん。然るに其功夫の尙ほ多く鶻突(二)する者は、正に是(三)れ此一問を欠く。大抵學問の功夫は、只だ主意頭腦(四)の是當ならんことを要す。若し主意頭腦、專ら良知を致すを以て事と爲すときは、則ち凡ての多聞多見は、致良知の功に非ざる莫し。蓋し日用の間、見聞(五)酬酢は、千(六)頭萬緖と雖も、良知の發用流行に非ざる莫し。見聞酬酢を除却しては、亦良知の致す可き無し。故に只(七)だ是れ一事なり。其良知を致して、之を見聞に求むと曰ふが若きは、則ち語意の間、未だ二たるを免れず。此れ專ら之を見聞の末に求むる者とは、稍〻同じからずと雖も、其未だ精一の旨を得ずと爲すは、則ち一のみ。『(八)多く聞き其善なる者を擇びて之に從ひ、多く見て之を識る』と。既に擇ぶと云ひ、又識ると云ふ、其良知も亦未だ嘗て其間に行はれずんばあらず。但だ其意を用ふる、乃ち專ら多聞多見上に在りて擇び識らんとすれば、則ち已に頭腦を失却す。崇一が此等の處に於て見得ることは、當(九)に已に分曉なるべし。今日の問た

二義。竊意良知雖不由見聞而有。然學者之知。未嘗不由見聞而發。滯於見聞固非。而見聞亦良知之用也。今曰落在第二義。恐爲專以見聞爲學者而言。若致其良知而求之見聞。似亦知行合一之功矣。如何。

今第二義に落在すと曰ふは、恐らくは專ら(五)見聞を以て學と爲す者の爲に言ふならん。若し其良知を致して之を見聞に求めば、亦知行合一の功に似たり、如何。』

(一)欄外書によるに、南本には、「答歐陽崇一書」として「書」の字あり、從ふべし。崇一名は德、これ陽明五十五歳の時の書也 (二)論語述而篇の語 (三)根本の第一義を離れて第二義に落つ (四)學者の知は聞見に由りて發すべき也 (五)只專ら見たり聞いたりして物事を覺える事を學と爲す者の爲めに言へる言葉ならん

良知不由見聞而有。而見聞莫非良知之用。故良知不滯於見聞。而亦不離於見聞。孔子云。吾有知乎哉。

良知は見聞に由りて有るにあらず。而も見聞は良知の用に非ざる莫し。故に良知は見聞に滯らざれども、而も亦見聞を離れず。孔子云ふ、(一)『吾れ知ること有りや、知ること無し』と。良知の外別に知ること無し。故に良知を致すは、是れ學問の大頭腦にして、是れ聖人の人を敎ふる第一義なり。今專ら之を見聞の末に求むと云ふときは、則ち是れ頭腦を失却して、已に第二義に落在す。近時同志

此節節分解。佛家有㆓撲㆑人逐㆑塊之喩㆒。見㆑塊撲㆑人則得㆑人矣。見㆑塊逐㆑塊。於㆑塊奚得哉。在㆑座諸友聞㆑之。惕然皆有㆓惺悟㆒。此學貴㆓反求㆒。非㆓知解可㆑入也。

ぴたりと合ふ　(四)　聖道に反したる異端邪曲の學は一たび考校して盡く破れん　(五)　涅槃經二十六に「一切の凡夫は結果を觀て因緣を觀ぜず。恰も犬がつちくれを逐うて人を逐はざるが如し」といふ意味の文あり。又祖庭事苑に大般若論の言として「犬に土塊をなぐれば、犬は土塊を逐ひ其塊は止らず。之を獅子になぐれば獅子は人を逐ひ其塊は自ら止る」との意味の喩あり。蓋し物事の枝葉に拘りて本原を見ざるに喩へしなり。

來書云。師云。德性之良知。非㆑由㆓於聞見㆒。若㆑曰㆘多聞擇㆓其善者㆒而從㆑之。多見而識㆖㆑之。則是專求㆓之見聞之末㆒。而已落㆓在第

(一)歐陽崇一に答ふ

來書に云ふ、『師云く、德性の良知は聞見に由るに非ず。(二)多く聞いて其善なる者を擇びて之に從ひ、多く見て之を識ると曰ふが若き、則ち是れ專ら之を見聞の末に求むるものにして、(三)已に第二義に落在すと。竊かに意ふに、良知は見聞に由りて有るにあらずと雖も、然れども(四)學者の知は、未だ嘗て見聞に由りて發せずんばあらず。見聞に滯るは固より非なり。而も見聞も亦良知の用なり。

以ニ其瘡之未レ發。而遂忘中其服藥調理之功上乎。若必待ニ瘡發一。而後服藥調理。則既晩矣。致知之功。無レ間ニ於有レ事無一レ事。而豈論ニ於病之已發未發一邪。大抵原靜所レ疑。前後雖レ若レ不レ一。然皆起ニ於自私自利。將迎意必之爲一レ累。此根一去。則前後所レ疑。自將下氷消霧釋。有中不レ待ニ於問辨一者上矣。

答ニ原靜一書出。讀者皆喜ニ澄善問師善答。皆得レ聞レ所レ未レ聞。師曰。原靜所レ問。只是知解上轉。不レ得レ已與レ之逐節分疏。若信ニ得良知一。只在ニ良知上一用レ工。雖ニ千經萬典一。無レ不ニ脗合一。異端曲學一勘盡破矣。何必如レ

原靜に答ふるの書出で丶、讀者皆澄が善く問ひ師が善く答へて、皆未だ聞かざりし所を聞くを得たるを喜ぶ。師曰く、『原靜が問ふ所は只だ是れ知解上に轉(一)ず。已むを得ず之と逐節分疏(二)す。若し良知を信じ得て只だ良知上に在りて工を用ひば、千經萬典(三)と雖も脗合せざる無く、異端曲學(四)は一勘して盡く破れん。何ぞ必ずしも此の如く節節分解せん。佛家に人を撲ち(五)、塊を逐ふの喩有り。塊を見て人を撲たば則ち人を得ん。塊を見て塊を逐はゞ塊に於て奚ぞ得んや』と。座に在る諸友之を聞き惕然として皆惺悟するところ有り。此れ學は反り求むるを貴ぶ、知解の入る可きに非ざるなり。

(一) 單に知識上の解釋にのみ轉じて本原を體得せず (二) 一節々々と分解疏擧す (三) 如何に多くの經典にても皆

•情順ニ萬事ー而無ㇾ情也。無ㇾ所ㇾ住。而生ニ其心ー。佛氏曾有ニ是言ー。未ㇾ爲ㇾ非也。明鏡之應ㇾ物。姸者姸。媸者媸。一照而皆眞。卽是生ニ其心ー處。姸者姸。媸者媸。一過而不ㇾ留。卽是無ㇾ所ㇾ住處。病瘧之喩。旣已見ニ其精切ー。則此節所ㇾ問可ニ以釋然ー。病ㇾ瘧之人。瘧雖ㇾ未ㇾ發。而病根自在。則亦安可ㇾ下

姸なる者は姸に、媸なる者は媸に、一過して留らず、(七)卽ち是れ住る所無き處なり。瘧を病むの喩、既に已に其精切なるを見ば、則ち此節に問ふ所、以て釋然たる可し。瘧を病める人は、瘧未だ發せずと雖も、而も病根自ら在り。則ち亦安ぞ其瘧の未だ發せざるを以てして、遂に其服藥調理の功を忘る可けんや。若し必ず瘧の發するを待つて、而して後に服藥調理せば則ち既に晩し。致知の功に事有り事無きの間無し。(八)豈に病の已發未發を論ぜんや。大抵原靜の疑ふ所は、前後一ならざるが若しと雖も、然も皆自私自利•將迎意必の累を爲せるより起る。(九)此根一たび去らば、則ち前後疑ふ所は自ら將に氷消霧釋して問辨を待たざる者有らんとす。

(一) 皦は明かなる貌　(二) きはめて細かなるおほひくもりも無し　(三) 美醜　(四) 明鏡は其見はれたる形を留めおくことなし　(五) 金剛經に「應無ㇾ所ㇾ住而生ニ其心ー」とあるをいふ、下文此語を引きていふ也　(六) 照して皆眞也　(七) 過ぎて留ることなし　(八) 已發と未發とは固より問題に非ず　(九) 自私自利將迎意必の病根だに去らば疑は自然に解けん

切矣。若二程子之言一。則是聖人之情。不レ生二於心一。而生二於物一也。何謂耶。且事感而情應。則是是非非可二以就格一。事或未レ感時謂二之有一。則未レ形也。謂二之無一。則病根在。有無之間。何以致二吾知一乎。學務レ無レ情。累雖レ輕。而出レ儒入レ佛矣。可乎。

無の間、何を以てか吾が知を致さん。學、情無きを務めば、累輕しと雖も而も儒を出でゝ佛に入るなり、可ならんや。(五)』

(一) 大學の「身有レ所二忿懥一則不レ得二其正一」云々、「身」の字を「心」とせるは程子の改むる所に從ふ也 (二) 上卷「澄喜怒哀樂の中和を問ふ」の條に出づ、此卷は續錄なるが故に、上卷を指して傳習錄と謂へる也 (三) 情の是なるは是と知り、非なるは非と知り、其事についてたゞすべし (四) 有りともいへず無しともいへぬ所に於て如何にして吾が知を致さん (五) 學、情無きを務めんとせば情に累はさるゝ事は輕けれども、それでは佛氏に入る譯也

聖人致知之功。至誠無レ息。其良知之體。皦如二明鏡一。略無二纖翳一。姸媸之來。隨レ物見レ形。而明鏡曾無二留染一。所レ謂

聖人の致知の功は、至誠にして息むこと無し。其良知の體は、皦として(一)明鏡の如く、略ゝ(二)纖翳無し。(三)姸媸の來るや、物に隨ひて形を見す。而して(四)明鏡は曾て留染する無し。所謂情は萬事に順ひて情無きなり。住る所無くして其心を生ず。(五)佛氏曾て是言有り。未だ非と爲さゞるなり。明鏡の物に應ずるや、姸なる者は姸に、媸なる者は媸に、(六)一照して皆眞なり。即ち是れ其心を生ずる處にして、

求ニ許多憂苦一。自加ニ迷棄一。雖レ在ニ憂苦迷棄之中一。而此樂又未ニ嘗不一レ存。但一念開明。反レ身而誠。則即レ此而在矣。每與ニ原靜一論。無レ非ニ此意一。而原靜尚有ニ何道可レ得之問一。是猶未レ免ニ於騎レ驢覓レ驢之蔽一也。

れ猶ほ未だ驢(五)に騎つて驢を覓むるの蔽を免れず。

(一) ちやんと自分に有りながら其有ることが分らずして反つて自ら憂苦を求め迷ひて眞樂を棄つ (二) 斯く憂ひ苦み迷ひ棄てたる中にありても、樂は心の本體なれば、此樂は常に心の中に存する也 (三) 一念開きて身に反して誠ありさへすれば、そこに眞の樂あり (四) 而るになほ原靜は如何にして眞樂を求むべきかの道を問ふ (五) 道は近く自己の心に反して誠なるにあり、然るに却つて之を他に求めんとす、これ傳燈錄に所謂「不レ解ニ即心是佛一眞是騎レ驢覓レ驢」の蔽を免れずと也

來書云。大學以ニ心有ニ好樂忿懥憂患恐懼一。爲レ不レ得ニ其正一。而程子亦謂ニ聖人情順ニ萬事一而無レ情。所レ謂有者。傳習錄中以レ病瘧譬レ之。極精

來書に云ふ、『(一)大學は心に好樂・忿懥・憂患・恐懼有るを以て其正を得ずと爲す。而して程子も亦謂ふ、聖人の情は萬事に順ひて情無しと。所謂有りとは、(二)傳習錄中に瘧を病むを以て之に譬へて極めて精切なり。程子の言の若き、則ち是れ聖人の情は心に生ぜずして物に生ずるなりと。何の謂ぞや。且つ事感じて情應ずれば則ち(三)是是非非以て就いて格すべし。事或は未だ感ぜざる時、之を有りと謂はゞ、則ち未だ形れざるなり。之を無しと謂はゞ、則ち病根在り。(四)有

所レ欲。皆能樂矣。何必聖賢。若別有二眞樂一。則聖賢之遇二大憂大怒大驚大懼之事一。此樂亦在否乎。且君子之心。常存二戒懼一。是蓋終身之憂也。惡得レ樂。澄平生多悶。未三嘗見二眞樂之趣一。今切願尋レ之。

むを得ん。(三)澄平生多悶にして、未だ嘗て眞樂の趣を見ず。今切に願はくは之を尋ねん。』

(一)近思錄爲學に「明道先生曰く、昔、學を周茂叔に受く、毎に顏子仲尼の樂む所何事かと尋ねしむ」と見ゆ　(二)通常の人の爲したしと望む所を遂ぐるは皆樂む也　(三)私は平生煩悶多くして眞の樂の趣を見ず

樂是心之本體。雖レ不レ同二於七情之樂一。而亦不レ外二於七情之樂一。雖三則聖賢別有二眞樂一。而亦常人之所二同有一。但常人有レ之。而不二自知一。反自

樂は是れ心の本體なり。七情の樂に同じからずと雖も、而も亦七情の樂に外ならず。則ち聖賢には別に眞樂有りと雖も、而も亦常人の同じく有する所なり。但だ常人は(一)之を有するも而も自ら知らずして、反つて自ら許多の憂苦を求め自ら迷棄を加ふ。(二)憂苦迷棄の中に在りと雖も、而も此樂は又未だ嘗て存せずんばあらず。(三)但だ一念開明し、身に反して誠あれば、則ち此に卽きて在り。毎に原靜と論ずるは此意に非ざる無し。而も原靜には(四)尙ほ何の道か得べきの問有り。是

未純。若知得時。便是聖人矣。後儒嘗以數子者。尙皆是氣質用事。未免於行不著。習不察。此亦未爲過論。但後儒之所謂著察者。亦是狃於聞見之狹。蔽於沿習之非。而依擬倣象於影響形迹之間。尙非聖門之所謂著察者也。則亦安得以己之昏昏。而求人之昭昭也乎。所謂生知安行。知行二字。亦是就用功上說。若是知行本體。卽是良知良能。雖在困勉之人。亦皆可謂之生知安行矣。知行二字。更宜精察。

に合ひて純一ならず ㈦ 孟子盡心上に「行レ之而不レ著焉、習矣而不レ察焉、終レ身由レ之而不レ知二其道一者衆也」とあるに取る ㈧ 著しといひ察すといふ事も、只聞見上の狹き範圍に狃れ ㈨ 長き習はしの非に蔽はれ ㈩ 本體質質ならずして、只影や響やうはべの形のみをならひまねて居る (一一) 孟子盡心下に「賢者以二其昭昭一使二人昭昭一今以二其昏昏一使二人昭昭一」とあるを引いていふ也。後儒自ら道に昏くして人をして道に昭かならしめんとす、固より不可なりとの意

來書云。昔周茂叔。每令伯淳尋仲尼顏子樂處。敢問是樂也。與七情之樂同乎。否乎。若同則常人之一遂

來書に云ふ、「昔周茂叔每に伯淳をして仲尼・顏子の樂む處を尋ねしむ。(一) 敢て問ふ、是の樂や七情の樂と同じきや否や。若し同じければ則ち常人の一に欲する所を遂ぐるは皆能く樂むなり。何ぞ必ずしも聖賢のみならん。(二) 若し別に眞樂有らば、則ち聖賢の、大憂・大怒・大驚・大懼の事に遇ふも、此の樂亦在りや否や。且つ君子の心は常に戒懼を存す。是れ蓋し終身の憂なり。惡ぞ樂

牽蔽。不レ能レ循二得良知。如二數公一者。天質既自淸明。自少三物欲爲二之牽蔽一。則其良知之發用流行處。自然是多。自然違レ道不レ遠。學者學レ循二此良知一而已。謂二之知レ學。只是知二得專在レ學レ循二良知。數公雖レ未レ知下專在二良知上一用上功。而或泛二濫於多岐一。疑二迷於影響一。是以或離或合。而

を學ぶに在るを知り得るなり。數公は未だ專ら良知上に在りて功を用ふるを知らずして、或は(四)多岐に泛濫し、(五)影響に疑迷す。(六)是を以て或は離れ或は合して、未だ純ならずと雖も、若し知り得る時は、便ち是れ聖人なり。後儒嘗て以らく、數子は尙ほ皆是れ氣質事を用ひ、(七)未だ行うて著しからず習うて察せざるを免かれずと。此れ亦未だ過論と爲さず。但だ後儒の所謂(八)著察なる者も、亦是れ聞見の狹きに狃れ、(九)沿習の非に蔽はれて、(一〇)影響形迹の間に依擬倣象す。尙ほ聖門の所謂著察なる者に非ざるなり。則ち亦安ぞ(一一)己の昏昏を以て人の昭昭を求むるを得んや。所謂生知安行は、知行の二字亦是れ功を用ふる上に就きて說く。若し是れ知行の本體は卽ち是れ良知良能ならば、困勉の人に在りと雖も、亦皆之を生知安行と謂ふ可し。知行の二字は更に宜しく精察すべし。

(一) 但だ良知のまゝに發用流行し行かば (二) 前項引例の諸公 (三) 學とは此良知にしたがひ良知のまゝにすることを學ぶの謂のみ (四) 多くのわきみちにそれあふれ (五) 本體ならぬ影や響にまよふ (六) 或は道に離れ、は道

未可盡謂之知學。盡謂之聞道。然亦自有其學違道不遠者也。使其聞學知道。卽伊傳周召矣。若文中子。則又不可謂之不知學者。其書雖多出於其徒。亦多有未是處。然其人略。則亦居然可見。但今相去遼遠。無有的然憑證。不可懸斷其所至矣。

（一）欄外書に、「性之性也、王本作性之德也」と見ゆ　（二）私欲と客氣とは一つの病の兩様の稱にて二つの物が別々にあるわけに非ず、本然の性の蔽はるゝ事の淺き深きによりて私欲となり客氣となる也　（三）張良・黃憲　（四）やがてそのまゝ伊尹・傳說・周公・召公たらん　（五）ちやんとしてゐて、立派に立ち居りて　（六）確乎たる證據　（七）どこまで至りたりと懸空に斷ずるわけには行かず

夫良知卽是道。良知之在人心。不但聖賢。雖常人亦無不如此。若無有物欲牽蔽。但循著良知發用流行將去。卽無不是道。但在常人。多爲物欲

夫れ良知は卽ち是れ道にして、良知の人心に在るや、但だ聖賢のみならず、常人と雖も亦此の如くならざる無し。若し物欲の牽蔽有る無く、（一）但だ良知に循著して發用流行し將ち去らば、卽ち是れ道ならざる無し。但だ常人に在りては、多く物欲に牽蔽せられ、良知に循ひ得ること能はず。（二）數公の如き者は、天質既に自ら淸明にして、自ら物欲の之が牽蔽を爲すこと少なければ、則ち其良知の發用流行する處、自然に是れ多くして、自然に道に違ふこと遠からず。（三）學は此良知に循ふことを學ぶのみ。之を學を知ると謂ふは、只だ是れ專ら良知に循ふこと

學知困勉者一乎。愚意竊云。謂二諸公見一レ道偏一則可。謂二全無一レ聞。則恐後儒崇二尚記誦訓詁一之過也。然乎。否乎。

性一而已。仁、義禮知。性之性也。聰明睿知。性之質也。喜怒哀樂。性之情也。私欲客氣。性之蔽也。質有二清濁一。故情有二過不及一。而蔽有二淺深一也。私欲客氣。一病兩痛。非二二物一也。張黃諸葛及韓范諸公。皆天質之美。自多二暗合二道妙一。雖レ

性は一のみ。仁義禮知は(一)性の性なり。聰明睿知は性の質なり。喜怒哀樂は性の情なり。私欲客氣は性の蔽なり。質に清濁有り、故に情に過不及有り。而して蔽に淺深有り。(二)私欲客氣は一病にして兩痛、二物に非ざるなり。(三)張・黃・諸葛及び韓・范諸公は皆天質の美なるもの、自ら暗に道妙に合すること多し。未だ盡く之を學を知れりと謂ひ、盡く之を道を聞けりと謂ふ可からずと雖も、然も亦自ら其學の道に違ふこと遠からざる者有るなり。其をして學を聞き道を知らしめば、(四)卽ち伊・傅・周・召たらん。文中子の若きは、則ち又之を學を知らざる者と謂ふ可からず。其書多くは其徒に出で、亦多くは未だ是ならざる處有りと雖も、然れども其大略は則ち亦(五)居然として見る可し。但だ今や相去ること遼遠にして、(六)的然たる憑證有ること無く、(七)懸かに其至りし所を斷ず可からず。

不ニ明白一。亦是稍有ニ欲レ速之心一。向曾面ニ論明善之義一。明則誠矣。非レ若ニ後儒所レ謂明善之淺一也。

來書云。聰明睿知。果質乎。仁義禮智。果性乎。喜怒哀樂。果情乎。私欲客氣。果一物乎。二物乎。古之英才。若ニ子房仲舒叔度孔明文中韓范諸公。德業表著。皆良知中所レ發也。而不レ得レ謂ニ之聞レ道者。果何在乎。苟曰ニ此特生質之美耳。則生安知行者。不レ愈ニ於

來書に云ふ、『聰明睿知(一)は果して質か。仁義禮智は果して性か。喜怒哀樂は果して情か。私欲客氣は果して一物か、二物か。古の英才たる子房(二)・仲舒・叔度・孔明・文中・韓・范(三)諸公の德業表著なるが若きも、皆良知中に發する所なり。而も之を道を聞くと謂ふを得ざる者は果して何に在りや。苟も此を特に生質の美なるのみと曰はゞ、則ち生知安行なる者は學知困勉なる者に愈らざるか。愚意竊かに云ふ、諸公の道を見ること偏せりと謂ふは則ち可なるも、全く聞くこと無しと謂ふは、則ち恐らくは後儒、記誦訓詁を崇尙するの過ならんと。然りや否や。

(一) 中庸二十四章の朱註に「聰明睿知は聖人の質なり」と見ゆ　(二) 子房は張良なり、漢の高祖創業の臣。仲舒姓は董、漢代の儒者なり。叔度は黃憲なり、後漢の人、大量を以て知らる。孔明姓は諸葛名は亮、蜀に伯たり、三國統一の大志を抱きて戰中に卒す。文中は王通なり、字は仲淹、隋の儒者なり。韓は宋の儒者韓魏公なり、名を琦といふ。韓退之なりと註する說は誤ならん。范は宋の名臣范仲淹なり、諡を文正公といふ　(三) これ等諸公の道德事業あらはれて著しきが如きも

滓便渾化。如何謂ニ明得盡一。如何而能便渾化。

良知本來自明。氣質不レ美者。査滓多。障蔽厚。不レ易ニ開明一。質美者。査滓原少。無レ多ニ障蔽一。略加ニ致知之功一。此良知便自瑩徹。些少査滓如ニ湯中浮一レ雪。如何能作ニ障蔽一。此本不ニ甚難一レ曉。原靜所三以致ニ疑於此一。想是因ニ一明字

なれば明かにし得盡すと謂ひ、如何にすれば能く便ち渾化するか。』

(一) 近思錄爲學に出でたる語 (二) 査は渣に通じたる俗用也、渣滓はをどみ、にごり、渾化は渾然として化して天地と同體になる義

良知は本來自ら明かなり。氣質の美ならざる者は査滓多く、障蔽厚くして開明し易からず。質の美なる者は査滓原少く障蔽多かる無し。略〻致知の功を加ふれば、此良知は便ち自ら瑩徹(一)して、些少の査滓は湯中に雪を浮ぶるが如し(二)、如何ぞ能く障蔽を作さん。此れ本甚だ曉り難からず。原靜の疑を此に致す所以は、想ふに是れ一の明の字の明白ならざるに因らん。亦是れ稍や速かならんを欲するの心有らん。向に嘗て明善の義を面論せり(三)。明かなれば則ち誠なり。後儒(四)の所謂明善の淺きが若きに非ざるなり。

(一) 明瞭に透き通る意 (二) とけて無くなるに喩ふ (三) 中庸の「不レ明レ善則不レ誠ニ其身一」につきて面論せりと也 (四) 朱子の明善の義を解すること淺薄なるをいふ

心之昏雜。多不二自覺一。今欲二日精日明。常提不レ放。以二何道一乎。只此常提不レ放。卽全功乎。抑於二常提不レ放之中一。更宜レ加二省克之功一乎。雖レ曰二常提不レ放。而不レ加二戒懼克治之功一。恐私欲不レ去。若加二戒懼克治之功一焉。又爲二思レ善之事一。而於二本來面目一。又未レ達一間也。如レ之何則可。

戒懼克治。卽是常提不レ放之功。卽是必有レ事焉。豈有二兩事一邪。此節所レ問。前一段已自說得分曉。末後却是自生二迷惑一。說得支離。及レ有二本來面目。未レ達一間之疑一。都是自私自利。將迎意必之爲レ病。去二此病一。自無二此疑一矣。

(一)戒懼克治は卽ち是れ常に提して放たざるの功、卽ち是れ必ず事有るなり。豈に兩事有らんや。此節に問へる所、(二)前の一段は已に自ら說き得て分曉せり。(三)末後は却つて是れ自ら迷惑を生じ說き得て支離せり。本來の面目未だ達せざる一間なりの疑有るに及びては、都て是れ自私自利・將迎意必が病を爲すなり。此病を去らば、自ら此疑無からん。

(一) 戒懼克治とて別の事あるに非ず、卽ち常に提して放たざるの工夫にして卽ち孟子の必ず事あるの工夫也　(二) 前半は汝自身說き得て明か也　(三) 後半に至りては自らまよひを生じて說く所支離破裂せり

來書云。質美者明得盡。査

來書に云ふ、『(一)質の美なる者は明かにし得盡せば、(二)査滓便ち渾化すと。如何

孟子所レ謂必有レ事。夫子所レ謂致二良知一之說上乎。其即常惺惺。常記得。常知得。常存得者乎。於二此念頭提在之時一。而事至物來。應レ之必有二其道一。但恐此念頭提起時少。放下時多。則工夫間斷耳。且念頭放失。多因二私欲客氣之動一而始。忽然驚醒而後提。其放而未レ提之間。

常に知り得、常に存し得る者なるか。此念頭提在の時に於て、事至り物來らば、之に應ずるに必ず其道有らん。但だ恐くは此念頭提起の時少なく放下の時多きは、則ち工夫の間斷のみ。且つ念頭の放失するは、多く私欲客氣の動に因つて始る。(四)忽然として驚醒して後に提す。其放つて未だ提せざるの間は、心の昏雜も多くは自覺せず。今、日に精しく日に明かに、常に提して放たざらんことを欲せば、何の道を以てせんか。只だ此れ常に提して放たざるもの、即ち全功か。抑も常に提して放たざる中に於て、更に宜しく省克の功を加ふべきか。常に提して放たずと曰ふと雖も、而も戒懼克治の功を加へずば、恐くは私欲去らざらん。若し戒懼克治の功を加へば、又善を思ふの事と爲り、本來の面目に於て、又未だ達せざる一間ならん。(五)之を如何せば則ち可ならん。』

(一) 禪家の常に言ふ所にて、本來の心を提持して、外物を馳せ求むる心を防ぐ修業法なり (二) 前出、孟子公孫丑上の「必有レ事焉、而勿レ正」云々をいふ (三) 先生、陽明を指していふ也 (四) 忽ち念頭の放失せるに驚き覺醒して而して後に心を提持す (五) 未だ達せざるに於て、ごく僅かの間斷あるが如し

是爲下失二其良心一之人上。指二出箇良心萌動處一。使三他從レ此培養將去一。今已知二得良知一明白。常用二致知之功一。即已不レ消レ説二夜氣一。却是得レ兎後不レ知レ守レ兎。而仍去レ守レ株。兎將二復失一レ之矣。欲レ求二寧靜一。欲二念無一レ生。此正是自私自利。將迎意必之病。是以念愈生。而愈不二寧靜一。良知只是一箇良知。而善惡自辨。更有二何善何惡可一レ思。良知之體。本自寧靜。今却又添二一箇求二寧靜一。本自生生。今却又添二一箇欲レ無レ生。非二獨聖門致知之功不一レ如レ此。雖二佛氏之學一。亦未二如レ此將迎意必一也。只是一念良知。徹頭徹尾。無始無終。即是前念不レ滅。後念不レ生。今却欲二前念易レ滅。而後念不一レ生。是佛氏所レ謂斷二滅種性一。入二於槁木死灰一之謂矣。

生ぜざらんを欲するは、是れ佛氏の所謂種性を斷滅して槁木死灰に入るの謂なり。(六)

(一) 傳燈錄瑞巖禪師主人公惺惺なりや否やの語に本づく　(二) 大體の工夫といふに同じ　(三) 韓非子に出づ、宋人に田を耕す者あり、田中に株あり、兎走りて株に觸れ頸を折りて死す、因つて其耒を釋て、株を守り、復た兎を得んことを冀ふ、兎復た得べからずして身は宋國の笑(ワラヒ)となれりとあるに取る、但こゝの意は折角得たる兎を守る事を知らずして却つて株を守り居れば、兎をも失はんとの意に轉じ言へるなり　(四) 別に一つの寧靜を求むるを添ふ　(五) 前出來書の語を指していふ　(六) 世の一切のほだしを棄てゝ寂滅に入り、凡ての思念を斷ちて槁木死灰に入るをいふ

來書云。佛氏又有下常提二念頭一之説上。其猶下

來書に云ふ、『佛氏又常に念頭を提するの説有り。(一) 其れ猶ほ孟子の所謂必ず事有り、(二) 夫子の所謂良知を致すの説のごときか。(三) 其れ即ち常に惺惺、常に記し得、

佛氏之常惺惺。亦是常存他本來面目耳。體段工夫。大略相似。但佛氏有箇自私自利之心。所以便有不同耳。今欲善惡不思。而心之良知淸靜自在。此便有自私自利。將迎意必之心。所以有不思善不思惡時。用致知之功。則已涉思善之患。孟子說夜氣。亦只

に涉るの患有り。孟子の夜氣を說くも、亦只だ是れ其良心を失へる人の爲に箇の良心萌動の處を指出して、他をして此より培養し將去らしめんとするのみ。今已に良知を知得すること明白にして、常に致知の功を用ふれば、卽ち已に夜氣を說くを消ひず。却つて是れ(三)兎を得て後に兎を守るを知らず仍ほ株を守り去らば兎將に復た之を失はんとするなり。寧靜を求めんと欲し、念の生ずる無きを欲するは、此れ正に是れ自私自利・將迎意必の病なり。是を以て念愈〻生じて愈〻寧靜ならず。良知は只だ是れ一箇の良知にして、善惡自ら辨ず。更に何の善、何の惡の思ふ可き有らん。良知の體は本自ら寧靜なるに、今却つて又一箇の(四)寧靜を求むることを添ふ。本自ら生生たるに、今却つて又一箇の生ずる無きを欲することを添ふ。獨り聖門致知の功のみ此の如くならざるに非ず、佛氏の學と雖も亦未だ此の如く將迎意必せざるなり。只だ是れ一念の良知、徹頭徹尾無始無終にして、卽ち是れ前念滅せず後念生ぜざるものなり。今(五)却つて前念滅し易くして後念

之說。但於二斯光景一不レ能レ久。倏忽之際。思慮已生。不レ知用レ功久者。其常寐初醒。而思未レ起之時。否乎。今澄欲レ求二寧靜一。愈不二寧靜一。欲二念無一レ生。則念愈生。如レ之何而能使下此心前念易レ滅後念不レ生。良知獨顯。而與二造物者一遊上乎。

㊀佛家にては無念無想の空寂の時に於て本來の面目を認む　㊁善を思ふといふ事になりて善惡を思はざる眞の無念無想に非ず　㊂寢ねて丁度今醒めたといふ時　㊃告子上牛山之章に出づ　㊄此狀態にて久しくあり得ず　㊅忽ちにして早くも思慮生ず　㊆陸原靜自ら名いふ也　㊇天神鬼神をいふ。天神萬物を創造せる者の謂也

不レ思レ善。不レ思レ惡時。認二本來面目一。此佛氏爲下未レ識二本來面目一者上設二此方便一。本來面目。卽吾聖門所レ謂良知。今既認二得良知一明白。卽已不レ消二如レ此說一矣。隨レ物而格。是致レ知之功。卽

善を思はず惡を思はざる時に本來の面目を認むとは、此れ佛氏が未だ本來の面目を識らざる者の爲に此方便を設けしなり。本來の面目は卽ち吾が聖門の所謂良知なり。今既に良知を認め得て明白なれば、卽ち已に此の如く說くを消ひず。物に隨ひて格すとは是れ知を致すの功にして、卽ち佛氏の常惺惺も亦是れ常に他の本來の面目を存するのみ。體段の工夫は大略相似たり。但だ佛氏は箇の自私自利の心有り。所以に便ち同じからざる有るのみ。今善惡思はずして而して心の良知の淸靜自在ならんことを欲せば、此れ便ち自私自利・將迎意必の心有り。所以に善を思はず惡を思はざる時、致知の功を用ふれば、則ち已に善を思ふ

西。引レ犬上レ堂而逐レ之者。是自私自利。將迎意必之爲レ累。而非三克治洗蕩之爲二患也。今曰下養
生以二清レ心寡上レ欲爲レ要。只養生二字。便是自私自利。將迎意必之根。有三此病根潛二伏於中一。宜
其有下滅二於東一。而生二於西一。引レ犬上レ堂。而逐レ之之患上也。

來書云。佛氏於二不レ思レ善。不レ思レ惡時。認二本來面目。於二吾儒隨レ物而格レ之功一不レ同。吾若於二不レ思レ善。不レ思レ惡時。用二致知之功。則已涉二於思一善矣。欲二善惡不レ思。而心之良知清淨自在。惟有二寐而方醒之時一耳。斯正孟子夜氣

來書に云ふ、『佛氏(一)は善を思はず惡を思はざる時に於て本來の面目を認む。吾が儒は物に隨ひて之を格するの功に於て同じからず。吾れ若し善を思はず惡を思はざる時に於て、致知の功を用ひば、(二)則ち已に善を思ふに涉る。善惡思はずして心の良知の淸淨自在ならんことを欲せば、惟だ(三)寐ねて方に醒むるの時有るのみ。斯れ正に孟子の夜氣の說なり。但だ(五)斯の光景に於ける久しき能はず。(六)倏忽の際思慮(四)已に生ず。知らず功を用ふるの久しき者は、其常に寐ね初めて醒めて而して思未だ起らざるの時なりや否やを。今(七)澄や寧靜を求めんと欲すれば愈〻寧靜ならず、念の生ずる無きを欲すれば則ち念愈〻生ず。之を如何せば能く此心をして前念滅し易く後念生ぜず、良知獨り顯れて(八)造物者と遊ばしめんや。』

必欲下此心純二乎天理一而無中一毫人欲之私上。此作レ聖之功也。必欲下此心純二乎天理一而無中一毫人欲之私上。非下防二於未レ萌之先一而克中於方萌之際上不レ能也。防二於未レ萌之先一而克二於方萌之際一。此正中庸戒愼恐懼。大學致知格物之功。舍レ此之外。無二別功一矣。夫謂下滅二於東一而生二於

必ず此心の天理に純にして一毫人欲の私無からんと欲するは、此れ聖と作るの功なり。必ず此心の天理に純にして一毫人欲の私無からんと欲すれば、未だ萌さゞるの先に防ぎ、而して方に萌すの際に克つに非ざれば能はざるなり。未だ萌さゞるの先に防ぎ、而して方に萌すの際に克つば、此れ正に中庸の戒愼恐懼にして、大學の致知格物の功なり。(一)此を舍いての外に別功無し。夫れ東に滅し西に生じ、犬を引きて堂に上げ而して之を逐ふと謂へるは、是れ自私自利なり。(二)將迎意必の累を爲せるにて、克治洗蕩の患を爲せるに非ざるなり。今生を養ふには心を淸くし欲を寡くするを以て要と爲すと曰ふ。只だ(三)養生の二字は、便ち是れ自私自利・將迎意必の根にして、此病根、中に潛伏する有り。宜なり其東に滅し西に生じ、犬を引き堂に上げ而して之を逐ふの患あるや。

(一) これ以外に別に工夫を用ふべきものなし (二) 斯くせんとわざ〳〵求め必ず爲さんと思ふ執着の心が累を爲せるにて私欲を克治洗蕩する事が患を爲せるに非ず (三) 養生といふ此二字がそも〳〵私念の病根也

寡ㇾ欲。作ㇾ聖之功畢矣。然欲寡則心自清。清心非下舍二棄人事一。而獨居求ㇾ靜之謂上也。蓋欲ㇾ使下此心純二乎天理一。而無中一毫人欲之私上耳。今欲ㇾ爲二此之功一。而隨二人欲生一而克ㇾ之。則病根常在。未ㇾ免下滅二於東一。而生中於西上。若欲四刊二剝洗三蕩於衆欲未ㇾ萌之先一。則又無ㇾ所ㇾ用二其力一。徒使二此心之不一ㇾ清。且欲未ㇾ萌。而捜剔以求ㇾ去ㇾ之。是猶二引ㇾ犬上ㇾ堂而逐一ㇾ之也。愈不可矣。

ら清し。清心は人事を舍棄して獨居靜を求むるの謂に非ず。蓋し此心をして天理に純にして、一毫人欲の私無からしめんと欲するのみ。今此功を爲さんと欲し、(二)人欲の生ずるに隨ひて之に克てば、則ち病根常に在りて、未だ東に滅して西に生ずるを免かれず。若し衆欲を未だ萌さゞる先に刊剝洗蕩(三)せんと欲せば、則ち又其力を用ふる所無く、徒らに此心をして清からざらしむ。且つ欲の未だ萌さゞるに捜剔(四)して以て之を去らんと求むるは、(五)是れ猶ほ犬を引き堂に上げ而して之を逐ふがごとし。愈〻不可ならん。』

(一) 孟子盡心下に「養ㇾ心莫ㇾ善二於寡一ㇾ欲」云々と見ゆ (二) 人欲の生ずるまゝにそれに克ち行けば、人欲の病根たえずして、こちらに滅すればあちらに生ずるを免れず (三) 削り落し洗ひすゝぐ (四) 警察して (五) 二程遺書に出づ、わざ〳〵犬を堂へ引上げ置きてそれを又逐ひ下す如しとにて、わざ〳〵欲をよび起してさてそれに克つ事になるとの意を喩へたる也

體明覺之自然。而未嘗有所動也。有所動卽妄矣。妄心亦照者。以其本體明覺之自然者。未嘗不在於其中。但有所動耳。無所動。卽照矣。無妄無照。非以妄爲照。以照爲妄也。照心爲照。妄心爲妄。是猶有妄有照也。有妄有照。則猶貳也。貳則息矣。無妄無照。則不貳。不貳則不息矣。

以てなり。動く所有れば卽ち妄なり。㈠妄心も亦照なりとは、其本體明覺の自然なる者、未だ嘗て其中に在らずんばあらずして、但だ動く所有るを以てのみ。動く所無ければ卽ち照なり。妄無く照無しとは、妄を以て照となし、照を以て妄と爲すに非ざるなり。㈡照心を照と爲し妄心を妄と爲すは、是れ猶ほ妄有り照有るがごときなり。妄有り照有るは則ち猶ほ貳なるがごとし。㈢貳なれば則ち息む。妄無く照無ければ則ち貳ならず。貳ならざれば則ち息まず。

㈠ 妄心とて別に有るに非ず、本體の心動かざれば照心にして動けば妄心といふ故也 ㈡ 照心を照とし妄心を妄とすれば、照と妄と二つあるやうにて誠一ならず ㈢ 中庸の語についていふ、誠一ならざれば息みて間斷ある也

來書云。養生以清心寡欲爲要。夫清心

來書に云ふ、『㈠生を養ふには心を清くし欲を寡くするを以て要と爲す。夫れ心を清くし欲を寡くすれば、聖と作るの功畢る。然るに欲寡ければ則ち心自

來書云。先生又曰。照心非レ動也。豈以二其循一レ理。而謂二之靜一歟。妄心亦照也。豈以下其良知未二嘗不レ在二於其中。未二嘗不一レ明二於其中一。而視聽言動之不レ過レ則者皆天理上歟。且既曰二妄心一。則在二妄心一可レ謂二之照一。而在二照心一。則謂二之妄一矣。妄與レ息何異。今假妄之照。以續二至誠之無一レ息。竊所レ未レ明。幸再啓レ蒙。

來書に云ふ、「先生又曰く、照心は動に非ざるなりと。豈に其の理に循ふを以て之を靜と謂ふか。(一)妄心も亦照なりとは、豈に其良知の未だ嘗て其中に在らずんばあらず、未だ嘗て其中に明かならずんばあらず、而して視聽言動の則を過ぎざる者は皆天理なるを以てなるか。且つ既に妄心と曰ふ、則ち妄心に在りては之を照と謂ふ可くんば、照心に在りては則ち之を妄と謂ふべし。(二)妄と息と何ぞ異ならん。(三)今假妄の照以て至誠の息む無きを續ぐは竊かに未だ明かならざる所、幸に再び蒙を啓け。」

(一) 照心は天理に循ふが故に之を靜と謂ふか　(二) 妄なれば天理息む、即ち妄心は天地至誠間斷の所とすれば、妄と息と異なる筈なし　(三) 然るに今妄も亦照也といひて、假にして誠ならざる照を以て天地至誠の息むなきを續ぐやうに仰せあるは不明也

照心非レ動者。以下其發二於本

照心は動に非ずとは、其の本體明覺の自然に發して、未だ嘗て動く所有らざるを

有二發而中レ節之和一。感而遂通之妙一矣。然謂二良知常若レ居二於優閑無事之地一。語尚有レ病。蓋良知雖レ不レ滯二於喜怒憂懼一。而喜怒憂懼。亦不レ外二於良知一也。

謂ふは、語尚ほ病有り。蓋し良知は喜怒憂懼に滯らずと雖も、而も喜怒憂懼も(二)亦良知に外ならず。

(一) 來書の喜怒憂懼の感發といふより自然消阻すといふまでを指す　(二) 情の發露も亦良知のみ、良知が別に主となつて超然としてゐる譯には非ず

來書云。夫子昨以二良知一爲二照心一。竊謂良知心之本體也。照心人所レ用レ功。乃戒愼恐懼之心也。猶レ思也。而遂以二戒愼恐懼一爲二良知一。何歟。

來書に云ふ、『(一)夫子は昨良知を以て照心と爲せり。竊かに謂へらく、良知は心の本體なり、照心は人の功を用ふる所、乃ち戒愼恐懼の心なり。(二)猶ほ思ふがごとき也。而るに遂に戒愼恐懼を以て良知と爲すは何ぞや。』

(一) 前出第一の答を指していふ　(二) 戒愼恐懼は恰も心に思ふといふが如きもの也

能戒愼恐懼者。是良知也。

(一)能く戒愼恐懼する者は是れ良知なり。

(一) この戒愼恐懼の出來るが卽ち良知なり

以爲陽爲動。而未嘗無陰與靜也。秋冬可以爲陰爲靜。而未嘗無陽與動也。春夏此不息。秋冬此不息。皆可謂之陽謂之動也。春夏此常體。秋冬此常體。皆可謂之陰謂之靜也。自元會運世。歲月日時。以至刻秒忽微。莫不皆然。所謂動靜無端。陰陽無始。在知道者默而識之。非可以言語窮也。若只牽文泥句。比擬倣像。則所謂心從法華轉。非是轉法華矣。

來書云。嘗試於心。喜怒憂懼之感發也。雖動氣之極。而吾心良知一覺。即罔然消阻。或遏於初。或制於中。或悔於後。然則良知常若居優閑無事之地。而爲之主。於喜怒憂懼。若不與焉者。何歟。

來書に云ふ、『嘗に心に試むるに(一)、喜怒憂懼の感發するや、氣を動かすの極と雖も、吾が心の良知一たび覺れば、卽ち罔然として消阻す(二)。或は初に遏め、或は中に制し、或は後に悔ゆ。然らば則ち(三)良知は常に優閑無事の地に居て之が主と爲り、喜怒憂懼に於て與からざる若き者の若きは何ぞや。』

(一)嘗試は親切に身に當てゝ試むることにて孟子梁惠王上に出でたる字面 (二)あとかたもなく消え止む (三)良知は全く喜怒憂懼の如き氣の動に與らず優々閑々無事の地に居り、主人公となりて之を治め居るが如し

知此。則知未發之中。寂然不動之體。而

此を知れば則ち未發の中は寂然不動の體にして、發して節に中るの和、感じて遂に通ずるの妙有るを知る。然れども良知は常に優閑無事の地に居るが若しと

之動。謂二之陽之生一。非レ謂二動而後生上レ陽也。就二其生生之中一。指二其常體不レ易者一。而謂二之靜一。謂二之陰之生一。非レ謂二靜而後生上レ陰也。若果靜而後生レ陰。動而後生レ陽。則是陰陽動靜。截然各自爲二一物一矣。陰陽一氣也。一氣屈伸。而爲二陰陽一。動靜一理也。一理隱顯。而爲二動靜一。春夏可二

れ常體秋冬も此れ常體なり。皆之を陰と謂ひ之を靜と謂ふべし。元(九)・會・運・世・歳・月・日・時より刻(一〇)・秒・忽・微に至るまで皆然らざる莫し。所謂動靜端無く陰陽始(一一)無きなり。道を知る者默して之を識るに在り、言語を以て窮む可きに非ざるなり。若し只だ文に牽かれ句に泥み、(一二)比擬倣像せば則ち所謂(一三)心法華に從つて轉ず、是れ法華を轉ずるに非ざるなり。

(一) 凡て古人の言葉を觀るには、自己の意を以て其作者の精神を推し度りて其根本の主意を掴む事が大切也、若し文義にのみかゝはりて其眞意を解せざれば、詩の大雅雲漢に「周餘黎民靡レ有二子遺一」とあるは周に一人の遺民も無き譯となる也。此說孟子萬章上に出づ　(二) 此說近思錄に見ゆ　(三) 病弊有り　(四) 陰と陽と動と靜とはつきり分れ各々一物となる　(五) 只一つの理隱なるは卽ち靜にして顯なるは卽ち動也　(六) 春夏は陽たり動たるも亦陰と靜とのあるあり、秋冬は陰たり靜たるも亦陽と動とのあるあり　(七) 春秋も秋冬も生々息まざれば亦陽と謂ひ動と謂ふべし　(八) 春夏も秋冬もこれ常體なれば亦陰といひ靜と謂ふべし　(九) 十二萬九千六百年（十二會）を一元となし、三十運を一會となし、十二世を一運となし、三十年を一世となし、十二月を一年となし、三十日を一月となし、十二時を一日となす　(一〇) 刻は漏刻なり、一晝夜を百刻となし、一刻の一千分の一卽ち一晝夜の十萬分の一を秒となし、一秒の十分の一を一忽となし、一忽の十分の一を一微となす　(一一) 伊川易傳序文の語　(一二) 樣々になぞらへならひて考ふる時は　(一三) 六祖法寶經に出づ心が法華經のはじめに轉却さるゝものにて、法華經を心に引きつけて轉ずるに非ずと也、以て、我が心が語句文義に牽かれ、心を以て其本旨を會せざるに喩ふる也

志。而得二其大旨一。若必拘二滯於文義一。則靡レ有二孑遺一者。是周果無二遺民一也。周子靜極而動之説。苟不二善觀一。亦未レ免レ有レ病。蓋其意從二太極動而生一レ陽。靜而生レ陰説來。太極生生之理。妙用無レ息。而常體不レ易。太極之生生。即陰陽之生生。就二其生生之中一。指二其妙用無レ息者一。而謂二

子の靜極りて動くの説も、苟も善く觀ざれば、亦未だ病有るを免れず。蓋し其意は太極動きて陽を生じ、靜にして陰を生ずるより説き來る。(三)太極生生の理たる、妙用息むこと無く、而も常體易らず。太極の生生は、即ち陰陽の生生なり。其生生の中に就き、其妙用息むこと無き者を指して之を動と謂ひ、之を陽の生と謂ふ。動きて而して後に陽を生ずと謂ふに非ず。其生生の中に就き、其常體の易らざる者を指して之を靜と謂ひ、之を陰の生と謂ふ。靜にして而して後に陰を生ずと謂ふに非ず。若し果して靜にして而して後に陰を生じ、動きて而して後に陽を生ぜば、則ち是れ陰陽動靜截然として各自に一物と爲る。陰陽は一氣なり。一氣屈伸して陰陽と爲る。(四)動靜は一理なり。(五)一理隱顯して動靜と爲る。(六)春夏は以て陽と爲し動と爲すべきも、未だ嘗て陰と靜と無くんばあらざるなり。秋冬は以て陰と爲し靜と爲すべきも、未だ嘗て陽と動と無くんばあらざるなり。(七)春夏は此れ息まず。秋冬も此れ息まず。皆之を陽と謂ひ、之を動と謂ふべし。(八)春夏は此

動靜一也。理無動者也。動卽爲欲。循理則雖酬酢萬變。而未嘗動也。從欲則雖槁心一念。而未嘗靜也。動中有靜。靜中有動。又何疑乎。有事而感通。固可以言動。然而寂然者。未嘗有增也。無事而寂然。固可以言靜。然而感通者。未嘗有減也。動而無動。靜而無靜。又何疑乎。無前後內外。而渾然一體。則至誠有息之疑。不待解矣。未發在已發之中。而已發之中。未嘗別有未發者在。已發在未發之中。而未發之中。未嘗別有已發者存。是未嘗無動靜。而不可以動靜分者也。

るなり。動いて動くこと無く、靜にして靜なること無き、又何ぞ疑はんや。前後内外無くして渾然一體なれば、則ち至誠息むこと有りとの疑は解するを待たじ。(三)未發は已發の中に在り、而も已發の中未だ嘗て別に未發なる者在る有らず。已發は未發の中に在り、而も未發の中未だ嘗て別に已發なる者の存する有らず。是れ未だ嘗て動靜無くんばあらず。而も動靜を以て分つ可からざる者なり。

(一)理に循へば千變萬化する事に對應しても決して動く事なし　(二)欲に從へば如何に心を虛無恬淡枯木の如くし念慮を一ならしめても決して靜なる事なし　(三)已發未發一にして二ならず、未發の中に已發あり、已發の中に未發あれども、其在りといふは別に一體として存するの謂に非ず

凡觀古人言語。在以意逆

(一)凡そ古人の言語を觀るは、意を以て志を逆へて其大旨を得るに在り。若し必ず文義に拘滯せば、則ち孑遺有ること靡しとは、是れ周は果して遺民無きなり。(二)周

通一爲レ動。無レ事而寂然爲レ靜。則於二所レ謂動而無レ動。靜而無レ靜者一。不レ可レ通矣。若謂下未發在二已發之先一。靜而生上レ動。是至誠有レ息也。聖人有レ復也。又不可矣。若謂三未發在二已發之中一。則不レ知未發已發俱當レ主レ靜乎。抑未發爲レ靜。而已發爲レ動乎。抑未發已發。俱無レ動無レ靜乎。俱有レ動有レ靜乎。幸教。

未發之中卽良知也。無二前後內外一。而渾然一體者也。有レ事無レ事。可三以言二動靜一。而良知無レ分二於有レ事無レ事一也。寂然感通。可三以言二動靜一。而良知無レ分二於寂然感通一也。動靜者所レ遇之時。心之本體。固無レ分二於

未發の中は卽ち良知なり。前後內外無く、渾然一體なる者なり。事有り事無きは、以て動靜を言ふ可し。而も良知は事有り事無きに分つ無し。寂然・感通は以て動靜を言ふ可し。而も良知は寂然・感通に分つ無し。動靜は遇ふ所の時なり。心の本體は固より動靜に分つ無し。理は動くこと無き者なり。動けば卽ち欲と爲る。理に循へば則ち萬變に酬酢すと雖も而も未だ嘗て動かず。欲に從ふときは則ち心を槁し念を一にすと雖も而も未だ嘗て靜かならざるなり。動中靜あり、靜中動有る、又何ぞ疑はんや。事有りて感通するときは、固より以て動と言ふべし。然り而して寂然たる者未だ嘗て增すこと有らざるなり。事無くして寂然たる、固より以て靜と言ふ可し。然り而して感通なる者未だ嘗て減ずること有らざ

乎。其在二已發之中一而爲二之主一乎。其無二前後內外一而渾然一體者乎。今謂二心之動靜一者。其主レ有事無レ事而言乎。其主二寂然感通一而言乎。其主二循レ理從レ欲而言乎。若以レ循レ理爲レ靜。從レ欲爲レ動。則於二所レ謂動中有レ靜。靜中有レ動。動極而靜。靜極而動者一。不レ可レ通矣。若以二有レ事而感

動靜と謂ふ者は、其れ事有り事無きを主として言ふか。其れ寂然感通を主として言ふか。其れ理に循ひ欲に從ふを主として言ふか。若し理に循ふを以て靜と爲し、欲に從ふを動と爲さば、則ち所謂動中靜有り靜中動有り、動極つて靜、靜極つて動なる者に於て通ず可からず。若し事有りて感通するを以て動と爲し、事無くして寂然たるを(二)靜と爲さば、則ち所謂動いて動くこと無く、靜にして靜なること無き者に於て通ず可からず。若し未發は已發の先に在りて、靜にして動を生ずと謂はゞ、是れ(三)至誠も息む有り、聖人も復する有りて又不可なり。若し未發にして已發の中に在りと謂はゞ、則ち知らず未發・已發倶に當に靜を主とすべきか。抑ゝ未發を靜と爲し、而して已發を動と爲すか。抑ゝ未發・已發倶に動無く靜無きか。倶に動有り靜有るか。幸に敎へよ。』

(一) 中庸の未發已發につきて論じ問ふ也　(二) 其說通ぜず　(三) 至誠は息まざる筈なるに、斯くては至誠も息む事あり、聖人も其本然の性に復るといふ事ある譯になりて不可也

主於レ理明。是動也。已發也。何以謂二之靜一。何以謂二之本體一。豈是靜定也。又有下以貫二乎心之動靜一者上邪。

理無レ動者也。常二知常三存常四主於レ理。即不レ視不レ聞無レ思無レ爲之謂也。不レ視不レ聞無レ思無レ爲。非二槁木死灰之謂一也。視聞思爲一レ於レ理。而未三嘗有二所レ視聞思爲一。即是動而未二嘗動一也。所レ謂動亦定。靜亦定。體用一原者也。

理は動くこと無き者なり。理に於て常に知り常に存し常に主とするは、即ち視ず聞かず思無く爲す無きの謂なり。(一)視ず聞かず思無く爲す無しとは槁木死灰の謂に非ざるなり。視聞思爲は理に於て一にして、未だ嘗て視聞思爲する所有らず。即ち是れ動きて未だ嘗て動かざるなり。所謂動にも亦定り靜にも亦定り、體用一原なる者なり。

(一) 聖門に所謂視ず聞かず思無く爲す無しとは決して枯木死灰の如く全く心動かずとの謂に非ず

來書云。此心未發之體。其在二已發之前一

來書に云ふ、『(二)此心未發の體は其れ已發の前に在るか。其れ已發の中に在つて而も之が主と爲るか。其れ前後內外無くして而も渾然一體なる者か。今心の

然於二良知之本體一。初不レ能レ有レ加二損於毫末一也。知無レ不レ良。而中寂太公。未レ能レ全者。是昏蔽之未二盡去一。而存レ之未レ純耳。體卽良知之體。用卽良知之用。寧復有下超二然於體用之外一者上乎。

(一) 萬人の等しく具有せるもの也　(二) もと〳〵少しにても增減し得べきものに非ず　(三) 之を存して放たざる工夫の不純なるが爲めのみ　(四) 本體といふは良知の本體、運用といふは良知の運用なれば、其體用の外に超然たるが如き害あるべからず

來書云。周子曰。主レ靜。程子曰。動亦定。靜亦定。先生曰。定者心之本體。是靜定也。決非二不レ覩不レ聞無レ思無レ爲之謂一。必常二知常三存常四主於レ理之謂也。夫常二知常三存常四

來書に云ふ、『周子曰く、靜を主とすと。程子曰く、動にも亦定り靜にも亦定ると。先生曰く、定は心の本體なりと。是の靜や定や、決して(一)覩ず聞かず思無く爲す無きの謂に非ず、必ず理に於て常に知り常に存し常に主とするの謂ならん。夫れ理に於て常に知り常に存し常に主とするは明かに是れ動なり、已發なり。(二)何を以て之を靜と謂ひ、何を以て之を本體と謂ふか。豈に是れ靜や定や又以て心の動靜を貫く者有りや。』

(一) 覩ず聞かずは中庸の語、思無く爲す無きは易の係辭の語　(二) 既に動たり已發たるをば、靜といひ本體といふは何故ぞ

體也。廓然太公也。何常人皆不能而必待於學邪。中也寂也公也。既以屬心之體。則良知是矣。今驗之於心。知無不良。而中寂太公實未有也。豈良知復超然於體用之外乎。

に、知、良ならざること無くして、而も中寂太公實は未だ有らざるなり。(二)豈に良知復た體用の外に超然たるか。』

(一) 然るに何故に常人は皆この事能はずして必ず學問を待ちて之を得るか (二) 良知は本體と運用との外に超然として存在せりや

性無不善。故知無不良。良知即是未發之中。即是廓然太公。寂然不動之本體。人人之所同具者也。但不能不昏蔽於物欲。故須學以去其昏蔽。

性は善ならざる無し。故に知も良ならざる無し。良知は即ち是れ未發の中、即ち是れ廓然太公、寂然不動の本體にして、(一)人人の同じく具する所の者なり。但だ物欲に昏蔽せられざる能はず。故に須らく學びて以て其昏蔽を去るべし。然れども良知の本體に於ては初より毫末をも加損する有る能はざるなり。知は良ならざる無し。而るに(二)中寂太公の未だ全きを能はざるは、是れ昏蔽の未だ盡く去らずして(三)之を存するの未だ純ならざるのみ。(四)體は即ち良知の體、用は即ち良知の用なり。寧ぞ復た體用の外に超然たる者有らんや。

之精。安可下以二形象方所一求上哉。眞陰之精。卽眞陽之氣之母。眞陽之氣。卽眞陰之精之父。陰根レ陽。陽根レ陰。亦非レ有レ二也。苟吾良知之說明。則凡若レ此類。皆可下以不レ言而喩上。不レ然則如二來書所一レ云。三關七返九還之屬。尚有二無窮可一レ疑者一也。

かならば、則ち凡そ此の若きの類皆以て言はずして喩る可し。然らずば則ち來書に云ふ所の如き(三)三關・七返・九還の屬尙ほ無窮に疑ふ可き者有らん。

㊀ 一つの良知の妙用なる所を神と謂ひ、其流行する所を氣と謂ひ、其凝集する所を精といふ、決して如何なる形象如何なる方所と求むべきものに非ず　㊁ 陰陽もと一にして二ならず、陰の內に陽を根ざし陽の內に陰を根ざす也　㊂ 三關とは道學に謂ふ所の「口を天關と爲し、手を人關と爲し、足を地關と爲す」を指せり。又七返九還の語は養生家に丹砂を煉るに七返するを七返丹と稱し、九返するを九返丹と稱するに出づ。但し古へ道家に煉丹といへるは丹砂を實際に煉るに非ずして下腹部卽ち丹田を煉ることなりといふ。

又。

來書云。良知心之本體。卽所レ謂性善也。未發之中也。寂然不動之

又

來書に云ふ、『良知は心の本體にして卽ち所謂性善なり、未發の中なり、寂然不動の體なり、廓然太公なり。何ぞ常人は皆能はずして必ず學に待つや。中や寂や公や、既に以て心の體に屬すれば、則ち良知是なり。今之を心に驗する

則精。一則明。一則神。一則誠。原非有二事也。但後世儒者之說。與養生之說。各滯於一偏。是以不相爲用。前日精一之論。雖爲原靜愛養精神而發。然而作聖之功。寔亦不外是矣。

本體に脫せりと ㊁ 理は氣のすぢ道にして氣は理のはたらき也 ㊂ 理が精なれば氣も精也 ㊃ 欄外書に曰く「精則一の三字疑ふらくは衍文ならん、然らざれば、明一の間に一則一の一句を脫せるならん」 ㊄ 仙家長生の說 ㊅ 文錄第二に載する所の答陸原靜第一書なり

來書云。元神元氣元精。必各有寄藏發生之處。又有眞陰之精。眞陽之氣。云云。

夫良知一也。以其妙用而言。謂之神。以其流行而言。謂之氣。以其凝聚而言。謂之

來書に云ふ、『元神・元氣・元精は必ず各〻寄藏發生の處有り。(一)又眞陰の精・眞陽の氣有り云云。(二)』(三)

㊀ 元は根元也、凡ての働きは皆神氣靜かにして其根元即ち元神元氣元精也 ㊁ よりひそみ居て發生し來る其處あり ㊂ 陽陰の氣の眞髓、母髓といふものあり。以上凡て道家の說也

夫れ良知は一なり。其妙用を以て言へば之を神と謂ひ、其流行を以て言へば之を氣と謂ひ、其凝聚を以て言へば之を精と謂ふ。安ぞ形象方所を以て求む可けんや。(一)眞陰の精は卽ち眞陽の氣の母、眞陽の氣は卽ち眞陰の精の父にして、陰は陽に根ざし、陽は陰に根ざす、亦二有るに非ざるなり。苟も吾が良知の說明

明。但人不レ知レ察。則有レ時而或蔽耳。雖レ有レ時而或放。其體實未三嘗不二在也。存レ之而已耳。雖レ有レ時而或蔽。其體實未三嘗不二明也。察レ之而已耳。若謂三良知亦有二起處一。則是有レ時而不レ在也。非二其本體之謂一矣。

(一) 前條の語を指していふ (二) 心の本體は卽ち本體にて起るの起らぬのといふが如き事ある筈なし (三) 人この心の本體を存するを知らずして之を放つことあるのみ (四) 心の本體くらくふさがりたる時にても (五) 之を放たぬやうに存すべきのみ (六) よく心の本體を察すべきのみ

精一之精以レ理言。精神之精以レ氣言。理者氣之條理。氣者理之運用。無二條理一則不レ能二運用一。無二運用一。則亦無三以見二其所レ謂條理者一矣。精則精。精則明。精則一。精則神。精則誠。一

(一)精一の精は理を以て言ひ、精神の精は氣を以て言ふ。(二)理は氣の條理にして、氣は理の運用なり。條理無ければ則ち運用する能はず。運用無ければ則ち亦以て其所謂條理なる者を見ること無し。(三)精なれば則ち精、精なれば則ち明、(四)(精なれば則ち一)精なれば則ち神、精なれば則ち誠、一なれば則ち精、一なれば則ち明、一なれば則ち神、一なれば則ち誠、原二事有るに非ざる也。但だ後世儒者の說と養(五)生の說とは各〻一偏に滯る。是を以て用を相爲さず。前日の(六)精一の論は原靜が精神を愛養せんが爲めに發すと雖も、然も聖と作るの功に亦是に外ならず。

(一) 欄外書にいふ、本節の前に王本には、來書に云ふ、前日の精一の論は卽ち聖と作るの功なりや否やとあり。語

刻暫停一。則息矣。非ニ至誠無レ息之學一矣。

來書云。良知有ニ起處一。云云。

此或聽レ之未レ審。良知者心之本體。卽前所レ謂恆照者也。心之本體。無レ起無ニ不起一。雖ニ妄念之發一。而良知未ニ嘗不一レ在。但人不レ知レ存。則有レ時而或放耳。雖ニ昏塞之極一。而良知未ニ嘗不一レ

に動くが故に妄なる也、動く事なければ卽ち照也、この說下文に見ゆ　(五)中庸に出づ、天地誠一にして物を生じて息まざるをいふ

來書に云ふ、『良知も亦起る處有り云云。』

此れ或は之を聽くこと未だ審かならざらん。良知は心の本體にして、卽ち前に所謂(一)恆に照す者なり。(二)心の本體には起も無く不起も無し。妄念の發するありと雖も、而も良知は未だ嘗て在らずんばあらず。(三)但だ人存することを知らざれば、則ち時有りて或は放つのみ。(四)昏塞の極と雖も而も良知は未だ嘗て明かならずんばあらず。但だ人察することを知らざれば則ち時有りて或は蔽はるゝのみ。時有りて或は放つと雖も、其體は實に未だ嘗て在らずんばあらず。(五)之を存するのみ。時有りて或は蔽はると雖も其體は實に未だ嘗て明かならずんばあらず、(六)之を察するのみ。若し良知も亦起る處有りと謂はゞ、則ち是れ時有りて在らざるなり。其本體の謂に非ず。

心固動也。照心亦動也。心既恒動。則無ニ刻暫停一也。

是有レ意ニ於求ニ寧靜一。是以愈不ニ寧靜一耳。夫妄心則動也。照心非レ動也。恒照則恒動恒靜。天地之所ニ以恒久而不レ已也。照心固照也。妄心亦照也。其爲レ物不レ貳。則其生レ物不レ息。有ニ

ること無きなり。』

㊀ 是れ陽明五十三歳、越に在る時の書也、原靜は病身にて嘗て仙釋に溺し又寧靜を好む、故に問ふ所其病多し　㊁ 妄心照心固より一つ心なれど、妄心は本體を失ひて私欲私念に動くことをいふ、これ固より動く筈なれど、物を照す心は心の本體なるに而も其照すといふ方面よりして心動く、斯くては心は恒久に寧靜ならずこれを疑ひて此問を發せる也

是れ寧靜を求むるに意有り。(一)是を以て愈〻寧靜ならざるのみ。夫れ妄心は則ち動なれども照心は動に非ず。(二)恒に照せば則ち恒に動き恒に靜かなり。天地の恒久にして已まざる所以なり。(三)照心は固より照にして、妄心も亦照なり。(四)其の物たる貳ならざれば則ち其の物を生ずる息まず。刻として蹔くも停ること有るは則ち息むなり。至誠息む無きの學に非ざるなり。

㊀ 殊更に寧靜ならんと求むる意あるが故に愈々寧靜ならず　㊁ 照すべくして照すは動といふものには非ずと也
㊂ 恒久に照して止まざるは一面よりいへば恒動にして又一面よりいへば恒靜也、これ即ち本體なり、世の所謂動は妄動、靜は虚靜のみ、斯くの如きは恒久ならずして止むことあり、恒久に動き恒久に靜かにして息むなきものこれ即ち天地の本體にして即ち人心の本體也　㊃ 妄心とて別にあるに非ず、本體明覺の自然なるもの其中に在り、只欲

一邊。不是性之本原矣。孟子性善。是從本原上說。然性善之端。須在氣上始見得。若無氣亦無可見矣。惻隱羞惡辭讓是非。卽是氣。程子謂。論性不論氣不備。論氣不論性不明。亦是爲學者各認一邊。只得如此說。若見得自性明白時。氣卽是性。性卽是氣。原無性氣之可分也。

り。(四)程子謂く、『性を論じて氣を論ぜざれば備らず。氣を論じて性を論ぜざれば明かならずと。』亦是れ學者各〻一邊を認むるが爲に、只だ此の如く說くを得るのみ。若し自性を見得て明白なる時は、氣は卽ち是れ性、性は卽ち是れ氣にして、原性氣の分つ可きもの無きなり。

(一) 近思錄道體に「明道先生曰、生之謂性、性卽氣、氣卽性、生之謂也」云々とあるを指す、これ卽ち來書に所謂引く所の性論也 (二) 已に氣質の一邊にのみ落つる也 (三) 孟子の謂ふ所の四端にして卽ちこれ氣なり (四) 程子のこの語遺書に見ゆ

(一)陸原靜に答ふる書

來書云。下手工夫。覺此心無時寧靜。妄

來書に云ふ、『手を下すの工夫、此心時として寧靜なること無きを覺ゆ。(二)妄心は固より動なり、照心も亦動なり。心既に恒に動くときは則ち刻として暫くも停

辭以上不容說。才說性。便已不是性。何故不容說。何故不是性。晦庵答云。不容說者。未有性之可言。不是性者。已不能無氣質之雜矣。二先生之言。皆未能曉。每看書至此。輒爲一惑。請問。

に性と說けば、便ち已に是れ性ならず。何故に說くべからざる、何故に是れ性ならざると。(三)晦庵答へて云ふ、說くべからずとは、未だ性の言ふ可きもの有らざればなり。是れ性ならずとは、已に氣質の雜無き能はざればなりと。(四)二先生の言皆未だ曉る能はず。(五)每に書を看て此に至れば輒ち一惑を爲す。請ひ問ふ。』

(一)陽明の書簡中に「程子……能はざればなり」を引ける有りと也　(二)近思錄道體類に載する所の性論をいふ　(三)朱子の此性論に對する解說也　(四)程子と朱子　(五)王氏の書簡を指す

生之謂性。生字即是氣字。猶言氣即是性也。氣即是性。人生而靜以上。不容說。才說氣即是性。即已落在

(一)生之を性と謂ふ。生の字は即ち是れ氣の字なれば、猶ほ氣は即ち是れ性なりと言ふがごとし。氣は即ち是れ性なり。人生れて靜なる以上は說くべからず。才に氣は即ち是れ性なりと說けば、即ち(二)已に一邊に落在す。是れ性の本原ならず。孟子の性善は是れ本原上より說く。然るに性善の端は、須らく氣上に在りて始めて見得べし。若し氣無くんば亦見る可き無し。(三)惻隱・羞惡・辭讓・是非は即ち是れ氣な

此節議論得。極是。極是。願道通遍以告ニ於同志一。各自且論ニ自己是非一。莫レ論ニ朱陸是非一也。以ニ言語一謗レ人。其謗淺。若自己不レ能ニ身體實踐一。而徒入レ耳出レ口。呶呶度レ日。是以レ身謗也。其謗深矣。凡今天下之論ニ議我一者。苟能取以爲レ善。皆是砥ニ礪切ニ磋我一也。則在レ我無レ非ニ警惕修省進レ德之地一矣。昔人謂。攻ニ吾之短一者。是吾師。師又可レ惡乎。

此節議論し得て極めて是なり、極めて是なり、願くは道通遍く以て同志に告げよ。各自は且つ自己の是非を論じて朱陸の是非を論ずる莫れ。言語を以て人を謗るは、其謗淺し、若し自己身體に實踐する能はずして、徒らに(一)耳より入りて口より出し、呶呶(二)として日を度るは、是れ(三)身を以て謗るなり、其謗深し。凡そ今天下の我を論議する者、苟も能く取りて以て善を爲さば、皆是れ我を砥礪切磋するなり。則ち我に在りては警惕修省(四)、德を進むるの地に非ざる無し。(五)昔人謂へり、『吾の短を攻むる者は吾が師なり』と。師又惡む可けんや。

(一) 所謂口耳の學にて、聞く所を直ちに口に出し、身の養ひと爲さゞるをいふ (二) 只口やかましく窮論して日を渡るは (三) 言に非ず身を以て謗るわけにて其謗深し (四) 自ら其言を聽きていましめおそれ修め省みて德を進むる爲のものとなす (五) 荀子修身篇に「非レ我而當者吾師也、是レ我而當者吾友也」とあるをいふ

來書云。有レ引。程子。人生而

來書に云ふ、『引くこと(一)有り、(二)程子、人生れて靜なる以上は說くべからず、才

先生立志二字一點二化人一。若其人果能辨二得此志一來。決レ意要レ知二此學一。已是大段明白了。朱陸雖レ不レ辨。彼自能覺得。又嘗見乙朋友中見レ有下人議二先生之言一者上。輒爲動甲氣。昔在朱陸二先生。所三以遺二後世紛紛之議一者。亦見下二先生工夫。有レ未二純熟一。分明亦有中動レ氣之病上。若二明道一則無レ此矣。觀下其與二吳涉禮一。論中介甫之學上云、爲レ我盡達二諸介甫一。不レ有レ益二於他一。必有レ益二於我一也。氣象何等從容。嘗見三先生與レ人書中亦引二此言一。願朋友皆如レ此。如何。

人の先生の言を議する者有るを見ては、輒ち爲に氣を動すものを見たり。昔在(四)朱陸二先生の、後世に紛紛の議を遺しゝ(五)所以の者は、亦二先生の工夫の未だ純熟せざる有りて、分明に亦氣を動すの病有るを見る。明道の若きは則ち此れ無し。其の吳師禮(六)に與へて介甫(七)の學を論ずるを觀るに、云く、『我が爲に(八)盡く諸を介甫に達せよ。他に益有らざれば必ず我に益有らん』と。氣象何等の從容(九)ぞ。嘗て先生の人に與へたる書中にも亦此言を引かれしを見たり。願ふに朋友皆此の如くんば如何。』

(一) 朱子と陸象山との學術の是非同異を辨ずる論者　(二) 薫陶感化せよ　(三) 事の大體が明白になり、朱陸の同異は辨ぜずして自然にさとり得ん　(四) 陽明の言を非議する人あるを見ては　(五) 後世いろ〱論議の起る種をのこしたるは　(六) 原文「吳涉禮」に作るは訛也　(七) 王安石　(八) 私の爲めに我が意を盡く王安石に傳達せよ　(九) ひろくゆつたりとしてこせつかぬ心

一併下。但在二初學一。未レ知二下レ手用ヒ功。還說二與格物一。方曉二得致知一。云云。

格物是致知工夫。知二得致知一。便已知二得格物一。若是未レ知二格物一。則是致知工夫。亦未二嘗知一也。近有二一書與二友人一。論レ此頗悉。今往二一通一。細觀レ之當二自見一矣。

格物は是れ致知の工夫なれば、致知を知り得ば便ち已に格物を知得せしなり。若し是れ未だ格物を知らざれば、則ち是れ致知の工夫も亦未だ嘗て知らざるなり。近ごろ一書を友人に與へたる有り、此を論ずること頗る悉せり。今一通を往る、細かに之を觀ば當に自ら見るべし。

來書云。今之爲二朱陸之辨一者尙未レ已。每對二朋友一言。正學不レ明已久。且不レ須下枉費二心力一。爲二朱陸一爭中是非上。只依二

來書に云ふ、『今の朱陸の辨を爲す者尙ほ未だ已まず。每に朋友に對して言ふ、正學の明かならざること已に久し、且く枉げて心力を費して朱陸の爲に是非を爭ふことを須ひず、只だ先生の立志の二字に依りて人を點化せよ、若し其人果して能く此志を辨じ得來り、意を決して此學を知らんと要せば、已に是れ大段明白にして、朱陸辨ぜずと雖も、彼自ら能く覺り得んと。又嘗て朋友中に、

知一以應レ之。所レ謂忠恕違レ道不レ遠矣。凡處得有レ善有レ未レ善。及有二困頓失レ次之患一者。皆是牽二於毀譽得喪一。不レ能三實致二其良知一耳。若能實致二其良知一。然後見得。平日所レ謂善者。未二必是善一。所レ謂未レ善者。却恐正。是牽二於毀譽得喪一。自賊二其良知一者也。

(一)道理の分としては相應によろし　(二)されど多少の相違あり　(三)本原培養の一事也　(四)前出、來書に註記せる孟子の文を引いていふ　(五)來書の說の謬を正す也　(六)尙出孟子の文による　(七)此語中庸に出づ　(八)苦みて事の次第を失ふ　(九)毀譽得失　(一〇)他人の毀譽と得る失ふとによりて自ら己の良知をそこなふ者也

來書云。致知之說。春間再承二誨益一。已頗知レ用レ力。覺三得比レ舊尤爲二簡易一。但鄙心則謂。與二初學一言レ之。還須丁帶二格物意思一。使丙之知乙下レ手處甲。本來致知格物。

來書に云ふ、『致知の說、春間再び誨益を承け、(一)已に頗る力を用ふるを知れり。舊に比して尤も簡易なるを覺り得たり。但だ鄙心(二)則ち謂へらく、初學と之(三)を言はんに、還つて須らく格物の意思を帶び、之をして手を下す處を知らしむべしと。本來(四)致知と格物とは一併に下す。但だ初學に在りては未だ手を下し功を用ふるを知らざれば、還つて格物を說き與へて方に致知を曉り得べし。』云云。

(一)御教へを受け　(二)私のいやしき心の內に思ふには　(三)初學にいふ場合には格物の意思を添へ、以て工夫を下すの處を知らしむべし　(四)致知と格物とは二事に非ざれば一つにして手を下すべきものなり

所レ說工夫。就二道通分上一。也只是如レ此用。然未レ免レ有二出入在一。凡人爲レ學。終身只爲二這一事一。自レ少至レ老。自レ朝至レ暮。不レ論二有レ事無一レ事。只是做二得這一件一。所レ謂必有レ事焉者也。若說二寧不レ了レ事不一レ可不レ加二培養一。卻是尙爲二兩事一也。必有レ事焉。而勿レ忘。勿レ助。事物之來。但盡二吾心之良

說く所の工夫は、道通(一)の分上に就きては也只だ是れ此の如く用ふ。(二)然れども未だ出入の在る有るを免かれず。凡そ人の學を爲すは、終身只だ(三)這の一事を爲すにあり。少より老に至り、朝より暮に至るまで、事有り事無きを論ぜず、只だ是れ這の一件を做し得るのみ。(四)所謂必ず事有るものなり。若し(五)寧ろ事を了へずとも培養を加へざる可からずと說かば、卻つて是れ尙ほ兩事と爲すものなり。必ず事有り、(六)忘るゝこと勿れ、助くること勿れ。事物の來るも、但だ吾が心の良知を盡して以て之に應ずるのみ。(七)所謂忠恕は道を違ること遠からざるなり。凡そ處し得て善き有り、未だ善からざる有り、(八)及び困頓次を失ふの患有る者は、(九)皆是れ毀譽得喪に牽かれて、實に其良知を致すこと能はざるのみ。若し能く實に其良知を致さば、然る後に見得ん。平日の所謂善なる者も、未だ必ずしも是れ善ならず。所謂未だ善ならざる者も、卻つて恐らくは正しからん。(一〇)是れ毀譽得喪に牽かれて自ら其良知を賊ふ者なり。

無ㇾ事。只一意培ニ養本原一。若遇ニ事來感一、或自己有ㇾ感。心上既有ㇾ覺。安可ㇾ謂ㇾ無ㇾ事。但因ニ事凝心一一。會三大段覺ニ得事理當ㇾ如ㇾ此。只如ㇾ無ㇾ事。處ㇾ之盡ニ吾心一而已。然乃有ニ處得善與ㇾ未ㇾ善。何也。又或事來得ㇾ多。須ㇾ要ニ次第與處一。每因ニ才力不ㇾ足。輒爲ㇾ所ㇾ困。雖ニ極ㇾ力扶起一。而精神已覺ニ衰弱一。遇ㇾ此未ㇾ免ㇾ要ニ十分退省一。寧不ㇾ了ㇾ事不ㇾ可ㇾ不ㇾ加ニ培養一。如何。

既に覺ること有り。安ぞ事無しと謂ふ可けん。但だ事凝り心一なるに因つて、大段事理の當に此の如くなるべきを覺り得ることを會す(三)。只だ事無きが如きは之に處して吾が心を盡すのみ。然るに乃ち處し得て善きと未だ善からざると有るは何ぞや。又或は事來ること多きを得れば、須らく次第に與に處せんことを要すべし(四)。每に才力の足らざるに因りて、輒ち困めらる(五)。力を極めて扶起すと雖も(六)、而も精神已に衰弱を覺ゆ。此に遇へば未だ十分の退省(七)を要するを免れず。寧ろ事を了へざるも培養を加へざる可からず。如何。』

(一) 標注に、事上磨錬とはこれ亦王氏の家法にして、格物の實功、博文約禮の事也といへり　(二) ひたすら本原即ち良心をつちかひ養ひて　(三) 事なり靜に心純一なる故に　(四) 事多く來れば、順序を立てゝ次第に之を處せんとすべし　(五) いつも事の爲めに困めらる　(六) 極力精神を扶け起しても　(七) 退省は論語に出てたる字句にて、論語にては退きて省みるの義なれど、玆は退き事を省きて其困みを避け、事を了せざる事あるも精神に培養を加へざるべからずとの義ならん

之稱。而權ニ輕重。未レ開之鏡。而照ニ姸媸。眞所レ謂以ニ小人之腹。而度ニ君子之心一矣。聖人氣象。何由認得。自己良知。原與ニ聖人一一般。若體ニ認得自己良知一明白。即聖人氣象不レ在ニ聖人一。而在レ我矣。程子嘗云。覰ニ著堯一。學ニ他行事一。無ニ他許多聰明睿智一。安能如ニ彼之動容周旋中レ禮。又云。心通ニ於道一。然後能辨ニ是非一。今且說。通ニ於道一在ニ何處一。聰明睿智從ニ何處一出來。

ずして而して我に在り。程子嘗て云ふ、『堯を覰うて他の行事を學ぶとも、他の許多の聰明容智無くんば、安ぞ能く彼の動容周旋禮に中るが如くならん』と。(七)又云ふ、『心道に通じて然して後に能く是非を辨ず』と。今且く說かんに、道に通ずる(八)何處に在り、聰明容智何處より出で來るぞ。

(一)近思錄伊川の言にも、論語註の程子の言にもこの意の語あり (二)聖人の氣象は自ら聖人のものにて我何處より之を認識し得べき (三)目盛りなきはかり (四)閉ぢたる鏡にて顏の美醜を照す (五)晉庾敳の語にて、世說に見え、又左傳昭公二十八年にも類似の語出づ (六)聖人の氣象はやがてそつくり我が身に在る也 (七)この語及び下の又云ふの語、共に近思錄致知類に出づ (八)畢竟自己の良知に外ならずとの意にていふ也

來書云。事上磨煉。一日之內。不レ管ニ有レ事

來書に云ふ、『(一)事上に磨煉す。一日の內、事有り事無きに管せず、只だ(二)一意に本原を培養し、若し事來りて感じ、或は自己の感ずること有るに遇はゞ、心上

來書云。凡學者纔曉㆓得做㆒工夫。便要㆑得㆔識㆓認聖人氣象㆒。蓋認㆓得聖人氣象㆒。把做㆓準的㆒。乃就㆓實地㆒做㆓工夫㆒去。纔不㆑會㆑差。纔是作㆑聖工夫。未㆑知㆓是否㆒。

來書に云ふ、『凡そ學者は纔かに工夫を做すことを曉り得れば、便ち聖人の氣象を識認し得るを要す。蓋し聖人の氣象を認め得て把て準的(一)と做し、乃ち實地に就いて工夫を做して、纔かに差ふとに會はざれば(二)、纔かに是れ聖と作るの工夫ならん。未だ是否を知らず(三)。』

(一)目標、標準　(二)わづかにそれが差ふことなきに至れば　(三)この說の是なると否とを知らず

先認㆓聖人氣象㆒。昔人嘗有㆓是言㆒矣。然亦欠㆑有㆓頭腦㆒。聖人氣象。自是聖人的。我從㆓何處㆒識認。若不㆘就㆓自己良知上㆒。眞切體認㆖。如㆘以㆓無星

(一)先づ聖人の氣象を認むと。昔人嘗て是言有り。然れども亦頭腦有ることを欠く。聖人の氣象は自ら是れ聖人的にして、我れ何處より識認せん。若し自己の良知上(二)に就きて眞切に體認せずんば、無星(三)の稱を以て輕重を權り、未だ開かざるの鏡(四)にして姸媸を照すが如し。眞に所謂小人(五)の腹を以て君子の心を度るなるなり。聖人の氣象は何に由りて認め得ん。自己の良知は原聖人と一般なれば、若し自己の良知を體認し得て明白なるときは、卽ち(六)聖人の氣象聖人に在ら

思慮得一。天理原自寂然不レ動。原自感而遂通。學者用レ功。雖二千思萬慮一。只是要レ復二他本來體用一而已。不下是以二私意一去二安排思索一出來上。故明道云。君子之學。莫レ若二廓然而太公。物來而順應一。若以二私意一去二安排思索一。便是用レ智自私矣。何思何慮。正是工夫。在二聖人分上一。便是自然的。在二學者分上一。便是勉然的。伊川却是把作二效驗一看了。所三以有二發得太早之說一。既而云二却好用一レ功。則已自覺二其前言之有一レ未レ盡矣。濂溪主レ靜之論。亦是此意。今道通之言。雖二已不一レ爲レ無レ見。然亦未レ免三尚有二兩事一也。

て好く功を用ふと云ふ、則ち已に自ら其前言の未だ盡さゞる有るを覺りしならん。濂溪(一一)が靜を主とするの論も亦是れ此意なり。今道通(一二)の言は已に見るところ無しとせずと雖も、然れども亦未だ尚ほ兩事有るを免かれず。

(一) 易と孟子とに對する見解は正しからねど、其工夫甚だ深切なるを以て亦相去る遠からずといひ、而して契悟する所盡さずといへる也 (二) 聊か、少しく (三) 前項來書に註せる易繫辭の文也 (四) 易繫辭に「易無思也、無爲也、寂然不動、感而遂通二天下之故一」とあるに取る (五) 樣々に思慮すとも、要する所は只其本來の體用に復せんと也 (六) 君子の學は、心一點の私欲なく公明正大にして物に應じて少しも滯ることなきを第一とすとの意 (七) 聖人の分よりいへば自然即ち安行にして、學者のがよりいへば勉然即ち勉行によるもの也 (八) 「何思何慮」は上述の如き譯のものなるに伊川は之を以て聖人の效驗即ち聖人の聖人たる仕上げの所と見たり (九) この故に顯道に向つて發し得て早きに過ぐと戒めたる也 (一〇) 近思錄の伊川と顯道との問答の條に曰く「謝顯道見二伊川一、伊川曰、近日事如何、對曰、天下何思何慮、伊川曰、是則是有二此理一、賢却發得太早在、伊川直會レ鍛二錬得人一說了反道、恰好著二工夫一」とこの最後の句は自分の前言の未だ盡さゞる有るを覺りて發したるならんと也 (一一) 太極說に「聖人定レ之以二中正仁義一而主レ靜」とあり自註に「無レ欲故靜」といへり。近思錄開卷第一の條に出づ、參照すべし (一二) 道通の言は見る所あれども分つて兩事となすの弊を免れず

是上蔡伊川之意。與二孔子繫辭原旨一。稍有レ不レ同。繫言二何思何慮一。是言二所レ思所レ慮。只是一箇天理。更無二別思別慮一耳。非レ謂二無レ思無レ慮也。故曰。同レ歸而殊レ途。一レ致而百レ慮。天下何思何慮。云二殊途一云二百慮一。則豈謂二無レ思無レ慮一邪。心之本體。即是天理。天理只是一箇。更有二何可二

だ是れ一箇の天理にして、更に別思別慮無きを言へるのみ。思ふこと無く慮ること無しと謂ふに非ざるなり。故に曰く、（三）『歸を同じうして途を殊にし、致を一にして慮を百にす。天下何を思ひ何を慮らん』と。殊途と云ひ百慮と云ふ、則ち豈に思ふ無く慮る無しと謂はんや。心の本體は即ち是れ天理にして、天理は只だ是れ一箇なり。更に何の思慮し得べき有らん。天理は原自ら寂然（四）として動かず、原自ら感じて遂に通ず。學者の功を用ふる、千思萬慮（五）すと雖も、只だ是れ他の本來の體用に復らんことを要するのみ。是れ私意を以て安排思索して出し來るにあらず。故に明道云く、（六）『君子の學は、廓然として太公、物來りて順應するに若くは莫し』と。若し私意を以て安排思索せば、便ち是れ智を用ひ自ら私するなり。『何を思ひ何を慮らん』は、正に是れ工夫にして、（七）聖人の分上に在りては便ち是れ自然的、學者の分上に在りては便ち是れ勉然的なり。（八）伊川却つて是れ把りて效驗と作して看たり。（九）發し得て太だ早きの說有る所以なり。既にして却つ（一〇）

固是必有レ事焉。而勿レ忘。然亦須下識二得何思何慮底氣象一。一併看爲上レ是。若不レ識二得這氣象一。便有下正與二助長一之病上。若認二得何思何慮一。而忘二必有レ事焉工夫一。恐又墮二於無一也。須下這不レ滯二於有一不上レ墮二於無一。然乎。否也。

ると助長するとの病有らん。若し何を思ひ何を慮らんを認め得て、必ず事有りの工夫を忘れば、恐らくは又無に墮ちん。須らく這れ有に滯らず無に墮ちざるべし。然らんや否や。』

㊀ 姓は謝、名は良佐、字は顯道、上蔡の人、程氏の門に學べり ㊁ 易繫辭の「天下何思何慮、天下同レ歸而殊レ塗、一レ致百レ慮、天下何思何慮」といふを擧げ、之を道は自然にて何等の思慮分別を用ひずといふ」に解し、之を道の至極として伊川に問ふ ㊂ 此問答近思錄に見ゆ、其理はあれどもそれは汝としては早過ぎるとの意 ㊃ 學者の工夫は孟子の謂へるが如く必ず事あり忘るゝ勿れといふにあるべき也。孟子公孫丑上に「必有レ事焉、而勿レ正、心勿レ忘、勿二助長一也」 ㊄ 而も一方には何を思ひ何を慮らんといふ如き徹底せる趣を識り得て ㊅ それをひとつに併せて ㊆ 前出孟子の文による ㊇ 何等の思慮を要せずといふをのみ認め得て一方に孟子の所謂必ず事有りの工夫を忘るゝ時は無の見に墮せん

所レ論亦相去不レ遠矣。只是契悟未レ盡。上蔡之問。與二伊川之答一。亦只

論ずる所亦相去る遠からず。只だ是れ契悟するところ未だ盡さず。上蔡の問と伊川の答(一)とは亦只だ是れ上蔡・伊川の意にして、孔子の繫辭の原旨と稍や同じ(二)からざる有り。繫に何を思ひ何を慮らんと言ふは、是れ思ふ所慮る所は只

謂困忘之病。亦只是志欠ニ眞切一。今好色之人。未三嘗病ニ於困忘一。只是一眞切耳。自家痛痒。自家須レ會ニ知得一。自家須レ會ニ搔摩得一。既自知ニ得痛痒一。自家須レ不レ能レ不ニ搔摩得一。佛家謂ニ之方便法門一。須ニ是自家調停斟酌一。他人總難レ與レ力。亦更無ニ別法可一レ設也。

れ自家にて調停斟酌すべく、他人は總べて力に與り難く、亦更に別法の設く可きもの無きなり。(六)

(一)工夫純粹に成熟するに到りて　(二)學問を爲すについての一番大切なる大眼目は立志にあり　(三)汝が所謂困忘の病も只志の眞切を缺く故也。此眞切といふ事が此答の眼目也　(四)自己の痛さ痒さは自己自身に於てそれを知り得るといふことを會得了解すべく、自己自身に於てそれを搔き摩り得るといふことを會得了解すべき也　(五)方便は手段方法便宜の意、法門は佛道に入るの門也　(六)自分自身に於て適當に調停斟酌すべき事にて他人は與つて力ある譯に行かず、されば離群索居に處する事とて別に方法のあるべきに非ず

來書云。上蔡嘗問ニ天下何思何慮一。伊川云。有ニ此理一。只是發得太早在。學者工夫。

來書に云ふ、『(一)上蔡嘗て(二)天下何を思ひ何を慮らんを問ふ。伊川云ふ、此理(三)有り、只だ是れ發し得て太だ早きと在りと。(四)學者の工夫は固より是必ず事有り、忘るゝと勿れにあり。然れども亦須らく(五)何を思ひ何を慮らん底の氣象を識り得て(六)一併に看るを是と爲すべし。若し這の氣象を識り得ざれば便ち(七)正てす

會忘。乃今無朋友相講之日。還只靜坐。或看書。或游衍經行。凡寓目措身。悉取以培養此志。頗覺意思和適。然終不如朋友講習。精神流動。生意更多也。離羣索居之人。當更有何法以處之。

(一)立志は陽明が人を教ふる格致の基にて王學に於て最も重んずる所也、故に常にこれを言ふ也 (二)御教への言葉 (三)實際に身に當てゝ經驗す (四)すこやかにひろ〴〵とし、生き〴〵として延び進む趣あり (五)何か事にあへば困しみ又時に忘れて居る (六)逍遙散歩して心たのしむ (七)意思おだやかによく心に適ふ思あり (八)朋友と講習する方がより以上に精神動きて生意多し (九)他と離れ一人ぼつちにて居る人

此段足驗道通日用工夫所得。工夫大略亦只是如此用。只要無間斷。到得純熟後。意思又自不同矣。大抵吾人爲學。緊要大頭腦。只是立志。所

此段は道通が日用工夫の得る所あるを驗するに足る。工夫の大略は亦只だ是れ此の如く用ふ。只だ間斷無きを要す。(一)純熟するに到り得て後意思又自ら同じからず。大抵吾人の學(二)を爲すに緊要なる大頭腦は只だ是れ志を立つるにあり。(三)所謂困忘の病も亦只だ是れ志の眞切を欠けばなり。今好色の人の未だ嘗て困忘を病まざるは只だ是れ一の眞切のみ。(四)自家の痛痒は自家須らく知り得ることを會すべく、自家須らく搔摩し得ることを會すべし。既に自ら痛痒を知得すれば、自家須らく搔摩し得ざる能はざるべし。佛家は之を(五)方便の法門と謂ふ。須らく是

は數語を許かんと謂へども、喪に居るが爲めに心すさみ亂れて云ふべき者なし　(一〇)先方の言葉をそのまゝ借りて其意を轉用するをいふ　(一一)口上にて詳細の意を悉すべし

數語一。荒憒無ニ可レ言者一。輒以ニ道通來書中。所レ問數節一。略下ニ轉語一率酬。草草殊不ニ詳細一。兩生當ニ亦自能口悉一也。

來書云。日用工夫。只是立レ志。近來於ニ先生誨言一。時時體驗。愈益明白。然於ニ朋友一。不レ能ニ一時相離一。若得ニ朋友講習一。則此志纔精健闊大。纔有ニ生意一。若三五日。不レ得ニ朋友相講一。便覺ニ微弱一。遇レ事便會レ困。亦時

來書に云ふ、『(一)日用の工夫は只だ是れ志を立つるにあり。近來先生の誨言(二)に於て時時體驗するに愈ゝ益ゝ明白なり。然るに朋友に於て一時も相離るゝ能はず。若し朋友の講習(三)を得ば則ち此志纔に精健闊大(四)にして纔に生意有り。若し三五日朋友と相講ずるを得ざれば、便ち微弱なるを覺え、事(五)に遇へば便ち困に會ひ、亦時に忘るゝに會ふ。乃ち今朋友と相講ずるの日無く、還つて只だ靜坐し、或は書を看、或は游衍經行(六)す。凡て目を寓し身を措くところ悉く取りて以て此志を培養すれば、頗る意思(七)の和適を覺ゆ。然れども終に朋友講習(八)して精神流動し生意更に多きに如かず。(九)離羣索居の人は當に更に何の法有りてか以て之に處すべきか。』

吳曾兩生至。備道二道通懇切爲レ道之意一。殊慰二相念一。若二道通一眞可レ謂二篤信好學者一矣。憂病中。曾不レ能下與二兩生一細論上。然兩生亦自有二志向一。肯用レ功者。每レ見輒覺レ有レ進。在二區區一誠不レ能レ無レ負二於兩生之遠來一。在二兩生一則亦庶二幾無上レ負二其遠來之意一矣。臨レ別以二此册一致二道通一。意請レ書二

吳(二)・曾兩生至る。備に道通の懇切に道の爲にするの意を道ひ、殊に相念を慰む。道通の若きは眞に篤信好學の者と謂ふ可し。(三)憂病の中、曾て兩生と細論する能はず。(四)然れども兩生も亦自ら志向有り、肯て功を用ふる者なれば、(五)見る每に輒ち進むところ有るを覺ゆ。(六)區區に在りては誠に兩生の遠來に負くこと無き能はず。(七)兩生に在りては則ち亦其遠來の意に負くこと無きに庶幾からん。別に臨み此册を以て道通に致す。(八)意數語を書かんことを請ふ。(九)荒憒言ふ可き者無し。輒ち道通の來書中に問ふ所の數節を以て、略〻轉語を下して奉酬す。(一〇)草草殊に詳細ならず。兩生當に亦自ら能く口悉すべし。(一一)

㊀ 名は衡、號は靜庵、陽明に從ひて學び、師說を集めて新泉問辨錄を作る ㊁ 其如何なる人なりしかを詳かにせず、常に周道通と親しく交る者にて特に陽明に就きて道を窮めんとして來れる也 ㊂ 我が道通を念ふの情。欄外書に相の字南本「想」に作るといへり ㊃ 陽明が當時、龍山公の喪中に在りし事をいへるならんといふ ㊄ 兩生を見るごとにいつも進境ある如く覺ゆ ㊅ 拙者に於ては兩生の折角の遠來に對して負く所あり ㊆ 兩生は肯て自ら功を用ひて進境著しき事故遠來したる甲斐ありといふべし ㊇ 此册を道通に送り屆けんとす ㊈ 意中にて

以二若レ是之積染一。以二若レ是之心志一。而又講レ之以二若レ是之學術一。宜其聞二吾聖人之敎一。而視レ之以爲二贅疣枘鑿一。則其以二良知一爲レ未レ足。而謂二聖人之學一。爲レ無レ所レ用。亦其勢有レ所二必至一矣。嗚呼士生二斯世一。而尙何以求二聖人之學一乎。尙何以論二聖人之學一乎。士生二斯世一。而欲三以爲二學者一。不二亦勞苦而繁難一乎。不二亦拘滯而險艱一乎。嗚呼可レ悲也已。所レ幸天理之在二人心一。終有レ所レ不レ可レ泯。而良知之明。萬古一日。則其聞二吾拔本塞源之論一。必有二惻然而悲。戚然而痛。憤然而起。沛然若レ決二江河一。而有二所レ不レ可レ禦者一矣。非二夫豪傑之士。無レ所レ待而興者一。吾誰與望乎。

知り多くの說に通ぜんと勉むるやうになる也との意を含めて見るべし（七）これ等古の大賢だに爲ぬる能はざりし事を今の初學の徒が皆通じきはめんとす（八）學問を爲すの名號は、斯くして以て天下の務を成さんといふ事に借り稱ふ。天下の務を爲すといふ語は易の上係辭に出づ（九）積もりしみ込みたる弊習（一〇）餘分のもの、事にうまく適應せざるものの意。莊子に附贅垂疣の語見え、宋玉の九辨に圜枘而方鑿兮の句見ゆ（一一）上文に見えたる「斯人禽獸夷狄に淪みて而も猶は自ら以て聖人の學と爲す」の語に應ずるならん（一二）時勢斯くの如し、士の聖人の學を求め聖人の學を論ぜんとする、眞に困難なりといふべし（一三）永世變りなきものなれば（一四）根本の誤を正し第一義に徹底せる論（一五）ぞつとして心から悲しみ、うれへいたみ、いきどほりを發して起つ（一六）其勢の盛にして止め難きを形容せる也（一七）孟子盡心上の「待二文王一而興者凡民也、若夫豪傑之士、雖レ無二文王一猶興」に取りたる句也

周道通（しうだうつう）に答ふる書（一）

之多。適以行㆓其惡㆒也。聞見之博。適以肆㆓其辨㆒也。辭章之富。適以飾㆓其僞㆒也。是以皐夔稷契。所㆑不㆑能㆑兼之事。而今之初學小生。皆欲㆘通㆓其說㆒。究㆗其術㆖。其稱㆑名借㆑號。未㆓嘗不㆒㆑曰㆕吾欲㆔以共成㆓天下之務㆒。而其誠心實意之所㆑在。以爲不㆑如㆑是。則無㆘以濟㆓其私㆒。而滿㆗其欲㆖也。嗚呼

す。宜なり其の吾が聖人の敎を聞きて、之を視て以て贅疣枘鑿と爲し、(一〇)則ち其の良知を以て未だ足らずと爲し、而して聖人の學を謂ひて用ふる所無しと爲すこと。(一一)亦其勢の必ず至る所有らん。(一二)嗚呼士たるもの斯る世に生れて、而も尙ほ何を以てか聖人の學を求めん、尙ほ何を以てか聖人の學を論ぜん。士の斯る世に生れて而も以て學を爲さんと欲する者、亦勞苦して繁難ならずや、亦拘滯して險艱ならずや。嗚呼悲む可きのみ。幸とする所は、天理の人心に在るありて、終に泯す可からざる所有り。而して良知の明かなる、(一三)萬古一日なれば、則ち其の吾が(一四)拔本塞源の論を聞き、必ず(一五)惻然として悲み、戚然として痛み、憤然として起つ有りて、(一六)沛然江河を決するが若く、禦ぐ可からざる所の者有らん。(一七)夫の豪傑の士の、待つ所無くして興る者に非ずんば、吾れ誰と與に望まん。

(一) 知を以てはこり合ひ、勢を以て相傾け、利を相爭ひ、技能を以て互に高ぶり、互に世の評判を取り合ふ (二) 會計出納の吏は兵事刑律の事をも兼ねんとし (三) 人才を選拔する官をいふ (四) 地方官は藩鎭の官の高きを思ひ (五) 侍御史や諫議大夫の任にあるものは宰相執政の要職を望みもとむ (六) 斯くの如き有樣なれば勢ひ多くの事を

相矜以レ知。相軋以レ勢。相爭以レ利。相高以二技能一。相取以二聲譽一。其出而仕也。理二錢穀一者。則欲レ兼二夫兵刑一。典二禮樂一者。又欲レ與二於銓軸一。處二郡縣一。則思二藩臬之高一。居二臺諫一。則望二宰執之要一。故不レ能二其事一。則不レ得三以兼二其官一。不レ通二其說一。則不レ可三以要二其譽一。記誦之廣。適以長二其敖一也。知識

(一)相矜るに知を以てし、相軋るに勢を以てし、相爭ふに利を以てし、相高ぶるに技能を以てし、相取るに聲譽を以てす。其出でゝ仕ふるや、(二)錢穀を理むる者は則ち夫の兵刑を兼ねんと欲し、禮樂を典る者は又(三)銓軸に與らんと欲し、(四)郡縣に處れば則ち藩臬の高きを思ひ、(五)臺諫に居れば則ち宰執の要を望む。故に其事を能くせざれば則ち以て其官を兼ぬるを得ず、其說に通ぜざれば則ち以て(六)其譽を要む可からず。記誦の廣き適ゝ以て其敖を長じ、知識の多き適ゝ以て其惡を行ひ、聞見の博き適ゝ以て其辨を肆にし、辭章に富める適ゝ以て其僞を飾る。是を以て(七)皐・夔・稷・契も兼ぬる能はざりし所の事を、今の初學小生は皆其說に通じ其術を窮めんと欲す。其の名を稱し號を借るや、未だ嘗て『吾は以て共に天下の務を成さんと欲す』と曰はざるものあらず。(八)而も其誠心實意の在る所は、以爲へらく是の如くならずんば則ち以て其私を濟して其欲を滿す無からんと。嗚呼是の如き(九)積染を以てし、是の如き心志を以てし、而して又之を講ずるに是の若き學術を以て

日夜遨二遊淹三息其間一。如二病レ狂喪レ心之人一。莫三自知二其家業之所一レ歸。時君世主。亦皆昏二迷顚三倒於其說一。而終身從二事於無用之虛文一。莫三自知二其所一レ謂。間有下覺二其空疎謬妄。支離牽滯一。而卓然自奮。欲三以見二諸行事之實一者上。極二其所一レ抵。亦不レ過レ爲二富强功利五覇之事業一而止。聖人之學。日遠日晦。而功利之習。愈趨愈下。其間雖三嘗瞀二惑於佛老一。而佛老之說。卒亦未レ能レ有三以勝二其功利之心一。雖三又嘗折二衷於羣儒一。而羣儒之論。終亦未レ能レ有三以破二其功利之見一。蓋至二於今一。功利之毒。淪二浹於人之心髓一。而習以成レ性也。幾千年矣。

るに、亦富强功利五覇の事業を爲すに過ぎずして止む。聖人の學は日に遠く日に晦くして、功利の習は愈〻趨り愈〻下り、其間嘗て佛老に瞀惑すと雖も(一三)、而も佛老の說も卒に亦未だ以て其功利の心に勝つ有る能はず、又嘗て羣儒に折衷すと雖も(一四)、而も羣儒の論も終に亦以て其功利の見を破る有る能はず。蓋し今に至りては、功利の毒、人の心髓に淪浹して(一五)、習以て性を成せること幾ど千年なり。

(一)各種の演藝を演ずる所 (二)かまびすしくさわぎおどけをどり上る。以下凡て諸派の學の紛々たるを形容せる也 (三)互に奇を弄し功を競ひ (四)看客に對して笑を呈し妍を爭ふ (五)看る者或は前を見、或は後をふりかへりて應接に遑なし (六)耳も目もくらめきまどふ (七)心がうつとりとして何事をも辨ずる能はず (八)遊び樂しみて久しく其中につかり込む (九)狂氣喪心の人の如く (一〇)自ら自己の家業の歸着する所を知る者なく只ぼんやりとして他の說くがまゝになる (一一)其說く所空にして實なく、謬りみだりにして、支離滅裂、事にかゝはり、とゞこほりて通ぜず (一二)其到達する所を極むれば (一三)佛氏や老子の說に迷ひまどふ (一四)多くの儒者の說に取りて事の宜しきを得るやうにす (一五)人の心の内に深くしみわたりて

法制。而掇拾修補於煨燼之餘。蓋其爲心。良亦欲以挽回先王之道。聖學既遠。霸術之傳。積漬已深。雖在賢智。皆不免於習染。其所以講明修飾。以求宣暢光復於世者。僅足以增霸者之藩籬。而聖學之門牆。遂不復可覩。於是乎。有訓詁之學。而傳之以爲名。有記誦之學。而言之以爲博。有詞章之學。而侈之以爲麗。若是者紛紛籍籍。群起角立於天下。又不知其幾家。萬徑千蹊。莫知所適。

(一七) 詞章をそらんじ讀むを旨とする記誦の學ありて之を博聞となす (一八) 文章を作るを旨とする詞章の學ありて以て其文辭の麗なるを侈る (一九) ごた／＼と盛にきそひ起り (二〇) いくつも／＼わき道(小みち)を生じて何れにゆくべきかゞ分らずなれり

世之學者。如入百戲之場。讙謔跳踉。騁奇鬪巧。獻笑爭妍者。四面而競出。前瞻後盼。應接不遑。而耳目眩瞀。精神恍惑。

世の學者、(一)百戲の場に入れるが如く、(二)讙謔跳踉、(三)奇を騁せ巧を鬪はし、(四)笑を獻じ妍を爭ふ者四面より競ひ出で、(五)前瞻後盼、應接に遑あらず、(六)耳目眩瞀し、(七)精神恍惑し、日夜其間に(八)遨遊淹息して、(九)狂を病み心を喪へる人の如く、(一〇)自ら其家業の歸する所を知るもの莫し。時君世主も亦皆其說に昏迷顚倒して、終身無用の虛文に從事し、自ら其所謂を知ること莫し。(一一)間〻其空疎謬妄、支離牽滯を覺り、卓然として自奮し、以て諸を行事の實に見んと欲する者有るも、(一二)其の抵る所を極むる

以蕪塞。相倣相。日求下所ニ以富强一之說上。傾詐之謀。攻伐之計。一切欺レ天罔レ人。苟ニ一時之得一。以獵ニ取聲利一之術。若ニ管商蘇張之屬一者。至レ不レ可ニ名數一。既其久也。鬪爭刧奪。不レ勝ニ其禍一。斯人淪ニ於禽獸夷狄一。而霸術亦有レ所不レ能レ行矣。世之儒者。慨然悲傷。蒐ニ獵先聖王之典章

良に亦以て先王の道を挽回せんと欲するも、聖學既に遠く、霸術の傳はる、積漬已に深く、(一二)賢智在りと雖も皆習染を免れず。其講明修飾して以て世に(一三)宣揚光復せんと求むる所以の者も、僅かに以て(一四)霸者の藩籬を增すに足り、(一五)聖學の門牆は遂に復た觀る可からず。是に於てか(一六)訓詁の學有りて、之を傳へて以て名と爲し、(一七)記誦の學有りて、之を言ひて以て博となし、(一八)詞章の學有りて之を修りて以て麗と爲す。是の若き者(一九)紛紛籍籍として天下に羣起角立し、又其幾家なるを知らず、(二〇)萬徑千蹊適く所を知る莫し。

(一) 王道に反する異端の道横行す (二) 王道 (三) 五霸の徒は先王に近似したる行爲を竊取し (四) 仁義の道を假りて外面を飾り粧ふ。孟子盡心上に「堯舜性レ之也、湯武身レ之也、五霸假レ之也」 (五) なびき從ひて皆之を道の本家の如くあがめ則る (六) 雜草の生ひ茂れる如くに荒れふさがる (七) 他を傾けいつはる謀 (八) 管仲・商鞅・蘇秦・張儀、何れも謀計詐術の士也 (九) 中國の人士も禽獸 狄となりはて (一〇) かりあつめて (一一) 始皇の天下の書を燒きたる其殘漏のものを綴り合はせ修め補ふ (一二) 賢者智者も霸術にそみ習ふ (一三) 先王の道を揭げ輝して舊に復せんとする者も (一四) 霸者のまがきを增す、卽ち益々霸道をもり立てゝ盛にするに役立つ (一五) 聖人の學の門牆はもはや窺ひ觀るを得ず (一六) 文字の意義を穿鑿する訓詁の學ありて、之を傳へて以て名を正すと爲す

不レ恥二其無一レ執。而手之所レ探。足必前上焉。蓋其元氣充周。血脈條暢。是以痒痾呼吸。感觸應神。有二不レ言而喩之妙一。此聖人之學。所三以至易至簡。易レ知易レ從。學易レ能。而才易二成者。正以下大端惟在レ復二心體之同然一。而知識技能非三所二與論一也。

三代之衰。王道熄。而覇術焻。孔孟既沒。聖學晦。或邪說橫。敎者不三復以レ此爲レ敎。而學者不二復以レ此爲一レ學。覇者之徒。竊二取先王之近似者一。假二之於外一。以內濟二其私己之欲一。天下靡然而宗レ之。聖人之道遂

三代の衰ふるや、王道熄んで覇術焻なり。孔孟既に沒し、聖學晦うして、或は邪說(一)橫す。敎ふる者復た此(二)を以て敎と爲さず、學ぶ者復た此を以て學と爲さず。(三)覇者の徒は先王の近く似たる者を竊取し、之を外に(四)假うて以て內其私己の欲を濟す。天下(五)靡然として之を宗とし、聖人の道遂に(六)蕪塞し、相倣ひ相效して、日に富强なる所以の說を求む。(七)傾詐の謀、攻伐の計、一切天を欺き人を罔ひ、一時の得を苟もして、以て聲利を獵取するの術、(八)管・商・蘇・張の屬の若き、名數す可からざるに至る。既にして其久しきや、鬪爭劫奪其禍に勝へず。(九)斯人禽獸夷狄に淪み、覇術も亦行ふ能はざる所有り。世の儒者、慨然として悲傷し、先聖王の典章法制を(一〇)蒐獵して、(一一)煨燼の餘に掇拾修補す。蓋し其心たる

善教也。夔司ニ其樂一。而不レ恥ニ於不一レ明レ禮。視ニ夷之通一レ禮。即己之通レ禮也。蓋其心學純明。而有三以全ニ其萬物一體之仁一。故其精神流貫。志氣通達。而無レ有ニ乎人己之分。物我之間一。譬下之一人之身。目視耳聽手持足行。以濟ニ一身之用一。目不レ恥ニ其無一レ聰。而耳之所レ渉。目必營焉。足

恥ぢず、夷(三)の禮に通ずるを視ては、即ち己の禮に通ずるなりとす。蓋し其心學(四)純明にして以て其萬物一體の仁を全うする有り。故に其精神流貫し、志氣通達し、(五)人己の分、物我の間有ること無し。之を一人の身の、目視、耳聽き、手持(六)ち、足行きて、以て一身の用を濟し、(七)目は其聰無きを恥ぢずして、耳(八)の渉る所目必ず營み、(九)足は其執る無きを恥ぢずして、手の探る所足必ず前むに譬ふ。蓋し其元氣充周し、血脈條暢す。是を以て(一〇)痒痾呼吸、感觸神應言はずして喩るの妙有り。此れ聖人の學の、至易至簡にして、知り易く從ひ易く、學能くし易くして、才成り易き所以の者、正に大端惟だ心體の同然に復るに在りて、而も知識技能は與に論ずる所に非ざるを以てなり。

(一) 稷は農事を掌りたる也 (二) 契は教育を掌る也 (三) 夷は伯夷也、祭祀を司る、禮官也 (四) 心の學が純一明白にて (五) 人と己との分、物と我とのへだて無し (六) 目耳手足それぞれ各自の役目を爲して一身の用をなす (七) 目は耳の働きなきを恥ぢず (八) 耳が聞く所は目之を視んとす (九) 足は物を執る能はざるを恥ぢず (一〇) 痒痾は身體の少しのいたみをいふ

教用者。亦惟知同心一德。以共安天下之民。苟當其能。則終身處於煩劇。而不以爲勞。安於卑瑣。而不以爲賤。當是之時。天下之人。熙熙皞皞。皆相視如一家之親。其才質之下者。則安其農工商賈之分。各勤其業。以相生相養而無有乎希高慕外之心。其才能之異。若皋夔稷契者。則出而各效其能。若一家之務。或營其衣食。或通其有無。或備其器用。集謀并力。以求遂其仰事俯育之願。惟恐當其事者之或怠。而重己之累也。

或は其器用を備へ、謀を集め力を并せ、以て其仰事俯育(一一)の願を遂げんことを求め、惟だ其事に當る者の或は怠りて己の累を重ねんことを恐る。

(一) 其德を成したる上につきて、それにもとづきて益々其各自が特有する才能を學校の中にありて精しく磨き上げしむ　(二) 夫の成德の士を擧げ任ずるに及びては　(三) 上に在りて之を用ふる者は　(四) 其才能の其職に叶ふか否かを視て　(五) 其役の高下を以て輕重とせず、其役柄の勞苦なると安逸なるとを以て美惡とする事なし　(六) 下に在りて上の用を爲す者も　(七) 苟も自己の才能に當りさへすれば　(八) 低くこまかしき役目　(九) 如何にも樂しげに心廣く自得して　(一〇) それ〲特別の事に職したる事直ちに下文に見ゆ　(一一) 孟子梁惠王上の「仰足以事父母、俯足以畜妻子」の語に取る

故稷勤其稼。而不恥其不知教。視契之善教。即己之善教。

故に稷(一)は其稼を勤めて、其の教を知らざるを恥とせず、契(二)の善く教ふるを視ては、即ち己の善く教ふるなりとす。夔は其樂を司りて、禮に明かならざるを

學校之中。惟以成德爲事。而才能之異。或有長於禮樂。長於政教。長於水土播植者。則就其成德。而因使益精其能於學校之中。迨夫擧德而任。則使之終身居其職而不易。用之者。惟知同心一德。以共安天下之民。視才之稱否。而不以崇卑爲輕重。勞逸爲美惡。

學校の中、惟だ德を成すを以て事と爲し、才能の異なる、或は禮樂に長じ、政教に長じ、水土播植に長ずる者有れば、則ち其成德(一)に就きて因つて益〻其能を學校の中に精しからしむ。(二)夫の德を擧げて任ずるに迨びては、則ち之をして終身其職に居らしめて易へず。(三)之を用ふる者は、惟だ心を同じくし德を一にして、以て共に天下の民を安ずるを知り、(四)才の稱否を視て、而して崇卑(五)を以て輕重と爲し勞逸もて美惡となすことをせず、(六)用を效す者も、亦惟だ心を同じくし德を一にして、以て共に天下の民を安ずるを知り、(七)苟も其能に當れば、則ち終身煩劇に處するも以て勞と爲さず、(八)卑瑣に安じて而も以て賤しと爲さず。是の時に當りて、天下の人、(九)熙熙皥皥として皆相視ること一家の親の如し。其才質の下れる者は、則ち其農工商賈の分に安じ、各〻其業を勤め、以て相生じ相養ひて、高きを希ひ外を慕ふの心有ること無し。其才能の異なる、(一〇)皐・夔・稷・契の若き者は、則ち出でゝ各〻其能を效すこと一家の務の若く、或は其衣食を營み、或は其有無を通じ、

有レ親。君臣有レ義。夫婦有レ別。長幼有レ序。朋友有レ信。五者而已。唐虞三代之世。敎者惟以レ此爲レ敎。而學者惟以レ此爲レ學。當二是之時一。人無二異見一。家無二異習一。安レ此者謂二之聖一。勉レ此者謂二之賢一。而背レ此者。雖二其啓明如一レ朱。亦謂二之不肖一。下至二閭井田野。農工商賈之賤一。莫レ不三皆有二是學一。而惟以レ成二其德行一爲レ務。何者無レ有二聞見之雜。記誦之煩。辭章之靡濫。功利之馳逐一。而但使下之孝二其親一。弟二其長一。信二其朋友一。以復中其心體之同然上。是蓋性分之所二固有一。而非下有レ假二於外一者上。則人亦孰不レ能レ之乎。

謂ひ、此に勉むる者は之を賢と謂ふ。而して此に背く者は、其啓明（四）なること朱の如しと雖も、亦之を不肖と謂ひ、下、閭井田野（五）農工商賈の賤しきに至るまで、皆是の學に有らざる莫く、而して惟だ其德行を成すを以て務と爲す。何となれば聞（六）見の雜、記誦の煩、辭章の靡濫、功利の馳逐有ること無く、但だ之をして其親に孝に、其長に弟に、其朋友に信に、以て其心體の同然に復らしむればなり。是れ蓋し性分の固有する所にして、外に假る有る者に非ざれば、則ち人亦孰か之を能くせざらんや。

（一）書經の大禹謨の語　（二）孟子滕文公に出づ　（三）人には異なる意見を抱きて相爭ふが如き者なく、家々の風俗皆一樣にて異なりたる俗なし　（四）舜の子丹朱は本來叡明にて愚者といふにてはなけれど、此敎に背くを以て之を不肖といふ　（五）閭巷市井田野に於ける農工商の如き微賤の者までも　（六）後世の枝葉末節の詭辯の所謂學問の弊に陥ることなくと也

物一爲二一體一。其視二天下之人一。無二外內遠近一。凡有二血氣一。皆其昆弟赤子之親。莫レ不レ欲下安全而教二養之一。以遂中其萬物一體之念上。天下之人心。其始亦非レ有レ異二於聖人一也。特其間二於有我之私一。隔二於物欲之蔽一。大者以小。通者以塞。人各有レ心。至レ有下視二其父子兄弟一如二仇讐一者上。聖人有レ憂レ之。是以推二其天地萬物一體之仁一。以教二天下一。使丁之皆有丙以克二其私一去二其蔽一。以復乙其心體之同然甲。

㈠ 其學ぶべき事繁くして學びがたく ㈡ 拔本塞源の論を明かにせざれば、吾が說も一時は明かなるべきも、西に氷の如く解くると思へば、忽ちに東に氷の如く結び、或は前に霧と散じ、後に雲とおこり、遂に不明にして滅亡に歸せんとの意なり ㈢ 盡にしやべり危困して死しても分毫も天下を救ふ事能はざらん ㈣ 苟も血の氣の通へる者に對しては ㈤ 自ら自分に私するといふ私情私智私見に邪魔され ㈥ 其心の本體の皆同じ然る所に復せしむとなり

其教之大端。則堯舜禹之相授受。所レ謂道心惟微惟精惟一。允執二厥中一。而其節目則舜之命レ契。所レ謂父子

其教の大端は、則ち堯・舜・禹の相授受するところの所謂『道心惟れ微、惟れ精惟れ一、允に厥の中を執る』(一)にして、其節目は則ち舜の契に命ぜし所謂『父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り』(二)の五者のみ。唐虞三代の世、教ふる者は惟だ此を以て教と爲し、學ぶ者は惟だ此を以て學と爲せり。是の時に當りてや、(三)人に異見無く、家に異習無く、此に安ずる者は之を聖と

夫拔本塞源之論。不レ明二於天下一。則天下之學二聖人一者。將下日繁日難。斯人淪二於禽獸夷狄一。而猶自以爲中聖人之學上。吾之說雖三或暫明二於一時一。終將下凍二解於西一。而冰二堅於東一。霧二釋於前一。而雲中滃於後上。呶呶焉危困以死。而卒無レ救二於天下之分毫一也已。夫聖人之心。以二天地萬

夫れ拔本塞源の論天下に明かならざれば、則ち天下の聖人を學ぶ者は、將に(一)日に繁く日に難くして、斯の人も禽獸夷狄に淪み、而して猶ほ自ら以て聖人の學なりと爲さんとす。(二)吾が說も或は暫く一時に明かなりと雖も、終に將に西に凍解し東に氷堅し、前に霧釋し、後に雲滃せんとす。(三)呶呶焉として危困して以て死し、而して卒に天下の分毫に救無きのみ。夫れ聖人の心は天地萬物を以て一體と爲し、其の天下の人を視ること外內遠近無く、(四)凡そ血氣有るもの、皆其昆弟赤子の親のごとく、安全にして之を教養し、以て其萬物一體の念を遂げんと欲せざる莫し。天下の人心も、其始より亦聖人に異なるところ有るに非ざるなり。特に其の(五)有我の私に間てられ、物欲の蔽に隔てられ、大なる者は以て小さく、通ずる者は以て塞り、各〻心有りて、其父子兄弟を視ること仇讎の如き者有るに至る。聖人之を憂ふる有り。是を以て其天地萬物一體の仁を推し、以て天下を教へ、之をして皆以て其私に克ち其蔽を去り、以て(六)其心體の同然に復ること有らしむ。

待レ學。而後能知焉。則是聖人亦不レ可三以謂二之生知一矣。謂二聖人一爲二生知一者。專指二義理一而言。而不レ以二禮樂名物之類一。則是禮樂名物之類。無レ關二於作レ聖之功一矣。聖人之所三以謂二之生知一者。專指二義理。而不レ以二禮樂名物之類。則是學而知レ之者。亦惟當三學知二此義理一而已。困而知レ之者。亦惟當三困知二此義理一而已。今學者之學二聖人一。於下聖人之所二能知一者上。未レ能二學而知一レ之。而顧汲汲焉。求レ知二聖人之所レ不レ能レ知者一以爲レ學。無下乃失中其所二以希一レ聖之方上歟。凡此皆就二吾子之所レ惑者一。而稍爲二之分釋一。未レ及二乎拔本塞源之論一也。

亦惟だ當に學びて此義理を知るべきのみ。困みて之を知る者も亦惟だ當に困みて此義理を知るべきのみ。今學者の聖人を學ぶに、聖人の能く知る所の者に於ては未だ學びて之を知ること能はず、顧つて汲汲焉として(四)聖人の知る能はざる所の者を知らんと求め、以て學と爲す。乃ち其の聖たるを希ふ所以の方を失すること無きか。凡そ此れ皆吾子が惑ふ所の者に就きて稍や之が分釋(五)を爲すところなるも、未だ拔本塞源(六)の論に及ばざるなり。

(一) 論語述而篇の「子曰我非二生而知レ之者一」の朱註を指す、即ち來書に引ける文也 (二) 聖人を生知なりといふは (三) 生知安行の聖人にして其生知といふものが專ら義理を指すにありとせば、學知利行も困知勉行も其知るべきは只義理のみ (四) 禮樂名物の類を知るを求めて之を學となす (五) そのわけを分け釋く (六) 本源にさかのぼりて之を正し、學問の根本問題を論ずる所には未だ及ばずと也

歩古候而無レ所レ式。則是後世曲知小慧之人。反賢ニ於禹稷堯舜一者邪。封禪之說尤爲ニ不經一。是乃後世佞人諛士。所下以求ニ媚於其上一。倡爲ニ誇侈一。以蕩ニ君心一。而靡中國費上。蓋欺レ天罔レ人無レ恥之大者。君子之所レ不レ道。司馬相如之所ニ以見レ譏ニ於天下後世一也。吾子乃以レ是爲ニ儒者所レ宜レ學。殆亦未ニ之思一邪。

夫聖人之所ニ以爲レ聖者。以ニ其生而知レ之也。而釋ニ論語一者曰。生而知レ之者義理耳。若ニ夫禮樂名物古今事變一。亦必待レ學而後有三以驗ニ其行事之實一。夫禮樂名物之類。果有レ關ニ於作レ聖之功一也。而聖人亦必

夫れ聖人の聖たる所以の者は、其の生れながらにして之を知るを以てなり。而して論語を釋する者は曰ふ、『生れながらにして之を知る者は義理のみ。夫の禮樂・名物・古今の事變の若きは、亦必ず學を待ちて後に以て其行事の實を驗すること有り』と。夫れ禮樂・名物の類は、果して聖と作るの功に關ること有りて、而して聖人も亦必ず學を待ちて而して後に能く知らば、則ち是れ聖人も亦以て之を生れながらにして知ると謂ふ可からず。聖人を謂ひて生れながらにして知ると爲す者は、專ら義理を指して言ひ、禮樂・名物の類を以てせざれば、則ち是れ禮樂・名物の類も聖と作るの功に關はると無し。聖人の之を生れながらにして知ると謂ふ所以の者は、專ら義理を指して、禮樂・名物の類を以てせざれば、則ち是れ學びて之を知る者も

於以齊二七政一也。是皆汲汲然以二仁レ民之心一。而行二其養レ民之政一。治レ曆明レ時之本。固在二於此一也。羲和曆數之學。皐契未二必能一レ之也。禹稷未二必能一レ之也。堯舜之知而不レ徧レ物雖二堯舜一亦未二必能一レ之也。然至二於今一。循二羲和之法一。而世修レ之。雖二曲知小慧之人。星術淺陋之士一。亦能推

(一) 漢の武帝建元元年、趙綰、明堂を立てんことを請ひ、其師申公を薦む、上は禮を厚くして之を迎へ明堂巡狩等の事を議せしむ (二) 唐の則天武后、中宗嗣聖五年二月乾元殿を毀ちて明堂を作る (三) 學宮 (四) 禮記王制の古註に「辟雍は水環りて璧の如く、泮宮は之に半ばす、蓋し東西は門、南を以て水を通じ、北は水無き也」と見ゆ (五) 論語里仁篇に出づ (六) 中庸の「致二中和一天地位焉、萬物育」に取る (七) 史記に禹を稱したる語 (八) 器數とは器物・條目なり。樂の器物條目の若きは樂工の守る事、禮の器物條目は祝史の守る事なりとの意。祝とは祭祀を司る官、史は記錄を司る官なり (九) 論語泰伯篇に出づ (一〇) 祭器の事につきてはそれ〲掛の役人あり、敢て君子の道に貴ぶ所にあらずと也 (一一) 書經堯典に出づ (一二) 昊は廣大の意 (一三) 蔡註に、曆は數を記する所以の書、象は天を觀る所以の器といへり。日月星辰の運行を曆に作りあらはし、之を器に作りて天文に象るをいふ (一四) 今の渾天儀。璿は美しき珠、璣は機にて、珠を以て飾り、天體の運行を象れるもの、玉衡は玉を管とし、横に設けたるものにして、璣を窺ひて七星の運行を齊ふる機なり (一五) 皐陶や契の如き大人物にても必ずしも其事を能くせず (一六) 堯舜の知なるもあまねく物に行きわたる譯にあらざれば (一七) 枝葉に渉り私智を弄する人 (一八) 星術を專門とする人格卑しき人 (一九) 日月五星の運行をはかり氣節氣候を觀てあやまり違ふ事なし (二〇) 泰山上に土を築きて壇と爲し以て天を祭り天の功に報ゆるを封と曰ひ、泰山下の小山上に地を除して地を祀り地の功に報ゆるを禪といふ、かゝる事は尤も聖人の大道に叶はず正しきよりどころなき事也 (二一) 上にこびへつらふ者の (二二) 主倡して大げさにいひ立て (二三) 國費をつひやしなくする譯のもの也 (二四) 天を欺く、人の知をごまかしくらまし、自ら心に恥づるを知らざるの大なる者 (二五) 漢の武帝の元鼎六年の綱目に帝自ら封禪の儀を制すとありて、註に、初め司馬相如の病みて且に死せんとせしとき、遺書して上に泰山に封ぜんことを勸めしが、寶鼎上るに會し、乃ち諸儒をして尙書周官王制の文を采りて封禪の儀を草せしむといへり。この事によりて司馬相如は天下後世の譏を招けりと也

禮何。人而不レ仁。如レ樂何。制レ禮作レ樂。必具二中和之德一。聲爲レ律而身爲レ度者。然後可二以語一レ此。若二夫器數之末一。樂工之事。祝史之守。故曾子曰。君子所レ貴二乎道一者三。籩豆之事。則有司存也。堯命二羲和一。欽若二昊天一。曆二象日月星辰一。其重在三於敬授二人時一也。舜在二璿璣玉衡一。其重在三

は璿璣(一四)玉衡を在かにす。其重きこと、以て七政を齊ふるに在り。是れ皆汲汲然として民を仁するの心を以て、其の民を養ふの政を行ふものなり。曆を治め時を明かにするの本は、固より此に在り。羲和の曆數の學は、皐契(一五)未だ必ずしも之を能くせず、禹稷未だ必ずしも之を能くせざるなり。堯舜(一六)の知にして物に徧からざれば、堯舜と雖も亦未だ必ずしも之を能くせざるなり。然るに今に至りては、羲和の法に循ひて世〻之を修め、曲(一七)知小慧の人、星(一八)術淺陋の士と雖も、亦能く推步占候して忒る所無し。則ち是れ後世の曲知小慧の人は、反つて禹稷・堯舜(一九)に賢れるか。封(二〇)禪の說は尤も不經たり。是れ乃ち後世の佞人(二一)、諛士の、媚を其上に求めんとて、倡(二二)へて誇侈を爲し、以て君心を蕩し、國(二三)費を靡する所以なり。蓋し天(二四)を欺き人を罔ひて恥無きの大なる者、君子の道らざる所にして、司(二五)馬相如の天下後世に譏らるゝ所以なり。吾子乃ち是を以て儒者の學ぶべき所と爲す。殆ど亦未だ之を思はざるか。

之賢聖乎。齊宣之時。明堂尙有未毀。則幽厲之世。周之明堂皆無恙也。堯舜茅茨土階。明堂之制未必備。而不害其爲治。幽厲之明堂。固猶文武成康之舊。而無救於其亂何邪。豈能以不忍人之心。而行不忍人之政。則雖茅茨土階。固亦明堂也。以幽厲之心。而行幽厲之政。則雖明堂亦暴政所自出之地邪。

武帝雖講於漢。而武后盛作於唐。其治亂何如邪。天子之學曰辟雍。諸侯之學曰泮宮。皆象地形而爲之名耳。然三代之學。其要皆所以明人倫。非以辟不辟泮不泮。爲重輕也。孔子云。人而不仁。如

(一)武帝肇めて漢に講じ、(二)武后盛んに唐に作す。其治亂何如ぞや。天子の(三)學を辟雍と曰ひ、諸侯の學を泮宮と曰ふ。皆地形を象りて之の名を爲すのみ。然れば三代の學は、其要皆人倫を明かにする(四)所以にして、辟と辟たらざると、泮と泮たらざるとを以て重輕を爲すに非ざるなり。(五)孔子云ふ、『人にして仁ならずんば禮を如何せん。人にして仁ならずんば樂を如何せん』と。禮を制し樂を作るには、必ず(六)中和の德を具へ、(七)聲は律たり、身は度たる者にして、然して後に以て此を語る可し。夫の(八)器數の末の若き、樂工の事祝史の守なり。故に(九)曾子曰く、『君子道に貴ぶ所の者三、(一〇)籩豆の事は則ち有司存せり』と。(一一)堯、羲和に命じ、欽みて(一二)昊天に若ひ、日月星辰を(一三)暦象す。其重きこと、敬みて人に時を授くるに在り。舜

有二規矩尺度一之喩一。當二亦無レ俟二多贅一矣。至二於明堂辟雍諸事一。似下尚未レ容二於無レ言者上。然其說甚長。姑就二吾子之言一而取レ正焉。則吾子之惑。將亦可二以少釋一矣。夫明堂辟雍之制。始見二於呂氏之月令。漢儒之訓疏一。六經四書之中。未二嘗詳及一也。豈呂氏漢儒之知。乃賢二於三代

詳かに及ばざるなり。豈に呂氏(五)・漢儒の知乃ち三代の賢聖に賢らんや。齊宣の(六)時明堂尚ほ未だ毀たれざる有れば、則ち幽厲(七)の世、周の明堂は皆恙なきなり。堯舜は茅茨(八)土階にして、明堂の制は未だ必ずしも備らざりしも、而も其の治たる(九)を害せず。幽厲の明堂は、固より猶ほ文(一〇)・武・成・康の舊のごとくにして、而も其亂を救ふこと無かりしは何ぞや。豈(一一)に能く人に忍びざるの心を以て、而して人に忍びざるの政を行へば、則ち茅茨(一二)土階と雖も固より亦明堂なり。幽厲の心を以て幽厲の政を行へば、則ち明堂と雖も亦暴政の自りて出づる所の地たらんか。

(一) 前出良知を說明せる所にて (二) 多くの贅言を費す要なからん (三) 根本より論ぜず姑く汝の言につきて之を正さば (四) 明堂は王者の諸侯を朝參せしめし殿堂の名、一の政廳なり。辟雍は天子の學宮にて、大射の禮を行ふ所。それ等の制度は呂氏春秋より采りし月令と漢の鄭玄の註とに見ゆ (五) 呂不韋や鄭玄の知が三代の聖賢以上なりといふ筈なし (六) 齊の宣王の時明堂なほやぶれずに存したれば (七) 周室の第十一世厲王、第十三世幽王、これより周の道全く衰微せり、此二王の時にも明堂は無事に存したる筈也 (八) 所謂茅茨不レ剪土階三等、何も堂々たる政堂などありし譯にあらず (九) 立派な治世たる上に何の差支なし (一〇) 成王・康王は周の第三第四世にして亦周の治世の主たり (一一) 慈仁の心にて慈仁の政を行へば (一二) その質素なる宮殿も亦堂々たる明堂のみ

將三何所致二其用一乎。故論語曰。生而知レ之者義理耳。若夫禮樂名物。古今事變。亦必待レ學。而後有三以驗二其行事之實一。此則可レ謂二定論一矣。所レ喩楊墨鄉愿。堯舜子之湯武楚項。周公莽操之辨。與二前舜武之論一大略可三以類推。古今事變之疑。前於二良知之說一。已

は民を安ぜんとてなり。然れども楚の項羽は義帝を奉じて天下を平げしも、後、帝を弑して自立せるものにて前者に似て而も非なる者なり ㊄ 周公は其兄武王の死後、成王を輔けて國を治む。然るに王莽は始め漢の平帝に仕へて後其位を奪ひ、曹操は漢獻帝に仕へ、太子丕の時、帝に迫りて位を受けたり。共に外面周公に似て内面甚だ異れり ㊅ みだりにして古人の與へし確たる證據標準なし、何れを主として之に適從すべき。さればこそ朱子の天下事物の理を窮むといふ事必要なれとの意を含めて見るべし ㊆ 明堂・辟雍・曆律・封禪等につきては答書の文及び之に註する所を以て知るべし ㊇ 論語述而篇「我非二生而知者一」の所の集註尹氏の語也、蓋し「釋二論語一曰」の釋の字を脫せるか

喩さるゝ所の楊墨・鄉愿・堯舜・子之・湯武・楚項・周公・莽操の辨は、前の舜武の論と大略以て類推す可し。古今事變の疑は、(二)前に良知の說に於て、已に規矩尺度の喩有り。當に亦多贅を俟つこと無かるべし。明堂・辟雍の諸事に至りては、尚ほ未だ言無かる容からざる者に似たり。然れども其說甚だ長し。(三)姑く吾子の言に就きて正を取らば、則ち吾子の惑も將に亦以て少しく釋く可し。夫れ(四)明堂・辟雍の制は始めて呂氏の月令・漢儒の訓疏に見え、六經・四書の中、未だ嘗て

事爲論說者。要皆知行合一之功。正所以致其本心之良知。而非若世之徒事口耳談說。以爲知者。分知行。爲兩事。而果有節目先後之可言也。

を以て兩事となし、まづ節目を窮め學ぶといふが如き類とは異なる也

來書云。楊墨之爲仁義。鄉愿之亂忠信。堯舜子之之禪讓。湯武楚項之放伐。周公莽操之攝輔。謾無印正。又焉適從。且於古今事變。禮樂名物。未嘗考識。使國家欲興明堂。建辟雍。制曆律。草封禪。又

來書に云ふ、『(一)楊墨の仁義を爲す、(二)鄉愿の忠信を亂る、(三)堯・舜・子之の禪讓、(四)湯・武・楚項の放伐、(五)周公・莽・操の攝輔、(六)謾にして印正無し。又焉にか適從せん。且つ古今の事變・禮樂・名物に於て未だ嘗て考識せずして、國家をして、(七)明堂を興し、辟雍を建て、曆律を制し、封禪を草せんと欲せしめば、又將に何所に其用を致さんとするか。故に論語に曰く、生れながらにして之を知る者は義理のみと。若し夫れ禮樂・名物・(八)古今の事變は、亦必ず學を待ちて而して後に以て其行事の實を驗する有り。此れ則ち定論と謂ふ可し。』

(一) 楊子は利己說を說きて君を無みし、墨子は兼愛を說きて父を無みす。即ち仁義の如くにして仁義にあらず (二) 鄉愿は人と世とに諂ひて忠信あるが如く見えて其實然らず (三) 堯は舜に、舜は禹に位を讓れり。然るに子之は其君たる燕王噲を說きて位を受けたり。後者は前者に似て而も非なる者なり (四) 湯が桀を伐ち、武王が紂を伐ちし

也。求者求二此心一也。孟子云。學問之道無レ他。求二其放心一而已矣。非レ若下後世廣二記博三誦古人之言詞一。以爲レ好レ古。而汲汲然惟以求二功名利達之具於其外一者上也。博學審問。前言已盡。温レ故知レ新。朱子亦以レ温レ故屬三之尊二徳性一矣。徳性豈可二以外求一哉。惟夫知レ新必由二於温一レ故。而温レ故乃所二以知一レ新。則亦可四以驗三知行之非二兩節一矣。

博學而詳說レ之者。將二以反說一レ約也。若無二反レ約之云一。則博學詳說者。果何事邪。舜之好問好察。惟以三用レ中而致二其精一於道心一耳。道心者良知之謂也。君子之學。何嘗離二去事爲一而廢二論說一。但其從二事於

『博く學びて詳かに之を說く』とは、將に以て反つて約を說かんとするなり。(一)若し約に反すの云無くんば、則ち博學詳說(二)なるもの果して何事ぞや。舜の好みて問(三)ひ好みて察するも、惟だ中(四)を用ひて其精一を道心に致すを以てのみ。道心とは良知の謂なり。君子の學たる、(五)何ぞ嘗て事爲を離去して論說を廢せんや。但だ其の事爲論說に從事する者は、要するに皆知行合一の功、正に其本心の良知を致す所以にして、(六)世の徒に口耳談說を事とし、以て知と爲す者の、知行を分ちて兩事と爲し、而して果して節日先後の言ふ可きもの有りとするが若きに非ざるなり。

(一) 將に之によりて要約の所を說かんとする也 (二) 若し約に反すの意味なしとせば、博學詳說遂に何の效あらん (三) 來書の好問好察に答ふ (四) 中庸好問好察の次に「惡を隱して善を揚げ、其兩端を執りて其中を民に用ふ」云々とあると指す (五) 決して事爲を離れ論說を廢するといふ譯には非ず (六) 聖人の事爲論說に從事するは世の知行

面識。則夫子胡乃謬爲是說。以欺子貢者邪。一以貫之。非致其良知而何。易曰。君子多識前言往行。以畜其德。夫以畜其德爲心。則凡多識前言往行者。孰非畜德之事。此正知行合一之功矣。好古敏求者。好古人之學。而敏求此心之理耳。心即理也。學者學此心

む』とは、古人の學を好み、敏にして此心の理を求むるのみ。心は卽ち理なり。學とは此心を學ぶなり。求むとは此心を求むるなり。(四)孟子云ふ、『學問の道は他無し、其放心を求むるのみ』と。後世古人の言詞を(五)廣記博誦し、以て古きを好むと爲し、汲汲然として惟だ以て(六)功名利達の具を其外に求むる者の若きに非ざるなり。『博學審問』は前言已に盡したり。『故きを溫ね新しきを知る』は、(七)朱子も亦故きを溫ぬるを以て之を德性を尊ぶに屬せしめたり。德性豈に以て外に求む可けんや。惟だ夫れ新しきを知るは必ず故きを溫ぬるに由り、而して故きを溫ぬるは乃ち新しきを知る所以なれば、(八)則ち亦以て知行の兩節に非ざることを驗す可し。

(一) 知るの上なる者は果して何を指すか、之を考へなば聖門の知を致し力を用ふる所那邊にあるかを窺ひ知るべし
(二) 論語衛靈公篇に出づ (三) 夫子にして果して多く學びて識るに在らしめば、斯る說を爲して子貢を欺く筈なし
(四) 告子下篇の語 (五) 廣く記憶し、博く暗誦し (六) 身の功名利達の資料を自己の心以外の物に求むるが如き類に非ず (七) 標註に曰く「朱子論語に於ては之を註して曰く、溫尋繹也と、是れ知を以て之を釋せる也、中庸に於ては之を註して曰く、燖溫の溫の如し其の、已に知れる所を涵泳す、是れ心を存するの屬也と、是れ行を以て釋せる也」
(八) 溫故と知新との關係斯くの如きを見ば、又知行が分つて兩節となすべきものに非ざるを驗すべし

子訾曰。蓋有二不レ知而作レ之者一。我無レ是也。是猶二孟子是非之心一。人皆有レ之之義一也。此言正所三以明二德性之良知一。非レ由二於聞見一耳。若レ曰下多聞擇二其善者一而從レ之。多見識レ之。則是專求二諸見聞之末一而已。落在二第二義一矣。故曰。知之次也。

(七) 語述而篇の語、「多く聞き其善者を擇びて之に從ひ、多く見て之を識るは、知るの次なり」と (八) 第一義を失して第二義に落つる也 (九) 前出述而篇の語を引いて其第一義に非ざるを正す

夫以二見聞之知一爲レ次。則所レ謂知之上者。果安所レ指乎。是可三以窺二聖門致レ知用レ力之地一矣。夫子謂二子貢一曰。賜也汝以レ予爲二多學而識レ之者一歟。非也。予一以貫レ之使二誠在二於多學

夫れ見聞の知を以て次と爲さば、則ち所謂知るの上なる者は、果して安の指す所ぞや。是れ以て聖門の知を致し力を用ふの地を窺ふ可し。(一一)夫子、子貢に謂ひて曰く、『賜や、汝は予を以て多く學びて之を識る者と爲すか。非なり。予は一以て之を貫く』と。(一二)誠に多く學びて識るに在らしめば、則ち夫子は胡ぞ乃ち謬りて是の說を爲し、以て子貢を欺く者ならんや。『一以て之を貫く』とは、其良知を致すに非ずして何ぞ。易に曰く、『君子は多く前言往行を識つて以て其德を畜ふ』と。夫れ其德を畜ふを以て心と爲さば、則ち凡そ多く前言往行を識る者、孰か德を畜ふの事に非ざらん。此れ正に知行合一の功なり。『古きを好み敏にして求

已詳悉。率合之疑。想已不俟復解矣。至於多聞多見。乃孔子因子張之務外好高。徒欲以多聞多見爲學。而不能求諸其心。以闕疑殆。此其言行。所以不免於尤悔。而所謂見聞者。適以資其務外好高而已。蓋所以救子張多聞多見之病。而非以是教之爲學也。夫

ん。多聞多見に至りては、乃ち孔子が、子張の外を務めて高きを好み、徒らに多聞多見を以て學と爲さんと欲し、而して諸を其心に求めて以て疑はしきと殆きとを闕く能はざるに(二)因りてなり。此れ(三)其言行に尤と悔とを免れざる所以にして、所謂見聞なる者も、適〻以て其の外を務め高きを好むを資くるのみ。蓋し子張が多聞多見の病を救ひし所以にして、(四)是を以て之を教へて學を爲さしむるに非ざるなり。(五)夫子嘗て曰く、『蓋し知らずして之を作す者有らん。我は是れ無し』と。是れ猶ほ(六)孟子が『是非の心は人皆之を有す』との義のごとし。此言たる正に德性の良知が聞見に由るに非ざることを明にせし所以のみ。(七)『多く聞き其善者を擇びて之に從ひ、多く見て之を識る』と曰ふが若き、則ち是れ專ら諸を見聞の末に求むるのみにして、(八)落ちて第二義に在り。故に曰く、(九)『知るの次なり』と。

(一) こじつけといふ疑はもはや解する要なからん　(二) 因りて此語ある也　(三) 子張の言行に尤と悔とを免れざる所以　(四) 此言を以て子張に教へて學を爲さしむるに非ず　(五) 論語學而篇に出づ　(六) 孟子告子下に出づ　(七) 論

矣。

來書云。謂二大學格物之說。專求二本心一。猶可二牽合一。至二於六經四書所レ載。多聞多見。前言往行。好レ古敏求。博學審問。温レ故知レ新。博學詳說。好問好察一。是皆明白求二於事爲之際一。資二於論說之間一者。用レ功節目。固不レ容レ紊矣。格物之義。前

來書に云ふ、『(一)大學格物の說は專ら本心に求むと謂ふは、(二)猶ほ牽合す可し。六經・四書の載する所、(三)多聞多見、(四)前言往行、(五)古きを好み敏にして求む、(六)博學審問、(七)故きを溫ね新しきを知る、(八)博學詳說、(九)好問好察に至りては、是れ皆明白に事爲の際に求め、論說の間に資る者にして、(一〇)功を用ふる節目、固より紊る容からず。』

(一) 大學の格物致知の說をば專ら本心に求むといふ陽明の說は (二) ほんとには合はざれどもなほ斜理にこじつけるべし (三) 論語爲政篇の語、「多く聞きて疑はしきを闕き、愼みて其餘を言へば、則ち尤すくなし。多く見て殆きを闕き、愼みて其餘を行へば、則ち悔すくなし」をいふ (四) 易の大畜の大象傳の語、「君子多く前言往行を識れば、以て其德をやしなふ」を指す (五) 論語述而篇の語、「子曰く、我れ生れながらにして之を知る者に非ず。古を好み敏にして以て之を求めたる者なり」をいふ (六) 中庸に出でたる語 (七) 中庸及び論語爲政篇に出でたる語 (八) 孟子離婁下に出づ、「博く學びて詳かに之を說き、以て反て約を說かんとす」を指す (九) 中庸に出づ。舜は問を好み好みて邇言を察す云々」をいふ (一〇) 學問の工夫の節目にて固より紊るべきに非ず

格物の義は前に已に詳悉せり。(一)牽合の疑は想ふに已に復解するを俟たざら

輕重之宜。不ㇾ得ㇾ已而爲ㇾ此邪。武之不ㇾ葬而興ㇾ師。豈武之前已有下不ㇾ葬而興ㇾ師者上。爲二之準則一故。武得下以考二之何典一。問中諸何人上而爲ㇾ此邪。抑亦求二諸其心一念之良知。權二輕重之宜一。不ㇾ得ㇾ已而爲ㇾ此邪。使下舜之心而非ㇾ誠二於爲ㇾ無ㇾ後。武之心而非中誠二於爲上ㇾ救ㇾ民。則其不ㇾ告而娶。與二不ㇾ葬而興一ㇾ師。乃不孝不忠之大者。而後之人不ㇾ務ㇾ致二其良知一。以精中察義理於此心感應酬酢之間上。顧欲下懸空討二論此等變常之事一。執ㇾ之以爲二制ㇾ事之本一。以求中臨ㇾ事之無上ㇾ失。其亦遠矣。其餘數端皆可二類推一。則古人致知之學。從可ㇾ知

知に求め、輕重の宜しきを權り、已むを得ずして此を爲しゝか。舜の心をして後(四)無きの爲にする誠あるに非ざらしめ、武の心をして民を救ふが爲にする誠あるに非ざらしめば、則ち其の告げずして娶ると、葬らずして師を興すと、乃ち不孝不忠の大なる者なり。而して後の人、其良知を致して義理を此心の感應酬酢の間に精察するを務めず、顧つて(五)懸空に此等變常の事を討論し、之を執つて以て事を制するの本と爲し、以て事に臨みて失ふ無からんことを求めんと欲す。其れ亦遠し。其餘(六)の數端は皆類推す可し。則ち古人致知の學も從つて知るべし。

(一) のつとるべきのり　(二) 如何なる典籍　(三) それとも之を自己本心一念の良知に求め事の輕重の宜しきをはかり已むを得ずして此事を爲したるか　(四) 子無くして家の斷絶するを憂ふる誠あるに非ずして。孟子離婁上に「孟子曰、不孝有ㇾ三、無ㇾ後爲ㇾ大、舜不ㇾ告而娶爲ㇾ無ㇾ後也、君子以爲ㇾ猶ㇾ告也」　(五) 却てこれ等の事實を離れて只空に　(六) 其餘の例示されたる數種の事端は皆これによりて類推すべし

下之長短。吾見ニ其乖張謬戾。日勞而無レ成也已。吾子謂語レ孝於ニ溫淸定省一。孰不レ知レ之。然而能致ニ其知一者鮮矣。若謂ニ粗知ニ溫淸定省之儀節一。而遂謂ニ之能致ニ其知一。則凡知ニ君之當レ仁者。皆可レ謂ニ之能致ニ其仁之知一。知ニ臣之當レ忠者。皆可レ謂ニ之能致ニ其忠之知一。則天下孰非ニ致レ知者一邪。以レ是而言。可ニ以知ニ致レ知之必在ニ於行一。而不レ行之不レ可ニ以爲レ致レ知也明矣。知行合一之體。不ニ益較然一矣乎。

て徒らに節目時變を窮めんとするは （六）道にそむき、もとり謬りて （七）あらまし溫淸定省の當に如何にすべきかといふ儀節を知ることを以て知を致せるなりと謂はゞ （八）斯く謂ひ來れば天下の事一として知を致すに非ざるなし （九）これによりて、知を致すとは必ず行ふ事にして、行はざるは知を致すと爲すべからざるを知らん （一〇）明かならずや

夫舜之不レ告而娶。豈舜之前已有ニ不レ告而娶者一。爲ニ之準則一。故舜得下以考ニ之何典一。問中諸何人上。而爲レ此邪。抑亦求ニ諸其心一念之良知一。權ニ

夫れ舜の告げずして娶りしは、豈に舜の前に已に告げずして娶れる者有りて之が準則を爲しゝが故に、舜は以て之を何典に考へ諸を何人に問ふことを得て而して此を爲しゝか。抑ゝ亦諸を其心一念の良知に求め、輕重の宜しきを權り、已むを得ずして此を爲しゝか。武の葬らずして師を興しゝは、豈に武の前已に葬らずして師を興しゝ者有りて之が準則を爲しゝ故に、武は以て之を何典に考へ諸を何人に問ふことを得て而して此を爲しゝか。抑ゝ亦諸を其心一念の良

可二勝用一矣。尺度誠陳。則不レ可三欺以二長短一。而天下之長短。不レ可二勝用一矣。良知誠致。則不レ可三欺以二節目時變一。而天下之節目時變。不レ可二勝應一矣。毫釐千里之謬。不下於二吾心良知一念之微一而察上之。亦將三何所用二其學一乎。是不レ以二規矩一而欲レ定二天下之方圓一。不レ以二尺度一。而欲レ盡二天

する。是れ規矩を以てせずして天下の方圓を定めんと欲し、尺度を以てせずして天下の長短(五)を盡さんと欲するなり。吾は其乖張謬戻にして、日に勞して而も成る無きを見るのみ。吾子謂ふ、『孝を語るに溫凊定省(六)に於ては孰れか之を知らざらん』と。然り而して能く其知を致す者は鮮し。若し粗ゝ(七)溫凊定省の儀節を知るを謂ひて、遂に之を能く其知を致すと謂はゞ、則ち凡そ君の當に仁なるべきを知る者は、皆之を能く其仁の知を致すと謂ふ可く、臣の當に忠なるべきを知る者は、皆之を能く其忠の知を致すと謂ふ可し。(八)則ち天下孰れか知を致す者に非ざらんや。是を以て言へば、(九)以て知を致すの必ず行に在るを知る可く、行はざるの以て知を致すと爲す可からざるや明かなり。知行合一の體益ゝ較然(一〇)たらざるや。

(一) 良知の節目時變に對する關係は、規矩尺度の方圓長短に對する關係に同一也 (二) 節目時變の豫定し難き事恰も方圓長短の千殊萬端にてきはめつくし難きに異ならず (三) 規矩尺度が誠に立ち誠に陳ぶれば、方圓長短必ず正しく量られて決して欺くを得ず、而して天下の方圓長短は用ひても〳〵用ひ盡すべからず (四) 誠に良知を致せば決して節目事變に欺かるゝ事なく、而して天下の節目時變は應じても〳〵應じ盡すべからず (五) 良知によらずし

婦不レ能レ致。此聖愚之所ニ由分一也。節目時變。聖人夫豈不レ知。但不ニ專以レ此爲レ學。而其所レ謂學者。正惟致ニ其良知一。以精ニ察此心之天理一。而與ニ後世之學一不レ同耳。吾子未レ暇ニ良知之致一。而汲汲焉顧是之憂。此正求ニ其難ニ於明白一者上。以爲レ學之弊也。

道在レ邇而求ニ諸遠一事在レ易而求ニ諸難一」 ㊂ この語孟子告子下に出づ ㊃ 只學を爲すに此節目事變を以て專らとしたるに非ず ㊄ あくせくとして此節目事變の事を憂ふ

夫良知之於ニ節目時變一。猶ニ規矩尺度之於ニ方圓長短一也。節目時變之不レ可ニ預定一。猶ニ方圓長短之不一レ可ニ勝窮一也。故規矩誠立。則不レ可レ欺以ニ方圓一。而天下之方圓。不レ

夫れ良知(一)の節目時變に於けるは、猶ほ規矩尺度の方圓長短に於けるがごとし。節目(二)時變の預め定む可からざるは、猶ほ方圓長短の勝げて窮む可からざるがごとし。故に規矩(三)誠に立てば、則ち欺くに方圓を以てす可からず。而して天下の方圓勝げて用ふ可からず。尺度誠に陳ぶれば、欺くに長短を以てす可からず。而して天下の長短勝げて用ふ可からず。(四)良知誠に致せば、欺くに節目時變を以てす可からず。而して天下の節目時變勝げて應ず可からず。毫釐千里の謬、吾が心良知一念の微に於て之を察せずんば、亦將に何の所にか其學を用ひんと

道之大端易ニ於明白一。此語誠然。顧後之學者。忽下其易ニ於明白一者上而弗レ由。而求下其難ニ於明白一者上。以爲レ學。此其所下以道在レ邇而求ニ諸遠一。事在レ易而求中諸難上也。孟子云。夫道若ニ大路一然。豈難レ知哉。人病レ不レ由耳。良知良能。愚夫愚婦與ニ聖人一同。但惟聖人能致ニ其良知一。而愚夫愚

『道の大端は明白なり易し』と。此語誠に然り。顧ふに後の學者は、(一)其の明白なり易き者を忽にして由らず、而して其の明白なり難き者を求め以て學と爲す。此れ其の(二)道邇きに在りて諸を遠きに求め、事易きに在りて諸を難きに求むる所以なり。孟子(三)云ふ、『夫れ道は大路の若く然り。豈に知り難からんや。人の由らざるを病ふるのみ』と。良知良能は愚夫愚婦も聖人と同じ。但だ惟り聖人は能く其良知を致すも、愚夫愚婦は致す能はず。此れ聖愚の由りて分るゝ所なり。節目時變も、聖人夫れ豈に知らざらんや。(四)但だ專ら此を以て學と爲さず。而して其所謂學なる者は、正に惟だ其良知を致し、以て此心の天理を精察するものにして、後世の學と同じからざるのみ。吾子未だ良知を之れ致すに暇あらず、而るを汲汲(五)として顧みて是を之れ憂ふ。此れ正に其の明白なり難き者を求めて以て學と爲すの弊なり。

(一) 明白なり易き道の大本は忽にして由らず、明白なり難き節目事變を求めて學とす　(二) 孟子離婁上に「孟子曰、

大端易ニ於明白一。所レ謂良知良能。愚夫愚婦。可ニ與及一者。至ニ於節目時變之詳。毫釐千里之繆一。必待レ學而後知。今語レ孝。於ニ溫凊定省一。孰不レ知レ之。至下於舜之不レ告而娶。武之不レ葬而興レ師。養レ志養レ口。小杖大杖。割レ股廬レ墓等事。處レ常處レ變。過與ニ不及一之間上。必須下討ニ論是非一以爲中制レ事之本上。然後心體無レ蔽。臨レ事無レ失。

及ぶ可き者なり。(三)節目時變の詳、毫釐千里の繆に至りては、必ず學を待ちて而して後に知る。今孝を語るに、溫凊定省に於ては孰か之を知らざらん。(四)舜の告げずして娶り、(五)武の葬らずして師を興し、(六)志を養ひ口を養ひ、(七)小杖大杖、(八)股を割き、(九)墓に廬する等の事、常に處すると變に處すると、過と不及との間に至りては、必ず須らく是非を討論し、以て(一〇)事を制するの本と爲すべし。然して後に心體蔽はるゝ無く、(一一)事に臨むも失ふこと無けん。』

一 大體、大綱 二 良知良能は人の本然固有する所なれば愚夫婦も之に及ぶべし 三 細節の事、時に取りて變ずべき事の詳細にして、ほんの僅かの違ひが非常なる繆りともなる類に至りては 四 舜が時變に應じて父母に告げずして娶りしこと 五 文王を葬らずして武王が直に紂を討ちしこと 六 曾子が父曾晳の志を養ひ、曾元が父曾子に事へて口體を養ひしこと 七 舜が其父瞽瞍に事へ過を待つに小杖は之を甘受して其怒を解き、大杖を以て責めらるゝ時は逃げ去りて親をして子を殺すの罪を免れしめしこと 八 親の病を治するため自らの股肉を割きて食せしめし幾多の實例 九 孔子歿するや、其弟子子貢墓側に廬を結びて之を守ること三年に及びしこと 一〇 事の宜しきを制す 一一 臨時の事に處して其宜しきを失ふことなからん

凊。致下其知三如何爲二奉養之宜一者之知上。而實以レ之奉養。然後謂二之致一レ知。溫凊之事。奉養之事。所レ謂物也。而未レ可レ謂二之格一レ物。必其於二溫凊之事一也。一如下其良知之所レ知當三如何爲二溫凊之節一者上。而爲レ之無二一毫之不一レ盡。於二奉養之事一也。一如下其良知之所レ知當三如何爲二奉養之宜一者上。而爲レ之無二一毫之不一レ盡。然後謂二之格一レ物。溫凊之物格。然後知二溫凊之良知始致。奉養之物格。然後知二奉養之良知始致。故曰。物格而後知至。致下其知二溫凊一之良知上。而後溫凊之意始誠。致下其知二奉養一之良知上。而後奉養之意始誠。故曰。知至而後意誠。此區區誠意致知格物之說。蓋如レ此。吾子更熟思レ之。將三亦無二可レ疑者一矣。

の意始めて誠なり。其の奉養を知るの良知を致し、而して後に奉養の意始めて誠也。故に曰く、『知至りて而して後に意誠なり』と。此れ區區が誠意・致知・格物の(七)說にして、蓋し此の如し。吾子更に熟く之を思へ。將に亦疑ふ可き者無からん。

(一) 汝は自己自身の意にて余の見解をおしはかりて斯る說を爲す、余が汝に吿げしは左樣の意味に非ず (二) 務めて自ら其意の如く實行して自ら慊快し、思ふばかりにて實行する事なくして自ら己を欺くが如き事無く (三) 如何にすれば溫凊奉養の節に當るかといふは所謂知也 (四) 自己の (五) 良知が、如何にすれば溫凊奉養の節に當るかといふ事を知る、其知る所の者の通りにして一點の盡さゞる無きに至りて始めて物を格すとはいふ也 (六) 大學の說を引く、後の知至り云々は此語のつゞき也 (七) これが拙者の誠意致知格物の說也

來書云。道之

來書に云ふ、『道の(一)大端は明白なり易し。所謂(二)良知良能は愚夫愚婦も與に

蓋鄙人之見。則謂意欲二温凊一。意欲二奉養一者。所レ謂意也。而未レ可レ謂二之誠一レ意。必實行二其温凊奉養之意一。務求三自慊而無二自欺一。然後謂二之誠一レ意。知三如何而爲二温凊之節一。知三如何而爲二奉養之宜一者。所レ謂知也。而未レ可レ謂二之致一レ知。必致下其知三如何爲二温凊之節一者之知上。而實以レ之温

後に之を意を誠にすと謂ふ。如何にして温凊の節たるかを知り、如何にして奉養の宜たるかを知る者は、所謂知なり。(三)而も未だ之を知を致すと謂ふ可からず、必ず其の如何にして温凊の節たるかを知るの知を致し、而して實に之を以て温凊し、其の如何にして奉養の宜たるかを知るの知を致し、而して實に之を以て奉養し、然し後に之を知を致すと謂ふ。温凊の事、奉養の事は所謂物なり。而して未だ之を物を格すと謂ふ可からず。必ず其の温凊の事に於けるや、一に其(四)良知の、如何にして温凊の節たるべきかを知る所の者の如くにして而して之を爲して一毫の盡さざる無く、奉養の事に於けるや、一に其良知の、如何にして奉養の宜たるべきかを知る所の者の如くにして、而して之を爲して一毫の盡さゞる無し。然して後に之を物を格すと謂ふ。(五)温凊の物格しうして然して後に温凊を知るの良知始めて致り、奉養の物格しうして然して後に奉養を知るの良知始めて致る。故に曰く、(六)『物格して而して後に知至る』と。其の温凊を知るの良知を致し、而して後に温凊

格物一而遂謂二之窮理一。此所ㇾ以專以二窮理一屬ㇾ知而謂三格物未二嘗有一ㇾ行。非二惟不ㇾ得二格物之旨一。并窮理之義而失ㇾ之矣。此後世之學。所下以析二知行一爲二先後兩截一。日以支離決裂。而聖學益以殘晦上者。其端實始二於此一。吾子蓋亦未ㇾ免三承二沿積習一。則見以爲三於ㇾ道未二相脗合一。不ㇾ爲ㇾ過矣。

來書云。謂致知之功。將下如何爲二溫凊一。如何爲中奉養上。即是誠意。非三別有二所ㇾ謂格物一。此亦恐非。此乃吾子自以二己意一揣二度鄙見一。而爲二是說一。非下鄙人之所三以告二吾子一者上矣。若果如二吾子之言一。寧復有ㇾ可ㇾ通乎。

來書に云ふ、『謂へらく(一)、致知の功たる、將に如何にして溫凊(二)と爲し如何にして奉養と爲さんとかする、卽ち是れ誠意にして、別に所謂格物なるものの有るに非ずと。此れ亦恐らくは非ならん。』

(一) 陽明の說の意味にてはと也　(二) 溫凊奉養共に親に事ふる道也

此れ乃ち吾子自ら己が意を以て鄙見を揣度して是の說を爲すもの、鄙人の吾子に告ぐる所以(一)の者に非ず。若し果して吾子の言の如くならば、寧ろ復通ず可き有らんや。蓋し鄙人の見は、則ち謂へらく、意の溫凊せんと欲し、意の奉養せんと欲する者は、所謂意なり。而も未だ之を意を誠にすと謂ふ可からず。必ず實に其溫凊奉養の意を行ひ、務めて(一)自ら慊して自ら欺くこと無きを求めて、然して

人何不三直曰二致レ知在一レ窮レ理。而必爲二此轉折不完之語一。以啓二後世之弊一邪。蓋大學格物之說。自與二繫辭窮理一。大旨雖レ同。而微有二分辨一。窮レ理者兼二格致誠正一。而爲レ功也。故言二窮理一。則格致誠正之功。皆在二其中一。言二格物一。則必兼二舉致知誠意正心一。而後其功始備而密。今偏舉二

分辨有り。理を窮むとは格致誠正を兼ねて功を爲すなり。故に理窮を言へば、則ち格致誠正の功は皆其中に在り。格物を言へば、則ち必ず擧(五)げて致知・誠意・正心を兼ね、而して後に其功始めて備りて密なり。今偏(六)に格物を擧げて而して遂に之を窮理と謂ふは、此れ專ら窮理を以て知に屬し、而して格物は未だ嘗て行有らずと謂ふ所以にして、惟に格物の旨を得ざるのみに非ず、幷せて窮理の義をも而も之を失へり。此れ後世の學の知行を析つて先後兩截と爲して、日に以て支離決裂し、而して聖學の益〻以て(七)殘晦する所以の者、其端實に此に始る。吾子蓋し亦積習を承沿するを免れず。則ち見て以て『道(九)に於て未だ相脗合せず』と爲すは過(八)てりと爲さず。

(一) 窮理の二字說卦傳に出づ、繫辭にあらず、蓋し偶々思ひ誤れるのみ (二) 若し朱子の說の如くば、聖人は直に「知を致すは理を窮むるに在り」と曰ふべき筈也 (三) まはり出れる不完全の言葉 (四) 其間に少しの區別あり (五) 致知・誠意・正心を其内に殘らず兼ね含めて (六) 一方に格物を一つ擧げて遂にそれを窮理と謂ふは (七) そこなはれくちくなる (八) 從來のつもりつもれる弊習により從ふ (九) 前の來書の語を擧げていふ也

明之間。無二一不レ得二其理一。而後謂二之格一。有苗之頑。實以二文德誕敷一而後格。則亦穎有三正字之義在二其間一。未レ可下專以二至字一盡上レ之也。如下格二其非心一。大臣格二君心之非一之類上。是則一皆正二其不正一。以歸二於正一之義。而不レ可下以二至字一爲上レ訓矣。且大學格物之訓。又安知二其不下以二正字一爲上レ訓。而必以二至字一爲レ義乎。如下以二至字一爲レ義者。必曰レ窮二至事物之理一。而後其說始通。是其用レ功之要。全在二一窮字一。用レ力之地。全在二一理字一也。若上去二一窮一。下去二一理字一。而直曰二致レ知在レ至レ物。其可レ通乎。

種卽ちイタルとタヾスとにつきていふ (四) 文祖に格るの語は書の舜典に出づ。又書の大禹謨に、「帝乃誕敷二文德一。舞二干羽兩階一。七日有苗格」と見ゆ (五) これ「文祖に格る」につきていふ、文祖は堯の祖先の廟也 (六) これ「有苗來り格る」につきていふ、有苗は古への國名 (七) 斯く考ふれば「至る」といふ訓の内には兼ねて「正」の字の義も存せる也 (八) 單に「至」の字のみを以て其義を盡すを得ず (九) これら「正」と訓ずる場合之を「至」を以て義とすべき理由をあらんや (一〇) 如何で格の字を訓ずるにこれら「正」の字を以て訓と爲さずして「至」を以て義とすべき理由あらんや (一一) 「至」の義とする時は、「窮至事物之理」といふ如く上に窮の字を添へ下に理の字を添へて始めて其說通ずべし、この二字を去りて單に「致知在至物」と謂はゞ通ぜざらん

夫窮レ理盡レ性。聖人之成訓。見二於繫辭一者也。苟格物之說。而果卽窮理之義。則聖窮

夫れ理を窮め性を盡すは、聖人の成訓にして繫辭(一)に見ゆる者なり。苟も格物の說にして、果して卽ち理を窮むるの義ならば、則ち聖人は何ぞ直に知を致すは理を窮むるに在りと曰はずして、必ず此轉折不完(二)の語を爲し、以て後世の弊を啓かんや。蓋し大學の格物の說は、自ら繫辭(三)の窮理と大旨は同じと雖も、而も微しく(四)

意用於治民。即治民爲一物。意用於讀書。即讀書爲一物。意用於聽訟。即聽訟爲一物。凡意之所用。無有無物者。有是意即有是物。無是意即無是物矣。物非意之用乎。格字之義。有以至字訓者。如格于文祖。有苗來格。是以至訓者也。然格于文祖。必純孝誠敬。幽

るは、必ず純孝誠敬にして、(五)幽明の間、一も其理を得ざること無くして、而して後に之を格と謂ふ。(六)有苗の頑なるも、實に文德誕いに敷くを以て而して後に格る。(七)則ち亦兼ねて正の字の義の其間に在る有り。未だ(八)專ら至るの字を以て之を盡す可からざるなり。其非心を格す、大臣君心の非を格すの類の如きは、是れ則ち一に皆其不正を正し、以て正に歸するの義にして、(九)至るの字を以て訓と爲す可からず。且つ大學の格物の訓たる、又(一〇)安ぞ其の正の字を以て訓と爲さずして、必ず至の字を以て義と爲すを知らんや。(一一)至の字を以て義と爲す者の如きは、必ず事物の理を窮至すと曰ひて、而して後に其說始めて通ず。是れ其の功を用ふるの要全く一の窮の字に在り、力を用ふるの地全く一の理の字に在り。若し上に一の窮を去り、下に一の理の字を去り、而して直に知を致すは物に至るに在りと曰はゞ、其れ通ず可けんや。

(一) 心の靈妙をいふ語 (二) 心の本體なる良知が感應する所ありて作用するを意といふ (三) 格の字の訓じ方の二

乎。彼頑空虛靜之徒。正惟不能隨事隨物。精察此心之天理。以致其本然之良知。而遺棄倫理。寂滅虛無以爲常。是以要之。不可以治家國天下。孰謂聖人窮理盡性之學。而亦有是弊哉。

心者身之主也。而心之虛靈明覺。卽所謂本然之良知也。其虛靈明覺之良知。應感而動者謂之意。有知而後有意。無知則無意矣。知非意之體乎。意之所用。必有其物。物卽事也。如意用於事親。卽事親爲一物。

心は身の主なり。而して心の虛靈明覺(一)は卽ち所謂本然の良知なり。其虛靈明覺の良知(二)の感に應じて動く者之を意と謂ふ。知有りて後に意有り。知無ければ則ち意無し。知は意の體に非ずや。意の用ふる所必ず其物有り。物は卽ち事なり。意を親に事ふるに用ふるが如きは、卽ち親に事ふる一物たり。意を民を治むるに用ふれば卽ち民を治むる一物たり。意を書を讀むに用ふれば卽ち書を讀むは一物たり。意を訟を聽くに用ふれば卽ち訟を聽くは一物たり。凡そ意の用ふる所物無き者有ること無し。是の意有れば卽ち是の物有り。是の意無ければ卽ち是の物無し。物は意の用に非ずや。格(三)の字の義は至の字を以て訓ずる者有り。文祖(四)に格る。有苗來る格るの如き是れ至るを以て訓ずる者なり。然れども文祖に格

人窮㆑理。使㆗之深居端坐。而一無所㆑事也。若謂㆔即㆑物窮㆑理。如㆓前所㆑云。務㆑外而遺㆑内者。則有㆑所㆓不可㆒耳。昏闇之士。果能隨㆑事隨㆑物。精㆓察此心之天理㆒。以致㆓其本然之良知㆒。則雖㆑愚必明。雖㆑柔必强。大本立而達道行。九經之屬。可㆓一以貫㆑之而無㆑遺矣。尙何患㆔其無㆓致㆑用之實㆒

り。若し物に卽き理を窮むること、前に云ふ所の外を務めて内を遺るゝ者の如しと謂はゞ、則ち不可なる所有るのみ。昏闇の士、果して能く事に隨ひ物に隨ひ、此心の天理を精察し、以て其本然の良知を致さば、(三)則ち愚と雖も必ず明かに、柔と雖も必ず强く、大本立ちて達道行はれ、(四)九經の屬も、(五)一以て之を貫きて遺すところ無かる可し。尙ほ何ぞ其の用を致すの實無きを患へんや。彼の(六)頑空虛靜の徒は、正に惟だ事に隨ひ物に隨ひ、此心の天理を精察し、以て其本然の良知を致すこと能はずして、(七)倫理を遺棄し、寂滅虛無以て常と爲す。是を以て之を要するに、以て家國天下を治む可からず。(八)孰か聖人理を窮め性を盡すの學にして而も亦是の弊有りと謂はんや。

(一) 余の致知格物の論は (二) 來書の如き意に非ずと也 (三) 中庸の「果能㆓此道㆒矣、雖㆑愚必明、雖㆑柔必强」に取る (四) 中庸第二十章の天下國家を爲むるの九經卽ち修㆑身・尊㆑賢・親㆑親・敬㆓大臣㆒・體㆓羣臣㆒・子㆓庶民㆒・來㆓百工㆒・柔㆓遠人㆒・懷㆓諸侯㆒これ也 (五) 孔子の我道一以て之を貫くの語に取る (六) 佛家の徒をいふ、頑乎として空寂虛靜を主とするが故也 (七) 人倫道德をわすれ棄て (八) 聖人窮理盡性の學にして亦かゝる弊ありといふを得んや

窮理。誠使昏闇之士深居端坐。不聞教告。遂能至於知致而德明乎。縱令靜而有覺。稍悟本性。則亦定慧無用之見。果能知古今達事變。而致用於天下國家之實否乎。其曰知者意之體。物者意之用。格物如格君心之非之格。語雖超悟獨得。不踵陳見。抑恐於道未相脗合。

らしめば、遂に能く知致りて德明かなるに至らんや。縱令靜にして覺る有るも、稍や本性を悟るときは則ち定(三)慧無用の見なり。果して能く古今を知り事變に達して用を天下國家の實に致さんや。其(四)の知は意の體、物は意の用、格物は君(五)心の非を格すの格の如しと曰ふ、語は超悟獨得(六)にして陳見(七)を踵まずと雖も、抑も恐らくは道に於て未だ相脗合せざらん(八)。」

(一) 學ぶ者の物に卽きて理を窮むるを戒む　(二) 道にくらき初心の士　(三) 天台宗に於ける戒定慧をいふ、卽ち戒を守れば定卽ち心定まるあり、心定まれば慧卽ち心明かなりとの說。此にては心の體はあるが如しと雖も畢竟無用の見なりといふ也　(四) 「其の」は陽明の說を指していふ　(五) 陽明は我が良知を致して物を格(たゞ)すの義と爲す也　(六) 普通とかけ離れたる獨得の說　(七) 陳腐の見解　(八) ぴつたりと合はざらん

區區論致知格物。正所以窮理。未嘗戒

區區が致知格物を論ずるは、正に理を窮むる所以にして、未だ嘗て人の理を窮(一)むるを戒め、之をして深居端坐(二)して一も事とする所無からしむるにあらざるな

理。而不レ知レ反ニ求諸其心。則凡所レ謂善惡之機。眞妄之辨者。舍ニ吾心之良知。亦將ニ何所致ニ其體察一乎。吾子所レ謂氣拘物蔽者。拘レ此蔽レ此而已。今欲レ去ニ此之蔽。不レ知レ致ニ力於此。而欲ニ以外求。是猶下目之不レ明者。不レ務ニ服藥調理以治ニ其目。而徒倀倀然求中明於其外上。明豈可ニ以自レ外而得一哉。任レ情恣レ意之害。亦以レ不レ能レ精ニ察天理於此心之良知一而已。此誠毫釐千里之謬者。不レ容ニ於不レ辨。吾子毋レ謂ニ其論之太刻一也。

かならざる者の、服藥調理以て其目を治するを務めずして、徒らに倀倀然(五)として明を其外に求むるがごとし。明、豈に以て外よりして得べけんや。情に任せ意を恣にするの害も、亦(六)天理を此心の良知に精察する能はざるを以てのみ。此れ誠に毫釐千里の謬なる者、辨ぜざる容からず。吾子、其論の太だ刻なるを謂ふ毋れ。

(一) 之を困み勉むること、人の一度する事は己は百度もする程に至り (二) 良知の外には少しも加ふる無し (三) 良知を指す (四) 力を良知に致すを知らずして (五) うれへ悲しみて (六) 此心の良知に於て天理を精察する能はざるが爲めに外ならず

來書云。教レ人以ニ致レ知明ヒ德。而戒ニ其卽レ物

來書に云ふ、『人を教ふるに、知を致し德を明かにするを以てし、其の物に卽き理を窮むるを戒むと。誠に昏闇(一)の士をして、深居端坐して、教告(二)を聞かざ

行之不レ可三以爲二窮理一。則知二知行之合一並進而不レ可三以分爲二兩節事一矣。夫萬事萬物之理。不レ外二於吾心一。而必曰レ窮二天下之理一。是殆以二吾心之良知一爲レ未レ足。而必外求二於天下之廣一。以裨二補增益之一。是猶析二心與レ理而爲レ二也。

至つて始めてよく義の理を窮むと謂ふべし、これ即ち窮理也　(三) 學は斯る窮理を以てその至極の所とす　(四) 行はざるを學と爲すべからざる事が分れば、行はざるの窮理と爲すべからざる事も分る筈也　(五) 然るに我が心以外に天下の理を窮むと曰はゞ　(六) 補ひ益さんとする也

夫學問思辨篤行之功。雖下其困勉至二於人一己百一。而擴二充之一極。至中於盡レ性知レ天。亦不レ過レ致二吾心之良知一而已。良知之外。豈復有レ加二於毫末一乎。今必曰レ窮二天下之

夫れ學問・思辨・篤行の功たる、(一)其困勉は、人一たびすれば己百たびするに至り、之を擴充するの極、性を盡し天を知るに至ると雖も、亦吾が心の良知を致すに過ぎざるのみ。(二)良知の外豈に復毫末を加ふる有らんや。今必ず天下の理を窮むと曰ひ、諸を其心に反求するを知らざれば、則ち凡そ所謂善惡の機、眞妄の辨なる者は、吾が心の良知を舍きて亦將に何れの所に其體察を致さんとするか。吾子の所謂『氣拘り物蔽ふ』とは、(三)此を拘し此を蔽ふのみ。今此の蔽を去らんと欲するも、(四)力を此に致すを知らずして以て外に求めとん欲するは、是れ猶ほ目の明

明道云。只窮レ理便盡レ性至レ命。故必仁極レ仁。而後謂三之能窮二仁之理一。義極レ義。而後謂三之能窮二義之理一。仁極レ仁則盡二仁之性一矣。義極レ義則盡二義之性一矣。學至二於窮レ理至矣。而尚未レ措二之於行一。天下寧有レ是邪。是故。知二不レ行之不レ可二以爲レ學。則知二不レ行之不レ可三以爲二窮理一矣。知二不レ

(一)明道云く、『只だ理を窮むれば便ち性を盡し命に至る』と。故に必ず(二)仁は仁を極めて而して後に之を能く仁の理を窮むと謂ひ、義は義を極めて而して後に之を能く義の理を窮むと謂ふ。仁は仁を極めて則ち仁の性を盡し、義は義を極めて則ち義の性を盡す。(三)學は理を窮むるに至りて至る。而も尚ほ未だ之を行に措かざるごとき、天下寧ろ是有らんや。是の故に、(四)行はざるの以て學と爲す可からざるを知らば、行はざるの以て窮理と爲す可からざるを知らん。行はざるの以て窮理と爲す可からざるを知らば、則ち知行の合一竝進して、以て分ちて兩節の事と爲す可からざるを知らん。夫れ萬事萬物の理は吾が心に外ならず、(五)而るに必ず天下の理を窮むと曰ふは、是れ殆ど吾が心の良知を以て未だ足らずと爲して、必ず外天下の廣きに求め、以て之を(六)裨補增益せんとするなり。是れ猶ほ心と理とを析ちて二と爲すなり。

(一) 程明道のこの語遺書洛陽議論に出づ　(二) 仁は仁の極に至つて始めてよく仁の理を窮むといひ、義は義の極に

故以レ求レ能二其事一而言。謂二之學一。以レ求レ解二其惑一而言。謂二之問一。以レ求レ通二其說一而言。謂二之思一。以レ求レ精二其察一而言。謂二之辨一。以レ求レ履二其實一而言。謂二之行一。蓋析二其功一而言。則有レ五。合二其事一而言。則一而已。此區區心理合一之體。知行竝進之功。所三以異二於後世之說一者。止在二於是一。今吾子特擧三學問思辨以窮二天下之理一。而不レ及二篤行一。是專以二學問思辨一爲レ知。而謂二窮理一爲レ無レ行也已。天下豈有二不レ行而學者一邪。豈有下不レ行而遂可レ謂二之窮レ理者上邪。

と求むるを以て言へば之を辨と謂ひ、其實を履まんと求むるを以て言へば之を行と謂ふ。蓋し(三)其功を析ちて言へば則ち五有るも、其事を合して言へば則ち一のみ。此れ(四)區區が心理合一の體、知行竝進の功にして、後世の說と異る所以の者は正に是に在り。今吾子特に學問思辨以て天下の理を窮むるを擧げて、而も篤行に及ばず。是は專ら學問思辨を以て知と爲し、而して(五)窮理を謂ひて行無しと爲すのみ。天下豈に行はずして學ぶ者有らんや。豈に行はずして遂に之を理を窮むと謂ふ可き者有らんや。

(一) まづ學問思辨を爲し、其後にて始めて之を實行の上におくといふ譯にあらず　(二) 只一つの事を色々の方面より見て言葉をかへて謂ひたるのみと也　(三) 其つとむるの功を分ちて言へば博學・審問・愼思・明辨・篤行の五つなるも其事を合して言へば只一つ也　(四) これ卽ち余が所謂心理合一知行竝進の工夫也　(五) 理を窮むるといふ事の內には行は無しと謂へる也

則必伸レ紙執レ筆。操レ觚染レ翰。盡二天下之學一。無レ有下不レ行而可二以言一レ學者上。則學之始。固已即是行矣。篤者敦實篤厚之意。已行矣。而敦二篤其行一。不レ息二其功一之謂爾。蓋學レ之不レ能二以無一レ疑。則有レ問。問即學也。即行也。又不レ能レ無レ疑。則有レ思。思即學也。即行也。又不レ能レ無レ疑則有レ辨。辨即學也。即行也。

ること有り。辨ずるは即ち學ぶなり、即ち行ふなり。

㊀ 舊說即ち朱子派の說をうけつぎて之によるの弊なり ㊁ 學ぶだけにて行はずといふ事のある筈なし、學ぶは即ち行ふ也。以下の諸例によりて其然る所以を知るべし ㊂ 孝の道を身に行ひてこそ始めて孝を學ぶとは謂ふべきなれ ㊃ 實際に關係なく空に口に論じ耳に聞きて ㊄ 弓を一杯に引きしぼりて ㊅ 觚は竹簡也。文字を書くをいふ ㊆ 凡そ天下の學ぶといふ事は盡く皆

辨既明矣。思既愼矣。問既審矣。學既能矣。又從而不レ息二其功一焉。斯之謂二篤行一。非レ謂三學問思辨之後而始措二之於行一也。是

辨ずること既に明かに、思ふこと既に愼み、問ふこと既に審かに、學ぶこと既に能くするも、又從つて其功を息めざるもの、斯れを之れ篤行と謂ふ。(一)學問思辨の後にして始めて之を行に措くと謂ふに非ざるなり。(二)是の故に其事を能くせんと求むるを以て言へば之を學と謂ひ、其惑を解くを求むるを以て言へば之を問と謂ひ、其說に通ぜんと求むるを以て言へば之を思と謂ひ、其察することを精しくせん

有二不レ可レ勝レ言者一矣。

此段大略似レ是而非。蓋承二沿舊說一之弊。不レ可二以不一レ辨也。夫學問思辨行。皆所二以爲一レ學。未レ有二學而不レ行者一也。如レ言レ學レ孝。則必服レ勞奉レ養。躬行二孝道一而後謂二之學一。豈徒懸空口耳講說而遂可三以謂二之學一レ孝乎。學レ射則必張レ弓挾レ矢引滿中レ的。學レ書

此段は大略是なるに似て非なり。蓋し(一)舊說を承沿するの弊、以て辨ぜざる可からず。夫れ學問思辨の行は、皆學を爲す所以にして、(二)未だ學びて行はざる者有らざるなり。孝を學ぶと言ふが如きは、則ち必ず勞に服し養を奉じ、(三)躬ら孝道を行うて後に之を學ぶと謂ふなり。豈に徒らに(四)懸空に口耳講說して遂に以て之を孝を學ぶと謂ふべけんや。射を學ぶときは則ち必ず弓を張り矢を挾み(五)引滿して的に中つ。書を學ぶときは則ち必ず紙を伸べ筆を執り、(六)觚を操り翰を染む。(七)天下の學を盡して、行はずして以て學と言ふ可き者有ること無し。則ち學の始は、固より已に即ち是れ行なり。篤とは敦實篤厚の意にして、已に行ひ、而も其行を敦篤にして其功を息めざるの謂のみ。蓋し之を學び以て疑無き能はざれば則ち問ふこと有り。問ふは即ち學ぶなり、即ち行ふなり。又疑無き能はざれば則ち思ふ有り、思ふは即ち學ぶなり、即ち行ふなり。又疑無き能はざるあれば則ち辨ず

喪レ志。倘猶以爲二不可一歟。若二鄙人所レ謂致知格物一者。致二吾心之良知於事事物物一也。吾心之良知。卽所レ謂天理也。致二吾心良知之天理於事事物物一。則事事物物皆得二其理一矣。致二吾心之良知一者致知也。事事物物皆得二其理一者格物也。是合二心與レ理而爲レ一者也。合二心與レ理而爲レ一。則凡區區前之所レ云。與二朱子晩年之論一。皆可二以不レ言而喩一。

朱子晩年の論と、皆以て言はずして喩る可し。

㊀前にも出づ、孟子告子上篇に出でたる告子の議論也 ㊁孟子深く其說を闢きて明かにせり ㊂拙者。これ卽ち陽明の致知格物の說也、知の字を以て自己の良知と爲す也 ㊃所謂心外理なし、心卽理也 ㊄つまらぬ者の意にて卑下の自稱也

來書云。人之心體。本無レ不レ明。而氣拘物蔽。鮮レ有レ不レ昏。非二學問思辨以明二天下之理一。則善惡之機。眞妄之辨。不レ能二自覺一。任レ情恣レ意。其害

來書に云ふ、『人の㊀心體は本明かならざる無し。而るに氣拘り物蔽ひ、昏まざる有ること鮮し。學問思辨以て天下の理を明かにするに非ざれば、則ち善㊁惡の機も、眞妄の辨も、自ら覺ること能はずして、情に任せ意を恣にするときは、其害言ふに勝ふ可からざる者有らん。』

㊀人の心の本體はもと明かなれども、氣質に拘束せられ、物欲に蔽はれて昏昧に至る也 ㊁善と惡との分るゝ機、眞か妄かの辨別

親之身一邪。假而果在二於親之身一。則親沒之後。吾心遂無二孝之理一歟。見二孺子之入一レ井。必有二惻隱之心一。是惻隱之理。果在二於孺子之身一歟。抑在二於吾心之良知一歟。其或不レ可三以從二之於井一歟。其或可二以レ手而援一レ之歟。是皆所レ謂理也。是果在二於孺子之身一歟。抑果出二於吾心之良知一歟。

以レ是例レ之。萬事萬物之理。莫レ不二皆然一。是可下以知中析二心與レ理爲レ二之非上矣。夫析二心與レ理而爲レ二。此告子義外之說。孟子之所二深闢一也。務レ外遺レ內博而寡レ要。吾子既已知レ之矣。是果何謂而然哉。謂二之玩レ物

是を以て之を例すれば、萬事萬物の理、皆然らざる莫し。是れ以て心と理とを析ちて二と爲すの非なるを知る可し。夫れ心と理とを析ちて二と爲すは、此れ告子(一)義外の說にして、孟子(二)の深く闢ける所なり。外を務め內を遺れ、博くして要寡きは、吾子既に已に之を知る。是れ果して何の謂にして然りや。之を物を玩び志を喪ふと謂ふ、尙ほ猶ほ以て不可と爲すか。鄙人(三)の所謂致知格物の若きは、吾が心の良知を事事物物に致すなり。吾が心の良知は卽ち所謂天理(四)なり。吾が心の良知の天理を事事物物に致すときは、則ち事事物物皆其理を得。吾が心の良知を致す者は致知なり。事事物物皆其理を得る者は格物なり。是れ心と理とを合して一と爲す者なり。心と理とを合して一と爲すときは、則ち凡そ區區(五)が前に云へる所と、

朱子所レ謂格物云者。在三即レ物而窮二其理一也。即レ物窮レ理。是就二事事物物上一。求二其所レ謂定理一者也。是以二吾心一而求二理於事事物物之中一。析二心與一レ理而爲レ二矣。夫求二理於事事物物一者。如レ求二孝之理於其親一之謂也。求二孝之理於其親一。則孝之理。其果在二於吾之心一邪。抑果在二於

朱子(一)の所謂格物と云ふは、物に即きて其理を窮むるに在り。物に即きて理を窮むるは、是れ事事物物の上に就きて(二)其の所謂定理を求むる者也。是れ吾が心を以て理を事事物物の中に求め、心と理とを析ちて二と爲すなり。夫れ理を事事物物に求むる者は、孝の理を其親に求むるが如きの謂なり。孝の理を其親に求めば、則ち孝の理其れ果して吾が心に在るか、抑も果して親の身に在るか。假に果して親の身に在りとせば、則ち親沒するの後は吾が心遂に孝の理無きか。(三)孺子の井に入らんとするを見ては、必ず惻隱の心有りといふも、是れ惻隱の理果して孺子の身に在るか、抑も吾が心の良知に在るか。(四)其れ或は以て之に井に從ふ可からざるか、(五)其れ或は手を以て之を援く可きか。是れ皆所謂理なり。是れ果して孺子の身に在るか、抑も果して吾が心の良知に出づるか。

(一) これ即ち格物致知に對する王朱二家の相違也 (二) 朱子の所謂定理、其說大學或問に見ゆ (三) 孟子公孫丑上に出づ (四) 論語雍也篇に「宰我問曰、仁者雖レ告レ之曰二井有一レ仁焉、其從レ之也、子曰、何爲其然也」 (五) 孟子離婁上に「淳于髡曰、男女授受不レ親禮與、孟子曰禮也、曰嫂溺則援レ之以レ手乎、曰嫂溺不レ援是豺狼也」

不レ至下於舉二天下一而路上也。今世致知格物之弊。亦居然可レ見矣。吾子所レ謂。務レ外遺レ內。博而寡レ要者。無二乃亦是過一歟。此學問最緊要處。於レ此而差。將レ無二往而不一レ差矣。此鄒人之所下以冒二天下之非笑一。忘三其身之陷二於罪戮一。呶二呶其言一。有レ不レ容レ已者也。

陷るを忘れ、其言を呶呶して已む容らざるもの有る所以の者なり。

㊀ 孟子盡心に對する朱子の解の如く、之を以て格物致知となさば、格物致知は卽ち誠意の工夫にて初學の士も正に勉むべき事ゆゑ、初學の士に對して心を盡し性を知り天を知る事卽ち聖人の生知安行の事を責むる譯になりて ㊂ 郊祀志に「求レ仙如レ繫レ風捕レ影、終不レ可レ得」とあり、空漠にして心のおき所なきに喩ふ ㊁ 孟子滕文公上篇の語、奔走して休息する時無きを謂ふ也 ㊃ しつかりと定りて ㊄ 拙者がといふ意、卑自の語

來書云。聞下語二學者一乃謂二卽レ物窮レ理之說。亦是玩レ物喪一レ志。又取下其厭レ繁就レ約。涵二養本原一數說上。標二示學者一。指爲二晚年定論一。此亦恐非。

來書に云ふ、『學者に語つて、㊀乃ち物に卽き理を窮むるの說は、亦是れ物を玩びて志を喪ふと謂ひ、又其の繁を厭ひ約に就き本原を涵養する㊁數說のみを取りて、學者に標示し、指して晚年の定論と爲すと聞く。此れ亦恐くは非ならん。』

㊀ 陽明が學習者に語りて朱子の格物窮理の說は書經に所謂玩物喪志なり」と謂ふ ㊁ 朱子文集中よりこれ等の議說を取りて陽明自ら朱子晚年定論の一書となして學者に示す

日尚未レ知レ有二天命一也。事レ天雖二與レ天爲一レ二。然已眞知二天命之所一レ在。但惟恭二敬奉三承之一而已耳。若二俟レ之云者一。則尚未レ能三眞知二天命之所一レ在。猶二有レ所レ俟者一也。故曰。所二以立一レ命。立者創立之立。如二立レ德立レ言立レ功立レ名之類一。凡言レ立者。皆是昔未二嘗有一。而今始建立之謂。孔子所レ謂不レ知レ命無三以爲二君子一者也。故曰。此困知勉行。學者之事也。

する事あるが故也 (二) 之を存するも尚は不可なる點あり、而るを殀壽二にせざらんとするを以て其性を盡すといふべけんや (四) 俟つは何れかよりいつかは來らんと其來るを俟つ意にて、これ未だ眞に天命の所在を知らざる也 (五) 孟子盡心篇に「殀壽不レ貳修レ身以俟レ之所二以立一レ命也」 (六) 論語堯曰篇に出づ

今以二盡レ心知レ性知一レ天。爲二格物致知一。使下初學之士尚未レ能レ不レ貳二其心一者。而遽責レ之以二聖人生知安行之事一。如二捕レ風提一レ影。茫然莫レ知レ所レ措二其心一。幾何而

今(一)心を盡し性を知り天を知るを以て、格物致知と爲さば、初學の士の尚ほ未だ其心を貳にせざる能はざる者をして、遽かに之を責むるに聖人の生知安行の事を以てして、(二)風を捕へ影を捉ふるが如く、茫然として其心を措く所を知る莫からしめん。幾何にして(三)天下を率ゐて路にするに至らざらん。今世の致知格物の弊も亦居然(四)として見る可し。吾子が所謂外を務め内を遺れ、博くして要寡き者も、乃ち亦是過なる無からんか。此れ學問の最緊要の處にして、此に於て差はゞ、將に往くとして差はざる無からんとす。此れ(五)鄙人の天下の非笑を冒し、其身の罪戮に

不ㇾ存。則存ㇾ之而已。今使二之殀壽不ㇾ貳。是猶以二殀壽一貳二其心一者也。猶以二殀壽一貳二其心一。是其爲ㇾ善之心。猶未ㇾ能ㇾ一也。存ㇾ之尙有ㇾ所ㇾ未ㇾ可。而何盡ㇾ之可ㇾ云乎。今且使丁之不ㇾ可以二殀壽一貳乙其爲ㇾ善之心甲若ㇾ曰下死生殀壽。皆有二定命一。吾但一二心於爲ㇾ善。修二吾之身一。以俟二天命一而已上。是其平

其の善を爲すの心猶ほ未だ一なる能はざるなり。（三）之を存するも尙ほ未だ可ならざる所有り、而るを何ぞ之を盡すと云ふ可けんや。今且つ之をして殀壽を以て其の善を爲すの心を貳にせざらしむるは、『死生・殀壽皆定命有り、吾は但だ心を善を爲すに一にして、吾の身を修めて以て天命を俟つのみ』と曰ふが若し。是れ其平日尙ほ未だ天命有るを知らざるなり。天に事ふるは天と二たりと雖も、然れども已に眞に天命の在る所を知る。但だ惟だ之を恭敬奉承するのみ。之を俟つ（四）と云ふ者の若きは、則ち尙ほ未だ眞に天命の在る所を知る能はざること、猶ほ俟つ所有る者のごときなり。故に曰く、（五）『命を立つる所以なり』と。立つるとは創立の立にして、德を立て、言を立て、功を立て、名を立つるの類の如し。凡そ立と言ふは皆是れ昔は未だ嘗て有らざりしを、今始めて建立するの謂にして、（六）孔子の所謂命を知らざれば以て君子と爲す無き者也。故に曰く、『此れ困知勉行は學者の事なり』と。

（一）時に心の存せざる事あれば只功を加へて之を存するのみ　（二）殀壽二にせざらしむるは殀壽を以て其心を二に

自無レ不レ存。然後可二以進一而言レ盡。蓋知レ天之知。如三知州知縣之知一。知州則一州之事皆已事也。知縣則一縣之事皆已事也。是與レ天爲レ一者也。事レ天則如三子之事二父。臣之事一レ君。猶與レ天爲レ二也。天之所三以命二於我一者。心也。性也。吾但存レ之而不二敢失一。養レ之而不二敢害一。如三父母全而生レ之。子全而歸二之者也。故曰。此學知利行賢人之事也。

知利行は賢人の事なり』と。

(一) 心の本體は性にて、其性は天に出づ、所謂天命之謂性也 (二) 心の放散せざる樣に之を存する者は (三) 存するの功を加ふる事久しければ、わざ〳〵存せんとせずとも自然に存する事となる (四) 天を知るの知るは知州知縣（地方官）の州を知り縣を知るといふ其知ると同義也 (五) 州を治め知るとなれば其治め知る一州の事は悉く己の事也 (六) この意味にて言へば天の事は悉く我が事にて我と天と一たる也 (七) 天が上に在り我が下に在りて、下なる我が上なる天に事ふる譯にて、天と我と二たる也

至二於殀壽不一レ貳。則與下存二其心一者上又有レ間矣。存二其心一者。雖レ未レ能レ盡二其心一。固已一二心於爲一レ善。時有レ

殀壽貳にせざるに至りては、則ち其心を存する者と又間有り。其心を存する者は、未だ其心を盡す能はずと雖も、固より已に心を善を爲すに一にす。(一)時に存せざること有れば則ち之を存するのみ。(二)今之をして殀壽貳にせざらしむるは、是れ猶ほ殀壽を以て其心を貳にする者なり。猶ほ殀壽を以て其心を貳にするは、是れ

夫心之體性也。性之原天也。能盡二其心一是能盡二其性一矣。中庸云。惟天下至誠。爲三能盡二其性一。又云。知二天地之化育一。質二諸鬼神一。而無レ疑知レ天也。此惟聖人而後能然。故曰。此生知安行聖人之事也。存二其心一者。未レ能レ盡二其心一者也。故須レ加二存レ之之功一。必存レ之既久。不レ待二於存一而

夫れ心の體は性なり、性の原は天なり。能く其心を盡すは是れ能く其性を盡すなり。(一)中庸に云ふ、『惟だ天下の至誠のみ能く其性を盡すを爲す』と。又云ふ、『天地の化育を知り、諸を鬼神に質して疑無きは天を知るなり』と。此れ惟だ聖人にして而して後に能く然り。故に曰く、『此れ生知安行は聖人の事なり』と。(二)其心を存する者は未だ其心を盡す能はざる者なり。故に須らく之を存するの功を加ふべし。(三)必ず之を存すること既に久しければ、存することを待たずして自ら存せざる無し。然して後に以て進んで盡すと言ふ可し。(四)蓋し天を知るの知は、州を知り縣を知るの知の如し。(五)州を知れば則ち一州の事は皆己が事なり。縣を知れば則ち一縣の事は皆己が事なり。(六)是れ天と一たる者なり。天に事ふるは則ち子の父に事へ、臣の君に事ふるが如し。(七)猶ほ天と二たるなり。天の我に命ずる所以の者は、心なり、性なり。吾但だ之を存して敢て失はず、之を養うて敢て害はず、父母全うして之を生み、子全うして之に歸するが如き者なり。故に曰く、『此れ學

致。以存心養性事天。爲誠意正心修身。以殀壽不貳修身以俟。爲知至仁盡聖人之事。若鄙人之見則與朱子正相反矣。夫盡心知性知天者。生知安行聖人之事也。存心養性事天者。學知利行賢人之事也。殀壽不貳修身以俟者。困知勉行學者之事也。豈可專以盡心知性爲知。存心養性爲行乎。吾子驟聞此言。必又以爲大駭矣。然其間實無可疑者。一爲吾子言之。

の事なり。心を存し性を養ひ天に事ふる者は學知利行にして賢人の事なり。殀壽貳にせず身を修めて以て俟つ者は困知勉行にして學者の事なり。豈に專ら心を盡し性を知るを以て知となし、心を存し性を養ふを行と爲す可けんや。吾子驟かに此言を聞かば、必ず又以て大駭を爲さん。然れども其間實に疑ふ可き者無し。一たび吾子の爲に之を言はん。

(一) 原漢文を訓讀する時は既に見解の差によりて其訓じ方相異なれども原漢文そのまゝにて見る時、そこに二樣の見解立つべし、此語陽明の見解に從へば卽ち可、朱子の見解にては卽ち不可、故に「此語然矣」といひ、更に「然而」と反戾して其蒙を啓く也 (二) 汝が此語を言ふ意をおしきはむるに (三) 朱子の學庸に對する見解斯の如し (四) 鄙人は自己の卑稱。拙者の見解は全く朱子と正反對也 (五) 孟子盡心上の第一節に說く所を以て、聖人分上、賢人分上、學者分上となして中庸の生知安行、學知利行、困知勉行に配すること、これ陽明の見解にして前にも見ゆ (六) 朱子の知と行とに分ちて見るの說を排す

來書云。所レ釋大學古本。謂レ致二其本體之知一。此固孟子盡心之旨。朱子亦以二虛靈知覺一爲二此心之量一。然盡レ心由二於知レ性。致レ知在二於格レ物。

盡レ心由二於知レ性。致レ知在二於格レ物。此語然矣。然而推二本吾子之意一。則其所三以爲二是語一者。尚有レ未レ明也。朱子以二盡レ心知レ性知レ天。爲二物格知

來書に云ふ、『釋(一)する所の大學古本に、其本體の知を致すと謂へるは、此れ固より孟子盡心の旨なり。朱子も亦虛靈知覺(二)を以て此心の量と爲す。然るに(三)心を盡すは性を知るに由り、知を致すは物に格るに在りとす。』

(一) 陽明が解釋する所の古本大學　(二) 本體の知は卽ち良知也、陽明の致良知は固より孟子盡心知性の旨に外ならずと也　(三) これ孟子盡心に對する朱子の說也

『心を盡すは性を知るに由り、知を致すは物に格るに在りとす』と。此語然り(一)。然れども吾子(二)の意を推本するときは、則ち其の是語を爲す所以の者は、尚ほ未だ明かならざるもの有るなり。朱子は心を盡し性を知り天を知るを以て物格知致と爲し、心を存し性を養ひ天に事ふるを以て誠意・正心・修身と爲し、殀壽貳にせず(三)身を修めて以て俟つを以て知至り仁盡くる聖人の事と爲せり。鄙人(四)の見の若きは、則ち朱子と正に相反す。夫れ(五)心を盡し性を知り天を知る者は生知安行にして聖人

雖散在萬事。而實不外乎一人之心。是其一分一合之間。而未免已啓學者心理爲二之弊。此後世所以有專求本心遂遺物理之患。正由不知心即理耳。夫外心以求物理。是以有闇而不達之處。此告子義外之說。孟子所以謂之不知義也。心一而已。以其全體惻怛而言謂之仁。以其得宜而言謂之義。以其條理而言謂之理。不可外心以求仁。不可外心以求義。獨可外心以求理乎。外心以求理。此知行之所以二也。求理於吾心。此聖門知行合一之教。吾子何疑乎。

即理を知らざるに由るのみ。夫れ心を外にして以て物理を求む。是を以て、『闇く(四)して達せざる處有り。』此れ告子義外の説(五)にして、孟子が之を義を知らずと謂ひし所以なり。心は一のみ。其全體惻怛(六)を以て言へば之を仁と謂ひ、其宜しきを得るを以て言へば之を義と謂ひ、其條理を以て言へば之を理と謂ふ。心を外にして以て仁を求む可からず、心を外にして以て義を求む可からず。獨り心を外にして以て理を求む可けんや。心を外にして以て理を求む、(七)此れ知行の二となる所以なり。理を吾が心に求むるは、此れ聖門知行合一の教なり。吾子又何ぞ疑はんや。

(一) 朱子の號 (二) 此説大學或問に見ゆ (三) 朱子は此説に於て理と心と畢竟一なるが如く説けども、初めに心と理と二つに分ちて説く、即ち一たびは分ち一たびは合はせて説くが故に、なほ學者が心と理とを分ちて二となすの弊を啓發するを免れず (四) 前出の來書の語を以ていふ (五) 孟子告子上篇に出でたる仁内義外の説をいふ (六) 心の全體惻隱よりいへば仁と謂ひ (七) 心を外にして理を求むるが即ち知行分れて二となる所以也

喫緊救レ弊而發。然知行之體本來如レ是。非下以二己意一抑二揚其間。姑爲二是說一以苟二一時之效一者上也。專求二本心一遂遺二物理。此蓋失二其本心一者也。夫物理不レ外二於吾心。外二吾心一而求二物理。無二物理一矣。遺二物理一而求二吾心。吾心又何物邪。心之體性也。性即理也。故有二孝レ親之心。即有二孝之理。無二孝レ親之心。即無二孝之理一矣。有二忠レ君之心。即有二忠之理。無二忠レ君之心。即無二忠之理一矣。理豈外二於吾心一邪。

れば即ち忠の理有り。君に忠するの心無ければ即ち忠の理無し。理豈に吾が心に外ならんや。

(一)知行全く一本の二面なるをいふ　(二)知と行とをはつきりと二つの事になして功を用ふるが爲めに知行の本體を失ふ　(三)知行合一知行並進の說ある所以　(四)親切に時弊を救ひて起りたる說なれども　(五)私意を以て殊更に知を抑へ行を揚ぐるが如き事をなして姑く此合一並進の說を爲して、一時的の效果を收めて甘んずる如き譯のものに非ず　(六)心外理なきを說く

晦庵謂。人之所二以爲一レ學者。心與レ理而已。心雖レ主二乎一身。而實管二乎天下之理。理

(一)晦庵謂へり、『(二)人の學を爲す所以の者は心と理とのみ。心一身に主たりと雖も、而も實に天下の理を管す。理は萬事に散在すと雖も、而も實に一人の心に外ならず』と。是れ其一分一合の間にして、未だ已に學者の心理を二と爲すの弊を啓くを免れず。此れ(三)後世專ら本心を求めて遂に物理を遺するの患有る所以、正に心

知行竝進之成法哉。

知之眞切篤實處。即是行。行之明覺精察處。即是知。知行工夫本不可離。只爲後世學者分作兩截用功。失却知行本體。故有合一竝進之說。眞知即所以爲行。不行不足謂之知。即如來書所云。知食乃食等說可見。前已略言之矣。此雖

(一)知の眞切篤實の處は即ち是れ行にして、行の明覺精察の處は即ち是れ知なり。知行の工夫は本離る可からず。只だ後世の學者分ちて(二)兩截と作して功を用ふるを爲して、知行の本體を失却す。故に(三)合一竝進の說有り。眞知は即ち行たる所以にして、行はずんば之を知と謂ふに足らず。即ち來書に云ふ所の食を知りて乃ち食ふ等の說の如き見る可し。前に已に略ゝ之を言へり。此れ(四)喫緊に弊を救ひて發すと雖も、然も知行の體は本來是の如し、(五)己が意を以て其間に抑揚し、姑く是の說を爲し以て一時の效を苟もする者に非ざるなり。『專ら本心を求めて遂に物理を遺す』とは、此れ蓋し其本心を失へる者なり。(六)夫れ物理は吾が心に外ならず。吾が心を外にして物理を求むれば物理無し。物理を遺して吾が心を求むれば、吾が心又何物ぞや。心の體は性なり。性は即ち理なり。故に親に孝するの心有れば即ち孝の理有り。親に孝するの心無ければ即ち孝の理無し。君に忠するの心有

即是意。即是行之始矣。路岐之險夷。必待二身親履歷一而後知。豈有下不レ待二身親履歷一而已先知二路岐之險夷一者上邪。知レ湯乃飲。知レ衣乃服。以レ此例レ之。皆無レ可レ疑。若如二吾子之喩一。是乃所レ謂不レ見二是物一而先有二是事一者矣。吾子又謂此亦毫釐倏忽之間。非レ謂二截然有一レ等。今日知レ之而明日乃行一也。是亦察レ之尚有レ未レ精。然就レ如二吾子之說一。則知行之爲二合一並進一。亦自斷無レ可レ疑矣。

夷とは身自ら其地をふみて始めて知るべし (四) これ等の例より推して考ふれば (五) 却つて來書に謂ふ所の

來書云。眞知即所二以爲一レ行。不レ行不レ足レ謂二之知一。此爲二學者一喫緊立レ教。俾レ務二躬行一則可。若眞謂二行即是知一。恐其專求二本心一。遂遺二物理一。必有二闇而不一レ達之處一。抑豈聖門

來書に云ふ、『(一)眞知は即ち行たる所以にして、行はずんば之を知と謂ふに足らずと。(二)此れ學者の爲に喫緊に教を立て、躬行を務めしむるは則ち可なるも、若し眞に行は即ち是れ知なりと謂はゞ、恐らく其れ專ら本心を求めて遂に物理を遺し、必ずや闇くして達せざるの處有らん。(三)抑ゝ豈に聖門の知行並進の成法ならんや。』

(一) これ即ち陽明の知行合一說也 (二) 問者之を敷していふ、これ學ぶ者の爲めに親切にしつくりと教を立て躬行を務めしむる事よりいへば可なるも、眞の學說としては、專ら自己の本心を求めて外界萬物の理を遺れ、闇くして達せざる所あらんと也 (三) 如何でかこれが聖門に於ける知行並進の定りて動かざる法則たらんや

無二乃自相矛盾一已乎。知レ食乃食等說。此尤明白易レ見。但吾子爲二近聞一障蔽。自不レ察耳。夫人必有二欲レ食之心一。然後知レ食。欲レ食之心卽是意。卽是行之始矣。食味之美惡。必待レ入レ口而後知。豈有下不レ待レ入レ口。而已先知二食味之美惡一者上邪。必有二欲レ行之心一。然後知レ路。欲レ行之心

是れ行の始なり。食味の美惡は、必ず口に入るを待ちて而して後に知る。豈に口に入るを待たずして、已に先づ食味の美惡を知る者有らんや。必ず行かんと欲するの心有りて然して後に路を知る。行かんと欲するの心は卽ち是れ意にして、卽ち是れ行の始なり。路岐(四)の險夷は、必ず身親ら履歷するを待ちて而して後に知る。豈に身親ら履歷するを待たずして已に先づ路岐の險夷を知る者有らんや。湯を知りて乃ち飲み、衣を知りて乃ち服する、此を以て之を例するに、皆疑ふ可き無し。若し吾子の喩の如くんば、是れ乃ち所謂(五)是の物を見ずして先づ是の事有る者なり。吾子又謂へり、『此れ亦毫釐(六)倏忽の間にして、截然として等ありて、今日之を知り明日乃ち行ふと謂ふに非ざるなり』と。是れ亦之を察すること尚ほ未だ精しからざる有るなり。然れども吾子の說の如きに就くも、則ち知行の合一並進たること、亦自ら斷じて疑ふ可き無し。

(一) 前出來書を引いていふ　(二) 原文「不」の一字衍として削り譯す　(三) 近世の說にさへぎられて　(四) 路の險阻と平

之功。交發互發。內外本末一以貫レ之之道。然工夫次第。不レ能レ無二先後之差一。如二知食乃食。知レ湯乃飲。知レ衣乃服。知レ路乃行一。未レ有下不レ見二是物一。先有中是事上。此亦毫釐倏忽之間。非レ謂二有レ等今日知レ之。而明日乃行一也。

ち食ひ、湯を知りて乃ち飲み、衣を知りて乃ち服し、路を知りて乃ち行くが如く、未だ是の物を見ずして先づ是の事有ること有らず。此れ(二)亦毫釐倏忽の間にして、等(三)有りて、今日之を知り明日乃ち行ふと謂ふには非ざるなり。』

(一) 先生が仰せ聞けなされる所のといふ意　(二) 先づ物を見て此事あり、卽ち知行の先後の差ありといふ事なく、そはごく僅かの事ほんの瞬間の事にて　(三) 等差の意、此語の上に答文の如く截然の句を添ふれば意更に明かならん

既云二交養互發內外本末一以貫一レ之。則知行並進之說。無二復可一レ疑矣。又云。工夫次第不レ能レ不レ無二先後之差一。

既に、『交〻養ひ互〻發して內外本末一以て之を貫く』と云へば、則ち知行並進の說、復疑ふ可き無し。又云ふ、『(一)工夫の次第は先後の差無き(二)能はず』と。乃ち自ら相矛盾すること無きか。食を知り乃ち食ふ等の說、此れ尤も明白にして見易し。但だ吾子(三)近聞の爲に障蔽せられて自ら察せざるのみ。夫れ人は必ず食を欲するの心有り、然して後に食を知る。食を欲するの心は卽ち是れ意にして、卽ち

區區格致誠正之說。是就二學者本心日用事爲間一。體究踐履實地用レ功。是多少次第。多少積累在。正與二空虛頓悟之說一相反。聞者本無下求レ爲二聖人一之志上。又未三嘗講二究其詳一。遂以見レ疑。亦無レ足レ怪。若二吾子之高明一。自當二一語之下便瞭然一矣。乃亦謂二立レ說太高。用レ功太捷一。何邪。

(一)區區の格致誠正の說は、是れ學者の本心日用事爲の間に就きて、(二)體究踐履して實地に功を用ふること、是れ(三)多少の次第多少の累積在り。正に空虛頓悟の說と相反す。聞く者は本、聖人たるを求むるの志無く、又未だ嘗て其詳を講究せず。遂に以て疑はるゝは、亦怪むに足る無し。吾子の高明の若き、自ら一語の下に便ち瞭然たるべし。乃ち亦說を立つること太だ高く、功を用ふること太だ捷しと謂ふは何ぞや。

(一) 小なる貌、自己をいふ卑下の辭也、拙者などいふ意 (二) 己の身に考究して實際にふみ行ふ (三) 斯く實地に工夫を用ふるには多くの順序、多くの累積あり

來書云。所レ喩知行竝進。不レ宜レ分二別前後一。卽中庸尊二德性一而道二問學一

來書に云ふ、『(一)喩す所の知行竝進は宜しく前後を分別すべからずとは、卽ち中庸の德性を尊びて問學に道るの功にして、交〻養ひ互〻發し、內外本末一以て之を貫くの道なり。然れども工夫の次第は先後の差無き能はず。食を知りて乃

已一句道盡。復何言哉。復何言哉。若誠意之說。自是聖門教人用功第一義。但近世學者。乃作第二義看。故稍與提掇緊要出來。非鄙人所能特倡也。

なり。但だ近世(四)の學者は、乃ち第二義の看を作す。(五)故に稍〻與に緊要を提掇し出し來る、鄙人(六)が能く特に倡ふる所に非ざるなり。

(一) 現時の弊害　(二) 自己をいふ謙辭　(三) 大學古本は誠意を以て章の初めとす、即ち誠意は聖門にて人の功を用ふるを教ふる第一義となすもの　(四) 朱子は格物窮理を第一義として、誠意は第二義と看ると也　(五) 近世の學者この謬あるが故にや、世人の爲めに誠意の教の緊要なる所を取りて擧げ示すのみ　(六) これ古聖の言ふ所、特に余の能く倡ふる所に非ざる也

來書云。但恐立說太高。用功太捷。後生師傳影響謬誤。未免墮於佛氏明心見性定慧頓悟之機。無怪聞者見疑。

來書に云ふ、『但だ恐らくは說を立つること太だ高く、功を用ふること太だ捷く、後世師傳、影響(一)謬誤して、未だ佛氏の明心・見性・定慧・頓悟(二)の機に墮つるを免れず。聞く者に疑はるゝを怪むこと無けん。』

(一) 影や響を以て其實を捉へ得たりと謬り　(二) 明心は五種菩提の一なる明心菩提にて亦一種の見道也。見性とは一切の妄執をはなれて本來固有の眞性を見、以て成佛すとの意。定慧とは禪定と智慧となり、前者は意識を統一して其散亂を防ぎ、後者は一切の理を照らし、共に相依りて悟道に入らしむ。頓悟とは迅速に悟を開くこと

答聶文蔚之第一書。此皆仍元善所録之舊。而揭必有事焉。即致良知功夫。明白簡切。使人言下即得入手。此又莫詳於答文蔚之第二書。故增録之。元善當時洶洶。乃能以身明斯道。卒至遭奸被斥。油油然惟以此生得聞斯學爲慶。而絶無有纖芥憤鬱不平之氣。斯録之刻。人見其有功於同志甚大。而不知其處時之甚艱也。今所去取。裁之時義則然。非忍有所加損於其間也。

人の學を論ずるに答ふる書(一)

來書云。近時學者。務外遺內。博而寡要。故先生特倡誠意一義。鍼砭膏肓。誠大惠也。

吾子洞見時弊如此矣。亦將何以救之乎。然則鄙人之心吾子固

來書に云ふ、『近時の學者は、外(二)を務め内を遺し、博(三)くして要寡し。故に先生特に誠意の一義を倡へて膏肓(四)に鍼砭す。誠に大なる惠なり。』

(一) 蓋し顧東橋に與へし書にて先生五十四才の時なるべしといふ　(二) 外面皮相の見識に專らにして内心の涵養をわすれ　(三) 博く識りて要領を捉ふる事寡し　(四) 膏肓は心臓の上下の穴。最も難治の病を療するをいふ

吾子時弊(一)を洞見すること此の如し。亦將に何を以てか之を救はんとする。然らば則ち鄙人(二)の心は吾子固より已に一句に道ひ盡せり。復何をか言はんや。復何をか言はんや。誠意の説の若きは、自ら是れ聖門(三)、人の功を用ふるを教ふる第一義

地一。莫レ詳下於答二羅整庵一書上。平生冒二天下之非詆一。推二陷萬死一生一。遑遑然不レ忘二講學一。惟恐下吾人不レ聞二斯道一。流二於功利機智一。以日墮二於夷狄禽獸一。而不上レ覺二其一體同物之心一。譊譊終レ身。至二於斃一而後已。此孔孟以來賢聖苦心。雖二門人子弟一。未レ足三以慰二其情一也。是情也。莫レ詳下於

を以て慶と爲し、而して絶えて纎芥の憤鬱不平の氣有ること無し。(一八)斯の錄の刻、(一九)人、其の同志に功有る甚だ大なるを見るも、而も其の時に處するの甚だ艱かりしを知らず。今去取(二〇)する所は、之を時義に裁して則ち然り。(二一)其間に加損する所有るを忍ぶに非ざるなり。

(一) 德洪、姓は錢氏名は寬、緖山と號す、陽明門下の高弟也。此一文は德洪の小序にて、南元善の撰定せる所を增損して此卷を成したる所以を述ぶる也 (二) 書簡 (三) 朱子の學說を是とし陸象山の學說を非とす (四) 二說を調停し彼此共に可とするの說 (五) 元善が此二書を摘錄して下卷のはじめに置きたるは、亦人をして思うて自ら得しむるの意か (六) 今日にては二氏の學說の辨別天下に明かなること久し (七) 徐成之に答ふる二書は全書外集第五に載せたり、斯く此書を外集に收めたるは未全のものにて王氏の眞の本旨に非ざるを示す也 (八) 以上四つの書簡 (九) そしりを意とせず (一〇) 非常に危き場合に限りても (一一) 安からざる貌、只講習に之れいとまなしと也 (一二) 功利術數の如き異端の學に流れ、日に夷狄禽獸の如くなり行きて、其天地萬物と一體なる本心を覺らざるを恐る (一三) 多言の貌、かまびすしく道を說きて止まずと也 (一四) 言ふそばから直ちに手を入れ得る如く明白簡明なるは (一五) 水の涌き立つ貌、世の非難の沸騰せるに喩ふ (一六) 年譜に、嘉靖五年四月大吉入覲して時に黜けらると見ゆ (一七) 從容として迫らざる貌 (一八) 少しも憤りて平かなる氣ある事なし (一九) 元善の越に於ける傳習錄の刻 (二〇) 今此書に於て元善の錄中より或は去り或は取る所あるは今日の時節に應ぜんが爲めのみ (二一) 敢て忍びて之を加損したる譯には非ず

爾可之說。使ニ人自思得レ之。故元善錄爲ニ下册之首一者。意亦以レ是歟。今朱陸之辨明ニ於天下一久矣。洪刻ニ先師文錄一。置ニ二書於外集一者。示レ未レ全也。故今不ニ復錄一。其餘指ニ知行之本體一。莫レ詳下於答ニ人論レ學。與中答ニ周道通。陸淸伯。歐陽崇一ニ四書上。而謂ニ格物一。爲ニ學者用レ力日可レ見之

て格物を謂ひて、學者の力を用ひて日に見る可きの地と爲すは、羅整庵に答ふる一書より詳かなるは莫し。平生天下の非詆(九)を冒し、(一〇)萬死一生に推陷し、遑遑(一一)然として講學を忘れず、惟だ吾人が斯道を聞かずして(一二)功利機智に流れ、以て日に夷狄禽獸に墮ちて其一體同物たるの心を覺らざるを恐る。(一三)譊譊として身を終へ、斃るゝに至りて後已む。此れ孔孟以來賢聖の苦心せしところ、門人子弟と雖も未だ以て其情を慰むるに足らず。是の情たる、聶文蔚に答ふるの第一書より詳かなるは莫し。此れ皆元善が錄する所の舊に仍る。而して必ず事有る、即ち良知を致すの功夫なるを揭げ、明白簡切にして、人をして(一四)言下に即ち手を入るゝことを得しむるは、此れ又文蔚に答ふるの第二書より詳かなるは莫し。故に之を增錄す。元善當時(一五)洶洶たりしに、乃ち能く身を以て斯道を明かにす。卒に奸に遭ひ(一六)斥けらるゝに至りて、(一七)油油然として惟だ此生斯學を聞くとを得る

德洪曰。昔南元善刻二傳習錄於越一。凡二册。下册摘二錄先師手書一。凡八篇。其答二徐成之二二書。吾師自謂。天下是レ朱非レ陸。論定既久。一旦反レ之爲レ難。二書姑爲二調停

卷之中

德洪(一)曰く、昔南元善傳習錄を越に刻す。凡て二册。下册は先師の手書(二)を摘錄すること凡て八篇。其の徐成之に答ふる二書は、吾が師自ら謂ふ、「天下朱(三)を是とし陸を非とす、論定ること既に久し、一旦にして之を反すこと難しと爲す」と。二書は姑く調停(四)兩可の說を爲し、人をして自ら思うて之を得しむ。故に元(五)善が錄して下册の首と爲す者は、意亦是を以てか。(六)今朱陸の辨天下に明かなること久し。洪、先師の文錄を刻し、二書(七)を外集に置く者は、未だ全からざるを示すなり。故に今復た錄せず。其餘、知行の本體を指すは、人の學を論ずるに答ふと、周道通・陸清伯・歐陽崇一に答ふとの四書(八)より詳かなるは莫し。而し

始有二下落一。即爲レ善去レ惡。無レ非二是誠意的事一。如二新本一。先去レ窮二格事物之理一。即茫茫蕩蕩都無二著落處一。須レ用二添箇敬字一。方才牽扯得向二身心上一來。然終是沒二根源一。若須レ用二添箇敬字一。緣レ何孔門倒將二一箇最緊要的字一落了。直待二千餘年後一。要二人來補出一。正謂以二誠意一爲レ主。即不レ須レ添二敬字一。所以提二出箇誠意一來說。正是學問的大頭腦處。於レ此不レ察。眞所レ謂毫釐之差千里之繆。大抵中庸工夫。只是誠身。誠身之極。便是至誠。大學工夫。只是誠意。誠意之極。便是至善。工夫總是一般。今說下這裏補二箇敬字一。那裏補中箇誠字上。未レ免二畫レ蛇添一レ足。（右尚謙所錄）

なり。此に於て察せざれば、眞に所謂毫釐の差千里の繆とならん。大抵中庸の工夫は只だ是れ誠身にして、誠身の極は便ち是れ至誠なり。大學の工夫は只だ是れ誠意にして、誠意の極は便ち是れ至善なり。工夫は總て是れ一般なり。今這の裏に箇の敬の字を補ひ、那の裏に箇の誠の字を補ふと說くは、未だ蛇を畫きて足を添ふるを免かれず。』

右尚謙の錄する所（九）

（一）朱子改定の大學、陽明のよしとする古本大學に對して新本と謂ふ也 （二）其說大學首章に立てたる順序と合するが如し （三）手を下すべき處あり （四）先きにまづ物事の理を窮めて掛る事となれば、とめどなく締めくゝりなくして工夫を下すべき所なし （五）朱子が大學或問に說く所の意也、所謂居敬窮理これ也 （六）ひつさげ得ての意 （七）孔門の人が一番大切の字を落して千餘年の後朱子の來りて補ふを待つ筈なし （八）孔門にては誠意を主とすれば別に敬の字を添ふる要なしと思へる也 （九）欄外書に曰く「南本、右門辭人況錄に作る」

蔡希淵問。文公大學新本。先二格致一而後二誠意工夫一。似下與二首章次第一相合上。若如下先生從二舊本一之說上。卽誠意反在二格致之前一。於レ此尙未二釋然一。先生曰。大學工夫卽是明明德。明明德只是箇誠意、誠意的工夫。只是格物致知。若以二誠意一爲レ主。去レ用二格物致知的工夫一。卽工夫

蔡希淵問ふ、『文公の大學新本には格致を先にして誠意の工夫を後にす。首章（二）の次第と相合するに似たり。若し先生の舊本に從ふ說の如き、卽ち誠意は反つて格致の前に在り。此に於て尙ほ未だ釋然たらず。』先生曰く、『大學の工夫は卽ち是れ明明德にして、明明德は只だ是れ箇の誠意なり。誠意の工夫は只だ是れ格物致知なり。若し誠意を以て主と爲し、格物致知の工夫を用ひば、卽ち工夫始めて下（三）落有り。卽ち善を爲し惡を去るは、是れ誠意の事に非ざる無し。新本の如く、先（四）づ事物の理を窮格し去れば、卽ち茫茫蕩蕩として都て著落する處無し。須らく（五）箇の敬の字を用ひ添ふべく、方に才かに牽扯（六）し得て身心上に向ひ來る。然れども終に是れ根源を沒す。若し須らく箇の敬の字を用ひ添ふべしとせば、何に緣りてか孔門（七）倒つて一箇の最緊要の字を將つて落し了り、直に千餘年の後を待ち、人の來り補ひ出すを要せんや。正（八）に謂へらく誠意を以て主と爲さば卽ち敬の字を添ふるを須ひずと。所以に箇の誠意を提出し來り說く、正に是れ學問の大頭腦の處

範上㆒疎闊㆖。須㆘是要㆛放㆓鄭聲㆒遠㆚佞人㆙。蓋顏子這箇克㆑己向㆑裏德上用㆑心的人。孔子恐㆔其外面末節或有㆓疎略㆒。故就㆓他不㆑足處㆒。幫補說。若在㆓他人㆒。須㆔告以㆓爲㆑政在㆑人。取㆑人以㆑身。修㆑身以㆑道。修㆑道以㆑仁。達道九經及誠身許多工夫㆒。方始做㆓得這箇㆒。方是萬世常行之道。不㆑然只去行㆓了夏時㆒。乘㆓了殷輅㆒。服㆓了周冕㆒。作㆓了韶舞㆒。天下便治得。後人但見㆔顏子是孔門第一人。又問㆓箇爲㆑邦。便把做㆓天下大事㆒看了。

(一二)夏の時を行ひ、殷の輅に乘り、周の冕を服し、韶の舞を作すとも、天下を便ち治め得んや。後人但だ顏子の是れ孔門第一の人なると、又箇の邦を爲むるを問へるとを見、便ち把りて天下の大事と做し看たるなり。』

(一) 論語衞靈公篇に見ゆ (二) 聖人の德を身に具備す (三) 國家を治むるについての形式枝葉の問題。下文に謂ふ所也 (四) これら制度文爲上の事もおろそかにすべからず (五) 自分の大本大原が其よろしきに當り居るとてそれに因りて防範上におろそかにする如き事あるべからず。防範は防禦の方法にて、不正を防ぎて心の理を守り全うする工夫をいふならん (六) 論語衞靈公篇の文を以て答ふ、卽ち「顏淵問㆑爲㆑邦、子曰、行㆓夏之時㆒乘㆓殷之輅㆒服㆓周之冕㆒樂則韶舞、放㆓鄭聲㆒遠㆓佞人㆒鄭聲淫、佞人殆(アヤフシ)」 (七) 內心に向ひ常に心を德の涵養に用ふる人なれば (八) たすけ補ひて (九) 中庸第二十章哀公の政を問へるに對する孔子の答を引く (一〇) 同章の天下之達道五卽ち君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友と、天下國家を爲むるの九經卽ち脩㆑身・尊㆑賢・親㆑親・敬㆓大臣㆒・體㆓羣臣㆒・子㆓庶民㆒・來㆓百工㆒・柔㆓遠人㆒・懷㆓諸侯㆒ (一一) 前掲論語の文に取る

黄誠甫問。先儒以₌孔子告₌顔淵爲ㇾ邦之問₋。是立₌萬世常行之道₋。如何。先生曰。顔子具₌體聖人₋。其於₌爲ㇾ邦的大本大原₋。都已完備。夫子平日知ㇾ之已深。到ㇾ此都不₌必言₋。只就₌制度文爲上₋說。此等處亦不ㇾ可₌忽略₋。須ㇾ要₌是如ㇾ此。方盡ㇾ善。又不ㇾ可下因₌自己本領是當了₋。便於₌防

黄誠甫問ふ、『先儒（一）は孔子が顔淵の邦を爲めんの問に告げしを以て、是れ萬世常行の道を立つと。如何。』先生曰く、『顔子は聖人を具體（二）す。其の邦を爲むるの大本大原に於ては都て已に完備せり。夫子は平日之を知ること已に深ければ、此に到り都て必ずしも言はず、只だ制度文爲（三）の上に就きて說けり。此等の處も亦忽略にす可からず。須らく是れ此の如くなさんを要し、方に善を盡（四）すべし。又自（五）己の本領是當し了るに因りて、便ち防範上に於て疎闊にす可からず。須らく是れ鄭聲（六）を放ち佞人を遠ざくるを要すべし。蓋し顔子は這箇の己に克ち裏（七）に向ひ德上に心を用ふるの人なれば、孔子は其外面末節に或は疎略有らんことを恐る。故に他の足らざる處に就きて幇補（八）し說けり。若し他人に在らば、須らく告ぐるに、政を爲すこと人に在り（九）、人を取るに身を以てし、身を修むるに道を以てし、道を修むるに仁を以てす、達道（一〇）・九經及び誠身の許多の工夫を以てすべし。方に始めて這箇を做し得て、方に是れ萬世常行の道なり。然らずして只だ去つて

人率レ性而行。即是道。聖人以下未レ能レ率レ性。於レ道未レ免レ有二過不及一。故須レ修レ道。修レ道則賢知者。不二得而過一。愚不肖者不二得而不一レ及。都要レ循二著這箇道一。則道便是箇教。此教字與二天道至教風雨霜露無レ非レ教也之教一同。修レ道字與二修レ道以一レ仁同。人能修レ道。然後能不レ違二於道一。以復二其性之本體一。則亦是聖人率レ性之道矣。下面戒愼恐懼便是修レ道的工夫。中和便是復二其性之本體一。如三易所レ謂窮レ理盡レ性以至二於命一。中和位育便是盡レ性至レ命。

く道を修め、然して後に能く道に違はず、以て其性の本體に復するときは、則ち亦是れ聖人の性に率ふの道なり。(八)下面の戒愼恐懼は便ち是れ道を修むるの工夫にして、(九)中和は便ち是れ其性の本體に復るなり。易に所謂理を窮め性を盡して以て命に至るの如き、(一〇)中和位育は便ち是れ性を盡して命に至るなり。』

(一) 中庸に說く所の性・道・敎は皆本源より說ける也 (二) 天の命が人に下れば、命はやがて之を性と謂ひ、性のままに行つて行けば、性はやがて之を道といひ、道を修めて學べば、道はやがて之を敎といふ、畢竟性・道・敎は一體の本源に出づ (三) 中庸の「誠者不レ勉而中、不レ思而得、從容中レ道、聖人也、誠レ之者、擇レ善而固執レ之者也」による (四) 亦中庸に「自レ誠明謂二之性一自レ明誠謂二之敎一、誠則明矣、明則誠矣」を指す (五) 賢知愚不肖の者も過不及なきを得 (六) 禮記仲尼閒居の語 (七) 中庸第二十章に「脩レ身以レ道脩レ道以レ仁」とあるをいふ (八) 下文の (九) 中庸の首章「致二中和一天地位焉、萬物育焉」とある其中和の說明也 (一〇) 上揭中庸の文の略也、中和を致して天地位し萬物育すといふは、やがてこれ性を盡して命に至る也

先儒之説。下面由レ教入レ道的。緣レ何舍二了聖人禮樂刑政之教。別説二出一段戒愼恐懼工夫一。却是聖人之教爲二虛設一矣。

子莘請問。先生曰。子思性道教皆從二本原上一説。天命於レ人。則命便謂二之性一。率レ性而行。則性便謂二之道一。修レ道而學。則道便謂二之教一。率レ性是誠者事。所レ謂二自レ誠明謂二之性一也。修レ道是誠レ之者事。所レ謂自レ明誠謂二之教一也。聖

子莘請ひ問ふ。先生曰く、『(一)子思の性道教は皆本原上より說く。(二)天命人に於ては、則ち命は便ち之を性と謂ふ。性に率ひて行へば、則ち性は便ち之を道と謂ふ。道を修めて學べば、則ち道は便ち之を教と謂ふ。性に率ふは是れ(三)誠なる者の事、所謂(四)誠によりて明かなる之を性と謂ふ也。道を修むるは是れ之を誠にする者の事、所謂明かなるに自りて誠なる之を教と謂ふ也。聖人は性に率ひて行ふ、即ち是れ道なり。聖人以下は未だ性に率ふ能はず、道に於て未だ過不及有るを免れず。故に須らく道を修むべし。道を修むれば則ち(五)賢知の者は得て過ぎず、愚不肖の者は得て及ばざることあらず。都て這箇の道に循はんと要すれば、則ち道は便ち是れ箇の教なり。此教の字は、(六)天道・至教・風雨・霜露教に非ざる無しの教と同じ。道を修むるの字は、(七)道を修むるに仁を以てすと同じ。人能

馬子莘問。修レ道之敎舊說謂。聖人品ニ節吾性之固有一。以爲ニ法於天下一。若ニ禮樂刑政之屬一。此意如何。先生曰。道卽性卽命。本是完完全全。增減不レ得不レ假ニ修飾一的。何須ニ要聖人品節一。卻是不完全的物件。禮樂刑政是治ニ天下一之法。固亦可レ謂ニ之敎一。但不ニ是子思本旨一。若如ニ

馬士莘問ふ、『(一)道を修むるの敎舊說に謂く、(二)聖人は吾が性の固有を品節し、以て法を天下に爲す。禮樂刑政の屬の若しと。此意如何。』先生曰く、『(三)道は卽ち性卽ち命なり。本是れ完完全全なれば、增減し得ず、修飾を假らざるなり。何ぞ須らく聖人の品節を要せん。(四)卻つて是れ不完全の物件なり。禮樂刑政は是れ天下を治むるの法、固より亦之を敎と謂ふ可し。(五)但だ是れ子思の本旨ならず。若し先儒の說の如くんば、(六)下面の敎に由りて道に入るもの、何に緣りて聖人禮樂刑政の敎を舍て、別に一段戒愼恐懼の工夫を說き出さん。卻つて是れ聖人の敎は虛設と爲らん。』

(一) 中庸の「修レ道之謂レ敎」 (二) 朱子集註の文也 (三) 中庸に「天命之謂レ性、率レ性之謂レ道」といふ以上、道卽性卽命也 (四) 聖人の品節を要すとすれば卻つて道は不完全の物といふ譯になる也 (五) それは中庸を著はせる子思の本旨には非ず、自ら子思の所說とは別問題也 (六) 「修レ道之謂レ敎」とあるすぐ下に「道也者不レ可ニ須臾離一也、可レ離非レ道也、是故君子戒ニ愼乎其所レ不レ睹、恐ニ懼乎其所レ不レ聞」といへるもの、若し上文の敎の字が禮樂刑政を意味すとせば、何ぞそれを捨て丶別に戒愼恐懼の工夫を說き出さん、斯くては聖人の敎は虛設となる譯也

蕭惠問二死生之道一。先生曰。知二晝夜一即知二死生一。問二晝夜之道一。曰。知レ晝則知レ夜。曰。晝亦有レ所レ不レ知乎。先生曰。汝能知レ晝懵懵而興。蠢蠢而食。行不レ著。習不レ察。終日昏昏只是夢晝。惟息有レ養。瞬有レ存。此心惺惺明明天理無二一息間斷一。才是能知レ晝。這便是天德。便是通二乎晝夜之道一而知。更有二甚麼死生一。

蕭惠死生の道を問ふ。先生曰く、『晝夜を知らば即ち死生を知らん。』晝夜の道を問ふ。曰く、『晝を知らば則ち夜を知らん。』曰く、（一）『晝も亦知らざる所有りや。』先生曰く、『汝能く晝の（二）懵懵として興き蠢蠢として食するを知るのみ。行ひて著しからず習ひて察せず、終日昏昏として只だ是れ夢の晝なり。（三）惟だ息も養ふこと有り、瞬も存すること有り、（四）此心惺惺明明として天理一息の間斷無くして、才かに是れ能く晝を知る。這は便ち是れ天德にして、便ち是れ晝夜の道を通じて知るなり。（五）更に甚麼なる死生か有らん。』

（一）晝の事はよく分りて何の疑もなしと思へるを以て此問ある也　（二）行習に著察なく、只ぼんやりとして夢の如く過すのみ　（三）張横渠の語、一息一瞬の間も存養するありて　（四）此心常に明かにして、天理一息の間斷だになくして始めて眞に晝を知る也。惺々明々の語は有名なる瑞巖和尚の主人翁惺々の句にもとづく　（五）既に晝夜を通じ知れば、又その外に別に死生の理あるに非ず、晝夜は一の死生にして、死生は一生涯の晝夜也

問二我悔的一。惠漸謝請二問聖人之學一。先生曰。汝今只是了二人事問一。待三汝辨下箇眞要レ求レ爲二聖人一的心上來中。與レ汝說。惠再三請。先生曰。已與レ汝一句道盡。汝尙自不レ會。

劉觀時問。未發之中是如何。先生曰。汝但戒二愼不レ睹。恐二懼不レ聞。養二得此心一。純是天理。便自然見。觀時請三略示二氣象一。先生曰。啞子喫二苦瓜一。與レ爾說不レ得。爾要レ知二此苦一。還須二爾自喫一。時曰仁在レ傍曰。如レ此才是眞知卽是行矣。一時在レ座諸友皆有レ省。

劉觀時問ふ、『未發の中とは是れ如何。』先生曰く、『汝但だ睹ざるを戒愼し、聞かざるを恐懼し、此心を養ひ得て純ら是れ天理ならば、便ち自然に見ん。』觀時(一)略ゝ氣象を示さんことを請ふ。先生曰く、『(二)啞子の苦瓜を喫したるごとし、爾が與に說き得ず。(三)爾此苦を知らんと要せば、還つて須らく爾自ら喫すべし。』時に(四)曰仁傍に在りて曰く、『此の如くんば才かに是れ眞知卽ち是れ(五)行なり。』(六)一時座に在る諸友皆省る有り。

(一) 未發の中の大體の有様模樣を示されたし (二) 禪家の語、おしが苦瓜を食ひたる如し、心中に其苦味を解すれども人には語るべからず (三) 汝其苦味を知らんとせば自ら食ひ見るべし (四) 本書卷頭に敍せる陽明の門人徐愛の字 (五) 卽ち知行合一也 (六) 其時に、同時に

學。其後居レ夷三載。見ニ得聖人之學若レ是其簡易廣大一。始自嘆悔ニ錯用了三十年氣力一。大抵二氏之學。其妙與ニ聖人一只有ニ毫釐之間一。汝今所レ學乃其土苴。輒自信自好若レ此。眞鴟鴞竊ニ腐鼠一耳。惠請ニ問二氏之妙一。先生曰。向レ汝說ニ聖人之學簡易廣大一。汝却不レ問ニ我悟的一。只

嘆じて三十年の氣力を錯用(四)せしことを悔ゆ。大抵二氏の學たる、其妙聖人と只だ毫釐(五)の間に有り。汝が今學ぶ所は乃ち其土苴(六)なり。輒ち自ら信じ自ら好むと此の若きは、眞に鴟鴞腐鼠を竊む(七)のみ。』惠二氏の妙を請ひ問ふ。先生曰く、『汝に向ひて聖人の學の簡易廣大なるを說けるに、汝は却つて我が悟る(八)ものを問はずして、只だ我が悔ゆるものを問ふ。』惠慚謝(九)して聖人の學を請ひ問ふ。先生曰く、『汝は今只だ是人事(一〇)の問を了す。汝が箇の眞に聖人たらんと求むるを要するの心を辨じ來るを待ちて、汝の與に說かん。』惠再三請ふ。先生曰く、『已に汝の與に一句(一一)に道ひ盡したり。汝尙ほ自ら會せざるのみ。』

(一) 道家と佛氏との教　(二) 道家と佛氏　(三) 易の字、手輕にて而も廣く大なる意　(四) あやまり用ひし事　(五) ごく僅かの違ひ也、其根本の毫釐の差が遂に末には千里の違ひとなる也　(六) 糞草也、莊子に「道之眞以治レ身、其緒餘以爲ニ國家一、其土苴以治ニ天下一」こゝは汝の學ぶ所は眞の道に非ずとの意に喩へたる也　(七) 亦莊子秋水篇に出づ、汝が眞の大道に非ざる者を信じ好むは、恰も梟が腐りたる鼠をぬすみて大事になし居ると變りなしと也　(八) 卽ち聖人の大道　(九) 或は「慚謝」に作る　(一〇) 世間一通りの間、お座なりの質問といふ如き意、心から出でたる徹底的質問に非ざるをいふ　(一一) 「眞に聖人たらん事を求む」の一句を指すなるべし

的本體。戒㆓愼不㆑睹。恐㆓懼不㆑聞。惟恐㆔虧㆓損了他一些。才有㆓一毫非禮萌動。便如㆓刀割。如㆓針刺。忍耐不㆑過。必須去㆓了刀㆒拔㆓了針。這才是有㆓爲㆑己之心。方能克㆑己。汝今正是認㆑賊作㆑子。緣㆑何却說㆘有㆓爲㆑己之心㆒不㆑能㆑克㆑己。

くか。』

（一）眞己無ければ軀殼なし、即ち生死は眞己の有無による（二）眞に肉體の己の爲めにせんとせば、必ず眞の己を用ひざるべからず（三）中庸の語に本づく（四）眞己の少しをもきずつけじとすべし（五）刀にて切り割くごとく針をつき刺すが如く思ひて（六）佛家の語、妄見を以て眞覺と爲すの喩にいふ

有㆓一學者病㆑目。戚戚甚憂。先生曰。爾乃貴㆑目賤㆑心。

一學者の目を病む有り。戚戚（一）として甚だ憂ふ。先生曰く、『爾は乃ち目を貴び心を賤む。』

（一）いたみ憂ふる貌

蕭惠好㆓仙釋。先生警㆑之曰。吾亦自㆑幼篤㆓志二氏。自謂既有㆑所㆑得。謂㆓儒者㆒爲㆑不㆑足㆑

蕭惠仙釋（一）を好む。先生之を警めて曰く、『吾も亦幼より志を二氏（二）に篤くして、自ら謂へらく、既に得る所有りと。儒者を謂つて學ぶに足らずと爲す。其後夷に居ること三載、聖人の學の是の若く其れ簡易廣大（三）なるを見得て、始めて自ら

是性。便是天理。有這箇性。才能生這性之生理。便謂之仁。這性之生理發在目便會視。發在耳便會聽。發在口便會言。發在四肢便會動。都只是那天理發生。以其主宰一身。故謂之心。

這心之本體原只是箇天理。原無非禮。這箇便是汝之眞己。這箇眞己。是軀殼的主宰。若無眞己。便無軀殼。眞是有之即生。無之即死。汝若眞爲那箇軀殼的己。必須用著這箇眞己。便須常常保守著這箇眞己

這の心の本體は原只だ是れ箇の天理なれば、原、非禮無し。這箇は便ち是れ汝の眞己にして、這箇の眞己は是れ軀殼の主宰なり。若し眞己無くば便ち軀殼無し。眞に是れ之れ(一)有れば卽ち生き、之れ無ければ卽ち死す。汝若し眞に(二)那箇の軀殼の己の爲にせば、必ず須らく這箇の眞己を用ふべし。便ち須らく常常に這箇の眞己の本體を保守し、(三)睹ざるを戒愼し、聞かざるを恐懼して、(四)惟だ他の一些をも虧損せんことを恐るべし。纔かに一毫の非禮の萌し動くこと有らば、(五)則ち刀の割くが如く、針の刺すが如く、忍耐し過さず、必ず須らく刀を去り針を拔くべし。這の纔かに是れ己が爲にするの心有りて、方に能く己に克つ。汝今正に是れ(六)賊を認めて子と作す。何に縁りてか却つて己の爲にするの心有りて己に克つ能はずと說

汝心之視發㆓竅於口㆒。汝心之聽發㆓竅於耳㆒。汝心之言發㆓竅於口㆒。汝心之動發㆓竅於四肢㆒。若無㆓汝心㆒。便無㆓耳目口鼻㆒。所㆑謂汝心亦不㆓專是那一團血肉㆒。若是那一團血肉。如今已死的人那一團血肉還在。緣㆑何不㆑能㆓視聽言動㆒。所㆑謂汝心却是那能視聽言動的(一)這箇便

汝の心の視は(一)竅を目に發し、汝の心の聽は竅を耳に發し、汝の心の言は竅を口に發し、汝の心の動は竅を四肢に發す。若し汝の心無くんば、便ち耳目・口鼻無し。所謂汝が心も亦專ら是れ那の一團の血肉にあらず。若し是れ那の一團の血肉ならば、如今已に死せるの人も、那の一團の血肉還つて在るに、何に緣つて視聽言動すること能はざる。所謂汝の心は却つて是れ那の能く視聽言動するもの、這箇は便ち是れ性なり、便ち是れ天理なり。這箇の性有れば、才かに能く這の性の(二)生理を生ず。便ち之を仁と謂ふ。這の性の生理發して目に在れば便ち視ることを會くし、發して耳に在れば便ち聽くことを會くし、發して口に在れば便ち言ふことを會くし、發して四肢に在れば便ち動くことを會くす。都て只だ是れ那の天理の發生なり。(三)其の一身に主宰たるを以ての故に之を心と謂ふ。

㊀ 此語醫書より出づ、竅は穴也、心の聽が耳を穴として外に發す、即ち視聽言動は皆心のわざにて耳目の如きは之を發する道具に過ぎずと也 ㊁ 生生活動して息むことなき理 ㊂ 天理卽ち性が一身の主宰たる所より之を心と謂ふ

美味令二人口爽一。馳騁田獵令二人發一レ狂。這都是害二汝耳目口鼻四肢一的。豈得三是爲二汝耳目口鼻四肢一。若爲二著耳目口鼻四肢一時。便須レ思二量耳如何聽。目如何視。口如何言。四肢如何動一。必須三非レ禮勿二視聽言動一。方才成二得箇耳目口鼻四肢一。這箇才是爲二著耳目口鼻四肢一。汝今終日向レ外馳求。爲レ名爲レ利。這都是爲二著軀殼外面的物事一。汝若爲二著耳目口鼻四肢一。要三非レ禮勿二視聽言動一時。豈是汝之耳目口鼻四肢自能勿二視聽言動一。須レ由二汝心一。這視聽言動皆是汝心。

の耳目・口鼻・四肢を害するもの、豈に是れ汝の耳目・口鼻・四肢の爲にするを得ん。若し耳目・口鼻・四肢の爲にする時は、便ち須らく耳は如何に聽き、目は如何に視、口は如何に言ひ、四肢は如何に動くかを思量すべく、必ず須らく(二)禮に非ざれば視聽き言ひ動くこと勿るべくして、(三)方に才かに個の耳目・口鼻・四肢を成し得ん、這箇才かに是れ耳目・口鼻・四肢の爲にせるなり。汝今終日外に向ひて馳せ求め、名の爲にし利の爲にす。這れ都て是れ軀殼外面の物事の爲にするなり。汝若し耳目・口鼻・四肢の爲にせんとして、禮に非れば視聽き言ひ動くこと勿らんと要する時、豈に是れ汝の耳目・口鼻・四肢自ら能く視聽き言ひ動くこと勿からんや。須らく汝の心に由るべし。這の視聽言動は皆是れ汝の心なり。

(一) 老子に出でたる語　(二) 論語顏淵篇の語に本づく　(三) 斯くして始めて漸く耳目口耳四肢を全くし得ん

何不(三)能(レ)克(レ)己。先生曰。且說汝有(二)爲(レ)己之心(一)是如何。惠良久曰。惠亦一心要(レ)做(二)好人(一)。便自謂頗有(二)爲(レ)己之心(一)。今思(レ)之看來。亦只是爲(二)得箇軀殼的己(一)。不(三)曾爲(二)箇眞己(一)。先生曰。眞己何曾離(二)著軀殼(一)。恐汝連(二)那軀殼的己(一)也不(二)曾爲(一)。且道汝所(レ)謂軀殼的己。豈不(二)是耳目口鼻四肢(一)。惠曰。正是。爲(二)此目(一)便要(レ)色。耳便要(レ)聲。口便要(レ)味。四肢便要(二)逸樂(一)。所以不(レ)能(レ)克。

にせず。』先生曰く、『(五)眞の己は何ぞ嘗て軀殼を離著せん。恐らくは(六)汝那の軀殼の己を連ねて也嘗て爲にせず。且く道へ、汝が所謂軀殼の己とは豈に是れ耳目・口鼻・四肢ならずや。』惠曰く、『正に是なり。此目の爲に便ち色を要し、耳には便ち聲を要し、口には便ち味を要し、四肢には便ち逸樂を要す。所以に克つ能はず。』

(一)私慾克ち難し　(二)蕭惠何とも答ふる能はざりし故、しばらくありて陽明更に語を繼ぎていふ也　(三)眞によく自己の爲めにする事あり始めてよく己私に勝つべく、己私に克ちて始めて自己の人格を大成すべし　(四)肉體的自己と精神的自己とに分ちて斯くいへる也　(五)眞の自己は決して肉體を離るべきものにあらず　(六)汝の言ふが如くんば、汝はひとり眞の自己のみならず、肉體上よりいふも亦己の爲めになし居らざる也

先生曰。美色令(二)人目盲(一)。美聲令(二)人耳聾(一)。

先生曰く、『(一)美色は人の目をして盲せしめ、美聲は人の耳をして聾せしめ、美味は人の口をして爽はしめ、馳騁田獵は人をして狂を發せしむ。這は都て是れ汝

其意。荀子之言固多ㇾ病。然不ㇾ可二一例吹ㇾ毛求一ㇾ疵。大凡看二人言語一。若先有二箇意見一。便有二過當處一。爲ㇾ富不ㇾ仁之言。孟子有ㇾ取二於陽虎一。此便見二聖賢太公之心一。

病弊多し　㈣　一概に其過を苛察して排し去るべきに非ず　㈤　人の言語を看る時、自己に先づ一個の意見を有する時は、その爲めに兎角當に過ぐる事あるもの也　㈥　孟子滕文公上に陽虎のこの言を取る、今效にこの例を引くは、必ずしも人を以て言を棄てざるべく、一二の缺點病弊ありとも一概に凡てを非とすまじく、要は虚心坦懷廓然太公の心を持つべきをいふ也

蕭惠問。己私難ㇾ克奈何。先生曰。將二汝己私一來。替ㇾ汝克。先生曰。人須下有ㇾ爲二己之心一。方能克ㇾ己。能克ㇾ己方能成ㇾ己。蕭惠曰。惠亦頗有二爲ㇾ己之心一。不ㇾ知二緣ㇾ

蕭惠問ふ、『己私(一)克ち難し、奈何せん。』先生曰く、『汝の己私を將ち來れ、汝に替りて克たん。』先生曰く、『人は須らく己(二)の心の爲にする有りて方に能く己に克つべし。能く己に克ちて方に能く己を成す。』蕭惠曰く、『惠も亦頗る己の爲にするの心有り。何に緣りて己に克つ能はざるかを知らず。』先生曰く、『且く說け、汝が己の爲にするの心有りとは是れ如何。』惠良や久しうして曰く、『惠も亦一心に好人と做らんと要し、便ち自ら謂へらく、頗る己の爲にするの心有りと。今之を思ひ看來るに、亦只だ是れ箇(四)の軀殼の己の爲にし得たり。嘗て箇の眞の己の爲

不二是昏瞶一。便已流入二惡念一。自レ朝至レ暮。自レ少至レ老。若要二無レ念即是己不レ知。此除是昏睡。除是槁木死灰。

(一) 瞶は目の風疾、又は目しひの義。心くらきにあらずば、やがて既に惡念に入れる也　(二) 無念無想卽ち自己の知らざるを要せば、これ全く無知覺のみ、固より戒懼の工夫に非ず

志道問。荀子云。養レ心莫レ善二於誠一。先儒非レ之何也。先生曰。此亦未レ可二便以爲一レ非。誠字有下以二工夫一說者上。誠是心之本體。求レ復二其本體一。便是思レ誠的工夫。明道說下以二誠敬一存上レ之。亦是此意。大學欲レ正二其心一先誠二

志道問ふ、『荀子(一)に云ふ、心を養ふは(二)、誠より善きは莫しと。先儒之を非とするは何ぞや。』先生曰く、『此も亦未だ便ち以て非と爲す可からず。誠の字は工夫を以て說く者有り。誠は是れ心の本體、其本體に復せんことを求むるは、便ち是れ誠を思ふ工夫にして、明道の誠敬を以て之を存するを說けるも亦是れ此意なり。大學に、其心を正しうせんと欲せば先づ其意を誠にすと。荀子の言固より病(三)多し。然れども一例して毛を吹いて疵を求む可からず。大凡(五)人の言語を看るに、若し先づ箇の意見(四)あらば便ち過當の處有らん。富(六)を爲すは仁ならずとの言は、孟子陽虎に取る有り。此れ便ち聖賢太公の心を見る。』

(一) 荀子不苟篇に出づ　(二) 遺書に程子の言として曰く「既誠矣、又何養、此已不レ識レ誠、又不レ知三所二以養一」　(三)

是王覇義利誠僞善惡界頭。於レ此一立立定。便是端レ本澄レ源。便是立レ誠。古人許多誠身的工夫。精神命脈全體只在二此處一。眞是莫レ見莫レ顯。無レ時無レ處。無レ終無レ始。只是此箇工夫。今若又分二戒懼一。爲二己所レ不レ知。即工夫便支離。便有二間斷一。既戒懼。即是知。己若不レ知。是誰戒懼。如レ此見解。便要三流二入斷滅禪定一。

いての朱子章句の意を以て問ふ。但、朱子とてもこれ程に明かに偏して言へるには非ず ㈡ 大學の「小人閒居爲二不善一無レ所レ不レ至、見二君子一而后厭然揜二其不善一」を引く ㈢ 善念にしても惡念にしても皆眞實にて虚假なし ㈣ これら凡てのよしあしの分れ目也 ㈤ こゝにしつかりと自己の立場を立てその上に立ち定まれば ㈥ 前出中庸の語に本づく ㈦ 戒懼は是れ己が知らざる所の時の工夫といふが如き見解は、流れて佛者の如く煩惱を斷滅し雜念無想の境地に入らんと要むるもの也、聖學の旨に非ずと也

曰。不レ論二善念惡念一。更無二虚假一。則獨知之地。更無二無レ念時一邪。曰。戒懼亦是念。戒懼之念無二時可一レ息。若戒懼之心。稍有レ不レ存。

曰く、『善念と惡念とを論ぜず更に虚假無くば、則ち獨知の地には更に念無き時無きか。』曰く、『戒懼も亦是れ念なり。戒懼の念は時として息む可き無し。若し戒懼の心稍くも存せざると有らば、是れ昏聵ならずんば便ち已に流れて惡念に入るなり。朝より暮に至り、少より老に至るまで、若し念無きこと即ち是れ己の知らざるを要せば、此れ除だ是れ昏睡、除だ是れ槁木死灰なり。

是己所ニ獨知一時工夫。此說如何。先生曰。只是一箇工夫。無事時固是獨知。有レ事時亦是獨知。人若不レ知下於ニ此獨知之地一用上レ力。只在下人所ニ共知一處上用レ功便是作レ僞。便是見ニ君子一而後厭然。此獨知處便是誠的萌芽。此處不レ論ニ善念惡念。更無ニ虛假。一是百是。一錯百錯。正

事無き時固より是れ獨り知り、事有る時も亦是れ獨り知る。●人若し此獨知の地に於て力を用ふるを知らず、只だ人の共に知る所の處に在りて功を用ひば、便ち是れ僞を作すなり。便ち是れ君子を(二)見て而して後厭然たるなり。此處(三)善念と惡念とを論ぜず更に虛假無し。一是なれば百是に、一錯なれば百錯なり。正に是れ(四)王霸・義利・誠僞・善惡の界頭たり。此に於て(五)一立して立ち定まれば、便ち是れ本を端し源を澄す。便ち是れ誠を立つるなり。古人の許多の誠身の工夫は、精神命脈の全體只だ此處に在り。眞に是れ(六)見なる莫く顯るゝ莫く、時と無く處と無く、終と無く始と無く、只だ是れ此箇の工夫なり。今若し又戒懼を分ちて己の知らざる所と爲さば、即ち工夫便ち支離し、便ち間斷有らん。既に戒懼すれば即ち是れ知るなり。己若し知らずんば是れ誰か戒懼せん。(七)此の如き見解は便ち流れて斷滅禪定に入らんと要するなり。」

(一) 中庸の「是故君子戒ニ愼乎其所レ不レ睹、恐ニ懼乎其所レ不レ聞」「莫レ見ニ乎隱一莫レ顯ニ乎微一故君子愼ニ其獨一也」につ

此要二自思得ヒ之。知レ此則知二未發之中一矣。守衡再三請曰。爲レ學工夫有二淺深一。初時若不二著實用レ意去好レ善惡ヒ惡。如何能爲レ善去レ惡。這著實用レ意便是誠意。然不レ知三心之本體原無二一物一。一向著レ意去好レ善惡レ惡。便又多二了這分意思一。便不二是廓然太公一。書所レ謂無レ有二作レ好作ヒ惡。方是本體。所以說。有レ所二忿懥好樂一。則不レ得二其正一。正心只是誠意工夫裏面。體二當自家心體一。常要二鑑空衡平一。這便是未發之中。

とを知らずして、一向に意を著け善を好み惡を惡むときは、便ち又這の分の意思(四)を多くして、便ち是れ廓然太公ならず。書に(五)所謂好を作し惡を作すこと無しとは、方に是れ本體なり。所以に說く、忿懥好樂する所有れば則ち其正を得ずと。正心とは只だ是れ誠意の工夫の裏面、自家の心體に體當して、常に鑑(六)の空しく衡の平ならんことを要す。這れ便ち是れ未發の中なり。』

(一) 大學の工夫は誠意にて盡せるに更に又正心の功有りて忿懥云々といへるは何故ぞや (二) 問はずして自ら思考して自得するを要す (三) 心の本體はもと鏡の空しきが如く一物もなきに、それを知らずして一途に善を好み惡を惡むの念ある時は、(四) 其意思の分が多くなりて太公ならず (五) 書の洪範の語 (六) 心の本體一物なきに喩ふ

正之問。戒懼是己所レ不レ知時工夫。愼獨

正之問ふ、『(一)戒懼は是れ己が知らざる所の時の工夫にして、愼獨は是れ己が獨り知る所の時の工夫なりと。此說如何。』先生曰く、『只だ是れ一個の工夫にして、

不レ知レ愛ニ其親一。無レ不レ知レ敬ニ其兄一。只是這箇靈能不下爲ニ私欲一遮隔上。充拓得盡便完完。是他本體。便與ニ天地一合レ德。自ニ聖人一以下不レ能レ無レ蔽。故須ニ格レ物以致ニ其知一。

下は蔽はるゝこと無き能はず。故に須らく物を格して以て其知を致すべし。』

㈠ 冀氏、名は元亨、闇齋と號す、武陵の人、陽明に龍場に師事す ㈡ 各自天より享けたる處につきていへば ㈢ 孟子盡心上の語 ㈣ この一箇の靈心にみちひろまりて一點私欲の遮隔なければ其知完し ㈤ 聖人より以下の者は如何にしても私欲に蔽はるゝ事ある故、須く心を以て物を格し以て其知を致すべき也

守衡問。大學工夫只是誠意。誠意工夫只是格物。修齊治平只誠意盡矣。又有ニ正心之功一。有レ所ニ忿懥好樂一則不レ得ニ其正一何也。先生曰。

守衡問ふ、『(一)大學の工夫は只だ是れ誠意、誠意の工夫は只だ是れ格物、修齊・治平は只だ誠意にて盡せり。又正心の功有りて、忿懥好樂する所有れば則ち其正を得ずといふは何ぞや。』先生曰く、『(二)此は自ら思うて之を得るを要す。此を知れば則ち未發の中を知る。』守衡再三請ふ。曰く、『學を爲す工夫には淺深有り。初の時若し著實に意を用ひて善を好み惡を惡まずんば、如何ぞ能く善を爲し惡を去らん。這の著實に意を用ふるは、便ち是れ誠意なり。然れども(三)心の本體は原一物無きこ

如下孟子說レ充ニ其側隱之心一。至中仁不も可ニ勝用一。這便是窮理工夫。日孚曰。先儒謂。一草一木亦皆有レ理。不レ可レ不レ察。如何。先生曰。夫我則不レ暇。公且先去レ理ニ會自己性情一。須下能盡ニ人之性一。然後能盡中物之性上。日孚悚然有レ悟。

く先づ自己の性情を理會し去り、須らく能く人の性を盡し、然る後に能く物の性を盡すべし。』日孚悚然として悟る有り。(六)

(一) 易の說卦傳に「窮レ理盡レ性以至ニ於命一」 (二) 仁の理を窮め義の理を窮めんには眞に仁は仁の極にいたり、義は義の極に至るを要す (三) 孟子盡心下に出づ (四) 程伊川の語を引いて問ふ (五) 論語憲問篇の孔子の語を以て答ふる也 (六) 驚き、ぞつとして

惟乾問。知如何是心之本體。先生曰。知是理之靈處。就ニ其主宰處一說。便謂ニ之心一。就ニ其稟賦處一說。便謂ニ之性一。孩提之童無レ

(一)惟乾問ふ、『知は如何ぞ是れ心の本體なる。』先生曰く、『知とは是れ理の靈なる處、其主宰する處に就きて說けば便ち之を心と謂ひ、(二)其稟賦する處に就きて說けば便ち之を性と謂ふ。(三)孩提の童も其親を愛するを知らざる無く、其兄を敬するを知らざる無し。只だ是れ這個の靈能く私欲の爲に遮隔せられず、(四)充拓し得盡せば便ち完完す。是れ他の本體にして、便ち天地と德を合しうす。(五)聖人より以

同。功夫只是一事。就レ如三易言二敬以直レ内義以方ヒ外。敬即是無レ事時義。義即是有レ事時敬。兩句合説二一件一。如三孔子言二修レ己以ヒ敬。即不レ須レ言レ義。孟子言レ集レ義。即不レ須レ言レ敬。會得時。横説豎説。工夫總是一般。若泥レ文逐レ句。不レ識二本領一。即支離決裂。工夫都無二下落一。

(一) 事あれば心外物を逐ひ、事無き時は空に歸せん (二) 敬に居ながら別に一箇の理を窮むる心有り、又は理を窮めながら別に一箇敬に居るの心あるに非ず (三) 坤の文言の語、敬を以て内即ち心を直くし、義を以て外即ち意を方正にすと也 (四) 敬と義とは一にして二ならず (五) 孔子は義といふ語を須ひず、孟子は敬といふ語を須ひず、會得して見れば、如何に說きても工夫に變りなし (六) 文句に拘泥して其言葉の精神本領を知らずば、散り〳〵になりて工夫を爲すに手の下し處なからんと也

問。窮理何以即是盡レ性。曰。心之體性也。性即理也。窮二仁之理一。眞要二仁極ヒ仁。窮二義之理一。眞要二義極ヒ義。仁義只是吾性。故窮理即是盡レ性。

問ふ、『窮理(一)は何を以てか即ち是れ性を盡すや。』曰く、『心の體は性なり。性は即ち理なり。仁の理(二)を窮むれば、眞に仁は仁を極むるを要し、義の理を窮むれば、眞に義は義を極むるを要す。仁義は只だ是れ吾が性なり。故に窮理は即ち性を盡すなり。孟子が其惻隱(三)の心を充すを說きて、「仁勝げて用ふ可からず」に至るが如き、這は便ち是れ窮理の工夫なり。』日孚曰く、『先儒(四)謂へり、一草一木も亦皆理有り、察せざる可からずと。如何。』先生曰く、『夫れ(五)我は則ち暇あらず。公且

天理上。若只知レ主レ一。不レ知二一即是理一。有レ事時便是逐レ物。無レ事時便是著レ空。惟其有レ事無レ事。一心皆在二天理上一用レ功。所二以居レ敬亦即是窮ニ理。就二窮レ理專一處一說。便謂二之居レ敬。就二居レ敬精密處一說。便謂二之窮レ理。却不下是居レ敬了。別有二箇心窮ニ理。窮レ理時別有中箇心居上レ敬。名雖レ不レ

便ち是れ物を逐ひ、事無き時は便ち是れ空に著かん。惟だ其れ事有るも事無きも、一心皆天理上に在りて功を用ふるは、敬に居て亦即ち是れ理を窮むる所以なり。理を窮むるの專一なる處に就きて說けば、便ち之を敬に居ると謂ひ、敬に居るの精密なる處に就きて說けば、便ち之を理を窮むと謂ふ。(二)却つて是れ敬に居て別に箇の心の理を窮むる有り、理を窮むる時、別に箇の心の敬に居る有るにあらず。名は同じからずと雖も功夫は只だ是れ一事のみ。(三)易の敬以て內を直くし、義以て外を方にすと言へるが如きに就けば、(四)敬は即ち是れ事無き時の義にして、義は即ち是れ事有る時の敬なり。兩句は合せて一件を說く。(五)孔子の己を修むるに敬を以てすと言へるが如きは、即ち義を言ふを須ひず。(六)孟子の義を集むるを言へるは、即ち敬を言ふを須ひず。會得する時は橫より說くも竪より說くも工夫は總て是れ一般なり。若し(七)文に泥み句を逐ひ、本領を識らずんば、即ち支離決裂して、工夫都て下落無からん。』

存二養箇甚一。曰。是存二養此心之天理一。曰。如レ此亦只是窮レ理矣。曰。且道。如何窮二事物之理一。曰。如レ事レ親。便要レ窮二孝之理一。事レ君便要レ窮二忠之理一。曰。忠與レ孝之理在二君親身上一。在二自己心上一。若在二自己心上一。亦只是窮二此心之理一矣。且道如何是敬。曰。只是主レ一。如何是主レ一。曰。如二讀書一便一心在二讀書上一。接レ事便一心在二接レ事上一。曰。如レ此則飲レ酒便一心在二飲酒上一。好レ色便一心在二好色上一。却是逐レ物。成二甚居敬功夫一。

へ、如何なる是れ敬か。』曰く、『只だ是れ一を主とす。』『如何なるをば是れ一を主とするといふか。』曰く、『讀書の如き便ち一心讀書上に在り、事に接すれば便ち一心事に接する上に在り。』曰く、『此の如くならば則ち酒を飲めば便ち一心飲酒上に在り、色を好めば便ち一心好色上に在り。却つて是れ物を逐ふなり。甚の居敬の功夫をか成さん。』

㈠ 居敬は論語雍也篇仲弓の語、窮理は易說卦に出づ、程子の弟子謝顯道以來この工夫といふ事行はれ、朱子に至つて學問の題目となす、朱子は之を二と爲すに陽明は以て一事とす、故に此問答あり ㈡ 種々なる個々の場合 ㈢ 汝先づ試に言へ ㈣ 原文「且」の上に「曰」の字あるは衍といふ說に從つて削り譯す

日孚請問。曰。一者天理。主一是一心在二

日孚請ひ問ふ。曰く、『一は天理にして主一は是れ一心天理の上に在るなり。若し只だ一を主とするを知りて、一とは即ち是れ理なるを知らずんば、事有る時は

矣。日有レ餘者日不レ足矣。

梁日孚問。居レ敬窮レ理。是兩事。先生以爲二一事一。何如。先生曰。天地間只有二此一事一。安有二兩事一。若論二萬殊一。禮儀三百威儀三千。又何止レ兩。公且道。居レ敬是如何。窮レ理是如何。曰。居レ敬是存養工夫。窮レ理是窮二事物之理一。曰。

者は却つて日に足らざる也

梁日孚問ふ、『敬(二)に居て理を窮むとは、是れ兩事なり。先生は以て一事と爲す。何如。』先生曰く、『天地の間只だ此一事有るのみ。安ぞ兩事有らん。若し萬殊を論ぜんか、禮儀三百・威儀三千にして又何ぞ兩に止まらん。(三)公且く道へ、敬に居るとは是れ如何、理を窮むとは是れ如何。』曰く、『敬に居るとは是れ存養の工夫にして、理を窮むとは是れ事物の理を窮むるなり。』曰く、『箇の甚を存養するか。』曰く、『是れ此心の天理を存養するなり。』曰く、『此の如くんば亦只だ是れ理を窮むるなり。(四)且く道へ、如何にして事物の理を窮むるか。』曰く、『親に事ふるが如き、便ち孝の理を窮めんことを要し、君に事へては便ち忠の理を窮めんことを要するなり。』曰く、『忠と孝との理は君と親との身上に在るか、自己の心上に在るか、若し自己の身上に在らば、亦只だ是れ此心の理を窮むるなり。且く道

要信得及。只是立志。學者一念爲善之志。如樹之種。但勿助勿忘。只管培植將去。自然日夜滋長。生氣日完枝葉日茂。樹初生時。便抽繁枝。亦須刊落。然後根幹能大。初學時亦然。故立志貴專一。

は專一を貴ぶ。』

㈠ 繁くして樹の生長に害ある枝を删り去れ ㈡ 文學詩歌の如き外物に對する好み ㈢ もれて ㈣ 樹がしっかりと根ざしたるが如し ㈤ 孟子の語に取りて助長すべからず又忘るべからざるをいふ ㈥ 生ずるまゝに繁枝を出さば ㈦ かり落すべし

因論。先生之門。某人在涵養上用功。某人在識見上用功。先生曰。專涵養者日見其不足。專識見者日見其有餘。日不足者日有餘

㈠因りて論ず、『先生の門、某人は涵養上に在りて功を用ひ、某人は識見上に在りて功を用ふ。』先生曰く、『㈡涵養を專にする者は日に其の足らざるを見、識見を專にする者は日に其の餘あるを見る。㈢日に足らざる者は日に餘あり、日に餘ある者は日に足らず。

㈠ 何事をか論じたるにつけて亦これに論じ及ぶ也、必ずしも直ちに前文を承けていふには非ず ㈡ 專ら涵養を勉むるものは常に我が不足のみ日に附き、識見の工夫を專らとする者は日々未知の事を知り行きて我が識見の餘りあるを覺ゆと也 ㈢ 足らざるもの即ち涵養を專らとする者は德が身に餘りあり、餘りある者即ち識見を主とする

顏子不レ遷レ怒不レ貳レ過。亦是有二未發之中一始能。

種レ樹者必培二其根一。種レ德者必養二其心一。欲二樹之長一。必於二始生時一刪二其繁枝一。欲二德之盛一。必於二始學時一去二夫外好一。如外好二詩文一。則精神日漸漏泄在二詩文上一去。凡百外好皆然。又曰。我此論レ學。是無中生レ有的工夫。諸公須二

(一)顏子は怒を遷さず、過を貳たびせず。亦是れ未發の中有りて始めて能くす。

㊀顏子の怒を他に遷さず過を重ねざるは、これ亦其心中に中庸に謂ふ所の未發の中あるが爲也

『樹を種うる者は必ず其根に培ひ、德を種うる者は必ず其心を養ふ。樹の長ぜんことを欲せば、必ず始め生ずる時に於て其(一)繁枝を刪れ。德の盛ならんことを欲せば、必ず始め學ぶ時に於て夫の(二)外好を去れ。如し外詩文を好まば、則ち精神は日に漸く(三)漏泄して詩文の上に在らん。凡百の外好も皆然り。』又曰く、『我が此に學を論ずるは是れ無中に有を生ずるの工夫なり。諸公信じ得及ばんとを須要せば、只だ是れ志を立てよ。學者一念善を爲すの志は樹の(四)種きしが如し。但だ(五)助くる勿れ忘るゝ勿れ。只管に培植し將去らば、自然に日夜に滋長して、生氣日に完く、枝葉日に茂らん。樹の初めて生ずる時、(六)便ち繁枝を抽かば、亦須らく(七)刊落すべし。然して後に根幹能く大なり。初學の時も亦然り。故に志を立つる

一貫。一如二樹之根本一。貫如二樹之枝葉一。未レ種レ根。何枝葉之可レ得。體用一源。體未レ立用安從生。謂下曾子於二其用處一。蓋已隨レ事。精察而力行レ之。但未レ知二其體之一一。此恐未レ盡合

なるを知らずと謂ふは、此れ恐らくは未だ盡さゞらん。(四)』

㊀ 論語學而篇に出づ、一貫の教を聞きて後は、「爲レ人謀而不レ忠乎、與二朋友一交而不レ信乎、傳不レ習乎」といふ如き一つ〳〵の工夫は無き筈と思ふが故に此問ある也 ㊁ 一は體にて貫は用也 ㊂ 論語里仁篇一貫の朱註を引く、其說體用一源の義に叶はざるを以て未だ盡さずといふ也 ㊃ 原文「合」の一字は衍

黄誠甫問二汝與レ回也孰愈章一。先生曰。子貢多學而識。在二聞見上一用レ功。顏子在二心地上一用レ功。故聖人問以啓レ之。而子貢所レ對。又只在二知見上一。故聖人歎二惜之一。非レ許レ之也。

黄誠甫、汝(一)と回と孰れか愈れるの章を問ふ。先生曰く、『子貢(二)は多く學びて識り、聞見上に在りて功を用ふ。顏子(三)は心地上に在りて功を用ふ。故に聖人問うて(四)以て之を啓かんとす。而も子貢の對ふる所又只だ知見上に在り。故に聖人之を歎惜せり、(五)之を許しゝに非ざるなり。

㊀ 論語公冶長に出づ ㊁ 論語衛靈公に出づ、子貢の工夫は兎角聞見の上に在り ㊂ 顏子の工夫は精神上に在り ㊃ この間によりて子貢の心を啓かんとせり ㊄ 孔子が「吾與二汝弗一レ如也」といへる與の字を朱子はユルスと訓ずるも、これ歎惜せる言葉にてよしと許したるに非ずと也

中一件事。亦似下專求二諸外一了上。時習者。坐如レ尸。非二專習一レ坐也。坐時習二此心一也。立如レ齋。非二專習一レ立也。立時習二此心一也。說是理義之說二我心一之說。人心本自說二理義一。如二目本說一レ色。耳本說レ聲。惟爲二人欲一所レ蔽所レ累。始有レ不レ說。今人欲日去。則理義日浹洽。安得レ不レ說。

(一)論語の首章について問ふ　(二)朱註の說也　(三)中庸孟子等の字句を引用し來りて學問の工夫をいふ　(四)學問中の一つの事柄にて全體に非ず　(五)專ら學問を外部に求むるものの如し　(六)坐立につきてそれぞれ諳慣する事を說くは、專ら坐立の作法を習ふの意に非ず、坐立につけて此人欲を去り天理を存するを習ふ也　(七)人の心は元來自然に理義を說ぶものにて、之を說ばざるに至るは、人欲の爲めに蔽はるゝ故也　(八)人欲が去れば理義があまねく心の內にゆきわたる事となる、いかで心之を說ばざるべきと也

國英問。曾子三省雖レ切。恐是未レ聞二一貫一時工夫。先生曰。一貫是夫子見二曾子未レ得二用レ功之要一。故告レ之。學者果能忠恕上用レ功。豈不二是

國英問ふ、『曾子の(一)三省は切なりと雖も恐らくは是れ未だ一貫を聞かざる時の工夫ならん。』先生曰く、『一貫は是れ夫子が曾子の未だ功を用ふるの要を得ざるを見たる故に之に告ぐ。學者果して能く忠恕上に功を用ひば、豈に是れ一貫ならざらん。(二)一は樹の根本の如く、貫は樹の枝葉の如し。未だ根を種ゑざれば何ぞ枝葉を得可けん。體用は一源のみ。體未だ立たざるに、用安より生ぜん。曾子(三)其用の處に於て蓋し已に事に隨ひ精察して力めて之を行ふ、但だ未だ其體の一

子仁問。學而時習レ之不二亦說一乎。先儒以レ學爲レ效二先覺之所一レ爲如何。先生曰。學是學下去二人欲一存中天理上從下事於去二人欲一存中天理上。則自正二諸先覺一。考二諸古訓一。自下二許多問辨思索存省克治工夫一。然不レ過レ欲下去二此心之人欲一存中吾心之天理上耳。若曰レ效二先覺之所一レ爲。則只說二得學

子仁問ふ、『學びて(一)時に之を習ふ亦說しからずやと。先儒(二)學ぶといふを以て先覺の爲す所に效ふと爲す。如何。』先生曰く、『學ぶとは是れ人欲を去り天理を存することを學ぶなり。人欲を去り天理を存するに從事すれば、則ち自ら諸を先覺に正し、諸を古訓に考へ、自ら許多の(三)問辨・思索・存省・克治の工夫を下す。然れども此心の人欲を去りて吾が心の天理を存せんと欲するに過ぎざるのみ。若し先覺の爲す所に效ふと曰はゞ、則ち只だ學中(四)一件の事を說き得て、亦專(五)ら諸を外に求め了するに似たり。時に習ふとは、坐(六)するには尸の如くするは、專ら坐するを習ふに非ずして、坐する時此心を習ふなり。立つには齋するが如くするは、專ら立つことを習ふに非ずして、立つ時此心を習ふなり。說ぶとは是れ理義の我心を說ばすの說なり。(七)人心は本自ら理義を說ぶ。目の本色を說び、耳の本聲を說ぶが如し。惟だ人欲の爲に蔽はれ累はされて、始めて說ばざる有り。今、人欲(八)日に去れば、則ち理義日に洽浹す。安ぞ說ばざるを得んや。』

如何。先生曰。心不レ可下以二動靜一爲二體用一。動靜時也。即レ體而言用在レ體。即レ用而言體在レ用。是謂二體用一源一。若說丁靜可三以見二其體一。動可三以見二其用一。却不レ妨。

は體に在り。用に即きて言へば體は用に在り。是を(二)體用一源と謂ふ。若し(三)靜は以て其體を見る可く、動は以て其用を見る可しと說くは、却つて妨げず。』

(一) 程朱共に此說あり、以て問ふ也　(二) 其虛靈不昧なるよりいへば體、萬事に應ずるよりいへば用、即ち體用共に心の本體にて即ち一源也　(三) 靜なる時には其體を見るべく、動く時には其用を見るべしと說くは差支なし

問。上智下愚如何不レ可レ移。先生曰。不二是不レ可レ移。只是不二肯移一。

問ふ、『(一)上智と下愚とは如何ぞ移る可からざる。』先生曰く、『(二)是れ移す可からざるにあらず。只だ是れ肯て移らざるのみ。』

(一) 論語陽貨篇に出づ　(二) 移る事の出來ぬといふにはあらず、其者自ら肯て移らうとせざる也

問二子夏門人問レ交章一。先生曰。子夏是言二小子之交一。子張是言二成人之交一。若善用レ之亦俱是。

(一)子夏の門人交を問ふの章を問ふ。先生曰く、『子夏は是れ小子の交を言ひ、子張は是れ成人の交を言ふ。(二)若し善く之を用ひば亦俱に是なり。』

(一) 子夏の門人が交りを子張に問ふ事論語子張篇に出づ　(二) 善用しさへすれば子夏の言も子張の言も俱に是也

處同。便同謂ニ之聖一。若是力量氣魄如何盡同得。後儒只在ニ分兩上一較量。所以流入ニ功利一。若除下去了比ニ較分兩一的心上。各人儘著ニ自己力量精神一。只在下此心純ニ天理一上上用レ功。即人人自有ニ箇箇圓成一。便能大以成レ大。小以成レ小。不レ假ニ外慕一。無レ不ニ具足一。此便是實實落落明善誠身的事。後儒不レ明ニ聖學一。不レ知下就ニ自己心地良知良能上一。體認擴充上。却去下求レ知ニ其所レ不レ知。求中能ニ其所上レ不レ能。一味只是希レ高慕レ大。不レ知ニ自己是桀紂心地一。動輒要レ做ニ堯舜事業一。如何做得。終レ年碌碌。至ニ於老死一。竟不レ知三成ニ就了箇甚麽一。可レ哀也已。

の事業を做さんと要す、如何ぞ做し得ん。年を終ふるまで碌碌(八)として老死に至るも竟に箇の甚麼も成就し了るを知らず、哀む可きなり。』

(一) 精金の比喩は上文「希淵問ふ」の條に見ゆ (二) 分量といふ事を以て聖人に替へて爭ふ、聖人の聖たる所以は其精金たる所にありて分量の如何に在るに非ず、されば、分量を以て聖人に替ふべからざる也 (三) 孔子の九千鎰の意、的は「のもの」の意をあらはす字 (四) 原來同一聖人にして彼我の別なく其分量の多寡の如きは聖人たる所以に與ることなし (五) 人の心の内にはそれ〴〵に皆圓滿具足の所あり (六) 眞實實著の意 (七) 只一途に (八) 何の爲す所もなく、空しく

侃問。先儒以ニ心之靜一爲レ體。心之動爲レ用。

侃問ふ、『先儒(一)心の靜なるを以て體と爲し、心の動くを用と爲す。如何。』先生曰く、『心は動靜を以て體用と爲す可からず。動靜は時なり。體に卽きて言へば用(二)

堯舜爲二萬鎰一。孔子爲中九千鎰上疑未レ安。先生曰。此又是軀殼上起レ念。故替二聖人一爭二分兩一。若不下從二軀殼上一起上念。即堯舜萬鎰不レ爲レ多。孔子九千鎰不レ爲レ少。堯舜萬鎰只是孔子的。孔子九千鎰只是堯舜的。原無二彼我一。所以謂二之聖一。只論二精一一不レ論二多寡一。只要三此心純二乎天理一

起さずば、即ち堯舜の萬鎰も多と爲さず、孔子の九千鎰も少と爲さず、堯舜の萬鎰も只だ是れ孔子的、孔子の九千鎰も只だ是れ堯舜的にして、(四)原、彼我無し。所以に之を聖と謂ふ。(三)只だ精一を論じて多寡を論ぜず。只だ此心の天理に純ならんことを要する處同じければ、便ち同じく之を聖と謂ふ。若し是れ力量氣魄は如何ぞ盡く同じきを得ん。後儒只だ分兩上に在りて較量す。所以に流れて功利に入る。若し分兩を比較するの心を除去し了り、各人盡く自己の力量精神を著け、只だ此心の天理に純なる上に在りて功を用ひば、即ち人人自ら(五)箇箇の圓成あり。便ち能く大は以て大を成し小は以て小を成し、外に慕ふを假らずして具足せざる無し。此れ便ち是れ(六)實實落落、明善誠身の事なり。後儒聖學を明かにせず、自己の心地の良知良能の上に就きて體認擴充するを知らず、却つて其の知らざる所を知らんと求め、其の能くせざる所を能くせんと求む。(七)一味に只だ是れ高きを希ひ大なるを慕ひ、自己是れ桀紂が心地なるを知らず、動もすれば輒ち堯舜

稱。稱字去聲讀。亦聲聞過情君子恥之之意。實不稱名。生猶可補。沒則無及矣。四十五十而無聞。是不聞道。非無聲聞也。孔子云。是聞也非達也。安肯以此望人。

となす也 (八)孟子離婁下篇の語 (九)生きてゐる間は補がつくが死しての後はもはや間に合はず、故に最後まで名が實にかなはぬを疾むといふ也 (一〇)論語子罕篇の語 (一一)論語顏淵篇の語

侃多悔。先生曰。悔悟是去病之藥。然以改之爲貴。若留滯於中。則又因藥發病。

侃(一)悔多し。先生曰く、『悔悟は是れ病を去るの藥なり。然れば之を改むるを以て貴しと爲す。若し(二)中に留滯せば、則ち又藥に因つて病を發せん。』

(一)物事に就いて後悔する事多し (二)其悔ゆる心を内にとゞめ滯らしめば

德章曰。聞先生以精金喩聖。以分兩喩聖人之分量。以鍛鍊喩學者之工夫。最爲深切。惟謂

德章曰く、『先生の(一)精金を以て聖に喩へ、分兩を以て聖人の分量に喩へ、鍛鍊を以て學者の工夫に喩ふるを聞き、最も深切なりと爲す。惟だ堯舜を萬鎰と爲し、孔子を九千鎰と爲すと謂ふは、疑ふらくは未だ安からず。』先生曰く、『此れ又是れ軀殼上に念を起す。故に(二)聖人に替へて分兩を爭ふ。若し軀殼上より念を

自謂。此病已輕。此來精察乃知二全未一。豈必務レ外爲レ人。只聞レ譽而喜。聞レ毀而悶。即是此病發來。曰最是。名與レ實對。務レ實之心重一分。則務レ名之心輕一分。全是務レ實之心。卽全無二務レ名之心一。若務レ實之心。如二饑之求レ食渇之求一レ飲。安得三更有二工夫好一レ名。又曰疾二沒レ世而名不一レ

て人の爲にするならんや。只だ譽を聞きて喜び、毀を聞きて悶ゆるは、即ち是れ此病の發し來るなり。』曰く、『(四)最も是なり。名と實とは對す。實を務むるの心重きこと一分なれば、則ち名を務むるの心輕きこと一分なり。全く是れ實を務むるの心なれば、卽ち全く名を務むるの心無し。若し實を務むるの心、饑の食を求め、渇の飲を求むるが如くならば、安ぞ更に(五)工夫の名を好むこと有るを得んや。』又曰く、(六)世を沒ふるまで名の稱はざるを疾むと。(七)稱の字は去聲に讀む。亦(八)聲聞情に過ぐるは君子之を恥づとの意なり。實の名に稱はざるは、(九)生きては猶ほ補ふ可し、沒しては則ち及ぶ無し。(一〇)四十五十にして聞く無しとは、是れ道を聞かざるなり、聲聞無きに非ざるなり。(一一)孔子云く、是れ聞くなり、達するに非ざるなりと。安ぞ肯て此を以て人に望まんや。』

(一)學問を爲すについての大なる病弊は名聞を好む事也　(二)此病未だ輕からざるを知る　(三)內心の修養を怠り己の爲めにせざるにはあらず　(四)如何にも汝のいふ通り、よき所に氣付きたりとの意　(五)虛名を好むの工夫有るを得ず　(六)論語衞靈公篇に出づ　(七)稱の字、はめいふの義の時は上聲、かなふの義の時は去聲、朱子は上聲

崇一問。尋常意思多忙。有レ事固忙。無レ事亦忙何也。先生曰。天地氣機。元無二一息之停一。然有二箇主宰一。故不レ先不レ後。不レ急不レ緩。雖二千變萬化一而主宰常定。人得レ此而生。若主宰定時。與二天運一一般不レ息。雖レ酬二酢萬變一。常是從容自在。所レ謂天君泰然百體從レ令。若無二主宰一。便只是這氣奔放。如何不レ忙。

崇一（一）問ふ、『尋常（二）意思多く忙し。事有れば固より忙し。事無きも亦忙しきは何ぞ。』先生曰く、『天地の氣機（三）、元一息の停る無し。然も箇（四）の主宰有り、故に先だゝず後れず、急ならず緩ならず。千變萬化すと雖も而も主宰常に定る。人（五）此を得て生ず。若し主宰定る時は、天運と一般にして息まず。萬變に酬酢（六）すと雖も、常に是れ從容自在なり。所謂天君（七）泰然として百體令に従ふなり。若し主宰無くば、便ち只だ是れ這の氣奔放す。如何ぞ忙しからざらんや。』

（一）陽明の門人歐陽德の字　（二）平常心そわ〳〵として落着かず　（三）天地の氣の運りは一瞬間も息まず　（四）個の主人公あり　（五）人この天地の主宰を得て生れ來る、故に主宰定れば天運と異なることなし　（六）應對　（七）天君とは心を謂ふ、この句は范浚心箴の語にて孟子雞心章の集註に載す

先生曰。爲レ學太病在レ好レ名。侃曰。從二前歲一

先生曰く、『學（一）を爲すの太病は名を好むに在り。』侃曰く、『前歲より自ら謂ふ、此病已に輕しと。比來精察して乃ち全く未（二）だしきを知る。豈に必ずしも外（三）を務め

雖レ從二事於學一只做二箇義襲而取一。只是行不レ著、習不レ察。非二大本達道一也。又曰。見得時橫說豎說皆是。若於二此處一通。彼處不レ通。只是未二見得一。

は横より說くも竪より說くも皆是なり。若し此處に於て通じ彼處に通ぜざるあらば、只だ是れ未だ見得ざるなり。』

㈠一箇眼目の所を得れば、工夫おちつきさだまる所あらん ㈡よしや間斷ありとも ㈢一たび舵をひつさぐる義、一たび反省せば直ちに目のさめたる思あらんと也 ㈣眞の學問の根本の道 ㈤眼目の所を也

或問。爲レ學以二親故一不レ免二業レ學之累一。先生曰。以二親之故一而業レ學爲レ累二於學一。則治レ田以養二其親一者。亦有レ累二於學一乎。先正云。惟患レ奪レ志。但恐三爲レ學之志不二眞切一耳。

或ひと問ふ、『學を爲すも親の故を以て擧を業とするの累を免れず。』㈠先生曰く、『親の故を以て擧を業とするを學に累ありと爲さば、則ち田を治め以て其親を養ふ者も、亦學に累あらんか。先正㈡云ふ、惟だ志を奪はんことを患ふと。但だ學を爲すの志の眞切ならざるを恐るゝのみ。』

㈠親を養ふために科擧の業を爲すことが學問の累となるを免れずと也 ㈡先哲の意、程明道を指していふ。明道曰く「科擧の事、功を妨ぐることを患へず、惟だ志を奪ふを患ふ」

曰。如ㇾ好二好色一如ㇾ惡二惡臭一安得ㇾ非ㇾ意。曰。却是誠意不二是私意一。誠意只是循二天理一。雖三是循二天理一。亦著二不ㇾ得三一分意一。故有ㇾ所二忿懥好樂一則不ㇾ得二其正一。須二是廓然太公一。方是心之本體。知ㇾ此即知二未發之中一。伯生曰。先生云。草有二妨礙一理亦宜ㇾ去。緣ㇾ何又是軀殼起ㇾ念。曰。此須二汝心自體當一。汝要ㇾ去ㇾ草是甚麼心。周茂叔窗前草不ㇾ除是甚麼心。

起すべき。』曰く、『此は須らく汝が心に自ら(六)體當すべし。汝の草を去らんと要するは是れ甚麼なる心ぞ、周茂叔が窓前の草を除かざるは是れ甚麼なる心ぞと。』

(一) 前に所謂心に在りて理に循ふは善、氣に動けば惡の意也 (二) 他よりおそひて做すも、固よりまことの事にあらず、此語孟子公孫丑に出づ (三) 惡をにくむに一分の念を著くるは忿懥也、善を好むに一分の念を著くるは好樂也 (四) 陽明の弟子孟源の字。わきより差出でゝ問へる也 (五) 然らば肉體上より私念を起すいはれは無きさうなるに斯くのたまへるは何故ぞと也 (六) 身におし當てゝ會得せよ

先生謂二學者一曰。爲ㇾ學須下得二箇頭腦一工夫方有中著落上。縱未ㇾ能ㇾ無ㇾ間。如二舟之有一ㇾ舵一提便醒。不ㇾ然

先生學者に謂ひて曰く、『學を爲すに須らく箇(一)の頭腦を得れば、工夫方に著落有るべし。縱ひ未だ間(二)無きこと能はざるも、舟(三)の舵有るが如く、一提して便ち醒めん。然らずんば事に學に從ふと雖も、只だ箇の義襲ひて取るを做し、只だ是れ行ひて著しからず、習ひて察せず。(四)大本達道に非ざるなり。』又曰く、『(五)見得る時

動レ氣處一。曰。然則善惡全不レ在レ物。曰。只在二汝心一。循レ理便是善。動レ氣便是惡。

曰。畢竟物無二善惡一。曰。在レ心如レ此在レ物亦然。世儒惟不レ知レ此。舍レ心逐レ物將二格物之學一錯看了。終日馳二求於外一。只做二得箇義襲而取一。終身行不レ著習不レ察。曰。如レ好二好色一如レ惡二惡臭一則如何。曰。此正是一循二於理一。是天理合レ如レ此。本無二私意作レ好作レ惡。

曰く、『畢竟物に善惡無きか。』曰く、『(一)心に在りて此の如くば、物に在りても亦然り。世儒惟だ此を知らず、心を舍てゝ物を逐ひ、格物の學を將つて錯り看了り、終日外に馳せ求め、只だ(二)箇の義襲ひて取るを做し得るも、終身行ひて著しからず習ひて察せず。』曰く、『好色を好むが如く、惡臭を惡むが如くならば則ち如何。』曰く、『此は正に是れ一に理に循ふなり。是れ天理は合に此の如くなるべし。本私意の好を作し惡を作すこと無きなり。』曰く、『好色を好むが如く惡臭を惡むが如き、安ぞ意に非ざるを得ん。』曰く、『却つて是れ誠意にして是れ私意ならず。誠意は只だ是れ天理に循ふ。是れ天理に循ふと雖も、亦一分の意をも著け得ず。(三)故に忿懥好樂する所有れば則ち其正を得ず。須らく是れ廓然太公なるべし。方に是れ心の本體にして、此を知らば卽ち未發の中を知らん。』(四)伯生曰く、『先生云ふ草妨礙となる有らば理も亦宜しく去るべしと。(五)何に緣つて又是れ軀殼より念を

是佛老意見。草若有レ礙何妨ニ汝去。曰。如レ此又是作レ好作レ惡。曰。不レ作ニ好惡一非三是全無ニ好惡。却是無ニ知覺一的人。謂ニ之不レ作者一。只是好惡一循ニ於理一不レ去三又著ニ一分意思一。如レ此卽是不ニ曾好惡一一般。曰。去レ草如何是一循ニ於理一不レ著ニ意思一。曰。草有ニ妨礙一理亦宜レ去去レ之而已。偶未ニ卽去一亦不レ累レ心。若著ニ了一分意思一。卽心體便有レ貽レ累便有ニ許多

は又是れ好を作し惡を作すなり。』曰く、『好惡を作さずとは是れ全く好惡無きに非ず。(一)却つて是れ知覺無きの人なり、之を作さゞる者と謂はんや。只だ是れ好惡一に理に循ひて、又(二)一分の意思を著け去らず。此の如くんば卽ち是れ曾て好惡せざると一般なり。』曰く、『草を去るのこと如何にして是れ一に理に循ひて意思を著けざらんや。』曰く、『草妨礙有らば理も亦宜しく去るべくして之を去らんのみ、偶〻未だ卽ち去らざるも亦心を累さず。若し一分の意思を著け了らば、卽ち(三)心體便ち累を貽す有りて便ち許多の氣を動かす處有らん。』曰く、『然らば則ち善惡は全く物に在らざるか。』曰く、『只だ汝の心に在り。理に循ふは便ち是れ善にして、氣に動くは便ち是れ惡なり。』

(一) 全く好惡なきが如きは却て知覺なき人にて、好惡を作さゞる人とはいふべからず (二) 少しの私意をも著けざるは卽ち好惡せざると同一也 (三) 心の本體を累して氣を動かす事あらん

欲用草時。復以草爲善矣。此等善惡皆由汝心好惡所生。故知是錯。曰。然則無善無惡乎。曰。無善無惡者理之靜。有善有惡者氣之動。不動於氣。卽無善無惡。是謂至善。曰。佛氏亦無善無惡。何以異。曰。佛氏著在無善無惡上。便一切都不管。不可以治天下。聖人無善無惡。只是無有作好。無有作惡。不動於氣。然遵王之道。會其有極。便自一循天理。便有箇裁成輔相。

か。」曰く、「佛氏は無善無惡の上に著在し、便ち一切都て管せざれば、以て天下を治む可からず。聖人の無善無惡は、只だ是れ好を作すこと有る無く、惡を作すこと有る無く、氣に動かざるなり。然れども王の道に遵ひて其有極に會す。便ち自ら一に天理に循ひて便ち箇の裁成輔相有り。」

(一) 花間の雜草を去るにつけて、善の長じ難く惡の去り難きを問ふ也 (二) 世の所謂善惡は皆肉體上卽ち私欲私情より起るが故に錯誤を來す (三) 其意を解せず故に陽明更に語を繼いて言ふ (四) 善も無く惡も無しといふ事の上に執著して一切の事を捨てゝ管せず (五) 書の洪範皇極の語に取る。好惡を爲さず、而も王道に遵つて其道理の極致に合すと也 (六) 易泰大象の「宰成天地之道、輔相天地之宜」に取る

曰草既非惡。卽草不宜去矣。曰。如此却

曰く、『草既に惡に非ざれば卽ち草去るべからず。』曰く、『此の如きは却つて是れ佛老の意見にして、草若し礙有らば何ぞ汝の去るを妨げん。』曰く、『此の如き

做了。士德曰。晩年之悔。如丁謂二向來定本之誤一。又謂下雖レ讀二得書一何益中於吾事上。又謂丙此與下守二書籍一泥中言語上全無乙交渉。是他到レ此方悔二從前用レ功之錯一。方去二切レ己自修一矣。曰。然。此是文公不レ可レ及處。他力量大。一悔便轉。可レ惜。不レ久卽去レ世。平日許多錯處皆不レ及二改正一。

侃去二花間草一。因曰。天地間何善難レ培惡難レ去。先生曰。未レ培未レ去耳。少間曰。此等看二善惡一皆從二軀殼一起レ念便會レ錯。侃未レ達。曰。天地生意花草一般。何曾有二善惡之分一。子欲レ觀レ花則以レ花爲レ善。以レ草爲レ惡。如

侃、花間の草を去る。因りて曰く、『天地の間何ぞ善は培ひ難く、惡は去り難きや。』先生曰く、『未だ培はず未だ去らざるのみ。』(一)少間にして曰く、『此等の善惡を看るに、皆軀殼より念を起す。便ち(二)錯に會す。』(三)侃未だ達せず。曰く、『天地の生意は花草と一般、何ぞ曾て善惡の分ち有るべき。子、花を觀んと欲せば則ち花を以て善と爲し、草を以て惡となさんも、如し草を用ひんと欲する時は、復た草を以て善と爲さん。此等の善惡は皆汝の心の好惡に由りて生ずる所なり。故に知る是れ錯なるを。』曰く、『然らば則ち善も無く惡も無きか。』曰く、『善無く惡無きは理の靜にして、善有り惡有るは氣の動なり。氣に動かされば卽ち善も無く惡も無し。是を至善と謂ふ。』曰く、『佛氏も亦善無く惡無しと。何を以て異なる

有未稱何也。先生曰。文公精神氣魄大。是他早年合下便要繼往開來。故一向只就考索著述上用功。若先切己自修。自然不暇及此。到得德盛後。果憂道之不明。如孔子退修六籍。刪繁就簡。開示來學。亦大段不費甚考索。文公早歲便著許多書。晚年方悔。是倒

して自修せば、自然に此に及ぶに暇あらざらん。德盛なるに到り得て後、果して道の不明を憂ふる、孔子の退いて(四)六籍を修め、繁を刪り簡に就き、來學を開示するが如くならば、亦(五)大段甚の考索をも費さゞるべきに、文公は早歲より便ち許多の書を著し、晚年方に悔ゆ。是れ倒さに做し了れるなり』士德曰く、『晚年の悔は、(六)向來定本の誤と謂ひ、(七)又書を讀み得と雖も何ぞ吾事に益あらんやと謂ひ、(八)又此れ書籍を守り言語に泥むと全く交涉なしと謂ふが如き、是れ他は此に到りて方に從前功を用ひし錯を悔いて、方に己に切にして自修し去りしなり。』曰く、『然り。此は是れ文公の及ぶべからざる處、他は力量大にして一たび悔いて便ち轉ず。惜むべし、久しからずして卽ち世を去り、平日許多の錯處を皆改正するに及ばざりき。』

(一) 楊氏、名は驥、初め湛甘泉に從ひ、後陽明に學ぶ (二) 朱子也 (三) 直ちに聖人の學を繼承して後來の學ぶ者に開示せんと欲せり (四) 六經を刪訂して後來の學者に開示す (五) 根本に於て第一に書籍に考索思慮を費さじとの意 (六) 朱子が黃直卿に答ふる書中の語 (七) 呂氏約に答ふる書中の語 (八) 何叔京に答ふる書中の語

錬レ金而求二其足色一。金之成色所レ爭不レ多則煅錬之工省而功易レ成。成色愈下則煅錬愈難。人之氣質淸濁粹駁。有二中人以上中人以下一。其於レ道有二生知安行學知利行一。其下者必須二人一己百。人十己千一。及二其成功一則一。後世不レ知三作レ聖之本是純二乎天理一。却專去二知識才能上一求二聖人一。以爲聖人無レ所レ不レ知。無レ所レ不レ能。我須下是將二聖人許多知識才能一。逐一理會始得上。故不レ務下去二天理上一著中工夫上。徒弊レ精竭レ力。從二冊子上一鑽硏。名物上考索。形迹上比擬。知識愈廣而人欲愈滋。才力愈多而天理愈蔽。正如下見三人有二萬鎰精金一。不レ務二煅錬成色一求レ無レ愧二於彼之精純一。而乃妄希二分兩一。務レ同二彼之萬鎰一。錫鉛銅鐵雜然而投。分兩愈增而成色愈下。既其梢末無中復有上レ金矣。時曰仁在レ傍曰。先生此喩足三以破二世儒支離之惑一。大有レ功二於後學一。先生又曰。吾輩用レ功。只求二日減一。不レ求二日增一。減二得一分人欲一。便是復二得一分天理一。何等輕快脫洒。何等簡易。

がへもとむること 一五 形迹の上になぞらへ求め 一六 末端まで少しの金もなきに至るがごとし 一七 支離滅裂其本義を失へる惑

士德問曰。格物之說。如二先生所レ敎明白簡易人人見得。文公聰明絕レ世。於レ此反

士德問うて曰く、『格物の說、先生の敎ふる所の如き、明白簡易にして人人見得す。文公の聰明世に絕するに、此に於て反つて未だ審かならざるあるは何ぞや。』(一)(二)

先生曰く、『文公は精神氣魄大なり。是れ他は早年より合下に便ち往を繼ぎ來を開かんと要す。故に一向に只だ考索著述の上に就て功を用ふ。若し先づ己に切に(三)

金者。在足色。而不在分兩。所以爲聖者。在純乎天理。而不在才力也。故雖凡人。而肯爲學。使此心純乎天理。則亦可爲聖人。猶一兩之金。比之萬鎰。分兩雖懸絶。而其到足色處。可以無愧。故曰人皆可以爲堯舜者以此。學者學聖人。不過是去人欲而存天理耳。猶

多くして天理愈〻蔽はる、正に人の萬鎰の精金あるを見て、鍛錬成色彼の精純に愧づるなきを求むるに務めずして、乃ち妄に分兩を希ひ、彼の萬鎰に同じきを務めて錫鉛銅鐵雜然として投じ、分兩愈〻增して成色愈〻下り、既に其梢末復た金あるなきが如し。』時に曰仁傍に在りて曰く、『先生の此喩は以て世儒支離(一七)の惑を破るに足り、大に後學に功あり。』先生又曰く、『吾輩の功を用ふる、只だ日に減ずるを求めて日に增すを求めず。一分の人欲を減じ得れば便ち是れ一分の天理を復し得るなり。何等の輕快脫洒ぞ、何等の簡易ぞ。』

(一) 希淵、名宗兗、號我齋、山陰白洋の人、王の弟子也 (二) 伯夷は墨氏、名は元、字は公信、夷は謚也、弟叔齊と共に周の粟を食はずして、首陽山に餓死す。伊尹、名は摯、阿衡と號す、湯を輔けて桀を滅し、天下を平定す、湯後太子の子太甲を佐けて政を行ひ、百歳にして卒す (三) 純金 (四) 成色はもちまへの色、其色足りとゝのひてまぜ物なし (五) 足色は成色足れる義 (六) 分兩は衡の度數、目方也 (七) 一鎰は二十兩、又二十四兩とも云ふ (八) かけはなれること (九) 不純にして去るべき所少き時は (一〇) 清きものは粹、濁れるものは駁 (一一) 中庸に出づ、生知安行とは、生れながらにして道を知り、安んじて行ふを云ひ、學知利行とは、學びて道を知り、利して行ふを云ふ (一二) 精根をつからし、氣力をついやす也 (一三) 書籍上に於て研究すること (一四) 名義上に於てかん

鎰。文王孔子猶二九千鎰一。禹湯武王猶二七八千鎰一。伯夷伊尹猶二四五千鎰一。才力不レ同而純二乎天理一則同。皆可レ謂二之聖人一。猶二分兩雖レ不レ同而足色則同。皆可レ謂二之精金一。以二五千鎰者一而入二於萬鎰之中一其足色同也。以二夷尹一而厠二之堯孔之閒一。其純二乎天理一同也。蓋所三以爲二精

兩懸絶すと雖も、而も其の足色の處に到りては、以て愧づることなかるべし。故に人(八)皆以て堯舜たるべしと曰ふは此を以てなり。學者の聖人を學ぶは、是れ人欲を去りて天理を存するに過ぎざるのみ。猶ほ金を錬りて其足色を求むるがごとし。金の成色に爭ふ(九)所多からざれば、則ち煅錬の工省けて功成り易し。成色愈々下れば則ち煅錬愈々難し。人の氣質は清濁(一〇)・粹駁にして中人以上中人以下あり。其の道に於ける生知安行(一一)・學知利行あり。其下なる者は必ず須らく人一たびすれば己は百たびし、人十たびすれば己は千たびすべし。其成功に及びては則ち一なり。後世聖と作るの本は是れ天理に純なるにあるを知らず、却て專ら知識才能上に去りて聖人を求む。以爲らく聖人は知らざる所なく能くせざる所なし、我須らく是れ聖人の許多の知識才能を將て、逐一理會(一二)して始めて得べしと。故に天理上に去りて工夫を著くることを務めず、徒らに精を弊し力を竭し、冊子(一三)上より鑽研し、名物(一四)上に考索し(一五)、形迹上に比擬し、知識愈々廣くして人欲愈々滋く、才力愈々

孔子。才力終不ㇾ同。其同謂ニ之聖一者安在。先生曰。聖人之所ニ以爲ㇾ聖。只是其心純ニ乎天理一而無ニ人欲之雜一。猶三精金之所ニ以爲ㇾ精。但以三其成色足而無ニ銅鉛之雜一也。人到ㇾ純ニ乎天理一方是聖。金到ニ足色一方是精。然聖人之才力亦有ニ大小不同一。猶三金之分兩有ニ輕重一。堯舜猶ニ萬

聖たる所以は、只だ是れ其心天理に純にして人欲の雜なければなり。猶ほ精金(三)の精たる所以のごとし。但だ其成色足りて銅鉛の雜なきを以てなり。人は天理に純なるに到りて方に是れ聖、金(四)は足色(五)に到りて方に是れ精。然れども聖人の才力亦大小不同あり。猶ほ金の分兩に輕重(六)あるが如し。堯舜は猶ほ萬鎰(七)の如く、文王・孔子は猶ほ九千鎰のごとく、禹・湯・武王は猶ほ七八千鎰のごとく、伯夷・伊尹は猶ほ四五千鎰のごとし。才力同じからずして而も天理に純なるは則ち同じ。皆之を聖人と謂ふべし。猶ほ分兩同じからずと雖も、而も足色則ち同じければ、皆之を精金と謂ふべきがごとし。五千鎰の者を以てして萬鎰の中に入るゝも、其足色は同じ。夷・尹を以て之を堯・孔の閒に厠ふるも、其の天理に純なるは同じ。蓋し精金たる所以の者は、足色に在りて分兩に在らず。聖たる所以の者は、天理に純なるに在りて才力に在らず。故に凡人と雖も而も肯て學を爲し、此心をして天理に純ならしめば、則ち亦聖人たるべし。猶ほ一兩の金之を萬鎰に比するが如し。分

朋友觀レ書多有下摘二議晦庵一者上。先生曰是有レ心レ求レ異卽不レ是。吾說與二晦庵一時有二不レ同者一。爲三入レ門下レ手處有二毫釐千里之分一。不レ得レ不レ辨。然吾之心與二晦庵之心一。未二嘗異一也。若二其餘文義解得明當處一。如何動二得一字一。

朋友、書を觀て多く晦庵を摘議する者あり。(一)先生曰く、『是れ異を求むるに心ありて卽ち是ならず。(二)吾が說晦庵と時に同じからざるものあるは、門に入り手を下す處毫釐千里の分ちあるが爲に辨ぜざるを得ざればなり。(三)然も吾が心と晦庵の心と未だ嘗て異ならざるなり。其餘文義の解し得て明當なる處の若き、如何ぞ一字をも動かし得ん。』

(一) 朱熹は晦庵と號す、摘議は其の文義を指摘して非難するを云ふ (二) 異を求むとは、故らに異議を挾むとの意 (三) 吾が說云々、朱子と時に論旨を異にせるは、聖人の教の門に入り、解釋の手の下し方に、僅小の相違が甚大の相違となり、千里(遠き形容)の差を生じ來るが故に、勢ひ辯明を加へざるを得ず、而も兩者の心と心とは同じくて、文義の明かに當然と解し得る處は一字一句も動かし得じと也

希淵問。聖人可二學而至一。然伯夷伊尹於二

希淵(一)問ふ、『聖人學びて至る可しと。然るに伯夷・伊尹(二)の孔子に於ける、才力終に同じからざるに、其の同じく之を聖と謂ふは安に在るか。』先生曰く、『聖人の

之友。此來工夫何似。一友擧二虛明意思一。先生曰。此是說二光景一。一友叙二今昔異同一。先生曰。此是說二效驗一。二友惘然請レ是。先生曰。吾輩今日用レ功。只是要三爲レ善之心眞切一。此心眞切見レ善卽遷。有レ過卽改。方是眞切工夫。如レ此則人欲日消天理日明。若只管求二光景一。說二效驗一。却是助二長外馳病痛一。不二是工夫一。

先生曰く、『此は是れ光景(三)を說くのみ。』一友、今昔(四)の異同を叙ぶ。先生曰く、『此は是れ效驗(五)を說くのみ。』二友惘然(六)として是を請ふ(七)。先生曰く、『吾輩今日功を用ふるは、只だ是れ善を爲す心の眞切なるを要す。此心眞切(八)なれば善を見ては卽ち遷り、過あれば卽ち改む。方に是れ眞切の工夫なり。此の如くなれば則ち人欲日に消え天理日に明かなり。若し只管に光景を求め、效驗を說かば、却て是れ外に(九)馳するの病痛を助長するなり。是れ工夫ならず。』

(一) 比來は頃來と同義、ちかごろの意也、何似は如何と同義 (二) 心に一點の私欲を存せず、本體透明にして意思悉く天理に叶ふの工夫を爲すと答ふる也 (三) 形ありさまを言ふのみにて、未だ誠ならずと也 (四) 今日と曩日と其の工夫することとの相違せる點と、同じき點とを陳述する也 (五) きゝめ、しるし (六) うつとりとなる貌 (七) 說明を請ひ求むる也 (八) 眞實切實にて僞なく疎ならざるやうなれば (九) 光景を求め效驗を說くことは、却て外部に馳せて理を心外に求めんとするの病痛を助け長ぜしむるばかりにて、是れ工夫にはあらずと也

養之志不レ切。曰。何謂レ知レ學。曰。且道爲レ何而學。學二箇甚一。曰。嘗聞二先生教一。學是學レ存二天理一。心之本體即是天理。體二認天理一。只要三自心地無二私意一。曰。如レ此則只須下克二去私意一便是上。又愁二甚理欲不一レ明。曰。正恐這些私意認不レ眞。曰。總是志未レ切。志切目視耳聽皆在レ此。安有二認不レ眞的道理一。是非之心人皆有レ之。不レ假二外求一。講求亦只是體二當自心所一レ見。不レ成下去二心外一別有中箇見上。

先生問二在レ坐

理、天理を體認するは、只だ自らの心地(四)に私意なきを要すと。』曰く、『此の如くなれば則ち只だ須らく私意に克ち去りて便ち是なるべし。又甚の理欲の明かならざるを愁へんや。』曰く、『正に恐らくは這の些かの私意ありて認むること眞ならざらん。』曰く、『總て是れ志の未だ切ならざるなり。志切なれば目の視ると耳の聽くところ皆此に在り。安ぞ認むること眞ならざるの道理あらん。(五)是非の心は人皆之を有す。外に求むるを假らず。講求も亦只だ是れ自心の見る所に體當す。心外に去りて別に箇の見ありと成さず。』

(一) 此問また朱子學より來る也、涵養は修養、講求は研究 (二) 兎に角一つ言つて見よと也 (三) 甚は何に同じ (四) 心 (五) 是非を分別するの心なり、所謂良知なり

先生坐に在るところの友に問ふ。『比來(一)の工夫何似。』一友、(二)虚明の意思を擧ぐ。

夫說閑語管閑事。先生曰。初學工夫如此用亦好。但要使知出入無時莫知其鄕。心之神明原是如此。工夫方有著落。若只死死守著。恐於工夫上又發病。

し。但だ（五）出入時なく其鄕を知る莫し、心の神明原是れ此の如くなるを知らしむるを要す。工夫は方に著（六）落あり。若し只だ死死守著（七）せば、恐らくは工夫の上に於て又病を發せん。』

㊀ 尙謙が名也、前に出づ　㊁ 志を立てゝ支持するをいふ也　㊂ 一心が痛みの上にのみあらば　㊃ 閑語はむだばなし、閑事はむだこと、管するはかまふこと　㊄ 孟子の語を引く　㊅ 落著と同義　㊆ 死々守著は死守といふに同じ

侃問。專涵養而不務講求。將認欲作理。則如之何。先生曰。人須是知學。講求亦只是涵養。不講求只是涵

侃問ふ、『（一）涵養を專らにして講求を務めざれば、將に欲を認めて理と作すあらんとす。則ち之を如何。』先生曰く、『人は須らく是れ學を知るべし。講求も亦只だ是れ涵養なり。講求せざるは只だ是れ涵養の志切ならざるなり。』曰く、『何をか學を知ると謂ふ。』曰く、『（二）且く道へ、何の爲にして學び、箇の甚を學ぶか。』（三）曰く、『嘗て先生の敎を聞けり。學は是れ天理を存するを學ぶ。心の本體は卽ち是れ天

理也。無二私心一即是當レ理。未レ當レ理便是私心。若析二心與一レ理言レ之。恐亦未レ善。又問。釋氏於二世間一切情欲之私一都不二染著一。似レ無二私心一。但外二棄人倫一。却似レ未レ當レ理。曰。亦只是一統事。都只是成二就他一箇私己的心一。（右元靜所レ錄）

亦未だ善しからざらん。』又問ふ、『釋氏は世間一切の情欲の私に於て、都て染著せず。私心なきに似たり。但だ人倫を外棄す。却て未だ理に當らざるに似たり。』曰く、『亦只だ是れ一統の事。都て只だ是れ他の一箇私己の心を成就するのみ。』

(一) 延平、姓は李、名は侗、字は愿中、朱子の師也 (二) 心は即ち理なり、されば心と理とわかちていふことは不可なるべしといふ也 (三) 佛氏と同義 (四) そまり執するとなし (五) 人倫を外棄す、五倫を外にして顧みざるの意、即ち一面に於て情欲の私に染著せずと雖も、一面に於て人倫を外棄す、私心なきが如くにして、未だ理に當らざるものありとの質疑なり (六) 一統の事、一つ事也との意、一切の情欲に染著せずといふも、又人倫を外棄するも、畢竟は彼が一箇私己の滿足を得んとするのみであると也

右元靜の錄する所。

侃問。持レ志如二心痛一。一心在二痛上一。安有下工

侃問ふ、『志を持すること心痛の如し。一心痛上に在らば、安ぞ工夫の閑語を說き閑事を管するあらんや。』先生曰く、『初學の工夫は此の如く用ふるも亦好

處抽芽。然後發幹。發幹然後生枝生葉。然後是生生不息。若無芽。何以有幹有枝葉。能抽芽。必是下面有箇根在。有根方生。無根便死。無根何從抽芽。父子兄弟之愛。便是人心生意發端處。如木之抽芽。自此而仁民而愛物。便是發幹生枝生葉。墨氏兼愛無差等。將自家父子兄弟與途人一般看。便自沒了發端處。不抽芽。便知得他無根。便不是生生不息。安得謂之仁。孝弟爲仁之本。却是仁理從裏面發生出來。

して宗正寺丞となす、未だ至らずして元豐八年五月卒す、年五十四 (二) 此語近思錄に出づ (三) 墨氏、墨は姓、名は翟、宋に仕へて大夫となる、其學兼愛を主とす、著書墨子五十三篇今存す、兼愛の事孟子滕文公篇下に出づ、中に「墨氏兼愛是無父也」の語あり (四) 意味深遠にして言舌には盡し難しとの意 (五) 萬物の生ずる機 (六) 瀰漫はびこりひろがると、周遍はあまねきと (七) ゆきわたり行はれ、おこりうまるゝこと (八) 次第と同義 (九) 冬至に陰極まりて陽德生ず (一〇) 陽の十一月より陽の四月まで六陽 (一一) 陰も亦此の陽の理とおなじ (一二) 最初のおこり (一三) 芽をぬきんで生ずる也、生意は生ずるの意 (一四) かくしてはじめて是れ生々息まざる也 (一五) 民を仁し物を愛す、皆父子兄弟の愛に基く (一六) 愛に差等なしの語、孟子滕文公篇上に出づ (一七) 途人と一般に看るとは、道行く人を見ると同様との意 (一八) 論語學而篇の「孝弟也者、其爲仁之本與」を引く

問。延平云。當理而無私心。當理與無私心。如何分別。先生曰。心即

問ふ、『延平(一)云く、理に當りて私心なしと。理に當ると私心なきとは如何にして分別せん。』先生曰く、『心は即ち理なり。私心なきは即ち是れ理に當るなり。未だ理に當らざるは便ち是れ私心なり。若し心と理とを析ちて之を言はゞ、恐らくは(二)

瀰漫周遍無二處不一レ是。然其流行發生亦只有二箇漸一。所以生生不レ息。如二冬至一陽生一。必自二一陽生一而後漸漸至二於六陽一。若無二一陽之生一。豈有二六陽一。陰亦然。惟其漸。所以便有二箇發端處一。惟其有二箇發端處一。所以生。惟其生。所以不レ息。譬二之木一。其始抽レ芽便是木之生意發端

處あり、所以に生ず。惟だ其れ生ず、所以に息まず。之を木に譬ふれば、其始め芽を抽くは[一三]便ち是れ木の生意發端の處なり。芽を抽き然して後に幹を發し、幹を發して後に枝を生じ葉を生じ、然して後是れ生生息まず。若し芽なくんば何を以て幹あり枝葉あらん。能く芽を抽くは[一四]必ず是れ下面に箇の根の在るあればなり。根あれば方に生じ根なければ便ち死す。根なくんば何れより芽を抽かん。父子兄弟の愛は便ち是れ人心の生意發端の處にして、木の芽を抽くが如し。此れよりして民を仁[一五]して物を愛す。便ち是れ幹を發し枝を生じ葉を生ずるなり。墨氏は兼愛して差等[一六]なく、自家の父子兄弟を將て途人[一七]と一般に看る。便ち自ら發端の處を没了して芽を抽かず。便ち知り得たり他に根なきことを。便ち是れ生生して息まざるものにあらず。安ぞ之を仁と謂ふことを得ん。孝弟[一八]は仁を爲すの本なり。却て是れ仁の理は裏面より發生し出で來るなり。』

(一) 程子、明道、名顥、字伯淳、伊川の兄、河南洛陽の人也、北宋哲宗熙寧二年、權監察御史裡行となる、神宗勅

而靜。靜而不ニ妄動一則安。安則一心一意只在ニ此處一。千思萬想務求三必得ニ此至善一。是能慮而得矣。如レ此說是否。先生曰。大略亦是。

先生曰く、『大略亦是なり。』

(一) 向時、嚮時に同じ、曩日と同義、紛然は俗に云ふゴテ〳〵也、外に求むることの形容詞なり (二) さわぎさわぐこと (三) 他念他意なきこと (四) 一心一意推し斷むれば、千思萬想となる、志定まれば千思萬想復して一心一意となること容易也、至善を得るは卽ち吾性に復する也

問。程子云。仁者以ニ天地萬物一爲ニ一體一。何墨氏兼愛反不レ得レ謂ニ之仁一。先生曰。此亦甚難レ言。須ニ是諸君自體認出來始得一。仁是造化生生不レ息之理。雖三

問ふ、『程子(一)云ふ、仁者(二)は天地萬物を以て一體と爲すと。何ぞ墨氏(三)の兼愛は反つて之を仁と謂ふを得ざるや。』先生曰く、『此れ亦甚だ言ひ難し(四)。須らく是れ諸君自ら體認し出で來りて始めて得べし。仁とは是れ造化(五)の生生して息まざるの理にして、彌漫周遍(六)、處として是ならざるなしと雖も、然も其流行發生(七)、亦只だ箇の漸(八)あり。所以に生生して息まず。冬至(九)一陽生ずるが如し。必ず一陽の生ずるよりして後に漸漸六陽(一〇)に至る。若し一陽の生ずるなくんば、豈に六陽あらんや。陰(一一)亦然り。惟だ其れ漸なり、所以に便ち箇の發端(一二)の處有り。惟だ其の箇の發端の

物一爲二一體一。使レ有二一物失一レ所。便是吾仁有レ未レ盡處一。

仁なりと說き、萬物の一つをも其所を失はしむるものあるは、吾が仁の盡さゞる處ありとなす

只說二明明德一。而不レ說二親民一。便似二老佛一。

只だ明明德を說きて親民を說かざれば、便ち老佛(一)に似たり。

(一) 老佛は徒に虛無寂寞を旨として濟民に意なきを以て斯くいふ

至善者性也。性元無二一毫之惡一。故曰二至善一。止レ之是復二其本然一而已。

至善は性なり。性元一毫の惡なし。故に至善と曰ふ(一)。之に止まるは是れ其本然(二)に復るのみ。

(一) 至善に止まる、是れ大學の教旨也 (二) 本性に復するをいふ也

問。知下至善即吾性。吾性具二吾心一。吾心乃至善所レ止之地上。則不レ爲二向時之紛然外求一。而志定矣。定則不二擾擾一

問ふ、『至善は即ち吾が性にして、吾が性は吾が心に具はり、吾が心は乃ち至善の止まる所の地なるを知らば、則ち向(二)時の紛然として外に求めしを爲さずして志定まる。定まれば則ち擾擾たらずして靜なり。靜にして妄に動かざれば則ち安し。安ければ則ち一心(三)一意只だ此處に在り。千思萬想(四)務めて必ず此至善を得んことを求む。是れ能く慮りて得るなり。此の如く說くは是なりや否や。』

工夫難處全在格物致知上。此卽誠意之事。意既誠大段心亦自正。身亦自修。但正心修身工夫。亦各有用力處。修身是已發邊。正心是未發邊。心正則中。身修則和。

工夫の難處(一)は全く格物致知の上に在り。此れ即ち意を誠にするの事にして、意既に誠なれば大段(二)心も亦自ら正しく、身も亦自ら修まる。但ゞ正心。修身の工夫にも亦各ゞ力を用ふる處あり。修身は是れ已發の邊にして、正心は是れ未發の邊(三)なり。心正しきは則ち中、身修まるは則ち和なり。

(一) 難處は工夫のなし難き點といふ意　(二) 大方といふにひとし　(三) 修身、已發の邊とは、外に發するがはにして、これを和といふ、正心、未發の邊とは、內に蓄ふるがはにて、これを中といふ

自格物致知至平天下。只是一箇明明德。雖親民亦明德事也。明德是此心之德。卽是仁。仁者以天地萬

(一)格物致知より平天下に至るまで、只だ是れ一箇の明明德、親民と雖も亦明德の事なり。明德は是れ此の心の德、卽ち是れ仁なり。仁は天地萬物を以て一體を爲す。一物だも所を失ふものあらしむるは、便ち是れ吾が仁の未だ盡さゞる處あるなり。

(一) 大學の綱目を論ずる也、要するに是れ明德を明かにするにありて、親民も亦明德の事とす、明德は心の德卽ち

可㆑得㆓盡知㆒乎。今只管講㆓天理㆒來。頓放著不㆑循。講㆓人欲㆒來。頓放著不㆑去。豈格物致知之學。後世之學。其極至只做㆓得箇義襲而取的工夫㆒。

問㆓格物㆒。先生曰。格者正也。正㆓其不正㆒以歸㆓於正㆒也。

格物を問ふ。先生曰く、『格は正なり。其不正を正して以て正に歸するなり。』

一 朱子の格物は格を「イタス」に解し、陽明は「タダス」に解す、本條亦之を言ふ

問。知㆑止者知㆘至善只在㆓吾心㆒元不㆖㆑在㆑外也。而后志定。曰然。

問ふ、『止まることを知るとは、至善只だ吾が心に在りて元外に在らざることを知るなり。而して后に志定まるか。』曰く、『然り。』

一 大學の「知㆑止而后有㆑定」の文義に基きて言ふ也

問。格物於㆓動處㆒用㆑功否。先生曰。格物無㆑間㆓動靜㆒。靜亦物也。孟子謂。必有㆑事焉。是動靜皆有㆑事。

問ふ、『格物は動處に於て功を用ふるや否や。』先生曰く、『格物は動靜を間つることなし。靜も亦物なり。孟子謂く、必ず事ありと。是れ動靜皆事あるをいふなり。』

一 動處に於てとは事ある時との意也　二 ひとり動處にのみ限らず、靜も亦物也、之を格すべしと也　三 孟子公孫丑上篇に出づ

先生曰。今爲ニ吾所レ謂格物之學一者。尙多流ニ於口耳一。況爲ニ口耳之學一者能反ニ於此一乎。天理人欲其精微。必時時用ニ力省察克治一。方日漸有レ見。如今一說話之間。雖三口講ニ天理一不レ知三心中倏忽之間已有ニ多少私欲一。蓋有ニ竊發而不レ知者一。雖ニ用レ力察一之。尙不レ易レ見。況徒口講而

先生曰く、「今吾が謂ふ所の格物の學を爲す者、尙ほ多く口耳に流る。（一）況や口耳の學を爲す者能く此に反らん（二）や。天理人欲其精微なるものは、必ず時時力を省察克治（三）に用ふれば、方に日に漸く見るあり。如今一說話（四）の間、口に天理を講ずと雖も、心中倏忽（五）の間、已に多少の私欲あることを知らず。蓋し竊に發して知らざる者あり。力を用ひて之を察すと雖も尙ほ見易からず。況や徒に口に講じて盡く知るを得べけんや。今只管に天理を講じ來り、頓放（六）して循はず。人欲を講じ來り頓放して去らず。豈に格物致知の學ならんや。後世の學は其極（七）至只だ箇の義襲（八）ひて取るの工夫を做し得るのみ。」

（一）心術を他にして、口と耳との間に流るゝ也　（二）復すると同義　（三）省察は己に省みて考へること、克治は己に克ちてとゝのふること　（四）一場の話の中　（五）たちまち　（六）放任し置くこと、循はずは天理に循はず、去らずは人欲を去らざる也　（七）終局と同義　（八）義襲ひて取るとは、外面より襲ひ取るにて、內心より發するにあらざるを云ふ、孟子に出づ

心之本體即是性。性即是理。性元不動。理元不動。集義是復其心之本體。

(一)姓は薛、名は侃、字尚謙、號中離、廣東揭陽の人、王の高弟也 (二)孟子公孫丑篇上に孟子の不動心と告子の不動心を說く、以下此解也

萬象森然時。亦沖漠無朕。沖漠無朕。即萬象森然。沖漠無朕者一之父。萬象森然者精之母。一中有精。精中有一。

萬象森然たる時、亦沖漠無朕、沖漠無朕は即ち萬象森然。沖漠無朕は一の父、萬象森然は精の母、一中に精あり、精中に一あり。

(一)萬象は萬の形也、吾人が眼に視得る所の萬物也、森然は立並びて盛なる貌 (二)沖漠無朕は虛寂にして無聲無臭、即ち萬象森然の本體也、沖漠無朕はこれ一、萬象森然はこれ精、要するにこれ本體の實在と其現象として、二者即ち一也、(三)沖漠無朕は純一本原の父たり、萬象森然は精にして至らざるなきの母たり、然も一の中に精あり、精の中に一ありて、本二ならざる也

心外無物。如吾心發一念孝親。即孝親便是物。

心外に物なし。吾が心に一念を發して親に孝なるが如き、即ち親に孝なるは便ち是れ物なり。

(一)陽明は唯心論者也、一元論者也、萬物一體にして心外別に物なしと說く也 (二)自己の心に親に孝なる一念をおこすが如き、親に孝といふそれがやがてこれ物也、心を離れて別に物あるに非ず

如㆑此否。先生曰。亦是。

只存㆓得此心㆒常見在。便是學。過去未來事思㆑之何益。徒放㆑心耳。言語無㆑序。亦足㆓以見㆓心之不㆒存。

尚謙。問㆘孟子之不動心與㆓告子㆒異㆖。先生曰。告子是硬把㆓捉著此心㆒要㆓他不㆒動。孟子却是集㆑義到㆓自然不㆒動。又曰。心之本體原自不㆑動。

只だ此心を存し得て常に見在(一)す、便ち是れ學なり。過去未來の事は之を思ふも何の益かあらん。徒らに心を放つのみ。

言語序(二)なければ亦以て心の存せざるを見るに足る。

(一) 現在と同義

(二) 序はついで也、秩序也、次第也

尚謙、孟子の不動心が告子と異なるを問ふ。先生曰く、『告子は是れ硬く此心を把捉して他を動かさゞらんことを要し。孟子は却つて是れ義を集めて自然に動かざるに到らしむ。』又曰く、『心の本體は原ゝ自ら動かず。心の本體は即ち是れ性にして、性は即ち是れ理なり。性は元動かず、理も元動かず。義を集むるは是れ其心の本體に復るなり。』

夫子循循然善誘レ人。博レ我以レ文。約レ我以レ禮。是見破後如レ此說。博文約禮如何是善誘レ人。學者須レ思レ之。道之全體聖人亦難三以語二人。須二是學者自修自悟一。顏子雖レ欲レ從レ之末レ由也已。即文王望レ道未レ見意。望レ道未レ見乃是眞見。顏子沒而聖學之正派遂不二盡傳一矣。

らく之を思ふべし。道の全體は聖人も亦以て人に語り難し。須らく是れ學者たるもの自ら修め自ら悟るべし。顏子之に從はんと欲すと雖も未だ由なきのみとは、即ち(四)文王道を望みて未だ見ざるの意、道を望みて未だ見ずとは、乃ち是れ眞に見たるなり。顏子沒して聖學の正派遂に盡くは傳はらず。』

(一) 顏回は孔子の最も信頼せし弟子。文錄第二「別ニ湛甘泉一序」中に此語あるを疑ひ問ふ也 (二) 論語子罕篇に「顏淵喟然歎曰、仰レ之彌高、鑽レ之彌堅、瞻レ之在レ前、忽焉在レ後、夫子循循然善誘レ人、博レ我以レ文、約レ我以レ禮、」顏子の孔子を歎ぜる語也、喟然はためいきする貌、循々然はねんごろなる貌 (三) 前揭論語子罕篇の語 (四) 孟子離婁篇下の「文王視レ民如レ傷、望レ道而未ニ之見一」を引く

問。身之主爲レ心。心之靈明是知。知之發動是意。意之所レ著爲レ物。是

問ふ、『身の主を心と爲す。心の靈明は是れ知、知の發動は是れ意、意の著く所を物と爲す。是れ此の如きや否や。』先生曰く、『(一)亦是なり。』

(一) その如く考ふるも亦よろし

倚。曰無所偏倚是何等氣象。曰如明鏡然。全體大用略無纖塵染著。曰偏倚是有所染著。如著在好色好利好名等項上。方見得偏倚。若未發時。美色名利皆未相著。何以便知其所偏倚。曰雖未相著。然平日好色好利好名之心。原未嘗無。既未嘗無。即謂之有。既謂之有。則亦不可謂無偏倚。譬之病瘧之人。雖有時不發。而病根原不曾除。則亦不得謂之無病之人矣。須是平日好色好利好名等項一應私心掃除蕩滌。無復纖毫留滯。而此心全體廓然純是天理。方可謂之喜怒哀樂未發之中。方是天下之大本。

しみつきたる （一一）項はことがら、事柄の上に著き在る （一二）平常色を好むの心あるものは、元々其心のなき時あらざるが故に著はれざるも亦有といふべし （一三）間歇瘧といふ病 （一四）病の發せざる時、病根除かれたるにあらず、然れば間をおきて屢々發する也 （一五）一應、茲にては一般若くは凡てと釋くべし （一六）掃除ははきすてる、蕩滌はあらひすゝぐ （一七）極めて小さきこと （一八）とゞまりとゞこほる （一九）此心の本體がまつたくはがらかに、もつぱら天理となることが肝要ぞと也

問。顏子沒而聖學亡。此語不能無疑。先生曰。見聖道之全者惟顏子。觀喟然一歎可見。其謂

問ふ、『顏子沒して聖學亡ぶと。此語疑ひなき能はず。』先生曰く、『(二〇)聖道の全きを見る者は惟だ顏子のみ。(二一)喟然の一嘆を觀て見るべし。其の(二二)夫子は循循然として善く人を誘き、我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てすと謂へる、是れ見破りて後に此の如く說けり。博文約禮如何ぞ是れ善く人を誘く。學者須

滅。非二其全體大用一矣。無レ所レ不レ中。然後謂二之大本一。無レ所レ不レ和。然後謂二之達道一。惟天下之至誠然後能立二天下之大本一。曰。澄於二中字之義一尚未レ明。曰。此須二自心體認出來一。非三言語所二能喩一。中只是天理。曰。何者爲二天理一。曰。去二得人欲一便識二天理一。曰。天理何以謂二之中一。曰無レ所レ偏

り。色を好み、利を好み、名を好む等の項上に著在する(一一)が如きは、方に偏倚を見得るも、未發の時の若き、美色・名利皆未だ相著れず、何を以てか便ち其偏倚する所あるを知らん。』曰く、『未だ相著れずと雖も、然も平日(一二)色を好み、利を好み、名を好むの心は、原〻未だ嘗て無くんばあらず。既に未だ嘗て無くんばあらざる、卽ち之を有と謂ふ。既に之を有と謂へば則ち亦偏倚なしと謂ふべからず。之を瘧(一三)を病める人に譬ふるに(一四)、時に發せざることありと雖も、病根原〻曾て除かざれば、則ち亦之を無病の人と謂ふを得ず。須らく是れ平日色を好み、利を好み、名を好む等の項(一五)、一應の私心掃除蕩滌(一六)し、復た纖毫(一七)たりとも留滯(一八)することなくして、此心の全體(一九)廓然として純ら是れ天理たらしむべし。方に之を喜怒哀樂未發の中と謂ふべく、方に是れ天下の大本なり。』

(一) わづかの小事件の意 (二) 臨時、一件小事なり (三) 固有と同義 (四) 蔽はれてくらき義 (五) 暫く明かなるも暫くして消滅すること (六) 全體を用ふるを得ざる意、大用、一に瑩徹に作る (七) 中庸に云ふ、中は天下の大本也、和は天下の達道也 (八) 自身に體認して其義を見出し來れとの意 (九) かたよること (一〇) こまかきちりの

不能有。如下一件小事當喜怒者上平時無有喜怒之心。至其臨時亦能中節。亦可謂之中和乎。先生曰。在一時一事。固亦可謂之中和。然未可謂之大本達道。人性皆善。中和是人人原有的。豈可謂無。但常人之心。既有所昏蔽。則其本體雖亦時時發見。終是暫明暫

至りて亦能く節に中らば、亦之を中和と謂ふべきか。』先生曰く、『一時一事に在りても、固より亦之を中和と謂ふべし。然れども未だ之を大本達道と謂ふべからず。人性は皆善にして、中和は是れ人人原有的なれば、豈に無しと謂ふべけんや。但だ常人の心は既に昏蔽する所あれば、則ち其本體亦時時發見すと雖も、終に是れ暫明暫滅、其全體大用すべきに非ず。中ならざる所なくして然る後之を大本と謂ひ、和ならざる所なくして然る後之を達道と謂ふ。惟だ天下の至誠にして然る後に能く天下の大本を立つ。』曰く、『澄、中の字の義に於て尚ほ未だ明かならず。』曰く、『此は須らく自心に體認して出で來るべし。言語の能く喩す所にあらず。中は只だ是れ天理のみ。』曰く、『何者をか天理と爲す。』曰く、『人欲を去り得ば便ち天理を識らん。』曰く、『天理何以に之を中と謂ふや。』曰く、『偏倚する所なければなり。』曰く、『偏倚する所なきは是れ何等の氣象ぞ。』曰く、『明鏡の如く然り。全體大用して略ぼ纖塵の染著するなし。』曰く、『偏倚は是れ染著する所あ

恐下人於二未發前一討二箇中一。把レ中做二一物一看。如中吾向所レ謂認二氣定時一做上中。故令下只於二涵養省察上一用上功。延平恐四人未三便有二下レ手處一。故令三人時時刻刻。求二未發前氣象一。使二之正レ目而視惟此。傾レ耳而聽惟此。卽是戒二愼不レ睹。恐二懼不レ聞的工夫。皆古人不レ得レ已誘レ人之言也。

故に人をして時時刻刻未發の前の氣象を求めしめ、之をして目を正して視るも惟だ此れ、耳を傾けて聽くも惟だ此れならしむ。卽ち是れ睹ざるに戒愼し、聞かざるに恐懼するの工夫にして、皆古人の已むを得ずして人を誘くの言なり。』

(一) 姓は程、名は頤、字は正叔、河南洛陽の人、明道の弟也、宋哲宗元符三年西京國子監となり、徽宗崇寧年中直祕閣に任ず、大觀元年九月卒す、年七十五、嵩國公に封ぜらる (二) 姓は李、字は愿中、劍浦の人、朱子の師也 (三) 伊川は未發の前に中を求むべからずと謂ひ、延平は未發の前の氣象を看よと敎ふ、兩說相反するが如きも皆是なりと答ふる也 (四) 吾は陽明自身の稱、向には前にといふ義、前の寧靜存心の條を見るべし (五) 涵養はひたしやしなふこと、省察は身に省み考ふること (六) 中庸の語を引く、戒愼はいましめつゝしむこと、恐懼はおそれること (七) 古人の說二つに分れたるが如しと雖も、皆それ〴〵に止むことを得ざる言にて、人を導くの手段なり、省察を加ふるに於ては、自ら瞭然たるべし

澄問。喜怒哀樂之中和。其全體常人固

澄問ふ、『喜怒哀樂の中和たる、其全體は常人固より有すること能はず。(一) 一件小事の當に喜怒すべき者の如きは、平時喜怒の心あることなく、其の時に臨むに

往而非レ天。三光之上天也。九地之下亦天也。天何嘗有二降而自卑一。此所レ謂大而化レ之也。賢人如二山嶽一。守二其高一而已。然百仞者不レ能三引而爲二千仞一。千仞者不レ能三引而爲二萬仞一。是賢人未三嘗引而自高一也。引而自高則僞矣。

爲す能はず。千仞の者は引いて萬仞と爲す能はず。是れ賢人未だ嘗て引いて自ら高うせず、引いて自ら高うするは則ち僞なり。』

(一) 程伊川を指す　(二) 以下論語集註の程子の語也　(三) 日と月と星　(四) 地中の極めて深き處　(五) 天と言ひて同時に聖人を言ふ　(六) 天も聖も大にして變化自在なるのみ　(七) 賢人は、聖人が天の如く大にして化するが如くなる能はず、其自ら得たる高さを守るのみぞと也、故に百仞は百仞、千仞は千仞にて、之を引いて千仞となし萬仞となす能はず、賢人は苟も自ら高うすることなし、然るを自ら高うすると言ふは僞也

問。伊川謂不レ當下於二喜怒哀樂未發之前一求上レ中。延平却教三學者看二未發之前氣象何如一。先生曰。皆是也。伊川

問ふ。『伊川(一)謂く、當に喜怒哀樂未發の前に於て中を求むべからずと。延平(二)は却て學者に未發の前の氣象何如を省よと敎ふ。』先生曰く、『皆是なり。(三)伊川は人の未發の前に於て箇の中を討ね、中を把りて一物と做して看ること、吾が向に(四)謂ふ所の氣定まる時を認めて中と做すが如くならんことを恐る。故に只だ涵養省(五)察の上に於て功を用ひしむ。延平は人の未だ便ち手を下す處あらざるを恐る。

問㆓志至氣次㆒。先生曰。志之所㆑至氣亦至焉之謂。非㆓極至次貳之謂㆒。持㆓其志㆒則養㆑氣在㆓其中㆒。無㆑暴㆓其氣㆒則亦持㆓其志㆒矣。孟子救㆓告子之偏㆒。故如㆑此夾持說。

問。先儒曰。聖人之道必降而自卑。賢人之言則引而自高。如何。先生曰。不㆑然。如㆑此却是僞也。聖人如㆑天。無㆓

志(一)至り氣次ぐを問ふ。先生曰く、『志の至る所氣も亦至るの謂にして、極至次貳(二)の謂に非ず。其志を持すれば則ち氣を養ふことも其中に在り。其氣を暴ふ(三)ことなきは則ち亦其志を持するなり。孟子告子(五)の偏を救はんとす、故に此の如く夾(四)持して說けり。』

(一) 孟子公孫丑篇上の「夫志至焉、氣次焉」を引く (二) 極至は極所に至るもの、次貳は之に次ぐもの、朱子が孟子の解に註したる語也 (三) 告子名は不害、孟子と同時の人にして、仁內義外、性無善無不善等を主張し、說每に偏するを孟子救ひしこと、孟子告子篇に出づ (四) 物を兩手に夾み持つ義、志と氣とを說くを形容して謂ふ也

問ふ。『先儒(一)曰く、聖人の道は必ず降りて自ら卑しくし、賢人の言は則ち引いて自ら高くすと、如何。』先生曰く、『然らず。此の如きは却て是れ僞なり。聖人は天の如く、往くとして天に非ざるなし。三光(三)の上は天なり、九地(四)の下も亦天なり。天(五)何ぞ嘗て降りて自ら卑くすることあらん。此れ所謂(六)大にして之を化するなり。賢人(七)は山嶽の如し、其高きを守るのみ。然も百仞の者は引いて千仞と

澄曰。好ㇾ色好ㇾ利好ㇾ名等心。固是私欲。如二閒思雜慮一如何。亦謂二之私欲一。先生曰。畢竟從二好ㇾ色好ㇾ利好ㇾ名等根上一起。自尋二其根一便見。如二汝心中一。決知二是無ㇾ有下做二劫盜一的思慮上何也。以三汝元無二是心一也。汝若於二貨色名利等心一。一切皆如下不ㇾ做二劫盜一之心上一般都消滅了光光。只是心之本體。著ㇾ有二甚閒思慮一。此便是寂然不動。便是未發之中。便是廓然太公。自然感而遂通。自然發而中ㇾ節。自然物來順應。

澄曰く、『色を好み、利を好み、名を好む等の心は固より是れ私欲なり。閒思(一)雜慮の如きは如何、亦之をも私欲と謂ふや。』先生曰く、『畢竟色を好み、利を好み、名を好む等の根上(二)より起る。自ら其根を尋ぬれば便ち見ん。汝が心中の如き、決して(三)是れ劫盜を做すの思慮あることなきを知るは何ぞや。汝元是の心なきを以て也。汝若し貨色名利等の心に於て、一切皆劫盜を做さゞる心の如く一般(四)都て消滅して光光(五)たらしめんには、只だ是れ心の本體、甚の閒思慮ありてか著せん。此は便ち是れ寂然不動(六)、便ち是れ未發の中、便ち是れ廓然太公(七)、自然に感じて遂に通じ、自然に發して節に中り、自然に物來りて順應す。』

(一)無益なる思慮、雜念 (二)氣根の上 (三)決しては斷じてと同意、劫盜は他人をおびやかして盜むこと、あることなきは無の意 (四)同樣 (五)ひろ〳〵として大なる貌 (六)此語易の繫辭に出づ、心體靜寂にして外物の爲に動かず (七)近思錄に明道曰く、「廓然太公物、來順應」はほがらかにして偏らず、物來りてしたがひなびく也

便逐在色上。耳要聽時心便逐在聲上。如人君要選官時。便自去坐在吏部。要調軍時。便自去坐在兵部。如此豈惟失却君體。六卿亦皆不得其職。

善念發而知之而充之。惡念發而知之而過之。知與充與過者志也。天聽明也。聖人只有此。學者當存此。

惟だ君體を失却するのみならんや、六卿も亦皆其職を得ざるなり。』

(一)端拱は端坐して拱手する義、清穆は、威儀の多き貌　(二)周官の三公（太師・太傅・大保）と、三孤（少師・少傅・小保）との稱、職は冢宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空なり、明の制は吏部・戸部・禮部・兵部・刑部・工部なり、玆にては明朝の制を引く　(三)視聽嗅味觸の五つの感覺を爲す器官、即ち耳目口鼻皮膚　(四)目の見んとするときに、心が色の上に逐ひ到りて在ること　(五)耳の聞かんとするときに心が聲の上に逐ひ到りて在ること　(六)君主が臣下の官を選ぶに當り、要路の局に當る者の推薦を待たず、自ら吏部に出張して指定をし、軍隊の調練をなすにも、自ら兵部に到つて何かと指揮せんには君主の威嚴を傷くるのみか、六卿其他の官人は其の職を得ざるに至るべしと也、全意は心を君主に比し、五官を六卿に比し、以て心の物を逐ふことを戒むる也

善念發りて之を知りて之を充し、惡念發りて之を知りて之を過む。知ると充すと過むとは志なり。天の聰明なり。聖人は只だ此あり、學者當に此を存すべし。

(一)善念發する時、之を知りて充實し、惡念發する時、之を知りて防過す、これ人の志なり　(二)天の聰明とは天の自然なりとの意

以レ之喩レ學云。

問。世道日降。太古時氣象如何復見得。先生曰。一日便是一元。人平旦時起坐未二與レ物接一。此心清明景象。便如下在二伏羲時一遊上一般。

問。心要レ逐レ物。如何則可。先生曰。人君端拱清穆。六卿分レ職天下乃治。心統二五官一亦要レ如レ此。今眼要レ視時心

は混々として晝夜間斷なく涌出づる義、窮まらずとは盡きざる義

問ふ。『世道日に降る、(一)太古の時の氣象、如何にして復た見得ん。』先生曰く、『(二)一日は便ち是れ一元。(三)人平旦の時起坐して、未だ物と接せず、此心の清明なる景(四)象は便ち伏羲の時に在りて遊ぶが如きと一般なり。』

(一) 世の道德風俗が日々に降下し行くをいふ (二) 古はむかしの時の人の氣象を見るには、如何なる方法にかよらんとの意 (三) 一日は卽ち一元、一元は十二萬九千六百年 (四) 夜の明け方に起出でゝ、何物とも接せざる時、心に何事も思ふことなく、清く明かなる心地のありさまは、伏羲(三皇の一)氏時代に在りて遊べると同樣との意

問ふ。『心物を逐はんと要す。如何にせば則ち可ならん。』先生曰く、『人君は端(一)拱清穆、(二)六卿は職を分ちて天下乃ち治まる。心(三)五官を統ぶると亦此の如くなるを要す。今眼の視んと要する時、(四)心便ち色上に逐在し、(五)耳の聽かんとする時、心便ち聲上に逐在せんか、(六)人君の官を選ばんとする時、便ち自ら去りて吏部に坐在し、軍を調めんと要する時、便ち自ら去りて兵部に坐在するが如し。此の如きは豈に

樂稷之種一。是他資性合下便如レ此。成二就之一者。亦只是要三他心體純二乎天理一。其運用處皆從二天理上一發來。然後謂二之才一。到下得純二乎天理一處上。亦能不レ器。使下夔稷易レ藝而爲上。當二亦能一レ之。又曰。如下素二富貴一行二乎富貴一。素二患難一行中乎患難上。皆是不レ器。此惟養二得心體一正者能レ之。

の講ずる所は徒に表具師の裝綴（裝はよそほふ、綴はつゞる、）をなすのたぐひぞ、然れば一朝必要の時に臨みては自分立ちて行ふこと能はず、殆ど活用の効なかるべしと也 (六) 前の如く說けばとて、名物度數は全く理(修)むるに及ばずとは言はず、只だ先にすべきか後にすべきかを分別せよとの意、本文に「須先講得」「預先講得」等先の字に注意すべし (七) 才は心の働き也、其働きに隨ひて心體の成就をはかる也、其の能く爲す所とは長所也 (八) 夔は舜の臣にて音樂に長じて典樂の職に任じ、稷も亦同じく舜の臣にて種藝に達して后稷となりし故事を引く、資性はうまれつき (九) 才に隨ひて成就することも、心體が天理にもつぱらなるを要し、其時に臨んで運用する事々が、皆天理の上より發し來りて、始めてこれを才といふ也 (一〇) 論語爲政篇の「君子不レ器」を引く (一一) 互に藝を取代へてなさしむる也 (一二) 富貴に素しては云々、中庸の語、君子の行也

與三其爲二數頃無レ源之塘水一。不レ若レ爲二數尺有レ源之井水一。生意不レ窮。時先生在二塘邊一坐。傍有レ井故

『其の數頃(一)の源なき塘水(二)たらんよりは、數尺の源ある井水(三)にして生意(四)窮まらざるものたらんに若かず。』時に先生塘邊に在りて坐す。傍に井あり、故に之を以て學に喩ふと云ふ。

(一) 頃は百畝の廣さ、數頃は之を四つ五つ合せたるもの (二) 塘を構へ築きて溜め置く水 (三) 井の水 (四) 生意

在其中。如發得心體。果有未發之中。自然有發而中節之和。自然無施不可。苟無是心。雖預先講得世上許多名物度數。與己原不相干。只是裝綴。臨時自行不去。亦不是將名物度數全然不理。只要知所先後則近道。又曰。人要隨才成就。才是其所能爲。如夔之

し。苟も是の心なくば、預め先づ世上許多の名物度數を講じ得と雖も、己と原(五)相干らず。只だ是れ裝綴のみ。時に臨み自ら行ひ去らず。亦是れ(六)名物度數を將て全然理めざれとはせず。只だ要するに先後する所を知れば則ち道に近し。』又曰く、『人は才に隨ひて成就せんことを要す。才とは是れ其の能く爲す所にして、夔(八)の樂、稷の種(七)の如し。是れ他の資性合下に便ち此の如し。之を成就(九)する者も、亦只だ是れ他の心體天理に純ならんことを要す。其運用の處は皆天理上より發し來り、然る後に之を才と謂ふ。天理に純なる處に到り得れば亦能く器(一〇)ならず。夔と稷と(一一)藝を易へて爲さしむとも、當に亦之を能くすべし。』又曰く、『(一二)富貴に素しては富貴に行ひ、患難に素しては患難に行ふが如きは、皆是れ器ならず。是れ惟だ心體を養ひ得て正しき者之を能くす。』

(一) 禮樂に於ける儀文制度の類也　(二) 自己の心の本體を健全ならしむるの意　(三) 活用の意義は其中にありと也
(四) 前に出づ、中庸の語也　(五) 自己の心體成就せざるに、豫め許多の名物度數を講ずとも、元々相應ぜざることなれば、たとへば心なき表具師が、さほど美ならざる書畫に、優れたる錦繡の類を以て裝潢を施すとひとしく、其

背見レ天。謂二日月風雷卽天一不レ可。謂三人物草木不二是天一亦不可。道卽是天。若識得時何適而非レ道。人但各以二其一隅之見一。認定以爲二道止レ如レ此。所以不レ同。若解三向裏尋求見二得自己心體一。卽無レ時無三處不二是此道一。亙レ古亙レ今無レ終無レ始。更有二甚同異一。心卽道。道卽天。知レ心則知レ道知レ天。又曰。諸君要三實見二此道一。須下從二自己心上一體認上。不レ假二外求一始得。

ず。若し裏に向つて尋求し、(五)自己の心體を見得することを解せば、卽ち時となく處として是れ此道ならざるなからんや。古に亙り今に亙り、終なく始なし。更に甚の同異かあらん。心は卽ち道、道は卽ち天なり。心を知るときは卽ち道を知り天を知る。』又曰く、『諸君實に此道を見んことを要せば、(六)須らく自己の心上より體認すべし。外に求むることを假らずんば始めて得ん。』

(一) 方體はかたち也 (二) 執心（しふしん）固く思ひ込むこと (三) かゝはりとゞこほること、拘泥 (四) 一方の隅、一部分、見は見聞の知識 (五) 内面に向つてたづねもとむること (六) 内に向つて自己の心上より體認し、外に求むることなきは、本編の主旨也

問。名物度數亦須二先講求一否。先生曰。人只要レ成二就自家心體一。則用

問ふ。『名物度數(一)亦須らく先づ講求すべしや否や。』先生曰く、『人は只だ自家(二)の心體を成就するを要す。則ち用(三)は其中に在り。如し心體を養ひ得て果して未發(四)の中あれば、自然に發して節に中るの和あり。自然に施すとして可ならざるな

見。如ニ人走ヒ路一般。走ニ得一段一方認ニ得一段一。走到ニ岐路處一。有レ疑便問。問了又走。方漸能到ニ得欲レ到之處一。今人於ニ已知之天理一不ニ肯存一。已知之人欲不ニ肯去一。且只管愁レ不レ能ニ盡知一。只管閑講。何益之有。且待下克ニ得自己一。無中私可上レ克。方愁レ不レ能ニ盡知一。亦未レ遲在。

らざるなり。』

㊀致知格物の說を朱子に從ひて、此の問を發せる也　㊁此語また朱子の說による　㊂一通りの話に過ぎずとの意　㊃一般は同樣との義、比喩を以てせる也　㊄道路の一區切なり、例へば田地の一段と云ふが如し　㊅分れ路、えだみち、右か左か何れへ向ひてよきか迷ふ場所　㊆已に知り得たる　㊇徒らなる講究　㊈私意、私欲の私也

問。道一而已。古人論レ道往往不レ同。求レ之亦有レ要乎。先生曰。道無ニ方體一。不レ可ニ執著一。却拘ニ滯於文義上一。求レ道遠矣。如今人只說レ天。其實何

問ふ、『道は一のみ。古人道を論ずること往往同じからず。之を求むること亦要あるか。』先生曰く、『道方體(一)なし、執著(二)すべからず。却て文義上に拘滯(三)すれば道を求むるに遠し。如今の人只だ天を說く。其實何ぞ嘗て天を見ん。日月・風雷、卽ち天と謂ふは不可なり。人物・草木、是れ天ならずと謂ふも亦不可なり。道は卽ち是れ天なり、若し識り得る時は何くに適くとしてか道に非ざらん。人は但ゝ其一隅(四)の見を以て、認定して以て道は此の如きに止まると爲す。所以に同じから

愈深。必使₂精白無₁一毫不₁徹方可。

問。知至然後可₃以言₂誠意₁。今天理人欲知レ之未レ盡。如何用₂得克己工夫₁。先生曰。人若眞實切レ己用レ功不レ已則於₂此心₁天理之精微日見₂一日₁。私欲之細微亦日見₂一日₁。若不レ用₂克己工夫₁。終日只是說話而已。天理終不₂自見₁。私欲亦終不₂自

問ふ。『(一)知至りて然る後に以て誠意を言ふべしと。(二)今天理人欲之を知ること未だ盡さず。如何ぞ克己の工夫を用ひ得ん。』先生曰く、『人若し眞實に己に切にして、功を用ひて已まざれば、則ち此心に於て天理の精微日一日と見え、私欲の細微亦日一日と見えん。若し克己の工夫を用ひずんば、終日只だ是れ(三)說話するのみ。天理終に自ら見えず、私欲も亦終に自ら見えず。人の路を走るが如きと(四)一般、(五)一段を走り得て方に一段を認め得、走りて(六)岐路の處に到り、疑ひあれば便ち問ひ、問ひては又走り、方に漸く能く到らんと欲するの處に到り得ん。今人(七)已知の天理に於て肯て存せず、已知の人欲も肯て去らず、且つ只管に盡く知ること能はざるを愁へて只管に(八)閒講するも、何の益か之れあらん。且く自己に克ち得て、(九)私の克つべきなきを待ちて、方に盡く知ること能はざるを愁ふとも、亦未だ遲か

這一間之房。人初進來。只見二一箇大規模如レ此。處久便柱壁之類一一看得明白。再久如三柱上有二些文藻一。細細都看出來。然只是一間房。

藻あるが如きも細細(六)都て看出し來らん。然も只だ是れ一間の房のみ。』

(一) 精はくはし、粗はあらき (二) 一つの部屋 (三) 其處に居ることの (四) なはもの意 (五) かざりのもやう (六) こまごましたる

先生曰。諸公近見時少二疑問一何也。人不レ用レ功。莫レ不三自以爲二已知レ爲レ學。只循而行レ之是矣。殊不レ知私欲日生。如二地上塵一。一日不レ掃便又有二一層一。著實用レ功便見道無二終窮一。愈探

先生曰く、『諸公(一)近ごろ見る(二)時疑問少きは何ぞや。(三)人功を用ひずして、自ら以て已に學を爲すを知れば、只だ循ひて之を行ふを是なりとなさゞるはなし。殊に知らず、私欲日に生ずること地上の塵の如く、一日掃かざれば便ち又一層あることを。著實(四)に功を用ふれば便ち見る、道の終窮なくして、愈々探れば愈々深きことを。必ず精白(五)して一毫の徹せざる(六)ことなからしむれば方に可なり。』

(一) 諸公は諸君と同義 (二) 近頃會見するに疑問を發すること多からざるは如何と也 (三) 世人は功夫を用ふることなしに、自分では已に學を爲すことを知れば、只だ其教へに順ひて行へばよしとなすと也 (四) 實體に功夫を用ふれば (五) しらげて白くすること、米をしらげるが如く研磨するの意 (六) 通ぜざることなからしむるの意

至之刻一始得上。此便有ニ不レ通處一。學者須下先從ニ禮樂本原上一用中功。

曰仁云。心猶鏡也。聖人心如ニ明鏡一。常人心如ニ昏鏡一。近世格物之說。如下以レ鏡照上レ物。照上用レ功。不レ知ニ鏡尚昏在一。何能照。先生之格物。如下磨レ鏡而使中之明上。磨上用レ功。明了。後亦未ニ嘗廢上レ照。

曰仁云く、『心は猶ほ鏡のごとし。聖人の心は明鏡の如く、常人の心は昏鏡(二)の如し。(一)近世の格物(三)の說は、鏡を以て物を照すが如し。照す上に功を用ひて鏡の尚ほ昏きことあるを知らず。何ぞ能く照さん。(四)先生の格物は、鏡を磨きて之を明かならしむるが如し。磨く上に功を用ひて明かにし、後亦未だ嘗て照すことを廢せず。』

(一) 人心を鏡にたとへて言へる也 (二) くらきかゞみ、聖人の心の明鏡に對して云ふ (三) 朱子の格物說を指す (四) 王陽明の格物說を云ふ、前者は照す上に功夫を用ふるが故に、却つて昏きことありて照さず、後者は磨く上に功夫を用ふるが故に、明かにして照さゞることなしと也

問ニ道之精粗一。先生曰。道無ニ精粗一。人之所レ見有ニ精粗一。如ニ

道の精粗(一)を問ふ。先生曰く、『道に精粗なし。人の見る所精粗あるのみ。這の一(二)間の房の如き、人初めて進み來り、只だ一箇大規模の此の如きを見ん。(三)處ること久しければ便ち柱壁の類一一看得て明白なり。(四)再び久しければ柱上些かの文(五)

一毫在則衆惡相引而來。問律呂新書。先生曰。學者當務爲急。算得此數熟。亦恐未有用。必須心中先具禮樂之本方可。且如其書說。多用管以候氣。然至冬至。至那一刻時。管灰之飛。或有先後。須臾之間。焉知那管正値冬至之刻。須自心中先曉得冬

● 私意・私欲を掃き除きてはがらかに淸め、聊たりとも私の存在せざることを求めてよろしと也、いさゝかにても私のあらんには、即ち多くの惡念相引連れて來らんとの意、一毫は一本の毛、小さき歟

(一)律呂新書を問ふ。先生曰く、『學者は當務を急と爲す。此數を算し得て熟するも、亦恐らくは未だ用あらざらん。必ず須らく心中先づ禮樂の本を具ふること方に可なるべし。且つ其書の說の如きは、多く管を用ひ以て氣を候ふ。然も冬至の那の(二)一刻の時に至りて、管灰の飛ぶや、或は先後あり。(三)須臾の間、焉ぞ那の管の正に冬至の刻に値ふを知らん。須らく自心の中先づ冬至の刻を曉り得て始めて得べし。(四)此れ便ち通ぜざる處あらば、學者須らく先づ禮樂の本原上より(五)功を用ふべし。』

(一) 朱子の弟子蔡元定の作る所、中に管を以て氣を候ふの法あり、密室に十二の管を埋め、上端を平にし、葭灰を實て緹素を覆ひ、以て十二ケ月の中氣を候ふ、冬至の氣至れば則ち黃鐘の管灰を飛し素を衝く、大寒以下各々其月を以て隨つて應ず、而も時序正し云々、元定字は季通、西山と號す、建陽の人也 (二) 冬至の子の刻をいふ、子の刻に至れば則ち一陽生ずるにより、陽氣の動きにて管の灰を飛ばす也 (三) しばらくのあひだ (四) 律呂の事に通ぜざる處あらばの意 (五) 功夫を用ふべしと也

生曰。只是一件。流行爲レ氣。凝聚爲レ精。妙用爲レ神。

喜怒哀樂本體自是中和的。纔自家著ニ些意思一。便過不及。便是私。

問。哭則不レ歌。先生曰。聖人心體自然如レ此。

克レ己須下要ニ掃除廓清一毫不上レ存方是。有ニ

聚を精と爲し、妙用を神と爲す。』

(一) 仙家の說、人の動靜、皆氣・神・精の發動に基く、其根元を元氣・元神・元精と云ふ (二) 一の物件のみとの意 (三) 流行する側からは氣と謂ひ、凝聚する側からは精と謂ひ、妙用の側からは神と謂ふ、元は一つ也

(一)喜怒哀樂の本體は自ら是れ中和なり。纔に自家些かの意思を著くれば、便ち過不及、便ち是れ私なり。

(一) 喜・怒・哀・樂の本體は中和なり、聊にても自己の意思を著くれば、過ぎ或は及ばざるものとなりて、私に墮する也

問ふ、『(一)哭すれば則ち歌はずと。』先生曰く、『聖人の心體は自然に此の如し。』

(一) 論語述而篇に云ふ「子食ニ於有レ喪者之側一、未ニ嘗飽一也、子於ニ是日一哭、則不レ歌。」聖人の心體は自然に此の如きものにて、故意に飽かず歌はざるを爲すに非ずと也

己に克つは須らく掃除し(一)廓清し、一毫も存せざるを要して方に是なるべし。一毫の在るあれば則ち衆惡相引きて來る。

問。文中子是如何人。先生曰。文中子庶二幾具レ體而微一。惜其蚤死。問。如何却有二續レ經之非一。曰。續レ經亦未レ可二盡非一。請問。良久曰。更覺良工心獨苦。

許魯齋謂二儒者以レ治レ生爲一レ先之說。亦誤レ人。

問二仙家元氣元神元精一。先

問ふ、『文中子(一)は是れ如何なる人ぞ。』先生曰く、『文中子は體を具へて微なるに(二)庶幾し。惜しむらくは其の蚤に死せしことを(三)。』問ふ、『如何ぞ却て經を續ぐの(四)非ありや。』曰く、『經を續ぐ亦未だ盡く非なりとすべからず。』請ひ問ふ。良久しうして曰く、『更に覺ゆ、良工心獨り苦むことを(五)。』

(一) 文中子姓は王、名は通、河東龍門の人也、隋の開皇元年に生れ、義寧二年に歿す、年三十八、一說に三十四歲 (二) 孟子公孫丑篇上に云ふ「冉牛・閔子・顏淵具二其體一而微」を引く (三) 蚤死、早世と同義 (四) 六經の續篇を編することと前に出づ (五) 「更覺良工心獨苦」是れ杜子美の詩句なりと、蓋は陽明文中子の苦心を知り、敢て非となさざるより、此の杜子美の詩句を誦して、良工の心獨り苦しめるを歎ずる也

許魯齋(一)が儒者は生を治むる(二)を以て先と爲すと謂ふの說は亦人を誤る。

(一) 許は姓、魯齋は名、字は仲平、懷州河內の人、元の國子祭酒に任ず、致仕の後屢上書して、これを論ず、至元十八年卒す、年七十三 (二) 生業を治むるを以て先とし、衣食の道を講ずべきを謂ふ、其意家を治むるにありて、貨殖を謂ふにあらず、然れども生を治むるを以て先となすは語弊あり、人を誤るを免れずと也

仙家の元氣・元神・元精を問ふ(一)。先生曰く、『只だ是れ一件(二)。流行を氣と爲し、凝

是常存ニ箇善念一要ニ爲レ善去レ惡否。曰。善念存時即是天理。此念即善。更思ニ何善一。此念非レ惡。更去ニ何惡一。此念如ニ樹之根芽一。立レ志者長ニ立此善念一而已。從ニ心所レ欲不レ踰レ矩。只是志到ニ熟處一。

要するや否や。』曰く、『善念の存する時は即ち是れ天理にして此念即ち善なり。更に何の善をか思はん。此念惡に非ざれば更に何の惡をか去らん。此念は樹の根芽の如し。志を立つとは此善念を長(二)立するのみ。(三)心の欲する所に從ひて矩を踰えざるは只だ是れ志の熟(四)處に到れるなり。』

(一) 唐は姓、詡は名、斯道の人、字號詳ならず (二) 善念の根を長ぜしめ芽を立たしむる也 (三) 此語論語爲政篇を引く (四) 十分にとゝのひたる處

精神道德言動大率收斂爲レ主。發散是不レ得レ已。天地人物皆然。

精神・道德・言動は大率收斂を主と爲す、(一)發散は是れ已むを得ざるなり。天地・人物皆然り。

(一) 收斂は内に收め入るゝ也、精神・道德・言動、何れも修養を積みたらんには、聚れ内に收めて充實せしむべし、言動も妄言・妄動を愼み、已むことを得ずして外に發散するときは、卽ち其勢强盛なる也、天地の氣は秋冬に收斂して、春夏に至つて其の發生盛也、天地、人物皆同じきぞと也、

時文王若在。或者不致興兵。必然這一分亦來歸了。文王只善處紂。使不得縱惡而已。

して在らしめば、其の結果何如と問ふ也 ㊃ 天下三分して周其二を有つ、殘の一分も亦來りて文王に歸せんとの意 ㊄ 文王ならば商を伐つまでもなく、紂王を善く制裁して、其惡の縱なる不善を行はしめざりしならんと也

問。孟子言執中無權猶執一。先生曰。中只是天理。只是易。隨時變易。如何執得。須是因時制宜。難預先定一箇規矩在。如後世儒者要將道理一一說得無罅漏。立定箇格式。此正是執一。

唐詡問。立志

問ふ。『孟子の言に、（一）中を執りて權なくんば猶ほ一を執るが如し』と。先生曰く、『（二）中は只だ是れ天理、只だ是れ易、時に隨ひて變易す。如何ぞ執り得ん。須らく是れ時に因りて宜しきを制すべし。預め先づ一箇の規矩を定めて在り難し。後世の儒者の如きは、（三）道理を將て一一說き得て（四）罅漏なからんことを要し、箇の格式（五）を立て定む。此れ正に是れ一を執るなり。』

㊀ 孟子盡心篇上に出づ、子莫（人名）の中を執るは權衡を得ざるものなれば、一を執るが如しと云へる也 ㊁ 中は天理にして、隨時變易する也、されば時の宜しきを制せんことを要す、豫め規矩を定め置くべきにあらずと也、規は「ぶんまはし」矩は「まがりかね」茲にては法則をいふ也 ㊂ 朱子の格物說など、一々道理を究說して、罅漏なからんとし、法則を立て定むるは、却て是れ一を執るもの也との意 ㊃ すきまよりもるゝこと ㊄ 儀式などの制

（一）唐詡問ふ。『志を立つるには是れ常に箇の善念を存して、善を爲し惡を去るを

略亦是。但謂二上一截下一截一。亦是人見偏了如レ此。若論二聖人大中至正之道一。徹レ上徹レ下。只是一貫更有二甚上一截下一截一。一陰一陽之謂レ道。但仁者見レ之便謂二之仁一。智者見レ之便謂二之智一。百姓又日用而不レ知。故君子之道鮮矣。仁智豈可レ不レ謂二之道一。但見得偏了便有二弊病一。

蓍固是易。龜亦是易。

蓍は固より是れ易。龜も亦是れ易なり。(一)

(一) 蓍は「めどき」と云ひて占の具。龜も亦占の具、龜の甲を焼きて占をなす。蓍と龜とは異なるものなれども、其疑を決し猶豫を定むる所以に至りては、龜易畢竟異なる事なしと也

問。孔子謂二武王一未レ盡レ善。恐亦有レ不レ滿レ意。先生曰。在二武王一自合レ如レ此。曰。使二文王未一レ没。畢竟如何。曰。文王在時。天下三分已有二其二一。若到二武王伐レ商之

問ふ。『孔子は武王を謂つて未だ善を盡さずと。(一) 恐らくは亦意に滿たざるあらんか。』先生曰く、『武王に在りては(二)自ら此の如くなるべし。』曰く、『文王をして未だ沒せざらしめば畢竟如何。』(三)曰く、『文王の在る時、天下三分して已に其二を有つ。若し武王商を伐つの時に到りて文王若し在らば、或は兵を興すを致さざるも、必然這の一分亦來歸せしならん。(四)文王は只だ善く紂を處して、(五)惡を縱にするを得ざらしめんのみ。』

(一) 論語八佾篇に出づ「謂レ武盡レ美矣、未レ盡レ善也」 (二) 「武王に在りて」は「武王に就いては」と同意 (三) 文王を

苦。於二身心一無二分毫益一。視下彼仙佛之徒清心寡慾超二然於世累之外一者上。反若レ有レ所レ不レ及矣。今學者不三必先排二仙佛一。且當三篤レ志爲二聖人之學一。聖人之學明則仙佛自泯。不レ然則此之所レ學恐彼或有レ不レ屑。而反欲二其俯就一。不二亦難一乎。鄙見如レ此。先生以爲二何如一。先生曰所レ論大

(一) 王は姓、嘉秀は名、字號鄕貢詳ならず (二) 久視の視は生活の意、久しく活くる也 (三) 不替と同義 (四) 奥深き處、いたりきはまるところ (五) 上下に截ちて、上は道の精微なる所を謂ひ、下は道の卑近なる所を謂ふ (六) 佛氏も仙家も道の精微なる所に觸れては居れども、未だ眞實の道に入る正路にてはなきぞと也 (七) 官に仕ふる者 (八) 科は及第、貢は鄕貢、傳は宦官や寵臣の手引により入りて仕ふる者、一般とは一通りと同義、一通り官職を務ずれば、大官に昇進することを得るとの意也、入仕とは官府に入りて仕ふる也、正路とは顧問招聘によつて出でゝ仕ふるを云ふ也、前の三者は何れも正路にあらざる故に君子これに由らざることを言ふ也 (九) 仙・佛も極至の處は儒者とはゞ同しく、上一截を有しながら、下一截は取入るゝことなく、聖人の完全なる道德には似つかずと雖も、其の上一截の聖人と同じきものは誣ふべからず、とて仙佛のあながちに取る處なしとのみ排斥すべからざるを說ける也 (一〇) 後世の儒者は下一截卽ち道の卑近なる所を得て、却て分裂して眞實を失ひ、其末派が記誦とて、古書の暗記を主とするに至り、詞章とて文章詩賦に力を入れ、功利とて功名利益に沒頭し、訓詁とて字義の穿鑿に腐心する弊など出來りて、是等聖賢の道を學びながら、猶且異端に墮ちたる上、此の四つの流派の徒終身辛勞艱苦して、何等身に益する所なきことを說き、却つて仙佛の徒が恬淡にして私慾に遠ざかり、世間の煩累を他所に見て超然たる態度に比ぶれば、下一截を得て得意然たる儒者の反つて及ばざる所あるが如しと喝破したる也 (一一) 今の學者は仙佛排斥を事とせず、これ聖人の學に忠實なれとの意也、聖人の學明かになれば、自然と仙佛は消滅し去るべきをいふ、若し然る能はざらんには、己等の學ぶ所自は彼等のいさぎよしとせざる點あるべきぞ、それを是非とも服從せしめんと欲するは難事ならずやと也、以上は一嘉秀の述ぶる所也 (一二) 上一截・下一截是れ已に見る所偏する所也

傳。率二一般一做レ到二大官一。畢竟非二入仕正路一。君子不レ由也。仙佛到二極處一與二儒者一略同。但有二了上一截一。遺二了下一截一。終不レ似二聖人之全一。然其上一截同者不レ可レ誣也。後世儒者又只得二聖人下一截一。分裂失レ眞。流而爲二記誦詞章功利訓詁一。又卒不レ免レ爲二異端一。是四家者終身勞

訓詁と爲る。亦卒に異端たるを免れず。是の四家の者は終身勞苦し、身心に於て分毫の益なし。彼の仙佛の徒の清心寡慾にして世累の外に超然たる者に視れば、反つて及ばざる所あるが若し。今學者（一一）必ずしも先づ仙佛を排せず、且つ當に志を篤くして聖人の學を爲すべし。聖人の學明かなれば則ち仙佛自ら泯びん。然らずんば則ち此の學ぶ所は、恐らくは彼れ或は屑しとせざることあらん。而も反つて共俯して就かんことを欲す、亦難からずや。鄙見此の如し。先生以て何如と爲す。』先生曰く、『論ずる所大略亦是なり。但〻（一二）上一截・下一截と謂ふは亦是れ人の見ること偏する此の如し。若し聖人大中至正の道を論ぜば、上に徹し下に徹し、只だ是れ一貫して、更に甚の上一截・下一截あらんや。一陰一陽之を道と謂ふ。但〻仁者は之を見て便ち之を仁と謂ひ、智者は之を見て便ち之を智と謂ふ。百姓は又日に用ひて知らず。故に君子の道鮮し。仁智豈に之を道と謂はざるべけんや。但〻見得すること偏すれば便ち弊病あり。』

終日應酬而不レ出二天理一即是在二腔子裏一。若出二天理一。斯謂二之放一。斯謂二之亡一。又曰。出入亦只是動靜。動靜無レ端。豈有レ鄕邪。

在ることを要すと。此の腔子も亦天理のみとは、天を以て軀殼となす也、日一日外物と應酬するも、天理の外に出でざるは、是れ腔子の裏に在るといふもの也、天理の外に出づれば、故に於て放つといひ、亡ふといふと也(六)出入といへるも亦心の動と靜と也、動靜に端なければ、何ぞ鄕あることあらんと也

王嘉秀問。佛以レ出二離生死一誘レ人入レ道。仙以二長生久視一誘レ人入レ道。其心亦不三是要二人做二不好一。究二其極至一亦是見二得聖人上一截一。然非二入レ道正路一。如二今仕者一有レ由レ科。有レ由レ貢。有レ由レ

王嘉秀(一)問ふ。『佛は生死を出離するを以て人を誘ひて道に入らしめ、仙は長生久視(二)を以て人を誘ひて道に入らしむ。其心亦是れ人の不好(三)を做すことを要めず。其極至(四)を究むれば亦是れ聖人の上一截(五)を見得す。然れども道に入るの正路に非ず。今の仕ふる者(七)の如き、科(八)に由るあり、貢に由るあり、傳(六)に由るあり。一般を奉ぜれば大官に到ることを做す。畢竟入仕の正路に非ざれば、君子は由らざるなり。(九)仙・佛も極處に到れば儒者と略ゝ同じ。但ゝ上一截を有して下一截を遺れ、終に聖人の全きに似ず。然れども其上一截の同じき者は誣ふべからず。後世(一〇)の儒者、又只だ聖人の下一截を得、分裂して眞を失ひ、流れて記誦・詞章・功利・

郷一。此雖下就二常人心一說上。學者亦須三是知二得心之本體亦元是如ㇾ此。則操存功夫始沒二病痛一。不ㇾ可三便謂二出爲ㇾ亡入爲ㇾ存。若論二本體一。元是無ㇾ出無ㇾ入的。若論二出入一則其思慮運用是出。然主宰常昭昭在ㇾ此何出之有。既無ㇾ所ㇾ出。何入之有。程子所ㇾ謂腔子亦只是天理而已。雖二

るを知得すべし。則ち操存(三)の功夫始めて病痛沒からん。便ち(四)出づるを亡ふと爲し入るを存すと爲すと謂ふべからず。若し本體を論ぜば、元是れ出づることなく入ることなきなり。若し出入を論ずれば則ち其思慮運用は是れ出づるなり。然れども主宰常に昭昭として此に在れば何の出づることかこれあらん。既に出づる所なし、何の入ることかこれあらん。程子の所謂腔子(五)も亦只だ是れ天理のみ。終日應酬すと雖も、而も天理を出でざるは、即ち是れ腔子の裏に在るなり。若し天理を出づれば、斯に之を放つと謂ひ、斯に之を亡ふと謂ふ。』又曰く、『(六)出入も亦只だ是れ動靜なり。動靜端なし、豈に鄕あらんや。』』

㊀ 孟子告子篇上に「孔子曰、操則存、舍則亡、出入無ㇾ時莫ㇾ知二其郷一、惟心之謂與」とあるを引く。其郷とは嚮ふ所の義也 ㊁ 以下王氏の言。此は常人の心に就いて說きたれども、學者も亦心の本體元々此の如きことを知得せよと也 ㊂ この事を知得すれば則ち始めて操存の功夫に病痛なからん、之をわきまへずして只徒に心を操存せんと功夫せば却て病痛あらんと也 ㊃ 出入を亡と存とにあてはめんこと然るべからず、本體は出入なき也、若し出入すと論ぜんには、思慮の運用を出づるとせんかなれども、主宰たる天理あきらかに心にあれば、出て亡ふといふことあるべき筈なし、出づることなければ入ることもなしと也 ㊄ 腔子は軀の殼也、程子(明道)曰く、心腔子の裏に

中レ節之和一。須レ知是他未發之中亦未レ能二全得一。

易之辭。是初九潛龍勿レ用六字。易之象。是初畫。易之變。是値二其畫一。易之占。是用二其辭一。

夜氣是就二常人一說。學者能用功。則日間有レ事無レ事皆是此氣翕聚發生處。聖人則不レ消レ說二夜氣一。

澄問。操存舍亡章曰。出入無レ時莫レ知二其

易の辭は是れ初九は潛龍用ふる勿れ(初九潛龍勿レ用)の六字。易の象は是れ初畫。易の變は是れ其畫に値す。易の占は是れ其辭を用ふるなり。

● 易は辭・象・變・占の四を以て重要となすの例に引用せるなり、初九云々は辭也、象とは卦爻也、初の一畫これ也、變とは其畫に値する所也、占とは其爻辭を用ふるを謂ふ也

夜氣は是れ常人に就いて說く。學者能く功を用ふれば、則ち日間事ある事なきも、皆是れ此氣の翕聚發生する處なり。聖人は則ち夜氣を說くを消ひず。

● 夜氣の說、孟子告子篇上に出づ、人の良心が一たび外物の蔽ふ所となりて、其本體を失ふことあるも、夜間寂なる境に入りて、再び回復して明かなるを得る、之を夜氣と名く、翕はあつまる也、聚も亦あつまる也、意は學者能く功を用ふるに於ては、日中事あり又事なき時も、此の夜氣あつまりおこりて滿ちたるを得べしと也、但し聖人は心に蔽はるゝ所なければ、此の夜氣を發生するの要なく、從つて夜氣を說くの要なしと也

澄問ふ。『操存舍亡の章に曰く、出入時なく其鄕を知る莫しと。』『此れ常人の心に就いて說けりと雖も、學者亦須らく是れ心の本體も亦元其れ此の如くな

必須二調停適中一始得。就如二父母之喪一。人子豈不レ欲三一哭便死方快二於心一。然却曰。毀不レ滅レ性。非二聖人强制レ之也。天理本體自有二分限一。不レ可レ過也。人但要レ識下得心體自然增二減分毫一不上レ得。

んでは、多くは天理まさに愛すべきものぞと認めて、一向にうれへくるしむ也 (九) 而して其の憂患する所ありて、其正を得ざることを知らずとは、大學新本傳の七章「正レ心脩レ身」の釋に「有レ所二憂患一則不レ得二其正一」とあるを引く (一〇) 七情とは喜・怒・哀・樂・愛・惡・欲を云ふ、此の七情の中大抵人の感ずる所、過ぎたるものは多く及ばざるものは少きを云ふ也 (一一) わづかにしても過ぐれば、卽ち心の本體を失ふ也 (一二) 調停は伸てさばく也、適中はほどよき所にはめる也 (一三) 孝經末章に出づ、是れ聖人の政にて、喪は三年を過さず、民に終あることを示す也 (一四) 識るべし、天理の本體は自ら分限ありて過ぐべからず、心の本體には毫釐の增減をも許さゞることを、卽ち閑時の靜學に基きて、磨錬せんことを要すと也。

不レ可レ謂二未發之中。常人俱有一。蓋體用一源。有二是體一卽有二是用一。有二未發之中一卽有二發而皆中レ節之和一。今人未レ能レ有二發而皆

未發の中(一)は常人俱に有すと謂ふ可からず。蓋し體用(二)は一源、是の體あれば卽ち是の用あり。未發の中あれば、卽ち發して皆節に中るの和あり。今人未だ發して皆節に中るの和あること能はず。須らく知るべし是れ他の未發の中も亦未だ全うし得る能はざるを。

(一) 未發の中常人俱有すといふは朱子の說也、陽明これを駁せる也 (二) 體用一源にして、體あれば用あり、未發の中發すれば皆節に中るの和あるべき筈也、今人發して皆節に中るの和あること能はざるを見れば、他の未發の中なるものも亦全きことを得ざるを知るべき也との意。

曰。此時正宜用功。若此時放過。閑時講學何用。人正要在此等時磨錬。父之愛子自是至情。然天理亦自有箇中和處。過即是私意。人於此處多認做天理當憂。則一向憂苦。不知已是有所憂患。不得其正。大抵七情所感。多只是過。少不及者。才過便非心之本體。

父の子を愛するは自ら是れ至情なり。然も天理亦自ら箇の中和の處にあり。(七)過ぐれば卽ち是れ私意なり。(八)人此處に於ては多く認めて天理當に憂すべしと做し、則ち一向に憂苦す。知らず(九)已に是れ憂患する所ありて其正を得ざることを。(一〇)大抵七情の感ずる所多くは只だ是れ過ぎ、及ばざる者少し。(一一)才に過ぐれば便ち心の本體に非ず。必ず須らく(一二)調停適中して始めて得べし。就ち父母の喪の如きも、人の子として豈に一哭して便ち死して方に心に快きことを欲せざらんや。然も却つて曰く、(一三)毀れども性を滅せずと。聖人の強て之を制するに非ず。天理の本體自ら分限ありて過ぐ可からざるなり。人は但々(一四)心體の自然に分毫をも増減するを得ざるを識得せんことを要す。』

(一) 鴻臚寺は外國の使臣を待つ所の官卽ち鴻臚寺卿の居る役所也、倉居は倉卒の居の意、父倉中の居の意 (二) 故郷の家よりの通信、澄の子の病氣危篤を報じ來れる也 (三) かゝる時に平素學べる所によつて功夫を用ふべしと也 (四) うちやりにすること (五) 事なき時の意 (六) みがきねること、卽ち一層研究すべきとの意 (七) 父の子に對する情も、自ら中和にありてこそ天理にも適ふなれ、之を過ぐれば私の意となるぞと也 (八) 人々かゝる場合に臨

百姓亦皆表二輒悔悟仁孝之美一。請二於天子一。告二於方伯諸侯一。必欲三得レ輒而爲二之君一。於レ是集二命於輒一。使三之復二君衛國一。輒不レ得レ已。乃如二後世上皇故事一。率二群臣百姓一。尊レ體爲二太公一。備レ物致レ養而始退復二其位一焉。則君君。臣臣。父父。子子。名正言順。一擧而可レ爲二政於天下一矣。孔子正レ名或是如レ此。

任して、孔子に聽從すべき筈也、孔子ほどの聖人必ず輒を教訓して感化せしめ、人の子たるべき道を盡して父を迎へ、父も亦子の悔悟反正の實を感喜して、輒を立てんことを欲すべく、羣臣百姓も輒の仁孝を認めて、主と仰がんことを欲すべし、孔子の名を正すの道は應さに斯くあるべしと論ぜし也　(五) 國の名　(六) 痛哭はいたみなげく、奔走ははしりてゆく　(七) 衛の國に歸還するを云ふ　(八) 罪を以て誅戮を受けんことを請ふ也　(九) 孔子を指す　(一〇) 輒より差出す所の國を受取ること　(一一) 尚は輒に主たらんことを命ずる也　(一二) 命は今いふ指名也、衆望を歸一して君主たらんことを命ずる也　(一三) 後世は孔子の時代より見て後の世なれば也、上皇の故事とは、漢の高祖六年に、太公を尊んで太上皇となし、唐の高宗武德九年に、帝自ら太上皇と稱して太子を位に卽かしめたるが如きを云ふ　(一四) 始め自ら退引して父に還し、後命を受けて其位に復する也　(一五) 論語子路篇、「名不レ正、則言不レ順、言不レ順、則事不レ成」は孔子の言也、之に取る。

澄。在二鴻臚寺一倉居。忽家信至。言兒病危。澄心甚憂悶。不レ能レ堪。先生

澄、鴻臚寺(一)に在りて倉居す。忽ち家信(二)至る。言ふ兒の病危しと。澄、心甚だ憂悶して堪ふる能はず。先生曰く、(三)『此時正に宜しく功を用ふべし。若し此時放過(四)せば、閑時(五)の講學何の用をかせん。人は正に此等の時に在りて磨鍊(六)するを要す。

父。父子之愛本於天性。輒能悔痛眞切如此。蒯聵豈不感動底豫。蒯聵既還。輒乃致國請戮。聵已見化於子。又有夫子至誠調和其間。當亦決不肯受。仍以命輒。群臣百姓又必欲得輒爲君。輒乃自暴其罪惡。請於天子。告於方伯諸侯。而必欲致國於父。聵與群臣

とを欲せん。是に於て命(一二)を輒に集め、之をして復た衞國に君たらしめば、輒已むを得ずして乃ち後世上皇の故事の如くし、群臣百姓を率ゐ、聵を尊んで太公と爲し、物を備へ養(一三)を致して、始めて(一四)退いて、其位に復らば、則ち君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、名(一五)正しく言順ひ、一擧して政を天下に爲す可し。孔子名を正すこと或は是れ此の如くならん。』

㊀ 故に先儒といふは胡五峯が事也、衞の靈公の太子蒯聵、公の夫人南子の淫行を惡み、之を殺さんとして果さず出て奔る、靈公が子郢を立てゝ君たらしめんとするに、郢辭して受けず、公卒するに及んで、夫人聵が子輒を立てゝ主とし、聵を防がしむ、故に輒は其祖たる靈公を父とし、其父たる聵を寇とせしこと左傳に出づ、胡の說く所は蒯聵は父靈公へ不孝なるが故に除くべく、輒は亦父聵に不孝なるが故に除くべく、郢は不孝ならざるが故に立つべしと也、朱子も亦從ふ所也、然るに此說餘は甚だ可ならざるものあるを以て、陽明之を論ずる也、「孔子正名」といふは、輒孔子を迎へて政を爲さんことを請ふ、孔子肯じて之に從ふこと、論語子路篇に「子路曰、衞君待子而爲政、子將奚先、子曰、必也正名乎」、とあるを引いて、胡氏前の如く說く也 ㊁ 方伯は一方の諸侯を統管する官名 ㊂ 一人は輒を指す ㊃ 我とは陽明が孔子の意を忖度して、孔子自らを指して云ふ也、政を致し禮を盡して待遇し政治を執り行はしむる輒を取つて押へて、汝は不孝の子なればとて、之を廢し去ること、人情としても天理としても出來得ることならず、況や輒が請を容れて彼が爲に政治を執り行ふには、輒も亦心の誠を傾倒し、一國の政治を委

先儒說。上告二天子一。下告二方伯一。廢レ輒立レ郢。此意如何。先生曰。恐難レ如此。豈有二一人致レ敬盡レ禮待レ我而爲レ政。我就先去レ廢レ他。豈人情天理。孔子既肯與レ輒爲レ政。必已是他能傾レ心委レ國而聽。聖人盛德至誠必已感二化衛輒一。使レ知二無レ父之不一レ可二以爲一レ人。必將三痛哭奔走往迎二其

廢し郢を立つと。此意如何。』先生曰く、『恐らくは此の如くし難からん。豈に一(三)人敬を致し禮を盡し、(四)我を待ちて政を爲すに、我就ち先づ他を廢し去ることあらん。豈に人情天理ならんや。孔子既に肯て輒のために政を爲す、必ず已に是れ他能く心を傾け國を委ねて聽かん。聖人の盛德至誠は必ず已に(五)衛輒を感化して、父を無するの以て人たる可からざるを知らしめば、必ず將に(六)痛哭奔走し往きて其父を迎へんとすべし。父子の愛は天性に本づく。輒能く悔痛眞切なる此の如くんば、蒯聵豈に感動して豫を底さゞらんや。蒯聵既に還(七)らば、輒乃ち國を致し戮(八)を請はん。聵已に子に化せられ、(九)又夫子の至誠其間を調和するあらば、當に亦決して(一〇)受くるを肯ぜざるべし。仍ほ以て輒に命じ、群臣百姓又必ず輒を得て君と爲さんことを欲せん。輒乃ち自ら其罪惡を暴し、天子に請ひ、方伯諸侯に告げて、必ず國を父に致さんと欲せん。聵と群臣百姓と亦皆輒が悔悟仁孝の美を表し、天子に請ひ、方伯諸侯に告げて、必ず輒を得て之を君となさんこ

邪。故有二迷レ之者一。非二鬼迷一也。心自迷耳。如二人好レ色。即是色鬼迷。好レ貨即是貨鬼迷。怒レ所レ不レ當レ怒。是怒鬼迷。懼レ所レ不レ當レ懼。是懼鬼迷也。

(四) 姓は馬、名は明衡、思聰の子、閩中の人、陽明の弟子也 (五) 正直の鬼とは邪鬼に對して云ふ、能く人の善惡を辨ずれば、鬼驅ふとも怕るべきにあらず、邪鬼は己の心邪なるが故に、人の善惡にかゝはらざるを以て、怕るゝと也 (六) 一に怕るべきは心邪即ち心の邪鬼也と戒むる也 (七) 色鬼・貨鬼・怒鬼・懼鬼、皆心邪の鬼となりて良心を迷はす也

定者。心之本體。天理也。動靜。所レ遇之時也。

定は心の本體、天理なり。動靜は遇ふ所の時なり。(一)

(一) 定とは寂然不動の義、これ即ち本心の姿にして所謂天理也、本然の良知也、其動靜は遇ふ所の時による、動くべくして動き靜なるべくして靜、故に動なるも靜なるも亦其定を失はざる也

澄。問二學庸同異一。先生曰。子思括二大學一書之義一。爲二中庸首章一。

澄、學庸の同異を問ふ。(二)先生曰く、『子思は大學一書の義を括りて中庸の首章と爲す。』(三)

(二) 大學と中庸、同は同じ門、異は異なる點 (三) 子思、名は伋、伯魚の子、孔子の孫、學を曾子に受く、中庸は子思の作る所也

問。孔子正レ名。

問ふ。『孔子の名を正すこと、(一)先儒說くに、上天子に告げ、(二)下方伯に告げ、輒を

自有二端拱時在一。雖ㇾ曰二何思何慮一。非二初學時事一。初學必須ㇾ思二省察克治一。即是思ㇾ誠。只思二一箇天理一。到ㇾ得二天理純全一。便是何思何慮矣。

澄問。有二人夜怕ㇾ鬼者一。奈何。先生曰。只是平日不ㇾ能ㇾ集ㇾ義。而心有ㇾ所ㇾ慊故怕。若素行合二於神明一何怕之有。子莘曰。正直之鬼不ㇾ須ㇾ怕。恐邪鬼不ㇾ管二人善惡一。故未ㇾ免ㇾ怕。先生曰。豈有三邪鬼能迷二正人一乎。只此一怕即是心

澄問ふ。『人、夜、鬼(一)を怕るゝ者あり、奈何。』先生曰く、『只だ是れ平日義を集(二)むること能はずして、心慊らざる所あるが故に怕る。若し素行(三)神明に合せば何の怕れか之れあらん。』子莘(四)曰く、『正直(五)の鬼は怕るべきにあらず。恐らくは邪鬼人の善惡に管せざらんを。故に未だ怕るゝを免れず。』先生曰く、『豈に邪鬼の能く正人を迷はすことあらんや。只だ此れ一に怕るゝは、即ち是れ心邪(六)なり。故に之に迷はさるゝ者あり。鬼の迷はすに非ざるなり、心自ら迷ふのみ。人の色を好むが如きは即ち是れ色鬼(七)の迷はすなり、貨を好むは即ち是れ貨鬼の迷はすなり、怒るべからざる所を怒るは、是れ怒鬼の迷はすなり、懼るべからざる所を懼るゝは、是れ懼鬼の迷はすなり。』

(一) 鬼はものゝけ、惡魔 (二) 集義は孟子公孫丑篇の上に出づ、朱子は之を解して積善となす (三) 平素の行狀

之意。無事時將好色好貨好名等私。逐一追究搜尋。出來。定要拔去病根。永不復起。方始爲快。常如猫之捕鼠。一眼看著。一耳聽著。纔有一念萌動。卽與克去。斬釘截鐵。不可姑容與他方便。不可窩藏。不可放他出路。方是眞實用功。方能掃除廓淸。到得無私可克。

何をか思ひ何をか慮らんと曰ふと雖も、初學の時の事に非ず。初學は必ず須ら(一八)く省察克治を思ふべし。卽ち是れ誠を思ひ、只だ一箇の天理を思ふなり。天理の純全たるを得るに到りては、便ち是れ(一九)何をか思ひ何をか慮らん。

（一）一方へ片寄りて中正を失ふ義　（二）人の欲念の動くさまを猿と馬とにたとふ　（三）つなぎいましむる　（四）懸空は架空と同じ義、靜守はしづかに守る、槁木はかれたる木、死灰はつめたきはひ、無用は効なしとの意　（五）省察はあきらかに考ふること、克治はかちてたゞすこと　（六）閒はゆるうすること、やすむこと、へだつこと　（七）はきのぞき、はらひきよむる　（八）好色・好貨・好名等の私欲の念をもち來つて、逐一にしらべきはめ、其理をさがしたづね出せとの意　（九）かならず病痛の根を拔き去り、再び起らぬやうにしてこそ、始めて快を呼ぶべしと也　（一〇）看著聽著の著は添へ字なり　（一一）僅たりとも他の念のきざしうごくことあらば　（一二）宋の俗語、鐵釘を截斷する意氣にて、工夫に力を入れる意　（一三）暫の間も何や彼と意を用ふるなとの意　（一四）窩はあなぐら、盗賊などが盗みたる物を藏し置く處を窩藏といふ、捕吏などの通言也、萌したる一念又は雜念、人欲の念をしまひおくなとの意　（一五）出路とは出づる路、人欲の出路をゆるしおくなと也　（一六）私意私欲、克つべき凡ての私のなきに到らばとの意　（一七）端坐拱手の時、心決定して何事をも思ひなすことなき也　（一八）易の繋辭を引く　（一九）天理の外又何事を思ひ、何事をおもんぱからんと也

一日論ニ爲レ學工夫。先生曰。教ニ人爲レ學。不レ可レ執ニ一偏。初學時。心猿意馬拴縛不レ定。其所ニ思慮一多是人欲一邊。故且教ニ之靜坐息ニ思慮。久レ之俟ニ其心意稍定。只懸空靜守如ニ槁木死灰一亦無レ用。須レ教ニ他省察克治。省察克治之功。則無ニ時而可レ間。如レ去ニ盜賊。須レ有ニ箇掃除廓淸

一日學を爲すの工夫を論ず。先生曰く、『人に學を爲すを教ふるに、一偏(一)を執るべからず。初學の時は、心猿意馬(二)拴縛(三)して定まらず。其の思慮する所は多く是れ人欲の一邊なり。故に且く之に靜坐して思慮を息むることを教へ、之を久しうして其心意の稍ゝ定まるを俟つ。只だ懸空(四)に靜守して槁木死灰の如くなるは亦用なし。須らく他をして省察克治(五)せしむべし。省察克治の功は、則ち時として間(六)すべきなし。盜賊を去るが如く、須らく箇の掃除廓淸(七)の意あるべし。事なき時は色を好み、貨を好み、名を好む等の私を將て、逐一追究・搜尋(八)し出で來れ、定ず病根(九)を拔去り永く復び起らざらんことを要して、方に始めて快と爲す。常に猫の鼠を捕ふるが如く、眼を一にして看著(一〇)し、耳を一にして聽著し、纔(一一)に一念の萌動するあらば、卽ち與に克ち去り、斬釘(一二)截鐵(一三)、姑にも他の方便を容與すべからず。窩藏(一四)すべからず、他の出路(一五)を放つべからず。方に是れ眞實に功を用ひ、方に能く掃除廓淸(一六)し、私の克つべきなきを得るに到らば、自ら端拱(一七)する時の在るあり。

是非。是性之表德邪。曰。仁義禮智。也是表德。性一而已。自二其形體一也。謂二之天一。主宰也謂二之帝一。流行也謂二之命一。賦二於人一也謂二之性一。主二於身一也謂二之心一。心之發也遇レ父便謂二之孝一。遇レ君便謂二之忠一。自レ此以往名至二於無レ窮只一性而已。猶下人一而已。對レ父謂二之子一。對レ子謂中之父上。自レ此以往至二於無レ窮。只一人而已。人只要下在二性上一用中功。看二得一性字一分明。卽萬理燦然。

よりして之を命と謂ひ、人に賦するよりして之を性と謂ひ、身に主たるよりして之を心と謂ふ。心の發するや、父に遇ひては便ち之を孝と謂ひ、君に遇ひては便ち之を忠と謂ふ。(五)此れより以往、名窮まりなきに至るも只だ一性のみ。猶ほ人は一のみなるも、父に對しては之を子と謂ひ、子に對しては之を父と謂ふがごとし。此れより以往、窮まりなきに至るも只だ一人のみ。人は只だ(六)性上に在りて功を用ふるを要す。(七)一の性の字を看得て分明なれば、卽ち萬理燦然たらん。」

(一)已發とは未發に對して其性の已に發せるものを謂ふ　(二)夫子に側隱の心は仁の端、羞惡の心は義の端、辭讓の心は禮の端、是非の心は智の端、之を四端と謂ふ　(三)性の外に表はれたる德　(四)天といひ、帝といひ、命といひ、性といひ、心といふ、要するに一つの性のそれ〳〵の方面によりて謂ふ所のみ、卽ち性卽理也、理卽心也　(五)此外名義の數には際限なきもの丶意　(六)性そのもの丶功夫をすること　(七)惟だ一つの性の字を看破して、其理を明かにすれば、萬の理も明かに看得んと也

澄嘗問象山在人情事變上做工夫之說。先生曰。除了人情事變則無事矣。喜怒哀樂非人情乎。自視聽言動以至富貴貧賤患難死生。皆事變也。事變亦只在人情裏。其要只在致中和。致中和只在謹獨。

澄嘗て象山が人情事變の上に在りて工夫を做すの說を問ふ。先生曰く、『人情事變(一)を除了けば則ち事なし。喜・怒・哀・樂は人情にあらずや。視・聽・言・動より以て富貴・貧賤・患難・死生に至るまで皆事變なり。事變も亦只だ人情の裏に在り。其要は只だ中和を致すに在り(二)。中和を致すは只だ獨を謹むに在り(三)。』

(一) 陸象山が其兄復齋の間に答ふるの語を以て問ふ也、象山集要に出づ　(二) 中庸の「喜・怒・哀・樂之未發、謂之中、發而皆中節、謂之和、中也者、天下之大本也、和也者、天下之達道也」に出づ　(三) 大學の「此謂誠於中形於外、故君子必慎其獨」又中庸の「君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞、莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也」に出づ

澄問。仁義禮智之名因已發而有。曰。然。他日澄曰。惻隱羞惡辭讓

澄問ふ、『仁義禮智の名は已發(一)に因りて有りや。』曰く、『然り。』他日澄曰く、『惻隱(二)・羞惡・辭讓・是非は是れ性(三)の表德か。』曰く、『仁義禮智も也是れ表德なり。性は一なるのみ。其形體(四)よりして之を天と謂ひ、主宰よりして之を帝と謂ひ、流行

何以有爲善有爲不善。先生曰。惡人之心。失其本體。

問。析之有以極其精而不亂。然後合之有以盡其大而無餘。此言如何。先生曰。恐亦未盡。此理豈容分析。又何須湊合得。聖人說精一自是盡。

省察是有事時存養。存養是無事時省察。

善を爲すことありや。』先生曰く、『惡人の心は其本體を失へるなり。』(二)

(一) 人各々この心ありて、心は理なりとすれば、何故に善を爲して善人となり、不善を爲して惡人となるかとの問也

(二) 本體を失へば善人も惡人となり、理の明も昧くなる也

問ふ。『之を析ちて以て其精を極むる有りて亂れず。然る後に之を合し以て其大を盡すありて餘なしと。此言如何。』(一) 先生曰く、『恐らくは亦未だ盡さじ。此理豈に分析す容けんや。又何ぞ湊合し得るを須るん。聖人精一を說く、自ら是れ盡せり。』

(一) 朱子の大學或問の語を以て問ふ也、意は凡て事物の理を分析し、精微に至りて亂れず、然る後に之を綜合して、其大を盡し餘す所なし、是れ致知也と

(一) 省察は是れ事ある時の存養、存養は是れ事なき時の省察。

(一) 事あるに當りよく心に省み察するも、事なきに當りて心を存養するも畢竟同一工夫にして、二者各別の事に非ずと也

心。體明即是道明。更無ㇾ二。此是爲ㇾ學頭腦處。

虚靈不ㇾ昧。衆理具而萬事出。心外無ㇾ理。心外無ㇾ事。

(一)虚靈昧からず衆理具はりて萬事出づ。心外理無く、心外事無し。

(一) 虚靈は心靈也、たとへば明鏡の虚にして物をうつすが如し、故に昧からず、此の心體に衆理の具はりて、之より萬の事出づる也、此の心の外には理もなければ事もなしと也、朱子大學章句に、「萬事に應ず」とせるは、「萬事出づ」といへるとは、内外の差あることにて、論旨の異なる所也

或問。晦庵先生曰。人之所ニ以爲ㇾ學者。心與ㇾ理而已。此語如何。曰。心即性。性即理。下ニ一與字一恐未ㇾ免ㇾ爲ㇾ二。此在ニ學者善觀ㇾ之。

或ひと問ふ。『(一)晦庵先生曰く、人の學を爲す所以の者は、心(二)與理とのみと。此語如何。』曰く、『心は即ち性、性は即ち理なり。一の與の字を下すは、恐らくは未だ二たるを免れず。此れ學者善く之を觀るに在り。』

(一) 晦庵は朱熹の號也、語は朱子の大學或問の格物章に出づ (二) 與の字「と」と訓ず、「と」は竝立の意にて心即理の義に反する也 (三) 善く觀るべき處此に在り

或曰。人皆有ニ是心一。心即理。

或ひと曰く、『(一)人皆是心あり。心は即ち理なり。何を以てか善を爲すことあり、不

問。看レ書不レ能レ明如何。先生曰。此只是在二文義上一穿求。故不レ明。如レ此又不レ如レ爲二舊時學問一。他到二看得多一解得去。只是他爲レ學。雖二極解得明曉一亦終レ身無レ得。須下於二心體上一用上レ功。凡明不レ得。行不レ去。須下反在二自心上一體當上。卽可レ通。蓋四書五經。不レ過レ說二道心體一。道心體卽所レ謂道

問ふ。『書を看るも明かなる能はざるは如何。』先生曰く、『此は只だ是れ文義(一)上に在りて穿求す、故に明かならず。此の如きは又(二)舊時の學問を爲すに如かず。他看得ること多きに到らば、解し得去らん。只だ是れ他學を爲し、極めて解し得て明曉なりと雖も、亦身を終ふるまで得ることなけん。(三)須らく心體上に於て功を用ふべし。凡そ(四)明かなる得ず、行ひ去らずんば、須らく反つて自心上に在りて體當すべし。卽ち通ず可し。蓋し四書・五經は這の心體を說けるに過ぎず。這の心體は卽ち所謂道心なり。體明かなれば卽ち是れ道明かなり、更に二なし。此は是れ學を爲す頭腦(五)の處なり。』

(一) 文義の上に就いてのみ穿鑿し求むるが故に明かならざる也との意、陽明の心體上に於て功を用ふべしと云ふに對照すべし　(二) 玆には朱子學派的の學問を指すと云ふ　(三) 彼れ看得ることの多き結果は、其學の範圍の總てを解し得べく、十分に解し得て明かに曉り得たりとするも、一生涯眞實に道に明かなることは得ざらんと也　(四) 若し得ること多きも、尙は道に明かなるを得ず、行ふこと能はざれば、更に反つて自己の心體上に引當て(體當也)功夫を用ひんには、卽ち道通ずべしと也　(五) 主要眼目の處

弟一。又旣而後能立能行能持能負。卒乃天下之事無レ不レ可レ能。皆是精氣日足。則筋力日強。聽明日開。不二是出レ胎日。便講求推尋得來一。故須レ有二箇本原一。聖人到下位二天地一育中萬物上也。只從二喜怒哀樂未發之中上一養來。後儒不レ明二格物之說一。見二聖人無レ不レ知無下不レ能。便欲下於二初下レ手時一。講求得盡上。豈有二此理一。又曰。立レ志用レ功如レ種レ樹然。方二其根芽一猶未レ有レ幹。及二其有上レ幹。尙未レ有レ枝。枝而後葉。葉而後花實。初種レ根時。只管栽培灌漑。勿レ作二枝想一。勿レ作二葉想一。勿レ作二花想一。勿レ作二實想一。懸想何益。但不レ忘二栽培之功一。怕レ沒レ有二枝葉花實一。

るなきを見て、便ち初めて手を下す時に於て講求し得盡さんと欲す。豈に此理あらんや。』又曰く、『志を立て功を用ふるは樹を種うるが如く然り。其根芽に方りては猶ほ未だ幹あらず。其幹あるに及んで尙ほ未だ枝あらず。枝ありて後葉、葉ありて後花實あり。初め根を種うる時は、只管に栽培灌漑して、枝想を作す(九)勿れ、葉想を作す勿れ、花想を作す勿れ、實想を作す勿れ、懸想何の益かあらん。但々栽培の功を忘れずんば、枝葉花實有る沒きを怕れんや。(一〇)』

(一) もと、根源 (二) 漸々に徐々と進む貌、科はうつろ、あな (三) 道術を修むる家、以下仙家の修道に赤兒を說くを引いて言ふ (四) 爲す能はざるものなしとの意 (五) 精神・元氣 (六) 筋骨の力、體力 (七) さとくあきらかなること (八) 中庸首章の語 (九) 枝想・葉想・花想・實想、豫め想像をなして、枝ぶり、葉ぶり、花の色香、實の形容など假想する也、懸想は思ひを懸ける、卽ちそれに執着して妄想する也 (一〇) 沒有は「無」也

謂汝器也。曾點便有二不レ器意一。然三子之才。各卓然成レ章。非レ若二世之空言無レ實者一。故夫子亦皆許レ之。

るはしき意

問。知識不二長進一如何。先生曰。爲レ學須レ有二本原一。須下從二本原上一用レ力。漸漸盈レ科而進上。仙家說二嬰兒一亦善譬。嬰兒在二母腹一時。只是純氣。有二何知識一。出レ胎後方始能啼。既而後能笑。又既而後能識二認其父母兄

問ふ、『知識の長進せざるは如何。』先生曰く、『學を爲す須らく(一)本原あるべし。須らく本原上より力を用ひ、(二)漸漸科を盈して進むべし。(三)仙家に嬰兒を說けるも亦善き譬なり。嬰兒の母腹に在る時は、只だ是れ純氣にして何の知識かあらん。胎を出でゝ後方に始めて能く啼き、既にして後能く笑ひ、又既にして後能く其父母兄弟を識認す。又既にして後能く立ち能く行き、能く持ち能く負ひ、卒に乃ち天下の事(四)能くすべからざるなし。皆是れ(五)精氣日に足れば、則ち(六)筋力日に強く、(七)聰明日に開く。是れ胎を出づる日、便ち講求推尋し得來るにあらず。故に須らく箇の本原あるべし。聖人の(八)天地を位せしめ萬物を育ふに到るや、只だ喜怒哀樂未發の中の上より養ひ來る。後儒格物の說を明かにせず、聖人の知らざるなく能くせざ

由求任二政事一。公西赤任二禮樂一。多少實用。及二曾皙說來一。却似二要的事一。聖人却許レ他。是意何如。曰。三子是、有二意必一。有二意必一便偏二著一邊一。能レ此未二必能一レ彼。曾點這意思却無二意必一。便是素二其位一而行。不レ願二乎其外一。素二夷狄一行二乎夷狄一。素二患難一行二乎患難一。無レ入而不二自得一矣。三子所レ

なり。曾皙の說き來るに及んでは、却つて要的事(二)に似たり。聖人却つて他を許す。是の意如何。』曰く、『三子は是れ意必(四)あり。意必あれば便ち一邊に偏著(三)し、此を能くすとも、未だ必ずしも彼を能くせじ。曾點が這の意思却て(五)意必無し。便ち是れ其位に素して(六)行ひ、其外を願はず、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ひ、入るとして自得せざる無きなり。三子は所謂汝は器なり(七)、曾點は便ち器ならざるの意あり。然れども三子の才は各〻卓然(八)として章を成し、世の空言實無き者の若きに非ず。故に夫子も亦皆之を許せり。』

(一) 孔門の弟子各々其志を言ふこと、論語先進篇に出づ、由は子路也、求は姓冉、字は子有、魯の人、公西は姓、赤は名、字は子華、魯の人、曾點字は皙 (二) 要は俗語にて音沙、戲れる義也 (三) 論語先進篇に云ふ「夫子喟然として嘆じて曰く、吾れ點に與せん」を引く (四) 意、私意也、必は必ずと期する也、論語子罕篇に「子絕レ四、毋レ意、毋レ必、毋レ固、毋レ我」に取る (五) 一方に偏する意 (六) 「素二其位一而行」より「無レ不二自得一矣」まで中庸の語を引く、素は其分に循ひ、其境遇に安んずること、夷狄はえびすの國、患難は艱難辛苦の境遇 (七) 「汝器也」論語公冶長篇に出づ、孔子の言を取つて三子を評する也、器とは一定の用にのみ充てゝ他に流通する能はざる意、「君子不レ器、」同上爲政篇に出づ、然れば曾點は君子の意ありと評せる也 (八) 卓然はすぐれたる貌、成章はいろどりろ

其寧靜時。亦只是氣寧靜。不可以爲未發之中。曰。未便是中。莫亦是求中功夫。曰。只要去人欲存天理。方是功夫。靜時念念去人欲存天理。動時念念去人欲存天理。不管寧靜不寧靜。若靠那寧靜。不惟漸有喜靜厭動之弊。中間許多病痛。只是潛伏在。終不能絕去。遇事依舊滋長。以循理爲主。何嘗不寧靜。以寧靜爲主。未必能循理。

是れ中を求むるの功夫たるを莫きか。』曰く、『只だ人欲を去りて天理を存するを要す。方に是れ功夫なり。靜時にも念念人欲を去りて天理を存し、動時にも念念人欲を去りて天理を存し、寧靜・不寧靜に管せざれ。若し那の寧靜に靠らば、惟だ漸く靜を喜び動を厭ふの弊あるのみならず、中間許多の病痛、只だ是れ潛伏(三)する在りて、終に絕去(四)する能はず、事に遇へば舊(五)に依りて滋長せん。理に循ふを以て主と爲さば何ぞ嘗て寧靜ならざらん。寧靜を以て主と爲さば未だ必ずしも理に循ふ能はざらん。』

(一) やすらかにしづかなること　(二) 中庸の「喜怒哀樂の未だ發せざる之を中と謂ふ」に取る　(三) 病痛がひそみかくるゝを云ふ　(四) 切斷し去ること　(五) ふるき習慣になづみてますく増長すべしと也

問。孔門言志。

問ふ。『(一)孔門志を言ふや、由求は政事に任じ、公西赤は禮樂に任ず。多少實用

行者知之成。聖學只一箇功夫。知行不レ可三分作二兩事一。

漆雕開曰。吾斯之未レ能レ信。夫子說レ之。子路使三子羔爲二費宰一。子曰。賊二夫人之子一。曾點言レ志。夫子許レ之。聖人之意可レ見矣。

問。寧靜存レ心時可レ爲二未發之中一否。先生曰。今人存レ心只定二得氣一。當二

と作すべからず。

(一) 即ち所謂知行合一也

(一)漆雕開曰く、『吾れ斯を之れ未だ信ずる能はず』と。(二)夫子之を說ぶ。(三)子路、子羔をして(四)費の宰たらしむ。子曰く、『夫の人の子を賊はん』と。(五)曾點志を言ふ。夫子之を許す。聖人の意見るべし。

(一) 姓は漆雕、名は開、字は子若、蔡の人、孔子の弟子也、語は論語公冶長篇に出づ (二) 孔子を指す (三) 子路は姓仲、名由、一の字季路、卞の人、孔子の弟子也。子羔は姓高、名柴、衞の人、同じく孔門の弟子也。孔子云はく「柴也愚」と (四) 費の國の宰相、論語先進篇に出づ (五) 曾點字は晳、南武城の人、曾參の父也、志を言へること論語先進篇に出づ

問ふ。(一)『寧靜に心を存する時(二)未發の中と爲す可しや否や。』先生曰く、『今の人の心を存するは只だ氣を定め得るのみ、其寧靜の時に當りても亦只だ是れ氣の寧靜なるのみ。以て未發の中と爲す可からず。』曰く、『未だ便ち是れ中ならざるも、亦

是惟精主意。惟精是惟一功夫。非惟精之外復有惟一也。精字從米。姑以米譬之。要得此米純然潔白。便是惟一意。然非加舂簸篩揀惟精之工。則不能純然潔白也。舂簸篩揀。是惟精之功。然亦不過要此米到純然潔白而已。博學審問愼思明辨篤行者。皆所以爲惟精而求惟一也。他如博文者卽約禮之功。格物致知者卽誠意之功。道問學卽尊德性之功。明善卽誠身之功無二說也。

始く米を以て之を譬へん。此米純然として潔白なるを得んと要するは、便ち是れ惟一の意。然も（二）舂簸篩揀、惟精の工を加ふるに非ざれば、則ち純然として潔白なる能はざるなり。舂簸篩揀は是れ惟精の功。然も亦此米の純然として潔白なるに到るを要するに過ぎざるのみ。（三）博學・審問・愼思・明辨・篤行は皆惟精を爲して惟一を求むる所以なり。他の（四）博文は卽ち約禮の功、格物致知は卽ち誠意の功、問學に道るは卽ち德性を尊ぶの功、明善は卽ち誠身の功といふが如きは、二說なきなり』。

（一）聖人傳受の心法、尙書大禹謨に出づ　（二）舂は臼にて搗くこと、簸は箕、篩はふるひ、揀は選分けること、卽ち精白する手段　（三）中庸の語　（四）以下前章・後章に詳なり、意は諸說みな其理一にして二說なしといふ也

知者行之始。

知は行の始、行は知の成れるなり。聖學は只だ一箇の功夫。（一）知行は分ちて兩事

見。耳可レ得レ聞。口可レ得レ言。心可レ得レ思者。皆下學也。目不レ可レ得レ見。耳不レ可レ得レ聞。口不レ可レ得レ言。心不レ可レ得レ思者上達也。如二木之栽培灌漑一是下學也。至三於二日夜之所レ息條達暢茂一。乃是上達。人安能預二其力一哉。故凡可レ用レ功可二告語一者皆下學。上達只在二下學裏一。凡聖人所レ說。雖レ極二精微一。倶是下學。學者只從二下學裏一用レ功。自然上達去。不三必別尋二箇上達的工夫一。

り。木の栽培灌漑の如きは是れ下學なり。(四)日夜の息する所、條達暢茂するに至りては、(三)乃ち是れ上達なり。(五)人安ぞ能く其力に預らんや。(六)故に凡そ功を用ふべく告げ語るべき者は皆下學なり。上達は只だ下學の裏に在り。凡そ聖人の說く所は、精微を極むと雖も、倶に是れ下學なり。學者只だ下學の裏より功を用ふれば自然に上達し去る。必ずしも別に箇の上達の工夫を尋ねざれ。』

(一)論語に見えたる下學而上達するの工夫　(二)稍高尚の論に入れば　(三)栽培はうゑてつちかふ、灌漑は水をそそぎかける　(四)日は晝なり、晝夜の生息によりて枝はのび葉はしげり榮ゆる也。孟子告子上の語　(五)人の手は其力に預かる事なし　(六)功を用ふべく敎へ告ぐべきことは皆下學なり。

問。惟精惟一是如何用レ功。先生曰。惟一

問ふ。『(一)惟精惟一は是れ如何か功を用ひん』。先生曰く、『惟一は是れ惟精の主意、惟精は是れ惟一の功夫、惟精の外復た惟一あるに非ざるなり。精の字米に從ふ、

問。靜時亦覺ニ意思好一。才遇レ事便不レ同如何。先生曰。是徒知ニ靜養一而不レ用ニ克己工夫一也。如此臨レ事便要ニ傾倒一。人須下在ニ事上一磨上。方立得住。方能靜亦定動亦定。

問ニ上達工夫一。先生曰。後儒敎レ人纔涉ニ精微一。便謂上達未レ當レ學。且說ニ下學一。是分ニ下學上達一爲レ二也。夫目可レ得レ

問ふ。『靜なる時亦意思の好きを覺ゆ。才に事に遇ひて便ち同じからざるは、如何。』(一)先生曰く、『是れ徒だ靜養を知りて克己の工夫を用ひざればなり。(二)此の如きは事に臨みて便ち傾倒を要す。(三)人須らく事上に在りて磨すべし。(四)方に立ち得て住まり、方に能く靜にも亦定まり、動にも亦定まる。』

(一)靜にして事なき時は意中安全なるに、一寸何か事にあひて動くあれば、即ち意中斷くの如きを得ざるは如何と問ふ也　(二)己に克つの工夫を缺くとの意　(三)事を爲す際に心力を傾倒するを要し從つて心定まらずと也　(四)事柄の上に就いて錬磨すべし、其時には其の立脚地に住まりて、動靜共に心定まり、聊か濁ることなかるべしとの意

上達の工夫を問ふ。先生曰く、『後儒人を敎ふるに、(一)纔に精微に涉れば、便ち謂く、(二)上達未だ當に學ぶべからず、且く下學を說けと。是れ下學・上達を分ちて二と爲すなり。夫れ目見ることを得べく、耳聞くことを得べく、口言ふことを得べく、心思ふことを得べきは皆下學なり。目見らことを得べからず、耳聞くことを得べからず、口言ふことを得べからず、心思ふことを得べからざる者は上達な

照時事。然學者却須三先有二箇明的工夫一。學者惟患二此心之未一レ能レ明。不レ患二事變之不一レ能レ盡。曰。然則所レ謂冲漠無朕而萬象森然已具者其言何如。曰。是說本自好。只不二善看一亦便有二病痛一。

要なるを教へ、學者一に心の不明をうれへ、事變のきはまりなきを患ふる勿れと說く也 ㊁ 空漠にして何物もなき處に森羅萬象の具はれると謂ふ程伊川の言（近思錄道體類に出づ）は如何と問ふ也 ㊂ 此說本より好けれども、善く看ずして、心の鏡に形體を存し、萬象具へ在りと解せんには、亦病痛あるべしと也

義理無二定在一無二窮盡一。吾與レ子言。不レ可下以二少有一レ所レ得而遂謂上レ止レ此也。再言レ之十年二十年五十年未レ有レ止也。他日又曰。聖如二堯舜一。然堯舜之上善無レ盡。惡如二桀紂一。然桀紂之下惡無レ盡。使二桀紂未一レ死。惡寧止レ此乎。使三善有二盡時一。文王何以望レ道而未二之見一。

『義理に定在(一)無く窮盡無し。吾子と言ふ。少しく得る所あるを以て遂に此に止まると謂ふ可からず。再び之を言はんに、十年・二十年・五十年なるも未だ止まることあらず。』他日又曰く、『聖は堯・舜の如くにして、然も堯・舜の上善盡くる無し。惡は桀紂の如くにして、然も桀・紂の下惡盡くる無し。桀・紂をして未だ死せざらしめば、惡寧ろ此に止まらんや。善をして盡くる時あらしめば、文王何を以てか道を望んで未だ之を見ざらん。』(二)

㊀ 定在は定著なり、窮盡はきはまりつくる也 ㊁ 孟子離婁篇下に出づ

講却是如此。是以與聖人之學大背。周公制禮作樂以文天下。皆聖人所能爲。堯舜何不盡爲之而待於周公。孔子刪述六經以詔萬世。亦聖人所能爲。周公何不先爲之而有待於孔子。是知聖人遇此時方有此事。只怕鏡不明。不怕物來不能照。講求事變。亦是

（九）鏡の明かならざるを怕れて、物來りて照す能はざるを怕れず。事變を講求するは、亦是れ照す（一〇）時の事なり。然らば學者（一一）却つて須らく先づ箇の明の工夫あるべし。學者は惟だ此心の未だ明かなる能はざるを患へ、事變の盡す能はざるを患へざれ。』曰く、『然らば則ち（一二）所謂沖漠無朕にして、萬象森然已に具はる者は其言何如。』曰く、『是の說（一三）本自ら好し。只だ善く看ざれば亦便ち病痛あらん。』

（一）聖人事變に應じて窮することなきは、あらかじめ講求し置く所ありや否やとの問也　（二）心の明を鏡にたとふる也　（三）靈感に隨ひて心鏡に映ずるをいふ也　（四）豫め講求し置く所あれば、則ち已往の形となりて存すべく、それをして將に來るべき變に應ずるの具となすは、是れ未照の形先づ具はると云ふものにて、鏡にはあるべからざる理なり、故に未ㇾ有といひて否認せる也、然し後世講ずる所のもの、却つて此の如しと示して、聖人の學に背けることを說く　（五）周公禮樂を制作して天下を文明にすとの意　（六）周公のなしたる事は何れの聖人にても皆爲し得ること也、然れば堯も舜も之をなさずして、特に周公を賴みとし待ちしにはあらずとの意　（七）孔子が六經を作りて後々の世までも紹述したりといふも、亦何れの聖人にても皆爲し得ることにて、周公が之を爲さずして、特に孔子を賴みとし待ちたるにはあらずと也　（八）聖人時に遇へば必要に應じて如何なる事をも爲すべきを知るべしと也　（九）怕るべきは鏡の不明なるに在り、鏡明かならば物來る時必ず照すべし、されば物來るも照す能はざらん事は念とすべきに非ずと也　（一〇）事變を講求するは鏡が物を照す時の事を念とするわけ也　（一一）明の工夫をなすことの肝

傳也。後世著述是又將㆓聖人所㆑畫摹倣謄寫。而妄自分析加增以逞㆓其技㆒。其失㆑眞愈遠矣。

問。聖人應㆑變不㆑窮。莫㆓亦是預先講求㆒否。先生曰。如何講㆓求得許多㆒。聖人之心如㆓明鏡㆒。只是一箇明則隨㆑感而應。無㆓物不㆑照。未㆑有㆓已往之形尚在㆒。未照之形先具者㆒。若㆓後世所㆑

問ふ。『(一)聖人は變に應じて窮せず。亦是れ預め先づ講求する莫からんや否や。』

先生曰く、『如何ぞ許多を講求し得ん。聖人の心は明鏡(二)の如し。只だ是れ一箇明かなれば則ち感(三)に隨ひて應じ、物として照さゞるなし。未だ已往(四)の形尚ほ在りて、未照の形先づ具はる者はあらじ。後世講ずる所の若きは、却つて是れ此の如し。是を以て聖人の學と大に背く。周公禮を制し樂を作り以て天下を文(五)にす。皆な聖人の能く爲す所。堯・舜何ぞ盡く之を爲さずして周公(六)に待たんや。孔子六經を删述し以て萬世に詔ぐ。亦聖人の能く爲す所。周公何ぞ先づ之を爲さずして孔子(七)に待つこと有らんや。是(八)れ知る、聖人此時に遇へば、方に此事あるを。只だ

かたちのあらまし ㊄ 眞相をたづねもとめしむる ㊅ 精神は根氣、意氣は氣象、言笑は言語を發する形容、動止は進退の姿勢 ㊆ ゑがく ㊇ まねびならうてうつしとること ㊈ わけひらき、ましふやす 一〇 手業をたくみにする

面被二此樹葉一遮覆。下面被二此樹根盤結一。如何生長得成。須下用伐二去此樹一纖根勿中留。方可レ植二種嘉種一。不レ然任二汝耕耘培壅一。只是滋二養得此根一。

と（七）方丈は一丈四方（八）此の大樹の大きなる根（九）樹の根方の四圍（一〇）よき穀物（一一）樹の葉におほはれ日光を遮る也（一二）樹の根にはびこられる也（一三）はそき根、ひげ根（一四）たがやし、くさぎり、つちかふ（一五）大樹の根を養ひ得るのみにて、嘉穀の種は培養し得ざるべしと也

問。後世著述之多。恐亦有レ亂二正學一。先生曰。人心天理渾然。聖賢筆二之書一。如三寫レ眞傳二神。不レ過下示レ人以二形狀大略一。使丙之因レ此而討乙求其眞甲耳。其精神意氣言笑動止。固有レ所レ不レ能

問ふ。『後世著述（一）の多き、恐らくは亦正學を亂することあらん。』先生曰く、『人心天理渾然たり（二）。聖賢之を書に筆するや、眞を寫し（三）神を傳ふるが如し。人に示すに形狀（四）の大略を以てし、之をして此に因つて其眞を討求（五）せしむるに過ぎざるのみ。其精神意氣（六）、言笑動止は、固より傳ふること能はざる所あり。後世の著述は是れ又聖人の畫（七）する所を將つて、摹倣謄寫（八）して、妄に自ら分析（九）加增し、以て其技（一〇）を逞うす。其眞を失ふこと愈〻遠し。』

（一）後世とは聖賢以後の世の意にして、今日よりの後世にはあらず（二）もと人心と天理とは渾然として分つべからず、もと人心即天理天理即人心なり（三）眞の影を寫し取り、心の働きをも紙絹の上に傳へると同じきとの意（四）

日警責方已。一友自陳㆓日來工夫㆒請㆑正。源從㆑傍曰。此方是尋㆓著源舊時家㆒當。先生曰。爾病又發。源色變議擬。欲㆑有㆑所㆑辯。先生曰。爾病又發。因喩㆑之曰。此是汝一生大病根。譬如㆔方丈地內種㆓此一大樹㆒。雨露之滋。土脈之力。只滋㆓養得這箇大根㆒。四傍縱要㆑種㆓些嘉穀㆒。上

の家を尋著し當つ』と。先生曰く、『爾が病又發る。』(五)源色變じ(六)議擬して辯ずる所あらんと欲す。先生曰く、『爾が病又發る、』因つて之に喩して曰く、『此は是れ汝一生の大病根なり。譬へば(七)方丈の地内に此一大樹を種うるが如し。雨露の滋、土脈の力、只だ(八)這箇の大根を滋養し得んのみ、四傍(九)縱ひ些(一〇)の嘉穀を種ゑんことを要すとも、上面は此樹葉(一一)に遮覆せられ、下面は此樹根(一二)に盤結せらる、如何ぞ生長し得成さん。須らく用つて此樹を伐り去り、纖根(一三)だに留むるなからしむべくして、方に嘉種を種植すべし。然らざれば汝をして耕耘培壅(一四)せしむとも、只だ是れ此根(一五)を滋養し得んのみ。』

㊀ 字伯生、徐州の人、陽明の弟子也、自ら是とし とは俗に云ふ「うぬぼれ」也、名を好むとは虚榮心を有する也
㊁ 警責はいましめせむる、方に已みは意見の終りし時をいふ、一友は一人の友人、日來は此頃の義 ㊂ さし出口をいふ ㊃ 源は自己の稱、舊時云々は、吾れ曩に既に工夫したる所を彼人取れて工夫し來る、即ち吾れ一度住みたる家を尋ね當てたりと也。或は「家當を尋著す」と訓じ家當を以て家財什器をいふ當時の俗語と解す ㊄ 今言聞かせたるに、直と又汝の病おこれりと叱責せる也 ㊅ 顔の色を變へ、何かと事にかこつけて言譯せんとするこ

猶ニ道家所レ謂結ニ聖胎ー也。此天理之念常存、馴至ニ於美大聖神ー。亦只從ニ此一念ー存養擴充去耳。

日閒工夫。覺ニ紛擾ー則靜座。覺レ懶レ看レ書則且看レ書。是亦因レ病而藥。

處ニ朋友ー。務相下則得レ益。相上則損。

孟源有ニ自是好レ名之病ー。先生屢責レ之。一

㊀志を立つる工夫を問ふ也　㊁念念は「しばしの間も」の意　㊂心中に天理を存するの念集注して散ずることなき義也　㊃神仙の養生術を説く所の道家に「聖胎」とて我が體に聖を宿すといへるを、比喩に採りたる也　㊄孟子盡心篇の下に出づ　充實之謂レ美、充實而有ニ光輝ー之謂レ大、大而化レ之之謂レ聖、聖而不レ可レ知レ之之謂レ神、」意は天理を存するの念、充實して美、之に光輝あらしめて大、大にして之を化す聖。聖にして之を知るべからざらしむる神、漸次に馴致して此の境に至るも、素は此の念々天理を存するを養ひ得て、擴げ充すに在るのみぞと也

日閒(一)、工夫紛擾(二)を覺えば則ち靜座せよ。書(三)を看るに懶きを覺えば則ち且つ書を看よ。是れ亦病に因りて藥するなり。

㊀日常、日ごろと同意　㊁心中の工夫紛雜混亂を來す時には、靜座瞑目して心を沈著せしめよと也、靜座の事亦近思錄に出づ　㊂書見に倦みたる時、更に且書を見れば、心機轉じて倦怠を忘るゝことあり、意は工夫の紛擾を醫すに、心機を轉ずる方法として、靜座をすゝめ、書見の倦を避き、病によりて病を醫する藥方を示したる也

朋友に處(一)するに務めて相下(二)れば則ち益を得、相上(三)れば則ち損す。

㊀交る也　㊁謙遜して驕らざる也　㊂互に凌ぎ合ひて驕慢なる也

孟源(一)自ら是とし名を好むの病あり。先生屢〻之を責む。一日警責(二)方に已み、一友自ら日來の工夫を陳べて正を請ふ。源傍(三)より曰く、「此れ方に是れ源が舊時

則一心在讀書上。接客則一心在接客上。可以爲主一乎。先生曰。好色則一心在好色上。好貨則一心在好貨上。可以爲主一乎。是所謂逐物非主一也。主一是專主一箇天理。

ば則ち一心客に接する上に在るが如き、以て主一と爲すべきか。』先生曰く、『色を好めば則ち一心色を好む上に在り、貨を好めば則ち一心貨を好む上に在り、以て主一と爲すべきか。是れ所謂物を逐ふものにして主一に非ず。主一は是れ專ら一箇の天理を主とす。』

(一) 陸澄字は元靜、又原靜に作る、一の字清伯、湖州歸安の人、陽明が高弟也 (二) 主一は程朱の説、載せて近思録存養類に在り、澄氏の問題を掲げて質す也、陽明の答ふる好色・好貨は孟子に出づ、專ら天理を主とするもの即ち主一なりと説破す

問立志。先生曰。只念念要存天理。卽是立志。能不忘乎此久。則自然心中凝聚。

(一)立志を問ふ。先生曰く、『只だ(二)念念天理を存するを要す、卽ち是れ立志なり。能く此を忘れざること久しければ、則ち自然に心中(三)凝聚す。猶ほ(四)道家の所謂聖胎を結ぶがごときなり。此天理の念常に存す、馴れて(五)美大聖神に至るも、亦只だ此一念より存養擴充し去るのみ。』

愕不レ定。無二入頭處一。其後聞レ之既久。漸知二反レ身實踐一。然後始信三先生之學爲二孔門嫡傳一。舍レ是皆傍蹊小徑斷港絕河矣。如レ說下格物是誠意的工夫。明善是誠身的工夫。窮理是盡性的工夫。道二問學一是尊二德性一的工夫。博文是約禮的工夫。惟精是惟一的工夫。諸如レ此類。始皆落落難レ合。其後思レ之既久不レ覺二手舞足蹈一。（右曰仁所レ錄）

り、然して後始めて先生の學の孔門の(四)嫡傳たるを信ぜり。是を舍いては皆傍蹊(五)小徑・斷港絕河なり。格物は是れ誠意の工夫、明善は是れ誠身の工夫、窮理は是れ盡性の工夫、問學に道るは是れ德性を尊ぶの工夫、博文は是れ約禮の工夫、惟精は是れ惟一の工夫なりと說くが如き、諸の此の類、始め皆落落(六)として合ひ難かりしも、其後之を思ふこと既に久しうして、(七)手の舞ひ足の蹈むを覺えず。

右曰仁の錄する所。

(一)（此の一節、執齋本には段となして低書とせり。）程朱の說に眩惑してとの意 (二) おどろきて意定まらざりしと (三) 其入口にまどふ、いづこより進みて其說を理解すべきかに迷ふと也 (四) 陽明の學が孔子の正系嫡流であると信じたりと也 (五) わきみち、小みち、又は他と流路の絕えたる溝の義、以て其の學の聖人の大道に通ずべからざるを譬ふ。陽明の說を差措きては皆右の如しと也 (六) 相容れざる貌 (七) 喜びの形容也

陸澄問。主一之功。如二讀レ書

(一)陸澄問ふ。(二)「主一の功とは、書を讀めば則ち一心書を讀む上に在り、客に接すれ

巷皆然り。惡は以て人の逸志を懲創すべしとは、是れ其説を求めて得ず、從つて之が辭を爲すなり。」(一五)

(一) なづまず (二) 詩の鄭・衛の音は共に淫猥なり、何故に刪らざるかと (三) 論語、爲政篇の詩三百の註に出でたる語 (四) 論語、衛靈公篇に出づ (五) 同上 (六) 論語、陽貨篇に出づ (七) 詩經大序及禮記・樂記に出づ (八) のびのびとしてやはらぎたひらかなる義 (九) ひたしやしなふ (一〇) 風俗を移し易ふる也 (一一) 秦の始皇が書を焚きたること (一二) 强ひて論語の文に附會して、三百の數に足せりと也 (一三) みだらなることば (一四) 郷黨民閒 (一五) 「惡は以て人の逸志を懲創すべし」の語は、其の説の理を求むれども得られず、從つて之が辯解の辭を爲くる類也、孟子公孫丑篇下に「今の君子は豈徒に之に順ふのみならんや、又從つて之が辭を爲す」とあるを引く

於詩而不刪鄭衛。先儒謂惡者可以懲創人之逸志。然否。先生曰。詩非孔門之舊本矣。孔子云。放鄭聲。鄭聲淫。又曰。惡鄭聲之亂雅樂也。鄭衛之音亡國之音也。此是孔門家法。孔子所定三百篇。皆所謂雅樂。皆可奏之郊廟。奏之鄉黨。皆所以宣暢和平。涵濡德性。移風易俗。安得有此。是長淫導奸矣。此必秦火之後。世儒附會。以足三百篇之數。蓋淫泆之詞。世俗多所喜傳。如今閭巷皆然。惡者可以懲創人之逸志。是求其説而不得。從而爲之辭。

愛因舊説汨沒。始聞先生之教。實是駭

愛、舊説(一)に汨沒せしに因り、始めて先生の教を聞き、實に是れ駭愕(二)して定まらず、入頭(三)の處無し。其後之を聞くこと既に久し。漸く身に反し實踐することを知

戒。善可レ爲レ訓者特存二其迹一以示レ法。惡可レ爲レ戒者存二其戒一而削二其事一以杜レ奸。愛曰。存二其迹一以示レ法亦是存二天理之本然一。削二其事一以杜レ奸亦是遏二人欲於將レ萌否。先生曰。聖人作レ經固無レ非二是此意一。然又不三必泥二著文句一。愛又問。惡可レ爲レ戒者存二其戒一而削二其事一以杜レ奸何獨

して其事を削り以て奸を杜ぐ。』愛曰く、『其迹を存して以て法を示すとは亦是れ天理の本然を存するもの、其事を削りて以て奸を杜ぐとは亦是れ人欲を將に萌さんとするに遏むるものなりや否や。』先生曰く、『聖人の經を作るは固より是れ此意に非ざるなし。然れども又必ずしも文句に泥著せず。(一)』愛又問ふ、『惡の戒と爲すべき者は其戒を存して其事を削り以て奸を杜ぐと。何ぞ獨り詩に於て鄭衛(二)を刪らざるか。先儒謂く、(三)惡は以て人の逸志を懲創す可しと、然りや否や。』先生曰く、『詩は孔門の舊本に非ず。孔子云ふ、鄭聲(四)を放つ、鄭聲は淫なりと。(五)又曰く、鄭聲(六)の雅樂を亂すを惡むと。鄭衛の音は亡國の音なり。此は是れ孔門の家法なり。孔子定むる所の三百篇は皆所謂雅樂なり。(七)皆之を郊廟に奏し之を鄉黨に奏すべし。皆宣暢和平(八)にして、德性を涵瀁し、(九)風を移し俗を易ふる所以のもの、(一〇)安ぞ此は是れ淫を長じ奸を導くことあるを得ん。此れ必ず秦火の後、(一一)世儒附會して、以て三百篇の數に足しゝならん。蓋し淫泆の詞は、(一二)世俗の多く喜び傳ふる所、如今閭(一三)

行。然而世之論二三代一者。不レ明二其本一而徒事二其末一。則亦不レ可レ復矣。

愛曰。先儒論二六經一以二春秋一爲レ史。史專記レ事。恐與二五經一事體一終或稍異。先生曰。以レ事言謂二之史一。以レ道言謂二之經一。事即道。道即事。春秋亦經。五經亦史。易是包犧氏之史。書是堯舜以下史。詩禮樂是三代史。其事同其道同。安有二所レ謂異一。

愛曰く、『先儒(一)の六經を論ずるに春秋を以て史(二)と爲す。史は專ら事を記す。恐らくは五經の事體と終に或は稍々異ならん。』先生曰く、『事を以て言へば之を史と謂ひ、道を以て言へば之を經と謂ふ。事は卽ち道、道は卽ち事なり。春秋も亦經、五經も亦史なり。易は是れ包犧氏(三)の史、書は是れ堯・舜以下の史、詩・禮・樂は是れ三代の史にして其事同じく其道同じ。安ぞ所謂異なるものあらんや。』

(一) 先儒とは朱子を指す (二) 史は歷史又は記錄の稱、春秋を史とすれば、其事體が他の五經と異なるべしとの意、他の五經は易・詩・書・禮・樂、單に五經と言へば、樂を除き春秋を加へたる五つのものを謂ふ (三) 包犧氏は伏羲の稱なり

又曰。五經亦只是史。史以明二善惡一示二訓

又曰く、『五經も亦只だ是れ史なり。史は以て善惡を明かにし訓戒を示す。善の訓と爲すべき者は特に其迹を存し以て法を示す。惡の戒と爲すべき者は其戒を存

聖人作經。只是要去人欲存天理。如五伯以下事。聖人不欲詳以示人則誠然矣。至如堯舜以前事。如何略不少見。先生曰。羲黃之世。其事闊疎。傳之者鮮矣。此亦可以想見其時全是淳龐朴素。略無文采的氣象。此便是太古之治。非後世可及。愛曰。如三墳之類。亦有傳者。孔子何以刪之。先生曰。縱有傳者。亦於世變漸非所宜。風氣益開。文采日勝。至於周末。雖欲變以夏商之俗。已不可挽。況唐虞乎。又況羲黃之世乎。然其治不同。其道則一。孔子於堯舜則祖述之。於文武則憲章之。文武之法即是堯舜之道。但因時致治。其設施政令。已自不同。即夏商事業。施之於周。已有不合。故周公思兼三王。其有不合。仰而思之。夜以繼日。況太古之治。豈復能行。斯固聖人之所可略也。又曰。專事無爲。不能如三王之因時致治。而必欲行以太古之俗。即是佛老的學術。因時致治。不能如三王之一本於道。而以功利之心行之。即是伯者以下事業。後世儒者。許多講來講去。只是講得箇伯術。

又曰。唐虞以上之治。後世不可復也。略之可也。三代以下之治。後世不可法也。削之可也。惟三代之治可

又曰く、『(一)唐・虞以上の治は後世に復すべからず、之を略して可なり。(二)三代以下の治は後世法るべからず、之を削りて可なり。惟だ(三)三代の治は行ふべし。然して世の三代を論ずる者、其本を明かにせずして徒に其末を事とす、則ち亦復すべからず。』

(一) 唐は堯、虞は舜、以上とは其れ以前、伏羲・神農・黄帝の時代　(二) 夏・殷・周、以下とは秦漢等の時代　(三) 三代の治とは夏・殷・周の政治

仲尼之門無道桓文之事者。是以後世無傳焉。此便是孔門家法。世儒只講得一箇伯者的學問。所以要知得許多陰謀詭計。純是一片功利的心。與聖人作經的意思正相反。如何思量得通。因嘆曰。此非違天德者。未易與言此也。又曰。孔子云。吾猶及史之闕文也。孟子云。盡信書不如無書。吾於武成取二三策而已。孔子刪書。於唐虞夏四五百年間。不過數篇。豈更無一事。而所述止此。聖人之意可知矣。聖人只是要刪去繁文。後儒却只要添上。愛曰。

世の儒者、許多講じ來り講じ去れるも、只だ是れ箇の伯術を講じ得しのみ。』

(一) 經義に反し天理に叛くの說とは、春秋以後の繁文を云ふ (二) あやしき說を立てゝ理にもとるの言を放つこと (三) 前節の切に深く其事に取るところあるものは、縱令聖人復た起ちて來るとも、其取るべき說には、變更を命ずること能はざらんとの意 (四) 以下自己の所見に拘りて聖賢の敎旨に違はず、新しくめづらしきことを競ひて、驕慢の念さかんになりゆき、俗眼を驚かせて名聲を博せんことを圖り、天下を愚にし、盲にし、爭うて文章辭句を飾り、世に知れわたることのみ希ひて、大本を厚くして著實を尊び、淳朴の風に還る行迹あるものはなしとの意。靡然はなびく貌 (五) 春秋に三傳あり、左氏・公羊氏・穀梁氏これ也、左傳は左氏傳の略 (六) 前言のみにて其後を言はず、人をして察せしむるを歇後と云ふ、謎語はなぞ (七) 讀みて解し難く、意味悟り難き文章 (八) 魯の國の史記 (九) 程伊川の語、近思錄致知類に出づ、先づ傳の事跡を案とし、經(春秋)の褒貶を斷として看んとの說也 (一〇) 仲尼は孔子の字、門は門人の略、桓は齊の桓公。文は晉の文公、共に周末の伯者(霸者)也、孔門には王道を云ふも霸道を云はず、故に道ふ者なしと云ひ、後世傳ふることなしといふ (一一) 霸者也、仁を專らとして治めず、武を專らとして治むるもの (一二) 密かなるはかりごと、いつはりのはかりごと (一三) 孔子の言、論語衛靈公篇に出づ、闕文とは、史實の疑はしきものは、闕きて傳へざるを云ふ (一四) 孟子盡心篇下に出づ、武成は尙書の武成篇、策は板の義也 (一五) 添へ加へて積み上げる意 (一六) 齊桓公・晉文公・秦穆公・宋襄公・楚莊王の五霸也 (一七) 伏羲と黃帝 (一八) ひろびろとしてまばら、分明せざる意 (一九) すなはにてきぢのまゝなること (二〇) うつくしきいろどりの意 (二一) 三皇の書なれども今傳はらず (二二) 風俗氣象 (二三) 夏の俗は忠を尙び、商の俗は質を尙ぶ (二四) 其道を本として述べあらはすこと (二五) 文王と武王、憲章はのつとりあらはす (二六) 禹・湯・文武を三王と稱す

伐レ國。便是罪。何必更問二其伐レ國之詳一。聖人述二六經一。只是要レ正二人心一。只是要下存二天理一去中人欲上。於下存二天理一去二人欲一之事上。則嘗言レ之。或因二人請問一。各隨二分量一而說。亦不二肯多道一。恐人專求二之言語一。故曰。予欲レ無レ言。若是一切縱二人欲一滅二天理一的事。又安肯詳以示レ人。是長レ亂導レ奸也。故孟子云。

を刪るか。』先生曰く、『縱ひ傳ふる者あるも、亦世變に於て漸く宜しき所に非ず。(一二二)風氣益〻開け、文采日に勝ち、周末に至りては變ずるに夏・商の俗を以てせんと欲すと雖も已に挽くべからず。況や唐・虞をや。又況や羲(一二三)・黃の世をや。然れども其治は同じからずして其道は則ち一なり。孔子、堯・舜に於ては則ち之を祖述し(一二四)、文(一二五)・武に於ては則ち之を憲章す。文・武の法は卽ち是れ堯・舜の道なり。但だ時に因りて治を致し、其設施政令已に自ら同じからず。卽ち夏・商の事業は之を周に施して已に合はざるあり。故に周公は三王(一二六)を兼ねんとを思ひ、其の合はざるあれば仰いで之を思ひ、夜以て日に繼ぐ。況や太古の治豈に復た能く行はれんや。斯れ固より聖人の略すべき所なり。』又曰く、『專ら無爲を事とし、三王の時に因りて治を致すが如くなる能はずして、必ず行ふに太古の俗を以てせんと欲するは、卽ち是れ佛・老の學術なり。時に因りて治を致し、三王の一に道に本づくが如くなる能はずして、功利の心を以て之を行ふは、則ち是れ伯者以下の事業なり。後

史舊文。若春秋須レ此而後明。孔子何必削レ之。愛曰。伊川亦云。傳是案。經是斷。如レ書下弑二某君一伐中某國上。若不レ明二其事一。恐亦難レ斷。先生曰。伊川此言。恐亦是相二沿世儒之說一。未レ得二聖人作レ經之意一。如レ書レ弑レ君。卽弑レ君便是罪。何必更問二其弑レ君之詳一。征伐當下自二天子一出上。書レ伐レ國。卽

如何ぞ思量し得て通ぜん」と。因つて嘆じて曰く、此れ天德に達する者に非ざれば、未だ與に此を言ふに易からざるなりと。又曰く、孔子云ふ、(一三)吾れ猶ほ史の闕文に及べりと。孟子云ふ、盡く書を信ぜば書無きに如かず、吾れ武成に於て二三策を取るのみと。孔子書を删る(一四)や、唐・虞・夏四五百年の閒に於て數篇に過ぎず。豈に更に一事無からんや。而して述ぶる所此に止まる。聖人の意知る可し。聖人は只だ是れ繁文を删り去らんことを要し、後儒は却つて只だ添上(一五)せんことを要す。』愛曰く、『聖人は經を作るに、只だ是れ人欲を去りて天理を存することを要し、五伯(一六)以下の事の如きは、聖人の詳かにして以て人に示すことを欲せざる、則ち誠に然り。堯・舜以前の事の如きに至りては、如何ぞ略して少しも見さゞるか。』先生曰く、『羲(一七)黃の世は其事闊疎(一八)にして之を傳ふる者鮮し。此れ亦以て其時全く是れ淳龐朴(一九)素にして略ゝ文采(二〇)無きの氣象を想見すべし。此は便ち是れ太古の治にして、後世の及ぶ可きに非ず。』愛曰く、『三墳(二一)の類の如き、亦傳ふる者あり。孔子何を以て之

之耳目。使天下靡然爭務修飾文詞。以求知於世。而不復知有敦本尚實反朴還淳之行。是皆著述者有以啓之。愛曰。著述亦有不可缺者。如春秋一經。若無左傳。恐亦難曉。先生曰。春秋必待傳而後明。是歇後謎語矣。聖人何苦爲此艱深隱晦之詞。左傳多是魯

するが如き、即ち君を弑する、便ち是れ罪なり。何ぞ必ずしも更に其の君を弑するの詳かなるを問はん。征伐は當に天子より出づべし。國を伐つと書するは、即ち國を伐つ、便ち是れ罪なり。何ぞ必ずしも更に其の國を伐つの詳かなるを問はん。聖人の六經を述ぶるは只だ是れ人心を正しうせんことを要し、只だ是れ天理を存して人欲を去らんことを要す。天理を存して人欲を去るの事に於ては、則ち嘗て之を言へり。或は人の請問に因り、各〻分量に隨ひて說き、亦肯て多く道はず。恐らくは人專ら之を言語に求めん。故に曰く、予は言ふこと無からんを欲すと。是の若き一切人欲を縱にし天理を滅するの事は、又安ぞ肯て詳かに以て人に示さんや。是れ亂を長じ姦を導くなり。故に孟子云く(一〇)、仲尼の門に桓・文の事を道ふ者なし。是を以て後世傳ふること無しと。此は便ち是れ孔門の家法なり。世儒は只だ一箇伯者(一一)の學問を講得するのみ。所以に許多の陰謀詭計(一二)を知得するを要す。純ら是れ一片功利の心にして、「聖人經を作るの意思と正に相反す。

之。斷不レ能レ去。只宜下取二法孔子一。錄二其近レ是者一而表中章之上。則其諸惟悖之説。亦宜二漸漸自廢一。不レ知二文中子當時擬レ經之意如何一。某切深有レ取二於其事一。以爲聖人復起不レ能レ易也。天下所二以不一レ治。只因下文盛實衰。人出二己見一。眩レ俗取レ譽。徒新奇相高。以以亂二天下之聰明一。塗二天下

所以は、只だ文盛にして實衰へ、人己の見を出し、新奇相高ぶり、以て俗を眩して譽を取り、徒に以て天下の聰明(四)を亂し、天下の耳目を塗ぎ、天下をして靡然として爭ひ務めて文詞を修飾し、以て世に知られんことを求め、而して復た本を敦うし實を尙び朴に反り淳に還るの行あることを知らざらしむるに因る。是れ皆著述てふ者以て之を啓くあり。』愛曰く、『著述は亦缺くべからざる者あり。春秋一經の如き、若し左傳無くんば恐らく亦曉り難からん。』先生曰く、『春(五)秋必ず傳を待ちて後明かならんには、是れ歇後(六)の謎語なり。聖人何を苦みてか此艱深隱晦(七)の詞を爲さん。左傳は多く是れ魯史(八)の舊文なり。若し春秋此を須ちて後に明かならんには、孔子何ぞ必ずしも之を削らんや。』愛曰く、『伊川(九)亦云く、傳は是れ案、經は是れ斷なりと。某君を弑し某國を伐つと書するが如き、若し其事を明かにせずんば恐らくは亦斷じ難からん。』先生曰く、『伊川の此言は恐らくは亦是れ世儒の說に相沿ひ、未だ聖人の經を作るの意を得ず。君を弑すと書

以降。如九丘八索一切淫哇逸蕩之詞。蓋不知其幾千百篇。禮樂之名物度數、至是亦不可勝窮。孔子皆刪削而述正之。然後其說始廢。如書詩禮樂中。孔子何嘗加一語。今之禮記諸說。皆後儒附會而成已。非孔子之舊。至於春秋。雖稱孔子作之。其實皆魯史舊文。所謂筆者筆其舊。所謂削者削其繁。是有減無增。孔子述六經。懼繁文之亂天下。惟簡之而不得。使天下務去其文以求其實。非以文教之也。

春秋以後。繁文益盛。天下益亂。始皇焚書得罪。是出於私意。又不合焚六經。若當時志在明道。其諸反經叛理之說。悉取而焚之。亦正暗合刪述之意。自秦漢以降。文又日盛。若欲盡去

春秋以後、繁文益々盛にして天下益々亂る。始皇の書を焚きて罪を得たるは、是れ私意に出づればなり。文六經を焚くべからず。若し當時志道を明かにするに在りて、其の諸の(二)經に反き理に叛くの說、悉く取りて之を焚かば、亦正に暗に刪述の意に合せしならん。秦・漢より以降、文又日に盛なり。若し盡く之を去らんと欲すとも斷じて去る能はじ。只だ宜しく法を孔子に取り、其の是に近き者を錄して之を表章すべし。則ち其の諸の(二)恠悖の說は亦宜しく漸漸自廢せしむべし。文中子が當時經に擬せしの意如何を知らざれども、某切に深く其事に取るところあり。(三)以爲聖人復た起つとも易ふると能はじと。天下の治まらざる

道明㆓於天下㆒。則六經不㆓必述刪㆒。述㆓六經㆒孔子不㆑得㆑已也。自㆓伏羲畫㆘卦。至㆓於文王周公㆒。其開言㆑易。如㆓連山歸藏之屬㆒。紛紛籍籍。不㆑知㆓其幾㆒。易道大亂。孔子以㆓天下好㆑文之風日盛㆒。知㆓其說之將㆘無㆓紀極㆒。於㆑是取㆓文王周公之說㆒而贊㆑之。以爲惟此爲㆑得㆓其宗㆒。於㆑是紛紛之說盡廢。而天下之言㆑易者始一。書詩禮樂春秋皆然。書自㆓典謨㆒以後。詩自㆓二南㆒

て得ず。天下をして務めて其文を去り以て其質を求めしむ。文を以て之を敎ふるに非ざるなり。

(一) 姓は王、名は通、字は仲淹、隋の人、門人諡して文中子と云ふ、聖經に倣ひて六經續篇を編す、今中說十篇のみ世に傳はる、文中子是れ也、六經は易・詩・書・禮・樂・春秋の六書 (二) 姓は韓、名は愈、字は退之、唐の人、文章を以て鳴る、故に文人の雄となす (三) 及ばざること甚だ遠しとの意 (四) 王通の聖經に倣ひて六經續篇を作れるを云ふ、詩三百五十篇、書百五十篇、南北朝の詩を合せて詩經の續篇とし、漢以降世々の帝王の詔を收めて書經の續篇とす、春秋の續篇を元經と云ふ、經に擬するの故を以て失ありやと問ふ也 (五) 文中子の經に擬するの意と如何との言也 (六) 後段の「純ら名の爲にする」に比し輕き意也 (七) 刪は取舍の義、さだむの義、述はのぶ (八) 華美を棄てゝ淳朴に還反する也 (九) 事を行ふの實際に示すこと (一〇) 言葉を飾ること (一一) 多言、上ばはりさわぐ說 (一二) 道天下に明かなれば、六經の刪述も必要なければ、必ずしも刪述せらるまじきにと也 (一三) 三皇の一、三皇は伏羲・神農・黃帝也 (一四) 周禮に、「春官大卜三易の法を掌る、一に曰く連山、二に曰く歸藏、三に曰く周易、」とあり、又夏には連山と謂ひ、殷には歸藏と謂ひ、周には周易と謂ふと (一五) 紛々とは亂れたる貌、籍々は說のまちまちなる意 (一六) 歸着する處をいふ (一七) 典は書の堯典・舜典、謨は大禹謨・皐陶謨 (一八) 詩の周南・召南 (一九) 九丘は古九州の地理を記せる書、八索は八卦の書也 (二〇) 淫靡、於逸の曲調と歌詞 (二一) 事物の名稱、法度の歡 (二二) 述べて正すこと (二三) 浮華の文、藻文也 (二四) 文章

法。曰。孔子刪述六經以明道也。先生曰。然則擬經獨非效法孔子乎。愛曰。著述卽於道有所發明。擬經似徒擬其迹。恐於道無補。先生曰。子以明道者。使其反朴還淳而見諸行事之實乎。抑將美其言辭而徒以譊譊於世也。天下之大亂。由虛文勝而實行衰也。使

王・周公に至るまで、其開易を言へるもの連山(一四)・歸藏の屬の如き、紛紛籍籍(一五)として其の幾なるを知らず。易道大いに亂る。孔子天下の文を好むの風日に盛なるを以て、其說の將に紀極(一六)無からんとするを知り、是に於て文王・周公の說を取りて之を贊す。以爲へらく惟だ此れ其宗を得たりと爲す。是に於て紛紛の說盡く廢して天下の易を言ふ者始めて一なり。書・詩・禮・樂・春秋皆然り。書は典謨(一七)より以後、詩は二南(一八)より以降、九丘(一九)・八索・一切淫哇逸蕩(二〇)の詞の如き、蓋し其幾千百篇なるを知らず。禮樂の名物度數(二一)是に至りて亦勝げて窮むべからず。孔子皆刪削して之を述正(二二)し、然して後其說始めて廢す。書・詩・禮・樂の中の如き、孔子何ぞ嘗て一語を加へん。今の禮記の諸說は、皆後儒の附會して成すのみ。孔子の舊に非ず。春秋に至りては、孔子之を作ると稱すと雖も、其實は皆魯史の舊文にして、所謂筆すとは其舊を筆するなり、所謂削るとは其繁を削るなり。是れ減ずるありて增す無し。孔子の六經を述ぶるは、繁文の天下を亂すことを懼れ、之を簡にせんと惟う

之雖耳。文中子賢儒也。後人徒以二文詞之故一。推二尊退之一。其實退之去二文中子一遠甚。愛問。何以有二擬レ經之失一。先生曰。擬レ經恐未レ可二盡非一。且說。後世儒者著述之意。與レ擬レ經如何。愛曰。世儒著述。近レ名之意不レ無。然期二以明一レ道。擬レ經純若レ爲レ名。先生曰。著述以明レ道。亦何所二效

きや甚し。』愛問ふ、『何を以てか經に擬するの失(四)ありや。』先生曰く、『經に擬する恐らくは未だ盡く非とすべからざらん。且く說け。後世の儒者著述の意と(五)經に擬すると如何。』愛曰く、『世儒の著述(六)は名に近きの意なくんばあらず。然れども以て道を明かにするを期す。經に擬するは純ら名の爲にするが若し。』先生曰く、『著述は以て道を明かにすとは亦何の效ひ法る所ぞ。』曰く、『孔子六經を删述し以て道を明かにす。』先生曰く、『然らば則ち經に擬するは獨り孔子に效ひ法る(七)に非ざるか。』愛曰く、『著述は卽ち道に於て發明する所あり。經に擬するは、徒に其迹に擬するに似たり。恐らくは道に於て補ふと無けん。』先生曰く、『子は道を明かにする者を以て、其の朴に反り淳に還りて諸(九)を行事の實に見さしめんか。抑將に其言辭(一〇)を美にして徒(八)に以て世に譊譊(一一)たらんとするか。天下の大亂は虛文勝ちて實行衰ふるに由る。道をして天下に明かならしめば、則ち六經(一二)必ずしも述删されじ。六經を述ぶるは、孔子已むを得ざればなり。伏羲(一三)卦を畫してより文

命。以二先生精一之訓一推レ之。此語似レ有レ弊。先生曰。然。心一也。未レ雜レ於レ人謂二之道心一。雜以二人僞一謂二之人心一。人心之得二其正一者即道心。道心之失二其正一者即人心。初非レ有二二心一也。程子謂。人心即人欲。道心即天理。語若二分析一而意實得レ之。今曰二道心爲レ主而人心聽レ命是二心也。天理人欲不二竝立一。安有二天理爲レ主人欲又從而聽レ命者一。

人に於て雜らざる之を道心と謂ひ、雜ふるに人僞(二)を以てする之を人心と謂ふ。人心の其正を得たる者は即ち道心、道心の其正を失へる者は即ち人心なり。初より二心あるに非ざるなり。程子謂ふ、人心は即ち人欲、道心は即ち天理なりと。語は分析するが若くにして、意は實に之を得たり。今(三)道心主となりて人心命を聽くと曰ふは是れ二心なり。天理、人欲は竝び立たず。安ぞ天理主と爲り、人欲又從つて命を聽く者あらんや。』

(一) 朱子中庸の序に出づ、道心・人心は尚書大禹謨の「人心惟危、道心惟微」に基く、後儒朱子の序文に異論ありとして陽明に質せる也　(二) 私意私慾を加へたる人心の作用　(三) 以下朱子の妄を辨ず

愛問二文中子韓退之。先生曰。退之文人

愛、文中子(一)・韓退之(二)を問ふ。先生曰く、『退之は文人の雄のみ。文中子は賢儒なり。後人徒に文詞の故を以て退之を推尊す。其實退之の文中子(三)を去ること遠

一箇天理。要下此心純是天理。須下就理之發見處上用功。如下發見於事親時。就在事親上學存此天理。發見於事君時。就在事君上學存此天理。發見於處富貴貧賤時。就下在處富貴貧賤上上學存此天理。發見於處患難夷狄時。就下在處患難夷狄上上學存此天理。至於作止語默。無處不然。隨他發見處。即就那上面。學箇存天理。這便是博學之於文。便是約禮的功夫。博文即是惟精。約禮即是惟一。

することを學び、患難夷狄（五）に處るに發見する時は、患難夷狄に處る上に就いて此天理を存することを學ぶ。作止語默（六）に至るまで、處として然らざる無し。他の發見する處に隨ひ、即ち那の上面に就いて箇の天理を存することを學ぶ。這は便ち是れ博く之を文に學ぶなり。便ち是れ約禮の功夫なり。博文は即ち是れ惟精、約禮は即ち是れ惟一なり。』

（一）論語雍也篇の「子曰、博學於文約之以禮」に採る　（二）略はみち也、見當がつかぬといふ程の意　（三）あらはれて　（四）かすかにして見え難きこと　（五）えびす　（六）動くと止まると、語ると、默すると、何れの場合にも其の事柄に就いて、天理の存することを學ぶべしと也

愛問。道心常爲一身之主。而人心每聽

愛問ふ。『道心（一）は常に一身の主と爲り、人心は每に命を聽く。先生の精一の訓を以て之を推すに、此語弊あるに似たり。』先生曰く、『然り。心は一なり。未だ

即所レ謂充ニ其惻隱之心一。而仁不レ可ニ勝用一矣。然在ニ常人一不レ能レ無ニ私意障礙一。所以須下用ニ致知格物之功一。勝レ私復レ理。即心之良知更無ニ障礙一。得ニ以充塞流行一。便是致ニ其知一。知致則意誠。

㊀ 會得（ゑとく）、理會、合點すること ㊁ 孺子は幼兒、井に入るは陷る也、孟子を引く ㊂ いたましく思ふこと ㊃ 慮らずして知ること、陽明は大學八條目中の「致知」を解して、此の良知を致すの義となす ㊄ さはりさまたげ ㊅ 充塞はみちふたがる、流行はひろくおこなふ

愛問。先生以ニ博文一爲ニ約禮功夫一。深思レ之未レ能レ得レ略。請ニ開示一。先生曰。禮字即是理字。理之發見可レ見者。謂ニ之文一。文之隱微不レ可レ見者。謂ニ之理一。只是一物。約禮只是要ニ此心純是

愛問ふ。『先生は博文を以て約禮の功夫と爲す。深く之を思ふに未だ略を得る能はず。開示を請ふ。』先生曰く、『禮の字は即ち是れ理の字、理の發見して見る可き者之を文と謂ひ、文の隱微にして見る可からざる者、之を理と謂ふ。只だ是れ一物なり。約禮は只だ是れ此心の純にして是れ一個の天理ならんことを要す。此心純にして是れ天理なるを要せば、須く理の發見する處に就て功を用ふべし。親に事ふるに發見する時の如きは、親に事ふる上に就いて此天理を存することを學び、君に事ふるに發見する時は、君に事ふる上に就いて此天理を存することを學び、富貴貧賤に處るに發見する時は、富貴貧賤に處る上に就いて此天理を存

格。是去₌其心之不正₋。以全₌其本體之正₋。但意念所ㇾ在。即要下去₌其不正₋以全中其正上。即無ㇾ時無ㇾ處不₃是存₌天理₋。即是窮理。天理即是明德。窮理即是明₌明德₋。

て、其正を全うせんとを要す。即ち時と無く處と無く是れ天理を存せざらんや。即ち是れ窮理也。天理は即ち是れ明德、窮理は即ち是れ明德を明かにする也。』

㊀ 孟子離婁篇の上に「惟大人爲₃能格₌君心之非₋」とあるを引く、陽明は格物の格を正「タダス」と解き、朱子は至「イタス」と解く、其見の異なる所を辨ふべし

又曰。知是心之本體。心自然會ㇾ知。見ㇾ父自然知ㇾ孝。見ㇾ兄自然知ㇾ弟。見₌孺子入ㇾ井。自然知₌惻隱₋。此便是良知。不ㇾ假₌外求₋。若₌良知之發₋。更無₌私意障礙₋。

又曰く『知は是れ心の本體なり。心は自然に知を會す。(一)父を見ては自然に孝を知り、兄を見ては自然に弟を知り、孺子(二)の井に入るを見ては自然に惻隱(三)を知る。此れ便ち是れ良(四)知にして、外に求むるを假らず。良知の發するが若き、更に私意の障礙(五)なし、即ち所謂其惻隱の心を充して仁勝げて用ふべからず。然れども常人に在りては私意の障礙無き能はず。所以に須く致知格物の功を用ひ私に勝ち理に復るべし。即ち心の良知更に障礙無く、以て充塞流行(六)するを得ば、便ち是れ其知を致すなり。知致れば則ち意誠なり。』

如知州知縣之知。是自己分上事。已與天爲一。事天如子之事父臣之事君。須是恭敬奉承。然後能無失。尙與天爲二。此便是聖賢之別。至於殀壽不貳其心。乃是教學者一心爲善。不可以窮通殀壽之故。便把爲善心變動了。只去修身以俟命。見得窮通殀壽。有箇命在我。亦不必以此動心。事天雖與天爲二。已自見得箇天在面前。俟命便是未曾見面在此。等候相似。此便是初學立心之始。有箇困勉的意在。今却倒做了。所以使學者無下手處。愛曰。昨聞先生之教。亦影影見得功夫須是如此。今聞此說。益無可疑。愛昨晚思。格物的物字。即是事字。皆從心上說。先生曰。然。身之主宰便是心。心之所發便是意。意之本體便是知。意之所在便是物。如意在於事親。即事親便是一物。意在於事君。即事君便是一物。意在於仁民愛物。即仁民愛物便是一物。意在於視聽言動。即視聽言動便是一物。所以某說。無心外之理。無心外之物。中庸言。不誠無物。大學明明德之功。只是箇誠意。誠意之功。只是箇格物。

學知利行・困知勉行は中庸の語にして、修養の順序を述べたる也　(一二) 孟子盡心篇の章句　(一三) 同上　(一四) 知州知縣は官職の名　(一五) 初學分上・賢人分上・聖人分上の區別あり、朱子と陽明とは此見解を顛倒す、故に朱子倒看の語あり。(一六) 殀は短命、壽は長生　(一七) 窮まると通ずると　(一八) 孟子盡心篇の章句を引く　(一九) かくあるべしと待つ意、期待　(二〇) 彷彿と同意　(二一) 主公といふに同じ　(二二) 自己の稱

先生又曰。格物。如孟子大人格君心之

先生又曰く、「格物は、孟子の大人は君心を格すの格の如し。(二) 是れ其心の不正を去りて、以て其本體の正を全うする也。但だ意念の在る所、即ち其不正を去りて以

知勉行事。朱子錯二訓格物一。只爲三倒看二了此意一。以二盡レ心知レ性。爲二物格知至一。要二初學便去レ做二生知安行事一。如何做得。愛問。盡レ心知レ性。何以爲二生知安行一。先生曰。性是心之體。天是性之原。盡レ心即是盡レ性。惟天下至誠。爲下能盡二其性一知中天地之化育上。存レ心者。心有レ未レ盡也。知レ天

身の主宰(しゆさい)〔一二〕は便(すなは)ち是れ心、心の發する所は便ち是れ意、意の本體は便ち是れ知、意の在る所は便ち是れ物なり。意、親に事(つか)ふるに在るが如き、即ち親に事ふること便(すなは)ち是れ一物、意、君に事ふるに在るは、即ち君に事ふること便(すなは)ち是れ一物、意、民を仁し物を愛するに在るは、即ち民を仁し物を愛すること便(すなは)ち是れ一物、意、視聽言動(しちやうげんどう)に在るは、即ち視聽言動(しちやうげんどう)便(すなは)ち是れ一物なり。所以(ゆゑ)に某〔一三〕は說けり、心外の理無く、心外の物無しと。中庸(ちうよう)に言ふ、誠ならざれば物無しと。大學の明德を明かにするの功は、只だ是れ箇(こ)の誠意(せいい)にして、誠意の功は只だ是れ箇(こ)の格物(かくぶつ)なり。』

(一) 先生の教旨と朱子の格物の訓と、之を思察して合致せざる處ありとの意 (二) 格物は至善に止まるの功用なれば、既に至善を知りたる上は、直ちに格物は知らるゝ筈也との意 (三) 書とは尙書を指す、論語の「博約」とは、雍也篇の「子曰、博學二於文一約レ之以レ禮、」を引く、孟子の「盡心知性」は、盡心篇の首に、「盡二其心一者、知二其性一也、知二其性一則知レ天矣、」とある章句を引く、釋然は分かりて明かなる貌 (四) 子夏云々は孟子に出づ (五) 先に聞ける言に馴染んで、是當を求めずには居ぬとの意 (六) かりそめに從はんや (七) 吻合なり、脣を合すにたとふ、ひしと合するの謂 (八) しひてひきつけること、こぢつけ (九) 徐愛の字 (一〇) 孟子の盡心篇の章句 (一一) 生知安行・

處。亦何嘗苟從。精一博約盡心。本自與二吾說一脗合。但未二之思一耳。朱子格物之訓。未レ免二牽合附會一。非二其本旨一。精是一之功。博是約之功。曰仁既明二知行合一之說一。此可二一言而喩一。盡レ心知レ性知レ天。是生知安行事。存レ心養レ性事レ天。是學知利行事。殀壽不レ貳。修レ身以俟。是困

上の事にして、已に天と一たり。天に事ふるは、子の父に事へ臣の君に事ふるが(二一)如し。須く是れ恭敬奉承して然る後能く失ふこと無かるべし。尙ほ天と二たり。此は便ち是れ聖賢の別なり。殀壽(一六)其心を貳にせざるに至りては、乃ち是れ學者をして、心を一にして善を爲し、窮通殀壽(一七)の故を以て、便ち善を爲すの心を把りて變動すべからざらしめ、只だ身(一八)を修め去りて以て命を俟ち、窮通殀壽、箇の命我に在るあるを見得て、亦必ずしも此を以て心を動さゞらしむ。天に事ふるは天と二なりと雖も、已に自ら箇の天の面前にあるを見得るなり、命を俟つは、便ち是れ未だ曾て面の此に在るを見ずして等候(一九)すると相似たり。此は便ち是れ初學心を立つるの始、箇の困勉の意在るあり。今却つて倒に做す。所以に學者をして手を下す處なからしむ。』愛曰く、『昨先生の敎を聞き、亦影影(二〇)として功夫は須く是れ此の如くなるべきを見得たり。今此説を聞きて益ゝ疑ふべき無し。愛、昨晩思へり、格物の物の字は卽ち是れ事の字、皆心上より說くと。』先生曰く、『然り。

之說一。似三亦見二得大略一。但朱子之訓。其於二書之精一。論語之博約。孟子之盡心知性一。皆有レ所二證據一。以レ是未レ能二釋然一。先生曰。子夏篤信二聖人一。曾子反求二諸己一。篤信固亦是。然不レ如二反求之切一。今既不レ得二於心一。安可下狃二於舊聞一。不上レ求二是當一。就如二朱子一。亦尊二信程子一。至下其不レ得二於心一。

子を尊信すれども、其の心に得ざる處に至りては、亦何ぞ嘗て(六)苟も從はん。精一・博約・盡心は本自ら吾說と(七)脗合す、但だ未だ之を思はざるのみ。朱子の格物の訓は未だ(八)牽合附會を免れざれば其本旨に非ず。精は是れ一の功、博は是れ約の功なり。(九)曰仁は既に知行合一の說を明かにす。此れ一言にして喩すべし。(一〇)心を盡して性を知り天を知るは、是れ(一一)生知安行の事、(一二)心を存して性を養ひ天に事ふるは、是れ學知利行の事、(一三)殀壽貳にせず身を修め以て俟つは、是れ困知勉行の事なり。朱子格物を錯り訓じ、只だ倒に此意を看し爲に、心を盡し性を知るを以て物格り知至ると爲し、初學便ち生知安行の事と做し去れと要するも、如何ぞ做し得んや。』愛問ふ。『心を盡して性を知れば、何を以てか生知安行と爲すか。』先生曰く、『性は是れ心の體、天は是れ性の原にして、心を盡すは卽ち是れ性を盡すなり。惟だ天下の至誠能く其性を盡して天地の化育を知ると爲す。心を存するは心未だ盡さゞることあるなり。天を知るは(一四)知州・知縣の知の如し。是れ(一五)自己分

話。若見二得這箇意一時。即一言而足。今人卻就將二知行一分作二兩件一去レ做。以爲必先知了。然後能行。我如今且去二講習討論一做二知的工夫一。待二知得眞了一。方去レ做二行的工夫一。故遂終レ身不レ行。亦遂終レ身不レ知。此不二是小病痛一。其來已非二一日一矣。某今說二箇知行合一一。正是對レ病的藥。又不二是某鑿空杜撰一。知行本體原是如レ此。今若知二得宗旨一時。即說二兩箇一亦不レ妨。亦只是一箇。若不レ會二宗旨一。便說二一箇一。亦濟二得甚事一。只是閒說話。

愛問。昨聞下先生止二至善一之教上。已覺三功夫有二用レ力處一。但與二朱子格物之訓一。思レ之終不レ能レ合。先生曰。格物是止二至善一之功。既知二至善一。即知二格物一矣。愛曰。昨以二先生之教一。推二之格物

愛問ふ。『昨先生の至善に止まるの教を聞き、已に功夫に力を用ふる處あるを覺る。但だ(一)朱子の格物の訓と、之を思うて終に合ふこと能はず。』先生曰く、『格物は是れ至善に止まるの功なり、既に至善を知れば卽ち格物を知る。』愛曰く、『(二)昨先生の教を以て之を格物の說に推すに亦大略を見得るに似たり。但だ朱子の訓は、其の書の精一・論語の博約・孟子の盡心知性に於て皆證據する所あり。是を以て未だ(三)釋然たる能はず。』先生曰く、『(四)子夏は篤く聖人を信じ、曾子は反つて諸を己に求む。篤く信ずるは固より亦是なり。然れども反り求むるの切なるに如かず。今既に心に得ずんば、安ぞ(五)舊聞に狃れて是當を求めざる可けん。就ち朱子の如き亦程

知。此却是何等緊切著實的工夫。如今苦苦定要下說二知行做中兩箇上。是甚麼意。某要三說做二一箇一。是甚麼意。若不レ知二立言宗旨一。只管說二一箇兩箇一。亦有二甚用。愛曰。古人說二知行做二兩箇一。亦是要二人見箇分曉一。一行做二知的功夫一。一行做二行的功夫一。卽功夫始有二下落一。先生曰。此却失二了古人宗旨一也。某嘗說。知是行的主意。行是知的功夫。知是行之始。行是知之成。若會得時。只說二一箇知一。已自有二行在一。只說二一箇行一。已自有二知在一。古人所下以既說二一箇知一。又說中一箇行上者。只爲三世間有二一種人。懵懵懂懂的任レ意去レ做。全不レ解二思惟省察一也。只是箇冥行妄作。所以必說二箇知一。方纔行得是。又有二一種人一。茫茫蕩蕩懸空去二思索一。全不二肯著實躬行一。也只是箇揣二摸影響一。所以必說二一箇行一。方纔知得眞。此是古人不レ得レ已補レ偏救レ弊的說

說くも妨げず。亦只だ是れ一箇なり。若し宗旨を會せざれば、便ち一箇と說くも、亦甚の事をか濟し得ん。只だ是れ閑說話のみ。』

（一）會得（えとく）（二）宗賢婿は黃、名は綰、久菴と號す、惟賢婿は顧、名は應祥、若溪と號す、共に陽明の高弟也（三）明かに二つに別れたることとならんと也（四）よきいろ（五）わるきにほひ（六）或人、假設的の人（七）へだてたつ（八）苦々はあながちと訓ず、强ひてと同意（九）主たる旨意（一〇）これのわかりやすきこと（一一）一面にはの意（一二）落着（らくちやく）（一三）某は自己の稱（一四）心くらくしてみだるゝ貌（一五）己の思ふまゝに做して、かんがへなほしをすることを知らぬ（一六）くらきおこなひ、みだりなるしわざ（一七）廣く大なる貌（一八）空漠に考へもとむる（一九）實體ならざる影や響をおしはかりさぐりもとめる（二〇）かたよりたるをおぎなひ其弊害をすくふ（二一）自己の稱（二二）自分のあてずゐりやう、かつてぎめにはあらずとの意（二三）主たる旨意（二四）會得（二五）むだばなし

行孝行弟。方可稱他知孝知弟。不成只是曉得說些孝弟的話。便可稱爲知孝弟。又如知痛。必已自痛了方知痛。知寒必已自寒了。知饑必已自饑了。知行如何分得開。此便是知行的本體。不曾有私意隔斷的。聖人教人必要是如此。方可謂之知。不然只是不曾

だ世間一種の人、懵懵懂懂（一四）意に任せて做し去り、全く思惟省察（一五）することを解せざるものあるが爲なり。只だ是れ箇は冥行妄作（一六）なり。所以に必ず箇の知を說き、方に纔に行ひ得て是なり。又一種の人あり。茫茫蕩蕩（一七）として懸空（一八）に思索したりて全く肯て著實に躬行せず。また只だ是れ箇に影響（一九）を揣摸す。所以に必ず一箇の行を說き、方に纔に知り得て眞なり。此は是れ古人已むを得ずして偏（二〇）を補ひ弊を救ふの說話なり。若し這箇の意を見得る時は、卽ち一言にして足る。今人却つて就ち知行を將つて分ちて兩件と作し做し去り、以爲必ず先づ知りて、然る後に能く行ふ。我如今且つ講習討論し去りて知的工夫を做し知り得て眞なるを待ちて方に行的工夫を做し去らんと。故に遂に身を終るまで行はず。亦遂に身を終るまで知らず。此は是れ小なる病痛にあらず。其の來るや已に一日に非ず。（二一）某が今箇の知行合一を說くは、正に是れ病に對するの藥にして、又是れ某の鑿空杜撰（二二）するにあらず。知行の本體は原是れ此の如し。今若し宗旨（二三）を知得する時は、卽ち兩箇と

色一屬レ行。只見二那好色一時已自好了。不下是見了後又立二箇心一去ち好。聞二惡臭一屬レ知。惡二惡臭一屬レ行。只聞二那惡臭一時。已自惡了。不下是聞了後別立二箇心一去ち惡。如二鼻塞人一。雖レ見二惡臭在上レ前。鼻中不二曾聞得一。便亦不二甚惡一。亦只是不二曾知上レ臭。就如レ稱二某人知レ孝某人知上レ弟。必是其人已曾

う。知行如何ぞ分ち得て開かん。此れ便ち是れ知行の本體にして、曾て私意の隔(七)斷あるにあらず。聖人の人を教ふる、必ず是れ此の如きを要す、方に之を知ると謂ふべし。然らずんば只だ是れ曾て知らざるなり。此れ却つて是れ何等の緊切著實の工夫ぞ。如今(八)苦苦に定めて知行を說きて兩箇と做さんことを要す、是れ甚麽意ぞ。某は說きて一箇と做さんと要す、是れ甚麽意ぞ。若し立言の宗旨(九)を知らざれば、只管に一箇兩箇を說くも、亦甚の用かあらん。』愛曰く、『古人、知行を說きて兩箇と做すは、亦是れ人の見て(一〇)箇の分曉ならんことを要す。(一一)一行は知的功夫と做し、一行は行的功夫と做す。卽ち功夫始めて下落(一二)あらん。』先生曰く、『此れ却つて古人の宗旨を失するなり。(一三)某嘗て說けり、知は是れ行の主意、行は是れ知の功夫、知は是れ行の始め、行は是れ知の成れるなりと。若し會得する時は、只だ一箇の知を說くも、已に自ら行の在るあり。只だ一箇の行を說くも、已に自ら知の在るあり、古人既に一箇の知を說き、又一箇の行を說く所以のものは、只

者。却不能孝。不能弟。便是知與行分明是兩件。先生曰。此已被私欲隔斷。不是知行的本體了。未有知而不行者。知而不行。只是未知。聖賢教人。知行正是要復那本體。不是著你只恁的便罷。故大學指箇眞知行與人看。說如好好色。如惡惡臭。見好色屬知。好好

に是れ那の本體に復らんことを要す。是れ儞をして只だ恁的して便ち罷めしめざらん。故に大學は箇の眞の知行を指し、人に與へて看しめ、(四)好色を好むが如く、(五)惡臭を惡むが如しと說く。好色を見るは知に屬し、好色を好むは行に屬す。只那の好色を見る時は已に自ら好めり。是れ見て後に又箇の心を立てゝ好み去るにあらず。惡臭を聞くは知に屬し、惡臭を惡むは行に屬す。只だ那の惡臭を聞く時は已に自ら惡めり。是れ聞きて後に別に箇の心を立てゝ惡み去るにあらず。鼻塞りたる人の如き惡臭の前に在るを見ると雖も、鼻中曾て聞き得ざれば、便ち亦甚しく惡まず。亦只だ是れ曾て臭きを知らざればなり。就ち(六)某人孝を知り某人弟を知ると稱するが如きは、必ず是れ其人已に曾て孝を行ひ弟を行ひて、方に他孝を知り弟を知ると稱すべく、只だ是れ些なる孝弟の話を說くを曉り得たりとて、便ち稱して孝弟を知れりとすべしと成さず。又痛を知るが如きも、必ず已に自ら痛みて方に痛を知る。寒を知るも必ず已に自ら寒ゆ。饑を知るも必ず已に自ら饑

宜。可二一日二日講レ之而盡一。用二得甚學問思辨一。惟於二溫清時一。也只要三此心純二乎天理之極一。奉養時。也只要三此心純二乎天理之極一。此則非レ有二學問思辨之功一。將レ不レ免二於毫釐千里之繆一。所以雖レ在二聖人一。猶加二精一之訓一。若三只是那些儀節。求二得是當一。便謂二至善一。卽如二今扮戲子一。扮二得許多溫凊奉養的儀節一是當。亦可レ謂二之至善一矣。愛於二是日一。又有レ省。

㊀ 鄧一初字朝朔 ㊁ 試みに若干の問題を擧げて言へ、吾之を聞かん ㊂ ほどあひ ㊃ よろしき ㊄ 至當と同義 ㊅ 毫釐は小さき度數、本は僅の差より末にて千里の繆を來すことを云ふ ㊆ 舜禹に告ぐるに、「惟精惟一、允執厥中」と訓ふ ㊇ 俳優 ㊈ 打扮、面を飾り身を裝ふ也

愛因レ未レ會二先生知行合一之訓一。與二宗賢惟賢一往復辨論未レ能レ決。以問二於先生一。先生曰。試擧看。愛曰。如今人儘有下知二得父當レ孝。兄當レ弟

愛、未だ先生の知行合一の訓を會せざるに因り、(一)宗賢・惟賢と往復辨論するも未だ決する能はず、以て先生に問ふ。先生曰く、『試(二)みに擧げよ。看ん』と。愛曰く、如今人儘父に孝なるべく兄に弟なるべきを知得する者ありて、却つて孝なる能はず、弟なる能はず。便ち是れ知と行と分明(三)に是れ兩件ならん。』先生曰く、『此れ已に私欲に隔斷せらる、是れ知行の本體にあらず。未だ知りて行はざる者はあらじ。知りて行はざるは只だ是れ未だ知らざるなり。聖賢の人を教ふる知行正

鄭朝朔問。至善亦須レ有下從二事物上一求者上。先生曰。至善。只是此心純二乎天理之極一便是。更於二事物上一怎生求。且試說二幾件一。看。朝朔曰。且如レ事レ親。如何而爲二溫凊之節一。如何而爲二奉養之宜一。須下求二箇是當一。方是至善上。所三以有二學問思辨之功一。先生曰。若只是溫凊之節。奉養之

（一）鄭朝朔問ふ。『至善も亦須く事物上より求むる者あるべきか。』先生曰く、『至善は、只だ是れ此心の天理の極に純なる便ち是なり。更に事物の上に於て怎生求めん。（二）且く試みに幾かの件を說け。看ん。』朝朔曰く、『且く、親に事ふるが如き、如何にして溫凊の節（三）と爲し、如何にして奉養の宜（四）と爲さん。須く箇の是（五）當を求めば方に是れ至善なるべし。學問思辨の功ある所以か。』先生曰く、『若し只だ是れ溫凊の節と、奉養の宜とは一日、二日之を講じて盡すべし。甚の學問思辨を用ひ得ん。惟だ溫凊の時に於ても、また只だ此心の天理の極に純なるを要し、奉養の時にも、また只だ此心の天理の極に純なるを要す。此は則ち學問思辨の功あるに非ざれば、將に（六）毫釐千里の繆を免れざらんとす。所以に（七）聖人に在りと雖も、猶ほ精一の訓を加ふ。只だ是れ那の些なる儀節に、是當を求め得るが若き、便ち至善と謂はゞ、即ち今の（八）扮戲子の如く、許多の溫凊奉養的儀節を（九）扮し得て是當する、亦之を至善と謂ふ可からん。』爰、是の日に於て又省るあり。

説纏二於胸中一。尙有下未二脫然一者上。如二事レ父一事一。其閒溫凊定省之類。有二許多節目一。不レ知亦須二講求一否。先生曰。如何不二講求一。只是有二箇頭腦一。只是就下此心去二人欲一存二天理一上上講求。就如レ講二求冬溫一。也只是要レ盡二此心之孝一。恐三怕有二一毫人欲閒雜一。講二求夏凊一。也只是要レ盡二此心之孝一。恐三怕有二一毫人欲閒雜一。只是講二求得此心一。此心若無二人欲一。純是天理。是箇誠二於孝一レ親的心。冬時自然思二量父母的寒一。便自要レ去レ求二箇溫的道理一。夏時自然思二量父母的熱一。便自要レ去レ求二箇凊的道理一。這都是那誠孝的心發出來的條件。却是須レ有二這誠孝的心一。然後有二這條件發出來一。譬二之樹木一。這誠孝的心。便是根。許多條件。便是枝葉。須三先有レ根。然後有二枝葉一。不下是先尋二了枝葉一。然後去上レ種レ根。禮記言。孝子之有二深愛一者必有二和氣一。有二和氣一者必有二愉色一。有二愉色一者必有二婉容一。須下是有二箇深愛做一レ根。便自然如上レ此。

は必ず愉色(ゆしよく)あり、愉色(ゆしよく)ある者は必ず婉容(ゑんよう)(一五)ありと。須(すべから)く是れ箇(こ)の深愛(しんあい)の根と做(な)るありて便(すなは)(一四)ち自然に此の如くなるべし。』

(一) 心を外にしての事、理といふものあるべからずと也 (二) 許多は猶は幾多といふが如し、徐愛前に云へる、恐らくは天下の事理に於て、盡す能はざるものあらんとの問に就き、更に重ねて疑を質す也 (三) 此の如き說の蔽は已に久しきものぞ(蔽は半理を蔽ふ義)一語にして悟らしむるは難しと也 (四) しばらく爰に假定的の例を擧げてとの意 (五) 孝の理を父の方に求むにあらず、孝の理は我心の内にありと也、以下君上・友上・民上皆同じ (六) 思ひ返して又更に悟り得たること (七) 前に舊說を受入れたる其說胸裏に絡み居て、兎角に脫然と衣を脫ぎ去りしやうに覺えぬと也 (八) 禮記の曲禮に「凡そ人の子たるの禮は、冬溫かにして夏凊しくし、昏に定めて朝に省る」と、皆孝を盡すの意也、凊はすゞし、昏は夕 (九) 習ひ求むる義 (一〇) 肝要の所なりといふ意なり (一一) へだゝりまじる義 (一二) 尋了は尋ぬること、了は助字 (一三) やはらぎしたがふ氣 (一四) たのしきかほいろ (一五) 和悅の貌

上。求中箇信與レ仁的理上。都只在二此心一。心卽理也。此心無二私欲之蔽一。卽是天理。不レ須三外面添二一分一。以下此純二乎天理一之心上。發レ之事レ父便是孝。發レ之事レ君便是忠。發レ之交レ友治レ民便是信與レ仁。只在下此心去二人欲一存二天理一上上用レ功便是。愛曰。聞二先生如レ此說一。愛已覺レ有二省悟處一。但舊

頭腦あり。只だ是れ此心の人欲を去り天理を存するの上に就いて講求せよ。就ち(一〇)冬溫を講求するが如きまた只だ是れ此心の孝を盡すを要し、一毫たりとも人欲の(一一)閒雜あらんことを恐れ怕る。夏凊を講求するも、また只だ是れ此心の孝を盡すを要し、一毫たりとも人欲の閒雜あらんことを恐れ怕る。只だ是れ此心を講求し得て、此心若し人欲無くんば、純ら是れ天理にして、是れ箇の親に孝なるに誠なるの心なり、冬時には自然に父母の寒を思量し、便ち自ら箇の溫的道理を求め去るを要し、夏時には自然に父母の熱を思量して、便ち自ら箇の凊的道理を求め去るを要す。這は都て是れ那の誠孝なるの心の發出し來る條件なり。却つて是れ這の誠孝の心あるを須て、然して後這の條件の發出し來るあり。之を樹木に譬ふるに、這の誠孝なる心は便ち是れ根、許多の條件は便ち是れ枝葉なり。須く先づ根ありて、然して後に枝葉あるべし。是れ先づ枝葉を尋了(一二)して、然して後根を種ゑ去るものならず。禮記に言ふ、孝子の深愛ある者は必ず和氣(一三)あり、和氣ある者

外之事。心外之理乎。愛曰。如事父之孝。事君之忠。交友之信。治民之仁。其閒有許多理在。恐亦不可不察。先生嘆曰。此說之蔽久矣。豈一語所能悟。今姑就所問者言之。且如事父。不成去父上求箇孝的理。事君不成去君上求箇忠的理。交友治民。不成去友上民

く、『此說の蔽や久し。豈に一語の能く悟らしむる所ならんや。今姑く問ふ所の者に就いて(三)之を言はん。且(四)く、父に事ふるが如きは、父(五)上に去いて箇の孝の理を求むるを成さず、君に事ふるは君上に去いて箇の忠の理を求むるを成さず、友に交り民を治むるは、友上、民上に去いて箇の信と仁との理を求むるを成さず、都て只だ此心に在り。心は卽ち理なり。此心に私欲の蔽なければ、卽ち是れ天理にして、外面より一分だに添ふるを須ひず。此の天理に純なるの心を以て、之を發して父に事ふれば便ち是れ孝、之を發して君に事ふれば便ち是れ忠、之を發して友に交り民を治むれば便ち是れ信と仁となり。只だ此心人欲を去り、天理を存する上にありて、功を用ふれば便ち是なり。』愛曰く、『先生の此の如き說を聞き、愛已に省悟(六)する處あるを覺ゆ。但だ舊說(七)胸中に纏りて、尙ほ未だ脫然たらざる者あり。父に事ふる一事の如き、其閒、溫凊定省(八)の類、許多の節目あり。知らず、亦須く講求(九)すべしや否や。』先生曰く、『如何か講求せざらん。只だ是れ箇の

愛問。知ㇾ止而后有ㇾ定。朱子以爲事事物物皆有二定理一。似下與二先生之說一相戾上。先生曰。於二事事物物上一求二至善一。却是義外也。至善是心之本體。只是明二明德一到二至精至一處一便是。然亦未三嘗離二却事物一。本註所ㇾ謂盡二夫天理之極一。而無二一毫人欲之私一者。得ㇾ之。

愛問ふ。『(一)止まるを知りて后に定るあり。朱子以爲事事物物皆定理ありと。先生の說と相戾るに似たり。』先生曰く、『事事物物の上に於て至善を求むるは、却つて是れ義外(二)なり。至善は是れ心の本體なり。只だ是れ明德を明かにして、至精至一の處に到れば便ち是なり。然も亦未だ嘗て事物を離却(三)せず。(四)本註に所謂夫の天理の極を盡して、一毫人欲の私無き者、之を得。』

㈠大學の文を引く、朱子の或問に「能知ㇾ所ㇾ止、則方寸之間、事々物々皆有二定理一」又章句に曰ふ「志ㇾ有二定向一」
㈡義理を内に求めずして、外に求むるは可ならずといふ意 ㈢離れ去らず ㈣朱子のなせる大學の註

愛問。至善只求二諸心一。恐於二天下事理一。有ㇾ不ㇾ能ㇾ盡。先生曰。心即理也。天下又有二心

愛問ふ。『至善は只だ諸を心に求むれば、恐らく天下の事理に於て盡す能はざるものあらん。』先生曰く、『心は卽ち理なり、天下又(一)心外の事、心外の理あらんや。』愛曰く、『父に事ふるの孝、君に事ふるの忠、友に交るの信、民を治むるの仁の如き、其間(二)許多の理の在るあり、恐らくは亦察せざるべからざらん。』先生嘆じて曰

而親ニ其親一。小人樂ニ其樂一。而利ニ其利一。如レ保ニ赤子一。民之所レ好好レ之。民之所レ惡惡レ之。此之謂ニ民之父母一之類。皆是親字意。親民猶ニ孟子親レ親。仁レ民之謂一。親レ之即仁レ之也。百姓不レ親。舜使ニ契爲ニ司徒一。敬敷ニ五教一。所ニ以親一レ之也。堯典克明ニ峻德一。便是明ニ明德一。以親ニ九族一。至ニ平章協和一。便是親レ民。便是明ニ明德於天下一。又如ニ孔子言ニ修レ己以安ニ百姓一。修レ己便是明ニ明德一。安ニ百姓一便是親レ民。說レ親レ民。便是兼ニ教養意一。說レ新レ民便覺ニ偏了一。

便ち是れ民を親むなり、便ち是れ明德を天下に明かにするなり。又孔子の(一〇)己を修め以て百姓を安んずと言ふが如き、己を修むとは便ち是れ明德を明かにするなり、百姓を安ずとは便ち是れ民を親むなり。民を親むと說けば便ち是れ教養の意を兼ね、民を新にすと說けば便ち偏了するを覺ゆ。』

(一) 大學の文に、「大學之道、在レ明ニ明德一、在レ親レ民、在レ止ニ於至善一」とある「親民」を朱子「新民」に作るべしと謂へるに疑問を發せる也 (二) 「新」の字の意義を論じ、朱子の說を駁する也 (三) 舊本の「親」の字の妥當を說く (四) 事理を發見して、暗きより明かに還せしと (五) 君子は其賢より以下民の父母までは、皆大學の文を引く (六) 孟子盡心上に「君子之於レ物也、愛レ之而弗レ仁、於レ民也、仁レ之而弗レ親、親レ親而仁レ民、仁レ民而愛レ物、」とある文を引く (七) 書經の舜典に、「帝曰レ契、百姓不レ親、五品不レ遜、汝作ニ司徒一、敬敷ニ五教一、在レ寬、」とあるを引く、契は人名、司徒は民政と文教とを掌る官名、五教は父子有レ親・君臣有レ義・夫婦有レ別・長幼有レ序・朋友有レ信の五つの教 (八) 同上堯典に「克明ニ俊德一、以親ニ九族一、九族既睦、平ニ章百姓一百姓照明、協ニ和萬邦一黎民於變時雍、」とあるを引く (九) 以下堯典の文を釋く (一〇) 論語憲問篇「子路問ニ君子一」の文を引く

愛問。在レ親レ民。朱子謂レ當レ作ニ新民。後章作ニ新民一之文。似ニ亦有レ據。先生以爲宜下從ニ舊本一作中親民上。亦有レ所レ據否。先生曰。作ニ新民一之新。是自新之民。與ニ在レ新レ民之新一不レ同。此豈足レ爲レ據。作字却與ニ親字一相對。然非ニ新字義。下面治國平天下處。皆於ニ新字一。無ニ發明一。如レ云下君子賢ニ其賢一。

愛問ふ。『「在」親」民(民を親にするに在り)を朱子は當に新民に作るべしと謂へり。後章(一)の新民を作すの文、亦據る所あるに似たり。先生以爲宜しく舊本に從ひて親民に作るべしと。亦據る所ありや否や。』先生曰く、『新民を作すの新は、是れ自ら新にするの民にて、民を新にするに在りの新と同じからず。此れ豈に據と爲すに足らんや。作の字は却つて(三)親の字と相對す。然れ新の字の義に非ず。下面の治國平天下の處、皆新の字に於て發明(四)すること無し。(五)君子は其賢を賢として其親を親み、小人は其樂を樂みて其利を利とす、赤子を保つが如く、民の好む所は之を好み、民の惡む所は之を惡む、此れ之を民の父母と謂ふと云ふが如きの類は、皆是れ親の字の意なり。親民は猶ほ孟子の親を親み民を仁すの謂のごとし。之を親むは即ち之を仁するなり。百姓(六)親まず、(七)舜、契をして司徒たらしめ、敬みて五教を敷くとは、之を親む所以なり。(八)堯典に、克く峻德を明かにすとは、便ち是れ明德を明かにするなり、(九)以て九族を親むより、平章・協和に至るまでは、

易而仰レ之愈高。見レ之若レ粗而探レ之愈精。就レ之若レ近而造レ之愈益無レ窮。十餘年來。竟未レ能レ窺ニ其藩籬一。世之君子。或與ニ先生一僅交ニ一面一。或猶未レ聞ニ其謦欬一。或先懷ニ忽易憤激之心一。而遽欲下於ニ立談之間傳聞之說一。臆斷懸度上。如ニ之何一其可レ得也。從遊之士。聞ニ先生之教一。往往得レ一而遺レ二。見ニ其牝牡驪黃一。而棄ニ其所レ謂千里者一。故愛備ニ錄平日之所レ聞。私以示ニ夫同志一。相與考而正レ之。庶無レ負ニ先生之教一云。門人徐愛書。

明の論旨は天地の大道にかなへること恰も水の冷かに火の熱きが如く也。斷々は誠一の貌、百世の下聖人の批判を俟つて惑はざる所謂千古不磨の定說也 (六) 明睿は智の明かなる義、天授は天のさづけものゝ義にて、うまれつきをいふ意、和樂は心やはらぎたのしむ意、坦易はたひらかにやすき意、邊幅とは身のまはりの義、事とせずは修飾せずとの意 (七) 少時、少年の時のこと豪邁はたけくすぐれたる、不羈は物にはだされぬ義、詞章は文章詩賦のこと、泛濫は水のあふるゝ貌にて耽溺の意、二氏の學とは老莊と佛氏とを云ふ (八) 人々俄に陽明の說を聞きて、日頃の彼が好む所あるにより、故らに異論を立て奇矯を好むものとあなどりさげすみてかへりみきはむることをなさゞりしど也 (九) 陽明三十五歲、封事を上りしことより、龍場驛丞に謫せられて、貴州に在ること三年、困厄の地に居りて、靜一の思想を養ひたること (一〇) 惟精惟一の工夫は、早くも凡人の境を越えて、聖人の域に進み入り。粹然は雜へざる義にて、もつぱら、大中至正は不偏不倚、邪ならざる道の最大極地に到達歸著したる者なりとは、人々知らざりしと也 (一一) 親炙の義、したしく教を受けて (一二) まがき、外圍ひの意にて學問の入口といふ意 (一三) しはぶき、せきばらひの義、面會する敬語 (一四) 忽易はあなどりかろんずる義、憤激はいかりたける義 (一五) 臆斷は自分だけの臆測にて斷定すること、懸度は接近せずして忖度すること (一六) 門下に從ひ遊ぶ士 (一七) 牝はめす、牡はをす、驪は黑き色、黃は黃色、皆馬にたとへて言ふ、千里は駿足千里を走るを云ふ、皮相を見て實質の良きことを採らぬといふ意

也。先生明睿天授。然和樂坦易。不レ事二邊幅一。人見下其少時豪邁不羈。又嘗泛二濫於詞章一。出中入二氏之學上。驟聞二是說一。皆目以爲下立レ異好上レ奇。漫不二省究一。不レ知下先生居レ夷三載，處レ困養レ靜。精一之功。固已超二入聖域一。粹然大中至正之歸上矣。愛朝夕炙二門下一。但見二先生之道一。卽レ之若レ

を仰げば愈〻高く、之を見れば粗なるが若くにして之を探れば愈〻精しく、之に就けば近きが若くにして之に造れば愈〻益〻窮り無し。十餘年來、竟に未だ其(一一)藩籬だに窺ふ能はず。世の君子、或は先生と僅に一面を交へ、或は猶ほ未だ其(一二)謦欬を聞かず、或は先づ(一四)忽易憤激の心を懐きて、遽に立談の間傳聞の說に於て(一五)臆(一三)斷懸度せんと欲す。之を如何ぞ其れ得べけんや。(一六)從遊の士、先生の教を聞き、往往一を得て二を遺れ、其(一七)牝牡驪黄を見て、其の所謂千里なる者を棄つ。故に愛平日の聞く所を備錄し、私に以て夫の同志に示し、相與に考へて之を正す。庶はくは先生の教に負くなからんと云ふ。門人徐愛書す。

㈠先生とは王陽明を指す　㈡大學格物の諸說とは、禮記第四十二卷に出でたる舊本大學を、程子兄弟（明道と伊川）改定し、朱熹之に從ひて校正したる所謂新本大學を指す、格物とは卽ち致知・格物・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下の八條目の一に當り、諸說とは此以外の諸條目の說を指す　㈢王陽明は程朱の新本大學に誤ありとなし、悉く舊本を以て正しとなす也、卽ち反つて先代の儒の舊本として排斥したるものを採るべしと云ふ　㈣愛とは此文を記したる王が門人徐愛自ら云ふ也、陽明の說を聞き、心中におどろき、或はうたがひ、精力を傾け思索を竭して、三たび五たび（互は五に通ず）も、入交へ取集めなどして、打案じたる末、先生に聞き糺したること　㈤陽

先生於二大學
格物諸說一。悉
以二舊本一爲レ正。
蓋先儒所レ謂
誤本者也。愛
始聞而駭。既
而疑。已而殫レ
精竭レ思。參互
錯綜。以質二於
先生一。然後知下
先生之說。若二
水之寒一。若二火
之熱一。斷斷乎。
百世以俟二聖
人一而不レ惑者上

傳習錄卷之上

(一)先生は(二)大學格物の諸說に於て、悉く(三)舊本を以て正しと爲す。蓋し先儒の所謂誤本なる者なり。(四)愛始めて聞きて駭き、既にして疑ひ、已にして精を殫し思を竭し、參互錯綜し、以て先生に質し、然して後先生の說の、(五)水の寒きが若く、火の熱きが若く、斷斷乎として、百世以て聖人を俟ちて惑はざる者なるを知る。先生、(六)明睿天授、然るに和樂坦易、邊幅を事とせず。人其(七)少時豪邁不羈にして、又嘗て詞章に泛濫し、二氏の學に出入せしを見て、(八)驟に是の說を聞き、皆目して以て異を立て奇を好むと爲し、漫に省究せず。先生(九)夷に居ること三載、困に處りて靜を養ひ、(一〇)精一の功、固より已に聖域に超入し、粹然たる大中至正の歸なるを知らず。愛、朝夕門下に(一一)炙して、但だ先生の道を見るに、之に卽けば易きが若くにして之

得之言意之表。而誠諸踐履之實。則斯錄也。固先生終日言之之心也。可少乎哉。錄成。因復識此於首篇。以告同志。門人徐愛序。

傳習錄序

門人有私錄陽明先生之言者。先生聞之謂之曰。聖賢教人如醫用藥。皆因病立方酌其虛實溫涼陰陽內外。而時時加減之。要在去病。初無定說。若拘執一方。鮮不殺人矣。今某與諸君不過各就偏蔽箴切砥礪。但能改化即吾言已爲贅疣。若遂守爲成訓。他日誤己誤人。某之罪過可復追贖乎。愛既備錄先生之教。同門之友有以是相規者。愛因謂之曰。如子之言。即又拘執一方。復失先生之意矣。孔子謂子貢嘗曰。予欲無言。他日則曰。吾與回言終日。又何言之不一邪。蓋子貢專求聖人於言語之閒。故孔子以無言警之。使之實體諸心以求自得。顏子於孔子之言。默識心通無不在己。故與之言終日。若決江河而之海也。故孔子於子貢之無言不爲少。於顏子之終日言不爲多。各當其可而已。今備錄先生之語。固非先生之所欲。使吾儕常在先生之門。亦何事於此。惟或有時而去側。同門之友又皆離羣索居。當是之時。儀刑既遠而規切無聞。如愛之駑劣。非得先生之言。時時對越警發之。其不摧墮廢者幾希矣。吾儕於先生之言。苟徒入耳出口不體諸身。則愛之錄此實先生之罪人矣。使能

辭を命じて差ふことなくば、見る所已に審かに、是を以て事物に應酬すれば、知ること明かに理精しくすなはち沛然たらん

質一之道。學必如二聖人一而後已上。聞者莫レ不二動レ心有一レ進。嘗謂二門人一曰。吾學既得二於心一。則修二其辭一。命レ辭無レ差。然後斷レ事。斷レ事無レ失。吾乃沛然。精レ義入レ神者。豫而已矣。先生氣質剛毅。德盛貌嚴。然與レ人居。久而日親。其治レ家接レ物。大要正レ己以感レ人。人未二之信一。反レ躬自治。不二以語一レ人。雖レ有レ未レ諭。安行而無レ悔。故識與レ不レ識。聞レ風而畏。非二其義一也。不下敢以二一毫一及上レ之。

橫渠先生曰。二程從二十四五時一。便脫然欲レ學二聖人一。

橫渠先生曰く、二程(一)は十四五の時より、便ち脫然として聖人を學ばんと欲す。

㊀ 程明道・程伊川の併稱。朱子曰く伊川が好學論は十八の時の作たり、明道は二十にして及第し、出去つて官となつて、一向に長進す、定性の書は是れ二十三の時の作、是の時遊山の諸詩皆好し

近思錄終

語二道學之要一。先生渙然自信曰、吾道自足。何事二旁求一。於レ是盡棄二異學一。淳如也。晩自二崇文一移レ疾。西歸二横渠一。終日危二坐一室一。左右簡編。俯而讀、仰而思。有レ得則識レ之。或中夜起坐。取レ燭以書。其志レ道精思、未ニ始須臾息一。亦未三嘗須臾忘二也。學者有レ問多告以下知禮成レ性變二化氣

つて曰く、吾が學既に心に得るときは、則ち其辭を修む。辭を命じ差ふことなくして、然る後に事を斷す。事を斷じ失することなくして、吾れ乃ち沛然たり。義を精しくして神に入ることは、豫するのみ。先生、氣質剛毅にして、德盛に貌嚴なり。然れども人と居るに、久しうして日に親む。其の家を治め物に接するや、大要己を正しくして以て人を感ぜしむ。人未だ之を信ぜざれば、躬に反みて自ら治め以て語らず。人未だ諭らざることありと雖も、安じ行ひて悔ゆることなし。故に識ると識らざると、風を聞いて畏る。其義にあらざれば、敢て一毫を以て之に及ぼさず。

(一) 宋仁宗の年號　(二) 遠大なる才器　(三) 名賓の敎へ　(四) 宋仁宗の年號　(五) 明道伊川の兄弟　(六) 專一なる說、本註に云く、「尹彥明云く、橫渠昔京師に在りしとき、虎皮に坐して周易を說く、聽從甚だ多し、一夕二程先生至つて易を論ず、次日橫渠虎皮を撤去して曰く、吾れ平日諸公の爲に說く者は皆亂道なり、二程あつて近く到り深く易道を明かにす、吾が及ばざる所なり、汝輩之を師とすべし」　(七) 晩年、崇文館(官學の府)より病を文書にて告げ、(移は官府の文書)陝西の橫渠(地名)に歸る　(八) 正坐　(九) 書籍の類　(一〇) しばらくの間　(一一) 爲學類に出づ　(一二) 其の初めて心に得る者、義理了然疑ひなしと雖も、之を口に述べ之を筆に上すに及んでは、或は差あり、故に

之時。先生年十八。慨然以ニ功名一自許。上書謁ニ范文正公一。公知ニ其遠器一。欲三成ニ就之一。乃責レ之曰。儒者自有ニ名教一。何事ニ於兵一。因勸讀ニ中庸一。先生讀ニ其書一。雖レ愛レ之。猶以爲未レ足。於レ是又訪ニ諸釋老之書一。累レ年盡究ニ其說一。知レ無レ所レ得。反而求ニ之六經一。嘉祐初。見ニ程伯淳正叔于京師一。共

て、之を成就せしめんと欲す。乃ち之を責めて曰く、儒者自ら(三)名教あり、何ぞ兵を事とせんと。因つて勸めて中庸を讀ましむ。先生其書を讀み、之を愛すと雖も、猶ほ以爲らく未だ足らずと。是に於て又諸を釋老の書に訪ひ、年を累ねて盡く其說を究め、得る所なきを知りて、反つて之を六經に求む。(四)嘉祐の初、(五)程伯淳・正叔を京師に見て、共に道學の要を語る。先生渙然として自ら信じて曰く、吾が道自ら足りぬ。何ぞ旁に求むるを事とせんと。是に於て盡く異學を棄てゝ(六)淳如たり。(七)晩に崇文より疾を移して、西のかた橫渠に歸る。終日一室に(八)危坐し、簡編を左右にして、俛して讀み、仰いで思ふ。得ることあれば則ち之を識す。或は(九)中夜に起坐し、燭を取りて以て書す。其の道に志し思を精くすること、未だ始より(一〇)須臾も息まず。亦未だ嘗て須臾も忘れず。學者問ふことあれば、多く告ぐるに、(一一)知禮、性を成し、氣質を變化するの道、學は必ず聖人の如くにして後已むことを以てす。聞く者心を動かして進むことあらざるはなし。嘗て門人に謂

之感不一。知應以是心而不窮。雖天下之理至衆。知反之吾身。而自足。其致於一也。異端並立。而不能移。聖人復起而不與易。其發之成也。和氣充浹。見于辭容。然望之。崇深不可慢也。過事優爲。從容不迫。然誠心懇惻。弗之措也。其自任之重也。寧學聖人而未至。不欲以一善成名。寧以一物不被澤。爲己病。不欲以一時之利。爲己功。其自信之篤也。吾志可行。不苟潔其去就。吾義所安。雖小官有所不屑。

爲し、從容㊄として迫らず。然して誠心懇惻㊅にして、之を措かず。其自ら任ずるとの重きや、寧ろ聖人を學んで未だ至らずんば、一善を以て名を成さんとを欲せず、寧ろ一物も澤㊆を被らざるを以て、己が病となし、一時の利を以て、己が功となすを欲せず。其自ら信ずることの篤きや、吾が志行はるべくんば、苟も其去就を潔くせず。吾が義の安ずる所は、小官と雖も屑もせざる所あり。

㊀氷などのとくる貌　㊁約は要也、しめくゝり　㊂和氣みちめぐりて音聲形容の上にあらはる　㊃たかくふかし　㊄おちつけるさま、せまらざる貌　㊅ねんごろに親切　㊆恩澤

呂與叔撰橫渠先生行狀云。康定用兵

呂與叔橫渠先生の行狀を撰んで云く、康定㊀兵を用ふるの時、先生年十八慨然として功名を以て自ら許す。上書して范文正公に謁す。公其遠器㊁なることを知り

劉安禮云。明道先生。德性充完。粹和之氣盎二於面背一。樂易多レ恕。終日怡悅。立之從二先生一三十年。未三嘗見二其忿厲之容一。呂與叔撰二明道先生哀詞一云。先生負二特立之才一。知二大學之要一。博文强識。躬行力究。察レ倫明レ物。極二其所一レ止。渙然心釋。洞見二道體一。其造二於約一也。雖二事變

劉安禮云く、明道先生は、(一)德性充完、粹和の氣面背に盎る。樂易にして恕すること多く、終日怡悅す。(二)立の先生に從ふこと三十年、未だ嘗て其忿厲の(三)容を見ず。

(一)德性みち〳〵粹和の氣まへうしろに溢る、樂易は豈弟也、樂んで安息なる義、怡悅はよろこびたのしむ　(二)安禮の名　(三)いかりたるかはつき

呂與叔明道先生の哀詞を撰びて云く、先生特立の才を負ひ、大學の要を知り、博文强識にして、躬行力究す。倫を察し物を明かにし、其の止まる所を極む。(一)渙然として心釋け、洞かに道體を見る。其の約に造るや、(二)事變の感一ならずと雖も、應ずるに是の心を以てして窮まらざることを知る。天下の理至つて衆しと雖も、之を吾が身に反みて、自ら足ることを知る。其の一を致すや、異端竝び立つも、移すこと能はず。聖人復起つも與に易へじ。其の養の成れるや、(三)和氣充浹して、聲容に見る。然して之を望まば、(四)崇深にして慢るべからず。事に遇うて優に

曰。不レ知。昔日曾有二甚人一。於二此處一。講二此事一。

謝顯道云。明道先生坐如二泥塑人一。接レ人則渾是一團和氣。

侯師聖云。朱公掞見二明道于汝一。歸謂レ人曰。光庭在二春風中一。坐了一箇月。游楊初見二伊川一。伊川瞑目而坐。二子侍立。既覺顧謂曰。賢輩尙在レ此乎。曰既晩。且休矣。及レ出レ門。門外之雪深一尺。

㈠ 明道の字　㈡ 二人の議論と興國寺の地勢とより偶感のことを語りたるもの也

謝顯道云く、明道先生の坐すること泥塑人(一)の如し。人に接するときは則ち渾て是れ一團の和氣。

㈠ 塑像、どろにて造れる人形

侯師聖(一)云く、朱公掞明道を汝(二)に見る。歸りて人に謂つて曰く、光庭春風の中(三)にありて、坐了すること一箇月。游・楊(四)初めて伊川を見る。伊川瞑目(五)して坐す。二子侍立す。既にして覺めて顧みて謂つて曰く、賢輩(六)尙ほ此にあるか。日既に晩れたり、且く休せよと。門を出づるに及んで、門外の雪深きこと一尺。

㈠ 侯仲良字は師聖、朱光庭字は公掞、共に程子の門人　㈡ 汝州　㈢ 春風和氣の中、明道の和氣をいふ　㈣ 游定夫と楊中立、共に門人　㈤ 目をふさぐ　㈥ 賢君等といふに同じ、明道の人に接する和粹也、伊川は師道嚴毅、皆徳の形る丶所、但し其氣質の成就する同じからざることあるのみ、明道は顏子に似、伊川は孟子に似たり

際。有レ所レ賴焉。先生所レ爲。綱條法度。人可ニ效而爲一也。至ニ其道レ之而從。動レ之而和。不レ求レ物而物應。未レ施レ信而民信一。則人不レ可レ及也。

明道先生曰。周茂叔窻前艸不ニ除去一。問レ之云。與ニ自家意思ニ一般。

明道先生曰く、周茂叔、窻前の艸を除き去らず。之を問へば云く、(一)自家の意思と一般なりと。

(一) 自分の意思と同じと、蓋し天地の生意流行して發育す、仁者は生々の意胸中に充滿す、故に窓前の草を見て、其心に會するものある也、本註に云く「子厚驢の鳴くを觀て亦謂ふこと此の如し」と

張子厚聞レ生ニ皇子一喜甚。見ニ餓莩者一。食便不レ美。

張子厚は皇子を生みしと聞いては喜ぶこと甚だしく、(一)餓莩の者を見ては、食便ち美からず。

(一) うゑたる者

伯淳嘗與ニ子厚一在ニ興國寺一。講論終日而

(二)伯淳嘗て子厚と興國寺に在り、講論すること終日にして曰く、(三)知らず、舊日嘗て甚人かありて、此處に於て此事を講ぜし。

則必入二於此一。自二道之不一レ明也。邪誕妖異之說競起。塗二生民之耳目一。溺二天下於汙濁一。雖二高才明智一。膠二於見聞一。醉生夢死。不二自覺一也。是皆正路之蓁蕪。聖門之蔽塞。闢レ之而後。可二以入一レ道。先生進將レ覺二斯人一。退將レ明二之書一。不幸早世。皆未レ及也。其辨二析精微一。稍見二於世一者。學者之所レ傳耳。先生之門。學者多矣。先生之言。平易易レ知。賢愚皆獲二其益一。如下羣二飲於河一。各充中其量上。先生教レ人。自二致知一至二於知止一。誠意至二於平天下一。洒掃應對至二於窮理盡性一。循循有レ序。病三世之學者捨レ近而趨レ遠。處レ下而闚レ高。所二以輕自大而卒無一レ得也。先生接レ物。辨而不レ閒。感而能通。教レ人而人易レ從。怒レ人而人不レ怨。賢愚善惡。咸得二其心一。狡僞者獻二其誠一。暴慢者致二其恭一。聞レ風者誠服。覿レ德者心醉。雖下小人以二趨向之異一。顧二於利害一。時見中排斥上。退而省二其私一。未レ有下不中以二先生一爲上君子上也。先生爲レ政。治レ惡以レ寬。處レ煩而裕。當二法令繁密之際一。未三嘗從レ衆。爲二應レ文逃一レ責之事一。人皆病二於拘礙一。而先生處レ之綽然。衆憂以爲二甚難一。而先生爲レ之沛然。雖レ當二倉卒一。不レ動二聲色一。方下監司競爲二嚴急一之時上。其待二先生一。率皆寬厚。設施之

がらかにて、とほり見えてくもりなし　（七）胸中にたくはへたるもの、學殖　（八）浩乎はひろ〳〵としたる貌、浩浩は謂うならば、ひろ〳〵として大海のはてしなきが如しと也　（九）天下の廣居に居て狹陋の私に安んぜず、天下の大道を行つて、邪辟の志によらず　（一〇）言に實あり、故に物といふ、行に度あり、故に常といふ　（一一）試驗のための學問　（一二）諸子百家の學にいりびたり、老莊の學佛學に出入すること幾ど十年　（一三）異端の是に似たるものは、尤も初學者を惑はす也、其の非を辨ずるときは、百代未だ明らめざりし處も釋然としてひらくべし　（一四）言行、周遍くきとゞく　（一五）邪はよこしま、誕はいつはり、妖異の說はあやしき說　（一六）正道を荒す雜草の意　（一七）聖人の教をおほひてふさぐものゝ意　（一八）ひらき辨ず　（一九）ずるくして世をいつはる者　（二〇）方針、主張　（二一）かゝはりさはる　（二二）あせらず、ゆとりあるさま　（二三）とゞこほりなきさま　（二四）火急の出來事　（二五）監察官の競ひて嚴しく急に校察を行ふ時にあたつても、先生に對しては、大概皆ゆるやかなり

興二起斯文一爲二己任一。其言曰。道之不レ明。異端害レ之也。昔之害近而易レ知。今之害深而難レ辨。昔之惑レ人也。乘二其迷暗一。今之入レ人也。因二其高明一。自謂二之窮レ神知レ化。而不レ足三以開レ物成レ務。言爲無レ不二周遍一。實則外二於倫理一。窮レ深極レ微。而不レ可三以入二堯舜之道一。天下之學。非二淺陋固滯一。

誠を獻じ、暴慢なる者も其恭を致す。風を聞く者は誠服し、德を覩る者は心醉す。小人には趨向の異なるを以て、利害に顧み、時に排斥せらると雖も、退いて其私を省みて、未だ先生を以て君子となさずんばあらず。先生の政をなすや、惡を治むるに寛を以てし、煩に處て裕なり。法令繁密の際に當り、未だ嘗て衆に從つて、文に應じ責を逃るゝの事をなさず。人の皆拘礙を病ふることにも、先生は之に處して綽然たり。衆の憂へて以て甚だ難しとすることにも、先生之を爲して沛然たり。倉卒に當ると雖も、聲色を動かさず。監司の競ひて嚴急をなすの時に方りて、其の先生を待つこと、率ね皆寛厚なり。設施の際、賴る所あり。先生の爲す所、綱條法度は、人效うて爲すべし。其の之を道きて從ひ、之を動かして和し、物を求めずして物應じ、未だ信を施さずして民信ずるに至りては、則ち人の及ぶべからざるところなり。

㊀ うまれつき　㊁ 修養　㊂ おだやかなること　㊃ さまり、しまりあり　㊄ 時に應じての雨　㊅ 胸中は

厭二科學之業一。慨然有二求レ道之志一。未レ知二其要一。泛二濫於諸家一。出二入於老釋一者幾十年。返求二諸六經一。而後得レ之。明二於庶物一。察二於人倫一。知下盡レ性至レ命。必本二於孝悌一。窮レ神知レ化。由中通二於禮樂一。辨二異端似レ是之非一。開二百代未明之惑一。秦漢而下未レ有レ臻二斯理一也。謂孟子沒而聖學不レ傳以三

滯にあらずんば、則ち必ず此に入る。道の明かならざりしより、邪誕妖異の説(二五)競ひ起りて、生民の耳目を塗ぎ、天下を汙濁に溺れしむ。高才明智と雖も、見聞に膠み、醉生夢死して、自ら覺らず。是れ皆正路の蓁蕪(二六)、聖門の蔽塞(二七)、之を闢きて後に以て道に入るべし。先生、進んでは將に斯る人を覺さんとし、退いては將に之を書もて明かにせんとす。不幸にして早世し、皆未だ及ばず。其の精微を辨析(二八)して、稍〻世に見るゝは、學者の傳ふる所のみ。先生の門、學者多し。先生の言は、平易にして知り易く、賢愚皆其益を獲ること、河に羣り飲んで、各〻其量に充つるが如し。先生の人を敎ふるや、致知より知止に至り、誠意より平天下に至り、洒掃應對より窮理盡性に至り、循循として序あり。世の學者の近きを捨てゝ遠きに趨き、下きに處て高きを闚ひ、輕〻しく自ら大なりとして、卒に得ることなき所以を病ふ。先生の物に接する、辨じて間てず、感じて能く通ず。人を敎へて人從ひ易く、人を怒つて人怨まず。賢愚善惡、咸其心を得たり。狡僞(二九)なる者も其

聽二其言一。其入レ人也。如二時雨之潤一。胸懷洞然。徹視無レ閒。測二其蘊一。則浩乎若二滄溟之無レ際。極二其德一。美言蓋不レ足二以形容一。先生行レ己。內主二於敬一。而行レ之以レ恕。見レ善若レ出二諸己一。不レ欲弗レ施二於人一。居二廣居一而行二大道一。言有レ物。而行有レ常。先生爲レ學。自二十五六時一。聞二汝南周茂叔論一レ道。遂

行常あり。先生の學をなすや、十五六の時より、汝南の周茂叔が道を論ずるを聞いて、遂に科擧(一一)の業を厭ひ、慨然として道を求むるの志あれども、未だ其要を知らず。諸家(一二)に泛濫し、老釋に出入すること、幾ど十年。返つて諸を六經に求めて、後之を得たり。庶物に明かに人倫に察かなり。性を盡し命に至るには、必ず孝悌を本とし、神を窮め化を知るには、禮樂に通ずるに由るべきを知る。異端是(一三)に似たるの非を辨じ、百代未明の惑を開く。秦漢より下、未だ斯の理に臻るものあらず。謂らく、孟子沒して聖學傳はらず、斯の文を興起するを以て己が任となす。其言に曰く、道の明かならざるは、異端之を害すればなり。昔の害は近くして知り易く、今の害は深くして辨じ難し。昔の人を惑はすは、其迷暗に乘じ、今の人に入るは、其高明に因る。自ら之を神を窮め化を知ると謂へども、而も以て物を開き務を成すに足らず。言爲(一四)周遍ならずといふことなきも、實は則ち倫理に外る。深を窮め微を極めて、以て堯舜の道に入るべからず。天下の學、淺陋固

周茂叔胸中灑落。如二光風霽月一。其爲レ政。精密嚴恕。務盡二道理一。

伊川先生撰二明道先生行狀一曰。先生資稟既異。而充養有レ道。純粹如二精金一。溫潤如二良玉一。寛而有レ制。和而不レ流。忠誠貫二於金石一。孝悌通二於神明一。視二其色一。其接レ物也。如二春陽之溫一。

周茂叔の胸中灑落なること、光風霽月の如し。其政を爲すや、精密嚴恕にして、務めて道理を盡す。

(一) はれ〳〵として物にわづらはさるゝことなき意 (二) 光風は雲開晴れたる景色、霽月はくもりなき月の景色。或はいふ雨上りの晴々しき光景と (三) 嚴はきびしく、恕はゆるやか

伊川先生明道先生の行狀を撰んで曰く、先生資稟既に異にして、充養道あり。純粹なること精金の如く、溫潤なること良玉の如し。寛にして制あり。和にして流れず。忠誠金石を貫き、孝悌神明に通ず。其色を視るに、其物に接ること、春陽の溫かなるが如く、其言を聽くに、其人に入ること、時雨の潤すが如し。胸懷洞然として、徹視間なし。其蘊を測るときは、則ち浩乎として滄溟の際なきが若し。其徳を極むるときは、美言も蓋し以て形容するに足らず。先生の己を行ふや、內敬を主として、之を行ふに恕を以てす。善を見ては己より出づるが若く、欲せざることは人に施さず。廣居に居て、大道を行ふ。言に物ありて、

尋求者。才見二此人一。至レ如下斷曰二孟子醇乎醇一。又曰中荀與レ揚擇焉而不レ精。語焉而不上レ詳。若不二是他見得一。豈千餘年後。便能斷得。如レ此分明。

斷じ得て、此の如く分明ならんや。

㈠韓退之の書ける文篇の名、八大家文第一卷に出づ ㈡以下原道中の文句を引けり、醇乎とは道にもつぱらなるかたち、擇びて、語りては道に就いていふ ㈢上述の如く分明に斷定し得たるは、韓退之にして自ら道を見得ずんば、千餘年の後なんぞかく明かにするを得んやとなり

學本是脩レ德。有レ德然後有レ言。退之却倒學了。因レ學レ文。日求レ所レ未レ至。遂有レ所レ得。如レ曰二軻之死。不レ得二其傳一。似レ此言語。非三是蹈二襲前人一。又非二鑿空撰得出一。必有レ所レ見。若無レ所レ見。不レ知レ言二所レ傳者何事一。

學は本是れ德を脩む。德ありて然して後言あり。退之は却つて倒に學び了れり。文を學ぶに因つて、日に未だ至らざる所を求めて遂に得る所あり。㈠軻の死するや其傳を得ずといふが如き、此の似き言語は、是れ前人を蹈襲するにあらず、㈡又鑿空して撰び得出せるにもあらず。㈢必ず見る所あらん。若し見る所なくんば、傳する所の者何事と言ふことを知らじ。

㈠孟子の名 ㈡前人の言をふみおそひまねていふ ㈢せんさく

成耳。此不レ可レ爲也。若二劉表子琮一。將下爲二曹公一所上レ幷。取而與二劉氏一可也。

諸葛武侯。有二儒者氣象一。孔明庶二幾禮樂一。

文中子本是一隱君子。世人往往得二其議論一。附會成レ書。其間極有二格言一。荀揚道不レ到處。

韓愈亦近世豪傑之士。如二原道中言語一。雖レ有レ病。然自二孟子一而後。能將二許大見識一

諸葛武侯は、儒者の氣象あり。孔明は(一)禮樂に庶幾し。

(一) 文中子に云ふ、孔明をして死なからしめば、禮樂それ興るあらんか云々

文中子(二)は本是れ一隱君子なり。世人往往其議論を得て、附會して書を成す。其間極めて格言あり。荀(三)揚の道ひ到らざる處なり。

(二) 王通、字仲淹、隋末の人　(三) 荀子・揚子雲

韓愈も亦近世豪傑の士なり。原道(一)中の言語の如きは、病ありと雖も、然も孟子より而後、能く許大の見識を將つて尋ね求めし者、才に此人を見る。(三)斷じて孟子は醇乎として醇なりといひ、又荀と揚とは擇びて精からず、語りて詳かならずといふが如きに至りては、若し是れ(二)他見得ずんば、豈に千餘年の後、便ち能く

聖賢之意。然見レ道不二甚分明一。下レ此即至二揚雄一。規模又窄狹矣。

（一）かまへ狹く小さし

林希謂二揚雄一爲二祿隱一。揚雄後人只爲レ見二他著一レ書。便須三要做二他是一。怎生做二得是一。

林希は揚雄を謂つて祿隱（一）となす。揚雄をば、後人只だ他の書を著すを見るが爲に、便ち他を是と做さんことを須要（二）す。怎生（三）ぞ是と做し得ん。

（一）才德を晦して人の下位に立ち祿に依つて隱るゝもの　（二）もとむ　（三）雄漢に仕へ後去つて王莽に仕ふ、何ぞ之を是となし得ん

孔明有二王佐之心一。道則未レ盡。王者如三天地之無二私心一焉。行二一不義一而得二天下一不レ爲。孔明必求レ有レ成。而取二劉璋一。聖人寧無レ

（一）孔明王佐の心あり、道は則ち未だ盡さず。王者は天地の私心なきが如し。一の不義を行ひて天下を得るとも爲さず。（二）孔明は必ず成すことあるを求めて、劉璋を取らしむ。聖人は寧ろ成すことなからんのみ。此れ爲すべからず。（三）劉表が子琮の若きは、將に曹公の爲に幷せられんとす。取つて劉氏を興さんとするは可なり。

（一）諸葛亮字孔明　（二）孔明必ず成功すべき策を求めて、劉璋の成都を取らしむ、是れ成に志して不義を行ひ省るに暇あらざる也　（三）劉表が子琮、曹操に降り、荊州の地魏に併呑せられんとす、孔明玄德に謂つて荊州を取らしむ

矣。道何嘗息。只是人不レ由レ之。道非レ亡也。幽厲不レ由也。

荀卿才高其過多。揚雄才短其過少。

荀卿は才高くして、其過多し。揚雄は才短くして、其過少し。

(一)荀子名は況、字は卿、楚人也　(二)揚雄字子雲、漢人也、易に擬して大玄を著し、論語に擬して法言を著す

荀子極偏駁。只一句性惡。大本已失。揚子雖レ少レ過。然已自不レ識レ性。更說ニ甚道一。

荀子は極めて偏駁なり。只だ一句の性惡、大本已に失す。揚子は過少しと雖も、然れども已に自ら性を識らず。更に甚の道をか說かん。

(一)かたよりて雜駁なり　(二)荀子は人の性は惡なりと說く　(三)揚雄は人の性は善惡混ず、其善を修むれば善人となり、其惡を修むれば惡人となると說く、是れ性の本然を識らざる也と

董仲舒曰。正ニ其義一不レ謀ニ其利一。明ニ其道一不レ計ニ其功一。此董子所三以度ニ越諸子一。

董仲舒曰く、其義を正しうして其利を謀らず。其道を明かにして其功を計らずと。此れ董子の諸子に度越せる所以なり。

(一)前漢の儒者　(二)すぎこえる

漢儒如ニ毛萇董仲舒一。最得ニ

漢儒毛萇・董仲舒の如きは、最も聖賢の意を得たり。然れども道を見ること甚だ分明ならず。此を下りて即ち揚雄に至りては規模又窄狹なり。

儘是明快人。顏子儘豈弟。孟子儘雄辯。

曾子傳ニ聖人學一。其德後來不レ可レ測。安知下其不上レ至ニ聖人一。如レ言ニ吾得レ正而斃一。且休レ理ニ會文字一。只看ニ他氣象一。極好。被ニ他所見處大一。後人雖レ有ニ好言語一。只被ニ氣象卑一。終不レ類レ道。

(一)曾子聖人の學を傳ふ。其德後來測るべからず、安ぞ其の聖人に至らざるを知らん。(二)吾れ正を得て斃れんと言ふが如き、且く(三)文字を理會することを休めて、只だ他の氣象を看よ。極めて好く、他の所見の處に大にせらる。後人好言語ありと雖も、只だ氣象に卑くせられて、終に道に類せず。

(一) 曾子の德を擧ぐ (二) 曾子簀を易へて死に臨める時、末期の言に云く、「吾れ何をか求めんや、吾れ正を得て斃るれば、斯れ可なり」と (三) 文字に拘泥せずして、彼の氣象を看るならば、其極めて好く、彼が見識高き爲めに其氣象の擴大せらるゝを看んと也

傳レ經爲レ難。如ニ聖人之後一。纔百年。傳レ之已差。聖人之學。若非ニ子思孟子一。則幾ニ乎息一。

(一)經を傳ふること難しとなす。聖人の後の如き、纔に百年にして(二)、之を傳ふること已に差ふ。聖人の學、若し子思・孟子にあらざれば、則ち息むに幾からん(三)。道何ぞ嘗て息まん。只だ是れ人之に由らず。道亡ぶるにあらず。(四)幽厲由らざるなり。

(一) 經の義を傳ふるは至難なり (二) 百年の間に微言絶えて大義そむけり (三) 聖學或は絶つにいたらんかとなり (四) 周の幽王・厲王、共に暴君、蓋し一般惡人の義にていふ也されど道は嘗て絶えずと也

顏子春生也。孟子幷二秋殺一盡見。仲尼無レ所レ不レ包。顏子示二不レ違如レ愚之學一。於二後世一有二自然之和氣一。不レ言而化者也。孟子則露二其材一。蓋亦時然而已。仲尼天地也。顏子和風慶雲也。孟子泰山巖巖之氣象也。觀二其言一。皆可レ見レ之矣。仲尼無レ迹。顏子微有レ迹。孟子其迹著。孔子

(四)包ねざる所なし。顏子は(五)違はざること愚なるが如きの學を示す。後世に於て自然の和氣あり。言はずして化する者なり。孟子は則ち其材を露す。蓋し亦(六)時の然らしむるのみ。(七)仲尼は天地なり。顏子は和風慶雲なり。孟子は泰山巖巖の氣象なり。其言を觀て、皆之を見るべし。仲尼は(八)迹なし。顏子は微く跡あり。孟子は其跡著る。(九)孔子は儘て是れ明快の人、(一〇)顏子は儘て豈弟なり、(一一)孟子は儘て雄辯なり。

(一) 元氣は大氣なり、天地の間に周流してかぎりなく又ずきもなし、之を孔子の氣象にたとふ (二) 春生とは春陽萬物を生じ、四時のはじめ、衆善の長なるが如しとて、之を顏子の氣象にたとふ (三) 孟子亦剛烈にして明辨、整齊嚴肅、秋殺（秋の氣象）を併せて盡くあらはれたりといふ、以上孔子・顏子・孟子の氣象を形容したる語也 (四) 包萬善衆美を兼ぬ、即ち大氣の包まざるものなきに比す (五) 顏子孔夫子の言を聽きて少しも違ふことなく、又曾て問難することとなし、恰も愚人の如くなるをもて、違はざること愚なるが如きの學を示すといふ (六) 孟子戰國に生れて、世道衰頽し、異端頻に起る、上に聖明の君子なく下民習ふ所を失ふ、此場合道を衞るの職、辯明の明、然らざるを得ざる也 (七) 以下皆形容也、天地は高明博厚、和風慶雲は溫氣祥光、泰山巖々は峻厲犯ゆべからずと也 (八) 孔子は渾然たる天成其迹を留めず、顏子は微かに其跡を見ひ得るべし、孟子に至つては才氣發潮尤もよく其迹を彰かにす (九) 孔子は淸明にして靑天白日の如し (一〇) 顏子の豈弟とは樂んで安易なる貌 (一一) 孟子は邪說を闢き、詖行を拒き、淫辭を棄つる、皆雄辯の力也、以上俱れて聖賢の氣象を形容す

巻之十四

觀聖賢類　凡二十六條

明道先生曰。堯與舜更無二優劣一。及レ至二湯武一便別。孟子言二性レ之反一レ之。自レ古無三人如二此說一。只孟子分別出來。便知二得堯舜是生而知一レ之。湯武是學而能一レ之。文王之德。則似二堯舜一。禹之德。則似二湯武一。要レ之皆是聖人。

明道先生曰く、堯と舜とは更に優劣なし、湯武に至るに及んで便ち別なり。(一)孟子之を性のまゝにして(二)之に反る(三)と言ふ。古より人此の如く說くことなし。只だ孟子分別(四)し出し來りて、便ち堯舜は是れ生れながらにして之を知り、湯武は是れ學んで之を能くすることを知り得たり。文王の德は、則ち堯舜に似たり。禹の德は、則ち湯武に似たり。之を要するに皆是れ聖人なり。

(一) ことなり　(二) 性のまゝにすとは、生れながらにの意　(三) 反るとは其性に復するの意　(四) 筋道を立て、斷案を下すこと

仲尼元氣也。

(一)仲尼は元氣なり。(二)顏子は春生なり。(三)孟子は秋殺を并せて盡く見る。仲尼は

之言。遂冥然被驅。因謂聖人可不修而至。大道可不學而知。故未識聖人心。已謂不必求其迹。未見君子志。已謂不必事其文。此人倫所以不察。庶物所以不明。治所以忽。德所以亂。異言滿耳。上無禮以防其僞。下無學以稽其弊。自古詖淫邪遁之辭。翕然並興。一出於佛氏之門者。千五百年。自非獨立不懼。精一自信。有大過人之才。何以正立其閒。與之較是非。計得失哉。

といふ、即ち天理は人性と一物也、佛氏は人の方寸を幻心として舍てしめ、虚空を眞性として取らんことを勸む、果して天を知るものと云ふべきかと也 (五) 孔孟の天と云ふは佛氏の云ふ所の道なり (六) 遊魂とは人死して魂遊離す、變を爲すとは飛散する也、これを輪廻と云ふは、未だ思はざる也 (七) 天理 (八) 劇論は深至の議論。要歸は歸要の歸著點 (九) 所謂佛氏の道 (一〇) 本註に云く、「悟るときは則ち義あり、命あり、死生を均しく天人を一にす惟だ晝夜を知り、陰陽に通ず、之を體して二なし」 (一一) おぼれしづむ (一二) 奴僕 (一三) 英才は秀智なり、聞氣は特質なり、此等の士をして、生れては耳目の安らかに習はせてなりし事共に溺れ、長じては世間の儒者共があがめたつとぶ言を師として、くらき道に斷入り、修めずとも聖人の境に至るべく、學ばずとも大道を知るに難からじと思はしめて、聖人の心を曉らずに、必ずしも其迹を求め修めじといひ、君子の志を見もせて、必ずしも其文を事とすまじといふは人倫の器ならざる所以、庶物の明ならざる所以、治のゆるがせに法の亂るゝ所以也 (一四) 異端の言論、天下の耳に滿つれども、上には禮法を修めて、其僞妄を防ぐ君なく、下には學問に通じて、其宿弊を正すの士なしと也 (一五) 詖はかたおち、淫はみだら、邪はよこしま、遁はのがるゝ。正しからざる辭の集りて並びおこるは一に佛氏の門より出でゝ、千五百年也 (一六) 此異端に對しては、獨り立ちておそるゝことなく、精一にして自ら信ずること深く、人に越えたる才德あるにあらざるよりは、いかにしてか、正しく其間に立ちおはせて其是非を較考し其得失を辨ずることを得べきかと也

則知二聖人一。知二鬼神一。今浮圖劇論要歸。必謂死生流轉。非レ得レ道不レ免。謂二之悟道一可乎。自三其說熾傳二中國一。儒者未レ容レ窺二聖學門墻一。已爲引取。淪二胥其間一。指爲二大道一。乃其俗遂二之天下一。致二善惡知愚。男女臧獲。人人著レ信。使丁英才間氣。生則溺二耳目恬習之事一。長則師二世儒崇尙

の事に溺れ、長じて則ち世儒崇尙の言を師とし、遂に冥然として驅られ、因つて聖人脩めずして至るべく、大道學ばずして知るべしと謂はしむ。故に未だ聖人の心を識らずして、已に必ずしも其迹を求めじといひ、未だ君子の志を見ずして、已に必ずしも其文を事とせじといふ。此れ人倫の斁かならざる所以なり。庶物の明かならざる所以なり。治の忽にせらるゝ所以なり。德の亂るゝ所以なり。異言耳に滿つれども、上に禮の以て其僞を防ぐものなく、下に學の以て其弊を(一四)稽ふるものなし。古より(一五)詖淫邪遁の辭、翕然として竝び興る、一に佛氏の門に出づるもの、千五百年。(一六)獨立して懼れず、精一にして自ら信じ、大に人に過ぎたるの才あるにあらざるよりは、何を以てか正しく其間に立ちて、之と是非を較へ、得失を計らんや。

(一) 佛氏、佛陀と同じ、鬼に就いて說明して云ふ (二) 神識散ぜず、復た形に寓して生を受け來り、六道の間に輪廻すと、遂に厭苦免れんことを求むるに至る、果して鬼を知るものと云ふべきかと也 (三) 人生を浮生幻化と云ふ、果して人を知るものと云ふべきかと也、妄見はみだりにあらはるゝ意 (四) 天人一物とは天理人心に具はれるを性

浮圖明レ鬼。謂有識之死。受レ生循環。遂厭苦求レ免。可レ謂レ知レ鬼乎。以二人生一爲二妄見一。可レ謂レ知レ人乎。天人一物。輒生二取舍一。可レ謂レ知レ天乎。孔孟所謂天彼所謂道。或者指二遊魂爲一レ變。爲二輪廻一未二之思一也。大學當三先知二天德一。知二天德一。

(二) 老莊は有は無より生ずとなして、無を玄妙とし、有を土苴（物のかす）とす、佛氏は無を眞空とし、有を幻妄とす、有無を析きて二とするは、諸子の所見也

(一)浮圖、鬼を明かにして謂らく、(二)有識の死、生を受けて循環すと。遂に厭苦して免れんことを求む。鬼を知れりといふべけんや。人生を以て妄見となす。人を知れりといふべけんや。(四)天人は一物なり。輒ち(三)取舍を生ず。天を知るといふべけんや。(五)孔孟の所謂天は彼が所謂道なり。或は(六)遊魂變をなすを指して、輪廻となす。未だ之を思はざるなり。大學に、當に先づ(七)天德を知るべし、天德を知るときは、則ち聖人を知り、鬼神を知ると。今浮圖の(八)劇論要歸、必ず謂ふ、死生流轉、道を得るにあらざれば免れずと。之を悟道と謂つて、可ならんや。其說熾に中(九)國に傳はりしより、儒者未だ聖學の(一〇)門墻を窺ふべからずして、已に偽に引取られ、其間に(一一)淪胥して、指して大道となす。乃ち其俗之を天下に達し、善惡知愚、(一二)男女臧獲、人人信を著くることを致す。(一三)英才間氣をして、生れては則ち耳目恬習

其志於虛空之大。此所以語大語小。流遁失中。其過於大也。塵芥六合。其蔽於小也。夢幻人世。謂之窮理。可乎。不知窮理。而謂之盡性可乎。謂之無不知可乎。塵芥六合。謂天地為有窮也。夢幻人世。明不能究其所從也。

ありとすればなり。(五)人世を夢幻とするは、明かに其の従る所を究むること能はざればなり。

㊀ 釋氏は意を妄にして天性を窮むることをなさず、天用を範圍することを知らず、（天用とは天性の道化人事の間に發用するをいふ、範圍とは事物を裁成するの義）謂へらく六根（前に出づ）は悉く天地に本く、六根起滅すれば實相あることなし、天地日月等は是れ幻妄なりと ㊁ 天用を小なる一身に蔽はしめ、志を大なる虛空に求めしむるは、是れ大と小と皆流遁（わきみち（流れはづれる）して中正を失ふ也 ㊂ 大に過ぐることは、六合（天地と東西南北）を虛空の中の一微塵と見、小に蔽はるゝことは、人世を夢幻泡沫の空と觀ず、これをしも理を窮むと云ひ得べけんや ㊃ 虛空を窮みなきものとして、天地四方(六合)は其中にある塵芥也となす、即ち天地は尙は窮みありとなす也 ㊄ 人世を微なりとして一切有爲の法は夢幻泡影の如しと云ふ、これ明かに理を窮め性を盡す能はざるもの也

大易不言有無。言有無。諸子之陋也。

(一)大易に有無を言はず。(二)有無を言ふは諸子の陋なるなり。

㊀ 易に有無を言はずとは、道と器と元一體、分つて形而上・形而下と云ひ、有形・無形と云はず、天下の事物皆理の體せざるものなし、而もこれを有と云はず、其理は形なしと雖も、物を離れてあらざるが故に亦これを無と云はず

地用一賊。若非ㇾ竊㆓造化之機㆒。安能延ㇾ年。使㆓聖人肯爲㆒。周孔爲ㇾ之矣。

謝顯道歷㆘擧佛說與㆓吾儒㆒同處㆖。問㆓伊川先生㆒。先生曰。憾地同處雖ㇾ多。只是本領不ㇾ是。一齊差却。

横渠先生曰。釋氏妄㆓意天性㆒。而不ㇾ知ㇾ範㆓圍天用㆒。反以㆓六根之微㆒。因㆓緣天地㆒。明不ㇾ能ㇾ盡。則誣㆓天地日月㆒。爲㆓幻妄㆒。蔽㆓其用於一身之小㆒。溺㆓

(一)謝顯道佛說と吾が儒と同じき處を歷擧して、伊川先生に問ふ。先生曰く、(二)憾地に同じき處多しと雖も、只だ是れ(三)本領是ならず、一齊に差却す。

(一)人名、前に出づ　(二)俗語、此の如くと同意　(三)字句名目同じき處多しといふとも、本領すなはち大本是ならず、其旨意亦異なれば、一切に皆差却(たがふ)すと也

横渠先生曰く、(一)釋氏は天性を妄意して、天用を範圍することを知らず。反つて六根の微を以て、天地を因緣す。明盡すこと能はざれば、則ち天地日月をも誣ひて幻妄となす。(二)其用を一身の小なるに蔽はしめ、其志を虛空の大なるに溺れしむ。此れ大を語り小を語り、流遁して中を失ふ所以なり。(三)其の大に過ぐるや、六合を塵芥とす。其の小に蔽はるゝや、人世を夢幻とす。之を理を窮むと謂はゞ可ならんや。理を窮むることを知らずして、之を性を盡すと謂はゞ可ならんや。之を知らずといふことなしと謂はゞ可ならんや。(四)六合を塵芥とするは、天地を謂つて、窮

者一。固所レ不レ取。如レ是立定却省易。問二神僊之説有一レ諸。曰。若レ説二白日飛昇一之類。則無。若レ言下居二山林間一。保レ形錬レ氣。以延レ年益上レ壽。則有レ之。譬如二一鑪火一。置二之風中一。則易レ過。置二之密室一。則難レ過。有二此理一也。又問。楊子言。聖人不レ師レ僊。厥術異也。聖人能爲二此等事一否。曰。此是天

に取るに及ばず ㈦ 又聖人の説に合はざる處は、固より取るべきにあらず、此のやうに立場を定めて、釋氏の説を窮むるに於ては却つて手輕く心易く辨ぜらるゝ也

㈠神僊の説ありやと問ふ。曰く、㈡白日に飛昇すと説くが若きの類は則ちなし。山林の間に居て、形を保ち氣を錬り、以て年を延べ壽を益すと言ふが若きは、則ちこれあり、譬へば㈢一鑪の火の如し。之を風の中に置くときは、㈣則ち過ぎ易く、之を密室に置くときは、則ち過ぎ難し。此理あるなり。又問ふ、㈤楊子言ふ、聖人は僊を師とせず、厥の術異なればなりと。聖人能く此等の事を爲すや、否や。曰く、㈥此は是れ天地間の一賊なり。若し造化の機を竊むにあらずんば、安ぞ能く年を延べん。聖人をして肯て爲さしめば、周孔も之を爲さん。

㈠ 神僊は仙人をいふ、仙人に就きての説を問へる也 ㈡ 白晝 ㈢ 火を焚く器、今の風爐 ㈣ 火の立つこと ㈤ 楊子が言に、聖人は僊を師とせず、其術異なれば也とは、聖人にも亦仙術の如き事をなすやとの問也 ㈥ 仙人の術などと云ふものはとの意、天地間の一賊とは、公明正大なる天地の間に於ける一人の賊子也と一喝せし也、造化の機械を盗み取るにあらざれば、人間の壽命は延ばし得ず、聖人敢てなすならば周公も孔子も亦爲したるべし、周公孔子これをなさざれば聖人固より爲さずと也

釋氏之說。若欲下窮二其說一而去中取之上。則其說未レ能レ窮。固已化而爲レ佛矣。只且於二跡上一考レ之。其設レ敎如レ是。則其心果如何。固難レ爲下取二其心一。不上取二其迹一。有二是心一則有二是迹一。王通言二心跡之判一。便是亂說。故不レ若丁且於二迹上一。斷丙定不乙與二聖人一合甲。其言有二合處一。則吾道固已有。有二不レ合

釋氏の說、若し其說を窮めて、之を去取(一)せんと欲せば、則ち其說(二)未だ窮むること能はずして、固より已に化して佛とならん。只だ且く(三)跡上に於て之を考へよ。其の敎を設くること此の如くなるときは、則ち其心果して如何と。固より其(四)心を取つて、其迹を取らじとはなし難し。是の心あるときは則ち是の迹あり。王通が心跡の判れたることを言へるは、便ち是れ亂說なり。故に(五)且く迹上に於て、聖人と合はずと斷定せんに若かず。其言(六)合ふ處あらば、則ち吾が道固より已に有るなり。(七)合はざるものあらば、固より取らざる所なり。是の如く立定すれば、却つて省易なり。

(一) 取捨といふと同義 (二) 其說を窮めざる中に已に化して佛となるべしと也 (三) しばらく事跡の上に就いて、其敎を立つること此の如くならば、其心果して如何あるべきと考へ見るべしと也、即ち其跡を考へて其心を推す也 (四) 心あれば即ち跡あり、心跡相與る、故に其心を取つて跡を取らずとは云ひ難し、王通(文中子)魏徵に答へて、心跡の判れたる事久しといへり (五) しばらく其の倫をやぶる家を出づる如き事跡の上について見て聖人と合はざるものと斷定せんに如かず (六) 其說聖人の說と合ふ處あれば、すなはち吾道もとより已に有る也、今更に彼

得。故說許多。譬如二負販之蟲一。已載不レ起。猶自更取レ物在レ身。又如二抱レ石投一レ河。以二其重一愈沈。終不レ道レ放二下石頭一。惟嫌レ重也。

さんとはかる、然れども終に此の如き理なし、たゞ是れ死あらんのみと也　(八) 一面には身を厭ひ惡むが如くにて又一面には身を愛して放ち得ざること、說く所多し　(九) 負販とは貨を負うて販る者、商賈の一種、これの形に似たる蟲を負販蟲といふ、物を負ふことの多きを好む、故に喩へて云ふ也

人有下語二導氣一者上。問二先生一曰。君亦有レ術乎。曰。吾嘗夏葛而冬裘。饑食而渴飲。節二嗜欲一。定二心氣一。如レ斯而已矣。

人導氣(一)を語る者あり。先生に問うて曰く、君も亦術あるか。曰く、吾れ嘗て夏は葛(二)して冬は裘(三)し、饑ゑて食ひ渴して飲み、嗜欲を節し、心氣を定むること、斯の如くなるのみ。

(一) 一種の養生術、氣をみちびきて流通せしむる術　(二) 葛(くず)の纖維にて織れる布、之を着る也　(三) けものの皮にて作りたる衣、けごろも又かはごろも

佛氏不レ識二陰陽晝夜。死生古今一。安得下謂二形而上者一與二聖人一同上乎。

佛氏(一)は陰陽晝夜、死生古今を識らず。安ぞ形而上(二)なる者と謂うて、聖人と同じきことを得んや。

(一) 釋氏に同じ　(二) 道をいふ、易の繫辭に、「形而下者謂二之器一、形而上者謂二之道一」とあり

自私。將二自家軀殼上頭一起レ意。故看二得道理一。小二了他底一。放二這身一來。都在二萬物中一。一例看。大小大快活。釋氏以レ不レ知レ此。去レ他身上起二意思一。奈二何那身一不レ得。故却厭惡。要レ得三去二盡根塵一。爲二心源不一レ定。故要レ得レ如二枯木死灰一。然沒二此理一。要レ有二此理一。除是死也。釋氏其實是愛レ身放不レ

ことを得んと要す。(七)心源定らざるがために、故に枯木死灰の如くなることを得んと要す。然れども此理沒し。此理あらんことを要せば、除だ是れ死せんのみ。(八)釋氏は其實是れ身を愛して放ち得ず。故に說くこと許多なり。譬へば(九)負販の蟲の如し。已に載せて起たざれども、猶ほ自ら更に物を取りて身に在く。又石を抱きて河に投ずるが如し。其重きを以て愈〻沈めども、終に石頭を放下せんことを道はずして　惟だ重きを嫌ふのみ。

(一) 那裏とは此理の中よりの意 (二) 易の繫辭の文也、宇宙の萬物生々窮りなし、之を易といふ (三) 人と物と各異なれども生ずるときは則ち一時也、皆ひとしく理を完うす、所謂萬物一體也 (四) 人の稟くる處の氣通ずるが故に能く推す、物は稟くる所の氣塞がるが故に推す能はず、推す能はざるが故に物は此理を有せずと云ふべからずと也 (五) 人は只だ自ら私する個よりして、自分の身體の上にのみ意を起す、故に道理を看てもこれを小さく思ひ做す、若し此身を放下し、心を萬物の中に置き一體に看渡さんには、そこにそこばくの大なる快活あらんと也 (六) 釋氏は此の萬物一體にして理に順つて行へば、本と障礙なきことを知らず、反つて自ら私見を生じ、吾身物と交らざらんとするも能はざるが故に、遂に悉く根塵を去り、諸の所有を空しくせんことを欲す、佛書に耳・目・口・鼻・身・意を六根となし、色・聲・香・味・觸・法を六塵となす、其說に曰く、幻塵滅するが故に幻根滅す、幻根滅するが故に幻心亦滅すと。而も心は本生道なり、體あれば用あり、豈に絶滅すべけんや (七) 心のもと、安定せず故に心を枯木死灰の如くにな

己則危。只是能使二人移一。故危也。至丁於二爲之言一。曰丙何畏乙乎巧言令色甲。直消レ言レ畏。只是須レ著二如レ此戒愼一。猶恐レ不レ免。釋氏之學。更不レ消レ言二常戒一。到二自家自信一後。便不レ能二亂得一。

害を避くるの弱點に投合して、浸染し易し、之に遠ざからざれば則ち浸々として其中に陷入すべしと也 (三)須回也 (四)前に出づ (五)鄭國の音樂 (六)心ねぢけたる人 (七)人の志を善より惡に移變せしむ (八)禹の語を引く (九)畏は尤も恐るべき意。消 用也 (一〇)釋氏の學は更に常に戒むべく、忠言を用ひざるを得ず (一一)自分に自信が出來しならば、彼の爲に亂れ得んことはなかるべしと也

所三以謂二萬物一體一者。皆有二此理一。只爲下從二那裏一來上。生生之謂レ易。生則一時生。皆完二此理一。人則能推。物則氣昏推不レ得。不レ可レ道三他物不二與有一也。人只爲下

萬物一體なりといふ所以の者は、皆此理あり。只だ(一)那の裏より來るが爲なり。(二)生生するを易といふ。(三)生ずるときは則ち一時に生じて、皆此理を完うす。(四)人は則ち能く推し、物は則ち氣昏くして推し得ず。他の物は與にあらずと道ふべからず。(五)人只だ自ら私し、自家軀殼の上頭を將つて意を起すことをなす。故に道理を看得て、他底を小了す。這の身を放ち來りて、都て萬物の中にありて、一例に看ば、大小大快活ならん。(六)釋氏は此を知らざるを以て、去つて他の身上に意思を起す。那の身を奈何ともするを得ず。故に却つて厭ひ惡みて、根塵を去り盡す

人設ㇾ此術、令ㇾ爲ㇾ善。先生曰。至誠貫二天地一。人尚有ㇾ不ㇾ化。豈有下立二僞教一而人可中化乎。

聖人の德を以てしても、尚は化せざる者あるに、僞りの教を以て人を化せんとするもの、何ぞそれ爲し得んやと也

學者於二釋氏之說一。直須下如二淫聲美色一以遠上ㇾ之。不ㇾ爾則駸駸然入二於其中一矣。顏淵問ㇾ爲ㇾ邦。孔子既告ㇾ之。以二二帝三王之事一。而復戒以下放二鄭聲一遠中佞人上。曰。鄭聲淫。佞人殆。彼佞人者。是他一邊佞耳。然而於ㇾ

學者、釋氏の說に於ては、直に須らく淫聲美色の如く以て之に遠かるべし。(一) 爾らずんば、則ち駸駸然として、其中に入らん。(二) 顏淵邦を爲むることを問ふ。(三) 孔子既に之に告ぐるに、二帝三王の事を以てし、(四) 復戒むるに鄭聲を放ち佞人を遠くることを以てす。(五)(六) 曰く、鄭聲は淫なり。佞人は殆しと。彼の佞人は、是れ他の一邊の佞のみ。然れども己に於て則ち危し。只だ是れ能く人をして移らしむ。(七) 故に危し。禹の言に、何ぞ巧言令色を畏れんと曰ふに至つては、(八) 直に畏ると言ふことを消ふ。只だ是れ須らく此の如き戒愼を著くべし。猶ほ免れざらんことを恐る。(九) 釋氏の學は、更に常に戒めよと言ふことを消ひざらんや。(一〇) 自家自ら信ずるに到つて後は、便ち亂得すること能はず。(一一)

(一) 釋氏の說に對しては、之を淫聲美色の如く思ひ做して遠ざかるべしと也　(二) 釋氏の說く所は、世俗の利を欲し

釋氏本怖二死生一爲レ利。豈是公道。惟務二上達一。而無二下學一。然則其上達處。豈有レ是也。元不二相連屬一。但有二間斷一非レ道也。孟子曰。盡二其心一者。知二其性一也。彼所謂識心見性是也。若二存レ心養レ性一段一。則無矣。彼固曰二出レ家獨善一。便於二道體一自不レ足。或曰。釋氏地獄之類。皆是爲二下根之

釋氏は(一)本死生を怖れて利の爲にす。豈に是れ公道ならんや。惟だ(二)上達を務めて、下學なし。然るときは則ち其上達する處、豈に是れあらんや。元と相連屬せず、但だ間斷あるは、道にあらざるなり。孟子曰く、其心を盡す者は、其性を知ると。(三)彼の所謂識心見性是れなり。(四)心を存し性を養ふの一段の若きは、則ち無し。彼れ固より(五)家を出で丶獨り善くすと曰ふ。便ち道體に於て自ら足らず。或ひと曰く、釋氏の地獄の類は、皆是れ(六)下根の人の爲に此を設け、怖して善を爲さしむと。先生曰く、(七)至誠天地を貫けども、人尚ほ化せざることあり。豈に僞敎を立てて人化すべきあらんや。

㊀ 釋氏謂ふ所の生あれば滅あり、故に輪廻あり、（輪廻とは人輪廻して生死し、報轉因果の報を受けて苦むこと止む時なし）今不生不滅安樂自在の理を求めて輪廻の苦を免るべしとするは、此れ本死生を怖れて己を利するの私意に出づ ㊁ 釋氏の道は學を絶ちて頓悟を求む、卽ち物を捨て丶理を明らめ、迹を泯して心を求むる也、故に下學の工夫なし、其の上達の處焉ぞ道あらんや、理と事と相連屬なくして、間斷あることは終に自然の道たるを得ざる也 ㊂ 彼とは釋氏也 ㊃ 孟子の所謂存養の功、彼に於てあらずと云ふ ㊄ 道は人倫を本とす、今家を出づるといへる、已に道の本體に缺くる所大なりと ㊅ 佛敎に於て思想の低き者の稱 ㊆ 世には至誠天地を貫くばかりの

若有ㇾ適有ㇾ莫。則於ㇾ道爲ㇾ有ㇾ閒。非天地之全一也。彼釋氏之學。於二敬以直ㇾ內則有ㇾ之矣。義以方ㇾ外。則未二之有一也。故滯固者。入二於枯槁一。疏通者。歸二於恣肆一。此佛之敎。所二以爲ㇾ隘也。吾道則不ㇾ然。率ㇾ性而已。斯理也。聖人於ㇾ易備言ㇾ之。

略、地・水・火・風 ㊄ 五倫をやぶり四大をすつる者道に戻るとは釋氏の佛法を指す、釋氏の敎は物に離れて獨立し、恩愛の絆を絕つと稱して五倫を毀ることを意とせず、四大幻假して人身を成すものとし、幻根を寂滅して一切を斷除すといふ ㊅ 適は可、莫は不可、可もなく不可もなしといふが如し ㊆ 日用事物の閒に於て滯る者は拘泥して枯槁（やせかれる）に入り、通ずる者は不羈にして恣肆（はしいまゝ）に歸す、名けて大自在となすも、實は則ち厭陋にして一毫も受容する所なし ㊇ 性は率ふの道は動靜各正しく、拘泥せず又放肆せず、聖人易を贊す、所謂至るを知つて之に至り幾をともにすべし、終るを知つて之を終りともに義を守すべし、敬以て內を直くし、義以て外を方にす、時止まれば止まり、時行けば行く、動靜其時を失はず、體用本末つぶさに之を言へり

又曰。佛有二一箇覺之理一。可三以敬以直ㇾ內矣。然無三義以方ㇾ外。其直ㇾ內者。要ㇾ之其本亦不是。

又曰く、佛には一箇覺の理あり。以て敬以て內を直くすべし。然れども義以て外を方にすることなし。其れ內を直くする者は、之を要するに其本亦不是なり。

㊀ 佛學の禪とは覺也、覺とは心に倚著するものなく、靈覺にして昧ならず、所謂常惺々の法也。敬以て內を直くすべきがごときも、而も事を制するの義なきときは、則ち其の覺なるものは、猶は無寸の尺、無星の稱のごとし、其の內を直くするの本も亦是ならざる也

道之外無レ物。物之外無レ道。是天地之間。無二適而非一レ道也。即二父子一。而父子在レ所レ親。即二君臣一。而君臣在レ所レ嚴。以至下爲二夫婦一。爲二長幼一。爲中朋友上。無二所レ爲而非一レ道。此道所下以不レ可二須臾離一也。然則毀二人倫一。去二四大一者。其戻二於道一也遠矣。故君子之於二天下一也。無レ適也。無レ莫也。義之與比。

道にあらざることなければなり。父子(二)に即いては、父子親む所にあり。君臣に即いては、君臣嚴にする所にあり。以て夫婦となり、長幼となり、朋友となるに至るまで、爲す所として道にあらざることなし。此れ道の須臾も離るべからざる所以なり。然るときは則ち人倫(三)を毀り、四大(四)を去つる者は、(五)其れ道に戻ること遠し。故に君子の天下に於けるや、適もなく、莫もなく、義と與に比ふ。若し適あり莫あるときは、則ち道に於て閒(六)ありとなす。天地の全きにあらざるなり。彼の釋氏の學は、敬以て内を直くすることに於ては、則ちこれあり。義以て外を方にすることは、則ち未だこれあらず。故に滯固する者は枯槁に入り、疏通する者は恣肆に歸す。此れ佛の敎の、隘たる所以(七)なり。吾が道は則ち然らず。(八)性に率ふのみ。斯の理は、聖人易に於て備に之を言へり。

(一) 物は道に由つて形る、故に道外無物と云ふ、道は物を以て具はる、故に物外無道と云ふ、人は天地の閒に於て物に遵つて獨立つこと能はず、故にゆくとして道にあらざることなき也 (二) 父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり (三) 人の守るべき道也、五倫、即ち父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友 (四) 四大種の

伊川先生曰。儒者潛ニ心正道一。不レ容レ有レ差。其始甚微。其終則不レ可レ救。如ニ師也過。商也不レ及。於ニ聖人中道一。師只是過ニ於厚一些。商只是不レ及些。然而厚則漸至ニ於兼愛一。不レ及則便至ニ於爲レ我。其過不レ及。同出ニ於儒者一。其末遂至ニ楊墨一。至レ如ニ楊墨一。亦未レ至ニ於無レ父無レ君。孟子推レ之便至ニ於此一。蓋其差必至ニ於是一也。

伊川先生曰く、儒者は心を正道に潛めて、差ひあるべからず。(一)其始甚だ微なれども、其終は則ち救ふべからず。(二)師は過ぎ、商は及ばざるが如き、聖人の中道に於て、師は只だ是れ厚きに過ぎたること些に、商は只だ是れ及ばざること些なり。然して厚きときは則ち漸く兼ね愛するに至り、及ばざるときは則ち便ち我が爲にするに至る。其過不及や、同じく儒者に出でゝ、其末遂に楊墨に至る。楊墨の如きに至りても、亦未だ父を無し君を無するに至らず。孟子之を推して便ち此に至る、蓋し其差必ず是に至ればなり。

(一) 中正に差ふべからずと也、其始め毫厘の差も其末千里に至る、則ち救ふべからず　(二) 師は子張の名、商は子夏の名、共に孔子の弟子也、以下二子の說の小異より、楊墨の爲我と兼愛とに陥るの徑路を說き、孟子が之を推して終に父をなみし君をなみするに至るべしといへることに論及せり

明道先生曰。

明道先生曰く、(一)道の外に物なく、物の外に道なし。是れ天地の間、適くとして

卷之十三

辨異端類　凡十四條

明道先生曰。楊墨之害。甚於申韓。佛老之害。甚於楊墨。楊氏爲我。疑於仁。墨氏兼愛。疑於義。申韓則淺陋易見。故孟子只闢楊墨。爲其惑世之甚也。佛老其言近理。又非楊墨之比。此所以爲害尤甚。楊墨之害。亦經孟子闢之。所以廓如也。

明道先生曰く、楊墨(一)の害は、申韓(二)より甚だし。佛老(三)の害は、楊墨より甚だし。(四)楊氏は我が爲にす、仁に疑はし。(五)墨氏は兼愛す、義に疑はし、(六)申韓は則ち淺陋にして見易し。故に(七)孟子は只だ楊墨を闢く。其の世を惑はすの甚だしきが爲なり。佛老は其言理に近く、又楊墨の比にあらず。此れ害を爲すこと尤も甚だしき所以なり。楊墨の害は、亦孟子の之を闢くことを經たり。(八)廓如たる所以なり。

(一) 楊子と墨子とを指す (二) 申不害と韓非子とを指す (三) 釋氏と老子とを指す (四) 楊子の學說を評す (五) 墨子の學說を評す (六) 申韓の學說を評す (七) 孟子只楊墨の昧をひらきて、申韓に及ばざるは、申韓の淺陋にして誰人にも見易きに反し、楊墨は世を惑はすと甚しきを以て也 (八) 廓如は惑のほがらかに開けたるをいふ

惟是左右看。順ニ人情ニ不レ欲レ違。一生如レ此。

㈡ 鄕原、鄕愿なり、孟子鄕愿の害を說きて後に、經に反ることを說く、故に後に於てすといふ ㈢ 鄕愿とは謹愿にして鄕中の人々より譽めらるゝ所の人、大なる者とは心を云ふ、鄕愿心を立つることなく、初より是非善惡の分別を定めず、左右前後に看て敢て人情に違はざらんことを欲するのみ、卽ち義理立つにあらず、中心誠あるにあらず、たゞ人の悅ばんことを務めとす、故に聖人之を德の賊なりと喝破して擯斥す、乃ち龍常の才なる者なり、君子其常道に取るときは是非善惡昭然たり、鄕愿の僞言僞行も終に以て亂はすを得ざる也

鄭衛之音悲哀。令二人意思留連一。又生二怠惰之意一。從而致二驕淫之心一。雖二珍玩奇貨一。其始感レ人也。亦不二如レ是切一。從而生二無レ限嗜好一。故孔子曰。必放レ之。亦是聖人經歷過。但聖人能不レ爲二物所一レ移耳。

(一)鄭衛の音は悲哀なり。人の意思をして留連せしめ、又怠惰の意を生ず。從つて驕淫の心を致す。(二)珍玩奇貨と雖も、其始め人を感ぜしむること、亦(三)是の如く切ならず。從つて(四)限なき嗜好を生ず。故に孔子曰く、必ず之を(五)放てと。亦是れ聖人(六)經歷し過ぐ。但だ聖人は(七)能く物に移さるゝことをなさゞるのみ。

(一) 鄭と衛と兩國の詩歌音樂は、悲哀を帶びて淫聲あり、人の意思を引止めて深くすさみて歸るを忘れしむ、從つて事におこたりを生ぜしめ、おごりみだらしき心とならしむ (二) 珍しきもてあそびもの、くしきたからもの (三) 鄭衛の淫聲をいふ (四) 限なき慾情 (五) 放つなり、棄つる也 (六) 聖人も之を實際に經驗したるをいふ (七) 外物の爲めに志を移されざるをいふ也

孟子言レ反レ經。特於二鄉原之後一者。以下鄉原大者不二先立一。心中初無レ作。

孟子(一)經に反るを言ふ。特に(二)鄉原の後に於てする者は、(三)鄉原は大なる者先づ立たず、心中初より作すことなく、惟だ是れ左右に看、人情に順つて違ふを欲せず、一生此の如くなるを以てなり。

(一) 經は常なり、常道是を是とし非を非として必ず定理あり、善を好み惡を惡みて必ず定見あり、之を常道といふ

先生曰。可レ哀也哉。其餘時理ニ會甚事ー。蓋做ニ三省之說ー錯了。可レ見レ不ニ曾用レ功。又多逐ニ人面上ー說ニ一般話ー。明道責レ之。邢曰。無レ可レ說。明道曰。無レ可レ說。便不レ得レ不レ說。

橫渠先生曰。學者捨ニ禮義ー。則飽レ食終レ日。無レ所ニ猷爲ー。與ニ下民ー一致。所レ事不レ踰ニ衣食之閒ー。燕遊之樂ー爾。

の事をか理會する。蓋し三省の說に倣ひて錯了れり。曾て功を用ひざることを見るべしと。又多く(四)人の面上を逐ひて、一般の話を說く。明道之を責む。邢曰く、(五)說くべきなし。明道曰く、(六)說くべきなし、便ち說かざることを得ざるなり。

(一) 邢恕、前に出づ　(二) 一日に三たび我が言行の是非をあらためしらべる　(三) 其餘れる時に何事を工夫して理會せしや、汝、曾子が日に三たび省みるといへるに倣ひて全く錯りたるなり、此事を除きて、平素に工夫をなさゞることを察すべしと也、三省の三はいくたびもの意のみ　(四) 人に會ふ毎にどの人にも同じ話をする　(五) 別に話すべき話の種なし　(六) 話すべき種なしとや、さらば汝は話さゞるを得ざる也、此意前節の三省に倣うて誤れると同じく、人に對しては必ず說なかるべからずとして、何等工夫を用ひず、何人にも同じ說を繰返すなり

橫渠先生曰く、學者にして禮義(一)を捨つるときは、則ち食に飽き日を終へ、猷り爲す所なく、下民と一致せり。事とする所は衣食の閒、燕遊の樂を踰えざるのみ。

(一) 學者の勉むべきことをつとめず、たゞ飲食に飽きて日を送り、世の爲め人の爲めにはからふこともなく爲すこともなく過すは、下等の民と一つなりとの意

亦不レ足。於二事上一亦不レ足。凡百事皆不レ足。必有二歉歉之色一也。

未レ知レ道者如二醉人一。方二其醉時一。無レ所レ不レ至。及二其醒一也。莫レ不二愧恥一。人之未レ知レ學者。自視以爲レ無レ缺。及二既知一レ學。反思二前日所一レ爲。則駭且懼矣。

邢七云。一日三點檢。明道

の色あらん。

(一) 驕は常に其有餘を覺ゆ、故に氣盈つる也、吝は常に其不足を覺ゆ、故に氣あきたらざる也　(二) 吝は鄙嗇也、單に財の上にのみ足らざるにあらず、百事皆足らざる也　(三) あきたらざるさま

未だ道を知らざる者は醉人の如し。其醉へる時に方つては、(一)至らずといふ所なく、其醒むるに及んでは、(二)愧恥せずといふことなし。人の未だ學を知らざる者は、(三)自ら視て以て缺くることなしとなす。既に學を知るに及んで、反つて前日のなす所を思ふときは、則ち駭き且つ懼る。

(一) 酒に醉つては放言亂行諱憚る所もなく至らぬ隈もなしとの意　(二) 酒の醉醒むれば其醉中の言行を顧みて赤面せざることなきをいふ、愧、恥共に恥づる意　(三) 學を知らざる者が、其の知らざることを知らざるまゝ、己亦他の人に比して缺くる所あらじと思へるも、學を知りたる後に至つて、其の知らざりし當時の言行を顧みれば、背に汗するの思ひをなす、卽ち酒に醉ひたる人の醒めたる後に深くその醉時の言行をはづると異なるところなしとの意なり

(一)邢七云く、(二)一日に三たび點檢すと。明道先生曰く、哀むべきかな、(三)其餘時は甚

小人小丈夫。不ㇾ合二小了一。他本不二是惡一。

雖下公二天下一事上。若用二私意一爲ㇾ之。便是私。

做ㇾ官奪二人志一。

驕是氣盈。吝是氣歉。人若吝時。於二財上一

其流弊深く思ふべき也、事大小あるも理に於て大小なし ㊂ 尺は一尺、尋は八尺。此語孟子に出づ

(一)小人小丈夫も、(二)小了すべからず。(三)他も本より是れ惡なるにあらず。

㊀ 小人とは君子に對し、小丈夫とは大丈夫に對して云ふ ㊁ 小さきものと思ひ定むべからず ㊂ 彼とて本からの不善にはあらず、其氣質に累せられ、若しくは利欲に制せられて小人となり小丈夫となれるなり、教化の機會あるべきぞとの意

(一)天下に公なる事と雖も、若し私意を用つて之をなさば、便ち是れ私なり。

㊀ 天下の公事は飽くまで私心を斥けて之に從ふべき也、若し一點私意を加へて之を爲さば、是れ公を害するもの也、職を公共に奉ずるもの、殊に此の一節を鑑として服膺せざるべからず

(一)官と做れば人の志を奪ふ。

㊀ 官職に就くを云ふ、官は權力の集る所也、權勢に馴れ榮位に心驕り、自然に操節を守ることを忘るゝは、志奪はれたる也、人權威の地に在る、動もすれば志を奪はれ易し

(一)驕は是れ氣の盈つるなり。吝は是れ氣の歉ざるなり。人若し(二)吝なる時は、財の上に於ても亦足らず、事の上に於ても亦足らず。凡そ百事皆足らず。必ず(三)歉歉

子言。其嗜欲深者。其天機淺。此言却最是。

(一)嗜欲多ければ志氣昏亂して天理微か也、此の二者常に相消長す　(二)天機は天理をいふ、莊子の言尤も是也

伊川先生曰。閲二機事一之久。機心必生。蓋方二其閲時一。心必喜。既喜則如レ種二下種子一。

伊川先生曰く、機事を閲ること久しければ、機心必ず生ず。蓋し其閲る時に方りて、心必ず喜ぶ。既に喜ぶときは則ち種子を種ゑ下すが如し。

(一)莊子より引く、機は機械卽ち巧みにあやつりたるうつは、これをあやつるわざを機事といひ、それを巧みなす心を機心といふ　(二)閲るたびに心に好ましく思ふ、其好ましく思ふときに、機心の種子をうゑつけられたりと也

疑病者。未レ有二事至一時。先有二疑端在一レ心。周二羅事一者。先有二周レ事之端在一レ心。皆病也。

疑ふ病ある者は、未だ事至ることあらざる時、先づ疑の端の心にあるあり。事を周羅する者は、先づ事を周するの端の心にあるあり。皆病なり。

(一)疑病とは疑深きくせある也、事毎に先づ疑ひの端を心に抱くなり　(二)周羅とは我事ならぬ事をも我があづかれる事のやうに思ひ做して彼是とかゝづらふこと、是も亦事毎に已これにかゝづらふ端を懐く也

較二事大小一。其弊爲レ枉レ尺直レ尋之病一。

事の大小を較ぶれば、其弊、尺を枉げて尋を直くするの病をなす。

(一)事の大小を引きくらべて、小の蟲を殺して大の蟲をいかすと云ふことあるに同じ、時の權宜に出づといへども、

去也。

(一)事を未然に料る　(二)賢明の意　(三)馬の疾走する貌　(四)詐を逆へとは、未だ顯れ來らざれども、先方の爲す所或は無情ならんかと、疑ひはかる也、不信を億るとは、我が言ふ所を無實として、彼れ信せずやあらんと思ひはかる也。全意は事を未然に料り知るを以て、明なりとせんには、何事も己の巧智に流れ物毎に疑ひ惑ふのみにて、必ずしも其情實を得べからず、されば人、事を未然に思料するを以て明となさば明は反つて不明となるべしと也、此は論語に、「詐りを逆へず、不信を億らず、先づ覺る者は其れ賢か」とあるにつきて言へる也

人於外物奉身者。事事要好。只有自家一箇身與心。却不要好。苟得外面物好時。却不知道自家身與心。却已先不好了也。

人、(一)外物の身に奉ずる者に於て、(二)事事好からんことを要す。(三)只だ自家一箇の身と心とあり。却つて好からんことを要せず。(四)苟も外面の物好きを得る時、却つて自家の身と心と、却つて已に先づ好からざることを知道せず。

(一)外面の物、身を奉養する所の衣食住の類を指す　(二)事每に心に好むべくよからんことを求む　(三)たゞ自己の物としては身と心とあるのみなるに、之には敢て好からんことを求めず　(四)外面の物の好き品々を手に入れたる時には、却つて自己の身と心とには、已に先づ好からぬことが附著して居るは知らぬと也、即ち小なる欲の爲に大なる德を傷くることをいふ也

人於天理昏者。是只爲嗜欲亂著他。莊

人の天理に昏きは、是れ只だ(一)嗜欲他を亂著するが爲なり。莊子言ふ、其嗜欲深き者は、(二)其天機淺しと。此言却つて最も是なり。

人有レ慾則無レ剛。剛則不レ屈ニ於慾一。

人之過也。各於ニ其類一。君子常失ニ於厚一。小人常失ニ於薄一。君子過ニ於愛一。小人傷ニ於忍一。

明道先生曰。富貴驕レ人。固不善。學問驕レ人。害亦不レ細。

人以レ料レ事爲レ明。便駸駸入三逆レ詐億ニ不信一。

(一)人に慾あるときは則ち剛なし。剛なるときは則ち慾に屈せず。

◯ 論語に出づ、孔子弟子の申根を評して、根は慾あり、いづくんぞ剛を得んと云へるを引く

(二)人の過は、各々其類に於てす。君子は常に厚きに失し、小人は常に薄きに失す。君子は愛に過ち、小人は忍に傷らる。

◯ 類はたぐひ也、仁と不仁とによつて君子・小人の分あり、仁者の過ちは厚きと愛とにあり、不仁者の過ちは薄きと忍とにあり。忍は殘忍なること

(三)明道先生曰く、富貴にして人に驕るは、固より不善なり。學問して人に驕るも、害亦細ならず。

◯ 君子の學は己が爲にす、學問を以て人に驕るは、唯だ其學の外を務むるが爲にするのみにして、傲惰、德を敗つて學も亦進まじ

(四)人、事を料るを以て明となさば、便ち駸駸として詐を逆へ不信を億るに入り去らん。

天下之議。則不レ能レ成二其功一。豈方レ命圮レ族者。所レ能乎。鯀雖二九年而功弗一レ成。然其所レ治。固非二他人所一レ及也。惟其功有レ敍。故其自任益強。咈戾圮レ類益甚。公議隔。而人心離矣。是其惡益顯。而功卒不レ可レ成也。

より他人の及ぶ所にあらず。惟だ其功(五)敍あり。故に其自ら任ずること益〻強く、(六)咈戾にして類を圮ること益〻甚だしく、公議隔たりて、人心離る。是れ其惡益〻顯れて、功卒に成すべからざるなり。

(一) 大事に任ずると (二) 一人の私智をすてゝ、人の意見に従ひ、天下の議を合して議を釐す (三) 命は天理、方は不順の義、族は類、圮は毀る也、禹の父鯀のことを引く (四) 禹の父なり、水を治むること九年なるも、内に才智をたのみ、上の命にそむく所あり、族類にもとり、遂に功をなさゞりき (五) 其功のあがる次第のや、あらはれたるをいふ (六) 前に出づ

君子敬以直レ內。微生高所レ枉雖レ小。而害則大。

君子は敬以て內を直くす。微生高が枉げし所小なりと雖も、而も害は則ち大なり。

(一) 其事論語に出づ、或人微生高の家に來りて醯を乞ひしに、生醯をかりし故、之を鄰より乞ひて其人に與へたり、世人之を直なりとなせども、孔子は無きを有りとするは直にあらずとせり

之序一。夫婦有二倡隨之理一。此常理也。若徇レ情肆レ欲。唯說是動。男牽レ欲而失二其剛一。婦狃レ說而忘二其順一。則凶而無レ所レ利矣。

欲を肆にし、唯だ說にのみ是れ動き、(四)男は欲に牽かれて其剛を失ひ、婦は說に狃れて其順ふことを忘るゝときは、則ち凶にして利き所なからん。

(一)男は尊、女は卑、是れ序ある也　(二)夫となへ、婦したがふ、是れ理也　(三)情のおもむく所にしたがひ欲のこゝろざすまゝにして、よろこばしさに動く　(四)男は男の剛を欲のために失ひ、婦は夫の己をよろこぶに狃れて女の順ふべき理を忘る

雖二舜之聖一。且畏二巧言令色一。說之惑レ人。易レ入而可レ懼也如レ此。

舜の聖と雖も、且つ(一)巧言令色を畏る。說の人を惑はす、入り易くして懼るべきこと此の如し。

(一)ことばたくみに、かほいろをやはらげて、こびへつらひ、よろこばすこと

治レ水天下之大任也。非三其至公之心。能捨レ己從レ人。盡二

水を治むるは天下の(一)大任なり。其至公の心、(二)能く己を捨てゝ人に從ひ、天下の議を盡すにあらずんば、則ち其功を成すこと能はず。豈に(三)命に方ひ族を圮る者の、能くする所ならんや。(四)鯀、九年にして功成らざりきと雖も、然も其の治めし所、固

艮二其限一。列二其夤一。厲薫レ心。傳曰。夫止道貴二乎得一レ宜。行止不レ能レ以レ時。而定二於一一。其堅强如レ此。則處レ世乖戾。與レ物睽絶。其危甚矣。人之固止二一隅一。而舉レ世莫二與レ宜者一。則艱蹇忿畏。焚二撓其中一。豈有二安裕之理一。厲薫レ心。謂三不安之勢。薫二爍其中一也。

く、夫れ止まるの道は宜しきを得るを貴しとす。(五)行止時を以てすること能はずして、一に定まる。其堅強此の如くなれば、則ち世に處ること乖戾し、(六)物と睽(七)絶す。其危きこと甚だし。人の固く一隅に止まり、而も世を擧げて宜しきを與にする者なきときは、則ち艱蹇忿畏(八)して、其中を焚撓す。豈に安裕(九)の理あらんや。厲うして心を薫ずとは、不安の勢(一〇)の、其中を薫爍するをいふ。

(一)易の艮卦　(二)界分、身の上下の限界にて卽ち腰也　(三)夤を列つとは人の脊肉を絶つの意　(四)危懼して心を困しむの義、薫はふすぶる　(五)行くと止まると　(六)そむきもとる　(七)へだゝる　(八)なやみ、いかり、おそれて心をやきたわめる　(九)やすくゆたかなる　(一〇)中は心、薫爍はふすべやく

大率以レ説而動。安有二不レ失レ正者一。

大率説(一)を以て動かば、安ぞ正を失せざる者あらん。

(一)心に好樂する所あるときは、其正を得ず、況や欲に從つて返るを忘るゝものをや

男女有二尊卑

男女に尊卑(一)の序あり。夫婦に倡隨(二)の理あり。此れ常理なり。若し情(三)に徇ひ

子一矣。
益之上九曰。莫ㇾ益ㇾ之。或擊ㇾ之。傳曰。理者天下之至公。利者衆人所二同欲一。苟公二其心一。不ㇾ失二其正理一。則與ㇾ衆同ㇾ利。無ㇾ侵二於人一。人亦欲ㇾ與ㇾ之。若切二於好ㇾ利。蔽二於自私一。求二自益一。以損二於人一。則人亦與ㇾ之力爭。故莫二肯益ㇾ之。而有下擊二奪之一者上矣。

㊅ 大いに正しき事は陰柔の性を以てしては到底能くなすべきにあらずと云々

益(一)の上九に曰く、之を益することなくして、或は之を撃つ。傳に曰く、理は天下の至公なり。利は衆人の同じく欲する所なり。苟も其心を公にして、其正理を失せざるときは、則ち衆と利を同じうし、人を侵すことなく、人も亦之に與せ(三)んことを欲す。若し利を好むに切(四)にして、自ら私(二)するに蔽はれ、自ら益せんことを求めて、以て人を損ずるときは、則ち人も亦之と力め争ふ。故に肯(五)て之を益することなくして、之を撃奪する者あり。

㊀ 易の益卦、上九は剛にして、己れ獨り利益を壟斷せんと欲すれども能はず、反つて他より攻撃せらる ㊁ おかす、害を加へる ㊂ ともゞゝにくみあひてまもる ㊃ しきり、自分の私欲におほはれ、己のみ益せんことをねがうて、人をそこなふときは、人またつとめてあらそふ心を起すなり ㊄ 強ひても益は與へず、撃ち奪はんことを企つる者ある也

艮之九三曰。

艮(一)の九三に曰く、其限(二)に艮まる。其夤(三)を列つ。厲うして心を薫ず。傳に曰

性如レ此。自睽孤也。如下人雖レ有二親黨一。而多自疑猜。妄生中乖離上。雖レ處二骨肉親黨之間一。而常孤獨也。

㈠易の睽卦、睽はそむく　㈡たがひもとる　㈢さわぎてあらき　㈣過はすぐる、明察にすぎてかへつて疑念多く生ず　㈤其質は孤ならざるに、才と性と此の如くにして、自らそむきてひとりとなる也　㈥そむきてひとりとなること　㈦したしきともがら　㈧うたがひそねむ　㈨そむきはなれる　㈩兄弟姉妹等のみうち

解之六三曰。負且乘。致二寇至一。貞吝。傳曰。小人而竊二盛位一。雖三勉爲二正事一。而氣質卑下。本非レ在レ上之物一。終可レ吝。若能大正則如何。曰。大正非二陰柔所一レ能也。若能レ之。則是化爲二君

㈠解の六三に曰く、㈡負うて且つ乘る。寇の至るを致す。貞なれども吝し。傳に曰く、㈢小人にして盛位を竊む。勉めて正事をなすと雖も、而も氣質卑下なり。㈣本上にある物にあらず。終に吝しかるべし。若し能く㈤大正なるときは則ち如何。曰く、㈥大正は陰柔の能くする所にあらず。若し之を能くするときは、則ち是れ化して君子とならん。

㈠易の解の卦　㈡負ふは物を負ふことにて小人•賤僕のなすべき業也、乘るは車上にあることにて君子•大人の器也、小人車上に在れば盜賊見て寇せんとする意なり　㈢小人が濫つて君子の位に在る、之をぬすむといふは、其の居るべき位にあらざれば也、勉めて君子たらんとして正しき事をなすとも、氣質いやしくさがれるをいふ　㈣もと〳〵上位にあるべき物ならざれば、どこまでもいやしと也　㈤若し大いに正しき事をなせば如何と問を起す

之道也。聖人開二其遷一レ善之道一。與二其復一。而危二其屢失一。故云二厲無一レ咎。不レ可下以二頻失一而戒中其復上也。頻失則爲レ危。屢復何咎。過在レ失。而不レ在レ復也。劉質夫曰。頻復不レ已。遂至レ迷レ復。

何の咎あらん。過は失するにありて、復するにあらず。劉質夫(八)曰く、頻に復して已まざれば、遂に復するに迷ふに至る。(九)

(一)易の復の卦　(二)陰の性にして能くさわぎみだる　(三)動の極に居ればしば〳〵善に復すれども堅く守ると能はず　(四)安んじて固く守る　(五)頻に復しては又頻に動きさわぐときは復しても安んずることなし、此の如きことは危きの道なりといふ　(六)戒むは止むる意　(七)しば〳〵失す、故にあやふし、しば〳〵復す、故に咎なし、咎なしとは過ちを補ふの意也　(八)劉絢字質夫、程子の門人　(九)復するに迷ふは、つひに又復すること能はざるに終らん

睽極則咈戻而難レ合。剛極則躁暴而不レ詳。明極則過察而多レ疑。睽之上九。有二六三之正應一。實不レ孤。而其才

睽極(一)まるときは則ち咈戻(二)にして合ひ難し。剛極まるときは則ち躁暴(三)にして詳ならず。明極まるときは則ち過察(四)にして疑多し。睽の上九は、六三の正應ありて、實(五)は孤ならず、而も其才性此の如し。自ら睽孤(六)なるなり。人親黨(七)ありと雖も、而も多く自ら疑猜(八)して、妄に乖離(九)を生ずるが如き、骨肉親黨(一〇)の間に處ると雖も、而も常に孤獨なり。

之道非一。而以豫爲多。聖人爲戒。必於方盛之時。方其盛而不知戒。故狃安富。則驕侈生。樂舒肆。則紀綱壞。忘禍亂。則釁孽萌。是以浸淫。不知亂之至也。

復之六三。以陰躁處動之極。復之頻數。而不能固者也。復貴安固。頻復頻失。不安於復也。復善而屢失。危

㊀ 君主の家國を危からしむる大槪逸豫にあり、耽溺にあり

聖人の戒をなすは、必ず方に(一)盛なる時に於てす。其盛なるに方りて戒を知らず。故に安富に狃るゝときは、則ち驕侈生ず。舒肆(二)を樂むときは、則ち紀綱(三)壞る。禍亂を忘るゝときは、則ち釁孽(四)萌す。是れ浸淫(五)するを以て、亂の至ることを知らざるなり。

㊀ 方に盛なるときは、將に衰へんとするのきざしなれば也　㊁ 心ゆるみてほしいまゝなること　㊂ 法度　㊃ すきができてわざはひの芽が出ること　㊄ しみわたる

(一)復の六三は、陰躁(二)を以て動の極に處る。(三)復すること頻數にして、固きこと能はざる者なり。復は安固(四)なるを貴ぶ。頻(五)に復し頻に失するときは、復に安ぜず。善に復して屢〻失するは、危きの道なり。聖人は其善に遷るの道を開き、其復するを與して、其屢〻失するを危む。故に厲けれども咎なしといふ。頻に失するを以て其復するを戒む(六)べからず。(七)頻に失すれば則ち危しとなす。屢〻復する

不レ失レ道。而喪敗者一也。

人之於二豫樂一。心說レ之。故遲遲。遂至二於耽戀不レ能レ已也。豫之六二。以二中正一自守。其介如レ石。其去之速。不レ俟レ終日。故貞正而吉也。處レ豫。不レ可二安且久一也。久則溺矣。如レ二。可レ謂二見レ幾而作者一也。蓋中正故。其守堅。而能辯之早。去之速也。

盛なるもの亡び敗る、に至るは皆徳善の道を失ふによるとの意

人の豫樂(一)に於ける、心之を說ぶ。故に遲遲(二)として、遂に耽戀して已むこと能はざるに至る。(三)豫の六二は、中正を以て自ら守る。其れ介(四)として石の如し。(五)其去ることの速かなる、日を終ふるを俟たず。故に貞正にして吉なり。豫に處ること、安く且つ久しかるべからず。久しければ則ち溺る。(六)二(七)の如き、幾を見て作つ者といふべし。蓋し中正なるが故に、其守ること堅くして、能く辯(八)ずること早く、去ること速かなり。

(一)豫はよろこび、樂はたのしみ　(二)ゆる〱として、つひにふけりおぼれて止みがたきに至る　(三)易の豫の卦　(四)介は堅確の義、又ひとりだちの貌　(五)其耽戀の不可なることを知らば、之を去るの速かなる、日を終るを俟たずと也　(六)耽戀しておぼるゝ也　(七)六二を指す、幾はきざし、作は其居る所をたつ也　(八)義理の辨

人君致二危亡一

(一)人君危亡を致すの道一にあらず。而も豫を以て多しとなす。

濂溪先生曰。仲由喜レ聞レ過。令名無レ窮焉。今人有レ過。不レ喜二人規一。如三護レ疾而忌二レ醫。寧滅二其身一。而無レ悟也。噫。

伊川先生曰。德善日積。則福祿日臻。德踰二於祿一。則雖レ盛而非レ滿。自レ古隆盛未レ有二

卷之十二

警戒類　凡三十三條

濂溪先生曰く、（一）仲由は過を聞くことを喜んで、（二）令名窮りなし。今の人過あれば、（三）人の規すことを喜ばず、疾を護りて醫を忌むが如し。寧ろ其身を滅して悟ることなし。噫。

（一）仲由字子路、孔子の弟子たり　（二）よき名　（三）良藥口に苦がしの類なり、故に病をまもりて醫を忌みきらふにたとふ

伊川先生曰く、德善日に積めば、則ち福祿日に臻る。（一）德、祿に踰ゆるときは、則ち盛なりと雖も而も滿つるにあらず。（二）古より隆盛の、未だ道を失はずして、喪敗する者あらざるなり。

（一）德行多きに比し祿少きは、家道盛なりとも尚は未だ十分に滿ちたりとはいふべからず　（二）古來一國一家の隆

非二惟君心一。至二于朋游學者之際一。彼雖二議論異同一。未レ欲二深較一。惟整二理其心一。使レ歸二之正一。豈小補哉。

一 朋友の間交は學窓の同游との交際上、彼の議論、我と異同ありとしても、敢て深く比較するなどのことはなさず、其心術を整理して正に歸せしめんこと、わづかなる補ひにはあらじと也

人之才足二以有ㇾ爲。但以下其不上ㇾ由二於誠一。則不ㇾ盡二其才一。若ㇾ曰二勉率而爲ㇾ之。則豈有ㇾ由ㇾ誠哉。

㈠ も一つにまとまりたる牛の形として目に映ぜずと也 ㈡ つとめてしたがひて學を爲すと云ふばかりにて、誠を用ふることなしと也

古之小兒。便能敬ㇾ事。長者與ㇾ之提攜。則兩手奉二長者之手一。問ㇾ之。掩ㇾ口而對。蓋稍不ㇾ敬ㇾ事。便不二忠信一。故敎二小兒一。且先二安詳恭敬一。

古の小兒は、便ち能く事を敬す。(一)長者之と提携するときは、則ち兩手に長者の手を奉げ、之に問ふときは、口を掩うて對す。(二)(三)蓋し稍事を敬せずんば、便ち忠信ならず。故に小兒を敎ふるには、且く安詳恭敬を先にす。(四)

㈠ つゝしむ ㈡ 手をたづさへてゆくなり ㈢ 答ふ ㈣ 氣をやすらかに持ち、心をつまびらかにし、うやまひつゝしむ、即ち軽卒ならず、傲慢ならず、是れ忠信の本なり

孟子曰。人不ㇾ足二與適一也。政不ㇾ足二與閒一也。唯大人爲三能格二君心之非一。

孟子曰く、人與に適むるに足らず、政與に閒るに足らず、唯だ大人のみ能く君心の非を格すことをなすと。惟だ君心のみにあらず。朋游學者の際に至るも、(一)彼れ議論異同ありと雖も、未だ深く較べんことを欲せず。惟だ其心を整理して、之を正に歸せしむ。豈に小補ならんや。

學記曰。進而不レ顧ニ其安一。使下人不中由ニ其誠一。教レ人不レ盡ニ其材一。人未レ安レ之。又進レ之。未レ喩レ之。又告レ之。徒使ニ人生ニ此節目一。不レ盡レ材。不レ顧レ安。不レ由レ誠。皆是施之妄也。教レ人至難。必盡ニ人之材一。乃不レ誤レ人。觀ニ可レ及處一。然後告レ之。聖人之明。直若ニ庖丁之解ヒ牛。皆知ニ其隙一。刃投ニ餘地一。無ニ全牛一矣。

(一)學記に曰く、(二)進めて其安ずることを顧みず、人をして(三)其誠を由ひざらしめ、人を教へて(四)其材を盡さずと。(五)人未だ之に安ぜざるに、又之を進め、未だ之を喩らざるに、又之を告ぐれば、徒らに人をして此節目を生ぜしめん。材を盡さず、安ずるを顧みず、誠を由ひざらしむるは、皆是れ(六)施すことの妄なるなり。人を教ふること至つて難し。必ず人の材を盡して、乃ち人を誤らしめず、(七)及ぶべき處を觀て、然して後に之に告ぐ。聖人の明は、直に(八)庖丁の牛を解くが若し。皆其隙(九)を知り、刃を餘地に投じて、(一〇)全牛なし。人の才は以て爲すことあるに足れり。但だ其の誠を由ひざるを以て、則ち其才を盡さず。(一一)勉率して之を爲すといふが若きは、則ち豈に誠を由ふることあらんや。

(一) 禮記の學記をいふ (二) 學業をひたすらに進めて、弟子の安んずるにいとまなきをいふ (三) 工夫をあらはに言ひ聞えて心の力を用ひざらしむるをいふ (四) 其才のはたらくまゝに工夫をなさしめざると (五) 以下敎へ方のよろしからざるを云ふ、(節目) 節目とは木のふしめにて事端の多きにたとふ (六) 學を施すことの妄なるを云ふ (七) 爲し得べき處 (八) 庖丁はくりやの男、其牛を解き肉を切るに妙を得たる者の事莊子に出づ (九) 骨と肉とのつがひ (一〇) 刃を入るべき筋肉のすきまを知り、その餘地に刃をうちいれて切解く、これに熟して後は、何れの牛を見て

者須是深思之。思之不得。然後爲他說便好。初學者。須是且爲他說。不然非獨他不曉。亦止人好問之心也。

横渠先生曰。恭敬撙節。退讓以明禮。仁之至也。愛道之極也。己不勉明。則人無從倡。道無從弘。教無從成矣。

に說くべし。然らずんば、獨り他の曉らざるのみにあらず、亦人の問ふことを好むの心をも止めん。

(一) 憤とは通ぜんことを求めて未だ通ぜざる心の意、啓は其意をひらく (二) 悱とは言はんと欲して未だ能はざるの貌、發は其辭を達するをいふ (三) 憤悱を待たずして遽にこれを啓發するときは、未だ嘗て深く思はず、其の之を受くるや必ず淺し、已に得る所なし、其之を聽くや亡ふが如し (四) 憤悱の餘りに啓發するときは、思深く力窮りて悠爾として得る所あり、必ず沛然として通達す (五) 水のながるゝ貌、事理に通達するにたとふ (六) 深く思はしめて彼尙は得る所あらざる時 (七) 彼の爲に說かば便宜ならんとの意 (八) 初學の者には且らく彼が爲に說きさとし得しめよ、然らざれば單に彼の曉らざるのみならず、亦彼の問を好む心をも抑止するに至らんと也

横渠先生曰く、恭敬(一)にして節に撙き(二)、退讓(三)にして以て禮(四)を明かにするは、仁の至りなり、愛道の極なり。己勉明(五)せざれば、則ち人從つて倡(六)ふことなく、道從つて弘むることなく、教從つて成ることなし。

(一) うやまひつゝしむ、あなどりたかぶらぬこと (二) 節約におもむく、おごりをきはめぬと (三) しりぞきゆづる、へりくだると (四) 恭敬は禮の本、撙節退讓は禮の文、君子これに從事するときは、視聽言動の間、天理流行し人欲消盡して心德全し、是れ仁の至り也、愛の極み也 (五) 勉めて禮を明かにすること (六) 衆人をひきゐ導む

稚。皆習ニ聞其說一。而曉ニ其義一。故能興ニ起於詩一。後世老師宿儒。尚不レ能レ曉ニ其義一。怎生責ニ得學者一。是不レ得レ興ニ於詩一也。古禮既廢。人倫不レ明。以至レ治レ家。皆無ニ法度一。是不レ得レ立ニ於禮一也。古人有下歌詠以養ニ其性情一。聲音以養ニ其耳目一。舞蹈以養中其血脈上。今皆無レ之。是不レ得レ成ニ於樂一也。古之成レ材也易。今之成レ材也難。

其耳目を養ひ、舞蹈以て其血脈を養ふことあるも、今は皆これなし。是れ樂に成ることを得ざるなり。古の材(九)を成すことは易く、今の材を成すことは難し。

(一) 敎化行はれず、道天下に明かならざるが爲に、多少才ある者も、終に成就する能はず (二) 古人學を爲すの道程 (三) 古人の詩は今人の歌曲と同樣 (四) 市井の小兒といへども皆學說を聞いて、其義に通曉せり (五) 學殖ある儒者 (六) 倫理 (七) のり (八) 古の歌詠は性情の貞正を養ひ、聲音は耳目の聰明を養ひ、舞踏は心暢氣和の血脈を養ふ、今世全く相反す、是れ樂に成らざる所以也 (九) 人材

孔子敎レ人。不レ憤不レ啓。不レ悱不レ發。蓋不レ待ニ憤悱一而發。則知レ之不レ固。待ニ憤悱一而後發。則沛然矣。學

孔子の人を敎ふる、憤(一)せざれば啓せず、悱(二)せざれば發せず。蓋し憤悱(三)を待たずして發するときは、則ち之を知ること固からず(四)、憤悱を待つて而して後に發するときは、則ち沛然(五)たり。學者須らく是れ深く(六)之を思ふべし。之を思うて得ず(七)、然して後に他の爲に說かば便ち好しからん。初學者(八)には、須らく是れ且つ他の爲

方仕。中間自有二十五年學。又無利可趨。則所志可知。須去趨善。便自此成德。後之人自童稚間。已有汲汲趨利之意。何由得向善。故古人必使四十而仕。然後志定。只營衣食却無害。惟利祿之誘。最害人。

(一) 材の敎ふべき者を擇みて學に入らしめ、その敎ふべからざる者は復歸して農業を營ましむ、是に於て士と農とわかる (二) 凡ての學費をいふ (三) 出でゝ官吏となる (四) 童子幼稚 (五) 衣食足らざるが故 營むものは其足るに至つて止まる、故に害なし、利祿の榮に誘はるゝ者は根本已に誤る、故に最も害ありとなす、本註に云く「人養あれば便ち方に志を學に定む」

天下有多少才。只爲道不明於天下。故不得有所成就。且古者興於詩。立於禮。成於樂。如今人怎生會得。古人於詩。如今人歌曲一般。雖閭巷童

(一)天下多少の才あるも、只だ道天下に明かならざるがため、故に成就する所あることを得ず。且つ(二)古は詩に興り、禮に立ち、樂に成る。今の人の如き怎生ぞ會得せん。(三)古人の詩に於けるは、今人の歌曲の如きと一般なり。(四)閭巷の童稚と雖も、皆其說を習ひ聞いて、其義を曉る。故に能く詩に興起す。後世老師(五)宿儒も、尚ほ其義を曉ること能はず。怎生ぞ學者を責め得ん。是れ詩に興ることを得ざるなり。古禮既に廢れて、(六)人倫明かならず。以て家を治むるに至るまで、皆(七)法度なし。是れ禮に立つことを得ざるなり。(八)古人は歌詠以て其性情を養ひ、聲音以て

說二下ㇾ帷講誦一。猶未二必說ㇾ書。

古者八歲入二小學一。十五入二大學一。擇二其可ㇾ教者一聚ㇾ之。不肖者復二之農畝一。蓋士農不ㇾ易ㇾ業。既入ㇾ學。則不ㇾ治ㇾ農。然後士農判。在ㇾ學之養。若二士大夫之子一。則不ㇾ慮ㇾ無ㇾ養。雖二庶人之子一。既入ㇾ學則亦必有ㇾ養。古之士者。自二十五一入ㇾ學。至二四十一

ることなければ、いよ〳〵淺薄のものとなる　(四) 漢の董仲舒が帷を下して講誦したる故事、それも必ずしも書を講說したるにてはなく、門人共々に講誦せしめし也、口耳の傳は玩索に如かざるを云ふ

古者八歲にして小學に入り、十五にして大學に入る。其才の教ふべき者を擇びて之を聚め、不肖なる者は之を農畝に復す。蓋し士農、業を易へず。既に學に入るときは、則ち農を治めず。然して後士農判る。(一)學に在るの養、(二)士大夫の子の若きは、則ち養なきことを慮らず。庶人の子と雖も、既に學に入るときは、則ち亦必ず養あり。古の士は、十五より學に入り、四十に至りて方に仕ふ。(三)中間自ら二十五年の學あり。又利の趨くべきなし。則ち志す所知るべし。須らく去つて善に趨くべし。便ち此れより德を成す。後の人は、(四)童稚の閒より、已に汲汲として利に趨くの意あり。何に由つてか善に向ふことを得ん。故に古人は必ず四十にして仕へしむ。然して後志定まる。只だ(五)衣食を營むことは却つて害なし。惟だ利祿の誘は、最も人を害す。

是教以二聖人事一。先傳後倦。君子教レ人有レ序。先傳以二小者近者一。而後教以二大者遠者一。非下是先傳以二近小一。而後不上レ可レ教以二遠大一也。

㈠ 曲折の文、あざわかざるは誠なり、聖人无妄の道なり

(二)先に傳へ後に倦まんと。君子の人を教ふること序あり。先づ傳ふるに小なる者近き者を以てし、而して後教ふるに大なる者遠き者を以てす。是れ先づ傳ふるに近小を以てし、而して後教ふるに遠大を以てせざるにあらず。

㈠ 子游が子夏の門人を譏る言を聞いて、子夏これを非なりとして云ひたる語を引く

伊川先生曰。說レ書必非二古意一。轉使二人薄一。學者須三是潛レ心積レ慮。優游涵養。使二之自得一。今一日說盡。只是教得薄。至レ如三漢時

伊川先生曰く、(一)書を說くに、必ず古意にあらざれば、轉〻人をして薄からしむ。(二)學者須らく是れ心を潛め慮を積み、優游涵養して、之をして自得せしむべし。(三)今一日に說き盡さば、只だ是れ教へ得て薄からん。(四)漢の時帷を下して講誦すと說くが如きに至りても、猶ほ未だ必ずしも書を說かず。

㈠ 書を說くには必ず古人の意を祖述すべし、然らざれば人をして得る所薄からしむる也 ㈡ 深く念を入れてゆるやかにをしへみちびき、自ら會得するやうさせよ ㈢ 一氣に說きつくしては、教へるといふのみにて、自得す

易ㇾ曉。欲丙別作ㇾ詩。略言下敎ニ童子一。洒掃應對。事ㇾ長之節上。令乙朝夕歌丙之。似ㇾ當ㇾ有ㇾ助。

子厚以ㇾ禮敎ニ學者一。最善。使下學者先有中所ニ據守上。

（一）子厚、禮を以て學者を敎ふ。最も善し。學者をして先づ據つて守る所あらしむ。

（一）張橫渠の字

語ニ學者一以下所見未ㇾ到之理上。不三惟所ㇾ聞不ニ深徹一。反將ㇾ理低看了。

學者に語るに、（一）所見未だ到らざるの理を以てすれば、惟だ聞く所深く徹らざるのみならず、反つて理を將つて低く看了る。

（一）彼の見地未だ到らざるが故に、徹底せずして却つて理を推して低下に看了す

舞射便見ニ人誠一。古之敎ㇾ人。莫ㇾ非ㇾ使ニ之成ㇾ已。自ニ洒掃應對上。便可ㇾ到ニ聖人事一。

（一）舞射は便ち人の誠を見る。古の人を敎ること、之をして已を成さしむるにあらずといふことなし。洒掃應對の上よりして、便ち聖人の事に到るべし。

（一）舞の拍子にあたり、射の的にあたるは心の誠よりす、古人これを敎へて其人の心を專一ならしむ、已の誠を成さしむる方法也

自ニ幼子常視ㇾ無ㇾ誑以上。便

（一）幼子には常に誑くことなからんことを視すといふより以上は、便ち是れ敎ふるに聖人の事を以てす。

數之類。皆言。劉彝善治ニ水利一。後累爲ㇾ政。皆興ニ水利一有ㇾ功。

凡立ㇾ言欲下涵ニ蓄意思一。不上ㇾ使ニ知ㇾ德者厭。無ㇾ德者惑一。

凡そ言を立つるには、意思を涵蓄して、徳を知る者をして厭き、徳なき者をして惑はしめざらんことを欲す。

(一)言論を立て、他に示す　(二)意味を多くふくむ、涵はひたす蓄はたくはふ

敎ㇾ人未ㇾ見ニ意趣一。必不ㇾ樂ㇾ學。欲ニ且敎ニ之歌舞一。如ニ古詩三百篇一。皆古人作ㇾ之。如ニ關雎之類一。正ㇾ家之始。故用ニ之鄕人一。用ニ之邦國一。日使ニ人聞一ㇾ之。此等詩。其言簡奧。今人未ㇾ

人を敎ふるに、未だ意趣を見ざれば、必ず學ぶことを樂はず。且つ之に歌舞を敎へんと欲す。古詩三百篇の如きは、皆古人之を作れり。關雎の類の如きは、家を正すの始なり。故に之を郷人に用ひ、之を邦國に用ひて、日に人をして之を聞かしむ。此等の詩は、其言簡奥にして、今の人未だ曉り易からず。別に詩を作りて、略〻童子に敎ふる、洒掃應對、長に事ふるの節を言つて、朝夕之を歌はしめんことを欲す。當に助けあるべきに似たり。

(一)意味、趣味、おもしろみ　(二)詩の篇名、文王の妃が、よく家を治めて德化したるをよめり　(三)言簡にして而も意ふかく

得レ令レ作ニ文字一。子弟凡百玩好。皆奪レ志。至ニ於書札一。於ニ儒者事一最近。然一向好著。亦自喪レ志。如ニ王虞顏柳輩一。誠爲ニ好人一則有レ之。嘗見レ有ニ善レ書者知レ道否。平生精力。一用ニ於此一。非ニ惟徒廢ニ時日一。於レ道便有ニ妨處一。足レ知レ喪レ志也。

喪ふ。王(六)・虞・顏・柳の輩の如き、誠に好人(七)たることは則ち之あり、嘗て書を善くする者の道を知ることあるを見るや否や。平生の精力、一に此に用ふ。惟れ徒(八)らに時日を廢つるのみにあらず、道に於て便ち妨ぐる處あり。志を喪ふことを知るに足れり。

㊀ 心かろくして才のまはるもの ㊁ 經學は六經なり、念書は此等の經書をそらんずるなり ㊂ すきごと、好事 ㊃ 書は書法、札は書簡 ㊄ ひたすらにすきこのむ ㊅ 王羲之・虞世南・顏眞卿・柳公權のともがら ㊆ よき人 ㊇ 一事一藝のために日も亦足らざる也

胡安定在ニ湖州一。置ニ治道齋一。學者有下欲レ明ニ治道一者上。講ニ之於中一。如ニ治民。治兵。水利。算

胡安定湖州に在りしとき、治道齋(一)を置く。學者治道を明かにせんと欲する者あれば、之を中に講ず。治民・治兵・水利・算數の類の如し。嘗て言ふ、劉彝(二)善く水利を治むと。後累(三)に政をなすに、皆水利を興して功あり。

㊀ 政治學堂 ㊁ 劉彝字執中、胡の治道齋に學ぶ ㊂ 彝たびたび政を爲す

之識。甚殊邈也。門人弟子既親炙。而後益知㆓其高遠㆒。既若レ不レ可レ及。則趨望之心怠矣。故聖人之教。常俯而就レ之。事レ上臨レ喪。不㆓敢不㆒レ勉。君子之常行。不レ困㆓於酒㆒。尤其近也。而以レ己處レ之者。不㆘獨使㆗夫資之下者。勉思企及㆖。而才之高者。亦不㆔敢易㆓乎近㆒矣。

望の心怠る。故に聖人の教は、常に俯して之に就く。(四)上に事へ喪に臨みて、敢て、勉めずんばあらざるは、君子の常行なり。酒に困れざるは、尤も其近きなり。而して己を以て之に處る者は、獨り夫の資の下れる者をして、勉思企及せしむるのみならずして、才の高き者も、亦敢て近きを易にせず。

(一) はるかに異なれる　(二) したしみちかづく、直接に敎を受くるをいふ　(三) とても及ばじと觀念するときは、　(四) 以下論語を引く、常行は常に行ふべきこと也との意、酒にみだれざるは尤も淺近の行爲なり、聖人己を以てこれに處り「我これをよくすることなし」と言ひて、天資の卑下せる者を勉めて思ひ企て及ばしむるに止めず、才智高き者も亦此の淺近の事だにゆるがせにさせじとすと也

明道先生曰。憂㆓子弟之輕俊者㆒。只教以㆓經學念書㆒。不レ

明道先生曰く、子弟の輕(一)俊なる者を憂へば、只だ教ふるに經學念書(二)を以てして、文字を作らしむることを得ざれ。子弟凡百の(三)玩好は、皆志を奪ふ。書札に至(四)りては、儒者の事に於て最も近し。然れども(五)一向に好著すれば、亦自ら志を

於内。衆口辨言鑠於外。欲其純完不可得也。

觀之上九曰。觀其生。君子無咎。象曰。觀其生。志未平也。傳曰。君子雖不在位。然以人觀其德。用爲儀法。故當自愼省。觀其所生。常不失於君子。則人不失所望。而化之矣。不可以不在於位故。安然放意。無所事也。聖人之道。如天然。與衆人

(一)観の上九に曰く、其生を観る。君子なれば咎なし。象に曰く、其生を観るとは、志未だ平ならざるなり。傳に曰く、(二)君子位にあらずと雖も、然も人其德を観て用つて儀法となすを以て、故に當に自ら愼省して、其の生ずる所を観るべし。(三)常に君子たるを失せざれば、則ち人望む所を失せずして、之に化す。(四)位にあらざるを以ての故に、安然として意を放にして、事とする所なくんばあるべからず。

(一)易の觀卦、生とは自己より出づる所の言行をいふ、志未だ平ならずとは、言行を觀じて缺くる所なしとは思ひ定めぬをいふ (二)君子は無位なる時も衆人其德を仰ぎ望みて、儀法(のり)となすが故に、自ら省み愼みて其言行を觀すべし (三)常々君子の言行を保つときは、衆人もいよいよなつきて德に化せらるゝ也 (四)無位の地にあるものなればとて、安然と意をほしいまゝにして事を務めざるやうにては不可と也

聖人の道は、天の如く然り。衆人の識と、甚だ(一)殊邈なり。門人弟子既に(二)親炙して、而して後益々其高遠なるを知る。(三)既に及ぶべからざるが若くなれば、則ち趨

惡。自至其中而止矣。

伊川先生曰。古人生子。能食能言。而教之。大學之法。以豫爲先。人之幼也。知思未有所主。便當以格言至論。日陳於前。雖未曉知。且當薫聒使盈耳充腹。久自安習若固有之。雖以他言惑之。不能入也。若爲之不豫。及乎稍長。私意偏好生

㊂ 聖人の敎は、人をして其趨を善に嚮へ中に至りて止まらしむ

伊川先生曰く、古人の子を生むや、能く食し能く言ひて、之を敎ふ。大學の法は、豫を以て先となす。人の幼きや、知思未だ主とする所あらず。便ち當に格言至論を以て、日に前に陳ぶべし。未だ曉り知らずと雖も、且つ當に薫聒して、耳に盈て腹に充たしむべし。久しうして自ら安習せば、之を固有するが若くならん。他言を以て之を惑はすと雖も、入ること能はず。若し之をなすに豫せざれば、稍長ずるに及びて、私意偏好内に生じ、衆口辨言外に鑠かす。其純完ならんことを欲すとも、得べからず。

㊀ 能く食するに至れば右手を以てすることを敎へ、能く言ふに至れば唯諾を敎ふ ㊁ あらかじめ也 ㊂ 幼き時は知る、思ふの二つ、未だ主とする所なく、導き次第にて何れにも向ふべし、さとりあきらめること甚だ少しと雖も、日に善き言行を見聞せしめて腦裏に浸潤せしめ置くべし、久しき間に自然に習ひおぼえて、生れ付き有するごとくならん、先入主となりては他言容易に入るべからず、豫め此事をなさゞれば、稍長じて我儘勝手の性となり、衆人の言舌に惑はさるべし。薫はくすぶる、聒はかしましき意にて、薫陶と略同じ、純完はもつぱらまつたきの意

濂溪先生曰。剛善爲レ義。爲レ直。爲レ斷。爲二嚴毅一。爲二幹固一。惡爲レ猛。爲レ隘。爲二強梁一。柔善爲レ慈。爲レ順。爲レ巽。惡爲二懦弱一。爲二無斷一。爲二邪佞一。惟中也者和也。中レ節也。天下之達道也。聖人之事也。故聖人立レ教。俾下人自易二其

卷之十一

教學類　凡二十一條

濂溪先生曰く、(一)剛、善なるを義となし、直となし、斷となし、嚴毅となし、幹固となす。(二)惡なるを猛となし、隘となし、強梁となす。(三)柔、善なるを慈となし、順となし、巽となす。(四)惡なるを懦弱となし、無斷となし、邪佞となす。惟だ(五)中は、和なり、節に中るなり、天下の達道なり、聖人の事なり、(六)故に聖人の教を立つるや、人をして自ら其惡を易へて、自ら其中に至らしめて止む。

(一) 剛の善なるもの、義は節義、直は正直、斷は決斷、嚴毅はいかめしくたけき、幹固はたゞしくかたき意 (二) 剛の惡なるもの、猛はたけき、隘は度量のせまき、强梁は手ごはくして手に合はぬことをいふ (三) 柔の善なるもの、慈はいつくしみふかき、順はさからはざる、巽はへりくだりてゆづるの意 (四) 柔の惡なるもの、懦弱はつたなくよわき、無斷は決斷せざる、邪佞はゆがみてねぢけたるの意、皆氣稟の剛柔善惡に分る、惡しきもの固より正ならず、善きものも亦未だ必ずしも皆中を得ず (五) たゞ中は和にして節にあたる、これ天下に通達するの道なり

可レ取レ益。絆レ己不ニ出入一。一益也。授レ人數數。己亦了ニ此文義一。二益也。對レ之必正ニ衣冠一。尊ニ瞻視一。三益也。常以ニ因レ己而壞ニ人之才一爲レ戒。則不ニ敢墮一。四益也。

り。人に授くること數數なれば、己も亦此文義を了す。二の益なり。之に對して必ず(三)衣冠を正しうし、(四)瞻視を尊くす。三の益なり。常に(五)己に因つて人の才を壞らんことを以て戒となすときは、則ち敢て墮らず。四の益なり。

(一) 己に益を取り得べし　(二) 己は小童にかゝはりひかれて、居處をみだりに出入せざること　(三) 人に教ふることとしばしばなる中に、己も亦自然と文義に通曉すること　(四) 威儀をおとさゞること、他の見る目尊くなること　(五) 師なる己の非よりして、教へ子の才を損はんことを我が心の警へとなさんには、我が行ひを崩し墮ちじと也

消則有レ長。不レ消則病常在上。意思齷齪。無レ由レ作レ事。在古氣節之士。冒レ死以有レ爲。於レ義未二必中一。然非下有二志槩一者上莫レ能。況吾於二義理一已明。何爲不レ爲。

りごみすること (五)心ゆたかなれば、人のそしりわらふにも頓着せず、義理に順ひておもむきすゝむ (六)世間萬般の物を視るにも其道をかへ動かすをなし (七)消はへる(耗)の意 (八)義理の長ずると (九)惰と萎縮との患 (一〇)事にかゝづらひてひまなき貌 (一一)志氣と節操を貴ぶ士人 (一二)義理 (一三)志は志氣なり、槩は氣概なり

姤初六。羸豕孚二蹢躅一。豕方二羸時一。力未レ能レ動。然至誠在二於蹢躅一。得レ伸則伸矣。如三李徳裕處二置閹宦一。徒知二其帖息威伏一。而忽三於志不二忘逞一。照察少不レ至。則失二其幾一也。人敎二小童一。亦

(一)姤の初六、(二)羸豕蹢躅に孚あり。豕羸れたる時に方つて、力未だ動くこと能はず。然れども至誠蹢躅にあり。伸ぶることを得るときは則ち伸ぶ。(三)李徳裕の(四)閹宦を處置せしが如き、徒に其(五)帖息威伏することを知りて、(六)志忘逞せざることを忽にす、照察少しく至らず、則ち其幾を失す。

(一)易の姤卦 (二)羸豕はつかれてよわき家、蹢躅ははねをどること (三)唐武宗の相 (四)宮中につかはるゝ小臣、宦官 (五)帖息はしづまりやむ、威伏は威におそれしたがふ (六)志忘逞せずとは志たくましからんことを忘れず、いつか勢力を挽回して舊の如く威福を弄ばんとこゝろざすを云ふ、徳裕此事に心付かず、ゆるがせにして照察に一寸至らぬ所ありしによりて、其機を失ひきと也。照察云々を一般の理と解するも亦通ず

人小童を敎ふるにも、(一)亦益を取るべし。己を絆(二)して出入せざらしむ。一の益な

往有レ功也。今水臨ニ萬仞之山一。要レ下卽下。無ニ復凝滯之在ヒ前。惟知レ有ニ義理一而已。則復何回避。所ニ以心通一。

㊀易の坎卦、坎は險なり　㊁心通りて疑はざるときは、險を冒して邁進すべし、只だ義理あることを知れば、何ぞ險難を回避せんや

人所ニ以不ヒ能レ行レ己者。於ニ其所レ難者一則惰。其異レ俗者。雖レ易而羞縮。惟心弘。則不レ顧ニ人之非笑一。所レ趨義理耳。視ニ天下一莫ニ能移ニ其道一。然爲レ之。人亦未ニ必怪一。正以下在レ己者義理不レ勝ニ惰與ニ羞縮一之病上。

人の己を行ふこと能はざる所以は、其の難き所の者に於ては則ち惰り、其の俗に異なる者は、易しと雖も而も羞縮す。惟だ心弘ければ、則ち人の非笑を顧みず、趨く所は義理のみ。天下を視て能く其道を移すことなし。然して之をなすに、人亦未だ必ずしも怪まず。正に己にある者、義理勝たず、惰と羞縮との病、消するときは則ち長ずることあり、消せざるときは則ち病常にあるを以て、意思齷齪として、事を作すに由なし。在古の氣節の士は、死を冒して以て爲すことあり、義に於ては未だ必ずしも中らず。然れども志槩ある者にあらざれば能くすることなし。況や吾れ義理に於て已に明なれば、何爲れぞ爲さゞらん。

㊀毅然として自己を立て行ふ能はざるは　㊁勤めざること　㊂俗人の常になさゞること　㊃はぢらひてし

民。明道先生曰。使下民各得上輸二其情一。問レ御レ吏。曰。正レ己以格レ物。

横渠先生曰。凡人爲レ上則易。爲レ下則難。然不レ能レ爲レ下。亦未レ能レ使レ下。不レ盡二其情僞一也。大抵使レ人。常在二其前一。己嘗爲レ之。則能使レ人。

坎維心亨。故行有レ尚。外雖二積險一。苟處レ之心亨不レ疑。則雖レ難必濟。而

しめよ。吏を御(三)することを問ふ。曰く、己を正しうして以て物を格せ。

(一)治むること　(二)民情を上聞に達すること　(三)すべつかふこと、統御

横渠先生曰く、凡そ人上たることは則ち易く、下たることは則ち難し。然れども(一)下たること能はざれば、亦未だ下を使ふこと能はず。其情僞(二)を盡さゞればなり。大抵人を使ふには、常に其前にありて己嘗て之をなすときは、則ち能く人を使ふ。

(一)人を使ふことを喜び、人に事ふることを憚るは、常の情なり、人に事ふるの道を知つて、然る後人を使ふの道を知る、己嘗て人に事へざるときは、人を使ふに當りて必ず其情を盡す能はず　(二)情はまこと、僞はいつはり、事の實情をいふ

坎は維れ心亨る。故に行くときは尚ぶことあり。外積險なりと雖も、苟も之(一)に處るの心亨りて疑はざるときは、則ち難しと雖も必ず濟りて、往くに功あり。今水萬仭の山に臨む。下らんと要すれば卽ち下る。復凝滯の前にあるなし。惟だ義理あることを知るのみならば、則ち復何ぞ回避せん。心通る所以なり。

書二視ㇾ民如ㇾ傷四字一常曰顧常愧二此四字一。

伊川每ㇾ見三人論二前輩之短一。則曰。汝輩且取二他長處一。

劉安禮云。王荊公執ㇾ政。議ㇾ法改ㇾ令。言者攻ㇾ之甚力。明道先生嘗被ㇾ旨赴二中堂一議ㇾ事。荊公方怒二言者一。厲ㇾ色待ㇾ之。先生徐曰。天下之事。非二一家私議一。願公平ㇾ氣以聽。荊公爲ㇾ之媿屈。

劉安禮問ㇾ臨ㇾ

(一) 縣令　(二) 視民如傷の四字　(三) 明道の名の自稱

伊川は人の前輩(一)の短を論ずるを見る每に、則ち曰く、汝輩且つ他の長處を取れと。

(一) 先輩

劉安禮(一)云く、王荊公政を執りて、法を議し令を改む。言者(二)之を攻むること甚だ力む。明道先生嘗て旨(三)を被り、中堂に赴いて事を議す。荊公方(四)に言者に怒りしかば、色を厲まして之を待つ。先生徐に曰く、天下の事は、一家の私議にあらず。願はくは公氣を平にして以て聽けと。荊公之が爲に媿屈(五)す。

(一) 劉立之字安禮、程子の門人、荊公は王安石　(二) 論者、新法を非難攻擊す　(三) 旨は天子の命　(四) 荊公恰も論者の己を攻擊するを怒りし時なりしかば、明道も亦之を論すべきを思ひ色を厲まして明道に應對す　(五) はぢて我を折る

劉安禮民に臨む(一)ことを問ふ。明道先生曰く、民をして各〻其情(二)を輸すことを得

爲。非二甲爲一則
乙爲。
人無二遠慮一。必
有二近憂一。思慮
當レ在二事外一。
聖人之責レ人
也常緩。便見下
只欲二事正一無中
顯二人過惡一之
意上。
伊川先生云。
今之守令。唯
制二民之產一一
事。不レ得レ爲。其
他在二法度中一。
甚有二可レ爲者一。
患二人不一レ爲耳。
明道先生作レ
縣。凡坐處。皆

者なす、天下の事誰かは必ず爲すべき也、故に學者世務に通曉する事を要す

(一)人遠き慮なきときは、必ず近き憂あり。(二)思慮は當に事の外にあるべし。

(一)論語に出づ　(二)事に先ちて之を圖り、事の見ゆる所以外に慮を廻らせば患なし

聖人の人を責むるや常に緩し。便ち只だ事の正しからんことを欲して、人の(一)過惡を顯すの意なきを見る。

(一)あやまちと善ならざる事と

伊川先生云く、今の(一)守令、唯だ(二)民の產を制するの一事は、爲すことを得ず。其(三)他法度の中にありて、甚だ爲すべき者あり。人のなさゞることを患ふるのみ。

(一)守は知州事、令は知縣事　(二)民の產を制裁して、井田貢助の法を行ふことはなし得ず　(三)其他法度の爲すべきことも少からざれども、人の爲さゞるを患とすと也

明道先生(一)縣となりしとき、凡そ坐する處、皆(二)「民を視ること傷めるが如し」といふ四字を書す。常に曰く、(三)顥常に此四字に愧づと。

國子監自係臺省。臺省係朝廷官。外司有事。合行申狀。豈有臺省倒申外司之理。只爲從前人只計較利害。不計較事體。直得恁地。須看聖人欲正名處。見得名不正時。便至禮樂不興。是自然住不得。

學者不可不通世務。天下事。譬如一家。非我爲則彼

するの理あらんや。只だ從前(八)の人は只だ利害を計較して、事體を計較せざるが爲に、直に恁地なることを得たり。須らく聖人(九)の名を正さんと欲する處を看て、名の正されざる時は便ち禮樂興らざるに至ると道ふことを見得すべし。是れ自然に住まり得ず。

(一) つとむること (二) さし當りたる一個條 (三) 其事を做し得ざるあり (四) 朝廷の官吏が轉運司（州郡の稅金、米穀、夫役、運輸等を監督する役名）に申告する狀に押（かきはん）する例なれども、我は一向に署（名がき）せず (五) 國子監は官名（伊川は國子監教授なり）臺省は朝廷直屬の官 (六) 轉運司を指す (七) 朝廷直屬の官なる臺省よりして、外司なる轉運司に申狀するの理あらんやと也 (八) 從前の人は其利害をのみはかつて、肝腎の事體をはからざるが故に、かくのごとき矛盾がある (九) 聖人の名を正さんと欲する意を看取して、名分を正し事理の顚倒を矯むべしと也、名の正されざるときは、これを事に施して顚倒度なく、乖戾して和せず、禮樂何を以て興らん、此れ自然必至の勢也（論語の說を引く）

學者は世務に通ぜずんばあるべからず。天下の事は、(一)譬へば一家の如し。我れ爲すにあらざれば則ち彼なす。甲なすにあらざれば則ち乙なす。

(一) 天下の事も一家の事も、大小の差こそあれ、組立は同じきものなり、我せざれば彼なす、甲の者せざれば乙の

昌西湖。須臾客將云。有三一官員上書謁二見大賚。頤將爲有二甚急切公事一。乃是求レ知レ己。頤云。大賚居レ位。却不レ求レ人。乃使二人倒來求一レ己。是甚道理。夷叟云。只爲二正叔太執一。求薦章常事也。頤云。不レ然。只爲三曾有二不レ求者不一レ與。來求者與レ之。遂致レ人如レ此。持國便服。

來つて己を求めしむ。是れ甚の道理ぞ。夷叟云く、只だ正叔(六)太だ執れるが爲なり。(七)求薦章は常事なりと。頤云く、然らず。只だ曾て求めざる者には與へず、來り求むる者には之を與ふることあるが爲に、遂に人を致すこと此の如しと。持國便ち服す。

(一)韓維字持國　(二)今の世にては得難しとの意　(三)范純粹字は夷叟、文正公の子也　(四)河南の潁昌　(五)大位の人と云ふにひとし　(六)伊川の字、對稱也。あまり義を守り過ぐる故その怪しみある也との意　(七)自らを推薦さるゝやう求むる書。今の世に薦章を上るは尋常の事也と也

先生因言。今日供レ職。只第一件。便做二他底一不レ得。吏人押下申二轉運司一狀上。頤不二曾簽一。

先生因つて言ふ、今日職を供する(一)、只だ(二)第一件、便ち他底(三)を做し得ず。吏人(四)轉運司に申する狀に押す。頤は曾て簽せず。(五)國子監は自ら臺省に係り、臺省は朝廷の官に係る。(六)外司に事あらば、申狀を行ふべし。豈に(七)臺省倒つて外司に申

無レ人。豈是無レ時。

君實嘗問二先生一云。欲レ除二一人給事中一。誰可レ爲者。先生曰、初若泛論二人才一却可。今既如レ此、頤雖レ有二其人一。何可レ言、君實曰。出二於公口一。入二於光耳一。又何害。先生終不レ言。

先生云、韓持國服レ義最不レ可レ得。一日頤與二持國范夷叟一。泛二舟于潁

人の雖はんことを厭へば也 ㊁ 本註に云く「因つて少師學を擧り明道才を薦むるの事を言ふ」

君實嘗て先生に問うて云く、一人の給事中を除せんと欲す、誰か爲すべき者ぞ。先生曰く、初より若し泛く人才を論ぜば却つて可なり。今既に此の如し。頤其人ありと雖も、何ぞ言ふべき。君實曰く、公の口より出でゝ、光が耳に入る、又何ぞ害あらんと。先生終に言はず。

㊀ 司馬溫公。名は光 ㊁ 官名 ㊂ 任用 ㊃ 誰をか任用すべきとの意 ㊄ 初めより廣く人才を評論せられなば、却つて其人々の長所をも答へ得たらんに、今既に任用の意あることを打明けての質問に對しては、頤（自ら名を稱す）其人と思ひ當るものありても、言上すること能はずと也、其故は相公は人をえらみて任ずる役目あれど吾は下位の者にて與るべき所にあらずと也 ㊅ 貴君の口より出でゝ、光（自ら名を稱す）の耳に入るのみなれば

先生云く、韓持國が義に服する、最も得べからず。一日、頤、持國・范夷叟と舟を潁昌の西湖に泛ぶ。須臾にして客將た云ふ、一官員上書して大資に謁見するありと。頤將らく、甚だ急切の公事あらんと。乃ち是れ己を知らんことを求むるものなり。頤云く、大資位に居て、却つて人を求めず、乃ち人をして倒つて

下獨有功。便動了。謝安聞謝玄破苻堅。對客圍棋。報至不喜。及歸折屐齒。強終不得也。更如人大醉後。益恭謹者。只益恭謹。便是動了。雖與放肆者不同。其爲酒所動一也。又如貴公子位益高。益卑謙。只卑謙便是動了。雖與驕傲者不同。其爲位所動一也。然惟知道者。量自然宏大。不勉強而成。今人有所見卑下者。無他。亦是識量不足也。

と碁を圍む、報書を見て敢て喜色を表さず、事果て客歸るに及んで甚だ悦びて屐の齒を折りたるを覺えざりしことは、喜べるあまり其量を強ひ得ずして、此の體ありし也 (九) うや〳〵しげにつゝしむ (一〇) はしいまゝなる (一一) 身をひくくしへりくだる (一二) おごりたかぶる (一三) 見識の卑く下れる

人纔有意於爲公。便是私心。昔有人典選。其子弟係磨勘。皆不爲理。此乃是私心。人多言。古時用直不避嫌得。後世用此不得。自是

人纔に公（一）をなすに意あれば、便ち是れ私心なり。昔人選（二）を典るあり。其子弟磨勘に係るも皆理むることをなさず。此は乃ち是れ私心なり。人多く言ふ、古時（三）は直きを用ひて嫌を避け得ず、後世は此を用ふることを得ずと。自ら是れ人なきなり。豈に是れ時なからんや。

(一) ことさらに公ならんと思ふこと、已に私心を免れざる也 (二) 典選とは吏部の職名、役人の功勞を勘ふる役目也、磨勘とはかんがへをみがくの義にて、年毎に四たび其功勞を勘ふる時に、其榮進を奏する也、自分の子弟が磨勘に係れるにも拘らず、之ををさめて榮進の奏をなさず、此は已の子弟なるが故に、私情の爲に榮進せしめしと、

量。有鍾鼎之量。有江河之量。江河之量亦大矣。然有涯。有涯亦有時而滿。惟天地之量。則無滿。故聖人者。天地之量。聖人之量道也。常人之有量者。天資也。天資有量。須有限。大抵六尺之軀。力量只如此。雖欲不滿。不可得也。如鄧艾位三公。年七十。處得甚好。及因

ず。鄧艾(六)が三公に位する如き、年七十、處り得て甚だ好し。蜀を下すに因つて功あるに及び(七)、便ち動き了る。謝安(八)は謝玄が苻堅を破ると聞きしとき、客に對して碁を圍む、報至れども喜ばず。歸るに及んで屐齒を折る。強ふること終に得ず。更に人大醉の後、益〻恭謹(九)なる者の如き、只だ益〻恭謹なるは、便ち是れ動き了れるなり。放肆(一〇)なる者と同じからずと雖も、其の酒の爲に動かさるゝは一なり。又貴公子の位益〻高うして、益〻卑謙(一一)なるが如き、只だ卑謙なるは、便ち是れ動き了れるなり。驕傲(一二)なる者と同じからずと雖も、其の位の爲に動かさるゝは一なり。然して惟だ道を知る者は、量自然に宏大なり。勉強せずして成る。今の人の見る(一三)所卑下なる者あるは、他なし、亦是れ識量足らざればなり。

(一) 他の論旨を容るゝ氣象 (二) 度量 (三) 見識 (四) 斗は一斗、筲は竹器にして一斗二升をいる。釜は六斗四升をいれ、斛は十斗なり。鍾は十釜即ち六斛四斗をいる。江河は大なる川。以上皆量の大小にたとふ (五) うまれつき (六) 魏の人、大尉となり、年七十にして、治甚だあがりしも、蜀をうちし後其功をほこるに至れり (七) 漢より後は、丞相・大尉・御史大夫を總稱す (八) 晉の謝安、其姪謝玄が秦の苻堅と戰ひて破りたるを報じ來る、時に安客

過則歸レ己。善則唯恐レ不レ歸ニ於令一。積ニ此誠意一。豈有レ不三動ニ得人一。

過ちは己に歸し、善は令に歸すべし、此は是れ彼の歡心を迎へんとにはあらず、誠意を以て動かし、令を佐くるの職分を全うする也

問。人於ニ議論一。多欲レ直レ己。無ニ含容之氣一。是氣不レ平否。曰。固是氣不レ平。亦是量狹。人量隨レ識長。亦有ニ人識高。而量不レ長者一。是識實未レ至也。大凡別事人都強得。惟識量不レ可レ強。今人有ニ斗筲之量一。有ニ釜斛之

問ふ、人、議論に於て、多くは己を直くせんと欲して、含容の氣なし。是れ氣平ならざるや否や。曰く、固より是れ氣平ならず、亦是れ量狹し。人の量は識に隨つて長ず。亦、人、識高くして、量の長ぜざる者あり。是れ識實に未だ至らざるなり。大凡別事は人都て強ひ得るも、惟だ識量のみは強ふべからず。今の人には斗筲の量あるあり、釜斛の量あるあり、鍾鼎の量あるあり、江河の量あるあり。江河の量も亦大なり。然れども涯あり。涯あれば亦時ありて滿つ。惟だ天地の量は則ち滿ることなし。故に聖人は天地の量なり。聖人の量は道なり。常人の量ある者は、天資なり。天資の量あるは、須らく限あるべし。大抵六尺の軀、力量只だ此の如し。滿たざらんことを欲すと雖も、得べから

易。從容就義者難。

人或勸先生。以加禮近貴。先生曰。何不見責以盡禮。而責之以加禮。禮盡則已。豈有加也。

或問。簿佐令者也。簿所欲爲。令或不從。奈何。曰。當以誠意動之。今令與簿不和。只是爭私意。令是邑之長。若能以事父兄之道事之。

人或は先生に勸むるに、禮を近貴(一)に加へんことを以てす。先生曰く、何ぞ責めらるゝに禮を盡すを以てせずして、之を責むるに禮を加ふるを以てするや。禮盡(二)くるときは則ち已む、豈に加ふることあらんや。

(一)君の側近くに仕ふる貴き人　(二)吾を責むるに禮の足らざると云はずして、禮を加へよと云ふやと也、盡し禮は其節を盡して止む、之に過ぐるは君子の恥ぢてなさゞる所也

或ひと問ふ、簿(一)は令を佐くる者なり。簿の爲すを欲する所、令或は從はずんば奈何。曰く、當に誠意を以て之を動かすべし。今令と簿と和せざるは、只だ是れ私意を爭へばなり。令は是れ邑の長なり。若し能く父兄に事ふるの道を以て之に事へ(二)、過あるときは則ち己に歸し、善なるときは則ち唯だ令に歸せざらんことを恐れ、此誠意を積まば、豈に人を動かし得ざることあらんや。

(一)簿は主簿の役人、令は知縣事とて一縣の長也　(二)簿より見れば長上なり、父兄につかふるの道を以て事へ、

不下與二州縣一一體上。監司專欲三伺二察州縣一。州縣專欲二掩蔽一。不レ若推二誠心一。與レ之共治。有レ所レ不レ逮。可レ教者教レ之。可レ督者督レ之。至三于不二聽。擇二其甚者一去二一二一。使レ足三以警二衆可也。

は専ら掩蔽せんと欲す。若かじ、（二）誠心を推して、之と共に治めんには。（三）逮ばざる所あらば、教ふべき者は之を教へ、督すべき者は之を督し、聴かざるに至つて、其甚しき者を擇んで一二を去り、以て衆を警むるに足らしむれば可なり。

（一）地方を巡検する官吏、監察官　（二）互に誠心を披瀝して共々に治を圖らんに如かず　（三）至らざる所は教へ、さとすべきは教へ、正すべきはたゞし、聴入れざるものあらば、その甚しき一二の者を除きて、其他の衆人を警めよとなり

伊川先生曰。人惡二多事一。或人憫レ之。世事雖レ多。盡是人事。人事不レ教二人做一。更責二誰做一。

伊川先生曰く、（一）人多事を悪む、或人之を憫ふ。世事多しと雖も、盡く是れ人事なり。（二）人事人をして做さしめずんば、更に誰にか做すことを責めん。

（一）事端の繁多にして之に忙殺せらるゝを厭ふとなり　（二）人の事であつて見れば、人之を爲すにあらざれば誰がなすべきぞと也

感慨殺レ身者

感慨して身を殺すは易く、従容として義に就くは難し。

是篤實。

凡爲人言者。理勝則事明。氣忿則招拂。

居今之時。不安今之法令非義也。若論爲治。不爲則已。如復爲之。須於今之法度內。處得其當。方爲合義。若須更改而後爲。則何義之有。

今之監司。多

一 篤實なれば力量深く厚くして識量密かに固し、大事に任じてもあやまることなかるべし

凡そ人のために言ふもの、理勝つときは則ち事明かに、氣忿るときは則ち拂を招く。

一 人の爲に辯言を發するに、理義まさりて氣平かなれば、速く人さとりやすくして耳に入れど、はらだちげに言はんには、其理直しといへども戻り逆らふ心にもなるべしと也、拂はもとる

今の時に居て、今の法令に安ぜざるは、義にあらず。治を爲すことを論ずるが若き、爲さゞれば則ち已む、如し復之を爲さば、須らく今の法度の內に於て、其當れるものを處し得べし、方に義に合へりとなす。若し更改して後に爲すことを須ひば、則ち何の義かこれあらん。

一 法治の下に在つて、法令に安んぜざるは義にあらず、爲政を論じて自ら爲さゞるならば則ち已む、之を爲さんには、今の法度內にて其法度の宜しきに當れるものを處置し得る事が緊要なり、然らずして更改して後に爲すと云ふは、是れ義と云ふべからずと

今の監司は、多く州縣と一體ならず。監司は專ら州縣を伺察せんと欲し、州縣

而不ㇾ告二其過一。非ㇾ忠也。要ㇾ使三誠意之交通。在二於未ㇾ言之前一。則言出而人信矣。又曰。責ㇾ善之道。要ㇾ使二誠有ㇾ餘而言不ㇾ足一。則於ㇾ人有ㇾ益。而在ㇾ我者。無二自辱一矣。

自ら辱しめらるゝことなけん。

㊀ 未だ言出でぬ前に、我が誠意のあるところをまづ彼の心に交通せば、言出でゝ其人信ぜん ㊁ 過ちを責むるにも、言葉少くして誠の意あまりあらんには、其人感じ悟るの益あり、吾にしても辱めを受くることあらじ

職事不ㇾ可二以ㇾ巧免一。

職事巧を以て免るべからず。(一)

㊀ 臣として受けたる職事は巧智を用ひてごまかし免るゝ事あるべからず

居二是邦一不ㇾ非二其大夫一。此理最好。

是の邦に居ては其大夫を非らずと。(一)此理最も好し。

㊀ 荀子に出づ、下としては上をそしらぬこと、禍を免るゝ道也

克勤二小物一最難。

克く小物を勤むるは最も難し。(一)

㊀ 細かなる事なりとておろそかにせぬ事、大事よりも難しと也、事に大小ありとも理に大小なし、細事なりとて心の働きは全體に及ぶ、細事におこたる者は必ず大事にも怠りあるべきぞ

欲ㇾ當二大任一。須二

大任に當らんと欲せば、須らく是れ篤實なるべし。(一)

處人事。曰。某非下不レ欲三周二旋人事一者上。曷嘗似二賢急迫一。

安定之門人。往往知二稽レ古愛レ民矣。則於レ爲レ政也何有。

門人有レ曰。吾與レ人居。視二其有レ過而不レ告。則於レ心有レ所レ不レ安。告レ之而人不レ受。則奈何。曰。與レ之處

るに似ん。

(一) あわて丶いそがしげなる　(二) あまたある人事を處置しおはせんとなり　(三) 吾もの意、吾も亦人事に周旋することあれども、貴君のやうにいそがしげなるに似ず、たとひ如何程事多くとも順序を立て誠意をはかりてなせば、いたづらにあわていそぐにも及ばず　(四) 貴君といふ意

(一)安定の門人、往往古に稽へ民を愛することを知れり。則ち政を爲すに於て何かあらん。

(一) 胡安定　(二) 稽古は爲政の法也、愛民は爲政の本也、此の二事を知るときは政を爲すに何の難きことあらんとなり

門人曰へるあり、吾れ人と居るとき、其の過あるを視て告げざるときは、則ち心に於て安んぜざる所あり。之を告げて人受けざるときは、則ち奈何。曰く、之と處て其過を告げざるは忠にあらず。(一)誠意の交通をして、未だ言はざる前にあらしめんことを要せば、則ち言出でゝ人信ぜん。又曰く、(二)善を責むるの道、誠餘りありて言足らざらしめんことを要せば、則ち人に於て益ありて、我にあつては、

德量如レ此。

因論二口將レ言而囁嚅一云。若二合レ開レ口時一。要二他頭一也。須レ開レ口。須下是聽二其言一也厲上。

須下是就二事上一學上。蠱振レ民育レ德。然有レ所レ知後。方能如レ此。何必讀レ書然後爲レ學。

先生見二一學者忙迫一。問二其故一。曰。欲レ了二幾

因つて口將に言はんとして囁嚅(一)すといふを論じて云く、口を開くべき時の若き(二)は、他の頭を要むることをも、また須らく口を開くべし。須らく是れ其言を聽けば厲しかるべし。

(一) ものを言はんとしていひはゞかる貌 (二) 言ふべきことある時は、人の頭をもとむることをも、いひ出すべしとの意。本註に云く「荊軻の樊於期に於けるが如し」荊軻燕の爲に秦の始皇を刺さんとして、樊於期に對し其首を求めしこと史記に出づ、此事道理には適はざれど、言ひ難き事をも猶は言ひたる例にひける也

須らく是れ事(一)上に就て學ぶべし。蠱(二)は民を振ひ德を育ふ。然れども知る所(三)ありて後、方に能く此の如し。(四)何ぞ必ずしも書を讀んで然る後學ぶとなさんや。

(一) 事に就いて能く學ばざれば、力を用ふる際に於て知らざること多かるべし (二) 易の蠱の卦 (三) 事を知りて後行ふ (四) 書を讀んで理を窮むること固より先務なれども、

先生一學者(一)の忙迫なるを見て、其故を問ふ。曰く、幾處(二)の人事を了せんと欲す。曰く、(三)某人事に周旋することを欲せざる者にあらず。曷ぞ嘗て賢(四)の急迫な

明道先生與二吳師禮一談二介甫之學錯處一。謂二師禮一曰。爲レ我盡達二諸介甫一。我亦未二敢自以爲一レ是。如有レ說願往復。此天下公理無二彼我一。果能明辨不レ有レ益二于介甫一。則必有レ益二于我一。

明道先生吳師禮と、介甫(一)の學の錯れる處を談ず。師禮に謂つて曰く、我が爲に盡く諸を介甫に達せよ(二)。我も亦(三)未だ敢て自ら以て是となさず。如し說あらば願はくは往復せん。此れ天下の公理にして彼我(四)なし。果して能く明辨(五)せば、介甫に益あらずんば、則ち必ず我に益あらん。

(一) 王安石　(二) 傳達せよの意　(三) 我れ亦未だ之を是なりとは言はずとの意　(四) 彼我のへだてあるべきにあらず　(五) 明かに事理を辨別せば

天祺在二司竹一。常愛二用一卒長一。及レ將レ代。自見二其人盜一レ筍皮。遂治レ之無二少貸一。罪已正。待レ之復如レ初。略不レ介レ意。其

天祺司竹(一)にありしとき、常に一卒長を愛用せり。將に代らん(二)とするに及んで、自ら其人の筍皮を盜めるを見る。遂に之を治めて少しも罪を貸す(三)ことなし。已(四)に正して之を待つこと復初の如し。略ゝ意に介せず。其德量此の如し。

(一) 司竹監、竹やぶをつかさどる奉行　(二) 交代　(三) 罪をゆるすことなし　(四) 罪を正して後は、之を待つこと又初めのごとくして、一向に意に介せず

防二小人一之道。正レ己爲レ先。

小人を防ぐの道は、(一)己を正しうするを先となす。

(一) 防ぐとは小人の患を防ぐの意 (二) 己を正うして小人を待つべし、小人姦詐なりと雖も間に乘ずべきなき也

周公至公不レ私。進退以レ道。無二利欲之蔽一。其處レ己也。夔夔然存二恭畏之心一。其存レ誠也。蕩蕩然無二顧慮之意一。所下以雖レ在二危疑之地一。而不上レ失二其聖一也。詩曰。公孫二碩膚一。赤舄几几。

(一)周公は至公にして私ならず。進退道を以てして、利欲の蔽なし。其の己を處するや、(二)夔夔然として(三)恭畏の心を存す。其の誠を存するや、(四)蕩蕩然として(五)顧慮の意なし。(六)危疑の地にありと雖も、其聖を失はざる所以なり。詩に曰く、公(七)碩膚を孫り、赤舄几几たりと。

(一) 周公の心は天下國家にありて其身にあらず、是を以て至公無私にして進退道に合す蓋し一毫利欲の蔽なし (二) 戒謹畏順の貌 (三) うやうやしくかしこまる (四) 明白坦平の義 (五) 身をふりかへり慮るの私意 (六) あやふくうたがはしき所にありてもいかりたけることなく、おそれうたがふことなく、其聖德を傷けずと也 (七) 碩膚とは大いに善きこと、孫はゆづる、公の德業を讚ふるなり、赤舄は赤きくつ、几々はおちつきておもおもしき貌、功あれども之をゆづりてはこる意なく、容儀進退恭順にして安重自得なりと也

採察求訪。使臣之大務。

(一)採察求訪は、使臣の大務なり。

(一) 民情を採察し賢材を求訪すること

中孚之象曰。君子以議獄緩死。傳曰。君子之於議獄。盡其忠而已。於決死。極於惻而已。天下之事。無所不盡其忠。而議獄緩死。最其大者也。

（一）中孚の象に曰く、君子以て獄を議り死を緩うす。傳に曰く、君子の（二）獄を議るに於ける、其忠を盡すのみ。死を決するに於ける、惻むことを極むるのみ。天下の事、其忠を盡さゞる所なし。而して獄を議り死を緩うするは、最も其大なる者なり。

註（一）易の卦名　（二）獄を議るに其忠誠を盡す心なければ善なる能はず、死罪を決するに惻隱のかぎりを極めざれば愛の旨なし。

事有時而當過。所以從宜。然豈可甚過也。如過恭過哀過儉。大過則不可。所以小過爲順乎宜也。能順乎宜。所以大吉。

（一）事時として當に過すべきあり。宜しきに從ふ所以なり。然れども豈に甚だ過すべけんや。恭に過ぎ哀に過ぎ儉に過ぐるが如き、大に過ぐるときは則ち不可なり。（二）小過を宜しきに順ふとなす所以なり。能く宜しきに順ふ、大に吉なる所以なり。

（一）時として過すべき事あり、されど其過すや宜しきに從ふべき也、大に過ぐるは宜しきを失ふ、寧ろ小しく過ぐるを宜しきに從ふとなす　（二）易の卦

瑣細。無レ所レ不レ至。乃其所下以致二悔辱一。取中災咎上也。

自重せず、或は鄙猥の行ひをなし、瑣細の利を爭ふことなど　(五)悔みはづかしめをいたし、災難を負ふ

在レ旅而過剛自高。致二困災一之道也。

旅にありて過剛(一)にして自ら高うするは、困災を致すの道なり。

(一)あらきに過ぐれば和順するものなく、高ぶれば親附せず

兌之上六曰。引兌。象曰。未レ光也。傳曰。説既極矣。又引而長レ之。雖レ説レ之之心不レ已。而事理已過。實無レ所レ説。事之盛則有二光輝一。既極而強引レ之長。其無二意味一甚矣。豈有レ光也。

兌(一)の上六に曰く、引いて兌ぶ。象に曰く、未だ光(二)あらざるなり。傳に曰く、説(三)既に極まる。又引いて之を長ず。之を説ぶの心已まずと雖も、而も事理(四)已に過ぎて、實に説ぶ所なし。事の盛なるときは則ち光輝あり。既(五)に極まりて強ひて之を引いて長ず。其の意味なきこと甚し。豈に光あらんや。

(一)易の兌卦、兌はよろこぶ　(二)光輝　(三)よろこび既に極度に達す、更に引伸ばして之を長くす　(四)説ぶべき事の理過ぎたれば、説ぶべき所何處にかある　(五)極度に達せしものを、強ひて引伸ばしたればとて、其の無意味に終ることは必せり

所㆔以重㆓改作㆒也。

（一）易の革卦　（二）大故あつて後患なき事にあらずば、軽々しく改作せざれ

漸之九三曰。利㆑禦㆑寇。傳曰。君子之與㆓小人㆒比也。自守以㆑正。豈唯君子自完㆓其己㆒而已乎。亦使㆘小人得㆑不㆑陷㆓於非義㆒㆖。是以㆓順道㆒相保。禦㆓止其惡㆒也。

（一）漸の九三に曰く、寇を禦ぐに利し。傳に曰く、君子の小人と比（二）するや、自ら守（三）るに正を以てせば、豈に唯だ君子自ら其己を完うするのみならんや、亦小人をして非義に陷らざることを得しむ。是れ順道を以て相保つて、其惡を禦ぎ止むるなり。

（一）易の漸卦　（二）列を同じうしてならぶ　（三）正を以て自ら守るときは己を完うするに止まらず、小人をして非義をなすに遑あらざらしむ

旅之初六曰。旅瑣瑣。斯其所㆑取㆑災。傳曰。志卑之人。既處㆓旅困㆒。鄙猥

（一）旅の初六に曰く、旅に瑣瑣（二）たり、斯れ其の災を取る所なり。傳に曰く、志卑しき人、既に旅困（三）に處るときは、鄙猥（四）瑣細、至らざる所なし、乃ち其悔辱（五）を致し災咎を取る所以なり。

（一）易の旅卦　（二）こまごましき貌　（三）旅に出てゝは、知音少く自ら困頓の事多きを云ふ　（四）知己少きが故に

益之初九曰。利用爲大作。元吉無咎。象曰。元吉無咎。下不厚事也。傳曰。在下者。本不當處厚事。厚事重大之事也。以爲在上所任。所以當大事。必能濟大事。而致元吉。乃爲無咎。能致元吉。則在上者。任之爲知人。己當之爲勝任。不然則上下皆有咎也。

(一)益の初九に曰く、大作を爲すに用ふるに利あり。元吉なれば咎なし。象に曰く、元吉なれば咎なし、下は厚事せざればなり。傳に曰く、下にある者は、本當に厚事を處すべからず。厚事は重大の事なり。(二)上にあるものゝ任ずる所と爲るを以て、所以に大事に當る。(三)必ず能く大事を濟して、元吉を致せば、乃ち咎無しとなす。能く元吉を致すときは、則ち上にある者は、之に任じて人を知れりとなす。己は之に當つて任に勝へたりとなす。(四)然らざるときは則ち上下皆咎あり。

(一) 易の益卦、大作とは厚事を云ふ、厚事は重大の事、元は大に善き義 (二) 上に在るものゝ選任によつては、大事に當ることあり (三) 能く大事を成遂げなば、上にある者はよく任すべき人物を知り、己は正に任に勝へたりといふ譯になる也 (四) 元吉ならざれば上下とも咎ありと也

革而無甚益。猶可悔也。況反害乎。古人

(一)革めて甚だ益なくんば、猶は悔ゆべし。況や反つて害するをや。古人の(二)改作を重んずる所以なり。

誠二其意一。如レ是宛轉。以求二其合一也。遇非二枉レ道逢迎一也。巷非二邪僻由一レ徑也。故象曰。遇二主于巷一。未レ失レ道也。

損之九二曰。弗レ損益レ之。傳曰。不三自損二其剛貞一。則能益二其上一。乃益レ之也。若失二其剛貞一。而用二柔説一。適足二以損一レ之而已。世之愚者。有下雖レ無二邪心一而惟知レ竭レ力順レ上爲上レ忠者上。蓋不レ知二弗レ損益レ之之義一也。

(一) 君主心に疑團ありて臣下と一致せざる時、賢臣ありて、上下の偶合をはかる (二) 其方法としては、至誠を以て君を感動せしめ、力を盡して國家を扶持し、義理を明かにして其知識を啓發し、蔽ふ處の疑惑を排して誠意を映射せしむ (三) 委曲の意、まるくとりなしをして、上下偶合せんことを求むる (四) 遇ふとは對するの意にて又合するの意、道に枉げて對合するにはあらず (五) 巷とはまがりくねり行く路也、委曲をつくすといふもよこしまにひがめる心にて徑によるにあらず (六) 道を失はずして其君主に合す

(一)損の九二に曰く、損ぜざれば之を益す。傳に曰く、自ら其剛貞を損ぜざれば、(二)則ち能く其上を益す。乃ち之を益するなり。若し其剛貞を失して、(三)柔説を用ひば、適に以て之を損ずるに足るのみ。(四)世の愚者、邪心なしと雖も、而も惟だ力を竭し(五)上に順ふのみを忠となすことを知る者あり。(六)蓋し損ぜずして之を益するの義を知らざればなり。

(一) 易の損卦 (二) つよくしてたゞしき志を損ずることなくば、よく上を益する也 (三) やはらかくしてよろこぶ色 (四) 上を損ずる也 (五) つとめて上の意に順ふをのみ忠なりと心得るは愚者 (六) 前節を繰返していふ

乎。如ㇾ此則失二含弘之義一。致二凶咎之道一也。又安能化二不善一。而使二之合一乎。故必見二惡人一。則無ㇾ咎也。古之聖王。所下以能化二姦凶一爲二善良一。革二仇敵一爲中臣民上者。由ㇾ弗ㇾ絶也。

由つてなり。

(一) 德を持する同人一團結をなすとも、小人等のこれにそむく者極めて多きをいふ (二) さればとて小人等と絶たば、天下の小人大擧して君子に抗するに至らんか (三) 斯くなりゆきては却つて廣く包含するの義を沒し、世上の不良性を化導してこれを善良なる道に合せ入らしむること難し (四) 古の聖王は必ずしも絶たず、能く小人惡人を感化することに勉めたり

睽之九二。當二睽之時一。君心未ㇾ合。賢臣在ㇾ下。竭ㇾ力盡ㇾ誠。期ㇾ使二之信合一而已。至誠以感二動之一。盡ㇾ力以扶二持之一。明二義理一以致二其知一。杜二蔽惑一以

睽の九二、睽の時に當つて、(一)君の心未だ合はず。賢臣下にあり。力を竭し誠を盡して、之をして信合せしめんことを期するのみ。(二)至誠以て之を感動し、力を盡し以て之を扶持し、義理を明かにし以て其知を致し、蔽惑を杜ぎ以て其意を誠にす。是の如く(三)宛轉して、以て其合はんことを求む。(四)遇ふは道を枉げて逢迎するにあらず。(五)巷は邪僻にして徑によるにあらず。故に象に曰く、(六)主に巷に遇ふは、未だ道を失はざるなりと。

子以同而異。傳曰。聖賢之處レ世。在二天理之常一。莫レ不二大同一。於二世俗所レ同者一。則有二時而獨異一。不レ能二大同一者。亂レ常拂レ理之人也。不レ能二獨異一者。隨レ俗習レ非之人也。要レ在二同而能異一耳。

睽之初九。當二睽之時一。雖二同德者相與一。然小人乖異者至レ衆。若棄二絶之一。不レ幾レ盡二天下一以仇中君子上

の常にありては、大同ならずといふことなし、(三)世俗の同ずる所の者に於ては、則ち時に獨り異なることあり。(四)大同なること能はざる者は、常を亂り理に拂るの人なり。(五)獨り異なること能はざる者は、俗に隨ひ非を習ふの人なり。同じて能く異なるあらんことを要するのみ。

(一) 易の卦名。睽はそむく (二) 天理の常なる所は俗人と大同ならざることなしとは、聖賢も俗人も同じ天地に生存して異なることなきをいふ (三) 世俗の同じとなす所には時に獨り異なる事ありとは俗人と過ちを共にせざるをいふ (四) 亂常拂理の人は衆人と大同なる能はずとは、天理の常に循ふ能はざれば也 (五) 隨俗習非の人は獨り異なる能はずとは、流俗になずみ隨ひて己のみ獨立する見識なき也

睽の初九、睽の時に當つて、(一)同德の者相與すと雖も、然も小人乖異なる者至つて衆し。(二)若し之を棄絶せば、天下を盡して以て君子に仇するに幾からざらんや。(三)此の如くなれば則ち含弘の義を失し、凶咎の道を致す。又安ぞ能く不善を化して、之をして合はしめんや。故に必ず惡人を見るは、則ち咎なし。(四)古の聖王の、能く姦凶を化して善良となし、仇敵を革めて臣民となしゝ所以は、絶たざるに

四以レ剛居レ高。又爲二三所一隔。應レ初之志巽二乎常一矣。而初乃求望之深。是知レ常而不レ知レ變也。世之責二望故素一而至二悔咎一者。皆浚レ恆者也。

望して、悔咎に至る者は、皆恆に浚うする者なり。

(一)易の卦名、恆はつね　(二)始に求め望む事深きが故に、往々にして常の道理にのみなづみて變通の道を知らず、悔咎あるべしと也　(三)故舊なり、吾が忠實なるを故舊として知らざる理なしとて責め望むとも、時勢をはからず變に應ぜずして悔咎に至る者は、皆恆にふかうする故也

遯之九三曰。係レ遯。有レ疾厲。畜二臣妾一吉。傳曰。係戀之私恩。懷二小人女子一之道也。故以畜二養臣妾一則吉。然君子之待二小人一。亦不レ如レ是也。

(一)遯の九三に曰く、(二)係遯す、疾ありて厲し、臣妾を畜ふときは吉なり。傳に曰く、(三)係戀の私恩は、小人女子を懷くるの道なり、故に以て臣妾を畜養するときは則ち吉なり。然れども(四)君子の小人を待つは、亦是の如くならず。

(一)易の遯卦、遯はのがれる　(二)遯るゝにあたりて係累ありてためらふ、これを病ありてはげしといふ　(三)心にかけて忘れず私恩を施すは、小人女子をなつくるてだてなり　(四)君子の小人を待つは此の如きことをなさずと也

睽之象曰。君

(一)睽の象に曰く、君子以て同じうして異なり。傳に曰く、聖賢の世に處する、(二)天理

舐二其荒樂之非一。如二其不ㇾ省何。必於二所ㇾ不ㇾ蔽之事一。推而及ㇾ之。則能悟二其心一矣。自ㇾ古能諫二其君一者。未ㇾ有下不ㇾ因二其所ㇾ明者上也。故許直強勁者。率多取ㇾ忤。而温厚明辨者。其說多行。非下唯告二於君一者如ㇾ此。爲ㇾ教者亦然。夫教必就二人之所ㇾ長。所ㇾ長者心之所ㇾ明也。從二其心之所ㇾ明而入。然後推及二其餘一。孟子所謂成ㇾ德達ㇾ才是也。

子の所謂德(九)を成し才を達すとは是れなり。

(一)易の坎卦。簋貳の極めて質朴なるに例して人臣の忠信質實なるべきをいひ、而して其朴素の誠は必ず君の明に因りて納るべきを述ぶ　(二)樂にすさぶ　(三)ふるく久しくなりたる　(四)口を極めて其非をそしりたしなめても　(五)蔽はれずして明かなる事より推して其非に及ぼして諫める　(六)許はあばく、直はすぐなる、強勁はつよくこはゞる、即ち他の非をあばき直言して憚らざるものは、多くはさかちふことになる　(七)おとなしくすぢみち通りたる　(八)即ち其心の蔽はれざる所　(九)其の長ずる所よりして備を導き、德を成し、才を達せしむる也

恒之初六曰。浚ㇾ恒貞凶。象曰。浚ㇾ恒之凶。始求深也。傳曰。初六居ㇾ下。而四爲二正應一。

(一)恒の初六に曰く、恒に浚し、貞なれば凶なり。象に曰く、(二)恒に浚うするの凶は、始に求むること深ければなり。傳に曰く、初六下に居て、四は正應たり。四、剛を以て高きに居り、又二三の爲に隔てらる。初に應ずるの志常に異なり。而して初の乃ち求め望むことの深き、是れ常を知りて變を知らざるなり。世の、(三)故素を責

樽酒簋貳用レ缶。納レ約自レ牖。終無レ咎。傳曰。此言人臣以二忠信善道一結二於君心一。必自二其所レ明處一。乃能入也。人心有レ所レ蔽。有レ所レ通。通者明處也。當下就二其明處一而告上レ之。求レ信則易也。故云二納レ約自一レ牖。能如レ是。則雖二艱險之時一。終得レ無レ咎也。且如三君心蔽二於荒樂一。唯其蔽也故爾。雖三力

なし。傳に曰く、此の言は、人臣、忠信善道を以て、君の心を結ぶに、必ず其明かなる所の處よりするときは、乃ち能く入るとなり。人心は蔽はるゝ所あり、通ずる所あり。通ずる者は明かなる處なり。當に其明かなる處に就きて之に告ぐべし。信を求むること則ち易し。故に約を納るゝこと牖よりすと云ふ。能く是の如くなれば、則ち艱險の時と雖も、終に咎なきを得。且つ君の心の荒樂(二)に蔽はるゝが如き、唯だ其蔽や故(三)なるのみ。(四)力めて其荒樂の非を詆ると雖も、其の省みざるを如何せん。(五)必ず蔽はれざる所の事に於て、推して之に及ぼすときは、則ち能く其心を悟らしめん。古より能く其君を諫むる者、未だ其の明かなる所に因らざる者はあらず。故に訐直(六)強勁なる者は、率ね多く忤ふことを取る。而して溫厚明辨(七)なる者は、其說多く行はる。唯だ君に告ぐる者此の如くなるのみにあらず、教をなす者も亦然り。夫れ教は必ず人の長ずる所に就く。長ずる所の者は心の明かなる所なり。其心の明(八)かなる所よりして入り、然して後推して其餘に及ぼす。孟

所ニ親愛一者也。常人之情。愛レ之則見ニ其是一。惡レ之則見ニ其非一。故妻孥之言。雖レ失而多從。所レ憎之言。雖レ善爲レ惡也。苟以ニ親愛一而隨レ之則是私情所レ與。豈合ニ正理一。故隨之初九。出レ門而交。則有レ功也。

ち其是を見、之を惡むときは則ち其非を見る。故に(一)妻孥の言は、失せりと雖も多く從ふ。憎む所の言は、善なりと雖も惡となす。苟も親愛するを以て之に隨ふときは、則ち是れ私情の與する所なり。豈に正理に合はんや。故に(二)隨の初九、(三)門を出でゝ交るときは、則ち功あるなり。

(一)妻子　(二)易の卦名　(三)門外和親の係累なし、故に交りて功あり

隨九五之象曰。孚ニ于嘉一吉。位正中也。傳曰。隨以レ得レ中爲レ善。隨之所レ防者過也。蓋心所ニ悅隨一。則不レ知ニ其過一矣。

隨の九五の象に曰く、嘉に孚あり、吉なりとは、位正中なればなり。傳に曰く、隨は中を得るを以て善となす。隨の防ぐ所の者は過ぐることなり。蓋し心悅び隨ふ所あるときは、則ち其過ぐるを知らず。

坎之六四曰。

(一)坎の六四に云く、樽酒簋貳つありて缶を用ひ、約を約るゝに牖よりす、終に咎

人臣之道也。夫居周公之位。則爲周公之事。由其位而能爲者。皆所當爲也。周公乃盡其職耳。

㊀世間の儒者をいふ　㊁成王長じて周公の勳徳を思ひ、魯の國をして天子の禮樂を以て周公を祀らしむ、伯禽之を受くる事禮記の明堂位に見ゆ

大有之九三曰。公用亨于天子。小人弗克。傳曰。三當大有之時。居諸侯之位。有其富盛。必用亨通于天子。謂以其有爲天子之有也。乃人臣之常義也。若小人處之。則專其富有。以爲私。不知公己奉上之道。故曰小人弗克也。

大有㊀の九三に曰く、公㊁用つて天子に亨る、小人は克はず。傳に曰く、三は大有の時に當りて、諸侯の位に居り、其富盛を有つ。必ず用つて天子に亨通す。其有を以て天子の有と爲すを謂へり。乃ち人臣の常義なり。小人之に處るが若きは、則ち其富有を專にして以て私をなし、己を公にし上に奉ずるの道を知らず。故に小人は克はずといふ。

㊀易の卦名。大有は大にたもつ意　㊁公は諸侯を云ふ

人心所從。多

人心の從ふ所、多くは親愛する所の者なり。常人の情、之を愛するときは則

無二由生一矣。謀レ始之義廣矣。若下愼二交結一明二契券一之類上是也。

師之九二。爲二師之主一。恃レ專則失二爲レ下之道一。不レ專則無二成レ功之理一。故得レ中爲レ吉。凡師之道。威和竝至則吉也。

(一)師の九二は、(二)師の主たり。(三)專にすることを恃むときは則ち下たるの道を失ふ。(四)專にせざるときは則ち功を成すの理なし。故に中を得るを吉となす。凡そ師の道たる、(五)威と和と竝び至るときは則ち吉なり。

(一)易の師の卦、師はいくさ　(二)師の主は軍司令官の如き地位　(三)專權をたのみとするときは上を凌ぐの嫌ありて臣下の道を失ふ　(四)專權を恃まざるときは功を成し難し　(五)威あつて和なきときは人心離散し、和して威少きときは人心弛緩す、竝び至ることを要す

世儒有レ論下魯祀二周公一以中天子禮樂上。以爲周公能爲二人臣不レ能レ爲之功一。則可レ用二人臣不レ得レ用之禮樂一。是不レ知二

世儒、(一)魯の周公を祀るに天子の禮樂を以てするを論ずることあり。以爲へらく、周公は能く人臣の爲すこと能はざるの功をなす、則ち人臣の用ふることを得ざるの禮樂を用ふべしと。是れ人臣の道を知らざるなり。夫れ周公の位に居るときは、則ち周公の事をなさん。其位に由りて能くなす者は、皆當になすべき所なり。周公は乃ち其職を盡せるのみ。

之。不レ至ニ指爲レ狂也。至レ謂ニ之狂。則大駭矣。盡レ誠爲レ之不レ容而後去。又何嫌乎。

にえ爲さずとなすもの多し ㊂ 明道之をなすに、敢て法に戻らずして、民の利便をはかりければ、衆人もおどろくまでにはあやしとせず ㊃ 其意を伸ぶるを得たりといふは不可なれども、小さき補ひをなしたることは、當今の爲政者にまされり ㊄ 異標には感じたらんも、狂人じみたるとはなさず、

明道先生曰。一命之士。苟存ニ心於愛レ物。於レ人必有レ所レ濟。

明道先生曰く、㈠一命の士も、苟に心をして物を愛するに存せば、人に於て必ず濟ふ所あらん。

㊀ はじめて上より命ぜられて職を受けたるものをいふ、職最もかるし

伊川先生曰。君子觀ニ天水違行之象。知ニ人情有ニ爭訟之道。故凡所レ作事。必謀ニ其始。絶ニ訟端於事之始。則訟

伊川先生曰く、㈠君子天水違ひ行くの象を觀て、人情爭訟の道あることを知る。故に凡そ作す所の事、必ず其始に謀る。訟の端を事の始に絶つときは、則ち訟由つて生ずることなし。始を謀るの義廣し。㈡交結を愼み㈢契券を明かにするの類の若き是れなり。

㊀ 易の訟の卦 ㊁ 交を結ぶこと ㊂ 契約證書

自保。古之時。得丘民則得天下。後世以兵制民。以財聚衆。聚財者能守。保民者爲迂。惟當以誠意感動。覬而其有不忍之心而已。

財を給して民の飢えて死なんとせるものを救はんとの意 〔五〕乞ひすゝめる 〔六〕財を吝みて、民の變心を疑ひ自ら防がんとす 〔七〕孟子に出づ、田野の民間 〔八〕兵を有する者は民を制せんことを謀る也 〔九〕財を有する者は衆を聚めて兵を養はんことを謀る也 〔一〇〕國を守るの道は財を聚むるにあるとして、民を愛し保護を加ふる者を迂遠なりとす 〔一一〕どこまでも誠意を披瀝して感動を與へ、君主をして民を賊ふに忍びざるの心を起さんことをこひねがへと也

明道爲邑。及民之事。多衆人所謂法所拘者。然爲之未嘗大戾於法。衆亦不甚駭。謂之得伸其志則不可。求小補則過今之爲政者遠矣。人雖異

明道邑を爲む。（一）（二）民の事に及んで、衆人の所謂法に拘せらるゝ者多し。然れども之を爲すに未だ嘗て大に法に戾らず。衆も亦甚だ駭かず。之を其志を伸ぶる（三）ことを得と謂ふときは則ち不可なり。小補を求むるときは則ち今の政を爲す者に過ぐる（四）こと遠し。（五）人之を異むと雖も、指して狂とするに至らず。之を狂と謂ふに至るは、則ち大に駭けばなり。誠を盡して之をなし、容れられずして而して後去らば、又何をか嫌はんや。

〔一〕治むるなり 〔二〕民の爲に事をなすに及んで、今日までの一般奉行人の者にては其當時の法律に抵觸するが故

使㆘學㆓營於職事㆒。紛㆓紛其思慮㆒。待㆑至㆓上前㆒。然後善㆓其辭說㆒。徒以㆓頰舌㆒感㆖㆑人。不㆓亦淺㆒乎。

伊川答㆘人示㆓奏藁㆒書㆖云。觀㆓公之意㆒。專以㆑畏㆑亂爲㆑主。頤欲㆘公以㆑愛㆑民爲㆑先。力言㆓百姓饑且㆑死。丐㆗朝廷哀憐㆖。因懼㆑將㆑爲㆓寇亂㆒可也。不㆓惟告㆑君之體。當㆑如㆑是。事勢亦宜㆑爾。公方求㆑財以活㆑人。祈㆑之以㆓仁愛㆒。則當㆓輕㆑財而重㆑民。懼㆑之以㆓利害㆒。則將㆓恃㆑財以

伊川人の奏藁を示すに答ふる書に云く、公の意を觀るに、專ら亂を畏るゝを以て主となす。(一)頤は、(二)公が民を愛するを以て先となし、力めて百姓の饑ゑて且に死なんとすと言ひて、朝廷の哀憐を丐はんことを欲す。(三)因つて將に寇亂をなさんとするを懼れしめば可なり。惟だ君に告ぐるの體、當に是の如くなるべきのみならず、事勢も亦宜しく爾るべし。公は方に財を(四)求めて以て人を活さんとす。之を祈るに仁愛を以てすれば、則ち當に財を輕んじて民を重んずべし。之を懼すに利害(五)を以てすれば、則ち將に(六)財を恃みて以て自ら保たんとせん。古の時、(七)丘民を得るときは則ち天下を得、後世、(八)兵を以て民を制し、(九)財を以て衆を聚む。(一〇)財を聚むる者をば能く守るとし、民を保つ者をば迂なりとなす。惟だ當に(一一)誠意を以て感動して、其の忍びざるの心あらんことを覬ふべきのみ。

㊀奏文の原稿 ㊁伊川の名 ㊂それに因つて救はずんば亂をなすと云ひて、おそれしむるならば可也 ㊃

卷之十

政事類　凡六十四條

伊川先生上疏曰、夫鐘怒而擊之則武。悲而擊之則哀。誠意之感而入也。告於人亦如是。古人所以齋戒而告君也。臣前後兩得進講。未嘗敢不宿齋預戒。潛思存誠、覬感動於上心。若

伊川先生上疏して曰く、夫れ鐘(一)怒りて之を擊つときは則ち武く、悲みて之を擊つときは則ち哀し。誠意の感じて入ればなり(二)。人に告ぐるも亦是の如し(三)。古人齋戒(四)して君に告ぐる所以なり。臣前後兩たび進講することを得たり。未だ嘗て敢て宿齋預戒(五)し、思を潛め誠を存し、上の心を感動せんことを覬はずんばあらず。若し職事に營營(六)として、其思慮を紛紛(七)たらしめ、上の前に至るを待ちて、然して後其辭說(八)を善くし、徒らに頰舌(九)を以て人を感ぜしめば、亦淺からざらんや(一〇)。

(一) 孔子家語に出づ　(二) 誠感じて鐘の音に入るなり　(三) 人に言ふも亦此理　(四) 齋戒はものいみ、心身共に謹ならんがため也　(五) 宿、預、共にあらかじめ　(六) あくせくして　(七) とりみだして　(八) 言ふことを立派にして　(九) はほとしたと、口先　(一〇) あさはかならずやといふ意

井地一。終無レ由レ得レ平。周道止是均平。井田卒歸二於封建一乃定。

の道は止だ是れ均平なり。

◎井田の法は平均を主義とす、故に天下を治むるは公平を主とし、之を失ふときは亂れんとなり

井田卒に封建に歸せば乃ち定まらん。

久相親。蓋數十百口之家。自是飲食衣服。難ㇾ爲ㇾ得ㇾ一。又異ㇾ宮乃容ㇾ子得ㇾ伸二其私一。所三以避二子之私一也。子不ㇾ私二其父一則不ㇾ成ㇾ爲ㇾ子。古之人曲盡二人情一必也。同宮有二叔父伯父一則爲ㇾ子者何以獨厚二於其父一。爲ㇾ父者又烏得而當ㇾ之。父子異ㇾ宮。爲二命士以上一。愈貴則愈嚴。故異ㇾ宮猶三今世有二逐位一。非ㇾ如ㇾ異ㇾ居也。

ざるときは、則ち子たることをなさず。古の人の曲に人情を盡すこと必せり。(六)同宮に叔父伯父あるときは、則ち子たる者何を以てか獨り其父にのみ厚うせん。(七)父たる者又烏ぞ得て之に當らん。父子の宮を異にするは、命士以上たり。(八)愈〻貴きときは則ち愈〻嚴にす。故に宮を異にするは猶ほ今の世の逐位あるが如し。(九)居を異にするが如きにあらず。(一〇)

(一) 昔は其居室を異にして、父子兄弟伯叔姪、各財產を一つにして住めり、此語亦行ふべしと也 (二) 眼前疎なるが如くなるも、實はかくてこそよく久しく親和すと也 (三) 子をして其親に對して思ふまゝに私情を伸べて孝養をなさしめんとなり (四) 親に對しては、子の私情を以て自分に向ひてひそかに爲すことを避けしむる也 (五) 子の情としては其親に對して私情を伸べざるは、即ち子たる道を全うせず (六) 古人よく人情を曲盡せり (七) 以下前の意をくりかへして云ふ (八) 一たび命を受けて士となりたる者 (九) 宋代の制なるべし、邸內に次第に居室を作ることといひ、其他諸說あれども明かならず (一〇) 異宮は逐位といふ類にて今日の所謂別居とは異なりと也

治二天下一。不ㇾ由二

天下を治むること、井地に(一)由らずんば、終に平なることを得るに由なし。周

雲巖令。政事大抵以二敦レ本善上レ俗爲レ先。毎以二月吉一具二酒食一。召二郷人高年一會二縣庭一。親爲二勸酬一。使三人知レ養レ老事レ長之義一。因問二民疾苦一。及告下所三以訓二戒子弟一之意上。

なす。毎に月吉(二)を以て酒食を具へ、郷人の高年(三)を召きて縣庭(四)に會せしめ、親ら爲に勸酬(五)し、人をして老を養ひ長に事ふるの義を知らしむ。因つて民(六)の疾苦を問ひ、及び子弟を訓戒する所以の意を告ぐ。

(一) 地名、陝西の丹州に屬す (二) 月朔、ついたち (三) としより (四) 縣廳の庭 (五) 盃のとりやり (六) 民情の視察と子弟教育の事とを談ず

横渠先生曰。古者有二東宮一。有二西宮一。有二南宮一。有二北宮一。異レ宮而同レ財。此禮亦可レ行。古人慮遠。目下雖レ似二相疎一。其實如レ此乃能

横渠先生曰く、古者(一)東宮あり、西宮あり、南宮あり、北宮あり。宮を異にして財を同じうす。此禮亦行ふべし。古人は慮ること遠し。目下(二)相疎むに似たりと雖も、其實は此の如くにして乃ち能く久しく相親む。蓋し數十百口の家、自ら是れ飲食衣服の、一なるを得ることなし難し。又宮を異にすることは、(三)乃ち子を容して其私を伸ぶることを得しめ、(四)子の私を避けしむる所以なり。(五)子其父に私せ

皆苟而已。世之病レ難レ行者。未下始不中以三亟奪二富人之田一爲上辭。然茲法之行。悅レ之者衆。苟處レ之有術。期以二數年一。不レ刑二一人一而可レ復。所レ病者。特上之人未レ行耳。乃言曰。縱不レ能レ行二之天下一。猶可レ驗二之一鄕一。方與二學者一。議二古之法一。共買二田一方一。畫爲二數井一。上不レ失二公家之賦役一。退以二其私一正二經界一。分二宅里一。立二斂法一。廣二儲蓄一。興二學校一。成二禮俗一。救レ菑恤レ患。敦レ本抑レ末。足下以推二先王之遺法一。明中當今之可上レ行。此皆有レ志未レ就。

て曰く、縱ひ之を天下に行ふこと能はずとも、猶は(九)之を一鄕に驗すべし。方に學者と古の法を議し、共に田一方を買ひ、畫して數井となし、上公家の賦役を失はず、退いて其私を以て經界を正し、宅里(一〇)を分ち、斂法(一一)を立て、儲蓄を廣め、學校を興し、禮俗を成し、菑を救ひ患を恤み、本を敦うし末を抑へなば、以て先王の遺法を推して、當今の行ふべきを明かにするに足らん。此れ皆志ありて未だ就らず。(一二)

(一) 井田の經界　(二) 孟子の語　(三) 苟且、かりそめ　(四) 世間此の井田の法を行ひ難しと云ふ者（病ふる者）　(五) 急に富者の田地を奪取らねばと云ふが　(六) しかし此法の行はるゝことは賛成者が多い　(七) 數年がゝりならば一人の罪人を出さずして古法に復することを得ん　(八) だが却つて病ふる所は、上の人の行はざらんこと也　(九) せめて一鄕だけなりと試みよ　(一〇) いへやしき　(一一) 取り立ての法　(一二) 其志はありけれど終に未だならずと也

横渠先生爲二

横渠先生雲巖(一)の令たりしとき、政事は大抵本を敦くし俗を善くするを以て先と

士仁人。爲下能識二其遠者大者一。素求預備。而不中敢忽忘上。

肉辟於二今世死刑中一取レ之。亦足レ寛二民之死一。過レ此當レ念二其散レ之之久一。

肉辟(一)、今世死刑の中に於て之を取らば(二)、亦民の死を寛くするに足らん。此を過ぎては當に其之を散ずるの久しきを念ふべし。(三)

(一) 死刑に次ぐの肉刑 (二) 死刑に處すべきものをも、肉刑に處するならば、せめて國民の死をゆるやかにせんとの意 (三) 此外には教化行はれずして民心の散ずると久しく、種々の犯罪を犯す者の出て來る事由を深くおもひてあはれみを加ふべしと也

呂與叔撰二横渠先生行狀一云。先生慨然有レ意二三代之治一。論二治レ人先務一。未下始不中以二經界一爲上レ急。嘗曰。仁政必自二經界一始。貧富不レ均。教養無レ法。雖レ欲レ言レ治。

呂與叔横渠先生の行狀を撰んで云く、先生慨然として三代の治に意あり。人を治むるの先務を論ずるに、未だ始より經界(一)を以て急となさずんばあらず。嘗て曰く、仁政(二)は必ず經界より始まる。貧富均しからず、教養法なきは、治を言はんと欲すと雖も、皆苟もするのみ(三)。世の行ひ難きを病ふる者(四)、未だ始より亟に富人の田を奪ふを以て辭となさずんばあらず(五)。然れども玆の法の行はるゝ、之を悅ぶ者衆し(六)。苟も之に處するに術あり、期するに數年を以てせば(七)、一人を刑せずして復すべし。病ふる所の者は(八)、特り上の人の未だ行はざらんのみ。乃ち言つ

流者。先生固已默而識レ之。至三於興二造禮樂制度文爲一。下至二行レ師用レ兵戰陣之法一。無レ所レ不三講皆造二其極一。外レ之夷狄情狀。山川道路之險易。邊鄙防戍。城寨斥候控帶之要。靡レ不二究知一。其吏事操決。文法簿書。又皆精密詳練。若二先生一可レ謂二通儒全才一矣。

城寨斥候・控帶(三)の要、究め知らざることなし。其吏事操決(四)、文法簿書、又皆精密詳練なり。先生の若きは通儒全才といふべし。

(一) 前に出づ　(二) 前に出づ　(三) 控は敵をふせぐ、帶は味方をまもる　(四) うつたへをさばくこと

介甫言律是八分書。是他見得。

介甫(一)言へらく律(二)は是れ八分の書なりと。是れ他見得たり。

(一) 王安石、字介甫　(二) 律は刑律の書なり、其古法に近きを以て八分の書といふ、されど敎化の意少きを故十分の書といはれずとの意

橫渠先生曰。兵謀師律。聖人不レ得レ已而用レ之。其術見二三王方策。歷代簡書一。惟志

橫渠先生曰く、兵謀師律は、聖人已むことを得ずして之を用ふ。其術三王の方(一)策、歷代の簡書(二)に見えたり。惟だ志士仁人は、能く其遠き者大なる者を識り、素より求め預め備へて、敢て忽忘(三)せざることをなす。

(一) 古の書　(二) 書籍　(三) あなどりわすれる

子弟一從レ之。又如二相如使レ蜀。亦移書責二父老一。然後子弟皆聽二其命一而從レ之。只有二一箇尊卑上下之分一。然後順從而不レ亂也。若無三法以聯二屬之一安可。且立二宗子法一。亦是天理。譬如下木必有二從レ根直上一幹一。亦必有中旁枝上。又如下水雖レ遠必有二正源一。亦必有中分派處上。自然之勢也。然而又有二旁枝達而爲レ幹者一。故曰。古者天子建レ國。諸侯奪レ宗云。

正源あり、亦必ず分派の處あるが如し。(七)自然の勢なり。然り而して又(八)旁枝達して幹となる者あり。故に曰く、古者天子は國を建て、諸侯は宗を奪ふと云ふ。

㊀ 宗子の法亡びてなしとの意　㊁ 昔は子弟順從にして能く父兄の言を聽く、今は父兄よりして子弟に聽く、本末顚倒なり　㊂ きぬにかけるふみ　㊃ 司馬遷　㊄ 宗子の法は天理に循ふ　㊅ 眞幹と正源は大宗、旁枝と分派は小宗。分派はえだがは　㊆ 自然の勢は天理にかなふ　㊇ 中には枝が發達して幹となる場合あり、天子は幹、諸侯は枝、枝が幹を奪ふことにたとふ

邢和叔敍二明道先生事一云。堯舜三代帝王之治。所下以博大悠遠。上下與二天地一同上

(一)邢和叔明道先生の事を叙べて云く、(二)堯舜三代帝王の治、博大悠遠にして、上下天地と流を同じうする所以の者は、先生固より已に默して之を識る。禮樂・制度・文爲を興造するに至り、下師を行り兵を用ひ戰陣の法に至るまで、講じて皆其極に造らざる所なし。之を外にしては夷狄の情狀、山川道路の險易、邊鄙の防戍、

正叔云。某家治レ喪不レ用二浮圖一。在レ洛亦有二一二人家化一レ之。

今無二宗子一。故朝廷無二世臣一。若立二宗子法一。則人知レ尊レ祖重レ本。人既重レ本。則朝廷之勢自尊。古者子弟從二父兄一。今父兄從二子弟一。由レ不レ知レ本也。且如二漢高祖欲レ下レ沛時一。只是以二帛書一與二沛父老一。其父兄便能率二

正叔云く、某の家喪を治むるに浮圖を用ひず。洛におりて亦一二の人家の之に化するあり。

（一）伊川先生　（二）佛式

今宗子なし。故に朝廷に世臣なし。若し宗子の法を立つるときは、則ち人祖を尊び本を重んずることを知らん。人既に本を重んずるときは、則ち朝廷の勢自ら尊からん。古は子弟父兄に從ひ、今は父兄子弟に從ふ。本を知らざるによる。且つ漢の高祖の沛を下さんと欲する時の如き、只だ是れ帛書を以て沛の父老に與ふ。其父兄便ち能く子弟を率ゐて之に從ふ。又相如が蜀に使せし如き、亦移書して父老を責む。然して後子弟皆其命を聽いて之に從ふ。只だ一箇の尊卑上下の分ありて、然して後順從して亂れず。若し法以て之を聯屬することなくんば安ぞ可ならん。且つ宗子の法を立つるは、亦是れ天理なり。譬へば木の必ず根より直上せる一幹ありて、亦必ず旁枝あるが如し。又水遠しと雖も必ず

雖二幼者一可レ使三漸知二禮義一。

卜二其宅兆一。卜二其地之美惡一也。地美則神靈安。其子孫盛。然則曷謂二地之美者一。土色之光潤。草木之茂盛。乃其驗也。而拘忌者。惑以下擇二地之方位一。決中日之吉凶上。甚者不下以レ奉レ先爲上レ計。而專以レ利レ後爲レ慮。尤非二孝子安措之用心一也。惟五患者不レ得レ不レ愼。須レ使下異日不レ爲二道路一。不レ爲二城郭一。不レ爲二溝池一。不レ爲二貴勢所一レ奪。不下爲二耕犂所一上レ及。

其宅兆(一)を卜すとは、其地の美惡を卜する也。地美なれば則ち神靈安んじて、其子孫盛なり。然らば則ち曷をか地の美なる者といふ。土色の光潤(二)なる、草木の茂盛(三)なる、乃ち其驗なり。而して拘り(四)忌む者は、惑ひて地の方位を擇び、日の吉凶を決するを以てす。甚しき者は先に奉ずる(五)を以て計となさずして、專ら後(六)を利するを以て慮となす。尤も孝子安措(七)の用心にあらず。惟だ五患(八)は愼まざるを得ず。須らく異日、道路とならず、城郭とならず、溝池とならず、貴勢の奪ふ所をならず、耕犂の及ぶ所とならざらしむべし。

(一) 宅は墓穴、兆は塋域 (二) ひかりてうるはしき (三) はえしげりたり (四) 俗に云ふ「ごへいかつぎ」 (五) 先人の體魄 (六) 後世の冥福 (七) 柩を安んじ措かんための用心 (八) 兆宅の患五、次にかゝぐる處を見よ、本註に云く、「一本に所謂五患とは、城郭・溝渠・道路・村落を避く、井窯を遠ざく」

註云。高祖以上。即當レ祧也。又云。今人以レ影祭。或一髭髮不二相似一。則所レ祭已是別人。大不便。月朔必薦レ新。（本註云。薦後方食。）時祭用二仲月一。（本註云。止二於高祖一。旁親無後者。祭二之別位一。）冬至祭二始祖一。（本註云。冬至陽之始也。始祖厥初生レ民之祖也。無レ主二於廟中正位一。設二一位一合二考妣一享レ之）立春祭二先祖一。（本註云。立春生レ物之始也。先祖始祖而下。高祖而上。非二一人一也。亦無レ主。設二兩位一分二享考妣一。）季秋祭レ禰。（本註云。季秋成レ物之時也）忌日遷レ主祭二于正寢一。凡事レ死之禮。當レ厚二於奉レ生者一。人家能存二得此等事數件一。

し。廟中の正位に於て、一位を設け、考妣を合せて、(一二)之を享す。(一三)）立春には、(一四)先祖を祭る。（本註に云く、立春は、物を生ずるの始なり。先祖は、始祖よりして下、高祖よりして上、一人にあらず。亦主無なし。兩位を設けて、考妣を分ち享す。）季秋には、(一五)禰を祭る。(一六)（本註に云く、季秋は物を成すの時なり。）忌日には主を遷して(一七)正寢に祭る。凡そ死に事ふるの禮は、當に生に奉ずる者より厚うすべし。人家能く此等の事數件を存し得ば、幼者と雖も漸く禮義を知らしむべし。

(一) 冠・昏・喪・祭・鄕飲酒・士相見の六　(二) 士大夫の家には必ず廟を立つ　(三) 庶人は廟といふを得ず、影堂といふ　(四) 神主なり　(五) 高祖より以上の祖は親盡くるが故に、他の廟に合せまつる、合祧　(六) 畫像　(七) 新らしき物　(八) 四時の祭　(九) 二・五・八・十一の仲月を用ふ。朝廷の時祭には孟月を用ふ、故にこれを避く　(一〇) 旁系の親　(一一) 人民の最初の祖　(一二) こゝにては男性女性と解す　(一三) まつる　(一四) 始祖に次ぎて高祖の先までの祖　(一五) 九月　(一六) 父の廟、考（父）妣（母）兩主を祭る　(一七) 家の正堂

會法。可取也。每有族人遠來。亦一爲之。吉凶嫁娶之類。更須相與爲禮。使骨肉之意常相通。骨肉日疎者。只爲不相見。情不相接爾。

し。骨肉(二)日に疎きは、只だ相見ざるがために、情相接らざるのみ。

(一) 韋員外家の宗會に際し唐の岑參花樹歌を作りしこと唐詩選に出づ　(二) 骨肉日に疎きは只だ相見ざるが爲に情相通ぜざるに由る

冠昏喪祭。禮之大者。今人都不理會。豺獺皆知報本。今士大夫家多忽此。厚於奉養。而薄於先祖。甚不可也。某嘗修六禮大略。家必有廟(本註云。庶人影堂。)廟必有主。(本

冠昏喪祭は、禮の大なる者なり。今の人都て理會せず。豺獺皆本に報ずるを知れり。今士大夫の家多く此を忽にす。奉養に厚うして、先祖に薄きは、甚だ不可なり。某嘗て六禮(一)の大略を修む。家、必ず廟(二)あり。(本註に云く、庶人は影堂(三)を立つ。)廟、必ず主(四)あり。(本註に云く、高祖より以上、即ち當に祧(五)すべし。又云く、今の人、影を以て祭る。或は一髭髮も相似ざるときは、則ち祭る所、已に是れ別人、大に不便なり。)月朔(六)には、必ず新しき(七)を薦む。(本註に云く、薦めて後、方に食ふ。)時祭(八)には、仲月(九)を用ふ。(本註に云く、高祖に止まる。旁親(一〇)の後無き者は、之を別位に祭る。)冬至には、始祖(一一)を祭る。(本註に云く、冬至は陽の始なり。始祖は、厥の初めて民を生ずるの祖なり。主無

一年工夫。

宗子法壞。則人不三自知二來處一。以至下流二轉四方一。往往親未レ絕不中相識上。今且試以二一二巨公之家一行レ之。其術要レ得二拘守得一。須下是且如三唐時立二廟院一。仍不レ得三分二割了祖業一。使中一人主上之。

凡人家法。須下月爲二一會一以合上族。古人有二花樹韋家宗

㊀ 宗子の法久しく廢して今俄に行ひ難きものは、一年には一年の工夫を用ひ、年々に組立て丶漸次之を行ひ、永久に之を持することを心懸くべし

宗子の法壞るゝときは、則ち人自ら來處（一）を知らず、以て四方に流轉して、往往親未だ絕えざれども相識らざるに至る（二）。今且く試みに一二巨公（三）の家を以て之を行へ。其術拘守（四）し得ることを得んと要せば、須らく是れ且く唐の時廟院（五）を立てたるが如くにし、仍つて祖業を分割し了ることを得ず、一人をして之を主らしむべし（六）。

㊀ 血統の由來 ㊁ はなれ〲になつて、血筋の絕えざる者も識らぬ同士となる ㊂ 大家のこと ㊃ かゝへまもる、失はざる意 ㊄ 家廟、自己の一族を祭る所、宗子の家に建つ ㊅ 祖先の家業を分割せず、族子の一人をして守らしむること

凡そ人家の法、須らく月に一會をなして以て族を合すべし。古人に花樹韋家（一）宗會の法あり、取るべきなり。族人の遠く來るある每に、亦一たび之をせよ。吉凶嫁娶の類、更に須らく相與に禮をなして、骨肉の意をして常に相通ぜしむべ

會法。可取也。每有族人遠來。亦一爲之。吉凶嫁娶之類。更須相與爲禮。使骨肉之意常相通。骨肉日疏者。只爲不相見。情不相接爾。

し。骨肉日に疎きは、只だ相見ざるがために、情相接らざるのみ。(二)

(一) 韋員外家の宗會に際し唐の岑參花樹歌を作りしこと唐詩選に出づ (二) 骨肉日に疎きは只だ相見ざるが爲に情相通ぜざるに出る

冠昏喪祭。禮之大者。今人都不理會。豺獺皆知報本。今士大夫家多忽此。厚於奉養。而薄於先祖。甚不可也。某嘗修六禮大略。家必有廟(本註云。庶人影堂。)廟必有主。(本

冠昏喪祭は、禮の大なる者なり。今の人都て理會せず。豺獺皆本に報ずるを知れり。今士大夫の家多く此を忽にす。奉養に厚うして、先祖に薄きは、甚だ不可なり。某嘗て六禮(一)の大略を修む。家、必ず廟あり。(二)(本註に云く、庶人は影堂(三)を立つ。)廟、必ず主あり。(四)(本註に云く、高祖より以上、即ち當に祧(五)すべし。又云く、今の人、影を以て祭る。或は一髭髮も相似ざるときは、則ち祭る所、已に是れ別人、大に不便なり。)(六)月朔には、必ず新しき(七)を薦む。(本註に云く、薦めて後、方に食ふ。)時祭(八)には、仲月(九)を用ふ。(本註に云く、高祖に止まる。(一〇)旁親の後無き者は、之を別位に祭る。)冬至には、始祖(一一)を祭る。(本註に云く、冬至は陽の始なり。始祖は、厥の初めて民を生ずるの祖なり。主無

一年工夫。

宗子法壞。則人不自知來處。以至流轉四方。往往親未絕不相識。今且試以一二巨公之家行之。其術要得拘守得。須是且如唐時立廟院。仍不得分割了祖業。使一人主之。

凡人家法。須月爲一會以合族。古人有花樹韋家宗

㊀ 宗子の法久しく廢して今俄に行ひ難きものは、一年には一年の工夫を用ひ、年々に組立て、漸次之を行ひ、永久に之を持することを心掛くべし

宗子の法壞るゝときは、則ち人自ら來處(一)を知らず、以て四方に流轉して、往往親未だ絕えざれども相識らざるに至る(二)。今且く試みに一二巨公(三)の家を以て之を行へ。其術拘守(四)し得ることを得んと要せば、須らく是れ且く唐の時廟院(五)を立てたるが如くにし、仍つて祖業を分割し了ることを得ず(六)、一人をして之を主らしむべし。

㊀ 血統の由來 ㊁ はなれ〴〵になつて、血筋の絕えざる者も識らぬ同士となる ㊂ 大家のこと ㊃ かゝへまもる、失はざる意 ㊄ 家廟、自己の一族を祭る所、宗子の家に建つ ㊅ 祖先の家業を分割せず、族子の一人をして守らしむること

凡そ人家の法、須らく月に一會をなして以て族を合すべし。古人に花樹韋家(一)宗會の法あり、取るべきなり。族人の遠く來るある每に、亦一たび之をせよ。吉凶嫁娶の類、更に須らく相與に禮をなして、骨肉の意をして常に相通ぜしむべ

管ニ轄人一亦須レ有レ法。雖嚴不レ濟レ事。今帥ニ千人一。能使下千人依レ時及レ節得レ飯喫上。只如レ此者。亦能有ニ幾人一。嘗謂。軍中夜驚。亞夫堅臥不レ起。不レ起善矣。然猶夜驚何也。亦是未レ盡レ善。

管ニ攝天下人心一。收ニ宗族一。厚ニ風俗一。使ニ人不上レ忘レ本。須下是明ニ譜系一。收ニ世族一。立中宗子法上。

又曰。一年有ニ

ず。今千人を帥ゐる、能く千人をして、時に依り節に及びて、飯を得て喫せしめん(二)こと、只だ此の如くなる者、亦能く幾人かあらん。嘗て謂ふ、軍中夜驚く、亞夫(三)堅く臥して起きずと。起きざるは善し、然れども猶ほ夜驚くは何ぞや。亦是れ未だ善を盡さゞるなり。(四)

(一) 須らく法を設けて人を管轄すべき也、下の條を見るべし (二) 千人を帥ゐて其の千人に飯を喫せしむるが如きは、さまでの難事にあらず、然るに其事を能くなし得んもの幾人もあるなし (三) 漢の景帝の時周亞夫命ぜられて七國の叛軍を討つ、時に夜軍兵驚くことあり、亞夫堅く臥して起出でず、しばらくにして其騒ぎはしづまりたれ斯く軍兵をして驚き騒がしむるは何ぞやと責むる意なり (四) 法の善を盡したるものにあらずと也

天下の人心を管攝し、(一)宗族を收め、風俗を厚くし、人をして本を忘れざらしめんには、須らく是れ譜系を明かにし、(二)世族を收め、(三)宗子の法を立つべし。(四)

(一) すべつかさどる (二) 系圖、明かにすとは分派本末を混亂せしめざるをいふ (三) 世々の族、兄弟・伯叔・子・姪の類 (四) 太祖大宗より受繼げる宗子其族を統ぶる法

又曰く、(一)一年は一年の工夫あり。

古者戍役再期而還。今年春莫行。明年夏代者至。復留備レ秋。至レ過二十一月一而歸。又明年中春遣二次戍者一。每三秋與二冬初一。兩番戍者。皆在二疆圉一。乃今之防秋也。

古者戍役(一)、再期(二)にして還る。今年の春暮に行き、明年の夏代る者至り、復留まりて秋(三)に備へ、十一月を過ぐるに至りて歸る。又明年の中春次の戍者を遣る。秋と冬初と每に、兩番の戍者、皆疆圉(四)にあり。乃ち今の(五)防秋なり。

㊀ 國境の守備に服すること ㊁ 期に一まはり、再期は二迭年 ㊂ 北狄は暑を畏れ寒を宜とせず、秋に入れば弓の膠固まるが故に多く秋冬に入犯す、兩番の戍者を置きて防ぐ所以なり ㊃ 北方の邊境 ㊄ 宋の代に戍役を防秋と云ふ

聖人無下一事不中順二天時一。故至日閉レ關。

聖人は一事も天の時に順はざることなし。故に至日(一)に關を閉づ。

㊀ 冬至の日關を閉づること第四卷に出づ

韓信多多益辨。只是分數明。

韓信の多多益ゝ辨ずるは只だ是れ分數(一)明かなるなり。

㊀ 分は部分け、數は其内の組合はせにて卽ち兵の編制にかゝる數なり

伊川先生曰。

伊川先生曰く、人を管轄するは亦(一)須らく法あるべし。徒に嚴なれば事を濟さ

時親至。召二父老一與レ之語。兒童所レ讀書。親爲正二句讀一。教者不善。則爲易置。擇二子弟之秀者一。聚而教レ之。鄕民爲二社會一。爲立二科條一。旌二別善惡一。使二有レ勸有一レ恥。

萃王假二有廟一。傳曰。羣生至衆也。而可レ一二其歸仰一。人心莫レ知二其鄕一也。而能致二其誠敬一。鬼神之不レ可レ度也。而能致二其來格一。天下萃二合人心一。摠二攝衆志一之道。非レ一。其至大莫レ過二於宗廟一。故王者萃二天下一之道。至二於有廟一。則萃道之至也。祭祀之報。本二於人心一。聖人制レ禮。以成二其德一耳。故豺獺能祭。其性然也。

(一)萃は王有廟に假る。傳に曰く、(二)羣生至りて衆し。而して其(三)歸仰を一にすべし。人心其(四)鄕を知ることなし、而も能く其誠敬を致すや、鬼神の度るべからざる、而も能く其來り格ることを致す。天下人心を(五)萃合し、衆志を(六)摠攝するの道一にあらず。其至大なるは宗廟に過ぐるものなし。故に王者天下を萃むるの道、(七)有廟に至るは、則ち萃道の至なり。祭祀の(八)報は、人心に本づく。聖人禮を制して、以て其德を成すのみ。故に(九)豺獺の能く祭るは、其性然るなり。

(一) 易の卦名。萃はあつまる、王有廟に假るとは王自らたもつ所の宗廟にいたるをいふ (二) 百姓 (三) むかふ所 (四) ところ。人心は其所を知らざれども、神に向つて一心をこめ誠敬をいたす時、鬼神は人智にはかるべからざるも、よく洋々として來りいたる (五) あつめあはす (六) すべあつむ (七) 宗廟に至りて祭祀を大にするは、天下の人心を萃合するの道なり (八) 報謝の意、もと人心の自然に本づきて出づ (九) 豺は獸を祭り、獺は魚を祭る、皆其性の然らしむる所にて、人の鬼神を祭ると異ならず

明道先生行狀云。先生爲澤州晉城令。民以事至邑者。必告之以孝悌忠信。入所以事父兄。出所以事長上。度鄉村遠近爲伍保。使之力役相助。患難相恤。而姦僞無所容。凡孤煢殘廢者。責之親戚鄉黨。使無失所。行旅出於其塗者。疾病皆有所養。諸鄉皆有校。暇

明道先生の行狀に云く、先生澤州晉城の令たりしとき、民の事を以て邑に至る者には、必ず之に告ぐるに孝悌忠信、入りては父兄に事ふる所以、出でゝは長上に事ふる所以を以てす。鄉村の遠近を度りて伍保を爲り、(一)之をして力役相助け、患難相恤みて、姦僞容るゝ所なからしむ。凡そ孤煢殘廢(二)の者は、之を親戚鄉黨に責めて、所を失することなからしめ、行旅(三)の其塗に出づる者は、疾病皆養(四)ふ所あらしむ。諸鄉皆校(五)あり。暇ある時親ら至りて、父老を召して之と語る。兒童の讀む所の書は、親ら爲に句讀を正す。敎ふる者不善なるときは、則ち爲に易へ置く。子弟の秀でたる者を擇びて、聚めて之を敎ふ。鄉民社會(六)をなす、爲に科條を立て、善惡を旌別(七)し、勸(八)むることあり恥づることあらしむ。

(一) 五家を伍となし、五伍を保とす、所謂五人組といふが如し　(二) 孤煢はひとりもの、殘廢はかたはもの　(三) 旅人の其塗を通行する者　(四) 療治　(五) 學校　(六) こゝにては鄉村の祭に社に會して酒を飲むことをいふ　(七) しるしわけをする　(八) 善をつとめ、惡を恥ぢしむる

鄉士。養二其孝愛之心一。息二其奔趨流浪之志一。風俗亦當二稍厚一。又云。三舍升補之法。皆案レ文責レ跡。有司之事。非二庠序育レ材論レ秀之道一。蓋朝廷授レ法。必達二乎下一。長官守レ法。而不レ得レ有レ爲。是以事成二於下一。而下得三以制二其上一。此後世所二以不一レ治也。或曰。長貳得レ人。則善矣。或非二其人一。不レ若三防閑詳密。可二循守一也。殊不レ知二先王制レ法。待レ人而行一。未レ聞レ立二不レ得レ人之法一也。苟長貳非レ人。不レ知二教育之道一。徒守二虛文密法一。果足三以成二人材一乎。

をいふ (四) 學校は禮儀相尙ぶの處にして、月々に學者をして競爭せしむると、才德を敎養するの道にあらずとは、是れ伊川の見識なり (五) 改めて課程とせんと也、課はおほす (六) 未だ至らざるものには、更に敎諭して、其の才德の優劣を考定せざれ (七) 學堂の名、賢者を尊むの意、延きは請待する意 (八) 役所の名、賓敬すべき行能あるものを待つ役所と、吏務の師匠たるべき人を集むる役所とを置き、士人の行義・名分の法度(檢)を檢察して、士道の研精をはからんとなり (九) 宋神宗治世の年號 (一〇) 祿を以て誘引すること (一一) 太學の貢士の數、解は貢士、額は數 (一二) 奔走し來りてあつまる、四 の士風の廢頽を論ず (一三) 國學の解額を元の百人とすること (一四) 少き處に分ち置かん (一五) 士風の矯正をはかる也 (一六) 外舍生、內舍生、上舍生の三、升補(升は上なり)共に前に出づ (一七) 文を案ずるのみにて其實質を考へず、跡を責めて其心術を察せざるは、平凡なる有司のわざ也 (一八) 學校に於て亦之を敎ふるは人物を育成し秀才を批判するの道にあらず (一九) 朝廷の法を定むる必ず下官の末にまで達すべき也 (二〇) 然るに長官其人を得ざるときは只だ法文を墨守するのみにて、裁量の智慮なく、處置の權威なく、事每に下官の手に成りて、却つて其上を制することあり (二一) 長官、次官 (二二) 防閑はふせぐ、次の「循守」に對應す(法の類廢を防閑するに詳密の意を用ひて只管に循守するに如かずとの意) (二三) 程子反駁の言 (二四) 虛文は行はれざる條文、密法は詳密なる法文

堂。以延天下道德之士。及置待賓吏師齋。立檢察士人行檢等法。又云。自元豐後。設利誘之法。增國學解額。至五百人。來者奔湊。捨父母之養。忘骨肉之愛。往來道路。旅寓他土。人心日偸。士風日薄。今欲量留一百人。餘四百人。分在州郡解額窄處。自然士人各安

處に分在せしめんことを欲す。自然に(一五)士人各〻鄕土に安んじ、其孝愛の心を養ひ、其奔趨流浪の志を息めて、風俗も亦當に稍厚かるべし。又云く、(一六)三舍升補の法、(一七)皆文を案じ跡を責むるは、有司の事なり。(一八)庠序材を育し秀を論ずるの道にあらず。蓋し(一九)朝廷の法を授くる、必ず下に達す。(二〇)長官法を守りて、僞すことあるを得ず。是を以て事下に成りて、下以て其上を制することを得たり。此れ後世治まらざる所以なり。或ひと曰く、(二一)長貳人を得ば、則ち善し。或は其人にあらずんば、(二二)防閑すること詳密にして、循守すべきに若かずと。(二三)殊に、先王の法を制する、人を待ちて行はるゝを知らず。未だ人を得ざるの法を立つるを聞かざるなり。苟も長貳人にあらず、教育の道を知らずして、徒らに(二四)簾文密法のみを守らば、果して以て人材を成すに足らんや。

(一) 大學律學武學の三學制　(二) 檢察　(三) 貢士を先づ外舍に入らしめ、月一回の試を經て其すぐれたるを上げて内舍生に補す、之を私試といふ、又年に一回内舍生を試み、其すぐれたるを上げて上舍生に補す、之を公試といふ、隔年に上舍生を試みて上に進め、官試して職を授く、外舍の試月毎に行ふを以て、蓋し虛月なしと云ふ、虛はむなしき

適ニ起居之宜一。存中畏慎之心上。今既不レ設ニ保傅之官一。則此責皆在ニ經筵一。欲乞皇帝在ニ宮中一。言動服食。皆使ニ經筵官知一レ之。有ニ翦桐之戲一。則隨レ事箴規。違ニ持養之方一。則應レ時諫止。

き、天子に戯言なしと奏して、叔虞を唐國に封じたる故事　（一二）いましめたゞす　（一三）身を持ち徳を養ふの方　（一四）いさめてとゞむる

伊川先生看ニ詳三學條制一云。舊制公私試補。蓋無ニ虛月一。學校禮義相先之地。而月使ニ之爭一。殊非ニ敎養之道一。請改レ試爲レ課。有レ所レ未レ至。則學官召而敎レ之。更不ニ考ニ定高下一。制ニ尊賢

伊川先生三學(一)の條制(二)を看詳して云く、舊制公私の試補(三)、蓋し虛月なし。學校は禮義(四)相先んずるの地にして、月々に之をして爭はしむるは、殊に敎養の道にあらず。請ふ試を改めて課(五)となし、未だ(六)至らざる所あるときは、則ち學官召して之を敎へ、更に高下を考定せざれ。尊賢堂(七)を制して、以て天下道德の士を延き、及び待賓(八)・吏師齋を置きて、士人の行檢を檢察する等の法を立てん。又云く、元豐(九)より後、利誘(一〇)の法を設け、國學(一一)の解額を增して、五百人に至る。來る者奔湊(一二)す。父母の養を捨て、骨肉の愛を忘れ、道路に往來し、他土に旅寓し、人心日に偸く、士風日に薄し。今量りて一百人(一三)を留めて、餘の四百人は、州郡の解額の窄き(一四)

伊川先生上疏曰。三代之時。人君必有二師傅保之官一。師道レ之教訓。傅傳二之德義一。保保二其身體一。後世作レ事無レ本。知レ求レ治。而不レ知レ正レ君。知規レ過。而不レ知レ養レ德。傅二德義一之道。固已疏矣。保二身體一之法。復無レ聞焉。臣以爲。傅二德義一者。在下乎防二見聞之非一。節中嗜好之過上。保二身體一者。在下乎

伊川先生上疏して曰く、三代の時、人君必ず(一)師傅保の官あり。師は之を道きて教訓し、傅は之が德義を(二)傳し、保は其身體を保んず。後世事を作すに(三)本なし。治を求むることを知りて、君を正すことを知らず。過を規すことを知りて、德を養ふことを知らず。德義を傳するの道、固より已に(四)疏なり。身體を保するの法、復(五)聞ゆることなし。臣以爲らく、德義を傳するは、(六)見聞の非を防ぎ、(七)嗜好の過を節するにあり。身體を保するは、(八)起居の宜しきに適ひ、(九)畏愼の心を存するにあり。今既に保傅の官を設けず、則ち此責皆(一〇)經筵にあり。欲乞らくは皇帝宮中にありて、言動服食、皆經筵の官をして之を知らしめよ。(一一)剪桐の戲あるときは、則ち事に隨ひて(一二)箴規し、(一三)持養の方に違ふときは、則ち時に應じて(一四)諫止せん。

(一) 太師・太傅・太保の三官　(二) かしづきまもる　(三) 末に至りて本を失ふの意、求治規過は末なり、正君養德は本なり　(四) おろそか　(五) 聞えずといふなり、其官の名はありても其任の實なきを云ふ　(六) 耳目に接する非道の事ども　(七) 嗜好の私に偏する事ども　(八) たちゐふるまひ　(九) おそれてつゝしむ　(一〇) 經書を進講する官　(一一) 周の成王が、戲れに桐の葉を切りて玉符に似せ、弟の叔虞に與ひて、以て侯に封ずるに擬す、史佚これを聞

耕レ之者少。食レ之者衆。地力不レ盡。人功不レ勤。固宜下漸從二古制一。均レ田務レ農。公私交爲二儲レ粟之法一。以爲中凶歳之備上。)八曰四民(古者四民各有二常職一。而農者十居二八九一。故衣食易レ給。今京師浮民數逾二百萬一。此在下酌レ古變レ今。均レ多恤レ寡。漸爲二之業一以救レ之耳)九曰山澤(聖人理レ物。山虞澤衡。各有二常禁一。故萬物阜豐。而財用不レ乏。今五官不レ修。六府不レ治。用レ之無レ節。取レ之不レ時。惟修二虞衡之職一。使レ將二養之一。則有二變通長久之勢一)。十曰分數(古者冠昏喪祭。車服器用。等差分別莫二敢踰僭一。故財用易レ給。而民有二常心一。今禮制不レ足三以檢二飭人情一。名數不レ足三以旌二別貴賤一。奸詐攘奪。人人求レ厭二其欲一。此爭亂之道也)其言曰。無二古今一。無二治亂一。如生民之理有レ窮。則聖王之法可レ改。後世能盡二其道一則大治。或用二其偏一則小康。此歷代彰灼著明之效也。苟或徒知レ泥レ古。而不レ能レ施二之於今一。姑欲レ徇レ名。而遂廢二其實一。此則陋儒之見。何足三以論二治道一哉。然儻謂下今人之情。皆已異二於古一。先王之迹。不レ可レ復二於今一。趣二便目前一。不レ務二高遠一。則亦恐非二大有レ爲之論一。而未レ足三以濟二當今之極弊一也。

地の力だけとりつくさず　〔三二〕士農工商の四の民　〔三三〕常に定まりたる職　〔三四〕浮浪の民、無職の民　〔三五〕業に就かしめて　〔三六〕山川より出づる物の治法　〔三七〕官名　〔三八〕司徒・司馬・司空・司士・司寇の五官　〔三九〕司土・司木・司水・司草・司器・司貨の六府　〔四〇〕虞衡の職制を修正し　〔四一〕やしなふ、山澤の物を養ふなり　〔四二〕儲蓄の勢力　〔四三〕貴賤の分際禮數　〔四四〕冠は元服、昏は婚姻、喪は葬、祭は祭祀の四大禮　〔四五〕調度の品々　〔四六〕貴賤の階級區別ありて　〔四七〕分限をこえる　〔四八〕あらためとゝのふる　〔四九〕名分と度數　〔五〇〕しるしわける　〔五一〕わるざかしくして物をかすめうばふ　〔五二〕古今の別なく　〔五三〕治世と亂世との別なく　〔五四〕民衆生活の理　〔五五〕善法を施す　〔五六〕其の一端　〔五七〕歷代の事實に照して明かなる事績　〔五八〕名聞　〔五九〕實效　〔六〇〕陋劣なる儒者　〔六一〕事績　〔六二〕目前の便宜なるに赴き　〔六三〕將來を洞見したる高遠の施爲

士不本於鄉里。而行實不修。秀民不發於學校。而人材多廢)六曰兵役(古者府史胥徒。受祿公上。而兵農未始判也。今驕兵耗匱國力。禁衞之外不漸歸之農。則將貽深慮。府史胥徒之役毒遍天下。不更其制。則未免太患)七曰民食(古者民必有九年之食。今天下

ふるときは、則ち小しく康し。此れ歴代彰灼著明(五七)の效なり。苟し或は徒らに古に泥むを知りて、之を今に施すこと能はず、姑く名に徇はん(五八)と欲して、遂に其實(五九)を廢するは、此れ則ち陋儒(六〇)の見なり。何ぞ以て治道を論ずるに足らんや。然れども儻し今人の情、皆已に古に異なり、先王の迹(六一)、今に復すべからずと謂つて、目前に趣便(六二)して、高遠(六三)を務めざるときは、則ち亦恐らくは大に爲すあるの論にあらずして、未だ以て當今の極弊を濟ふに足らじ。

(一) かしづきをしへる人 (二) 師と朋友 (三) 師傅の官 (四) 德を以ては友、任を以ては臣 (五) 天官冢宰、地官司徒、春官宗伯、夏官司馬、秋官司寇、冬官司空 (六) 天地と四時と合せて六官 (七) 堯舜と夏の禹、商の湯、周の文武 (八) 今云ふ官紀紊亂なり (九) 田のさかひ (一〇) 常の產業 (一一) 生計 (一二) 井田 (一三) 流離は流浪の義、餓殍は餓死也 (一四) 民産のきまり (一五) 生るゝ人民の數 (一六) うえて溝壑に轉び入りて死す (一七) 村里 (一八) 郊内は五家を比とし、五比を閭とし、四閭を族とし、五族を黨とし、五黨を州とし、五州を鄉とす、之を六鄉と云ふ、郊外は五家を鄰とし、五鄰を里とし、四里を酇とし、五酇を鄙とし、五鄙を縣とし、五縣を遂とす、之を六遂と云ふ (一九) 庠校 (二〇) 師儒の風廢頽して (二一) 古風俗の一 (二二) 鄉里になじまず (二三) 軍兵公役の法 (二四) 府は倉庫の奉行、史は簿記の役人、徒は雜役の官 (二五) 多數の兵士の爲に國力をへらしとぼしくす (二六) 禁衞は別として (二七) 心配ごと (二八) いたみ (二九) 國民の食糧 (三〇) 十年間に三年分三十年間に九年分の儲蓄をなす (三一)

無紀極。生齒日益繁而不爲之制。則衣食日蹙。轉死日多。四曰鄉黨。古者政教始乎鄉里。其法起於比閭。族黨州鄉酇遂以相聯屬統治。故民相安而親睦。刑法鮮犯廉恥易格。五曰貢士。庠序所以明人倫化成天下。今師學廢而道德不一。鄉射亡而禮義不興。貢

ひ、田を均し、農を務め、公私交〻粟を儲ふるの法を爲して、以て凶歲の備を爲すべし。八に曰く、四民。古は四民各〻常の職ありて、農は十に八九に居りぬ。故に衣食給し易し。今京師の浮民、數百萬に逾ゆ。此れ古を酌み、今を變じ、多きを均しうし、寡きを恤み、漸く之が業を爲して、以て之を救ふにあるのみ。九に曰く、山澤。聖人物を理す、山虞澤衡、各〻常の禁あり。故に萬物阜豐にして、財用乏からず。今五官修めず、六府治めず。之を用ひて節なく、之を取るに時ならず。惟だ虞衡の職を修めて、之を將養せしめんには、則ち變通長久の勢あらん。十に曰く、分數。古は冠昏喪祭、車服器用、等差分別して、敢て踰僭することなし。故に財用給し易くして、民常の心あり。今禮制以て人情を檢飭するに足らず、名數以て貴賤を旌別するに足らず。奸詐攘奪、人人其欲に厭かんことを求む。此れ爭亂の道なり。

其言に曰く、古今となく、治亂となく、如し生民の理窮することあるときは、則ち聖王の法改むべし。後世能く其道を盡すときは、則大ちに治まり、或は其偏を用

尊ㇾ德樂ㇾ善之風未ㇾ成。二曰六官(天地四時之官)。歷二二帝三王一未三之或二ㇾ改。今官秩汸亂。職業廢弛。太平之治所二以未ㇾ至)三曰經界(制二民常產一。使三之厚二生。則經界不ㇾ可ㇾ不ㇾ正。非地不ㇾ可ㇾ不ㇾ均。今富者跨二州縣一而莫二之止一。貧者流離餓殍而莫二之恤一。幸民雖ㇾ多而衣食不ㇾ足者蓋

正さゞるべからず、非池均(一二)らせざるべからず。今富める者、州縣に跨れども、而も之を止むることなし。貧しき者、流離餓殍(一三)すれども、而も之を恤ふることなし。幸に民多しと雖も、而も衣食足らざるは、蓋し耗極(一四)なければなり。生齒(一五)日に益〻繁くして、而も之が制をなさゞれば、則ち衣食日に蹙つて、轉死(一六)日に多し。四に曰く、鄕黨(一七)。古は政敎鄕里に始まる。其法比閭(一八)に起る。族黨、州鄕、酇遂、以て相聯屬して統治す。故に民相安じて親睦す。刑法犯すもの鮮く、廉恥格し易し。五に曰く、貢士(一九)。庠序は人倫を明かにし、天下を化成する所以なり。今師學(二〇)廢れて、道德一ならず。鄕射(二一)亡びて、禮義興らず。貢士鄕里(二二)に本かずして、行實修まらず。秀民學校に發はれずして、人材多く廢す。六に曰く兵役(二三)。古は府史(二四)胥徒、祿を公上に受けて、兵農未だ始より判れず。今驕兵國力を耗潰(二五)す。禁衞(二六)の外、漸く之を農に歸さずんば、則ち將に深慮(二七)を貽さんとす。府史胥徒の役、徧(二八)天下に遍し。其制を更めずんば、則ち未だ太患を免れず。七に曰く、民食(二九)。古は民必ず九年の食(三〇)あり。今天下之を耕す者少く、之を食ふ者衆し。地力(三一)盡さず、人功勤めず。固より宜しく漸く古制に從

其要在四於擇レ善脩レ身。至三於化二成天下一。自二鄉人一而可レ至二於聖人一之道。其學行皆中二於是一者。爲二成德一。取下材識明達。可レ進二於善一者上。使三日受二其業一。擇二其學明德尊者一。爲二太學之師一。次以分二教天下之學一。擇レ士入レ學。縣升二之州一。州賓二興於太學一。太學聚而教レ之。歲論二其賢者能者於朝一。凡選レ士之法。皆以乙性行端潔。居レ家孝悌。有下廉恥禮遜。通二明學業一。曉中達治道上者甲。

て手厚くもてなすこと (七) みやこ (八) 小童の修むべきわざ (九) それからの意 (一〇) 周旋、こゝにては行儀作法の事に解すべし (一一) 教育奬勵のこと (一二) 修行を積むこと (一三) 順序 (一四) 鄉里の常人 (一五) 怜悧なる後進 (一六) 卒業者中特に學德すぐれたる者 (一七) 地方の學校 (一八) 縣より州へ擧ぐる (一九) 禮遇を與へて起用すること (二〇) 朝廷に採用するに其賢能と職位とを評論して定むること (二一) たゞしくいさぎよき (二二) 廉直にして恥を知り、禮儀ありて謙遜なる (二三) さとりとほる

明道先生論二十事一。一曰師傅(古者自二天子一達二於庶人一。必須二師友一以成二就其德業一。今師傅之職不レ修。友臣之義未レ著。所二以

明道先生十事を論ず。一に曰く師傅。(一) 古は天子より庶人に達るまで、必ず師友を須つて、(二) 以て其德業を成就す。今師傅の職、修まらず。(三) 友臣の義、未だ著れず。(四) 德を尊び善を樂むの風、未だ成らざる所以なり。二に曰く、六官。(五) 天地四時の官、(六) 二帝三王を歷て、(七) 未だ之を改むることあらず。今官秩淆亂して、(八) 職業廢弛す。太平の治、未だ至らざる所以なり。三に曰く、經界。(九) 民の常產を制して、(一〇) 之をして生を厚うせしむるには、(一一) 則ち經界

侍賢儒。及百執事一。悉ﾚ心推訪上有下德業充備。足ﾚ爲二師表一者上。其次有下篤ﾚ志好ﾚ學。材良行修者上。延聘敦遣。萃二於京師一。俾三朝夕相與講二明正學一。其道必本二於人倫一。明二乎物理一。其敎自二小學灑掃應對一以往。修二其孝悌忠信。周旋禮樂一。其所三以誘掖激厲。漸摩成二就之一之道。皆有二節序一。

て、材良く行修まる者あり。延聘(六)敦遣し、京師(七)に萃めて、朝夕相與に正學を講明せしめよ、其道は必ず人倫に本づき、物理を明かにす。其敎は小學の灑掃應對(八)より以往(九)、其孝悌忠信、周旋禮樂(一〇)を修め、其誘掖激厲(一一)、漸摩(一二)して之を成就する所以の道は、皆節序(一三)あり。其要は善を擇び身を脩めて、天下を化成するに至るにあり。鄕人よりして聖人に至るべきの道なり。其學行皆是に中る者を成德(一五)となす。材識明逹(一四)にして、善に進むべき者を取りて、日に其業を受けしめよ。其學明かに德(一六)尊き者を擇んで、太學の師となし、次は以て天下(一七)の學に分ち敎へしめよ。士を擇んで學に入るゝには、縣(一八)より之を州に升げ、州より太學に賓興(一九)し、太學は萃めて之を敎へ、歳ごとに其賢者能者(二〇)を朝に論ぜしめよ。凡そ士を選ぶの法は、皆性行端潔(二一)にして、家に居ては孝悌(二二)に、廉恥禮遜にして、學業に通明し、治道に曉逹(二三)することある者を以てせよ。

(一) 朝廷に上書して言ふ　(二) 官吏　(三) たづねもとめる　(四) 今云ふ「先生」　(五) 今云ふ「秀才」　(六) 招聘し

心平。和則躁心釋。優柔平中。德之盛也。天下化中。治之至也。是謂三道配二天地一。古之極也。後世禮法不レ修。政刑苛紊。縱レ欲敗レ度。下民困苦。謂二古樂一不レ足レ聽也。代變二新聲一。妖淫愁怨。導レ欲增レ悲。不レ能二自止一。故有二賊レ君棄レ父。輕レ生敗レ倫。不レ可レ禁者一矣。嗚呼樂者。古以平レ心。今以助レ欲。古以宣レ化。今以長レ怨。不レ復二古禮一。不レ變二今樂一。而欲レ至二治一者遠哉。

心を平にし、今は以て欲を助け、古は以て化を宣べ、今は以て怨を長ず。古禮(一一)を復せず、今樂を變ぜずして、至治を欲する者は遠いかな。

(一) 前に出づ (二) 書の洪範の法、五行・五事・八政・五紀・皇極・三德・稽疑・庶徵・五福六極の九類也、疇は類なり (三) 八方の風、樂の八音各これに應ず、八音は金・石・絲・竹・匏・土・革・木の樂器の音 (四) 欲心平なれば平中なり、躁心釋くれば優柔なり (五) 天下の民悉く化して中なるは (六) 古の治法至極せることを歎美する詞 (七) 後の世に至りて、禮法を修むることなく政令刑罰いよいよ苛くして紊亂す (八) 力に任せて欲心さかんに法度をやぶりて下々の困苦を顧みず (九) 古樂を改めて代々新樂を興しこれによつて風俗を變ず (一〇) 樂の古今を論ず (一一) 樂の復古を主張する也

明道先生言二於朝一曰。治二天下一。以レ正二風俗一得中賢才上爲レ本。宜下先禮二命近

明道先生朝(一)に言つて曰く、天下を治むることは、風俗を正し賢才を得るを以て本となす。宜しく先づ近侍の賢儒、及百(二)執事に禮命して、心を悉して推訪せし(三)むべし。德業充ち備りて、師表(四)となすに足る者あり。其次は志(五)に篤く學を好み

濂溪先生曰。古者聖王。制ニ禮法一。修ニ敎化一。三綱正。九疇敘。百姓大和。萬物咸若。乃作レ樂。以宣ニ八風之氣一。以平ニ天下之情一。故樂聲淡而不レ傷。和而不レ淫。入ニ其耳一感ニ其心一。莫レ不ニ淡且和一焉。淡則欲

卷之九

治法類　凡二十七條

濂溪先生曰く、古者聖王、禮法を制し、敎化を修め、(一)三綱正しく、(二)九疇叙で、百姓大に和ぎ、萬物咸若ふ。乃ち樂を作りて、以て(三)八風の氣を宣べ、以て天下の情を平にす。故に樂の聲、淡くして傷らず、和ぎて淫せず、其耳に入り其心に感じて、淡く且和がずといふことなし。淡ければ則ち欲心平なり。和げば則ち躁心釋く。(四)優柔平中は、德の盛なるなり。天下化中(五)は、治の至れるなり。是を道天地に配すといふ。古の(六)極なり。(七)後世禮法修らず、政刑苛紊なり。(八)欲を縱にし度を敗り、下民困苦す。(九)古樂を謂ひて聽くに足らずとし、代〻新聲に變じ、妖淫愁怨、欲を導き悲みを增して自ら止むること能はず。故に君を賊ひ父を棄て、生を輕んじ倫を敗りて、禁ずべからざる者あり。嗚呼(一〇)樂や、古は以て

父母之心於百姓。謂二之王道一可乎。所謂父母之心。非三徒見二於言一。必須下視二四海之民一。如中己之子上。設使下四海之內。皆爲中己之子上。則講治之術。必不レ爲二秦漢之少レ恩。必不レ爲二五伯之假レ名。巽之爲二朝廷一言。人不レ足二與適一。政不レ足二與間一。能使下吾君愛二天下之人一。如中赤子上。則治德必日新。人之進者必良士。帝王之道。不二必改レ途而成。學與レ政。不レ殊レ心而得矣。

如くならしむるときは、則ち治徳(ちとく)(一一)必ず日に新(あらた)にして、人の進(すゝ)む者(一二)必ず良士(りやうし)ならん。帝王(ていわう)の道、必ずしも途(みち)(一三)を改(あらた)めずして成り、學と政と、心を殊(こと)に(一四)せずして得ん。

(一) 前に出づ (二) 今の朝廷は道德の學と政治の術とは二途にして一ならずといふ、是れ古來の誤り也 (三) 道なり、道を推行ひて天下に施さんか (四) 政治の術（孔孟は政治の本は道德にあるを主張するが故に、政治を道德の外に置くことを爲さゞる所といふ） (五) 君主と宰相 (六) 口頭 (七) 政治を講ずるの心術 (八) 秦漢の恩德少きに倣はず (九) 五伯（齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、宋の襄公、楚の莊公）の名を仁義に假りて天下に號令し、諸侯に覇たりし故智を學ばず (一〇) 人をとがむるに及ばず、政をそしるに及ばず、只だ能く君主をして、滿天下の民を愛すること赤子のごとくならしめば (一一) 國を治むるの德 (一二) 人の舉げて進むる人物必ず賢才良士なるべきぞ (一三) 行く途の方角 (一四) 異にせず

則德可久。業可大。鄭聲佞人。能使爲邦者。喪所以守。故放遠之。

能く邦を爲むる者をして、守る所以を喪はしむ。故に之を放ち遠ざく。

一 鄭聲佞人と、鄭國の樂は淫靡なり、佞人は邪諂なる人

横渠先生答范巽之書曰。朝廷以道學政術爲二事。此正自古之可憂者。巽之謂孔孟可作。將推其所得。而施諸天下邪。將以其所不爲。而強施之於天下歟。大都君相。以父母天下爲王道。不能推

横渠先生范巽之(一)に答ふる書に曰く、朝廷道學政術(二)を以て二事となす。此れ正に古よりの憂ふべき者なり。巽之謂へ、孔孟作るべくんば、將に其の得る(三)所を推して、諸を天下に施さんとせんか、將に其の爲さゞる所を以て、強て之を天下に施さんとせんか。大都君相(五)は、天下に父母(四)たるを以て王道となす。父母の心を百姓に推すこと能はざる、之を王道と謂はゞ可ならんや。所謂父母の心とは、徒に言(六)に見るゝのみにあらずして、必ず須らく四海の民を視ること、己の子の如くなるべし。設し四海の内をして、皆己の子たらしめば、則ち講治(七)の術、必ず秦漢(八)の恩少きことをなさず、必ず五伯(九)の名を假ることをなさず。巽之朝廷の爲に言へ、人與に適むる(一〇)に足らず、政與に間るに足らず、能く吾君をして天下の人を愛すること、赤子の

言レ事。門人疑レ之。孟子曰。我先攻二其邪心一。心既正。然後天下之事。可二從而理一也。夫政事之失。用レ人之非。知者能更レ之。直者能諫レ之。然非心存焉。則一事之失。救而正レ之。後之失者。將レ不レ勝レ救矣。格二其非心一。使レ無二不正一。非二大人一其孰能レ之。

して、不正なからしめんこと、大人にあらずんば其れ孰か之を能くせん。

(一)孟子に出づ (二)非其心に生ず (三)政治上の事 (四)邪心は又非心なり (五)非心の存する間は (六)一旦の失、一つの失 (七)後又重ねての失

横渠先生曰。道二千乘之國一。不レ及二禮樂刑政一。而云二節レ用而愛レ人。使レ民以レ時。言能如レ是則法行。不レ能レ如レ是。則法不レ行。禮樂刑政。亦制數而已耳。

横渠先生曰く、千乘(一)の國を道むるに、禮樂刑政に及ばずして、用を節して(二)人を愛し、民(三)を使ふに時を以てすといふ。言は、能く是の如くなれば則ち法(四)行はる。是の如くなる能はざるときは、則ち法徒に行はれず、禮樂刑政も、亦制數(五)のみなるをいふ。

(一)出兵に應ずるに兵車千輛をあげ得る國 (二)つゞまやかにする (三)民 (四)前に出づ (五)制度の條目の數

法立而能守。

法立ちて能く守るときは、則ち德久しかるべく、業大なるべし。鄭聲佞人は、(一)

善心。而惡自消。治レ民者。導二之敬讓一。而爭自息。

明道先生曰。必有二關雎麟趾之意一。然後可レ行二周官之法度一。

君仁莫レ不レ仁。君義莫レ不レ義。天下之治亂。繫二乎人君仁不仁一耳。離レ是而非。則生二於其心一。必害二於其政一。豈待三乎作二之於外一哉。昔者孟子三見二齊王一。而不レ

讓に導きて、爭自ら息む。

明道先生曰く、必ず關雎麟趾(一)の意ありて、然して後周官の法度を行ふべし。

(一) 關雎も麟趾も詩の周南の篇に出づ。前者は周の文王の妃太姒のしづかにして正しき德あるを詠じ、後者は文王の子孫に仁愛忠厚の性あるをよめり。朱子曰く閨門衽席の微より積累して、天下に薫蒸洋溢し、一民一物も其化を被らざるものなきに至つて、然して後以て周官の法度を行ふべし、

君仁(二)なれば仁ならざることなく、君義なれば義ならざることなし。天下の治亂は、人君の仁不仁に繫るのみ。是を離れて非なるときは、則ち其心に生じて、必ず其政に害あり。豈に之を外に作すを待たんや。昔者孟子三たび齊王(三)を見て、事(三)を言はず。門人之を疑ふ。孟子曰く、我先づ其邪心(四)を攻むと。心既に正しうして、然して後天下の事、從つて理むべし。夫れ政事の失、人を用ふるの非、知る者は能く之を更め、直き者は能く之を諫む。然して(五)非心存す、則ち一事(六)の失は、救うて之を正すとも、(七)後の失する者は、將に救ふに勝へざらんとす。其非心を格

則已。若須ㇾ救ㇾ之。則須ㇾ變。大變則大益。小變則小益。

㊄ 變革なり、改革すること大なれば大いに益あり、小なれば小さき益ありといふ

唐有二天下一。雖ㇾ號二治平一。然亦有二夷狄之風一。三綱不ㇾ正。無二君臣父子夫婦一。其原始二於太宗一也。故其後世子弟。皆不ㇾ可ㇾ止。使二君不ㇾ君。臣不ㇾ臣。故藩鎭不ㇾ賓。權臣跋扈。陵夷有二五代之亂一。漢之治過二於唐一。漢大綱正。唐萬目擧。本朝大綱正。萬目亦未二盡擧一。

唐の天下を有つ、治平と號すと雖も、然も亦夷狄の風あり。三綱(一)正しからず、君臣・父子・夫婦なし。其原太宗に始まる。故に其後世の子弟、皆止むべからず。君をして君たらず、臣をして臣たらざらしむ。故に藩鎭賓せず(二)、權臣跋扈し(三)、陵夷(四)して五代の亂あり。漢の治は唐に過ぎたり。漢は大綱(五)正しく、唐は萬目擧る。本朝(六)は大綱正しけれども、萬目亦未だ盡く擧らず。

㊀ 君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱 ㊁ 諸藩來朝せず ㊂ 重臣威權をほしいまゝにす ㊃ おとろへたる意味 ㊄ 大綱は綱常、萬目は政治の條目 ㊅ 宋を指す

敎ㇾ人者。養二其

人を敎ふる者は、其善心を養うて、惡自ら消え、民を治むる者は、之を敬

曰。舉ニ爾所レ知。爾所レ不レ知。人其舍諸。便見下仲弓與ニ聖人一。用レ心之大小上。推ニ此義一。則一心可ニ以喪レ邦。一心可ニ以興レ邦。只在ニ公私之間一爾。

㈠ 綱領條目 ㈡ 官吏の職制を先にし ㈢ 地方官は民に法を宣傳し ㈣ 物價の昂低を平均にし ㈤ 度量衡を一にすること ㈥ 人々其自ら親むものを親しとして、然る後單に自らの親しきものだけを親しとせず、廣く天下の人を親み愛すといふ意、賢才を舉げ用ふることを論ず、次の句併せ見るべし ㈦ 冉雍字仲弓、孔子の弟子 ㈧ いかにして ㈨ 汝が知らざる賢才は他人捨てずしてそれ〳〵に舉げて進めんとの意 ㈩ 仲弓と孔子との問答によりて、其の心を用ふるの大小を見て義を推すときは、一は私に出て、其の結果は邦を喪ふに至るべく、一は公にして邦を興すに至るべし、公私の間あるのみとなり

治道亦有ニ從レ本而言一。亦有ニ從レ事而言一。從レ本而言。惟從レ格ニ君心之非一。正レ心以正ニ朝廷一。正ニ朝廷一以正ニ百官一。若ニ從レ事而言一。不レ救

(一)治道も亦本よりして言ふあり。亦事よりして言ふあり。本よりして言ふは、惟だ(二)君心の非を格すよりす。心を正して以て朝廷を正し、朝廷を正して以て百官を正す。(三)事よりして言ふが若きは、救はざるときは則ち已む、若し須らく之を救ふ(四)べくんば、則ち須らく變ずべし。(五)大に變ずるときは則ち大に益あり。小しく變ずるときは則ち小しく益あり。

㈠ 國を治むる道 ㈡ 君主の心の正しからんことを本なり ㈢ 政治上の事 ㈣ 匡救なり、政事をたゞしすくふ

創レ制立レ度。盡二天下之事一者。治之法也。聖人治二天下一之道。唯此二端而已。

五 治國の方法

明道先生曰。先王之世。以レ道治二天下一。後世只是以レ法把二持天下一。

爲レ政。須レ要レ有二紀綱文章一。先二有司一。鄕官讀レ法。平レ價。謹二權量一。皆不レ可レ闕也。人各親二其親一。然後能不三獨親二其親一。仲弓曰。焉知二賢才一而擧レ之。子

明道先生曰く、先王の世は、道を以て天下を治む。後世は只だ是れ法を以て天下を把持す。

一 後世の治は亦先王の治にあらず、惟だ法令を持して天下を控制し以て天下を把持するのみ

政を爲すには、須らく紀綱文章あらんことを要すべし。有司を先んじ、鄕官法を讀み、價を平にし、權量を謹むと、皆闕くべからず。人各〻其親を親として、然る後能く獨り其親のみを親とせず。仲弓曰く、焉ぞ賢才を知りて之を擧げん。子曰く、爾が知る所を擧げよ。爾が知らざる所は、人其れ舍てんやと。便ち仲弓と聖人と、心を用ふるの大小を見るべし。此義を推すときは、則ち一心以て邦を喪ふべく、一心以て邦を興すべし。只だ公私の間あるのみ。

時且儉、必書。見三勞レ民爲二重事一也。然有下用二民力一之大。而不レ書者上。爲レ教之意深矣。僖公修二泮宮一。復二閟宮一。非レ不レ用二民力一也。然而不レ書。二者復古興レ廢之大事。爲レ國之先務。如レ是而用二民力一。乃所レ當レ用也。人君知二此義一。知下爲レ政之先後輕重上矣。

くにして民力を用ふるは、乃ち當に用ふべき所なればなり。人君此義を知らば、政を爲すの先後輕重を知らん。

(一)民の爲に君を立つるは民を養ふ所以なり　(二)民を養ふの道は民力を愛むにあり　(三)敎化の行はるゝ、風俗の善良なる、皆民力の充足にもとづく　(四)民をして國の爲に興作せしむるに時を選まざる又義をそこなふは君主の罪なり　(五)春秋に民力の用ひられたることを記すは、國の爲め民の勞力を重大事視したればなり　(六)僖の君、泮宮は諸侯の學宮、閟宮は僖の宗廟、復は修復なり　(七)一は賢材を敎育する所以、一は祖先に尊事する所以、先王の法を復し廢れたるを興すの大事となす

治レ身齊レ家。以至レ平二天下一者。治之道也。建二立治綱一。分二正百職一。順二天時一以制レ事。至三於

身を治め家を齊へ、以て天下を平にするに至るは、(一)治の道なり。(二)治綱を建立し、(三)百職を分正し、天の時に順ひて以て事を制し、(四)制を創め度を立てゝ、天下の事を盡すに至るは、(五)治の法なり。聖人の天下を治むるの道、唯だ此二端のみ。

(一)治國の常道　(二)政治の大綱　(三)百官の職責を分ち正す　(四)法制を定め規則を立て、天下の事務を處し行

奈何。曰。唯聖人爲下能通二其變於未レ窮。不上レ使レ至二於極一。堯舜是也。故有レ終而無レ亂。

（一）天下の事進まざれば退き、一所に定置して停滞することなし、既に濟せる終りには進まずして止まる、即ち道已に窮まりて衰亂至るべしとなり、故に其の未だ窮極せざるに先ちて變通の策を施さゞるべからず、堯舜の民をして倦まざらしむと云ふ、これ治者の最も意を注ぐべき所なり　（二）易の卦名。既濟

爲レ民立レ君。所三以養二之也。養レ民之道。在レ愛二其力一。民力足則生養遂。生養遂則教化行。而風俗美。故爲レ政以二民力一爲レ重也。春秋凡用二民力一必書。其所二興作一不レ時。害レ義固爲レ罪也。雖二

（一）民の爲に君を立つるは、之を養ふ所以なり。（二）民を養ふの道は、其力を愛するにあり。民力足るときは則ち生養遂げ、生養遂ぐるときは則ち（三）教化行はれて、風俗美なり。故に政を爲すには民力を以て重しとなす。春秋には凡そ民力を用ふれば必ず書す。（四）其興作する所時ならず、義を害するは固より罪たり。時にして且つ義なりと雖も必ず（五）書すは、民を勞することの重事たるを見さんとてなり。然れども民力を用ふるの大なるものにして、書さゞる者あり。教をなすの意深し。（六）僖公の泮宮を修め閟宮を復すると、民力を用ひざるにはあらず。然れども書さず。（七）二者は古に復し廢れたるを興すの大事、國を爲むるの先務にして、是の如

兌説而能貞。是以上順二天理一。下應二人心一。説道之至正至善者也。若三夫違レ道以干二百姓之譽一者。苟説之道。違レ道不レ順レ天。干レ譽非レ應レ人。苟取二一時之説一耳。非二君子之正道一。君子之道。其説二於民一。如二天地之施一。感二之於心一。而説服無レ斁。

(一)兌は説びて能く貞なり。是を以て上天理に順ひ、下人心に應ず。説道の至正(二)至善なるものなり。夫の道に違ひて以て百姓の譽を干むるが若きは、苟に説ばしむるの道なり。道に違ふは天に順はざるなり。譽を干むるは人に應ずるにあらずして、苟に一時の説を取るのみ。君子の正道にあらず。君子の道、其の民を説ばしむること、天地の施の如く、之を心に感じて、説服して斁ふことなし。

(一)易の卦の名、兌はよろこぶ　(二)一時的に、假に

天下之事。不レ進則退。無二一定之理一。濟之終不レ進而止矣。無二常止一也。衰亂至矣。蓋其道已窮極也。聖人至レ此

(一)天下の事、進まざるときは則ち退き、一定するの理なし。(二)濟の終は進まずして止まる。常に止ることなし。衰亂至る、蓋し其道已に窮極すればなり。聖人此に至りて奈何せん。曰く、唯だ聖人は能く其變の未だ窮らざるに通じて、極に至らしめざることをなす。堯舜是れなり。故に終ることありて亂るゝことなし。

爲二可レ久可レ繼之治一。自レ漢以下。亂既除。則不三復有二爲。姑隨レ時維持而已。故不レ能レ成二善法一。蓋不レ知二來復之義一也。有レ攸レ往。夙吉。謂下尙有二當レ解之事一。則早爲レ之乃吉上也。當レ解而未レ盡者。不二早去一。則將二復盛一。事之復生者。不二早爲一。則將二漸大一。故夙則吉也。

すべからず、寬大簡易の治を布かんことすなはち其宜しき也 (四) 外に出向いて爲すべきことなきの意 (五) にはかに何事をも爲すの暇あらず (六) 久安長治の計をなす (七) 永久善後の計をなさず、姑息なる臨時の維持策のみ (八) 尙は外に出向きて爲すべきことあれば、速かになすことよし (九) 解くとは解決すべきことの意 (一〇) 解決すべくして未だ決定せざること (一一) 一旦收まりたる紛擾の更にまた出で來りたるなどをいふ

夫有レ物必有レ則。父止二於慈一。子止二於孝一。君止二於仁一。臣止二於敬一。萬物庶事。莫レ不三各有二其所一。得二其所一則安。失二其所一則悖。聖人所下以能使中天下順治上。非下能爲レ物作上レ則也。唯止レ之。各於二其所一而已。

夫れ物あれば必ず則あり。(一)父は慈に止まり、子は孝に止まり、君は仁に止まり、臣は敬に止まる。萬物庶事、各〻其所あらずといふことなし。其所を得るときは則ち安く、其所を失ふときは則ち悖る。(二)聖人の能く天下をして順治せしむる所以は、能く物の爲に則を作すにあらず、唯だ之に止まるに、各〻其所に於てするがためのみ。

(一) 前に出づ (二) 止まる所即ち則（ノリ）なり

廣大平易。當ニ天下之難方解。人始離ニ艱苦一。不ㇾ可下復以ニ煩苛嚴急ニ治上ㇾ之。要三濟以ニ寬大簡易一。乃其宜也。既解ニ其難一。而安平無事矣。是無ㇾ所ㇾ往也。則當下脩ニ復治道一。正ニ紀綱一。明ニ法度一。進中復先代明王之治上。是來復也。謂ㇾ反ニ正理一也。自ㇾ古聖王。救ㇾ難定ㇾ亂。其始未ㇾ暇ニ遽爲一也。既安定。則

ず。濟ふに寬大簡易を以てすることを要す。乃ち其宜しきなり。既に其難を解きて、安平無事なり。是れ往く(四)所なきなり。則ち當に治道を脩復し、紀綱を正し、法度を明かにし、先代明王の治に進み復るべし。是れ來り復るなり。正理に反るをいふなり。古より聖王の、難を救ひ亂を定むるや、其始め未だ遽(五)に爲すに暇あらず。既に安定なれば、則ち久しう(六)すべく繼ぐべきの治をなす。漢より以下、亂既に除くときは、則ち復爲す(七)ことあらず、姑く時に隨ひて維持するのみ。故に善法をなすこと能はず。蓋し來復の義を知らざればなり。往く攸(八)あれば夙くして吉なりとは、尚ほ當に解く(九)べき事あるときは、則ち早く之をなして乃ち吉なりといへるなり。當に(一〇)解くべくして未だ盡さゞる者は、早く去かざるときは、則ち將に復盛ならんとす。事の復生ずる(一一)者は、早くなさゞるときは、則ち將に漸く大ならんとす。故に夙くすれば則ち吉なり。

(一) 易の解卦　(二) 方位にあらず坤の德をいふなり　(三) 國難方に解けて民始めて安堵す、其時煩苛嚴急の政を施

則牙雖存。而剛躁自止。君子法豶豕之義。知天下之惡。不可以力制也。則察其機。持其要。塞絕其本原。故不假刑法嚴峻。而惡自止也。且如止盜。民有欲心。見利則動。苟不知教。而迫於饑寒。雖刑殺日施。其能勝億兆利欲之心乎。聖人則知所以止之之道。不尚威刑。而修政教。使之有農桑之業。知廉恥之道。雖賞之不竊矣。

以の道を知る。威刑(一一)を尚ばずして、政教を修め、之をして農桑(一二)の業を有ち、廉恥の道を知らしめば、之を賞すと雖も竊まざらん(一三)。

(一) 大畜は易の卦名 (二) 去勢すること (三) 總攝はすべくゝり、機會はをり (四) 其の要領を得ること (五) 豕の牙あるものは剛躁なればこれを去勢することを云ふ (六) 牙を制止すること (七) 勢は睾丸、これをのぞき去るときは、牙ありとも剛躁ならず (八) 去勢して其の剛躁を制するが如く、導びくに道を以てし其の惡の本原を塞ぎ絕つ (九) 道、仁義の敎 (一〇) 萬民 (一一) 刑罰 (一二) 耕して食ひ織りて衣ること、又一般に農人の業を云ふ (一三) 前の盜を止むるの句に對す

解利西南。無所往。其來復吉。有攸往。夙吉。傳曰。西南坤方。坤之體。

(一)解は西南に利あり。往く所なければ、其れ來り復りて吉なり。往く攸あれば、夙くして吉なり。傳に曰く、(二)西南は坤の方なり。坤の體は、廣大平易なり。(三)天下の難方に解くるに當り、人始めて艱苦を離る。復煩苛嚴急を以て之を治むべから

離貳怨隙者。蓋讒邪間於其間也。去其間隔而合之。則無不和且治矣。噬嗑者治天下之大用也。

大畜之六五曰。豶豕之牙吉。傳曰。物有總攝。事有機會。聖人操得其要。則視億兆之心猶一心。道之斯行。止之則戢。故不勞而治。其用若豶豕之牙也。豕剛躁之物。若强制其牙。則用力勞而不能止。若豶去其勢。

(一)大畜の六五に曰く、豕の牙あるを豶す(二)吉なり、と。傳に曰く、物に總攝(三)あり、事に機會あり、聖人其要(四)を操り得るときは、則ち億兆の心を視ること、猶ほ一心のごとし。之を道けば斯に行き、之を止むれば則ち戢まる。故に勞せずして治まる。其用(五)豕の牙あるを豶するが若し。豕は剛躁の物なり。若し强ひて其牙(六)を制するときは、則ち力を用ひ勞して止むること能はず。若し其勢(七)を豶去するときは、則ち牙存すと雖も、而も剛躁自ら止む。君子豶豕の義に法り、天下の惡、力を以て制すべからざることを知るや、則ち其機を察し、其要を持し、其本原(八)を塞ぎ絕つ。故に刑法の嚴峻を假らずして、惡自ら止む。且つ盜を止むるが如き、民欲心ありて、利を見るときは則ち動く。苟し敎(九)を知らずして、饑寒に迫らば、刑殺日に施すと雖も、其れ能く億兆(一〇)利欲の心に勝たんや。聖人は則ち之を止むる所

敬一。如二始盥之初一。勿レ使下誠意少散。如中既薦之後上。則天下莫レ不下盡二其孚誠一。顒然瞻中仰之上矣。

凡天下至二於一國一家一。至二於萬事一。所三以不二和合一者。皆由レ有レ閒也。無レ閒則合矣。以至二天地之生。萬物之成一。皆合而後能遂。凡未レ合者。皆有レ閒也。若二君臣父子。親戚朋友之閒一。有二

を瞻仰(六)せざることなし。

(一) 易の觀卦の彖辭、薦めずとは未だ奉らぬ意、顒若はうやまひあふぐ貌 (二) てほん (三) つゝしみうやまふ、始盥は祭祀の最初手をあらふ、これより獻薦の式あり、人心精純にして嚴肅 (四) 誠の心稍ちること、すでにすゝめしあとの如くならしむるは誠意の少散を見るなり (五) うやまひあふぐ貌 (六) 見上げる仰ぎ見る

凡そ天下より一國一家に至り、萬事に至るまで、和合せざる所以の者は、皆閒あるによる。閒なければ則ち合す。以て天地の生、萬物の成に至るまで、皆合して而して後能く遂ぐ。凡そ未だ合せざる者は、皆閒あればなり。君臣父子、親戚朋友の閒の若き、離貳怨隙(一)あるは、蓋し讒邪其閒を閒つればなり。其閒隔を去りて之を合すれば、則ち和して且つ治まらずといふことなし。噬嗑(二)は天下を治むるの大用なり。

(一) 離貳ははなれうたがふこと、怨隙は仲あしきこと (二) 易の卦名。噬嗑とは齒をかみあはすこと、閒あれば天地氣通せず生化遂ぐることなし、人倫情通ぜず恩義日にそむく、頤中に物あり、噬嗑と云ふ、噬して之を合すれば閒を去る所以、天下を治むるの大用あり

患已生矣。故在レ包レ荒也。自レ古泰治之世。必漸至二於衰替一。蓋由三狃二習安逸一。因循而然。自レ非二剛斷之君。英烈之輔一。不レ能三挺特奮發、以革二其弊一也。故曰レ用二馮河一。或疑。上云レ包レ荒。則是包含寬容。此云レ用二馮河一。則是奮發改革。似二相反一也。不レ知下以二含容之量一。施二剛果之用一。乃聖賢之爲上也。

すは、乃ち聖賢の爲なることを知らざるなり。

（一）易の泰卦　（二）荒穢を包含する意　（三）舟なくして河を渡ること、こゝにては馮河の勇を用ふるの意なり　（四）人の心泰平に馴れてはしいまゝになるときは、政道はゆるみ法度はすたれ諸事節制を失ふ　（五）包容の大なる德性　（六）政治の仕方がゆるやかにつまびらかにて弊害はあらたまり事はをさまりて人々安く心おちつく　（七）含んで弘き度量なく、いきどほりにくむ心あるときは、深きかんがへも浮ばず、暴れみだるゝうれへ來るべし　（八）其上弊害はあらたまらずして目近くうれふべき事ども出で來らん故に荒穢をも包含せよといふ也　（九）古來の例おほかた皆然り、衰替はおとろへすたる　（一〇）強くいさぎよく事を裁く君、ひいでゝはげしき宰相　（一一）ぬきんでゝふるひおこる　（一二）さきに荒穢を包含すと云ひて、此に馮河を用ふといふは、前後矛盾全く相反するにあらずや　（一三）包含と寬容との度量、卽ち包荒をいふ　（一四）剛斷と果決との作用、馮河の勇をいふなり

觀盥而不レ薦。有レ孚顒若。傳曰。君子居レ上。爲二天下之表儀一。必極二其莊

（一）觀は盥ひて薦めず、孚ありて顒若たり。傳に曰く、君子上に居る、天下の（二）表儀たり。必ず其（三）莊敬を極むること、始盥の初の如くして、（四）誠意少散既に薦めし後の如くならしむることなからんには、則ち天下其孚誠を盡して、（五）顒然として之

自二庶士一至二于公卿一。日志二於尊榮一。農工商賈。日志二於富侈一。億兆之心。交騖二於利一。天下紛然。如之何其可レ一也。欲二其不一レ亂難矣。

泰之九二曰。包レ荒。用二馮河一。傳曰。人情安肆。則政舒緩。而法度廢弛。庶事無レ節。治レ之之道。必有下包二含荒穢一之量上。則其施爲寬裕詳密。弊革事理。而人安レ之。若無二含弘之度一。有二忿疾之心一。則無二深遠之慮一。有二暴擾之患一。深弊未レ去。而近

(一)泰の九二に曰く、(二)荒れたるを包み、(三)馮河を用ふと。傳に曰く、(四)人情安肆なれば、則ち政舒緩にして、法度廢弛し、庶事節なし。之を治むるの道、必ず荒穢をも包含するの(五)量あるときは、則ち其(六)施爲寬裕詳密にして、弊革まり事理まりて、人之に安ず。若し(七)含弘の度なく、忿疾の心あるときは、則ち深遠の慮なくして、暴擾の患あり。(八)深弊未だ去らずして、近患已に生ず。故に荒をも包むにあり。(九)古より、泰治の世、必ず漸く衰替に至るは、蓋し安逸に狃れ習ふに由つて、因循して然り、(一〇)剛斷の君、英烈の輔にあらざるよりは、(一一)挺特奮發して、以て其弊を革むると能はず。故に馮河を用ふといふ。或ひと疑ふ、上に荒をも包むと云ふは、則ち是れ包含寬容なり、此に馮河を用ふといふは、則ち是れ奮發して改革することなれば、(一二)相反するに似たりと。(一三)含容の量を以て(一四)剛果の用を施

然。以㆓臣於㆑君言㆑之。竭㆓其忠誠㆒。致㆓其才力㆒。乃顯㆓其比㆑君之道也。用㆑之與㆑否。在㆑君而已。不㆑可㆔阿諛逢迎。求㆓其比㆑己也。在㆓朋友㆒亦然。修㆑身誠㆑意。以待㆑之。親㆑己與㆑否。在㆑人而已。不㆑可㆔巧言令色。曲從苟合。以求㆓人之比㆑己也。於㆓鄕黨親戚㆒。於㆓衆人㆒。莫㆑不㆓皆然㆒。三驅失㆓前禽㆒之義也。

古之時。公卿大夫而下。位各稱㆓其德㆒。終㆑身居㆑之。得㆓其分㆒也。位未㆑稱㆑德。則君擧而進㆑之。士脩㆓其學㆒。學至而君求㆑之。皆非㆑有㆑預㆓於己㆒也。農工商賈。勤㆓其事㆒。而所㆑享有㆑限。故皆有㆓定志㆒。而天下之心可㆑一。後世

古の時、公卿大夫より下、位各〻其德に稱ふ。身を終ふるまで之に居るは、其分を得たれば也。位未だ德に稱はざれば、則ち君擧げて之を進む。士は其學を脩め、學至れば君之を求む。皆己に預かることあるにあらず。農工商賈、其事を勤めて、享くる所限あり。故に皆定志ありて、天下の心一なるべし。後世、庶士より公卿に至るまで、日に尊榮を志し、農工商賈は、日に富侈を志す。億兆の心、交〻利に鶩せて、天下紛然たり。如何ぞ其れ一なるべき。其亂れざらんを欲するも難し。

㊀ 昔は位各々其德にかなひて生涯こゝに居るものは其分を得たればなり、位德にかなはぬ士は君主擧げ進ましむ、又學至る士は君主求めて位に就かしむ、皆己よりするにはあらず、農工商は其業に勵みて享くる所限ありて皆志定まりて欲を云はず天下の心一つのごとかりき ㊁ 後世に至りて庶士より公卿にいたるまで日々尊榮をしたひ、農工商は富侈をしたひ、萬民ともぐ＼利欲に馳せて、天下麻の亂れたるが如し、何として天下の心一なるべきぞ

求二下之比一。其道亦已狹矣。其能得二天下之比一乎。王者顯二明其比道一。天下自然來比。來者撫レ之。固不三煦煦然求二比於物一。若二田之三驅一。禽之去者。從而不レ追。來者則取レ之也。此王道之大。所二以其民皥皥。而莫レ知レ爲レ之者也。非下唯人君比二天下一之道如レ此。大率人之相比。莫レ不レ

相比すること、然らずといふことなし。臣の君に於けるを以て之を言はゞ、其忠誠を竭し、其才力を致すは、乃ち其君に比するを顯かにするの道なり。之を用ふると否とは、君にあるのみ。(六)阿諛逢迎して、其の己に比せんことを求むべからず。朋友にありても亦然り。身を修め意を誠にして以て之を待つ。己に親むと否とは、人にあるのみ。(七)巧言令色、(八)曲從苟合して、以て人の己に比せんことを求むべからず。鄕黨親戚に於ける、衆人に於ける、皆然らずといふことなし。(九)三驅して前禽を失するの義なり。

(一) 比は易の比卦、比はしたしむ (二) 王者の田獵には、三面を驅り圍みて前一面を開き、中に入るものは獲、去るものは追はず、故に前禽を失ふといふ (三) 僅なる惠みを衒ひ、道にそむきて譽れを求め、是を以て下々を親みつながんとするは其道亦狹小なり (四) 日出で丶おもむろに萬物をあたゝむる貌、親みを物に求めざることは田の三驅して禽の去るものを追はず、來るものを取るがごとくに、民の來る者を愛撫し、去るものを追はぬといふ意 (五) 皡々は廣大自得の貌、之を爲すを知らずとは善政の下に安んずる民が治者を信じ親みて政治のよしあしさへ知らぬ顏に樂み過ごせるをいふ也 (六) おもねりへつらひ、意をむかへる (七) ことばをかざり色をよくして人を喜ばしめる (八) まげてしたがひ、かりそめにあはす、即ちへつらふなり (九) 何れにしても皆三驅して前禽を失ふの義にあてはまるべき也

近規。不三遷二惑於衆口一。必期レ致下天下如中三代之世上也。

比之九五曰。顯レ比。王用二三驅一。失二前禽一。傳曰。人君比二天下一之道。當三顯二明其比道一而已。如丁誠レ意以待レ物。恕レ己以及レ人。發レ政施レ仁。使丙天下蒙乙其惠澤甲。是人君親二比天下一之道也。如レ是天下孰不レ親二比於上一。若乃暴二其小仁一。違レ道干レ譽。欲三以

(二)比の九五に曰く、比を顯にす、王三驅を用つて、前禽を失ふと。傳に曰く、人君天下を比するの道、當に其比道を顯明すべきのみ。意を誠にして以て物を待ち、己を恕して以て人に及ぼし、政を發して仁を施し、天下をして其惠澤を蒙らしむる如きは、是れ人君の天下を親比するの道なり。是の如くんば天下孰か上に親比せざらん。若し乃ち其小仁を暴し、道に違ひて譽を干め、以て下の比するを求めんと欲せば、其道亦已に狹し。其れ能く天下の比を得んや。王者其比道を顯明すれば、天下自然に來り比す。來る者は之を撫す。固より煦煦然として比を物に求めざること、田の三驅して、禽の去る者は從つて追はず、來る者は則ち之を取るが若し。此れ王道の大なる、其民皞皞として、之をなすを知ることなき所以の者なり。唯だ人君天下を比するの道此の如くなるのみにあらず、大率人の

當世之務。所ニ尤先一者有レ三。一曰立レ志。二曰責レ任。三曰求レ賢。今雖下納ニ嘉謀一。陳中善算上。非ニ君志先立一。其能聽而用レ之乎。君欲レ用レ之。非レ責ニ任宰輔一。其孰承而行レ之乎。君相協レ心。非ニ賢者任レ職。其能施ニ於天下一乎。此三者本也。制ニ於事一者用也。三者之中。復以レ立レ志爲レ本。所謂立レ志者。至誠一心。以レ道自任。以ニ聖人之訓一。爲レ可ニ必信一。先王之治。爲レ可ニ必行一。不ニ狃ニ滞於

こと、二に曰く任を責むること、三に曰く賢を求むることとなり。今嘉謀(二)を納れ善算を陳ぶと雖も、君の志先づ立つにあらずんば、其れ能く聽きて之を用ひんや。君之を用ひんと欲すとも、任を宰輔(三)に責むるにあらずんば、其れ孰か承けて之を行はんや。(四)君相心を協すとも、賢者職に任ずるにあらずんば、其れ能く天下に施さんや。此三者は本なり。(五)事を制する者は用なり。三者の中、復志を立つるを以て本となす。所謂志を立つとは、至誠一心にして、道を以て自ら任じ、聖人の訓を以て必ず信ずべしとなし、先王の治必ず行ふべしとなし、(六)近規に狃滞せず、(七)衆口に遷惑せず、必ず天下三代の世の如くなるを致さんことを期するなり。

(一) 治者當世の務は一に立志、二に責任、三に求賢、これ尤も先にすべきもの也 (二) よき謀を進めよき手段を述べても (三) 宰相、丞相 (四) 君主と宰相 (五) 事の宜しきを制してこれを行ふは其の作用なり (六) 近代の法規に捉はれなづみて滞らず (七) 衆人の口にまどひ遷らず

用二其私心一。依二仁義之偏一者。覇者之事也。王道如レ砥。本二乎人情一。出二乎禮義一。若下履二大路一而行上。無二復回曲一。覇者崎二嶇反側於曲逕之中一。而卒不レ可三與入二堯舜之道一。故誠心而王則王矣。假レ之而伯則伯矣。二者其道不レ同。在レ審二其初一而已。易所謂差若二毫釐一。繆以二千里一者。其初不レ可レ不レ審也。惟陛下稽二先聖之言一。察二人事之理一。知三堯舜之道備二於己一。反レ身而誠レ之。推レ之以及二四海一。則萬世幸甚。

曲(四)逕の中に崎嶇(五)反側して、卒に與に堯舜の道に入るべからず。故に誠心(六)にして王たるときは、則ち王たり。之を假りて伯たるときは、則ち伯たり。二者其道同じからず。其初(七)を審かにするにあるのみ。易に所謂差ふこと若し毫釐なれば、繆るに千里を以てすとは、其初を審かにせずんばあるべからざればなり。惟だ(八)陛下先聖の言に稽へ、人事の理を察し、堯舜の道己に備はれるを知り、身に反りて之を誠にし、之を推して以て四海に及ぼすときは、則ち萬世の幸甚ならん。

(一) 宋神宗に上疏して初めに王覇の事を言へり (二) といしのごとく平か (三) まはりてまがる (四) まがりくねれるこみち (五) 崎嶇はけはしきこと、反側はころがるの意 (六) 王者は己を修め民を愛するに誠心を以て天理を行ふ、伯すなはち覇者は名義を王道に假りて自ら尊大にす (七) 其の初一念の公私誠偽に根ざす (八) 陛下とは神宗に對して云ふ語

伊川先生曰。

伊川先生曰く、當世(一)の務、尤も先とする所の者三あり。一に曰く志を立つる

志不ニ同行一也。堯所三以釐降ニ二女于嬀汭一。舜可レ禪乎。吾玆試矣。是治ニ天下一觀ニ于家一。治レ家觀レ身而已矣。身端心誠之謂也。誠レ心復ニ其不善之動一而已矣。不善之動妄也。妄復則無妄矣。無妄則誠焉。故無妄次レ復。而曰三先王以茂對レ時育ニ萬物一。深哉。

に對して萬物を育すといふ。深いかな。

(一) 治者の身 (二) 治者の家 (三) 身は治の本なれば端正なるを要す、心は身の主なれば之を誠にすること身を正しうするの道なり (四) 家は治の則なれば整齊を要す、一家の親和して順なれば家よく齊ふなり (五) 家を治むること難しといふは骨肉相親みて私情の斷ち難きものあり、天下に治め易しといふは郷黨疎くして公道行はるゝを以てなり、難きことを先づ脩めて後に易きことに及ぼす也 (六) 一家の事を論ず (七) 睽と家人とは易の卦、睽はそむく、婦人の性陰柔、外は和悅して內猜嫌、居を同じうして志を異にす (八) 釐は理するなり、嬀は川の名、汭は川の北の地、堯舜に堯二人の女を嬀汭の舜が家に送りて娶らしむ、舜が家を治むることの成績を見て、天下を治むるに足るとせば舜にゆづるべく、まづ女を嫁して試みたるなり、是れ天下を治むることの能否を一家の整齊に觀んとてなり (九) 家を治むることの能否は身を觀て知る (一〇) 易の無妄の卦は復の卦につぐ (一一) 盛に時に對して萬物を育するは先王の徳至誠なるが故なり、其旨深いかなと讃歎せるなり

明道先生言ニ於神宗一曰。得ニ天理之正一。極ニ人倫之至一者。堯舜之道也。

明道先生神宗(一)に言して曰く、天理の正を得、人倫の至を極むる者は、堯舜の道なり。其私心を用ひて、仁義の偏に依る者は、霸者の事なり。王道は砥(二)の如し。人情に本づき、禮義に出づ。大路を履んで行くが若く、復(三)回曲なし。霸者は

濂溪先生曰。治二天下一有レ本。身之謂也。治二天下一有レ則。家之謂也。本必端。端レ本誠レ心而已矣。則必善。善レ則和レ親而已矣。家難而天下易。家親而天下疎也。家人離必起二於婦人一。故睽次二家人一。以二二女同居。而

巻之八

治體類　凡二十五條

濂溪先生曰く、天下を治むるに本あり、(一)身の謂なり。天下を治むるに則あり。(二)家の謂なり。本は必ず端しうす。(三)本を端しうするは心を誠にするのみ。則は必ず善くす。(四)則を善くするは親を和するのみ。(五)家は難くして天下は易く、家は親みて天下は疎ければなり。(六)家人の離るゝは、必ず婦人に起る。故に(七)睽は家人に次ぐ。二女同居して、志同行ならざるを以てなり。(八)堯の釐めて二女を媯汭に降す所以は、舜を禪るべけんか、吾れ玆に試みんとなり。是れ天下を治むることは家に觀るなり。(九)家を治むることは身に觀るのみ。身端しとは心誠なるの謂なり。心を誠にするは其不善の動を復するのみ。不善の動は妄なり。妄復するときは則ち無妄なり。無妄なるときは則ち誠なり。故に(一〇)無妄は復に次ぐ。而して(一一)先王以て茂に時

貧賤一。其實只是計窮力屈。才短不レ能二營畫一耳。若稍動得。恐未二肯安レ之。須下是誠知三義理之樂二於利欲一也乃能上。天下事。大患只是畏二人非笑一。不レ養二車馬一。食レ麁衣レ惡。居二貧賤一。皆恐二人非笑一。不レ知。當レ生則生。當レ死則死。今日萬鍾明日棄レ之。今日富貴明日饑餓。亦不レ恤。惟義所レ在。

することを能はざるのみ。若し稍動かし得ば、恐らくは未だ肯て之に安ぜじ。須らく是れ誠に義理の利欲よりも樂しきを知りて乃ち能くすべし。

(一) 貧賤に安んずと云ふも、畢竟富貴を求めて計窮し力屈して、短才營畫するに堪へざるのみ、若し富貴を得る術の一二を示して彼を動かさんには、恐らく依然として貧賤に安んじ得ざらん、寧ろ義理の利欲よりも遥に樂しかるべき眞相を知り得んには卽ち誠に貧賤にも安んじ得べしとなり

天下の事、大患とするところ、只だ是れ人の非笑(二)を畏るゝなり。車馬(二)を養はず、麁なるを食ひ惡しきを衣て、貧賤に居る。皆人の非笑を恐る。知らず、當に生くべくんば則ち生き、當に死すべくんば則ち死し、今日萬鍾(三)ありて明日之を棄て、今日富貴にして明日饑餓すとも、亦恤へず、惟だ義の在る所のまゝなるを。(四)

(二) そしりわらふこと (二) 貧者の毎に恥ぢて他の非笑を畏るゝ所以のもの (三) 六斛(こく)四斗を一鍾となす。萬鍾とは祿の重きをいふ (四) 義のある所は則ち死生去就顧みざる所あり、況んや夫の齷齪の見を懷き、人の非笑を畏れて貧賤に居るを恥づ、豈に大丈夫の氣にあらんや

之厚レ之。示中恩過之不上レ窮也。爲二人後一者。所レ宜下樂レ職勸レ功。以服二勤事任一。長レ廉遠レ利。以似中述世風上。而近代公卿子孫。方且下比二布衣一。工二聲病一售二有司一。不レ知二求レ仕非上レ義。而反羞レ循レ理爲二無能一。不レ知二蔭襲爲上レ榮。而反以二虛名一爲二善繼一。誠何心哉。

べき所なり。而して近代公卿の子孫、方に且つ下布衣に比し、(四)聲病を工にして(五)有司に售り、仕を求むることの義にあらざるを知らずして、反つて理に循ふことを羞ぢて無能となす。蔭襲(六)することの榮たるを知らずして、反つて虛名を以て善く繼ぐとなす。誠に何の心ぞや。

㊀世職の業　㊁後繼者すなはち子孫　㊂世々家風を繼ぎ述ぶること　㊃無官の士　㊄詩律に四聲八病あり、詩賦を巧みにして役人に賣付けると也　㊅祖父の庇蔭に依る世祿の榮を蔑にして、詩賦の虛名を立て、家業を紹ぐことを得意とす

不下資二其力一而利中其有上。則能忘二人之勢一。

(一)其力に資りて、其有を利とせざるときは、則ち能く人の勢を忘る。

㊀他の勢位を藉り其の力にたよりて其有する所を利用する念なきものは卽ち他人の勢威を見ず、故に自ら重ろして彼自ら輕し

人多言レ安二於

人多く貧賤(一)に安ずといふ。其實は只だ是れ計窮り力屈し、才短くして營畫

曰。不レ知レ命無ニ以爲ニ君子一。人苟不レ知レ命。見ニ患難一必避。遇ニ得喪一必動。見レ利必趨。其何以爲ニ君子一。

命を知らざるものは一定の操守なく遂に君子たるを得じと也

或謂。科學事業。奪ニ人之功一。是不レ然。且一月之中。十日爲ニ學業一。餘日足レ可レ爲レ學。然人不レ志ニ于此一。必志ニ于彼一。故科學之事。不レ患レ妨レ功。惟患レ奪レ志。

或ひと謂ふ、科學の事業は、人の功を奪ふと。是れ然らず。且つ一月の中、十日學業をなさば、餘日は學をなすべきに足れり。然れども人此に志さずして、必ず彼に志す。故に科學の事は、功を妨ぐるを患へず、惟だ志を奪ふことを患ふ。

(一) 科學の事業の爲に肝心の學問の工夫おろそかになると云ふは然らず、一月に十日科學の業にあて丶殘りの二十日を學に充つれば可なり (二) 然るに此の學問の方を志さず、科學の事のみ志す、されば科學が功を妨ぐることは患ふるに足らず、只だ志の奪はれんことを患ふとなり

横渠先生曰。世レ祿之榮。王者所下以祿ニ有功一尊ニ有德一。愛レ

横渠先生曰く、祿を世にするの榮は、王者の有功を祿し有德を尊び、之を愛し之を厚うして、恩遇の窮らざることを示す所以なり。人の後たる者、宜しく職を樂み功を勸め、以て事任に服勤し、廉を長じ利を遠ざけ、以て世風を似述す

盡レ力。求二必得之道一。是惑也。

問。家貧親老。應レ擧求レ仕。不レ免レ有二得失之累一。何脩可二以免一此。伊川先生曰。此只是志不レ勝レ氣。若志勝自無二此累一。家貧親老。須レ用二祿仕一。然得レ之不レ得。爲レ有レ命。曰。在レ己固可。爲レ親奈何。曰。爲レ己爲レ親也只是一事。若不得其如レ命何孔子

ず科擧を得んと求むるは惑ひなりとの意

問ふ。(一)家貧しく親老いて、擧に應じて仕を求むるは、得失の累あるを免れず。何を脩めてか以て此を免るべき。伊川先生曰く、(二)此は只だ是れ志氣に勝たざればなり。若し志勝たば自ら此累なけん。家貧しく親老いなば、(三)須らく祿仕を用ふべし。然れども之を得ると得ざるとは、命ありとなす。曰く、(四)己にありては固より可なり。親の爲にするは奈何。曰く、(五)己の爲にし親の爲にするは、也只だ是れ一事なり。若し得ずとも其れ命を如何せん。孔子曰く、(六)命を知らずんば以て君子たることなしと。人(七)苟し命を知らざるときは、患難を見ては必ず避け、得喪に遇うては必ず動き、利を見ては必ず趨く。其れ何を以てか君子となさん。

(一) 家貧にして親老ゆ、擧に應じて仕を求め、及第すれば得る所あらんも、落第すれば失ふ所亦少からざらん、何を修めてこれを免るべきか (二) 志をして氣に勝たしむるにあるのみ(解前に出づ) (三) 須らく俸祿の爲めの仕をなすべし、然しながらもその得る得ざるは命あり (四) 己の爲には命もとより可なり、親の爲にするには奈何せん (五) 己が爲にも親の爲にも一つ事にして、若し得ざればとて命を如何にせん術もなかるべし (六) 論語に出づ (七)

曰丁我心只望二延對一。欲丙直乙言天下事甲。則亦可レ尚已。若志在二富貴一。則得レ志便驕縱。失レ志則便放曠與二悲愁一而已。

得ては便ち驕縱し、志を失ふときは則ち便ち放曠と悲愁とのみ。

(一) 漢賢良の士を徴して策問す、之に答ふるを對策と云ふ、士は國人これを推擧す、弘一たび出でゝ罷め後又擧げられて仕ふ、强ひて起たしむるなり　(二) おごりてほしいまゝなり　(三) 放逸曠蕩の略放蕩に同じ、悲愁はかなしみうれふる意

伊川先生曰。人多說、某不レ教三人習二擧業一。某何嘗不レ教三人習二擧業一也。人若不レ習二擧業一。而望二及第一。却是責二天理一。而不レ修二人事一。但擧業既可二以及第一卽已。若更去上面

伊川先生曰く、人多く說く、某人をして擧業を習はしめずと。某何ぞ嘗て人をして擧業を習はしめざらんや。人若し擧業を習はずして、及第を望まば、却つて是れ天理を責めて、人事を修めざるなり。但だ擧業既に以て及第すべくんば卽ち已まん。若し更に去りて上面に力を盡して、必得の道を求むるは、是れ惑なり。

(一) 科擧卽ち官人登庸の試驗に應ずるための學業　(二) 人多く吾の門生をして擧業を習はしめずと說く由なれども、吾何として嘗て然ることをなさんや、習はずして及第せんと望まば、却つて是れ天理を責めて人事を修めざる也と云はん　(三) たゞ擧業已に及第すべき程度に進まんには卽ち已むべし、更に其上の科目まで力を盡して修め必

不爲妻求封。范純甫問其故。先生曰。某當時起自草萊。三辭然後受命。豈有今日乃爲妻求封之理。問。今人陳乞恩例。義當然否。人皆以爲。本分不爲害。先生曰。只爲而今士大夫。道得箇乞字慣却。動不動又是乞也。問。陳乞封父祖如何。曰。此事體又別。再三請益。但云。其說甚長。待別時說。

曰く、只だ而今の士大夫、箇の乞の字を道ひ得て慣却するが爲に、(六)動不動又是れ乞ふ。問ふ、父祖を封ぜんことを陳べ乞ふは如何。曰く、此れ事體又別なりと。(七)再三益を請ふ。但だ云ふ、其說甚だ長し、別時を待ちて說かんと。

(一) 前に官にありし時の俸給をいふ (二) ゐなかといふ意 (三) 俸給高に背せる證文 (四) 范祖禹字は純甫 (五) 定例によらず、特別の恩寵によること (六) 恩に慣れて陳べ乞ふことをあやしまず動もすれば乞ひ又動もせざるも乞ふ (七) 再三教を請ふ

漢策賢良。猶是人舉之。如公孫弘者。猶强起之。乃就對。至如後世賢良。乃自求舉爾。若果有

漢の賢良を策するに、猶ほ是れ人之を擧ぐ。公孫弘の如き者も、猶ほ强ひて之を起たしめて、乃ち對に就けり。後世の賢良の如きに至りては、乃ち自ら擧げられんことを求むるのみ。若し果して我が心只だ廷對を望んで、天下の事を直言せんと欲すといふあらば、則ち亦尚ぶべきのみ。若し志富貴にあらば、則ち志を

將レ試ニ教官一。子弗レ答。湜曰。何如。子曰。吾嘗買レ婢。欲レ試レ之。其母怒而弗レ許。曰。吾女非ニ可レ試者一也。今爾求レ爲ニ人師一而試レ之。必爲ニ此媼笑一也。湜遂不レ行。

女は試みらるべき者にあらずと。今爾人の師たらんことを求めて之を試せば、必ず此媼の笑とならんと。湜遂に行かず。

(一) 程子の門人なり、蜀より京師に行くの途次洛をよぎりて程子に見ゆ　(二) 試驗を受けて教官たらんとすと　(三) 婢の賤しきすら試驗を受けて仕ふることを恥づ、汝人の師たらんことを切して試を求めんとは何事ぞ、衆に請ぜられてこそ出づべき筈なるを、婢の母をして之を聞かしめば必ず笑はれん

先生在ニ講筵一。不ニ曾請レ俸。諸公遂牒ニ戸部一。問レ不レ支ニ俸錢一。戸部索ニ前任曆子一。先生云。某起レ自ニ艸萊一。無ニ前任曆子一。遂令下戸部自爲出中券曆上。又

先生講筵にありしとき、曾て俸を請はず。諸公遂に戸部に牒して、俸錢を支せざることを問ふ。戸部前任(一)の曆子を索む。先生云く、某艸萊より起りて前任の曆子なしと。遂に戸部をして自ら爲に券曆(二)を出さしむ。又妻(三)の爲に封を求めず。范(四)純甫其故を問ふ。先生曰く、某當時艸萊より起り、三たび辭して然して後に命を受く。豈に今日乃ち妻の爲に封を求むるの理あらんや。問ふ、今の人恩例(五)を陳べ乞ふ。義當に然るべしや否や。人皆以爲らく、本分にして害をなさずと。先生

不二獨財利之利一。凡有二利心一便不可。如レ作二一事一。須レ尋二自家穩便處一。皆利心也。聖人以レ義爲レ利。義安處便爲レ利。如二釋氏之學一。皆本二於利一。故便不是。

り。釋氏の學の如きは、皆利に本づく。故に便ち不是なり。

(一)論語に出づ　(二)利己心なり　(三)自家に都合よき處　(四)公利なり

問。邢七久從二先生一。想都無二知識一。後來極狼狽。先生曰。謂二之全無一レ知則不可。只是義理不レ能レ勝二利欲之心一。便至レ如レ此。

問ふ、邢七(一)久しく先生に從ふ。想ふに都て知識なし。後來極めて狼狽す。先生曰く、之を全く知る無しと謂ふときは則ち不可なり。只だ是れ義理、利欲の心に勝つこと能はず、便ち此の如きに至る。

(一)邢恕字和叔

謝湜自レ蜀之二京師一。過レ洛而見二程子一。子曰。爾將二何之一。曰。

謝湜(一)蜀より京師に之く。洛を過りて程子に見ゆ。子曰く、爾將に何にか之かんとする。曰く、將に敎官(二)に試みられんとすと。子答へず。湜曰く、何如。子曰く、吾れ嘗て婢を買ひ、之を試みんと欲す。其母怒りて許さず。曰く、吾が

只是箇公與レ私也。纔出レ義。便以レ利言也。只那計較。便是爲レ有二利害一。若無二利害一。何用二計較一。利害者天下之常情也。人皆知下趨レ利而避上レ害。聖人則更不レ論二利害一。惟看二義當レ爲。不レ當レ爲。便是命在二其中一也。

情なり。人皆利に趨きて害を避くるを知る。聖人は則ち更に利害を論ぜず。惟だ(四)義の當に爲すべき、當に爲すべからざるを看る。便ち是れ命其中にあり。

(一) 舜は善の至極なるもの、盜跖は大盜にして惡の至極なるものなり (二) 義は公なり、利は私なり (三) はかりくらぶること。比較 (四) 公の爲に利を棄つ

大凡儒者。未四敢望三深造二於道一。且只得下所レ存正。分二別善惡一。識二廉恥一。如二此等一人多上。亦須二漸好一。趙景平問。子罕言レ利。所謂利者何利。曰。

大凡儒者未だ敢て深く道に造らんことを望まず。且つ只だ存する所正しく、善惡を分別し、廉恥を識ること、此等の如き人多きを得ば、亦須らく漸く好かるべし。

趙景平問ふ、子罕に利を言ふ。所謂利とは何の利ぞや。曰く、獨り財利の利のみならず。凡そ利心あれば便ち不可なり。一事を作すが如き、自家穩便の處を尋ぬるを須ふる、皆利心なり。聖人は義を以て利となす。義の安んずる處便ち利た

及其蹈水火。則人皆避之。是實見得。須是有見不善如探湯之心。則自然別。昔曾經傷於虎者。他人語虎。則雖三尺童子。皆知虎之可畏。終不似曾經傷者。神色懾懼。至誠畏之。是實見得也。得之於心。是謂有德。不待勉強。然學者則須勉強。古人有捐軀隕命者。若不實見得。則烏能如此。須是實見得生不重於義。生不安於死也。故有殺身成仁。只是成就一箇是而已。

と穿かして、穿窬をなさしむるに、士は必ず肯さじ、穿窬は孔を穿ちて忍び込みぬすみすること〔七〕書を讀む者〔八〕軒はくるま、冕は玉の冠、外物とは身外の物にて心術に與らずと云ふ義〔九〕其の出處を要する場合には〔一〇〕口に說き得て心實に見ず〔一一〕直接に痛苦を感ずる場合には〔一二〕身を以て驗り心實に見得す〔一三〕自然に出づ〔一四〕かはいろを變へておそれわなゝく貌〔一五〕虎に傷けられし者の虎の畏るべきを知るは實に其實理を見得すればなり〔一六〕勉強を待たずして心に得るゆゑに有德といふ〔一七〕古人軀を捐て命を隕すは實に見得すればなり、卽ち義は生よりも重く、死は生よりも易き理を見得すればなり

孟子辨舜跖之分。只在義利之間。言間者。謂相去不甚遠。所爭毫末爾。義與利

孟子の舜跖(一)の分を辨ずること、只だ義と利の間にあり。間といふは、相去ること甚だ遠からず、爭ふ所毫末のみなることをいふ。義と利(二)とは、只だ是れ箇の公と私となり。纔に義を出づれば、便ち利を以て言ふ。只だ那の計較(三)は、便ち是れ利害あるがためなり。若し利害なくんば、何ぞ計較を用ひん。利害は天下の常

心實不ㇾ見。若見得。必不三肯安二於所㆑不ㇾ安。人之一身。儘有ㇾ所ㇾ不二肯爲一。及ㇾ至二他事一又不ㇾ然。若ㇾ士者。雖下殺ㇾ之使㆖爲二穿窬一。必不ㇾ爲。其他事未二必然一。至ㇾ如二執ㇾ卷者一。莫ㇾ不ㇾ知ㇾ說二禮義一。又如二王公大人一。皆能言二軒冕外物一。及三其臨二利害一。則不ㇾ知ㇾ就二義理一。却就二富貴一。如ㇾ此者。只是說得不二實見一。

義理に就くことを知らず、却つて富貴に就く。此の如き者は、只だ是れ說き得て(一〇)實に見ず。(一一)其の水火を蹈むに及んでは、則ち人皆之を避く。是れ實に見得すればな(一二)り。須らく是れ不善を見ては湯を探るが如き心あるべし。(一三)則ち自然に別ならん。

昔曾て虎に傷けられし者あり。他人虎を語るときは、則ち三尺の童子と雖も、皆虎の畏るべきを知れども、終に曾て傷けられし者の、神色懾懾として、(一四)至誠に之を畏るゝに似ず。是れ實に見得すればなり。(一五)之を心に得る、是を有德といふ。(一六)勉强を待たず。然れども學者は則ち須らく勉强すべし。古人軀を捐て命を隕す者(一七)あり。若し實に見得せずんば、則ち烏ぞ能く此の如くならん。須らく是れ實に生は義よりも重からず、生は死よりも安からざることを見得すべし。故に身を殺して仁を成すことあり、只だ是れ一箇の是を成就するのみ。

(一) 論語に出づ (二) 曾子病床にありて、其臥せる簀の、大夫の簀なるを聞き、强ひて之をかへしめ、席をかへて未だ安んぜざるに死す (三) 心に眞實の道理を見得せざるが故なり (四) 是を見得し又非を見得す (五) 爲すべきことも敢て爲さゞる所あれども他の事に至つて然らざるものあり (六) 士たる者に、これを爲さゞれば汝を殺さん

命。彼乃留二情於其間一。多見二其不一レ信レ道也。故聖人謂二之不一レ受レ命。有レ志二於道一者。要當レ去二此心一。而後可レ語也。

人苟有二朝聞レ道夕死可矣之志一。則不三肯一日安二於所レ不レ安也。何止一日。須臾不レ能。如二曾子易レ簀。須二要レ如レ此乃安一。人不レ能レ若レ此者。只爲レ不レ見二實理一。實理者。實見二得是一。實見二得非一。凡實理。得二之於心一自別。若二耳聞口道一者。

(一)人苟も朝に道を聞けば夕に死すとも可なりとするの志あるときは、則ち肯て一日も安ぜざる所に安ぜず。何ぞ止だ一日のみならんや。須臾も能はじ。(二)曾子の簀を易ふるが如き、須らく此の如くならんことを要して乃ち安ずべし。人此の若くなること能はざるは、只だ(三)實理を見ざるが爲なり。實理は、(四)實に是を見得し、實に非を見得す。凡そ實理は、之を心に得て自ら別なり。耳に聞き口に道ふが若きは、心實に見ざるなり。若し見得ば、必ず肯て安ぜざる所に安ぜじ。人の一身、(五)儘る肯て爲さゞる所あれども、他事に至るに及んでは又然らず。(六)士の若きは、之を殺して穿窬を爲さしむと雖も、必ずなさじ。其他事は未だ必ずしも然らず。(七)卷を執る者の如きに至りても、禮義を說くことを知らざることなし。又王公大人の如き、皆能く(八)軒冕は外物なりと言ふ。(九)其の利害に臨むに及んでは、則ち

念念。不肯捨。畢竟何益。若不會處置了放下。便是無義無命也。

門人有居大學。而欲歸應郷擧者。問其故。曰。蔡人尠習戴記。決科之利也。先生曰。汝之是心。已不可入於堯舜之道矣。夫子貢之高識。曷嘗規規於貨利哉。特於豐約之閒。不能無留情耳。且貧富有

(一) 患難に遇へる時は惟だこれに處するの道を審にすべし、之を處置して缺くる所なくば其上は安んじて命を待つのみ、成敗利鈍これを如何ともするなし (二) いつまでも心に忘れかねて煩悶してもいさゝか益する所はなし、相當の處置を了へても尚は捨置かれずと云ふは義をわきまへず命をわきまへぬ愚者と云ふの外なし。放下は捨置くこと、會は會得

(一)門人大學に居て、歸りて郷擧に應ぜんと欲する者あり。其故を問ふ。(二)曰く、蔡(三)人戴記を習ふこと尠し。科を決するの利なりと。先生曰く、汝の是の心、已に堯舜の道に入るべからず。夫れ子貢(四)の高識、曷ぞ嘗て貨利に規規たらんや。特に(五)豐約の間に於て、情を留むることなき能はざるのみ。且つ貧富命あり、彼(六)乃ち情を其間に留む。多に其道を信ぜざるを見る。故に聖人之を命を受けずといふ。道に志ある者は、要當に此心を去るべし。而して後語るべきなり。

(一) 謝顯道なり、蔡州の人 (二) 伊川問ふ (三) 蔡人には禮記を以て科擧に應ずるもの少し故にわれ故郷にかへりて此學を以て應ぜば、科擧をはたすの利を得べしとなり。禮記は漢の戴聖これを編集す故に一に戴記ともいふ (四) 子貢は孔子の弟子、貨殖に長ず、貨利に規々たらんとは財と利にあくせくせんやとの意 (五) 豐は富めること、約は貧しくして約なること (六) 子貢を指す

賢者惟知レ義而已。命在二其中一。中人以下。乃以レ命處レ義。如レ言下求レ之有レ道。得レ之有レ命。是求無レ益二於得一。知二命之不レ可レ求。故自處以レ不レ求。若二賢者一。則求レ之以レ道。得レ之以レ義。不二必言一レ命。

人之於二患難一。只有二一箇處置一。盡二人謀一之後。却須二泰然處一レ之。有レ人遇二一事一。則心心

(一)賢者は惟だ義を知るのみ。命其中にあり。(二)中人以下は、乃ち命を以て義に處す。(三)之を求むるに道あり、之を得るに命あり、是れ求めて得るに益なしと言ふが如きは、命の求むべからざるを知る。故に自ら處するに求めざるを以てす。賢者の若きは、則ち(四)之を求むるに道を以てし、之を得るに義を以てし、必ずしも命を言はず。

(一)命は窮達天賦氣質に出て必然の數あり、義は是非可否天理に本きて當然の宜しきあり、惟だ義の當然を知る、命固より其中に在り　(二)義に於て未だ眞に知りて安んじ行ふこと能はず、然れども命の已に定まるを知るときは、亦敢て義を越えて以て妄に求めず、故に命を以て義に處すといふ　(三)孟子の語を引く　(四)道を枉げて求めず、非義にして受けず、求むる所得る所惟だ道と義とのみ、命なんぞいふに足らんや

(一)人の患難に於ける、只だ一箇の處置あり。人謀を盡すの後、却つて須らく泰然として之に處すべし。人あり、(二)一事に遇ふときは、則ち心心念念、肯て捨てず。畢竟何の益かあらん。若し處置し了りて放下することを會せずんば、便ち是れ義なく命なきなり。

久終。故節或移於晩。守或失於終。事或廢於久。人之所同患也。艮之上九。敦厚於終。止道之至善也。故曰敦艮吉。

久しきに廢す。人の同じく患ふる所なり。艮の上九、終に敦厚にす。止道の至善なり。故に艮るに敦し吉なりと曰ふ。

㊀ 止まることは暫に易く久しきに難く、始めに易く終に難し、故に晩節全うし難く終守失ひ易し、事或は久しきに至りて廢す、人の同じく患ふる所也

中孚之初九曰。虞吉。象曰。志未變也。傳曰。當信之始。志未有所從。而虞度所信。則得其正。是以吉也。志有所從。則是變動。虞之不得其正矣。

中孚(一)の初九に曰く、虞れば吉なりと。象に曰く、志未だ變ぜざるなりと。傳に曰く、信の始に當りて、(二)志未だ從ふ所あらずして、信ずる所を虞り度るときは、則ち其正を得。是を以て吉なり。志從ふ所あるときは、則ち是れ變動す。之を虞れども其正を得ず。

㊀ 易の中孚の卦、孚はまこと ㊁ 其の信ずべき所、志の未だ何れへもより從ふ所あらざるに虞り度るときは正を得、已に志の從ふ所あるときは正を得ず、是れ志の變動せるが故也

士之處二高位一。則有レ拯而無レ隨。在二下位一。則有レ當レ拯。有レ當レ隨。有二拯之不一レ得而後隨一。

君子思不レ出二其位一。位者所レ處之分也。萬事各有二其所一。得二其所一。則止而安。若二當レ行而止當レ速而久。或過或不レ及。皆出二其位一也。況踰レ分非レ據乎。

人之止。難二於

(一)士の高位に處るは、則ち拯ふことありて隨ふことなし。下位にあるは、則ち當に拯ふべきあり、當に隨ふべきあり。之を拯ふこと得ずして而して後に隨ふことあり。

(一)易の艮卦、艮はとゞまる (二)士高位に居つては君を正し國を定むることを任となす、故に拯うて隨ふことなし、下位にあるときは拯ふべく隨ふべく又拯ふことを得ずして隨ふことあるべし

(二)君子は思ふこと其位を出でず。位とは處る所の分なり。萬事各〻其所あり。其所を得るときは、則ち止まりて安じ、當に行くべくして止まり、當に速かなるべくして久しく、或は過ぎ或は及ばざるが若きは、皆其位を出づるなり。況や分を踰え據るところにあらざるをや。

(一)處る所の分を踰えず (二)行くべくして止まり、速かなるべくして遲く、或は過ぎ或は及ばざるは皆其位の埒外に逸するなり、自ら反省すべき所

(三)人の止まること、久終に難し。故に節或は晩に移り、守或は終に失し、事或は

文明則盡ニ事理一。應レ上則得ニ權勢一。體順則無ニ違悖一。時可矣。位得矣。才足矣。處ニ革之至善一者也。必待ニ上下之信一。故已日乃革レ之也。如ニ二之才德一。當三進行ニ其道一。則吉而無レ咎也。不レ進則失ニ可レ爲之時一。爲レ有レ咎也。

才足れり。革の至善に處る者なり。(五)必ず上下の信を待つ。故に已の日にして乃ち之を革む。二の才德の如き、當に進んで其道を行ふべし。則ち吉にして咎なし。進まざるときは則ち爲すべき時を失して、咎ありとなす。

㈠易の革卦、革はあらたむ ㈡かたよりて蔽はれふさがることなし ㈢あやありてあきらか ㈣上に剛陽の君ありて正しく應ず ㈤革宜しく行ふべし、必ず上下悉く信ずるを待つて後革むるは謹の至なり

鼎之有レ實。乃人之有ニ才業一也。當レ愼レ所ニ趨向一。不レ愼レ所レ往。則亦陷ニ於非義一。故曰ニ鼎有レ實愼レ所レ之也。

(一)鼎の實あるは、乃ち人の才業あるがごときなり。(二)當に趨き向ふ所を愼むべし。往く所を愼まざるときは、則ち亦非義に陷る。故に鼎に實あり之く所を愼むと曰ふ。

㈠易の鼎卦、鼎はかなへ、實はみ ㈡爲すあるに急にして毎に向ふ所を謹み擇ぶに暇あらざれば反つて才業の爲に累はさる

雖隕穫於窮戹。所守亡矣。安能遂其爲善之志乎。

寒士之妻。弱國之臣。各安其正而已。苟擇勢而從。則惡之大者。不容於世矣。井之九三。渫治而不見食。乃人有才智。而不見用。以不得行。爲憂惻也。蓋剛而不中。故切於施爲。異乎用之則行。舍之則藏者矣。革之六二。中正則無偏蔽。

（一）寒士の妻、弱國の臣、各々其正に安ぜんのみ。苟し勢を擇みて從ふときは、則ち惡の大なる者にして、世に容れられざらん。

（一）貧しき士の妻となり、弱き國の臣下となれりとも、偏に其正しき道に安んじ、二心なく仕ふること專一なるべし、いきほひや顏色を見て牛を馬に乘替へんものは、從に世に疎んぜらるゝこと、其例甚だ多し

（一）井の九三、渫治すれども而も食はれざるは、（二）乃ち人才智あれども、用ひられず、行ふことを得ざるを以て、憂惻をなすなり。蓋し剛にして中ならず。故に施爲に切なり。（四）之を用ふるときは則ち行ひ、之を舍つるときは則ち藏るゝ者と異なり。

（一）易の井卦、渫治はさらへること（二）才子、人に用ひられず其經綸を行ふことを得ざるを憂へ痛むなり（三）進んで其の知を施し爲さんことを切望す（四）人已を用ふるときは行ひ、捨つるときはかくれ泰然自若其心をわづらはさゞる孔子や顏子のごときとは頗る其おもむきを異にせり

（一）革の六二、中正なるときは則ち偏蔽なし。（三）文明なるときは則ち事理を盡す。（四）上に應ずるときは則ち權勢を得、（二）體順なるときは則ち違悖なし。時可なり。位得たり。

不正而合。未レ有二久而不レ離者一也。合以二正道一。自無二終睽之理一。故賢者順レ理而安行。智者知レ幾而固守。

君子當二困窮之時一。既盡二其防慮之道一。而不レ得レ免。則命也。當下推二致其命一。以遂中其志上。知二命之當然一也。則窮塞禍患。不三以動二其心一。行二吾義一而已。苟不レ知レ命。則恐二懼於險

(一)不正にして合ひて、未だ久しうして離れざる者あらず。合ふに正道を以てせば、自ら終に睽くの理なからん。故に(二)賢者は理に順ひて安んじて行ひ、智者は幾を知りて固く守る。

(一) 正しからずして合ふ者は久しき間には必ず乖く、正しくして合するものは終に乖くの理なし (二) 故に賢者は理の當然に順ひて行ひ、智者は幾の必然を知りて守る

(一)君子困窮の時に當りて、既に其(二)防慮の道を盡して、免るゝことを得ざるは、則ち命なり。當に(三)其命を推し致して、以て其志を遂ぐべし。命の當然を知るときは、則ち窮塞禍患、以て其心を動かさず、吾が義を行ふのみ。苟も(四)命を知らざれば、則ち險難に恐懼し、窮厄に隕穫して、守る所を亡ふ。安ぞ能く其の善を爲すの志を遂げんや。

(一) 易の困卦 (二) 困窮を防ぎとゞめんと慮りて (三) 命の來る所以を推究して當然の理を知るときは、端然として困窮禍患に其心を動かされず、專ら吾が義を行ふのみなり (四) 之に反して命を知らざるときは艱難におそれをのゝき窮厄に力をおとして自ら守るべき所を失ふ、命のいたす所をあきらめずして七顚八倒うれへかなしむとも何の益かあらんと也、隕穫はたふれおつること

苟欲レ信之心切。非三汲汲以失二其守一。則悻悻以僞二於幾一矣。故曰二晉如。摧如。貞吉。罔レ孚。裕無レ咎。然聖人又恐三後之人不レ達二寬裕之義一。居レ位者廢レ職失レ守。以爲レ裕。故特云二初六裕則無レ咎者。始進未三受レ命當二職任一故也。若有二官守一。不レ信二於上一。而失二其職一。一日不レ可レ居也。然事非二一槩一。久速唯時。亦容レ有下爲二之兆一者上。

然して聖人又恐る、後の人寬裕の義に達せず、位に居る者職を廢し守を失ひて、(六)以て裕なりとなすことを。故に特に初六裕なるときは則ち咎なしと云へるは、始めて進みて未だ命を受け職任に當らざるが故なり。若し官守ありて、上に信ぜられずして、其職を失はゞ、一日も居るべからず。(七)然れども事一槩にあらず。久速唯だ時なり。亦之が兆をなすものあるべし。

(一) 易の晉卦、晉はすゝむ下位にありて進む初めは遽に上の信用を得んと企つべからず、自ら貞正を守りて悠々急かざるをよしとす (二) 寬容はゆるやかなること、寬裕も同じくゆたかなること (三) 急に信を得んと欲するときは汲々として求むるに偏して守る所の貞正を失はん、求むる所得ざれば悻々（いかる貌）として上に懟ふるの貌を害はん (四) 晉如はのぼりすゝむ意、摧如はくじける意 (五) まだ深く信ぜられずとも只だ貞正を守り裕にして待つことを可とす (六) しかし後人其意を取違へて、そゞろに裕なりとなさんこと、聖人恐るゝ所なり、前に言ふ所は始めて進みて未だ命を被けず職に當らざる時のこと也、已に官に居て信ぜられず其職を廢するときは速かに辭して去るべし (七) 然し事は一概に云ふべからず、去就進退の遲速は只だ時なり、亦きざし（兆）を示すべき要はあるべし

明夷初九。事未顯而處甚艱。非見幾之明不能也。如是則世俗孰不疑怪。然君子不以世俗之見怪。而遲疑其行也。若俟衆人盡識。則傷已及。而不能去矣。

晉之初六在下而始進。豈遽能深見信於上。苟上未見信。則當安中自守。雍容寬裕。無急於求上之信也。

（一）明夷の初九、（二）事未だ顯れずして處ること甚だ艱し。（三）幾を見るの明なるにあらずんば能はざるなり。是の如きは則ち世俗孰か疑ひ怪まざらん。然れども君子は世俗に怪まるゝを以て、其行を遲疑せず。（四）若し衆人盡く識るを俟つときは、則ち傷已に及んで、去ること能はず。

（一）易の明夷の卦、明かなる者やぶ（夷）らるゝの義　（二）初九やぶれ未だ顯れずとも、その處る所の難きを見れば速に去るべきを云ふ　（三）幾を見ること明かなれば世俗の怪疑を意とせず　（四）衆の認識を待つときは遂に去ること能はず

（一）晉の初六、下にありて始めて進む。豈に遽に能く深く上に信ぜられんや。苟し上に未だ信ぜられざれば、則ち當に中を安じて自ら守り、（二）雍容寬裕にして、上の信を求むるに急なることなかるべし。（三）苟し信を欲するの心切ならば、汲汲として以て其守を失ふにあらずんば、則ち悻悻として以て義を傷らん。故に、（四）晉如たり、摧如たり、貞なれば吉、（五）孚とすることなくとも、裕なれば咎なしと曰ふ。

守。不ㇾ屑二天下之事一。獨潔二其身一者。所ㇾ處雖ㇾ有二得失小大之殊一。皆自高二尚其事一者也。象所謂志可ㇾ則者。進退合ㇾ道者也。

遯者陰之始長。君子知ㇾ微。固當二深戒一。而聖人之意未二便遽已一也。故有下與ㇾ時行。小利ㇾ貞之教上。聖賢之於二天下一。雖ㇾ知二道之將一ㇾ廢。豈肯坐視二其亂一而不ㇾ救。必區區致二力於未極之間一。強二此之衰一。艱二彼之進一。圖二其暫安一。苟得ㇾ爲ㇾ之。孔孟之所ㇾ屑ㇾ爲也。王允謝安之於二漢晉一是也。

(一)遯は陰の始めて長ずるなり。君子は微を知る。固より當に深く戒むべし。而も聖人の意未だ便ち遽に已まざるなり。故に時と行ひ、小しく貞に利しの教あり、聖賢の天下に於ける、道の將に廢れんとするを知ると雖も、豈に肯て坐ながら其亂を視て救はざらんや。必ず區區として力を未極の間に致し、(二)此の衰ふるを強くし、彼の進むを艱む。其暫くも安ならんことを圖りて、苟も之を爲すことを得ば、(三)孔孟の爲すを屑しとする所なり。(四)王允・(五)謝安の漢晉に於ける是なり。

(一)易の遯卦、遯はのがる　(二)君子の道を扶けて遽く消せしめず　(三)小人の道を抑へて遽に長ぜしめず　(四)後漢の末、董卓に從ひ、漢の舊事を以て其施政をたすけ、王室をおこしたる人　(五)晉の孝武帝の時、桓溫專權あり、謝安則ち忠を王室につくして晉をたすく

俗所羞。世俗所貴。君子所賤。故曰賁其趾。舍車而徒。

蠱之上九曰。不事王侯。高尚其事。象曰。不事王侯。志可則也。傳曰。士之自高尚。亦非一道。有懷抱道德。不偶於時。而高潔自守者。有知止足之道。退而自保者。有量能度分。安於不求知者。有清介自

故に其趾を賁る、車を舍てゝ徒よりすといふ。(三)

㈠ 易の賁卦の初九の爻辭、賁はかざる ㈡ かざる（賁）は其の行ふ所に儀文を附くるなり ㈢ 富貴の車をすてゝ貧賤の徒行によることを其趾を賁るといふ、卽ち世俗と反對なるを喩ふる也

(一)蠱の上九に曰く、王侯に事へず、其事を高尚にすと。象に曰く、王侯に事へざるは、志則るべしと。傳に曰く、士の自ら高尚にするも、亦一道にあらず。(二)道德を懷抱し、時に偶せずして、高潔自ら守る者あり。(三)止足の道を知りて、退きて自ら保つ者あり。(四)能を量り分を度りて、知らるゝことを求めざるに安ずる者あり。(五)淸介自ら守り、天下の事を屑しとせず、獨り其身を潔くする者あり。處る所、得失小大の(六)殊るありと雖も、皆自ら其事を高尚にする者なり。象は所謂志則るべしとは、進退道に合ふものなり。

㈠ 易の蠱卦、蠱はやぶれ ㈡ 伊尹の莘野に耕し太公の渭濱に釣するの時これなり、偶せずは合はずの意 ㈢ 張良疏廣が類これなり、止足はとゞまり足る ㈣ 徐孺子申屠蟠が類これなり ㈤ 嚴陵自黨が類これなり、淸介は操節、屑しとせずはかゝづらはぬなり ㈥ 異なるに同じ

若欲ㇾ貴之心。與ニ行ㇾ道之心ㇾ。交ニ戰于中ㇾ。豈能安ニ履其素ㇾ乎。

大人於ニ否之時ㇾ。守ニ其正節ㇾ。不ㇾ雜ニ亂於小人之羣類ㇾ。身雖ㇾ否。而道之亨也。故曰。大人否亨。不ㇾ以ㇾ道而身亨。乃道否也。

大人(一)否の時に於て、其正節を守りて、小人の羣類に雜亂せざるは、身否がると雖も、而も道の亨るなり。故に曰く、大人否がりて亨ると。(三)道を以てせずして身亨るは、乃ち道否がれるなり。

(一)易の否卦、否はふさがる　(二)大人時運の身に否なる時にも常に其正節を守持し、小人の羣類に雜り亂れず、即ち身否ると雖も而も道亨るなり　(三)身の否亨は時に由り道の否亨は我に由る、大人は身に否あつて道に否なし

人之所ㇾ隨。得ㇾ正則遠ㇾ邪。從ㇾ非則失ㇾ是。無ニ兩從之理ㇾ。隨之六二。苟係ㇾ初則失ㇾ五矣。故象曰。弗ニ兼與ㇾ也。所ニ以戒ニ人從ㇾ正當ニ專一ㇾ也。

人の隨ふ所、正を得るときは則ち邪に遠かり、非に從ふときは是を失し、兩(一)從の理なし。隨の六二、苟も初に係るときは則ち五を失す。故に象に曰く、(二)兼ね與せられずと。人の正に從ふこと、當に專一にすべきを戒むる所以なり。

(一)易の隨卦　(二)兼ね與せられずとは即ち兩從の理なき義、正を得れば邪に遠ざかるをいふ也

君子所ㇾ貴。世

君子(一)の貴ぶ所は、世俗の羞づる所なり。世俗の貴ぶ所は、君子の賤む所なり。

常久一。貞謂レ得二正道一。上之比レ下。必有二此三者一。下之從レ上。必求二此三者一。則無レ咎也。

履之初九曰。素履。往無レ咎。傳曰。夫人不レ能三自安二於貧賤之素一。則其進也。乃貪躁而動。求レ去二乎貧賤一耳。非レ欲レ有レ爲也。既得二其進一。驕溢必矣。故往則有レ咎。賢者則安二履其素一。其處也樂。其進也將レ有レ爲也。故得二其進一。則有レ爲而無二不善一。

(一)履の初九に曰く、(二)素より履む。往いて咎なしと。傳に曰く、夫れ人自ら貧賤の素に安ずること能はざるときは、則ち其進むや、乃ち貪躁(三)にして動き、貧賤を去(四)らんことを求むるのみ。爲すあらんことを欲するにあらず。既に其進むことを得れば、驕溢(五)すること必せり。故に往くときは則ち咎あり。賢者は則ち其素を安じ履む。其處(六)るや樂み、其進(七)むや將に爲すあらんとす。故に其進むことを得るときは、則ち爲すことありて不善なし。若し貴(八)からんことを欲するの心と、道を行ふの心と、中に交り戰はゞ、豈に能く其素を安じ履まんや。

(一)易の履の卦　(二)其居る處、地位、分際　(三)むさぼりさわがしき　(四)脱する　(五)おごりたかぶる、小人の志は富貴にあり、故に志を得るときは驕溢す　(六)賢者は窮して下にあるも初より貧賤の憂なし、故に樂む　(七)上に在れば道を行ふの志を遂げんとして進む　(八)貴からんを欲する心勝つときは必ず素位に安じて行ふこと能はず亦卒に行ふべき道を失はん

也。安靜自守。志雖レ有レ須。而恬然若レ將レ終レ身焉。乃能用レ常也。雖レ不レ進。而志動者。不レ能レ安二其常一也。

して將に身を終へんとするが若し。乃ち能く常を用ふればなり。進まずと雖も、而も志動く者は、其常に安んずること能はざるなり。

(一)待つ　(二)靜かなる貌　(三)此儘にして一生を過さんとするが如し　(四)平常の道、常理

比吉。原筮元永貞。無レ咎。傳曰。人相親比。必有二其道一。苟非二其道一。則有二悔咎一。故必推二原占三決其可レ比者一。而比レ之。所レ比得二元永貞一。則無レ咎。元謂レ有二君長之道一。永謂レ可二以

比は吉なり。原ね筮りて元永貞なれば咎なし。傳に曰く、人相親比するに、必ず其道あり。苟も其道にあらざれば、則ち悔咎あり。故に必ず其の比すべき者を推原占決して之に比す。比する所元永貞を得るときは、則ち咎なし。元は君長の道あるを謂ひ、永は以て常久なるべきを謂ひ、貞は正道を得るを謂ふ。上の下に比するには、必ず此三者あり。下の上に從ふに、必ず此三者を求むるときは、則ち咎なし。

(一)易の比卦、比はしたしむ意　(二)卜に筮ふ　(三)したしむ　(四)くやみとがむる　(五)おしたづね、はかりきだむ　(六)君となり長となりて人の上に立つべき道　(七)常ありて久しく永かるべきこと　(八)よこしまならぬ道

巻之七

出處類　凡三十九條

伊川先生曰。賢者在レ下。豈可三自進以求二於君一。苟自求レ之。必無二能信用之理一。古之人。所下以必待二人君致レ敬盡一レ禮。而後往上者。非レ欲三自爲二尊大一。蓋其尊レ德樂レ道之心。不レ如レ是。不レ足二與有一レ爲也。

伊川先生曰く、賢者の下に在る、豈に自ら進んで以て君に求むべけんや㈠。苟も自ら之を求むれば、必ず能く信用せらるゝの理なし。古の人、必ず人君の敬を致し禮を盡すを待ちて、而して後往く所以の者は、自ら尊大を爲さんと欲するにあらず、蓋し其の德を尊び道を樂むの心、是の如くならざれば㈡、與に爲すことあるに足らざればなり。

㈠ 賢者は出でゝ仕ふるに自ら進んで求めず　㈡ 敬を致し禮を盡して賢者を招き以て其言を聽き諫を納るゝ人君に非れば爲すあるに足らずと思へば也

君子之需レ時

君子の時を需つや㈠、安靜にして自ら守る。志須つことありと雖も、而も恬然と㈡

慢則棄二其本心一。便習以成レ性。故仕者。入二治朝一則德日進。入二亂朝一則德日退。只觀二在レ上者有レ可レ學。無一レ可レ學耳。

(一) 婢僕は初めより勉めて敬ふ心を抱き居る (二) 主人此心を見屆けてますます引立て益さんにはいよいよ謹みを加ふ、これに反して主人もおこたれば婢僕も亦おこたり遂に其本心の敬までも失ふ、即ち習慣が性となるなり (三) 治まれる朝廷に仕ふるときは其德日に進み (四) 亂れたる朝廷に仕ふるときは其德日に退く (五) 前の婢僕の心事も、朝廷に仕ふる者の心事も、同じ道理にて、下の者の良否は、上にあるものに學ぶべき德あると否とによりて見るのみと也

情大抵患在二施レ之不レ見レ報則輟。故恩不レ能レ終。不レ要二相學一。己施レ之而已。

(一)小雅の詩の篇名 (二)兄と弟よ、互に仲よくせよ、相似ることなかれと。兄弟の中なれば一方が自分の氣にいらぬ仕打をせしとて、此方よりも同じ仕打をせざれと云へる意なり (三)終を全うする能はず (四)先方に倣はず

人不レ爲二周南召南一。其猶二正牆レ面而立一。常深思二此言一誠是。不二從レ此行一。甚隔二著事一。向前推不レ去。蓋至親至近。莫レ甚二於此一。故須二從レ此始一。婢僕始至。本懷二勉勉敬心一。若到レ所二提撕一。更謹。則加謹。

人として周南・召南(一)を爲ばずんば、其れ猶ほ正しく面(二)を牆にして立つがごとしと。常に深く此言を思ふに誠に是なり。此れより行はずんば、甚だ事を隔著して、向前推し去らず。蓋し(三)至親至近、此れより甚しきはなし。故に須らく此れより始むべし。

(一)國風の詩の篇名、周の文王の德化を頌したるもの (二)前に出づ (三)二南の詩皆一家の人を齊ふること也

婢僕(一)始めて至るとき、本勉勉の敬心を懷く。若し提撕(二)せらるゝに到り更に謹むときは、則ち加ゝ謹み、慢るときは則ち其本心を棄つ。便ち習ひて以て性を成す。故に仕ふる者、治朝(三)に入るときは、則ち德日に進み、亂朝(四)に入るときは、則ち德日に退く。只だ(五)上にある者の學ぶべきあり、學ぶべきなきを觀るのみ。

不ㇾ悅者。爲下父頑母嚚。不ㇾ近二人情一。若二中人之性一。其愛惡若無ㇾ害ㇾ理。姑必順ㇾ之。親之故舊所ㇾ喜者。當三極ㇾ力招致。以悅二其親一。凡於二父母賓客之奉一。必極ㇾ力營辨。亦不ㇾ計二家之有無。然爲ㇾ養。又須ㇾ使ㇾ不ㇾ知二其勉强勞苦一。苟使ㇾ見二其爲不一ㇾ易。則亦不ㇾ安矣。

らざるが爲なり。中人の性の若き、其愛惡若し理を害することなくんば、姑く必ず之に順へ。親の故舊(二)の喜ぶ所の者は、當に力を極めて招致し、以て其親を悅ばしむべし。凡そ父母賓客の奉(三)に於ては、必ず力を極めて營み辨じ、亦家の有無(四)を計らず。然して養を爲す、又須らく(五)其勉强勞苦を知らざらしむべし。苟し其爲すことの易からざるを見しめば、則ち亦安ぜざらん。

(一)頑とは頑固なること、嚚はわけなきこと。嚚とはいふことと信をかき人情にもとれること　(二)ふるき知合ひ　(三)奉養（もてなし）　(四)家計の如何財物の有無を計らざるべし　(五)親に心配させぬ爲なり

斯干詩言。兄及弟矣。式相好矣。無二相猶一矣。言兄弟宜二相好一。不ㇾ要二斷學一。猶似也。人

(一)斯干の詩に言ふ、兄及弟、式つて相好せよ。相猶ることなかれと。言は兄弟宜しく相好すべし。斷學ぶ(二)を要せざれとなり。猶は似なり。人情、大抵患とするところ、之を施して報ぜられざるときは則ち輟むるにあり。故に恩終ること能はず。(三)相學ぶを要せずして己之を施さんのみ。

由母蔽其過
而父不知也。
夫人男子六
人。所存惟二。
其愛慈可謂
至矣。然於教之之道。不少假也。纔數歲。行而或蹈。家人走前扶抱。恐其驚啼。夫人未嘗不
呵責。曰。汝若安徐。寧至蹈乎。飲食常置之坐側。常食絮羹。即叱止之曰。幼求稱欲。長當何
如。雖使令輩。不得以惡言罵之。故頤兄弟。平生於飲食衣服無所擇。不能惡言罵人。非性
然也。教之使然也。與人爭忿。雖直不右。曰。患其不能屈。不患其不能伸。及稍長。常使從善
師友游。雖居貧。或欲延客。則喜而爲之具。夫人七八歲時。誦古詩曰。女子不夜出。夜出秉
明燭。自是日暮。則不復出房閤。既長好文。而不爲辭章。見世之婦女。以文章筆札傳於人
者。則深以爲非。

かける　一九 むちうつこと　二〇 小なる召使こやつこ。臧は男、獲は女をいふ　二一 我が子のやうに　二二 なだめる　二三 婢僕の過ちはなだむるとも、諸兄の過ちは必ずしも掩ひかくすことをせず　二四 二人　二五 ゆるやか　二六 しは、したぢ等を加へて味をとゝのふ　二七 伊川兄弟　二八 よしとせず　二九 もてなしのそなへ　三〇 [illegible]、へや

横渠先生嘗
曰。事親奉祭。
豈可使人爲
之。

横渠先生嘗て曰く、親に事へ祭に奉ずること、豈に人をして之を爲さしむべけんや。

(一) 人をして代つてなさしむるは孝敬の心いづくにかあると也

舜之事親有

舜の親に事へて、悦ばざることあるは、父頑に母嚚にして、人情に近か

寛厚撫二愛諸庶一。不レ異二己出一。從叔幼孤。夫人存視常均二己子一。治レ家有レ法。不レ嚴而整。不レ喜三笞二扑奴婢一。視二小臧獲一如二兒女一。諸子或加二訶責一。必戒レ之曰、貴賤雖レ殊。人則一也。汝如レ是大時。能爲二此事一否。先公凡有レ所レ怒。必爲レ之寛解。唯諸兒有レ過。則不レ掩也。常曰、子之所二以不肖一者。

生飲食衣服に於て擇ぶ所なく、惡言して人を罵ること能はざるは、性然るにあらず。之を敎へて然らしめしなり。人と爭忿すれば、直しと雖も右とせず。(一八)曰く、其の屈すること能はざるを患へよ。其の伸ぶること能はざるを患へざれと。稍長ずるに及んで、常に善師友に從ひて游ばしむ。貧に居ると雖も、或は客を延かんと欲するときは、則ち喜んで之が具をなす。夫人七八歲の時、古詩を誦す。曰く、女子は夜出でず。夜出づれば明燭(一九)を秉ると。是れより日暮るれば、則ち復房閤(二〇)を出でず。既に長じて文を好む。而も辭章を爲らず。世の婦女の、文章筆札を以て人に傳ふる者あるを見るときは、則ち深く以て非となす。

(一) 伊川の父太中大夫 (二) 朝廷より臨時の恩賞として官人の子を其父に推擧せしむるを保任と云ひ、其子を任子と云ふ、五たび任子の恩命を得てこれを伯父叔父の子孫に均霑せしを云ふ (三) 女のみなしごを嫁に遣ることに力を盡す (四) やもめとなる (五) 伯母劉氏の孀 (六) 從姉（いとこあね）伯母劉氏の娘にして夫を亡ひし女 (七) 劉氏の孫に當る子 (八) 子姪は姪 (九) 從姉の娘亦やもめとなる (一〇) 姪(めひ)即ち從姉の娘の寡となれるもの (一一) 再嫁せしむ (一二) 幼賤に對して (一三) めしつかひ (一四) 饑餒は食にうゑたると餓けるとなり、寒燠は衣のさむきとあたゝかなるとなり (一五) 居る (一六) もろ〳〵の庶子（めかけばら） (一七) 從弟（いとこ） (一八) 目を

己爲レ義。人以爲レ難。公慈恕而剛斷。平居與二幼賤一處。惟恐レ有レ傷二其意一。至三於犯二義理一。則不レ假也。左右使令之人。無二日不レ察二其饑飽寒燠一。娶二侯氏一。侯夫人事二舅姑一。以二孝謹一稱。與二先公一相待如二賓客一。先公賴二其內助一。禮敬尤至。而夫人謙順自牧。雖二小事一未二嘗專一。必稟而後行。仁恕

と、常に己の子に均し。家を治むること法あり、嚴ならずして整ふ。奴婢を笞扑(一九)することを喜ばず。小臧獲(二〇)を視ること兒女(二一)の如し。諸子或は呵責を加ふれば、必ず之を戒めて曰く、貴賤殊りと雖も、人は則ち一なり。汝是の如き大さの時、能く此事を爲すや否やと。先公凡そ怒る所あれば、必ず之が爲に寬解(二二)す。唯だ諸兒(二三)過あるときは、則ち掩はず。常に曰く、子の不肖なる所以は、母其過を蔽ひて、父知らざるによると。夫人男子六人あり。存する所惟だ二なり。其愛慈至れりと謂ふべし。然れども之を敎ふるの道に於ては、少しも假さず(二四)。纔に數歲なるとき、行いて或は踣るれば、家人走り前みて扶け抱き、其驚き啼かんことを恐る。夫人は未だ嘗て呵責せずんばあらず。曰く、汝若し安徐(二五)ならば、寧ろ踣るゝに至らんやと。飮食すれば常に之を坐の側に置く。常に食ふに羹を絮(二六)ふれば、卽ち叱して之を止めて曰く、幼にして欲に稱はんことを求めば、長じて當に何如にすべきと。使令の輩と雖も、惡言を以て之を罵るを得ず。故に頤(二七)兄弟、平

先公太中。諱珦字伯溫。前後五得ニ任子一。以均ニ諸父子孫一。嫁ニ遣孤女一。必盡ニ其力一。所レ得俸錢。分ニ贍親戚之貧者一。伯母劉氏寡居。公奉養甚至。其女之夫死。公迎ニ從女兒一以歸。教ニ養其子一。均ニ於子姪一。既而女兒之女又寡。公懼ニ女兒之悲思一。又取ニ甥女一。以歸ニ嫁之一。時小官祿薄。克レ

先公太中(一)、諱は珦、字は伯溫、前後五たび任子(二)を得て、以て諸父の子孫に均うす。孤女(三)を嫁遣すること、必ず其力を盡す。得る所の俸錢は、親戚の貧者に分ち贍す。伯母劉氏寡居(四)す。公奉養甚だ至れり。其女(五)の夫死す。公從女兒(六)を迎へ以て歸り、其子(七)を教養すること、子姪(八)に均し。既にして女兒(九)の女又寡なり。公女兒の悲み思はんことを懼れて、又甥女を取りて以て之を歸嫁せしむ。時に小官にして祿薄し。己に克ちて義をなす(一〇)。人以て難しとなす。公慈恕(一一)にして剛斷なり。平居には幼賤(一二)と處り、惟だ其意を傷ることあらんを恐る。義理を犯すに至りては、則ち假さず。左右使令(一三)の人、日に其饑飽寒煖(一四)を察せざることなし。侯氏を娶る。侯夫人舅姑に事へて、孝謹を以て稱せらる。先公と相待すること賓客の如し。先公其内助に賴りて、禮敬尤も至れり。而して夫人謙順にして自ら牧る(一五)。小事と雖も未だ嘗て專にせず。必ず稟ひて後行ふ。仁恕寬厚にして、諸庶(一六)を撫愛すること、己より出でたるに異ならず。從叔(一七)幼うして孤なり。夫人存視(一八)するこ

程子葬レ父。使二周恭叔主一レ客。客欲レ酒。恭叔以告。先生曰。勿レ陷二人於惡一。買二乳婢一多不レ得レ已。或不レ能二自乳一必使レ人。然食二己子一而殺二人之子一非レ道。必不レ得レ已。用二二子乳一食二三子一。足レ備二他虞一。或乳母病且死。則不レ爲レ害。又不下爲二己子一殺中人之子上。但有レ所レ費。若不幸致レ誤二其子一。害孰大焉。

程子父を葬るとき、周恭叔(一)をして客を主らしむ。客酒を欲す。恭叔以て告ぐ。先生曰く、人を惡に陷ること(二)なかれと。

㊀周行己字恭叔、程子の門人　㊁喪に臨んで酒を飲むは非禮なるが故にいふ

乳婢(一)を買ふは多くは已むを得ざればなり。或は自ら乳すること能はずんば必ず人を使ふ(二)。然れども己の子を食ひて人の子を殺すは道にあらず(三)。必ず已むことを得ずんば、二子の乳を用ひて三子を食ふ、他の虞に備ふるに足らん(四)。或は乳母病みて且つ死すとも、則ち害を爲さじ。又己の子の爲に人の子を殺さず。但だ費す所あるのみ(五)。若し不幸にして其子を誤ることを致さば、害孰か大ならん。

㊀乳母、買ふは金錢を給して傭ふの意　㊁乳母を使ふ　㊂己の子の爲めに乳母の子の養育を缺くは道にあらず　㊃今一人の乳母を傭ひ入れ、二人の乳母にて乳母自身の子と共に三人の子を育てよ、然らば不慮の患にも備ふるを得ん　㊄費す所を吝みて法を設けず、若し乳母の病歿に會ひ乳を失ふか、不幸にして我子を誤り又は乳母の子を誤るが如き事あらんには、豫め備ふる所の費と其害孰れか大ならんと也

問。孀婦於理似不可取。如何。曰。然。凡取以配身也。若取失節者以配身。是己失節也。又問。或有孤孀貧窮無託者。可再嫁否。曰。只是後世怕寒餓死。故有是說。然餓死事極小。失節事極大。

問ふ、孀婦(一)は理に於て取るべからざるに似たり。如何。曰く、然り。凡そ取る(二)ことは以て身に配せんとするなり。若し節を失へる(三)者を取りて以て身に配せば、是れ己も節を失するなり。又問ふ、或は孤孀(四)貧窮にして、託する(五)ことなき者あらば、再び嫁すべしや否や。曰く、只だ是れ後世寒餓の死を怕る。故に是の說あり。然れども餓死(六)は事極めて小なり、節を失するは事極めて大なり。

(一)やもめ　(二)娶るは身に配偶せんが爲めなり　(三)貞女兩夫に見えずとの誡に反する者は節を失へる者となり　(四)親戚もなき孤獨の孀婦　(五)身を託する處なき　(六)死は小事なり、節は大事なり、死を以て節に殉ずべきことを敎ふ

病臥於床。委之庸醫。比之不慈不孝。事親者。亦不可不知醫。

病みて床に臥して、之を庸醫に委ぬるは、之を不慈不孝に比す。親に事ふる者亦醫を知らずんばあるべからず。

看。却不推其本所由來故爾。已之子與兄之子。所爭幾何。是同出於父者也。只爲兄弟異形。故以兄弟爲異形。故親己之子。異於兄之子。甚不是也。又問。孔子以公冶長不及南容。故以兄之子妻南容。以己之子妻公冶長何也。曰。此亦以己之私心看聖人也。凡人避嫌者。皆內不足也。聖人至公。何更避嫌。凡嫁女。各量其才而求配。或兄之子不甚美。必擇其相稱者爲之配。己之子美。必擇其才美者爲之配。豈更避嫌邪。若孔子事。或是年不相若。或時有先後。皆不可知。以孔子爲避嫌。則大不是。如避嫌事。賢者且不爲。況聖人乎。

れ年の相若かざるあり、或は時の先後あるありしこと、皆知るべからず。孔子を以て(一五)嫌を避くと爲すは、則ち大いに不是なり。嫌を避くる事の如きは、賢者すら且つなさず。況や聖人をや。

(一) 第五は姓倫は名字は伯魚、後漢の京兆の人なり。或人倫に向つて、汝にも私ありやと問ひしに、倫答へて曰くわが兄の子の病める時、一夜に十たび起きたれど、退いて寢るに安眠せり、わが子の病の時は、起きては看ざりしかど終夜安眠せざりき、これ私なきにあらずと (二) 安眠せると安眠せざるとを論ずるまでもなく、其の我子には起きざる事と兄の子の爲には十たび起きると云ふことが卽ち私なり (三) 父子の愛はおはやけである、他人から我子の愛に偏したりと云はれんことをおそれて、我子にうすく兄の子にあつくせし心が卽ち私なり (四) 人の本性已に我子と兄の子とは恩愛の輕重あるなれば へだてあるが當然ならん (五) 孝經を引いて云ふ (六) 小さく看做して却つて其本の由來を推さず (七) 源を尋ぬれば同じ祖より出でたる者 (八) 公冶長、南容共に孔子の弟子 (九) 人となりの及ばざる所ありしなり (一〇) 倫の例を推して此の間を發す (一一) 嫌疑 (一二) 中 (一三) 配偶 (一四) 相應したる (一五) 年齡の相違か或は時の前後せしか、今其事情知れ難し

私也。又問。視三己子與二兄子一。有レ間否。曰。聖人立レ法曰。兄弟之子猶レ子也。是欲二視レ之猶一レ子也。又問。天性自有二輕重一。疑若レ有レ間然。曰。只爲下今人以二私心一看了上。孔子曰。父子之道天性也。此只就二孝上一說。故言二父子天性一。若二君臣兄弟賓主朋友之類一。亦豈不二是天性一。只爲二今人小

曰く、父子の道は天性なりと。此れ只だ孝の上に就て說く。故に父子は天性なりと言ふ。君臣・兄弟・賓主・朋友の類の若きも、亦豈に是れ天性ならざらんや。只だ今の人小看して、(六)却つて其本の由つて來る所を推さゞるが爲の故のみ。己の子と兄の子と、爭ふ所幾何ぞ。是れ同じく父に出でたる者なり。(七)只だ兄弟形を異にするが爲の故に、兄弟を以て手足となす。人多く形を異にするを以て、故に己の子を親むこと、兄弟の子に異なるは、甚だ不是なり。又問ふ、孔子、公冶長(八)の南容(九)に及ばざるを以て、故に兄の子を以て南容に妻せ、己の子を以て公冶長に妻せしは何ぞや。(一〇)曰く、此れ亦己の私心を以て聖人を看るなり。凡そ人の嫌(一二)を避くる者は、(一一)皆內足らざればなり。聖人は至公なり。何ぞ更に嫌を避けん。凡そ女を嫁すること、各々其才を量りて(一三)配を求む。或は兄の子甚だ美ならずんば、必ず其相稱ふ者を擇んで之が配となさん。己の子美ならば、必ず其才の美なる者を擇んで(一四)之が配となさん。豈に更に嫌を避けんや。孔子の事の若きは、或は是

性至レ命。如三洒掃應對。與二盡レ性至レ命。亦是一統底事。無レ有二本末。無レ有二精粗。却被下後來人言二性命一者。別作中一般高遠說上。故擧二孝弟。是於二人切近者一言レ之。然今時非レ無二孝弟之人。而不レ能レ盡レ性至レ命者。由レ之而不レ知也。

と能はざる者は、之に由りて知らざればなり。

(一)伊川作る所の明道先生行狀　(二)一箇の事　(三)一つに統ぶる事にて二つあるに非ず　(四)洒掃應對は童子のなすべき業務　(五)一箇高遠の說とせられたり　(六)孝弟にもとづくと云へるは、人の手近かの事にて言ふ

問。第五倫視三其子之疾。與二兄子之疾。不レ同。自謂二之私。如何。曰。不レ待下安寢與中不二安寢。只不レ起與二十起。便是私也。父子之愛。本是公。才著二些心一做。便是

問ふ、(一)第五倫、其子の疾と、兄の子の疾とを視ること同じからず、自ら之を私と謂ふ。如何。曰く、(二)安く寢ぬると安く寢ねざるとを待たず、只だ起きざると十たび起くると、便ち是れ私なり。(三)父子の愛は、本是れ公なり。才に些の心を著けて做すは、便ち是れ私なり。又問ふ、己の子と兄の子とを視ること、閒ありや否や。曰く、聖人法を立てゝ曰く、兄弟の子は猶ほ子のごとしと。是れ之を視ること猶ほ子のごとくせんと欲するなり。又問ふ、(四)天性自ら輕重あり。疑ふらくは閒あるが若く然り。曰く、只だ今の人私心を以て看了るが爲なり。(五)孔子

所レ樂共重。豈可レ忍哉。

人無二父母一。生日當二倍悲痛一。更安忍三置レ酒張二レ樂。以爲レ樂。若二具慶者一可矣。

人父母なくんば、(一)生日には當に倍〻悲痛すべし。更に安ぞ酒を置き樂を張りて、以て樂を爲すに忍びん。(二)具慶の者の若きは可なり。

(一) 誕生日には父母の心勞養育の艱難を思ひ出て報恩の及ばざるを悲み痛みてこそ然るべきに、祝の酒宴などとは以つての外なり　(二) 父母共に存する者は其によろこびて宴め樂むは可なりと也

問。行狀云。盡レ性至レ命。必本二於孝弟一。不レ識孝弟何以能盡レ性至レ命也。曰。後人便將二性命一。別作二一般一說了。性命孝弟。只是一統底事。就二孝弟中一。便可レ盡レ

問ふ、(一)行狀に云く、性を盡し命に至ることは、必ず孝弟に本づくと。識らず、孝弟何を以てか能く性を盡し命に至るやを。曰く、後人便ち性命を將つて、別に(二)一般と作して說き了る。性命孝弟は、只だ是れ(三)一統底の事、孝弟の中に就て、便ち性を盡し命に至るべし。(四)灑掃應對と、性を盡し命に至るとの如きも、亦是れ一統底の事なり。本末あることなく、精粗あることなし。却つて後來の人性命を言ふ者に、別に一般高遠の說とせらる。故に(五)孝弟を擧ぐるは、是れ人の切近なる者に於て之を言ふ。然して今の時孝弟の人なきにあらず。而も性を盡し命に至るこ

辭。謂ニ治レ家當ト有ニ威嚴一。而夫子又復戒云。常ニ先ヅ嚴ニ其身一也。威嚴不ニ先行ニ於己一。則人怨而不レ服。

又復戒めて云く、當に先づ其身を嚴にすべしと。威嚴先づ己に行はれざるときは、則ち人怨んで服せず。

(一) 家を治むるの威を貴ぶ所は徒らに嚴なるのみにては益なし、己を正しうするは本として平を持することと謹嚴、少しも弛むことなくば家人自然に憚り感じて正に歸す、下を御するの道皆然り

歸妹九二。守ニ其幽貞一。未レ失ニ夫婦常正之道一。世人以ニ媟狎一爲レ常。故以ニ貞靜一爲レ變レ常。不レ知ニ乃常久之道一也。

歸妹(一)の九二、其幽貞(二)を守りて、未だ夫婦常正の道を失はず。世人媟狎(三)を以て常となす。故に貞靜(四)を以て常を變ぜりとなして、乃ち常久の道なることを知らず。

(一) 歸妹の卦　(二) 幽はしづか、貞は正しき義　(三) なれあひ、玩侮の義　(四) 貞靜をさも變りたることのやうに思ひなして、却つて夫婦常久の道なることを知らず

世人多愼ニ於擇レ壻。而忽ニ於擇レ婦。其實壻易レ見。婦難レ知。

世人多く壻を擇ぶに愼んで(一)、婦を擇ぶに忽にす(二)。其實壻は見易く、婦は知り難し。繫る所甚だ重し。豈に忽にすべけんや。

(一) 大事をとる　(二) なほざりにする

在₂巽體₁。不ㇾ爲ㇾ無ㇾ順。順事ㇾ親之本也。又居ㇾ得ㇾ正。故無₂大咎₁。然有₂小悔₁。已非₂善事ㇾ親₁也。

るにあらず。

㊀蠱卦九三の爻辭の「幹₂父之蠱₁小有ㇾ悔无₂大咎₁」を釋す、此爻は剛陽の質を以て三の剛位に居り、又下卦の上にありて中ならず、故に過ぎたりといふ　㊁上出の九三の爻辭に取る　㊂巽はしたがふ也、又陽爻にして陽位に在るを以て居る所正し　㊃小しく悔ありと云へば、親に事ふるに善を盡すとはいひがたし

正₂倫理₁。篤₂恩義₁。家人之道也。

倫理を正し、恩義を篤うするは、家人の道なり。

人之處ㇾ家。在₂骨肉父子之間₁。大率以ㇾ情勝ㇾ禮。以ㇾ恩奪ㇾ義。惟剛立之人。則能不ㇾ以₂私愛₁失₂其正理₁。故家人卦。大要以ㇾ剛爲ㇾ善。

人の家に處て、骨肉父子の間に在る、大率情を以て禮に勝ち、恩を以て義を奪ふ。惟だ剛立の人は、則ち能く私愛を以て其正理を失はず。故に家人の卦、大要剛を以て善しとなす。

㊀父母兄弟姉妹の關係は骨の肉に於けると同じとの意　㊁一家の内は兎角禮よりも情愛、義よりも恩愛に流れやすきものなれど、志剛にして立つ人は私の愛情を以てして正理を失ふが如き事をなさず　㊂風火家人の卦

家人上九爻

家人の上九の爻辭に、家を治むるには當に威嚴あるべきを謂へり。而して夫子

母。當下以二柔巽一輔二導之一。使モ得二於義一。不順而致レ敗レ蠱。則子之罪也。從容將順。豈無レ道乎。若伸二己剛陽之道一。遽然矯拂。則傷レ恩。所レ害大矣。亦安能入乎。在三乎屈レ己下レ意。巽順將承。使二之身正事治一而已。剛陽之臣。事二柔弱之君一。義亦相近。

容として將け順ふ、豈に道なからんや。若し己が剛陽の道を伸べて、(四)遽然として矯拂するときは、則ち恩を傷ふ。害する所大なり。亦安ぞ能く入らんや。己を屈し意を下し、巽順にして將け承け、之をして身正しく事治まらしむるにあるのみ。(五)剛陽の臣、柔弱の君に事ふるも、義亦相近し。

(一)易の蠱卦、蠱は事のやぶれ、貞はかたき意 (二)柔はやはらぎ、巽はしたがふこと、婦人は柔く暗き性なれば遂にさとし難きものあり、當に柔巽を以て輔け導くべしとなり (三)不順にして却つて事成り難きは則ち子の過ちなり、從容(ゆるやか)として順ふに道なきにあらず (四)にはかに氣に戻り逆ちふ(矯拂)ときは恩愛の情をやぶりそこなひ母の義に立返る時を得ざらんとなり (五)剛直の臣が柔弱の君につかふるの場合も、この子と母とに於けると義同じきなり

蠱之九三。以レ陽處レ剛而不レ中。剛之過也。故小有レ悔。然

(一)蠱の九三、陽を以て剛に處て中ならず。剛の過ぎたるなり。故に(二)小しく悔あり。然れども(三)巽體にありて、順ふことなしとせず。順は親に事ふるの本なり。又居ること正を得たり。故に大なる咎なし。然れども(四)小しく悔あり。已に善く親に事ふ

伊川先生曰。弟子之職。力有餘則學文。不修其職而先文。非爲己之學也。

孟子曰。事親若曾子可也。未嘗以曾子之孝爲有餘也。蓋子之身。所能爲者。皆所當爲也。

幹母之蠱。不可貞。子之於

卷之六

家道類　凡二十二條

伊川先生曰く、弟子の職、(一)力餘りあるときは則ち文を學ぶ。其職を修めずして文を先にするは、己が爲にするの學にあらず。

(一) 論語學而篇にあり、弟子の職分を行ひて餘力ある後詩書六藝の文を學ぶべしとなり

孟子曰く、親に事ふること曾子(一)の若きは可なり。未だ嘗て曾子の孝を以て餘りありとは爲さず。蓋し子の身、能く爲す所の者は、皆當に爲すべき所なり。

(一) 孔子の弟子曾參

(一)母の蠱を幹む。貞にすべからず。子の母に於ける、當に柔巽(二)を以て之を輔導して、義に得しむべし。(三)不順にして蠱を敗ることを致さば、則ち子の罪なり。從

益凶狠。只爲ㇾ未三嘗爲二子弟之事一。則於二其親一已有二物我一。不ㇾ肯屈下一。病根常在。又隨ㇾ所ㇾ居而長。至ㇾ死只依ㇾ舊。爲二子弟一。則不ㇾ能ㇾ安二洒掃應對一。在二朋友一。則不ㇾ能ㇾ下二朋友一。有二官長一。則不ㇾ能ㇾ下二官長一。爲二宰相一。不ㇾ能ㇾ下二天下之賢一。甚則至下於徇二私意一。義理都喪上也。只爲下病根不ㇾ去。隨二所ㇾ居所上ㇾ接而長上。人須三一事事消二了病一。則義理常勝。

背て屈下せず。㊂病根常にあり。又居る所に隨ひて長じ、死に至るまで只だ舊に依る。子弟と爲りては、則ち洒掃應對に安んずること能はず。朋友に在りては、則ち朋友に下ること能はず。官長あるときは、則ち官長に下ること能はず。宰相と爲りては、天下の賢に下ること能はず。甚しきは則ち私意に徇ひて、義理都て喪ふに至る。只だ病根去らず、居る所接する所に隨ひて長ずるが爲なり。人須らく一に事事病を消了すべし、則ち義理常に勝たん。

㊀ 凶惡にしてもとること　㊁ 子弟の道を習ひ修めざるが故にその親みに於て物我（へだてる觀念）ありて容易に人に下らざる氣風となれり　㊂ 病の根が幼少の時より身にしみわたり居りて、位地に從つていよ〳〵增長し死ぬまでの間ます〳〵つゞく

言敬且信。人之有二朋友一。不レ爲二燕安一。所三以輔二佐其仁一。今之朋友。擇二其善柔一以相與。拍レ肩執レ袂。以爲二氣合一。一言不レ合。怒氣相加。朋友之際。欲二其相下不一レ倦。故於二朋友之間一。主二其敬一者。日相親與。得レ效最速。仲尼嘗曰。吾見下其居二於位一也。與二先生一並行上也。非二求レ益者一。欲二速成一者。則學者先須二溫柔一。溫柔則可二以進一レ學。詩曰。溫溫恭人。惟德之基。蓋其所レ益之多。

ばなり。

(一) 他人の批判を病みてゞだしき柔弱の體を謂ふにあらず、溫柔恭謙にして聰明の徹に至るまで節あることを云ふ (二) 國君を視るには、其帶の間をはなれず、これより上る時は則ちおごり、これより下るときは則ちうれはしとなり。紳帶は大帶の前に結んで垂れたる部分 (三) 前に出づ (四) 師行は粗暴なり、粗暴なれば收斂誠實なる能はず故て志を遜りて學を務め篤に探く道に造ること能はず (五) 堂々たる子張は氣魄高亢にして收斂誠實の意なし、故に曾子與に並びて仁を爲し難しと云へり (六) 心の神は目に寓す、故に目視の高下に心の敬傲を見るべし (七) なすこともなく安らかに居る、こゝにては閑ある毎に打寄りて遊び戯れんとての相手にはあらずとの意 (八) 何にても我が意に逆らはぬ柔順なる質 (九) 意氣投合せりといふ (一〇) 若し一言にても合致せざるときは (一一) 何處までも下から出て退屈せざること (一二) 互にしたしみたすけること (一三) 論語に出づ、孔子が闕黨の童子の行動を見て、進益を求むる者にあらず、只速かに成人せんことを欲する者なりと云へるなり (一四) 詩の大雅に出づ、輕傲を戒め溫柔を習はしめんとする意

世學不レ講。男女從レ幼便驕惰壞了。到レ長

世學講ぜず、男女幼より便ち驕惰にして壞り了り、長ずるに到りて益々凶狠(二)なり。只だ未だ(三)嘗て子弟の事を爲さゞるが爲に、則ち其親に於て已に物我ありて、

有レ節。視有二上下一。視高則氣高。視下則心柔。故視二國君一者不レ離二紳帶之中一。學者先須レ去二其客氣一。其爲レ人剛行。終不二肯進一。堂堂乎張也。難二與竝爲一レ仁矣。蓋目者人之所二常用一。且心常託レ之。視之上下且試レ之。已之敬傲。必見二於視一。所二以欲一レ下二其視一者。欲レ柔二其心一也。柔二其心一。則聽レ

(三)客氣を去るべし。其の人となり(四)剛行なれば、終に肯て進まず。(五)堂堂たるかな張や、與に竝びて仁を爲し難し。蓋し目は人の常に用ふる所なり。(六)且つ心常に之に託す。視ること上下にして且つ之を試みよ。己の敬傲は、必ず視るに見る。其視ることを下さんと欲する所以の者は、其心を柔にせんと欲すればなり。其心を柔にするときは、則ち言を聽いて敬して且つ信ず。人の朋友を有つは、(七)燕安の爲ならず、其仁を輔佐する所以なり。今の朋友は、(八)其善柔を擇んで以て狎與し、肩を拍ち袂を執りて、以て(九)氣合へりとなす。(一〇)一言合はざれば、怒氣相加ふ。朋友の際は、(一一)其相下りて倦まざらんことを欲す。故に朋友の間に於て、其敬を主とする者は、日に(一二)相親與して、效を得ること最も速かなり。仲尼嘗て曰く、(一三)吾れ其の位に居り、先生と竝び行くを見る。益を求むる者にあらず、速かに成らんことを欲する者なりと。則ち學者先づ須らく溫柔なるべし。溫柔なれば則ち以て學に進むべし。(一四)詩に曰く、溫溫たる恭人は、惟れ德の基なりと。蓋し其益する所多けれ

於舊習耳。古人欲得朋友與琴瑟簡編。常使心在於此。惟聖人知朋友之取益為多。故樂得朋友之來。

㊀氣志に勝ちて道を求むる心を他の處に引き去るなり、卒々はいそがはしく落ちつかぬ義 ㊁舊き習慣がまつはる ㊂ともだち、こと、書籍

矯輕警惰。

輕きを矯め惰を警めよ。

㊀輕は浮躁、惰は强慢、此の二者は學を爲すの大患なり

仁之難成久矣。人人失其所好。蓋人人有利欲之心。與學正相背馳。故學者要寡欲。

仁の成り難きこと久し。人人其の好む所に失す。蓋し人人利欲の心ありて、學と正に相背馳す。故に學者は欲を寡くせんことを要す。

㊀仁は天理の公、利欲は人心の私なり、故に相背馳す

君子不必避他人之言。以為太柔太弱。至於瞻視。亦

君子は必ずしも他人の言を避けて、以て太柔太弱を爲さず。瞻視に至るまで、亦節あり。視るに上下あり。視ること高きときは則ち氣高し。視ること下きときは則ち心柔なり。故に國君を視る者は、紳帶の中を離れず。學者先づ須らく其

善未嘗不知。徒好仁。而不惡不仁。則習不察。行不著。是故徒善未必盡義。徒是未必盡仁。好仁而惡不仁。然後盡仁義之道。

惡まざるは、則ち習ひて察せず、行ひて著しからざるなり。是の故に徒善は未だ必ずしも義を盡さず、徒是は未だ必ずしも仁を盡さず。仁を好みて不仁を惡み、然して後仁義の道を盡す。

責己者。當知無天下國家皆非之理。故學至於不尤人。學之至也。有潛心於道。忽忽爲他慮引去者。此氣也。舊習纏繞。未能脫灑。畢竟無益。但樂

己を責むる者は、當に天下國家皆非なることなきの理を知るべし。故に學、人を尤めざるに至るは、學の至なり。(一)心を道に潛むるに、忽忽として他の慮の爲に引き去らるゝ者あるは、此れ氣なり。(二)舊習纏繞して、未だ脫灑すること能はざれば、畢竟益なし。但だ舊習を樂むのみ。古人朋友と(三)琴瑟・簡編とを得て、常に心をして此にあらしめんことを欲す。惟だ聖人は朋友の益を取ること多しと爲すを知る。故に朋友の來るを得ることを樂む。

内自省。豈其不在己。

を見ては内に自ら省る。蓋し己に在らずといふことなし。

（一）論語に出づ　（二）孟子に出づ　（三）論語に出づ

横渠先生曰。湛一氣之本。攻取氣之欲。口腹於飲食。鼻口於臭味。皆攻取之性也。知德者屬厭而已。不以嗜欲累其心。不以小害大末喪本焉爾。

横渠先生曰く、湛一は氣の本なり。攻取は氣の欲なり。口腹の飲食に於ける、鼻口の臭味に於ける、皆攻取の性なり。德を知る者は屬厭するのみ。嗜欲を以て其心を累はさず、小を以て大を害し末もて本を喪はざるのみ。

（一）湛は動かず一は雜らず氣の本體なり　（二）貪み求めてをさめとる　（三）飽きたること

纖惡必除。善斯成性矣。察惡未盡。雖善必粗矣。

纖惡も必ず除けば、善斯に性を成す。惡を察して未だ盡さずんば、善なりと雖も必ず粗なり。

（一）極めて小なる惡　（二）究ちつくさずんば

惡不仁。故不

不仁を惡む、故に不善未だ嘗て知らずんばあらず。徒らに仁を好みて、不仁を

別一年。往見レ之。伊川曰。相別一年。做二得甚工夫一。謝曰。也只去二箇矜字一。曰。何故。曰。子細檢點得來。病痛盡在二這裏一。若按二伏得這箇罪過一。方有二向進處一。伊川點頭。因語二在レ坐同志者一曰。此人爲レ學。切問近思者也。

甚の工夫をか做し得たる。謝(一)曰く、也只だ箇の矜(二)の字を去く。曰く、何の故ぞ。曰く、子細に檢點(三)し得來るに、病痛(四)盡く這の裏にあり。若し這箇の罪過を按伏(五)し得ば、方に向進(六)する處あらん。伊川點頭(七)す。因つて坐にある同志の者に語りて曰く、此の人の學を爲す、切に問うて近く思ふ者なりと。

(一) 謝顯道なり　(二) 己をほこること(自慢心)　(三) ぎんみ　(四) 病痛にして又一面罪過なり　(五) おさへふせて除き去ること　(六) 向上　(七) うなづく

思叔詬二詈僕夫一。伊川曰。何不三動レ心忍二レ性。思叔慙謝。

思叔僕夫(一)を詬詈(二)す。伊川曰く、何ぞ心を動かし性を忍ばざる(三)と。思叔慙ぢて謝す。

(一) しもべ　(二) のゝしること　(三) 道義の本心を動かす意、前に出づ

見レ賢便思レ齊。有レ爲者亦若レ是。見二不賢一而

(一)賢を見ては便ち齊しからんことを思ふ。(二)爲すことある者は亦是の若し。(三)不賢

能無二怒色一。有下能怒二一人一。而不レ怒二別人一者上。能忍得如レ此。已是煞知二義理一。若三聖人因レ物。而未二嘗有一レ怒。此莫二甚難一。君子役レ物。小人役二於物一。今見二可レ喜可レ怒之事一。自家著二一分陪奉他一。此亦勞矣。聖人之心如二止水一。

人之視最先。非レ禮而視。則所謂開レ目便錯了。次聽。次言。次動。有二先後之序一。人能克レ己。則心廣體胖。仰不レ愧俯不レ怍。其樂可レ知。有レ息則餒矣。

(一)人の視ること最も先なり。禮にあらずして視るときは、則ち所謂目を開かば便ち錯り了る。次に聽、次に言、次に動と、先後の序あり。人能く己に克つときは、則ち心廣く體胖にして、仰いで愧ぢず俯して怍ぢず。其樂み知るべし。(二)息むことあるときは則ち餒う。

(一) 目の動く調ることによつて克己の工夫の經驗を論ずるなり、目を開かば便ち錯るとは俗語にて誤なり、聽言動と序を設けたれど必ずしも行ふに先後あるにあらず　(二) 己に克つことをやめなんには則ち本心充足せずして、恰も食ふものなくして餒え餓る丶にひとしとの意

聖人責二己感一也處多。責二人應一也處少。

聖人は(一)己が感を責むるや處多く、人の應を責むるや處少し。

(一) 己を悩みて多く責め人の應ぜざるを責むること少し

謝子與二伊川一

(一)謝子伊川と別る丶こと一年、往いて之を見る。伊川曰く、相別る丶こと一年、

道レ易。此莫ニ是最難一。須ニ是理會得一。因レ何不レ遷レ怒。如三舜之誅ニ四凶一。怒在ニ四凶一。舜何與焉。蓋因三是人有ニ可レ怒之事一而怒レ之。聖人之心本無レ怒也。譬如ニ明鏡一。好物來時。便見ニ是好一。惡物來時。便見ニ是惡一。鏡何嘗有ニ好惡一也。世之人固有下怒ニ於室一。而色中於市上。且如レ怒ニ一人一。對ニ那人一說話。

へば明鏡の如し。好き物來る時は、便ち是の好きを見る。惡しき物來る時は、便ち是の惡しきを見る。鏡何ぞ嘗て好惡あらん。(五)世の人固より室に怒りて、市に色するあり。且つ(六)一人に怒るが如き、那の人に對して說話して、能く怒色なしや否や。(七)能く一人に怒りて、別人に怒らざる者あり。能く忍び得て此の如くなるは、已に是れ煞だ義理を知れり。聖人の物に因りて、未だ嘗て怒あらざるが若き、此は是れ甚だ(八)難きことなけんや。君子は物を役し、小人は物に役せらる。今喜ぶべく怒るべきの事を見て、(九)自家一分を著けて他に陪奉せば、此れ亦勞せり。聖人の心は止水の如し。(一〇)

(一) 程子の說を集め錄せる書 (二) あち〱に說きたるなり (三) 最もむつかしうはなきか (四) 四凶の事前に出づ (五) 左傳の語を取りて云ふ、室内にて怒を發したるを市に出でゝ顔に表せるもの、と (六) 或一人に怒を發して餘の人に對して話說するとき怒の色を收むることを得るかとの意 (七) 或一人に怒を發しても餘の人の前では怒らざるものあり、斯く忍ぶとの出來るは甚だ義理をわきまへたる人ぞ (八) 甚だむづかしうはなきか(前節の句を繰返す) (九) 一分たりとも己が喜怒の私意を著けて他人に追隨せば (一〇) 止水のこと前に出づ

人語言緊急。莫ニ是氣不レ定否。曰。此亦當レ習。習到ニ言語自然緩時一。便是氣質變也。學至ニ氣質變一。方是有レ功。

節の實なる所以なり

人の語言の緊急なるは、是れ氣定まらざることなしや否や。曰く、此れ亦當に習ふべし。習ひて言語自然に緩き時に到りて、便ち是れ氣質變ずるなり。學は氣質變ずるに至りて、方に是れ功あり。

問。不レ遷レ怒。不レ貳レ過何也。語錄有ニ怒レ甲不レ遷レ乙之說一。是否。伊川先生曰。是。曰。若レ此則甚易。何待ニ顏子一而後能。曰。只被ニ說得粗了一。諸君便

問ふ、怒を遷さず、過を貳たびせざるは何ぞや。語錄（一）に甲に怒りて乙に遷さざる說あり。是なりや否や。伊川先生曰く、是なり。曰く、此の若きは則ち甚だ易し。何ぞ顏子を待ちて後能くせん。曰く、只だ說き得て粗了せらる（二）。諸君便ち易しと道ふ。此は是れ最も（三）難きことなけんや。須らく是に理會し得べし、何に因りて怒を遷さざるかを。舜が（四）四凶を誅するが如き、怒は四凶にあり。舜何ぞ與らん。蓋し是の人怒るべき事あるに因つて之を怒る。聖人の心本怒なし。贒

因ㇾ見果知ㇾ未也。伊川先生曰。大抵人有ㇾ身。便有二自私之理一。宜其與ㇾ道難ㇾ一。罪ㇾ己責ㇾ躬不ㇾ可ㇾ無。然亦不ㇾ當下長留在二心胸一爲上ㇾ悔。所ㇾ欲不二必沈溺一。只有ㇾ所ㇾ向便是欲。明道先生曰。子路亦百世之師。

暮に歸る時、田野の間に在つて田獵する者を見、覺えず喜ぶ心なり」喜ぶ心はすきこのむ心

伊川先生曰く、大抵人身(一)あれば、便ち自私する理あり。宜なり其道と一なり難きこと。

(一) 人間身體を持つ以上自然に利己の欲を有つ、從て一つになり難きこそ尤も千萬である

己を罪し躬を責むることなかるべからず。然れども亦(一)當に長く留めて心胸にありて悔をなすべからず。

(一) 既に過ぎつるあやまちを長く胸裏に留め置きて常に悔みなげくときは心これに繫がりて事毎に妨げとなるものぞ、過ちを改めたらんにはいつまで反らぬ愚痴をこぼすなとの意

欲する所(一)必ずしも沈溺せずとも、只だ向ふ所あれば便ち是れ欲なり。

(一) 沈溺に至らずとも心これに向へば欲念の芽となり刈らざれば根ふかく幹ふとくなりゆかん

明道先生曰く、(一)子路も亦百世の師なり。

(一) 仲由字子路、孟子に聖人は百世の師なりと曰へり、子路の賢未だ聖人ならざるも亦以て百世の師と仰ぐべしとなり。本註に云く「人之に告ぐるに過ちあるを以てするときは則ち喜ぶ」人の己の過ちを告ぐるを聞いて喜ぶは子

九德最好。

饑食渴飲。冬裘夏葛。若致二些私吝心在一。便是廢二天職一。

獵自謂三今無二此好一。周茂叔曰。何言之易也。但此心潛隱未レ發。一日萌動。復如レ前矣。後十二年。

九德最も好し(一)

(一) 書經に皋陶の人の德行としてあげたる九目をいふ。則ち寬(ゆるやか)にして栗(おごそか)・柔(やはらか)にして立(たち定まりて動かず)・愿(をぼく)にして恭(うや〳〵し)・亂(をさむること)にして敬(つゝしむ)・擾(したがひなづく)にして毅(つよし)・直(なほし)にして溫(おだやか)・簡(ことずくなし)にして廉(きよし)・剛(つよくたけし)にして塞(みてること)・彊(つよくいさまし)にして義(よろしきこと)なるをいふ。

(一)饑ゑて食ひ渴して飮み、冬は裘し夏は葛す。若し些か私吝の心あることを致さば、便ち是れ天職を廢す。

(一) 饑ゑには食、渴には飮、寒ければ裘(かはごろも)を被り、暑ければ葛(くずぬのころも)をまとふ、人間各々當然の法則ありて天賦の職分なり、一毫たりとも私己貪吝の意あるものは、天職を傷り廢するものぞ

獵は(一)自ら今此好なしといふ。周茂叔曰く、(二)何ぞ言ふことの易きや。但だ此心潛隱して未だ發せず。一日萌動せば、復前の如くならんと。後(三)十二年、見るに因つて果して未だしきことを知れり。

(一) 自分は今獵を好まず　(二) 口では何とも言ひ易きものぞ、實は此の獵を好む心が潛み隱れて居るばかりでいつか萌え出せば又前年の如く甚しき好きものとならんとの意　(三) 本註に云く「明道年十六七の時田獵を好む、十二年、

日畏二尖物一。此事不レ得二放過一。便與克下。室中率置二尖物一。須二以レ理勝一レ他。尖必不レ刺レ人也。何畏之有。

明道先生曰。責レ上責レ下。而中自恕レ己。豈可レ任二職分一。

舍レ己從レ人。最爲二難事一。己者我之所レ有。雖二痛舍一レ之。猶懼二守レ己者固而從レ人者輕一也。

（一）日尖物を畏る。此事放過することを得ず。便ち與に克ち下さんには、室中率ね尖物を置き、須らく理を以て他に勝つべし。尖必ずしも人を刺さず、何の畏るることかこれあらんと。

（一）此は一種の病者のことを引きて話說するなり、尖りたる者を畏るゝ人ありて寸時も忘るゝとなし、これにかちくださんとを敎へやうならば、室の中に大方尖りたる物を置きならべ、理智を以てこれに勝ち、日に見馴れ心に恐るべきものにあらずと悟りなば、彼れ必ずしも刺さず畏るゝ心亡ぶべしとなり

明道先生曰く、上を責め下を責めて、而して中自ら己を恕するは、豈に職分に任ずべけんや。

（一）他を責めのゝしりて己を責めず恕しおく者が何條職分に任ずべきぞ

（一）己を舍てゝ人に從ふこと、最も難事となす。己は我の有する所なり。痛く之を舍つと雖も、猶ほ（二）己を守る者の固くして、人に從ふ者の輕からんことを懼る。

（一）虞書に堯の德を讃するの詞、而して是れ難事とす　（二）兎角己は尤もなるものと思ひ、現にたちまさりたる人の前にも從ふことの輕からんとをおそるとなり

故無二浩然之氣一。

治レ怒爲レ難。治レ懼亦難。克レ己可三以治二怒。明レ理可三以治二懼。

堯夫解二他山之石。可三以攻二玉。玉者溫潤之物。若將二兩塊玉一來相磨。必磨不レ成。須下是得二他箇麤礪底物一。方磨得出上。譬如下君子與二小人一處上。爲二小人一侵陵。則修省畏避。動レ心忍レ性。增益預防。如レ此便道理出來。

なし。

(一)やよさか　(二)正大の氣

怒を治むるを難しとなす。懼を治むるも亦難し。己に克ちて以て怒を治むべし。理を明かにして以て懼を治むべし。

(一)堯夫(二)他山の石以て玉を攻むべしといふを解す。玉は溫潤の物なり。若し兩塊の玉を將ち來りて相磨すれば、必ず磨き成らず。須らく是れ他箇の麤礪底の物を得て、方に磨き得出すべし。譬へば君子と小人と處るが如き、小人の爲に侵陵せらるゝときは、則ち修省畏避し、(五)心を動かし性を忍んで、增益預防す。此の如くなれば便ち道理出で來る。

(一)邵雍字は堯夫、康節先生といふ　(二)他山の石は礪石(あらど)なり　(三)あらどを以て玉を磨き得との意　(四)おかししのがる　(五)我身を修めかへりみ小人を畏れ避く　(六)私心を動かすにあらず、道義の心を働かせて物も安んぜず、性を忍んで輕躁せず、自己の至らざる所を增益し、惡患を豫防するの意

明道先生曰。義理與二客氣一常相勝。只看二消長分數多少一。爲二君子小人之別一。義理所レ得漸多。則自然知二得客氣消散得漸少一。消盡者是大賢。

明道先生曰く、義理と客氣と常に相勝つ。只だ消長する分數の多少を看て、君子小人の別をなす。義理得る所漸く多きときは、則ち自然に客氣消散し得て漸く少きを知り得。消盡する者は是れ大賢なり。

㊟義理は性命の本然なり、客氣は形氣の然らしむる所にして私心より生ず、此の二つの者常に相戰ふ、義理勝つときは客氣消ゆ、其の分數の消長を見て君子と小人との別をなすとなり

或謂。人莫レ不レ知二和柔寛緩一。然臨レ事則反至二於暴厲一。曰。只是志不レ勝レ氣。氣反動二其心一也。

或ひと謂へらく、人和柔寛緩を知らざることなし。然れども事に臨むときは、則ち反つて暴厲に至ると。曰く、只だ是れ志氣に勝たず、氣反つて其心を動すなり。

㊟知りてこれを行ふ能はず、反つて忿怒し暴闘するは血氣にはやればなり、學は志を立つるを以て本とす、志立つときは氣質自ら變化す

人不レ能レ祛二思慮一。只是吝。吝

人思慮を祛くこと能はざるは、只だ是れ吝なればなり。吝なるが故に浩然の氣

正之節也。以二剛中正一爲レ節。如下懲レ忿窒レ欲。損レ過抑中有餘上是也。不正之節。如下嗇節二於用一。懦節中於行上是也。

過ぎたるを損じ、有餘を抑ふるが如き是れなり。不正の節は、嗇(三)なるもの用を節し懦なるもの行を節するが如き是れなり。

(一) 剛を以て柔に居る、兌の悦びに居て剛の德を失ふ、節制するところあるも其義正大ならず故に不正の節といふ　(二) 剛陽中正の德に以て節制するは可、驕奢を愼み冗費を節し餘あるを抑ふるごときの類　(三) 吝嗇なる者が徒らに貨の多きことを欲ひて必要の財用をも節し怯懦なる者が一身の難あらんことを恐れて當然爲すべきことにも手控ふるの類

人而無二克伐怨欲一。惟仁者能レ之。有レ之而能制二其情一不レ行焉。斯亦難レ能也。謂二之仁一。則未レ可也。此原憲之問。夫子答以下知二其爲レ難。而不中知二其爲ヒ仁。此聖人開示之深也。

人として克伐怨欲(一)なきは、惟だ仁者のみ之を能くす。これあれども而も能く其情を制して行はざる、斯れ亦能くし難し。之を仁と謂ふときは、則ち未だ可ならざるなり。此れ原憲の問、夫子答ふるに其難しとすることを知りて、而も其仁とすることを知らざるを以てす。此れ聖人開示(二)することの深きなり。

(一) 論語の文を引く、克はかつ、伐はほこる、怨はうらむ、欲はむさぼる、此四つの情なきは仁者のみ能くすとの意

(二) 孔子原憲に答ふる語の意

無咎。象曰。中行無咎。中未光也。傳曰。夫人心正意誠。乃能極中正之道。而充實光輝。五心有所比。以義之不可而決之。雖行於外。不失其中正之義。可以無咎。然於中道。未得爲光大也。蓋人心一有所欲。則離道矣。夫子於此。示人之意深矣。

象に曰く、中行において咎なしとは、中未だ光ならざるなり。傳に曰く、夫れ人心正しく意誠なれば、乃ち能く中正の道を極めて、(三)充實光輝なり。(四)五心比する所あり。義の不可なるを以て之を決す。外に行うて、其中正の義を失はず、以て咎なかるべしと雖も、然れども中道に於て、未だ光大たることを得ず。蓋し人心一も欲する所あれば、則ち道を離る。夫子此に於て、人に示すの意深し。

(一) 易の夬の卦 (二) 馬齒莧(すべりひゆ)、夬はわけさだむる意 (三) 光はひろく大なる意 (四) 心昵む所あるも正なる能はず、義可ならざるを以て勉々として決し去る

方説而止。節之義也。

説ぶに方つて止まるは、(一)節の義なり。

(一) 易の節の卦、悦び過ぎて流れやすきを戒め止まることを諭す

節之九二。不

節の九二は、(一)不正の節なり。(二)剛中正なるを以て節となす。忿を懲し欲を窒ぎ、

之德一。所三以ル正之道爲レ可レ齊也。

損者損レ過而就レ中。損二浮末一而就二本實一也。天下之害。無レ不レ由二末之勝一也。峻宇雕墻。本二於宮室一。酒池肉林。本二於飲食一。淫酷殘忍。本二於刑罰一。窮レ兵黷レ武。本二於征討一。凡人欲之過者。皆本二於奉養一。其流之遠。則爲レ害矣。先王制二其本一者。天理也。後人流二於末一者。人欲也。損之義。損二人欲一以復二天理一而已。

(一)損とは過ぎたるを損じて中に就き、(二)浮末を損じて本實に就くなり。天下の害、(三)末の勝つによらざることなし。(四)峻宇雕墻は、宮室に本づき、酒池肉林は、飲食に本づき、淫酷殘忍は、刑罰に本づき、兵を窮め武を黷すは、征討に本づく。凡そ人欲の過ぐるは、皆(五)奉養に本づく。(六)其流の遠きときは、則ち害をなす。先王其本を制するは、天理なり。後人末に流るゝは、人欲なり。損の義、人欲を損じて以て天理に復るのみ。

(一) 易の損の卦をいふ (二) 浮華を去りて質實に就く (三) 末流なり (四) 高きのき飾りたるかき (五) 自己の身に供へ養ふ義 (六) 本より末にわたり實より華にうつる遠ければ遠きほど害あり、皆人欲のなす所

夬九五曰。莧陸夬レ夬。中行

(一)夬の九五に曰く、(二)莧陸のごとくに夬むることを夬めば、中行において咎なし。

不ㇾ知。既知未三嘗不二速改一。故不ㇾ至二於悔一。乃不ㇾ遠復也。學問之道無ㇾ他也。唯其知二不善一。則速改以從ㇾ善而已。

晉之上九。晉二其角一。維用ㇾ伐ㇾ邑。厲吉無ㇾ咎。貞吝。傳曰。人之自治。剛極則守ㇾ道愈固。進極則遷ㇾ善愈速。如二上九一者。以ㇾ之自治。則雖ㇾ傷二於厲一。而吉且無ㇾ咎也。嚴厲非二安和之道一。而於二自治一則有ㇾ功也。雖二自治有一ㇾ功。然非二中和

晉の上九(一)、其角に晉む。維れ邑を伐つに用ふれば、厲しけれども吉にして咎なし、貞には吝なり。傳に曰く、人の自ら治むるに、剛極まるときは則ち道を守ること愈〻固く、進むこと極まるときは則ち善に遷ること愈〻速なり。上九の如きは、之を以て自ら治むるときは、則ち厲しき(二)に傷ると雖も、而も吉にして且つ咎なし。嚴厲は安和の道にあらず。而も自ら治むるに於ては則ち功あり。自ら治めて功ありと雖も、然れども中和の德にあらず。貞正の道に、吝なるべしとなす所以なり。

(一) 晉の卦をいふ。其上爻は九則ち陽なり、晉はすゝむなり、上九は陽剛にして一卦の上にあり、則ち角の首にあるが如し、邑はわが領地なり。則ち領地に起りし叛徒を伐つには、はげしけれども咎なしとなり。されども貞正の道には吝なれと云ふ (二) 剛進ははげしきにやぶるの缺點はあれども

之義。初復之最先者也。是不遠而復也。失而後有復。不失則何復之有。唯失之不遠而復。則不至於悔。大善而吉也。顔子無形顯之過。夫子謂其庶幾。乃無祇悔也。過既未形而改。何悔之有。既未能不勉而中。所欲不踰矩。是有過也。然其明而剛。故一有不善。未嘗

ずることこれあらん。唯だ之を失することと遠からずして復するときは、則ち悔に至らず。大いに善にして吉なり。顔子は形顯の過なし。夫子の其れ庶幾しと謂へるは、乃ち悔に祇ることなければなり。過既に未だ形れずして改めば、何の悔かこれあらん。既に未だ勉めずして中り、欲する所矩を踰えざること能はざるは、是れ過あるなり。然れども其れ明にして剛なり、故に一も不善あれば、未だ嘗て知らずんばあらず。既に知れば未だ嘗て遽に改めずんばあらず。故に悔に至らず。乃ち遠からずして復するなり。學問の道は他なし。唯だ其れ不善を知れば、則ち速に改めて以て善に従ふのみ。

(一) 復の卦、前に出づ　(二) あらはるゝ前、あやまちあれば之を知ることはやくして、之を改むることまた速かなるを以て、其あらはるゝに先だつて改む、故に悔なきなり　(三) 孔子復の初九に批して「顔氏の子は其れ殆ど庶幾からんか」と謂へり、過ちを二たびせざるゆゑなり　(四) 中庸論語の文を採り來つて云ふ、未だ勉めずして中り、欲する所矩を踰えざるは聖人のことなり、顔子はかくのごとくなる能はず是れ過あるなりといふなり　(五) 顔子の善きことを掲ぐ　(六) 別段外の事なし

正。卓彼先覺。知止有定。閑邪存誠。非禮勿聽。言箴曰。人心之動。因言以宣。發禁躁妄。內斯靜專。矧是樞機。興戎出好。吉凶榮辱。惟其所召。傷易則誕。傷煩則支。己肆物忤。出悖來違。非法不道。欽哉訓辭。動箴曰。哲人知幾。誠之於思。志士厲行。守之於爲。順理則裕。從欲惟危。造次克念。戰兢自持。習與性成。聖賢同歸。

の二句は工夫　(三) 中に具へて外に應じ用ふ、外にて制すれば中に於て德を養ひ得べしとの意　(四) 目の見る所のいましめの詞　(五) 心の明を蔽はんとする物欲眼前に來り交れば　(六) 養ふこと　(七) 耳に聽く所のいましめの詞　(八) 彝はつねなり、秉はとるなり、五常の性をとりて失はざること　(九) 見聞の知みちびかれて物欲に化せられ性の正しきを失ふ　(一〇) 卓然として獨立せる先覺者卽ち賢者　(一一) 口に言ふ所のいましめ　(一二) あらはる　(一三) 言を出すにかるがるしくみだりなるをひかふれば內心靜かにして專らなり、これ外に制して內を安んずるの也　(一四) 樞は戶のくるゝ、機は弩のからくり、發動の由つて起る所なり　(一五) いくさを起し又よしみをむすぶ　(一六) 吉凶とはまれはぢ皆口より出でゝまねきよせるものとの意　(一七) かるがるしきはみだり、わづらはしきは枝葉にわかれて本をわする　(一八) おのれ我儘なれば他もさからひ、こなた理に悖ればかなたよりも理に違ひて來る　(一九) 孝經に「先王の法言にあらざれば敢て言はず」とあるを引く　(二〇) 心の動き卽ち思ふ所のいましめ　(二一) 心智の明哲なる人　(二二) 動の機微　(二三) 志を立つる人　(二四) おそれつゝしむ　(二五) おもむき

復之初九曰。不遠復。無祇悔。元吉。傳曰。陽君子之道。故復爲反善

復の初九に曰く、遠からずして復す、悔に祇ることなし、元吉なりと。傳に曰く、陽は君子の道なり。故に復善に反るの義となす。初は復の最先なる者なり。是れ遠からずして復するなり。失して後復することあり。失せずんば則ち何の復

外一。制二於外一。所三以養二其中一也。顏淵事二斯語一。所三以進二於聖人一。後之學二聖人一者。宜二服膺而勿レ失也、因箴以自警。視箴曰。心兮本虛。應レ物無レ迹。操レ之有レ要。視爲二之則一。蔽交二於前一。其中則遷。制二之於外一。以安二其內一。克レ己復レ禮。久而誠矣。聽箴曰。人有レ秉レ彝。本二乎天性一。知誘物化。遂亡二其

以て其内を(六)安じ、己に克ちて禮に復れば、久しうして誠あり。(七)聽の箴に曰く、人の(八)彝を秉ることあるは、天性に本づく。(九)知誘かれ物化して、遂に其の正を亡ふ。(一〇)卓たる彼の先覺、止まるを知りて定まることあり。邪を閑ぎて誠を存し、禮にあらずんば聽くことなし。(一一)言の箴に曰く、人心の動くは、言に因つて(一二)以て宣ぶ。(一三)發するに躁妄を禁ずれば、内斯に靜專なり、矧や是れ(一四)樞機にして、(一五)我を興し好を出だし、(一六)吉凶榮辱、惟れ其召く所なるをや。(一七)易きに傷るゝときは則ち誕なり。煩しきに傷るゝときは則ち支る。(一八)己肆なれば物忤ひ、出づること悖けば來ること違ふ。(一九)法にあらずんば道はざれ。欽めよ訓辭。(二〇)動の箴に曰く、(二一)哲人は(二二)幾を知りて、之を思ふに誠にす。(二三)志士は行を厲まして、之を爲すに守る。理に順ふときは則ち裕なり。欲に從ふときは惟れ危し。造次にも克く念ひ、(二四)戰兢として自ら持せよ。習うて性と成れば、(二五)聖賢歸を同じうす。

㊀ 顏淵仁を孔子に問ふ孔子これに答へたる詞なり、‖は餘‖なり ㊁ これを四勿の目と云ふ、上の二句は理、下

濂溪先生曰。孟子曰。養レ心莫レ善二於寡一レ欲。予謂養レ心。不レ止二寡而存耳一。蓋寡焉以至二於無一。無則誠立明通。誠立賢也。明通聖也。

伊川先生曰。顏淵問二克レ己復レ禮之目一。夫子曰。非レ禮勿レ視。非レ禮勿レ聽。非レ禮勿レ言。非レ禮勿レ動。四者身之用也。由二乎中一而應二乎

濂溪先生曰く、孟子曰く、心を養ふには欲を寡くするより善きはなしと。予(一)謂へらく心を養ふは、寡くして(二)存するのみに止まらず。蓋し寡くして以て無に至る。無なるときは則ち誠立ちて明通ず。誠立つは賢なり、明通ずるは聖なり。

(一) 予とは周茂叔自ら云ふなり (二) 欲を寡くして猶存するものあるに止めず、更にいよ〳〵寡くして無きに至ることを要す

伊川先生曰く、顏淵、(一)己に克つて禮に復るの目を問ふ。夫子曰く、(二)禮にあらざれば視ることなかれ、禮にあらざれば聽くことなかれ、禮にあらざれば言ふことなかれ、禮にあらざれば動くことなかれと。四者は身の用なり。中に由つて外に應ず。外に制するは、其中を養ふ所以なり。顏淵斯語を事とす。(三)聖人に進む所以なり。後の聖人を學ぶ者、宜しく服膺して失ふことなかるべし。因つて箴して以て自ら警む。(四)視の箴に曰く、心は本虛しく、物に應じて迹なし。之を操るに要あり。視ること之が則たり。(五)蔽前に交るときは、其中則ち遷る。之を外に制して、

濂溪先生曰。君子乾乾。不レ息ニ於誠一。然必懲レ忿窒レ欲。遷レ善改レ過。而後至。乾之用其善レ是。損益之大、莫ニ過レ是。聖人之旨深哉。吉凶悔吝生ニ乎動一。噫吉一而已。動可レ不レ愼乎。

巻之五

克己類　凡四十一條

濂溪先生曰く、君子は乾乾として、(一)誠に息まず。然れども必ず(二)忿を懲し欲を窒ぎ、善に遷り過を改め、而して後に至る。乾の用其れ(三)是を善とす。(四)損益の大なる是に過ぎたるはなし。聖人の旨深いかな。(五)吉凶悔吝は動に生ず。噫、(六)吉は一のみ。動、愼まざるべけんや。

(一) 前に出づ　(二) 七情の中忿と欲とを克ち難しとす、之を懲し窒ぎ善に遷り過ちを改むることに勉めて至るなり　(三) 朱子はこれを「是より善きは莫し」となす　(四) 共に易の卦にて抑損と増益との兩端を示し、其大これに過ぎたるはなしと言ふ　(五) 易の繋辭なり、吉は善、凶は禍、悔は後悔、吝は私欲利己の狭き私心を云ふ　(六) 吉は一つにて他の三はみな凶なれば、動の兆を愼めとの意

敦篤虚靜者。仁之本。不二輕妄一。則是敦厚也。無レ所二繫閡昏塞一。則是虚靜也。此難二以頓悟一。苟知レ之。須下久二於道一實體上レ之。方知二其味一。夫仁亦在二乎熟一レ之而已。

敦篤虚靜は仁の本なり。輕妄ならざるときは、則ち是れ敦厚なり。繫閡昏塞(一)する所なきは、則ち是れ虚靜なり。此れ以て頓悟(二)し難し。苟も之を知らんには、須(三)らく道に久しくして實に之を體すべし。方に其味を知らん。夫れ(四)仁も亦之に熟するにあるのみ。

(一) 心の本體が、物にかゝり(繫)さはりて(閡)くらみ(昏)ふさがる(塞)ことなきは　(二) にはかに悟る　(三) 道に入りて學ぶこと久しく眞實に體得せんに方に其味の深長にして高遠なることを知らん　(四) 孟子を引く、熟すとは學び習ひて練り熟するをいふ

以レ艮爲レ止。止乃光明。故大學定而至二於能慮一。人心多。則無レ由二光明一。動靜不レ失二其時一。其道光明。學者必時二其動靜一。則其道乃不二蔽昧一而明白。今人從レ學之久。不レ見二進長一。正以レ莫レ識二動靜一。見二他人擾擾。非下干二己事一。而所レ修亦廢。由二聖學一觀レ之。冥冥悠悠。以レ是終レ身。謂二之光明一可乎。

なし。

(一) 此心靜定にして明生ず、水の止まるものは鑑すべく水の流るゝものは鑑すべからず (二) 心に思慮多ければ

(一)動靜其時を失はざれば、其道光明なり。學者必ず其(二)動靜を時にするときは、則ち其道乃ち蔽昧ならずして明白なり。今の人學に從ふことの久しきに、(三)進長することを見ざるは、正に(四)動靜を識ることなきを以てなり。他人の(五)擾擾たる、己が事に干るにあらざるを見て、修むる所亦廢す。聖學より之を觀れば、(六)冥冥悠悠たり。是を以て身を終ふ。(七)之を光明と謂ふ、可ならんや。

(一) 易の艮の卦の彖辭 (二) 行と止と必ず其時の宜しきにかなふときは道暗からずして明かなり (三) 進步 (四) 動靜の時を (五) 紛亂妄動するをいふ (六) 冥くゆるがせにして何の得る所もなき貌 (七) 此の如き學者も亦其れを光明なりと謂ふ容ぞ可ならんや

致。載則比二他人一。自是勇處多。

戲謔不三惟害二レ事。志亦爲二氣所一レ流。不二戲謔一亦是持レ氣之一端。

戲謔は惟だ事に害あるのみならず、志をも亦氣の流す所と爲らしむ。戲謔せざるは、亦是れ氣を持するの一端なり。

(一)たはぶれ　(二)養ふ

正レ心之始。當下以二己心一爲中嚴師上。凡所二動作一。則知レ所レ懼。如レ此一二年。守得牢固。則自然心正矣。

心を正しうするの始は、當に己が心を以て嚴師となすべし。凡そ動作する所あれば、則ち懼るゝ所を知る。此の如くすること一二年、守り得て牢固なるときは、則ち自然に心正しからん。

(一)良心　(二)心を視ること嚴師の如くなれば、敬畏する所を知りて邪僻の念作らずと也

定然後始有二光明一。若常移易不レ定。何求二光明一。易大抵

定まりて然して後に始めて光明あり。若し常に移易して定まらずんば、何ぞ光明を求めん。易は大抵艮を以て止まるとなす、止まるときは乃ち光明なり。故に大學に、定まりて能く慮るに至ると。人心多きときは、則ち光明なるに由

心清時少。亂時常多。其清時。視明聽聰。四體不待羈束。而自然恭謹。其亂時反是。如此何也。蓋用心未熟。客慮多而常心少也。習俗之心未去。而實心未完也。

人又要得剛。太柔則入於不立。亦有人生無喜怒者。則又要得剛。剛則守得定不回。進道勇

心は清める時少く、亂るゝ時常に多し。其清める時は、視ること明かに聽くこと聰く、四體羈束するを待たずして自然に恭謹なり。(一)其亂るゝ時は是に反す。此の如くなるは何ぞや、蓋し心を用ふること未だ熟せず、(二)客慮多くして常心少く、習俗の心未だ去かずして、(三)實心未だ完からざればなり。

(一) 心清澄なるときは耳目四肢自然に命に從ふ　(二) 存養の工夫を積むこと　(三) 客慮はさまざまに來往する妄心、常心は五常の本心、習俗の心は從來馴れ染みたる凡俗の心、實心は義理の心也

人又剛なることを得んを要す。太だ柔なるときは則ち(一)不立に入る。亦人生れながらにして(二)喜怒なき者あり。則ち又剛なることを得んを要す。剛なるときは則ち守り得定めて回らず。道に進むこと勇敢なり。(三)載は則ち他人に比すれば、自ら是れ勇む處多し。

(一) 柔懦委靡は自ら立つ能はず　(二) 德量廣くして喜怒色に表れざると是非の辨別に暗くして喜怒の鈍きとは之に異らず、蓋し生れながら氣力薄弱にして喜怒の情あるも其勢なき類を指すならん　(三) 張横渠の名の自稱

謝顯道從明道先生於扶溝。明道一日謂之曰。爾輩在此相從。只是學顯言語。故其學心口不相應。盍若行之。請問焉。曰。且靜坐。伊川每見人靜坐。便嘆其善學。

謝顯道、明道先生に扶溝（一）に從ふ。明道一日之に謂て曰く、爾が輩此にありて相從ふ。只だ是れ顯（二）が言語を學ぶ。故に其學心口相應ぜず。盍ぞ若（三）之を行はざる。請ひ問ふ。曰く、且つ靜坐（四）せよ。伊川は人の靜坐するを見る每に、便ち其善く學ぶことを嘆ず（五）。

（一）河南の縣の名、明道此縣の令たりし時也　（二）明道の名の自稱　（三）一說「したがひて」と訓ず　（四）顯道の請問に對へて「且つ靜坐せよ」と云ふ、即ち默然靜坐して存養せしめんとの意なり　（五）ほめる

横渠先生曰。始學之要。當知三月不違。與日月至焉。內外賓主之辨。使心意勉勉循循。而不能已。過此幾非在我者。

横渠先生曰く、始學の要は、當に三月（一）違はざると、日月（二）に至るとの、內外賓主の辨を知り、心意をして勉勉循循として、已むこと能はざらしむべし。（三）此を過ぎては幾ど我にある者にあらず。

（一）顏子の三月仁にたがはざるをいふ　（二）其他の弟子の稀に日に一たび、月に一たび仁に至るをいふ　（三）これを過ぎて後は自然に化するを待つのみ殆ど我に在らず

大率把捉不定。皆是不仁。

伊川先生曰。致知在所養。養知莫過於寡欲二字。

心定者。其言重以舒。不定者。其言輕以疾。

明道先生曰。人有四百四病。皆不由自家。則是心須教由自家。

大率把捉し定まらざるは、皆是れ不仁なり。

(一) 心のとりとめ定まらざる者は本心外に馳せて私欲盛になり天理を失ふ、即ち不仁也

伊川先生曰く、致知は養ふ所にあり。知を養ふは、寡欲の二字に過ぐるものなし。

(一)心定まる者は、其言重くして以て舒なり。定まらざる者は、其言輕くして以て疾し。

(一) 言は心の聲なり其聲を聽いて心の定まれるものと然らざるものとを察すべし

明道先生曰く、人四百四病(一)あり。皆自家によらず(二)。則ち是れ心は須らく自家によらしむべし(三)。

(一) 佛書に云ふ地水火風の四大おの〳〵百一の病ありと、之によりて俗間に四百四病と言做す (二) 自己の心まかせにはならず (三) 心ばかりは自家の物なれば自家に由らしめて治めよとなり

用中工夫上否。曰。須三是養二乎中一。自然言語順レ理。若是愼二言語一不二妄發一。此却可レ著レ力。

須らく是れ中(一)に養ふべし。自然に言語理に順はん。若し是れ言語を愼みて妄りに發せざるごとき、此れ却つて力(二)を著くべし。

㊀ 工夫を用ふべからず、只だ中に心を存養すれば言ふ所の語理に悖らずと也　㊁ 言語を愼むことなどは亦學者の力を用ふべき所なるぞ

先生謂レ繹曰。吾受レ氣甚薄。三十而浸盛。四十五十而後完。今生七十二年矣。校二其筋骨於盛年一無レ損也。繹曰。先生豈以二受レ氣之薄一。而厚爲レ保レ生邪。夫子默然。曰。吾以レ忘レ生徇レ欲。爲二深恥一。

先生繹(一)に謂つて曰く、吾れ氣(二)を受くること甚だ薄し。三十にして浸く盛に、四十五十にして後に完し。今生七十二年、其筋骨盛年(三)に校べて損ずることなし。繹曰く、先生豈に氣を受くることの薄きを以て、厚く生を保つことを爲すかと。(四)夫子默然たり。曰く、吾れ生を忘れて欲に徇ふを以て深き恥となす。

㊀ 張思叔、程子の門人也　㊁ 虚弱なるをいふ　㊂ 壯年の時　㊃ 此間、伊川の意に非ざるが故に默して言はず、やがて次の如く曰へる也

善。夜夢見ㇾ之。莫ㇾ不ㇾ害否。曰。雖二是善事一。心亦是動。凡事有二兆朕一入ㇾ夢者却無ㇾ害。捨ㇾ此皆是妄動。人心須ㇾ要ㇾ定。使二他思時方思一乃是。今人都由ㇾ心。曰。心誰使ㇾ之。曰。以ㇾ心使ㇾ心則可。人心自由。便放去也。

をして思ふ時に方に思はしめて乃ち是なり。今の人は都て心による。曰く、心誰か之を使ふ。曰く、(六)心を以て心を使ふときは則ち可なり、人心自由なれば、(七)便ち放れ去る。

(一) ねむり　(二) 朱子の説に曰く、魂と魄と交つて夢を成す心其間に在つて舊に依り能く思慮し夢を做す若し心神安定なれば夢寐亦た顛倒することなし。顛倒は事理にそむき放埒なる意　(三) 前兆、事のきざし。兆の夢に入るは思ひより出でざるが故に害なし　(四) これを除きて外の事は　(五) 心を定めて思ふ時に思はしむること可なり　(六) 二心にあらず體用にして言ふのみ　(七) 存操せずして自由にして驅けば

持二其志一。無ㇾ暴二其氣一。内外交相養也。

(一)其志を持ちて、其氣を暴ふことなきは、内外交々相養ふなり。

(一) 志を持つものは中に守る所ありて氣自ら完し、氣を暴ふことなきものは外にほしいまゝにする所なくして志愈堅し、故に内外交々相養ふといふ

問。出二辭氣一。莫ㇾ是於二言語上一

問ふ、辭氣を出すは、是れ言語の上に於て工夫を用ふることなきや否や。曰く、

事重。便有遣事出。若能物各付物。便自不出來也。或曰。先生於喜怒哀樂未發之前。下動字。下靜字。曰。謂之靜則可。然靜中須有物始得。這裏便是難處。學者莫若且先理會得敬。能敬則知此矣。或曰。敬何以用功。曰。莫若主一。季明曰。昞嘗患思慮不定。或思一事未了。他事如麻又生。如何。曰。不可。此不誠之本也。須是習。習能專一時便好。不拘思慮與應事。皆要求一。

人於夢寐間。亦可以卜自家所學之淺深。如夢寐顚倒。即是心志不定。操存不固。問。人心所繫著之事果

人、夢寐(一)の間に於ても、亦以て自家の學ぶ所の淺深を卜すべし。夢寐顚倒する(二)が如きは、即ち是れ心志定まらず、操存固からざればなり。問ふ、人心繫著する所の事果して善なるを、夜夢に之を見るは、害あらざることなきや否や。曰く、是れ善事なりと雖も、心亦是れ動く。凡そ事兆朕(三)ありて夢に入る者は、却つて害なし。此を捨てゝは皆是れ妄動なり。(四)人心須らく定まらんことを要すべし。(五)他

(一)季明に對していふ、猶は貴君貴公などの如し　(二)朱子の説に「無物」の字恐らく「有物」に作るべしと言ふ　(三)易の復の卦は上面五畫は陰なれど、下面の一畫は陽なり、從つて動なり　(四)佛教　(五)其心の注く所々によりて七情迭互して出づ、一事を見て重しとすれば其事に應じて遷る、物各々物に付して我預る所なければ心外に馳せずして止まる所に止まる　(六)動といふか靜といふかと也　(七)見聞の理即ち知覺の性　(八)此點がむづかしきところなり　(九)季明の名の自稱　(一〇)心專一ならざれば言動其實なし故に誠ならざるの本と云ふ　(一一)勉めて習ひ熟すべし、考ふることも爲すことも專一なるを要す

而一晝。便是動也。安得レ謂ニ之靜一。或曰。莫下是於ニ動上一求中靜否。曰。固是。然最難。釋氏多言レ定。聖人便言レ止。如下爲ニ人君一止ニ於仁一。爲ニ人臣一止ニ於敬一之類上是也。易之艮言ニ止之義一曰。艮ニ其止一。止ニ其所一也。人多不レ能レ止。蓋人萬物皆備。遇レ事時。各因ニ其心之所レ重者一。更互而出。纔見ニ得這

き是なり。易の艮に、止まるの義を言つて曰く、其止まるに艮まるは、其所に止まるなりと。人多く止まること能はず。蓋し人には萬物皆備はる。事[五]に遇ふ時、各〻其心の重んずる所の者に因りて、更互して出づ。纔に這の事を見得て重ければ、便ち這の事ありて出づ。若し能く物各〻物に付すれば、便ち自ら出で來らず。或ひと曰く、先生は、喜怒哀樂未だ發せざるの前に於ては動の[六]字を下すや、靜の字を下すやと。曰く、之を靜といふときは則ち可なり。然れども靜中に須らく物[七]ありて始めて得べし。[八]這裏便ち是れ難處なり。學者は且つ先づ敬を理會し得るに若くなし。能く敬するときは則ち此を知る。或ひと曰く、敬何を以てか功を用ひん。曰く、一を主とするに如くはなし。季明曰く、[九]昞嘗て思慮の定まらざるを患ふ。或は一事を思つて未だ了らざるに、他事麻の如く又生ず。如何。曰く、不可なり。此れ[一〇]誠ならざるの本なり。須らく是れ習[一一]ふべし。習つて能く專一なる時は便ち好し。思慮と事に應ずるとに拘らず、皆一を求めんことを要す。

可。又問。學者於二喜怒哀樂發時一。固當二勉强裁抑一。於二未發之前一。當二如何用レ功。曰。於二喜怒哀樂未レ發之前一。更怎生求。只平日涵養便 。涵養久。則喜怒哀樂發自中レ節。曰。當二中之時一。耳無レ聞。目無レ見否。曰。雖二耳無レ聞目無レ見。然見聞之理在始得。

なり、中を求むといふは不可なり　(五) 喜怒哀樂の發する時ならば勉强して裁抑も出來得べけんが其の發せざるの前にては如何して裁抑の功を用ふべきか　(六) 其の發せざる前に何を求むることあらん、日頃の涵養こそ大切にて久しければ自ら節に中るなり　(七) 喜怒哀樂未だ發せざるとき　(八) 知覺の性心に存して始めて中を得

賢且說靜時如何。曰。謂之無レ物則不可。然自有二知覺處一。曰。既有二知覺一。却是動也。怎生言レ靜。人說三復其見二天地之心一。皆以謂至靜能見二天地之心一。非也。復之卦下

(一)賢且つ說け、靜なる時如何。曰く、之を物なしといふときは則ち不可なり。然れども自ら知覺する處あり。曰く、既に知覺(二)あれば、却つて是れ動なり。怎生ぞ靜と言はん。人、(三)復は其れ天地の心を見るといふを說くに、皆以謂へらく、至靜にして能く天地の心を見ると。非なり。復の卦は下面の一畫、便ち是れ動なり。安ぞ之を靜と謂ふことを得ん。或ひと曰く、是れ動上に於て靜を求むることなきや否やと。曰く、固に是なり。然れども最も難し。(四)釋氏は多く定を言ふ。聖人は便ち止を言ふ。人君と爲りては仁に止まり、人臣と爲りては敬に止まるの類の如

怒哀樂未發之前求中可否。曰。不可。既思於喜怒哀樂未發之前求之。又卻是思也。既思卽是已發。纔發便謂之和。不可謂之中也。又問。呂學士言。當求於喜怒哀樂未發之前。如何。曰。若言存養於喜怒哀樂未發之前則可。若言求中於喜怒哀樂未發之前則不

不可なり。既に喜怒哀樂未だ發せざるの前に之を求んことを思ふは、又卻つて是れ思ふなり。(二)既に思ふは卽ち是れ已に發したるなり。纔に發すれば便ち之を和といふ、之を中といふべからず。又問ふ、(三)呂學士言ふ、當に喜怒哀樂未だ發せざるの前に求むべしと。如何。曰く、若し喜怒哀樂未だ發せざるの前に(四)存養すと言ふときは則ち可なり。若し中を喜怒哀樂未だ發せざるの前に求むと言ふときは則ち不可なり。又問ふ、(五)學者喜怒哀樂の發する時に於ては、固に當に勉強して裁抑すべし、未だ發せざるの前に於ては、當に如何か功を用ふべき。曰く、喜怒哀樂未だ發せざるの前に於て、(六)更に怎生求めん。只だ平日涵養すれば便ち是なり。涵養すること久しければ、則ち喜怒哀樂發して自ら節に中る。曰く、(七)中の時に當りて、耳聞くことなく、目見ることなきや否や。曰く、耳聞くことなく、目見ることなしと雖も、然れども(八)見聞の理在りて始めて得。

(一) 蘇昞字季明、程張二氏の門人　(二) 本註に「思ふと喜怒哀樂と一般なり」　(三) 呂與叔をいふ　(四) 存養するは可

安有ニ箕踞而心不レ慢者一。昔呂與叔六月中來ニ緱氏一。閒居中。某嘗窺レ之。必見ニ其儼然危坐一。可レ謂ニ敦篤一矣。學者須ニ恭敬一。但不レ可レ令ニ拘迫一。拘迫則難レ久。

居中、某嘗て之を窺ふに、必ず其儼然として危坐(四)するを見る。敦篤なりといふべし。學者須らく恭敬なるべし。但だ拘迫(五)ならしむべからず。拘迫なるときは則ち久うし難し。

(一)閒居　(二)箕とは脚をのべて坐せること、踞はうづくまること、形體怠惰の形容也　(三)河南の縣の名　(四)ひざまづく　(五)かゝはり迫りて窮屈ならしむべからず

思慮雖レ多。果出ニ於正一。亦無レ害否。曰。且如下在ニ宗廟一則主レ敬。朝廷主レ莊。軍旅主レ嚴。此是也。如發不レ以レ時。紛然無レ度。雖レ正亦邪。

思慮多しと雖も、果して正しきに出でなば、亦害なきや否や。曰く、且つ宗廟に在りては則ち敬を主とし、朝廷にては莊を主とし、軍旅にては嚴を主とするが如き、此れ是なり。如し發する(一)に時を以てせず、紛然として度なきときは、正しと雖も亦邪なり。

(一)事を發するに時と場合に順應せず又雜然として發して節度なきときは正も邪となる

蘇季明問。喜

(一)蘇季明問ふ、喜怒哀樂未だ發せざるの前に中を求めんは可なりや否や。曰く、

主一也。事爲二之主一。尙無二思慮紛擾之患一。若主二於敬一。又焉有二此患一乎。所謂敬者。主レ一之謂レ敬。所謂一者。無レ適之謂レ一。且欲三涵二泳主一之義一。不レ一則二三矣。至下於不二敢欺一。不二敢慢一。尙不上レ愧二于屋漏一。皆是敬之事也。

嚴威儼恪。非二敬之道一。但致レ敬須二自レ此入一。

嚴威儼恪は、敬の道にあらず。但だ敬を致す、須らく此より入るべし。(一)

(一) 嚴威儼恪は外に著はる、敬は中に存すと雖も外貌惰慢にして心能く敬なるはあらじ、嚴威儼恪敬を致すの全道にはあらざれども此より入るべしとなり

舜孳孳爲レ善。若未レ接レ物。如何爲レ善。只是主二於敬一。便是爲レ善也。以レ此觀レ之聖人之道。不二是但嘿然無一レ言。

舜孳孳(一)として善を爲すこと、若し未だ物に接らずして、如何にしてか善を爲せる。只だ是れ敬を主とす、便ち是れ善を爲すなり。此を以て之を觀れば、聖人の道は、是れ但だ嘿然(二)として言ふことなきにあらず。

(一) つとめはげみて倦まざる貌 (二) 嘿然緘言の中も心存するあり、敬を主とするは是れ善の本なり

問。人之燕居。形體怠惰。心不レ慢可否。曰。

問ふ、人の燕居(一)する、形體怠惰なりとも、心慢らざれば可なりや否やと。曰く、安ぞ箕踞(二)して心慢らざる者あらんや。昔呂與叔六月中緱氏(三)より來る。閒

須二坐禪入定一。如二明鑑在一レ此。萬物畢照。是鑑之常。難レ爲レ使二之不一レ照。人心不レ能レ不三交二感萬物一。難レ爲レ使三之不二思慮一。若欲レ免レ此。惟是心有レ主。如何爲レ主。敬而已矣。有レ主則虛。虛謂二邪不一レ能レ入。無レ主則實。實謂二物來奪一レ之。大凡人心不レ可二二用一。用二於一事一。則他事更不レ能レ入者。事爲二之

心は萬物に交感せざること能はず。之をして思慮せざらしむることを爲し難し。若し此を免れんと欲せば、惟だ是れ心に主あれ。如何なるをか主と爲す。敬のみ。(三)主あるときは則ち虛なり。虛とは邪の入ること能はざるを謂ふ。主なきときは則ち實なり。實とは物來りて之を奪ふを謂ふ。大凡人心は(四)二用すべからず。一事に用ふるとき、則ち他事更に入ること能はざるは、事之が主たればなり。事之が主たるだに、尙ほ思慮紛擾の患なし。若し敬を主とせば、又焉ぞ此患あらんや。所謂敬とは、一を主とするを敬といふ。所謂一とは、(五)適くことなきを一といふ。且つ主一の義に涵泳せんことを欲す。一ならざるときは則ち二三なり。敢て欺かず、敢て慢らず、尙くは(六)屋漏に愧ぢざるに至るまで、皆是れ敬の事なり。

(一) 老子の語を引く、聰明を黜け知慮を屛くること (二) 明鏡に同じ (三) 林用中が主一の銘に云く、主あれば則ち虛す神其都を守る、主なければ則ち實す鬼其室を瞰ふ (四) 二つの事に用ふべからずとの意 (五) 心こゝに在りて、西へも東へも之かざるを一といふ (六) 前にも出づ

有㆑嘗㆓未㆑感時㆒。知㆓何所㆑寓㆒。曰。操則存。舍則亡。出入無㆑時。莫㆑知㆓其鄕㆒。更怎生尋㆑所㆑寓。只是有㆑操而巳。操㆑之之道。敬以直㆑內也。

敬則自虛靜。不㆑可㆘把㆓虛靜㆒喚中做敬㆖。

學者先務。固在㆓心志㆒。然有㆘謂㆑欲㆑屏㆓去聞見知思㆒。則是絕㆑聖棄㆑智。有㆘欲㆑屏㆓去思慮㆒患㆗其紛亂㆖則

未だ感ぜざる時、何の所にか寓するを知らんと言ふものあり。(一)曰く、操るときは則ち存し、舍つるときは則ち亡す。出入時なく、其鄕を知ることなし。(二)更に怎生ぞ寓する所を尋ねん。只だ是れ操ることとあるのみ。之を操るの道は、敬以て內を直くするなり。

㊀ 心の未だ物に感ぜざる時には、心は何の所に寓してありと知るべきぞ　㊁ 孟子に引きたる孔子の言

敬するときは則ち自ら虛靜なり。(一)虛靜を把つて敬と喚び做すべからず。

㊀ 心虛明にして靜定也

學者の先務、固に心志にあり。然れども聞見知思を屏け去らんと欲すと謂ふことあるは、則ち是れ聖を絕ち智を棄つるなり。(一)思慮を屏け去らんと欲して、其紛亂を患ふることあらば、則ち須らく坐禪入定すべし。(二)明鑑此に在りて、萬物畢く照すが如き、是れ鑑の常にして、之をして照さゞらしむることを爲し難し。人

不レ之レ東。又不レ之レ西。如レ是則只是中。既不レ之レ此。又不レ之レ彼。如レ是則只是內。存レ此則自然天理明。學者須下是將二敬以直一レ內。涵中養此意上。直レ內是本。

形影有らん、只身心を收斂す、便ち是れ主一なり、且つ人、神祠中に到りて敬を致す時の如き、其心收斂して更に毫髪の事を著け得ず、主一に非ずして何ぞ」㈣ 心方寸の內に定まり居て散逸せざるをいふ

閑レ邪則固一矣。然主レ一。則不レ消レ言レ閑レ邪。有下以レ一爲レ難レ見。不レ可レ下二工夫一如何上。一者無レ他。只是整齊嚴肅。則心便一。一則自是無二非僻之干一。此意但涵養久レ之。則天理自然明。

邪を閑ぐときは則ち固に一なり。然れども一を主とするときは、則ち邪を閑ぐと言ふを消ひず。㈠一を以て見難しと爲して、工夫を下すべからず如何せんといふあり。一とは他なし、只だ是れ整齊嚴肅なれば、則ち心便ち一なるなり。㈡一なるときは則ち自ら是れ非僻の干すものなし。㈢此意但だ涵養すること之を久しうすれば、則ち天理自然に明かなり。

㈠ 一を主とするときは自ら私邪の念なし必ずしもふせがじ ㈡ 外整齊にして內嚴肅なるときは心自ら一に理自ら明かなり ㈢ よこしま

閑レ邪則誠自存。不下是外面捉二一箇誠一將來存著上。今人外面役二役於不善一。於二不善中一。尋二箇善一來存著。如レ此則豈有下入レ善之理上。只是閑レ邪。則誠自存。故孟子言二性善一。皆由レ內出。只爲二誠便存一。閑レ邪更著二甚工夫一。但惟是動二容貌一。整二思慮一。則自然生レ敬。敬只是主レ一也。主レ一。則既

邪を閑ぐときは則ち誠自ら存す。是れ外面一箇の誠を捉り將ち來りて存著するにあらず。今の人は外面不善に役役（一）として、不善中より箇の善を尋ね來りて存著す。此の如くんば則ち豈に善に入るの理あらんや。只だ是れ邪を閑ぐときは、則ち誠自ら存せん。故に孟子性善を言ふこと、皆內より出づ。只だ誠便ち存するが爲なり。邪を閑ぐこと更に甚の工夫をか著けん。但だ惟だ是れ容貌を動かし（二）、思慮を整ふるときは、則ち自然に敬を生ぜん。敬は只だ是れ一を（三）主とするなり。一を主とするときは、則ち既に東に（四）之かず、又西に之かず。是の如くなるときは則ち只だ是れ中なり。既に此に之かず、又彼に之かず。是の如くなるときは則ち只だ是れ內なり。此を存するときは、則ち自然に天理明かなり。學者須らく是れ敬以て內を直くするを將つて、此意を涵養すべし。內を直くするは是れ本なり。

（一）心を用ひて止まずして　（二）愼しむ貌　（三）心を一にして散ぜざること。本註に「尹彥明曰く、敬、甚（ナン）の

也。純亦不レ已。天德也。有二天德一。便可レ語二王道一。其要只在レ愼レ獨。

不レ有レ躬。無レ攸レ利。不レ立レ己後。雖レ向二好事一。猶爲レ化レ物。不レ得下以二天下萬物一撓上レ己。己立後。自能了二當得天下萬物一。

伊川先生曰。學者患二心慮紛亂一。不レ能二寧靜一。此則天下公病。學者只要レ立二箇心一。此上頭儘レ有二商量一。

㊀ 孔子　㊁ 天德あれば則ち純ら是れ天理にして私意の間斷なし、すなはち王道を做し得ん　㊂ 已まざるをなす所以なり、少しくも謹まざれば人欲來りて間斷す

(一)躬を有たず、利き攸なしと。(二)己を立てずして後に、好事に向ふと雖も、猶ほ物に化せらる。天下の萬物を以て己を撓むることを得ざれ。己立ちて後に、自ら能く天下の萬物を了當し得ん。(三)

㊀ 易の蒙の卦の爻辭。わが身をたもち守らざれば、何事につけてもよろしき所なしとなり　㊁ 自立する能はざれば心に主宰なき故、物を處置し得ずして、却て物に化せらる　㊂ 處置するを得

伊川先生曰く、學者は心慮紛亂して、寧靜なること能はざるを患ふ。此れ則ち天下の公病なり。學者は只だ箇の心を立てんことを要す。此(一)上頭に商量あるべし。

㊀ 上頭は上面に同じ、卽ち上にいふ所の事を指していふ也。此處の意は、學者は只だこの心を立て定めて亂れざるやうにすること肝要なり、心すでに立つ上についてこそ、考へはかる所あるべけれとなり

敬勝二百邪一。

敬以直レ内。義以方レ外。仁也。若以レ敬直レ内。則便不レ直矣。必有レ事焉而勿レ正。則直也。

涵養吾一。

子在二川上一曰。逝者如レ斯夫。不レ舍二晝夜一。自レ漢以來。儒者皆不レ識二此義一。此見二聖人之心。純亦不レ已

敬は百邪に勝つ。

敬以て内を直くし、義以て外を方にするは、仁なり。若し敬を以て内を直くするときは、(一)則ち便ち直からず。必ず事とするありて、而も正てゝすることなければ、(二)則ち直し。

(一) 殊更に敬を持ち行きてそれにて内を直くせんとする時は其理直からず　(二) 孟子の語、敬を持するを我が當然の事として、其效果を豫期して急がざれば

(一)涵養すれば吾れ一なり。

(一) 本心存するときは則ち純一にして二ならず

子川の上にありて曰く、逝く者は斯の如きか、晝夜を舍てずと。漢より以來、(一)儒者皆此義を識らず。此れ聖人の心の、純にして亦た已まざるを見る也。純にして亦た已まざるは、(二)天德なり。天德あれば、便ち王道を語るべし。其要は只だ(三)獨を愼むにあるのみ。

有レ漸。
不レ愧ニ屋漏一則心安而體舒。
心要レ在ニ腔子裏一。只外面有ニ些隙罅一。便走了。
人心常要レ活。則周流無レ窮。而不レ滯ニ於一隅一。
明道先生曰。天地設レ位。而易行ニ乎其中一。只是敬也。敬則無ニ間斷一。
毋レ不レ敬。可三以對ニ越上帝一。

屋漏(一)に愧ぢざるときは、則ち心安くして體舒なり。

(一) 室の西北隅をいふ。屋漏に愧ぢずとは、人の見ざる處に於てもつゝしむことを忘れざるなり

心は腔子(二)裏にあらんことを要せよ。只だ外面に些の隙罅(三)あれば、便ち走り了る。

(二) 腔子とは身體なり、心がからだのうちにあつて外に馳せざるをいふ (三) すきま

人心常に活(一)せんことを要すれば、則ち周流窮りなくして一隅に滯らず。

(一) いき活く

明道先生曰く、天地位を設けて、易(一)其中に行はる。只だ是れ敬なり。(二)敬するときは則ち間斷なし。

(一) 易は陰陽自然の造化をいふ (二) 此易の行はるゝ事を人心につきて言へば敬也

敬せずといふことなければ、以て上帝に對すべし。

孔子言ㇾ仁。只說。出ㇾ門如ㇾ見二大賓一。使ㇾ民如ㇾ承二大祭一。看二其氣象一。便須二心廣體胖。動容周旋中ㇾ禮自然一。惟慎ㇾ獨。便是守ㇾ之之法。

孔子仁を言ふに、只だ說く、門を出でては大賓(一)に見ゆるが如く、民を使ふには大祭に承るが如くすと。其氣象を看るに、便ち須らく心廣く體胖に、動容周旋禮に中つて自然なるべし。惟だ獨を愼む。便ち是れ之を守るの法なり。

(一) 謹み敬すべきをいふ

聖人脩ㇾ己以ㇾ敬。以安二百姓一。篤恭而天下平。惟上下一二於恭敬一。則天地自位。萬物自育。氣無ㇾ不ㇾ和。四靈何有ㇾ不ㇾ至。此體ㇾ信達ㇾ順之道。聰明容智由ㇾ是出。以ㇾ此事ㇾ天饗ㇾ帝。

聖人己を脩むるに敬を以てして、以て百姓を安ず。篤恭にして天下平かなり。惟だ上下(一)恭敬に一なるときは、則ち天地自ら位し、萬物自ら育す。氣和せずといふことなし。(二)四靈何ぞ至らざることあらん。此れ信を體し順に達するの道なり。聰明容智是より出づ。(三)此を以て天に事へ帝を(四)饗す。

(一) 皆一樣に恭敬なるときは (二) 麒麟・鳳凰・龜及び龍をいふ、皆太平の祥瑞也 (三) 信を身に體認して行へば一己の偏無き也、順即ち和氣に達すれば是れ發して節に中る (四) 帝は造化の主宰。天帝を祀ると也

存養熟後泰然行將去便

存養熟して後に、泰然として行ひ將ち去れば、便ち進むことあり。

於事一。爲二人君一止二於仁一之類。如三舜之誅二四凶一。四凶已作レ惡。舜從而誅レ之。舜何與焉。人不レ止二於事一。只是攬二他事一。不レ能レ使二物各付一レ物。物各付レ物。則是役レ物。爲二物所一レ役。則是役二於物一。有レ物必有レ則。須三是止二於事一。

し、舜從つて之を誅す。舜何ぞ與らん。人、事に止まらざるは、只だ是れ他の事を攬り、物をして各〻物に付せしむること能はざればなり。物各〻(三)物に付するときは、則ち是れ物を役す。物の役する所と爲るときは、則ち是れ物に役せらる。物あれば必ず則あり、須らく是れ事に止まるべし。

(一) 事に應じてまさに止まるべき所に止まる　(二) 共工・驩兜・三苗・鯀といふ四人の暴惡の臣　(三) 私意にて事をとり扱ひ、其物の當然の理を以て各々其付くべき物に付かしめる事が出來ぬ故也

不レ能レ動レ人。只是誠不レ至。於レ事厭倦。皆是無レ誠處。

(一)人を動すこと能はざるは、只だ是れ誠至らざればなり。事に於て厭倦するは、皆是れ誠なき處なり。

(一) 誠至るときは人感動せざるなし、些にても厭倦の意あるときは誠ならざるなり

靜後見二萬物一。自然皆有二春意一。

(二)靜にして後に萬物を見れば、自然に皆春意あり。

(一) 心靜に觀ずれば萬物皆生々發達の意あるを見ると也

入道莫如敬。未有能致知而不在敬者。今人主心不定、視心如寇賊而不可制。不是事累心。乃是心累事。當知天下無一物是合少得者。不可惡也。

ざる者はあらじ。今の人は心を主とし定めず、心を視ること寇賊の如くにして制すべからずとす。(一)是れ事心を累はすにあらず、(二)乃ち是れ心事を累ふなり。當に知るべし、天下一物も是れ少き得べき者なく、惡むべからざることを。

㊀心我に從はずして寇賊の制し難きに似たり ㊁事に累はされず却つて心よりして事を累ふ、心を主とし定めざればなり

人只有一箇天理。却不能存得。更做甚人也。

人只だ一箇の天理あり。却つて存得すること能はずんば、更に(一)甚の人をか做さん。

㊀何として人と做され得べきぞ、人の人たる所以は只其天理を全うするにある也

人多思慮。不能自寧。只是做他心主不定。要作得心主定。惟是止

人思慮多くして、自ら寧ずること能はざるは、只だ是れ他の心を主と做し定めざればなり。心を主と作し得て定めんことを要せば、惟だ是れ(一)事に止まる。人(一)君と爲りては仁に止まるの類なり。(二)舜の四凶を誅するが如き、四凶已に惡を作

伊川先生曰。聖人不レ記レ事。所二以常記得一。今人忘レ事以二其記一レ事。不レ能レ記レ事。處レ事不レ精。皆出三於養之不二完固一。

明道先生在二澶州一日。修レ橋少二一長梁一。嘗博求二之民間一。後因二出入一見二林木之佳者一。必起二計度之心一。因語以戒二學者一。心不レ可レ有二一事一。

伊川先生曰。

伊川先生曰く、聖人は事(一)を記せず、常に記し得る所以なり。今の人の事を忘るるは、其の事を記するを以てなり。事を記すること能はず、事を處すること精しからざるは、皆養の完固ならざるに出づ。

㊀ 殊更に記憶せんとする心なし、故に心虚明にして自らよく記得す

明道先生の澶洲(一)にありし日、橋を修めて一長梁を少く(二)。嘗て博く之を民間に求む。後出入に因りて林木の佳なるものを見れば、必ず計度(三)の心を起す。因つて語つて以て學者を戒むらく、心は一事(四)をも有すべからずと。

㊀ 其州の節度判官たりしとき ㊁ 不足す ㊂ 橋梁になりはせずやとはかりみるの心起るとなり ㊃ 何か一事にても心に有する所あれば心の虚明をさまたぐるが故也

伊川先生曰く、道に入るには敬に如くものなし。未だ能く知を致して敬に在ら

思二量事一後、須下强把二他道心一來制縛上。亦須三寄二寓在一一箇形象一。皆非二自然一。君實自謂、吾得レ術矣。只管念二箇中字一。此又爲レ中所二繫縛一。且中亦何形象。有レ人胸中常若レ有二兩人一焉。欲レ爲レ善。如三有レ惡以爲二之間一。欲レ爲二不善一。又若レ有二羞惡之心一者。本無二二人一。此正交戰之驗也。持二其志一使二氣不一レ能レ亂。此大可レ驗。要レ之聖賢必不レ害二心疾一。

欲すれば、又羞惡の心あるが若き者は、本二人なし。此れ正に交戰の驗なり。(一〇)其志を持して、氣をして亂ること能はざらしめば、此れ大いに驗あるべし。之を要するに聖賢は必ず心疾に害せられず。(一一)

（一）此身の主宰となりて　（二）水を引くに用ふる車、轆轤車　（三）張戩字天祺、横渠の弟　（四）自ら數年の内に思慮をやむる工夫を成し得んと定めて靜坐してより　（五）道の事を思慮せざる心を把り來りて動かんとする心を制縛する事をなす　（六）斯く制縛しても尚は心は無形にて走り散る恐ある故、更に一つの形象を念出し、其形象の中に心を寓せしめて以て之を把持すと　（七）斯る事は皆強ひて作爲したる事にて自然に非ず　（八）司馬温公の字　（九）心の散亂ををさむる術　（一〇）善惡の二念が胸中に相戰ふしるし　（一一）心常に存して主と定まる故に、斯る心のやまひに妨げらるゝ事なし

明道先生曰。某寫レ字時甚敬。非三是要二字好一。只此是學。

明道先生曰く、某字を寫す時甚だ敬す。是れ字の好からんことを要するにあらず。只だ此れ是れ學なり。(一)

（一）如何なる小事にても常に敬を持す、即ちこれ存養の學也

意數ㇾ之。已倘不ㇾ疑。再數ㇾ之不ㇾ合。不ㇾ免ㇾ令ニ人一一聲言數ㇾ之。乃與ニ初數者一無ㇾ差。則知越著ㇾ心把捉。越不ㇾ定。

人心作ㇾ主不ㇾ定。正如ニ一箇飜車。流轉動搖。無ニ須臾停一。所ㇾ感萬端。若不ㇾ做ニ一箇主一。怎生奈何。張天祺昔嘗言。自約ニ數年一。自ㇾ上ニ著牀一。便不ㇾ得ニ思ニ量事一。不三

しむることを免れず。乃ち初め數ふる者と差ふことなし。則ち知る、越〻心を著けて把捉すれば、越〻定まらざるを。

（一）既に數へ終りて疑ふ所なし。一説「疑はざらんや」と反語に訓じ、「なほ疑はしくて」と解す

人心(一)主となりて定まらざれば、正に一箇の(二)飜車の、流轉動搖して、須臾も停まることなきが如し。感ずる所萬端なり。若し一箇の主を做さずんば、怎生ぞ奈何かせん。(三)張天祺昔に嘗て言へり、(四)自ら數年を約して、牀に上著してより、便ち事を思量するを得ず。事を思量せずして後、强て(五)他の這の心を把り來りて制縛することを須ひ、亦(六)寄寓して一箇の形象に在らしむることを須ふと。(七)皆自然にあらず。(八)君實自ら謂ふ、吾れ(九)術を得たり、只管箇の中の字を念ずと。此れ又中の爲に繫縛せらる。且つ中も亦何の形象あらん。人あり、胸中常に兩人あるが若し。善を爲さんと欲すれば、惡ありて以て之が閒を爲すが如く、不善を爲さんと

如ㇾ此者。只是德孤。德不ㇾ孤。必有ㇾ鄰。到二德盛一後。自無二窒礙一。左右逢二其原一也。

敬而無ㇾ失。便是喜怒哀樂未ㇾ發。謂二之中一。敬不ㇾ可ㇾ謂ㇾ中。但敬而無ㇾ失。即所三以中一也。

司馬子微嘗作二坐忘論一。是所謂坐馳也。

伯淳昔在二長安一倉中閑坐。見二長廊柱一。以ㇾ

正てゝすといふ事孟子に見ゆ ㊁ 持することを太甚しきはよろしからねど、兎に角心をば暫く扶持し行きて放下せざる事須要也 ㊂ 心ふさがり滞る所なくして行ふ所自然に皆道の本源にかなふ

敬して失ふことなきは、便ち是れ喜怒哀樂の未だ發せざるものにして、之を中と謂ふ。敬は中と謂ふべからず。但だ敬して失ふことなきは、即ち中なる所以なり。

㊀ 心を持してよく心を存して失はざるは

司馬子微嘗て「坐忘論」を作る。是れ所謂坐馳なり。

㊀ 司馬承禎字子微、唐代天台山の隠者也 ㊁ 坐忘とは心動かずして萬事をわするゝことなり。されど事を忘れんとする一念あるを以て、身は靜かなるも心は動き馳せて外にあり、故に坐馳といふ。共に莊子の語なり

伯淳昔長安にありて、倉中に閑坐し、長廊の柱を見て、意を以て之を數ふ。已にして尙ほ疑はず。再び之を數ふるに合はず、人をして一一聲言して之を數へ

然底道理也。只恭而不レ爲ニ自然底道理一。故不ニ自在一也。須ニ是恭而安一。今容貌必端。言語必正者。非下是道ニ獨善ニ其身一。要中人道上如何。只是天理合レ如レ此。本無ニ私意一。只是箇循レ理而已。

に此の如くなるべし。本私意なし。只だ是れ箇の理に循ふのみ。

(一) 心を存すること未だ熟せずかまへ〳〵しと云ふ意 (二) 敬をむつ〳〵しくなし過ぎるといふもの也 (三) 論語の文を引く (四) 形體にかゝはらざる體の義、即ち體の本來自然の理をいふ (五) 人から何とか言はれ褒められんことを望むといふにあらず

今志ニ于義理一。而心不ニ安樂一者何也。此則正是剩ニ一箇助レ之長一。雖ニ則心操レ之則存。捨レ之則亡一。然持レ之太甚。便是必有レ事焉而正レ之也。亦須ニ且恁去一。

今義理に志して、心安樂ならざるは何ぞや。此れ則ち正に是れ(一)一箇の之を助けて長ずることを剩す。則ち心之を操るときは則ち存し、之を捨くときは則ち亡ぶと雖も、然れども之を持すること太甚しければ、便ち是れ必ず事ありて(二)之を正して丶するなり。(三)亦須らく且つ恁のごとくし去るべし。此の如き者は、只だ是れ德孤なり。德孤ならざれば、必ず隣あり。德盛なるに到りて後、自ら(四)窒礙なく、左右其原に逢ふ也。

(一) 工夫が過ぎて助長する事の餘る結果也、助長の事は孟子に出づ (二) 其效果を豫期して助長する譯になる也、

明。然後可二以自得一。但急迫求レ之。只是私己。終不レ足二以達一レ道。

明道先生曰。思無レ邪。毋レ不レ敬。只此二句。循而行レ之。安得レ有レ差。有レ差者。皆由二不敬不正一也。

明道先生曰く、(一)思邪なし、(二)敬せざることなかれと、只だ此二句、循つて之を行はゞ、(三)安ぞ差あることを得ん。差あるは、皆不敬不正に由つてなり。

(一) 詩の魯頌の語　(二) 曲禮の第一句　(三) 道理に合はざる事ある筈なし

今學者。敬而不二自得一。又不レ安者。只是心生。亦是太以レ敬來做レ事得重。此恭而無レ禮。則勞也。恭者私爲レ恭之恭也。禮者非體之禮。是自

今の學者敬して自得せず、又安ぜざるものは、只だ是れ心生しければなり(一)。亦是れ(二)太だ敬を以て來りて事と做し得て重し。此れ(三)恭にして禮なければ、則ち勞するなり。恭とは私に恭をなすの恭なり。禮とは(四)非體の禮なり。是れ自然底の道理なり。只だ恭にして自然底の道理を爲さず、故に自在ならず。須らく是れ恭にして安かるべし。今容貌必ず端しく、言語必ず正しくするは、是れ獨り其身を善くして、(五)人の如何と道はんことを要すと道ふにあらず、只だ是れ天理合

明道先生曰。學者全體二此心一。學雖レ未レ盡。若事物之來。不レ可レ不レ應。但隨二分限一應レ之。雖レ不レ中不レ遠矣。

居處恭。執レ事敬。與レ人忠。此是徹上徹下語。聖人元無二二語一。

伊川先生曰。學者須三敬守二此心一。不レ可二急迫一。當三栽培深厚。涵二泳於其

明道先生曰く、學者全く此心を體せよ。(一)學未だ盡さずと雖も、若し事物の來らば、應ぜずんばあるべからず。但だ分限に隨つて之に應ぜよ。(二)中らずと雖も遠からじ。

(一) 心を完全に内に存せよとなり (二) 學の分限だけに應ぜんには理に於て中らずとも遠からじ

居處恭しく、事を執りて敬み、人と與にして忠なりと、(一)此れ徹上徹下の語なり。(二)聖人元二語なし。(三)

(一) 論語に見ゆ、樊遲が仁を問へるに答へたる孔子の言なり。居處とは平居の時なり、恭はつゝしめるかたち、忠とは心をつくしてのこすことなきなり、平居の時は外形擧動をうや〳〵しくし、事をなすにあたりては敬を主とし人の爲めには心をつくしてあますなしとの意 (二) 上より下まで一貫せる語也 (三) 聖人の言には下學と上達とによりて筋を異にしたる語はなし

伊川先生曰く、學者須らく敬して此心を守るべし。急迫なるべからず。當に栽培深厚にして、其閒に涵泳すべし。然して後以て自得すべし。但だ急迫に之を求むれば、只だ是れ私己にして、終に以て道に達するに足らず。

四面又一人至矣。左右前後。驅逐不レ暇。蓋其四面空踈。盗固易レ入。無レ緣下作二得主一定上。又如二虚器入一レ水。水自然入。若以二一器一。實レ之以レ水。置二之水中一。水何能入來。蓋中有レ主則實。實則外患不レ能レ入。自然無レ事。

し。主と作り得て定まるに緣なし。又虚器水に入るが如し。水自然に入る。若し一器を以て、之に實るに水を以てし、之を水中に置かば、水何ぞ能く入り來らん。蓋し中に主あるときは則ち實す、實するときは則ち外患入ること能はず、自然に事なし。

(一) 其家に主人たるも、其主と定まりて之を守るに由なし　(二) 充實す　(三) 誠存すれば邪自ら入らず

邢和叔言。吾曹常須レ愛二養精力一。精力稍不レ足則倦。所レ臨レ事皆勉強。而無二誠意一。接二賓客一語言尚可レ見。況臨二大事一乎。

邢和叔言ふ。吾曹常に須らく精力を愛養すべし。精力稍足らざるときは則ち倦み、事に臨む所皆勉強して、誠意なし。賓客に接る語言だに尚ほ見るべし。況や大事に臨むをや。

(一) 一本「與二邢和叔一言」に作る、之に從へば以下は伊川の語と解すべし、邢恕字和叔、程の門人　(二) しひてつとむるが故に誠意を缺く

李籲問。每常遇レ事。即能知二操存之意一。無レ事時。如何存養得熟。曰。古之人。耳之於レ樂。目之於レ禮。左右起居。盤盂几杖。有レ銘有レ戒。動息皆有レ所レ養。今皆廢レ此。獨有二理義之養一レ心耳。但存二此涵養意一。久則自熟矣。敬以直レ内。是涵養意。

李籲(一)問ふ、每常事に遇へば、即ち能く操存(二)の意を知る。事なき時は、如何ぞ存養し得て熟せんと。曰く、古の人には、耳の樂に於ける、目の禮に於ける、左右起居、盤盂几杖(三)、銘あり戒あり。動息皆養(四)ふ所あり。今皆此を廢す。獨り理義の心を養ふあるのみ。但だ此涵養の意を存せよ、久しうするときは則ち自ら熟せん。敬(五)以て内を直くするは、是れ涵養の意なり。

(一)字は端伯、程子の門人 (二)操り守りて内に存するの意 (三)盤ははち又はさら、盂は椀の類、銘は器にきざむ文字 (四)皆存養の資となる (五)敬するときは心中に存して越逸する所なし即ち涵養の意なり

呂與叔嘗言。患下思慮多不上レ能二驅除一。曰。此正如二破屋中禦一レ寇。東面一人來未二逐得一。

呂與叔嘗て言ふ、思慮多くして、驅除すること能はざるを患ふと。曰く、此れ正に破屋の中に寇を禦ぐが如し。東面一人來りて未だ逐ひ得ざるに、西面又一人至る。左右前後、驅逐するに暇あらず。蓋し其四面空踈なれば、盜固より入り易

心。而止乃安。不レ獲二其身一。不レ見二其身一也。謂レ忘レ我也。無レ我則止矣。不レ能レ無レ我。無二可レ止之道一。行二其庭一。不レ見二其人一。庭除之間至近也。在レ背。則雖レ至レ近不レ見。謂レ不レ交二於物一也。外物不レ接。内欲不レ萌。如レ是而止。乃得二止之道一。於レ止爲レ無レ咎也。

雖も見えず、物に交らざるを謂へるなり。外物接らず、内欲萌さず、是の如くにして止まるは、乃ち止まるの道を得たるなり。止まるに於て咎なしとなす。

㊀ 艮とは易の卦の名なり、其彖辭に曰く、其背に艮まりて、其身を獲ず、其庭に行きて其人を見ず、咎なしとあり。此は之を引用して艮の道を說く、艮とはとゞまりて進まざる義なり ㊁ 前に引きたる彖辭中の語 ㊂ 我とは自己の私慾をいふ ㊃ 前に引きたる彖辭中の語 ㊄ 庭除階下の稱、つまりは單に庭といふと同義也

明道先生曰。若不レ能二存養一。只是說話。聖賢千言萬語。只是欲下人將二已放之心一約レ之。使中反復入レ身來上。自能尋向上去。下學而上達也。

明道先生曰く、若し存養すること能はずんば、只だ是れ說話のみと。

㊀ 徒らに閑辯を事として存養せざるものは口耳の學にして畢竟說話のみ

聖賢の千言萬語、只だ是れ人已に放つの心を將つて、之を約めて反復して身に入り來らしめんことを欲す。自ら能く尋ねて向上し去らば、下學して上達せん。

震驚二百里一。不レ喪二匕鬯一。臨二大震懼一。能安而不二自失一者。唯誠敬而已。此處レ震之道也。

人之所二以不レ能レ安二其止一者。動二於欲一也。欲牽二於前一。而求二其止一。不レ可レ得也。故艮之道。當レ艮二其背一。所レ見者在レ前。而背乃背レ之。是所レ不レ見也。止二於所レ不レ見。則無二欲以亂二其

震百里を驚かせども、匕鬯を喪はずと。(一)大震懼に臨みて、能く安じて自ら失はざる者は、唯だ誠敬のみ。此れ震に處するの道なり。

㊀此辭は易の震卦の彖辭なり、震は雷なり、匕は鼎より肉をあげて俎にうつす器、鬯はきびの酒なり、共に祭器なり、全意は、雷百里を驚かせども、祭を行ふ者、よく匕鬯をとりおとさずとなり ㊁大に恐るべき際に在つて平氣なるものは唯心の誠敬にして、大雷震の威も動かすことを得ず

人の其止まるに安ずること能はざる所以の者は、欲に動けばなり。欲前に牽いて、而も其止まらんことを求むるは、得べからず。故に(一)艮の道は、當に其背に艮まるべし。見る所の者前に在りて、背は乃ち之に背く。是れ見ざる所なり。見ざる所に止まるときは、則ち欲の以て其心を亂すことなく、而して止まること乃ち安し。(二)其身を獲ずとは、其身を見ざるなり。(三)我を忘るゝことを謂へるなり。我なきときは則ち止まる。我なきこと能はざるときは、止まるべきの道なし。(四)其庭に行きて其人を見ずとは、(五)庭除の閒は至近なり、背にあるときは、則ち至近なりと

伊川先生曰。陽始生甚微。安靜而後能長。故復之象曰。先王以至日閉ㇾ關。

動息節宣以養ㇾ生也。飲食衣服。以養ㇾ形也。威儀行義。以養ㇾ德也。推ㇾ己及ㇾ物。以養ㇾ人也。

愼二言語一以養二其德一。節二飲食一以養二其體一。事之至近。而所ㇾ繫至大者。莫ㇾ過二於言語飲食一也。

伊川先生曰く、陽の始めて生ずるときは甚だ微なり。安靜にして後に能く長ず。故に(一)復の象に曰く、先王以て(二)至日に關を閉づと。

(一) 陽の復の卦なり。先王云々とは先ず冬至の一陽來復の時には、處處の關所をとぢて往來を止め民をして勞動を息ましむ、一陽の生じ來るや其力微弱なれば、以て靜かにして之を養はんとなすと也　(二) 至日は冬至の日

(一)動息節宣は、以て生を養ふ也。飲食衣服は、以て形を養ふ也。威儀行義は、以て德を養ふ也。己を推して物に及ぼすは、以て人を養ふ也。

(一) 動は働き息は憩ふ、節宣はよろしきにかなふこと、卽ち活動と休息の適宜なるをいふ

言語を愼みて以て其德を養ひ、飲食を節して以て其體を養ふ。事の至近にして、繫る所の至大なる者、言語飲食に過ぎたるはなし。

或問。聖可學乎。濂溪先生曰。可。有要乎。曰。有。請問焉。曰。一爲要。一者無欲也。無欲則靜虛。動直。靜虛則明。明則通。動直則公。公則溥。明通公溥庶矣乎。

卷之四

存養類　凡七十條

或ひと問ふ、聖學ぶべきか。濂溪先生曰く、可なり。要ありや。曰く、あり。請ひ問ふ。曰く、一(一)を要(二)となす。一とは無欲なり。無欲なるときは則ち靜にして虛、動いて直なり。靜にして虛なるときは則ち明なり、明なるときは則ち通ず。動いて直なるときは則ち公なり、公なるときは則ち溥(三)なり。明通公溥は庶(四)からんか。

(一) 純一なり、雜りなきを云ふ　(二) 簡要の義、學ぶについての要領　(三) あまねくゆきわたる　(四) 聖たるに近からん

六經須循環理會。義理儘無窮。待自家長得一格。則又見得別。

如中庸文字輩。直須句句理會過。使其言互相發明。

春秋之書。在古無有。乃仲尼所自作。惟孟子能知之。非理明義精。殆未可學。先儒未及此而治之。故其說多鑿。

六經は須らく循環して理會すべし。義理窮りなかるべし。自家一格を長し得るを待たば、則ち又見得て別ならん。

一 おのれの學問が一段長ずる時は

中庸の文字輩の如き、直に須らく句句理會し過ぎて、其言をして互に相發明せしむべし。

一 經は史の意にちかく、褒貶をあらはす

春秋の書、古に在りては有ることなし。乃ち仲尼の自ら作れる所なり。惟だ孟子のみ能く之を知る。理明かに義精しきにあらざれば、殆ど未だ學ぶべからず。先儒未だ此に及ばずして之を治む。故に其說多く鑿てり。

一 其說理に據れずして多く穿鑿に陷れるなり

讀レ書少。則無レ由三考校得二義精一。蓋書以維二持此心一。一時放下。則一時德性有レ懈。讀レ書則此心常在。不レ讀レ書則終看二義理一不レ見。

書を讀むこと少きときは、則ち考校(一)して義の精しきことを得るに由なし。蓋し書は以て此心を維持す。一時放下(二)するときは、則ち一時德性懈るとあり。書を讀むときは則ち此心常にあり。書を讀まざるときは則ち終に義理を看るとも見えじ。

(一) 校も亦かんがふる意　(二) なげやりにすること

書須レ成レ誦。精思多在二夜中或靜坐一得レ之。不レ記則思不レ起。但通二貫得大原一後。書亦易レ記。所二以觀レ書者。釋二己之疑一。明二己之未レ達。每見每知二新益一。則學進矣。於二不レ疑處一有レ疑。方是進矣。

書は須らく誦を成すべし。精思は多く夜中或は靜坐にありて之を得。記せざる(一)ときは則ち思も起らず。但だ大原に通貫し得て後に、書も亦記し易し。書を觀る所以の者は、己の疑を釋き、己の未だ達せざるを明かにせんとてなり。每に見て每に新益を知るときは、則ち學進む。疑(二)はざりし處に於て疑あれば、方に是れ進めるなり。

(一) 記憶し居らざれば　(二) 疑の無かりし所に疑を生ずるに至れば

必爲二艱嶮一求レ之。今以二艱嶮一求レ詩。則已喪二其本心一。何由見二詩人之志一。

見ん。

(一) 孟子萬章上に見ゆ、己が意にて作者の志を迎へ取る意

詩人之情性。溫厚平易老成。本平地上道二著言語一。今須下以二崎嶇一求上レ之。先其心已狹隘了。則無レ由二見得一。詩人之情本樂易。只爲三時事拂二著他樂易之性一。故以レ詩道二其志一。

詩人の情性は、溫厚平易老成なり。本平地上に(一)言語を道著す。今は崎嶇(二)を以て之を求むることを須ふ。先づ其心、已に狹隘にして了す、則ち見得するに由無し。詩人の情は本樂易なり。只だ時事の他が樂易の性に拂著(三)するが爲に、故に詩を以て其志を道ふのみ。

(一) 平々たる處より言ひ出だすとなり　(二) けはしきこと　(三) もとりさからふ、著は添へ字

尙書難レ看。蓋難レ得二胸臆如レ此之大一。只欲レ解レ義。則無レ難也。

尙書は看難し。蓋し胸臆此の如く大なることを得難ければなり。只だ義を解かんと欲すれば、則ち難きことなし。

事上致レ曲窮究。湊ニ合此心一。如レ是之大。必不レ能レ得也。釋氏錙ニ銖天地一。可レ謂ニ至大一。然不ニ嘗爲ヒ大。則爲レ事不レ得。若界ニ之一錢一。則必亂矣。又曰。大宰之職難レ看。蓋無ニ許大心胸包羅一。記ニ得此一復忘レ彼。其混混天下之事。當ニ如下捕ニ龍蛇一搏中虎豹上。用ニ心力一看甲方可。其他五官便易レ看。止一職也。

羅するなくんば、此を記し得て復彼を忘れん。其混混たる天下の事、當に龍蛇を捕へ虎豹を搏つが如く、心力を用ひて看るべくして方に可なり。其他の五官(九)は便ち看易し。止だ一職のみなればなり。

(一) 周禮の天官職、六卿の長にて、邦國を統理し、大小の政を總括す (二) 度量大にしてこそ其任を全うし得べけれ (三) 一事一事について事こまかに片端より致し究めて、以て其心にすべ合せんとしても、到底斯る大務を全うする事は出來まじと也 (四) 量の少なきこと、天地を塵の如くに小なるものとみなすをいふ (五) 實際に天下の大事を爲さざる故に事を偽して理に當らず (六) 一錢の金を與へて使はしても其用途を誤り處置に窮して心亂れん (七) 天官に同じ (八) 胸中に凡てをつゝみ容るゝをいふ (九) 周の六官中天官以外の五つの官（地官司徒、春官宗伯、夏官司馬、秋官司寇、冬官司空）

古人能知レ詩者。唯孟子。爲ニ其以レ意逆ヒ志也。夫詩人之志至平易。不三

古人の能く詩を知る者、唯だ孟子のみ、其の意を以て志を逆ふることを爲す。(一) 夫れ詩人の志は至つて平易なり。必ずしも艱嶮に之を求むるを爲さず。今艱嶮を以て詩を求むるときは、則ち已に其本心を喪ふ。何に由つてか詩人の志を

横渠先生曰。序卦不レ可レ謂レ非二聖人之蘊一。今欲三安二置一物一。猶求二審處一。況聖人之於レ易。其間雖レ無二極至精義一。大槩皆有二意思一。觀二聖人之書一。須二遍布細密如レ是。大匠豈以二一斧一可レ知哉。

天官之職。須二襟懷洪大方看得一。蓋其規模至大。若不レ得二此心一。欲三事

横渠先生曰く、序卦(一)は聖人の蘊にあらずといふべからず。今一物を安置せんと欲するだに、猶ほ審に處せんとを求む。況や聖人の易に於けるをや。其閒極至の精義なしと雖も、大槩(二)皆意思あり。聖人の書を觀るに、(三)須らく遍布細密是の如くなるべし。(四)大匠豈に一斧を以て知るべけんや。

(一)晉の韓康伯が、序卦は其義淺くして聖人の蘊奧にあらずといへるを駁する也　(二)意趣の意、おもはく　(三)廣くつまびらかにして綿密に工夫を著くること皆此類也　(四)名工の巧みなる所は仲々斧一手にては見わくる能はずとなり

(一)天官の職、須らく襟懷(二)洪大にして方に看得すべし。蓋し其規模至大なり。若し此心を得ずして、(三)事事上に曲を致して窮究し、此心に湊合せんと欲すとも、是の如く大なることは、必ず得ること能はじ。釋氏天地を(四)錙銖とす、至大なりと謂ふべし。然れども嘗て(五)大なることを爲さず、則ち事をなして得ず。若し之に一(六)錢を畀へば、則ち必ず亂れん。又曰く、(七)大宰の職看難し。蓋し許大の(八)心胸包

又更精思。其開多有二幸而成。不幸而敗。今人只見二成者一。便以爲レ是。敗者便以爲レ非。不レ知下成者煞有二不是。敗者煞有中是底上。

讀レ史須レ見二聖賢所レ存治亂之機。賢人君子出處進退。便是格物。

元祐中客有下見二伊川一者上。几案間無二他書一。惟印行唐鑑一部。先生曰。近方見二此書一。三代以後無二此議論一。

し、敗れし者は便ち以て非となす。成りし者にも煞だ不是なるあり、敗れし者にも煞だ是底なるあるを知らず。

㊀ なかば讀みて其末を讀まずに考へて見て其成敗をはかり、その後に復た讀む ㊁ 自分の料りたる處と史の事實とが合はざる處あれば ㊂ 運よく事の成就するもあり、運わるく失敗に終るもあり

史を讀むには、須らく聖賢存する所の治亂の機、(一)賢人君子の出處進退を見るべし。便ち是れ格物なり。

㊀ 聖經賢傳に教を存し置きたる所の國家治亂の機微を知るべしと也

(一)元祐中、客の伊川に見えし者あり。(二)几案の間他書なし。惟だ印行の(三)唐鑑一部のみ。先生曰く、近ごろ方に此書を見る。(四)三代以後、此る議論なしと。

㊀ 宋哲宗の治世 ㊁ 机 ㊂ 程氏の門人范祖禹の著にて、唐朝の事を論じたる書 ㊃ 其議論の正しきを褒めていふ也

(一)訟を聽くに、是非の事實をきゝ定めたるを按といひ、其按によりて判斷して法を用ふるを斷といふ、春秋には左・公羊・穀梁の三傳あり、其傳の事迹を以て按とし、經の褒貶を以て斷とすと也。本註は「程子又云ふ、某年二十の時春秋を看る、黄贅隅某に問ふ、如何か看ると、某答へて曰く、傳を以て經の事迹を考へ、經を以て傳の眞僞を別つと」

凡讀レ史。不三徒要二記事迹一。須レ要レ識二其治亂安危。興廢存亡之理一。且如レ讀二高帝紀一。便須レ識下得漢家四百年終始治亂當中如何上。是亦學也。

凡そ史を讀むには、徒らに事迹を記(一)するを要せず。須らく其治亂安危、興廢存亡の理を識らんことを要すべし。且つ高帝紀を讀むが如き、便ち須らく漢家四百年の終始治亂當に如何なるべきかを識得すべし。是も亦學なり。

(一)記憶する

先生每レ讀レ史。到二一半一便掩レ卷思量。料二其成敗一。然後却看。有レ不レ合處。

先生史を讀むごとに、一半(一)に到りて便ち卷を掩ひて思量し、其成敗を料り、然して後に却つて看る。(二)合はざる處あれば、又更に精思す。其間多く幸(三)にして成り、不幸にして敗るゝあり。今の人只だ成りし者を見ては、便ち以て是とな

理。但他經論ニ其義一。春秋因ニ其行事一。是非較著。故窮レ理爲レ要。嘗語ニ學者一。且先讀ニ論語孟子一。更讀ニ一經一。然後看ニ春秋一。先識ニ得箇義理一。方可レ看ニ春秋一。春秋以レ何爲レ準。無レ如ニ中庸一。欲レ知ニ中庸一無レ如レ權。須ニ是時而爲ヒ中。若以ニ手足胼胝。閉レ戸不レ出二者之間一取レ中。便不ニ是中一。若當ニ手足胼胝一。則於レ此爲レ中。當ニ閉レ戸不ヒ出。則於レ此爲レ中。權之爲レ言。秤錘之義也。何物爲レ權。義也。時也。只是說得到レ義。義以上更難レ說。在ニ人自看ニ如何一。

時にして中たるべし。若し手足胼胝すると、戸を閉ぢて出でざるとの二者の間を以て中を取らば、便ち是れ中ならず。(二)若し當に手足胼胝すべきときは、則ち此に於て中たり、當に戸を閉ぢて出でざるべきときは、則ち此に於て中たり。權の言たる、(三)秤錘の義なり。何物をか權と爲す。義なり、時なり。只だ是れ說き得て義に到る。義以上は更に說き難し。人自ら如何と看るにあり。

(一) 春秋にて是非を判斷する其法則を知らんとせば中庸の理を知るが一番よし (二) 中庸は理のよろしきをはかりて中となす、之をはかるは權なり、故に中庸を知るには權に及ぶものなしといふ也 (三) 禹が洪水を治めて手足に胼胝(タコ)を生ずる程はたらけると、顏子が戸を閉ぢ安逸にして出でざりしとの中間をとらば、これ聖人の中にあらずとなり (四) はかりのおもりをいふ

春秋傳爲レ按、經爲レ斷。

(一)春秋は傳を按と爲し、經を斷と爲す。

成レ書。勢須レ如レ此。不レ可三事事各求二異義一。但一字有レ異。或上下文異。則義須レ別。

五經之有二春秋一。猶三法律之有二斷例一也。律令唯言二其法一。至二於斷例一。則始見二其法之用一也。

學二春秋一亦善。一句是一事。是非便見二於此。此亦窮レ理之要。然他經豈不レ可二以窮レ

る方深切著明ならんと也 ㊁ 春秋に重ねがされ記せるは、征伐盟會の類なりとなり。盟會とは諸侯の集りてちかふことと

五經の春秋あるは、猶ほ法律の斷例(一)あるがごとし。律令は唯だ其法を言へども、斷例に至つては、則ち始めて其法の用を見る也。

㊀ 判決例、事件に應じて法を用ひ是非を判定する實例也

春秋を學ぶも亦善し。一句是れ一事、是非便ち此に見る。此れ亦理を窮むるの要なり。然れども他經豈に以て理を窮むべからざらんや。但だ他經は其義を論じ、春秋は其行事に因つて、是非較に著かなり。故に理を窮むる要たり。嘗て學者に語る、且つ先づ論語・孟子を讀み、更に一經を讀んで、然して後に春秋を看よ。先づ箇の義理を識り得て、方に(二)春秋を看るべしと。春秋何を以てか準と爲さん、中庸に如くはなし。中庸を知らんと欲せば、權(三)に如くはなし。須らく是れ

秋之義。則雖三德非二禹湯一。尚可三以法二三代之治一。自レ秦而下。其學不レ傳。予悼二夫聖人之志。不一レ明二於後世一也。故作レ傳以明レ之。俾下後之人。通二其文一而求二其義一。得二其意一而法中其用上。則三代可レ復也。是傳也。雖レ未レ能レ極二聖人之蘊奥一。庶幾學者得二其門一而入矣。

雖も、庶幾はくは學者其門を得て入らんことを。

(一) 造化の神妙なること (二) 優游はゆつくりして急がざること、涵泳は其中にひたること、則ち春秋をゆつくりと熟讀玩味するをいふ

詩書載レ道之文。春秋聖人之用。詩書如二藥之方。春秋如三用レ藥治二病。聖人之用。全在二此書。所謂不レ如下載二之行事。深切著明上者也。有二重疊言一者。如二征伐盟會之類一。蓋欲レ

詩書は道を載するの文にして、春秋は聖人の用なり。詩書は藥方の如く、春秋は藥を用ひて病を治するが如し。聖人の用、全く此書にあり。所謂之を行事に載するの、深切著明なるに如かずといふ者なり。重疊して言ふ者あり。征伐盟會の類の如しと。蓋し書を成さんと欲すれば、勢須らく此の如くなるべし。事事各〻異義を求むべからず。但だ一字の異なるあり、或は上下の文異なるときは、則ち義須らく別なるべし。

(一) 史記に見えたる孔子の言、徒に言を立てゝ道理の是非を論ぜんよりは、之を實際に行ひたる事に載せて褒貶す

悖。質二諸鬼神一而無レ疑。百世以俟二聖人一而不レ惑者也。先儒之傳曰。游夏不レ能レ贊二一辭一。辭不レ待レ贊也。言レ不レ能レ與二於斯一耳。斯道也。惟顏子嘗聞レ之矣。行二夏之時一。乘二殷之輅一。服二周之冕一。樂則韶舞。此其準的也。後世以レ史視二春秋一。謂褒レ善貶レ惡而已。至二於經世之大法一。則不レ知也。春秋大義數十。其義雖レ大。炳如二日星一。乃易レ見也。惟其微辭隱義。時措從レ宜者。爲レ難レ知也。或抑或縱。或與或奪。或進或退。或微或顯。而得二乎義理之安。文質之中。寬猛之宜。是非之公一。乃制レ事之權衡。揆レ道之模範也。

夫觀二百物一然後識二化工之神一。聚二衆材一然後知レ作レ室之用一。於二一事一義一。而欲レ窺二聖人之用一レ心。非二上智一不レ能也。故學二春秋一者。必優游涵泳。默識心通。然後能造二其微一也。後王知二春

夫れ百物を觀て、然して後に化工の神を識り、衆材を聚めて然して後に室を作るの用を知る。一事一義に於て、聖人の心を用ふるを窺はんと欲するは、上智にあらざれば能はざるなり。故に春秋を學ぶ者は、必ず優游涵泳、默識心通して、然る後に能く其微に造らん。後の王たるもの春秋の義を知らば、則ち德は禹・湯にあらずと雖も、尙はくは以て三代の治に法るべし。秦よりこのかた、其學傳はらず。予、夫の聖人の志の後世に明かならざるを悼む。故に傳を作りて以て之を明かにす。後の人をして、其文に通じて其義を求め、其意を得て其用に法らしめば、則ち三代復すべき也。是の傳や、未だ聖人の蘊奥を極むること能はずと

既不二復作一。有二天下一者。雖レ欲レ倣二古之跡一。亦私意妄爲而已。事之繆。秦至二以レ建レ亥爲一レ正。道之悖。漢專以二智力一持レ世。豈復知二先王之道一也。夫子當二周之末一。以下聖人不二復作一也。順レ天應レ時之治不中復有上也。於レ是作二春秋一。爲二百王不易之大法一。所謂考二諸三王一而不レ繆。建二諸天地一而不レ

なり。後世史(一四)を以て春秋を視て、謂へらく、善を褒め惡を貶するのみと。經世の大法に至つては、則ち知らざるなり。春秋の大義數十、其義大なりと雖も、炳かなること日星の如くにして、乃ち見易し。惟だ其微辭隱義、時に措いて宜しきに從ふ者を、知り難しと爲す。或は抑へ或は縱し、或は與へ或は奪ひ、或は進め或は退け、或は微にし或は顯にして、義理の安く、文質の中に、寛猛の宜しく、是非の公なることを得るは、乃ち事を制するの權衡、道を揆るの模範なり。

(一) 衆にぬきんでたる人材 (二) 堯と舜 (三) 夏・殷・周の王 (四) 三王の禮なり (五) 三代の正月なり。周は子の月に建て、殷は丑の月に建て、夏は寅の月に建つ (六) 夏の禮は忠質を尚び、殷の禮は質朴に、周の禮はあやあることを指す (七) 秦の始皇、子丑寅三正の義をすて、亥の月を以て歳首とす (八) 仁義道德を尚ばずして專ら智謀才力にて天下をとりすぶ (九) 孔子 (一〇) 孔子の門弟子游・子夏は文學に長じたれど、春秋には辭一つも賛くる能はざりしと也 (一一) 春秋の辭はもとより子游・子夏の賛を待つ必要なし、先儒の斯くいひたる意味は、子游・子夏の學は未だ春秋の義をあづかり聞くに至らぬ故其一辭をもいろふ事能はずといへるのみと也 (一二) 論語を引く、夏の時とは寅の月を歳首とする時令をいふ、輅は古の木の、冕は珠の冠、韶舞は舜の德にかたどれる樂、これらは凡て中正にして世を治むる法則とすべきもの也との意 (一三) 法則 (一四) 普通の歷史の書として

出類之才。起而君長之。治之而爭奪息。導之而生養遂。敎之而倫理明。然後人道立。天道成。地道平。二帝而上。聖賢世出。隨時有作。順乎風氣之宜。不先天以開人。各因時而立政。暨乎三王迭興。三重既備。子丑寅之建正。忠質文之更尙。人道備矣。天運周矣。聖王

に出で、時に隨ひて作すことあり。風氣の宜しきに順ひ、天に先ちて以て人を開ひくをせず、各ゝ時に因つて政を立つ。(三)三王迭に興り、(四)三重既に備はり、(五)子・丑・寅の正を建て、(六)忠・質・文の更る尙ばるゝに曁んで、人道備はり、天運周し。聖王既に復作らず。天下を有つ者、古の跡に倣はんと欲すと雖も、亦私意妄爲のみ。事の繆れるや、(七)秦、亥に建つるを以て正となすに至り、道の悖れるや、漢、(八)專ら智力を以て世を持す。豈に復先王の道を知らんや。(九)夫子周の末に當つて、聖人復作らず、天に順ひ時に應ずるの治復あらざるを以て、是に於て春秋を作りて、百王不易の大法と爲す。所謂諸を三王に考へて繆らず、諸を天地に建てゝ悖らず、諸を鬼神に質して疑なく、百世以て聖人を俟つて惑はざる者なり。先儒の傳に曰く、(一〇)游・夏一辭を贊くること能はずと。(一一)辭は贊くることを待たず、斯に與ることを言へるのみ。斯の道や、惟だ顏子のみ嘗て之を聞けり。(一二)夏の時を行ひ、殷の輅に乘り、周の冕を服し、樂は則ち韶舞す。此れ其準的(一三)

添二一隻一。亦不レ知二是多一。若識則自添減不レ得也。

游定夫問二伊川陰陽不レ測之謂レ神。伊川曰。賢是疑了問。是揀二難底一問。

伊川以二易傳一示二門人一曰。只說二得七分一。後人更須二自體究一。

伊川先生春秋傳序曰。天之生レ民。必有二

く　(五) 强て兀子を識り居る者ならば

游定夫(一)伊川に「(二)陰陽測られざるを神といふ」ことを問ふ。伊川曰く、(三)賢是れ疑ひ了して問ふか、是れ難底を揀んで問ふかと。

(一) 游酢字定夫、門人なり　(二) 易の語　(三) なんぢは疑ひ思ひて解けざる故に問ふか、それとも只解け難い事をえらび出して問ふかと也、まづ自ら熟思せしめん爲めの反問也

伊川易傳を以て門人に示して曰く、只だ七分を說き得たり。後人更に須らく自ら(一)體究すべしと。

(一) 自己の身に體して深く其理を研究すべしとの意

伊川先生春秋傳の序に曰く、天の民を生ずる、必ず(一)出類の才、起りて之に君長たることあり。之を治めて爭奪息み、之を導いて生養遂げ、之を敎へて倫理明かなり。然る後に人道立ち、天道成り、地道平かなり。(二)一帝よりして上、聖賢世々

易中只是言ニ反復往來上下ー。作レ易。自ニ天地幽明ー至ニ于昆蟲草木微物ー。無レ不レ合。

今時人看レ易。皆不三識ニ得易是何物ー。只就レ上穿鑿。若念得不レ熟。與就レ上添ニ一德ー亦不レ覺レ多。就レ上減ニ一德ー亦不レ覺レ少。譬如レ不レ識ニ此兀子ー。若減ニ一隻脚ー。亦不レ知ニ是少ー。若

易中只だ是れ(一)反復・往來・上下を言ふ。

㈠ 三者共に陰陽變易の道にて易の易たる所以也

易を作ること、天地・幽明より昆蟲・草木・微物に至るまで、合はずといふことなし。

今時の人の易を看るや、皆易は是れ何物なるかを識り得ずして、只だ(一)上に就て穿鑿す。若し(二)念得熟せざらんには、(三)與に上に就て一德を添ふとも、亦多きを覺えず。上に就て一德を減すとも、亦少きを覺えず。譬へば此の(四)兀子を識らざるが如し。若し一隻脚を減ずとも、亦是れ少きことを知らず、若し一隻を添ふとも、亦是れ多きことを知らじ。若し(五)識るときは、則ち自ら添減することを得ざる也。

㈠ 辭の上について ㈡ 十分に諳誦習熟し居らざる者には ㈢ 其爲めに卦爻の德を一つ添へたり一つへらしたりして說き聴かせても多いとも少いとも氣附かざるべし ㈣ 三脚より成る腰掛、有合せたる腰掛に喩を取りて說

儲貳亦不害。但不要拘一。若執一事。則三百八十四爻。只作得三百八十四件事。便休了。

ふ。初九・初六より九五・六五に至るまでの各位は各々爻といふ、其數三百八十四也 ㊄只三百八十四だけの事となりて其の他用を爲さゞらんと也

看易且要知時。凡六爻人人有用、聖人自有聖人用。賢人自有賢人用。衆人自有衆人用。學者自有學者用。君有君用。臣有臣用。無所不通。因問。坤卦是臣之事、人君有用處否。先生曰。是何無用。如厚德載物。人君安可不用。

易を看ば且つ時を知らんことを要せよ。凡そ六爻人人用あり。聖人は自ら聖人の用あり。賢人は自ら賢人の用あり。衆人は自ら衆人の用あり。學者は自ら學者の用あり。君は君の用あり。臣は臣の用あり。通ぜずといふ所なし。因つて問ふ、坤卦は是れ臣の事とすれば、人君に用ふる處ありや否や。先生曰く是れ何ぞ用ふるなからん。(二)厚德ありて物を載するが如き人君安ぞ用ひざるべけんや。

㊁坤の卦の象に、君子厚德を以て物を載すと書して地の德となせるをいふ

不レ當レ位。多以レ中爲レ美。三四雖レ當レ位。或以二不一レ中爲レ過。中常重二於正一也。蓋中則不レ違二於正一。正不二必中一也。天下之理。莫レ善二於中一。於二九二六五一可レ見。

問。胡先生解二九四一作二太子一。恐不二是卦義一。先生云。亦不レ妨。只看二如何用一。當二儲貳一則做二儲貳一使。九四近レ君。便作二

雖も、或は中ならざるを以て過ぎたりと爲す。中は常に正よりも重し。蓋し中なるときは則ち正に違はず。正は必ずしも中ならず。天下の理、中より善きはなし。九二(一)六五に於て見るべし。

(一) 易の六爻の位の中、初三五を陽とし、二四上を陰とす、而して陽の爻が陽の位に居り、陰の爻が陰の位に居るを位に當るとし、爻と位と陰陽相違へるを位に當らずとする也、二と五は上下卦の中位にて其爻が位に當らざれど多くは中道を得て美なりと也

問ふ、(一)胡先生九四を解して太子と作す。恐らくは是れ卦義ならざらんと。先生云ふ、亦(二)妨げず。只だ如何に用ふるかを看よ。(三)儲貳に當るときは則ち儲貳と做して使ふ。九四は君に近し。便ち儲貳となすも亦害あらず。但だ一に拘ることを要せず。若し一事を執るときは、則ち(四)三百八十四爻、只だ(五)三百八十四件の事となし得て、便ち休み了らん。

(一) 胡瑗、字は翼之、安定先生といふ　(二) さう解しても差支なし　(三) 太子なり　(四) 爻とは易の卦の各位をい

數。易因ㇾ象以明ㇾ理。由ㇾ象以知ㇾ數。得二其義一。則象數在二其中一矣。必欲下窮二象之隱微一。盡中數之毫忽上。乃尋ㇾ流逐ㇾ末。術家之所ㇾ尙。非二儒者之所一ㇾ務也。

㊀ 門人なり ㊁ 他人に傳へざるは ㊂ 張闕中より伊川に送れる書のこと ㊃ 陰陽動靜の無形の理、本註に「理は形無し、故に象に因て以て理を明かにす、理既に辭に見はるれば、則ち辭に由つて象を觀るべし、故に其義を得るときは則ち象數其中に在りと曰ふなり」 ㊄ 極めて小なる數 ㊅ 理は本源にて象數は末流也、末流を逐ひ尋ぬれば本源を忘るゝ故に儒家は之を務めざる也

知ㇾ時識ㇾ勢。學ㇾ易之大方也。

時を知り勢を識るは、易を學ぶの大方なり。

大畜初二。乾體剛健。而不ㇾ足二以進一。四五陰柔而能止。時之盛衰。勢之强弱。學ㇾ易者所ㇾ宜二深識一也。

㊀大畜の初二は、乾體にして剛健なれども、而も以て進むに足らず。四五は陰柔なれども能く止む。時の盛衰、勢の强弱は、易を學ぶ者の宜しく深く識るべき所なり。

㊀ 大畜の卦は下乾にして上艮なり。乾は剛健にして、艮は止るの意あり。初二とは初九・九二を指す。四・五は則ち陰なり、陰にして陰の上にあり、故によく上に居て下の妄に進むを止むるなり

諸卦二五。雖ㇾ

㊀諸卦の二五は、位に當らずと雖も、多く中を以て美と爲す。三四は位に當ると

退存亡之道。備二於辭一。推レ辭考レ卦。以二可レ知一レ變。象與レ占在二其中一矣。君子居則觀二其象一。而玩二其辭一。動則觀二其變一。而玩二其占一。得二於辭一。不レ達二其意一者有矣。未レ有下不レ得二於辭一。而能通二其意一者上也。至微者理也。至著者象也。體用一源。顯微無レ間。觀二會通一以行二其典禮一。則辭無レ所レ不レ備。故善學者。求レ言必自レ近。易二於近一者。非二知レ言者一也。予所レ傳者辭也。由レ辭以得レ意。則在二乎人一焉。

所あらんとする者は其辭を尚び用ふ (八) 何か爲す所あらんとする者は其變易の理に從ふ (九) 易の卦爻は皆器に象（カタド）る所あり、故に器を制する者は之を尚び用ふ (一〇) 理は體、象は用、理中に象ありて體も用も其源は一、象中に亦理ありて顯なる象と微なる理との間にへだてなしと也 (一一) 象理の會して而も通ずる處を觀て、以て常法とする所を行へば (一二)．如何なる困難に處することも皆易の辭に備はり居ると也

伊川先生答二張閎中一書曰。易傳未レ傳。自量精力未レ衰。尚覬レ有二少進一爾。來書云。易之義本起二於數一。則非也。有レ理而後有レ象。有レ象而後有レ

伊川先生張閎中(一)に答ふる書に曰く、易傳未だ傳へ(二)ざるは、自ら量るに精力未だ衰へず、尚ほ少しく進むことあらんを覬ふのみ。(三)來書に云ふ、易の義本數に起ると。則ち非なり。(四)理ありて後に象あり、象ありて後に數あり。易は象に因つて以て理を明かにし、象によつて以て數を知る。其義を得るときは、則ち象數其中にあり。必ず象の隱微を窮め、數の毫忽(五)を盡さんと欲して、乃ち流(六)を尋ね末を逐ふは、術家の尚ぶ所にして、儒者の務むる所にあらざるなり。

去レ古雖レ遠。遺經尙存。然而前儒失レ意以傳レ言。後學誦レ言而忘レ味。自レ秦而下。蓋無レ傳矣。予生二千載之後一。悼二斯文之湮晦一。將レ俾下後人沿レ流而求上レ源。此傳所二以作一也。易有二聖人之道四一焉。以言者尙二其辭一。以動者尙二其變一。以制レ器者尙二其象一。以卜筮者尙二其占一。吉凶消長之理。進

者は其變を尙ぶ。以て器を制する者は其象を尙ぶ。以て卜筮する者は其占を尙ぶ。吉凶消長の理、進退存亡の道、辭に備はれり(九)。辭を推して卦を考ふれば、以て變を知るべく、象と占とは其中にあり。君子居るときは則ち其象を觀て、其辭を玩ぶ。動くときは則ち其變を觀て、其占を玩ぶ。辭に得て、其意に達せざる者はあれども、未だ辭を得ずして、能く其意に通ずる者はあらじ。至微なる者は理なり、至著なる者は象なり。體用源を一にし(一〇)、顯微間なし。會通(一一)を觀て以て其典禮を行ふときは、則ち辭備(一二)らざる所なし。故に善く學ぶ者は、言を求むること必ず近きよりす。近きを易る者は、言を知る者にあらず。予が傳する所の者は辭なり。辭によりて以て意を得ることは、則ち人にあり。

(一) さまざまに變じかはる義 (二) 天地の性命を賦し、萬物を造化する道理 (三) 陰陽死生鬼神等のことがら (四) 人の知らぬ事を開發し、人のしたいと思ふ所を遂げさせる道 (五) ほろびて明かならざるに至れるをいふ (六) 言に因りて其意を求めしめんとすと也 (七) 辭は聖人の繫辭をいふ、易の辭は人情に切なる故、易を用ひて何か言ふ

於子思孟子。其書雖是雜記。更不分精粗。一衮說了。今人語道。多說高便遺卻卑。說本便遺卻末。

けば便ち卑きを遺却し(二)、本を説けば便ち末を遺却す。

(一)一同なり、一まるめに説くなり　(二)わすれて了ふ

伊川先生易傳序曰。易變易也。隨時變易。以從道也。其爲書也。廣大悉備。將以順性命之理。通幽明之故。盡事物之情。而示開物成務之道也。聖人之憂患後世。可謂至矣。

伊川先生易傳の序に曰く、易は變易なり。時に隨つて變易(一)して、以て道に從ふなり。其書たるや、廣大にして悉く備はれり。將に以て(二)性命の理に順ひ、(三)幽明の故に通じ、事物の情を盡して、(四)物を開き務を成すの道を示さんとすればなり。聖人の後世を憂患すること、至れりと謂ふべし。古を去ること遠しと雖も、遺經尚ほ存す。然れども前儒意を失ひて以て言を傳へ、後學言を誦して味を忘る。秦よりしてこのかた、蓋し傳ることなし。予千載の後に生れて、斯の文の(五)湮晦を悼み、將に後人をして(六)流に沿ひて源を求めしめんとす。此れ傳をば作りたる所以なり。易に聖人の道四あり。(七)以て言ふ者は其辭を尙ぶ。(八)以て動く

便使三人長二一格價一。

不下以レ文害上レ辭。文文字之文。擧二一字一則是文。成レ句是辭。詩爲下解二一字一不上レ行、却遷二就他一說。如二有周不一レ顯。自是作レ文當レ如レ此。

看レ書。須レ要レ見二二帝三王之道一。如二二典一。卽求下堯所二以治一レ民。舜所中以事上レ君。

中庸之書。是孔門傳授。成二

㊀一段の價値

(一)文を以て辭を害せざれ。文は文字の文なり。一字を擧ぐるときは則ち是れ文、句を成すは是れ辭なり。詩は一字を解して行かずとせば、却つて他に(二)遷就して說け。(三)「有周顯かならざらんや」の如き、(四)自ら是れ文を作す當に此の如くなるべし。

㊀孟子の語　㊁詩を讀むに、若し一字の義を解きて其說行き通らずば、他の義にうつりて說くべしとなり　㊂詩の大雅にあり、周の德、豈にあきらかならざらんやとの意なり。有に意なし。卽ち顯かなることを稱したるなり　㊃詩の作文の法は斯樣の譯にて、之を「顯かならず」と打消しに解しては、文を以て辭を害すと也

(一)書を看るには、須らく(二)二帝三王の道を見んことを要すべし。(三)二典の如き、卽ち堯の民を治むる所以、舜の君に事ふる所以を求むべし。

㊀尙書　㊁堯・舜と夏の禹王、殷の湯王、周文武王　㊂書經の堯典・舜典をいふ

中庸の書は、是れ孔門の傳授、子思・孟子に成る。其書是れ雜へ記すと雖も、更に精粗を分たずして、(一)一袞にして說き了る。今の人道を語るに、多くは高きを說

但優游玩味。吟哦上下。便使㆔人有㆓得處㆒。瞻㆓彼日月㆒。悠悠我思。道之云遠。曷云能來。思ㇾ之切矣。終曰。百爾君子。不ㇾ知㆓德行㆒。不ㇾ忮不ㇾ求。何用不ㇾ臧。歸㆓于正㆒也。又云。伯淳常談ㇾ詩。竝不ㇾ下㆓一字訓詁㆒。有ㇾ時只轉㆓却一兩字㆒。點㆓掇他㆒念過。便教㆓人省悟㆒。又曰。古人所㆕以貴㆔親㆓炙之㆒也。

思ふの切なるなり。終りに曰く、「(二)百そ爾君子、德行を知らざらんや。忮はず求らず、何を用つてか臧らざらん」と。(三)正しきに歸するなり。

又云ふ、(四)伯淳常に詩を談ず、竝に一字の訓詁を下さず。時ありて只だ一兩字を(五)轉却し、(六)他を點掇して念過し、便ち人をして省悟せしむと。又曰く、(七)古人之に親炙するを貴ぶ所以なりと。

(一)詩の邶風雄雉の詞にして、夫の出征を思ふ婦人の情を詠めるなり　(二)其詞の末句、君子は夫をいふ尊稱也、百そ爾君子とは夫と同征の人々をいふ也　(三)思慕の情切にして而も其夫を思ふ情を同役の諸君子に掛けて其行をつゝしみ身を全うして歸らん事を希ふ、これ卽ち正に歸する也　(四)明道先生のあざな　(五)轉じかへて　(六)他は詩を指す、其詩をとりあげてそら讀みをして　(七)古人の賢師に親しみ近づきて感化せらるゝ事を貴ぶ譯は卽ちこゝにあると也

明道先生曰。學者不ㇾ可㆓以不ㇾ看ㇾ詩。看ㇾ詩

明道先生曰く、學者以て詩を看ずんばあるべからず。詩を看れば便ち人をして(一)一格の價を長さしむと。

是好。然若有レ得。終不二浹洽一。蓋吾道。非レ如下釋氏一見了。便從二空寂一去上。

興二於詩一者。吟二詠情性。涵二暢道德之中一。而歆二動之一。有二吾與レ點之氣象一。又云。興二於詩一。是興二起人善意。汪洋浩大一。皆是此意。

謝顯道云。明道先生善言レ詩。他又渾不二曾章解句釋一。

(一)水の物にしみわたる如く、萬理に通貫するを得じ　(二)佛教の學の只わづかに其道を見つくれば即ち一切を捨てゝ虛空寂滅の道に從ひ行くが如き類に非ず

「詩に興る(一)」とは、情性を吟詠し、道德の中に涵暢して、之を歆動するなり。「吾は點に與せん(二)」の氣象あるなり。

又云ふ、詩に興るとは、是れ人の善意の、汪洋浩大なるを興起する、皆是れ此意なり。

(一)論語の文句　(二)詩は人情の自然に出でゝ人を感動せしむること大なり、學者若し詩に於て其情性を吟詠し、道德をやしなひのばすときは、自然に感動興起の想あり、此れ即ち孔子が「吾は點に與せん」といへる如く、曾點が沂に浴し詠じて歸るの氣象なり

謝顯道云ふ、明道先生善く詩を言ふ。他又渾て曾て章ごとに解し句ごとに釋くをせず、但だ優游玩味、吟哦上下して、便ち人をして得る處あらしむ。「彼の日月を瞻て、悠悠として我れ思ふ。道の云に遠き、曷か云に能く來らん」(一)とは之を

讀二論語孟子一。而不レ知レ道。所謂雖レ多亦奚以爲。

論語孟子只剩讀著。便自意足。學者須二是玩味一。若以二語言一解著。意便不レ足。某始作二二書文字一。既而思レ之又似レ剩。只有二些先儒錯會處一。却待二與整理過一。

問。且將二語孟緊要處一看如何。伊川曰。固

論語・孟子を讀みて、而も道を知らずんば、所謂(一)多しと雖も亦奚を以てか爲んなり。

論語・孟子只だ剩(二)讀著すれば、便ち自ら意足らん。學者須らく是れ玩味すべし。若し語言を以て解著せば、意便ち足らざらん。某始め二書の文字(三)を作る。既にして之を思ふに又剩(四)れるに似たり。只だ些か先儒の錯會(五)する處あれば、却つて與(六)に整理し過ぐるを待つのみ。

(一) 前にも見ゆ、二書の文字を多くきはめたりとも、只章句訓詁の學にては何の效用もなしと也

(二) 幾度も熟讀すること。著は添へ字にて意なし　(三) 註釋なり　(四) 餘分の事にて無用なるに似たり　(五) あやまりて會得せる處　(六) 其爲めに誤をたゞしをさむる事は肝要也

問ふ、且つ語孟の緊要の處を將つて看ば如何。伊川曰く、固に是れ好し。然れども若し得ることありとも、終に浹洽(一)せざらん。蓋し吾が道は、釋氏(二)の一見し了りて、便ち空寂に從ひ去るが如きにあらず。

後。全無事者一。有下讀了後。其中得二一兩句一喜者上。有二讀了後知レ好レ之者一。有下讀了後。不レ知二手之舞レ之。足之蹈レ之者上。

學者當下以二論語孟子一爲上レ本。論語孟子既治。則六經可二不レ治而明一矣。讀レ書者。當レ觀下聖人所二以作一レ經之意。與三聖人所二以用一レ心。與中聖人所三以至二聖人一。而吾之所二以未一レ至者。所二以未一レ得者上。句句而求レ之。晝誦而味レ之。中夜而思レ之。平二其心一。易二其氣一。闕二其疑一。則聖人之意見矣。

を得て喜ぶ者あり。讀み了りて後に、之を好むことを知る者あり。讀み了りて後に、(二)手の之を舞ひ、足の之を蹈むことを知らざる者あり。

(一) 何の得る所もなき者あり (二) 深く心にさとりかぎりなく喜び樂むをいふ

學者當に論語・孟子を以て本と爲すべし。論語・孟子既に治むるときは、則ち六經治めずして明かなるべし。書を讀む者は、當に聖人經を作る所以の意と、聖人の心を用ふる所以と、聖人の聖人に至れる所以、而して吾の未だ至らざる所以の者、未だ得ざる所以の者とを觀るべし。句句にして之を求め、晝誦して之を味ひ、中夜にして之を思ひ、(一)其心を平かにし、其氣を易かにし、(二)其疑を闕くときは、則ち聖人の意見つべし。

(一) 心氣を平靜にして穿鑿に流れざるやうにす (二) 疑しき所をば強ひて通じようとせず其儘之を除けて置く

讀二論語一者。但將二諸弟子問處一。便作二己問一。將二聖人答處一。便作二今日耳聞一。自然有レ得。若能於二論孟中一。深求玩味。將來涵養成。甚生二氣質一。

凡看二語孟一。且須下熟讀玩味。將二聖人之言語一切上己。不レ可三只作二一場話說一。人只看二得此二書一切レ己。終レ身儘レ多也。

論語有二讀了

論語を讀む者、但だ諸弟子の問ふ處を將つて、便ち己が問となし、聖人の答ふる處を將つて、便ち今日の耳聞となさば、(一)自然に得ることあらん。若し能く論孟の中に於て、深く求めて玩味せば、將來涵養成りて、(二)甚だ氣質を生ぜん。

(一) 直接に我が耳に聞く學問　(二) 甚だよき氣質を生ぜんと也。「甚生」は「非常」の意と解し、「將來甚生の氣質を涵養し成さん」と訓ずるも可ならん

凡そ語孟を看んとせば、且つ須らく熟讀玩味し、聖人の言語を將つて己に切にすべし。只だ一場の話說となすべからず。人只だ此の二書を看得て己に切にせば、身を終ふるまで多かるべし。(一)

(一) 一生涯之を受用すとも盡きざるべし

論語、讀み了りて後に、(一)全く無事なる者あり。讀み了りて後に、其中の一兩句

要ㇾ知二其約一。多看而不ㇾ知二其約一。書肆耳。頤緣二少時讀ㇾ書貪一ㇾ多。如今多忘了。須下是將二聖人言語一玩味。入ㇾ心記著。然後力去行ㇾ之。自有ㇾ所ㇾ得。

に縁り、如今多く忘れ了れり。須らく是れ聖人の言語を將つて玩味し、心に入れて記著し、然る後に力めて之を行ひ去るべし。自ら得る所あらん。

(一)簡要の所　(二)徒らに多きを貪りて其要を知らざれば書を蓄ふる本屋の如きものぞ　(三)しつかりと記憶し

初學入ㇾ德之門無ㇾ如二大學一。其他莫ㇾ如二語孟一。

初學德に入るの門は、大學に如くものなし。其他は語孟に如くはなし。

(一)論語と孟子、又論孟とも記す

學者先須ㇾ讀二論孟一。窮二得論孟一。自有二要約處一。以ㇾ此觀二他經一。甚省ㇾ力。論孟如二丈尺權衡一相似。以ㇾ此去三量二度事物一。自然見二得長短輕重一。

學者先づ須らく論孟を讀むべし。語孟を窮め得れば、自ら要約の處あり。此を以て他の經を觀ば、甚だ力を省かん。論孟は丈尺權衡の如く相似たり。此を以て事物を量度し去らば、自然に長短輕重を見得せん。

(一)簡要にしてつゞまやかに大道の要領を得る所あり　(二)丈尺はものさし、權衡ははかり

如ㇾ讀二論語一。舊時未ㇾ讀。是這箇人。及二讀了後來一。又只是這箇人。便是不二曾讀一也。

凡看二文字一。如二七年一世百年之事一。皆當ㇾ思二其如何作爲一。乃有ㇾ益。

凡そ文字を看るに、七年、一世、百年の事の如き、皆當に其如何か作爲せしを思ふべし。乃ち益あらん。

㊀皆論語に出づ。「子曰く、善人民を敎ふること七年、亦以て戎に卽かしむべし」、「子曰く、如し王者あらば、必ず世にして後に仁ならん」、「子曰く、善人邦をさむること百年、亦以て殘をつくし殺を去るべし」といふ三節に出づ、世とは三十年をいふ　㊁其年期の間に如何やうに爲して斯る治績の舉りしかと考ふべし

凡解ㇾ經。不ㇾ同無ㇾ害。但緊要處。不ㇾ可ㇾ不ㇾ同爾。

凡そ經を解すること、同じからざるは害なし。但だ緊要の處、同じからずんばあるべからざるのみ。

㊀異說ありても差支なけれど緊要の時に異說ありては道を害すと也

焞初到。問ㇾ爲ㇾ學之方一。先生曰。公要ㇾ知ㇾ爲ㇾ學。須二是讀一ㇾ書。書不二必多看一。

焞初めて到りて學を爲すの方を問ふ。先生曰く、公、學を爲すことを知らんと要せば、須らく是れ書を讀むべし。書は必ずしも多く看ず、其約を知らんことを要せよ。多く看て其約を知らざれば、書肆のみ。頤、少時書を讀むに多きを貪りし

書。如下誦二詩三百一。授レ之以レ政不レ達。使二於四方一。不レ能二專對一。雖レ多亦奚以爲上。須下是未レ讀レ詩時。不レ達二於政一。不レ能二專對一。既讀レ詩後。便達二於政一。能專對中四方上。始是讀レ詩。人而不レ爲二周南召南一。其猶二正牆一面。須下是未レ讀レ詩時。如レ面レ牆。到二讀了後一。便不中面レ牆。方是有レ驗。大抵讀レ書。只此便是法。

れども達せず、四方に使して、專り對ふること能はずんば、多しと雖も亦奚を以てか爲さんといふが如き、須らく是れ未だ詩を讀まざる時こそ政に達せず、專り對ふること能はざれ、既に詩を讀める後には、便ち政に達し、能く專り四方に對ふべし。(二)始めて是れ詩を讀みたるなり。人にして(三)周南・召南を爲ばざれば、其れ猶ほ(四)正しく面に墻するがごとし。須らく是れ未だ詩を讀まざる時は、墻に面ふが如く、讀み了れる後に到りては、便ち墻に面はざるがごとくなるべし。方に是れ驗あるなり。大抵書を讀むこと、只だ此れ便ち是の法なり。論語を讀む如き、(五)舊時未だ讀まざるときは、是れ這箇の人、讀み了れる後來に及んでも、又只だ是れ這箇の人ならば、便ち是れ曾て讀まざるなり。

(一)此語論語に見ゆ　(二)斯くありて始めて詩を讀みたる者といふべし　(三)詩經の篇名。皆修身齊家を說けり。
(四)其至近の地につきながら一物も見る所なく一歩も進み行かるまじとの喩　(五)讀まざる前も讀みたる後も同じ
一個の人にて何等變りなしとせばこれ讀みても讀まざるに同じと也

終日乾乾。未三盡二得易一。據二此一句一。只做二得九三一使。若謂二乾乾是不ㇾ已。不ㇾ已又是道一。漸漸推去。自然是盡。只是理不ㇾ如ㇾ此。

㊀宋の人、姓は陳、名は瓘、忠甫と諡す　㊁隋の王通の著したる書の名、其中に此語あるを愛誦せりと也　㊂つとめてやまざるの義　㊃これ伊川に問ふ者、瑩中が文中子の語を愛したる意を述べいふ也　㊄以下の大意は凡そ經義を說くに、經の中の或一句によりて一經の全大意を盡くさんとするは不可なり、終日乾乾の一句の如きは易の乾の卦九三の爻辭なるが、之を乾の九三として見れば其意十分なるも、之を以て易の全意をあらはさんとするは不可なり、只だ乾乾はこれ已まざること、已まざることはこれ道なりと推すときは、一經の全意も亦盡く含まるべけれども、かくすることは經を見る本義にあらずとなり

子在二川上一曰。逝者如ㇾ斯夫。言二道之體如一ㇾ此。這裏須二是自見得一。張繹曰。此便是無窮。先生曰。固是道二無窮一。然怎生一箇無窮。便道二了得他一。

(一)子川の上に在つて曰く、逝く者は斯の如きかと。道の體此の如くなるを言ふなり。這裏須らく是れ自ら見得すべし。張繹曰く、此れ便ち是れ無窮と。(二)先生曰く、固に是れ無窮と道ふべし。然れども怎生一箇の無窮のみをもつて、便ち他を道ひ了り得んやと。

㊀孔子也、論語に出づ　㊁前節を承けて一箇の無窮につきて言ふ

今人不ㇾ會ㇾ讀

今の人書を讀むことを會せず。(一)詩三百を誦して、之に授くるに政を以てす

凡觀レ書。不レ可下以二相類一泥中其義上。不レ爾。則字字相梗。當レ觀二其文勢上下之意一。如二充實之謂一レ美。與二詩之美一不レ同。

問。瑩中嘗愛二文中子。或問レ學レ易。子曰。終日乾乾可也一。此語最盡。文王所二以聖一。亦只是箇不レ已。先生曰。凡說二經義一。如只管節節推上去。可レ知二是盡一。夫

凡そ書を觀るに、相類するを以て其義に泥むべからず。爾らざるときは、則ち字字相梗がる。當に其文勢上下の意を觀るべし。充實(一)するを美と謂ふが如き、詩の美と同じからず。

● 孟子に「充實する之を美と謂ふ」といへるは其德の内にみちたるをいふ也、詩に美人といふは概ね其容貌威儀の美しきにつきていふ事にて、其意同じからずと也

問ふ、瑩中(二)は嘗て文中子に、『或ひと易を學ばんことを問ふ、子曰く、終日乾乾(三)せば可なり』とあるを愛せりと。(四)此語最も盡せり。文王の聖なる所以も、亦只だ是れ箇の已まざるにあらんと。先生曰く、(五)凡そ經義を說くこと、如し只管に節節推し上げ去らば、是れ盡くることを知るべし。夫れ終日乾乾は、未だ易を盡し得ず。此一句に據れば只だ九三と做し得て使ふのみ。若し乾乾は是れ已まざること、已まざるは又是れ道なりと謂ひて、漸漸に推去らば、自然に是れ盡きん。只だ是れ理は此の如くならず。

如レ地。頤欲レ改レ之。曰。聖人之言。其遠如レ天。其近如レ地。

學者不レ泥二文義一者。又全背却遠去。理二會文義一者。又滯泥不レ通。如二子濯孺子爲レ將之事一。孟子只取二其不レ背レ師之意一。人須下就二上面一理中會事レ君之道如何上也。又如二萬章問二舜完レ廩浚レ井事一。孟子只答二他大意一。人須下要理中會浚レ井如何出得來。完レ廩又怎生下得來上。若レ此之學。徒費二心力一。

學者、文義に泥まざる者は、又全く背却して遠ざかり去る。文義を理會する者は、又滯泥して通ぜず。(一)子濯孺子が將たるの事の如き、孟子只だ其の師に背かざるの意を取る。人須らく上面に就て君に事ふるの道如何を理會すべし。又萬章が、(二)舜の廩を完め井を浚うせし事を問へる如き、孟子は只だ他の大意を答ふ。人須らく井を浚うして如何ぞ出で得來る、廩を完めて又怎生下り得來るてふことを理會するを要すべし。此の若きの學は、從らに心力を費すのみ。

(一) 孟子離婁下に出づ、孺子鄭國の將として衞を侵す、衞は之斯をして防がしむ、之斯は射術に於て孺子の孫弟子なり、鄭軍敗れて北ぐるとき孺子疾起つて弓を引かず、之斯殺すに忍びざるも今日は君に事ふるの身なればとて鏃を去りて四矢を射かけて引返せりとぞ　(二) 舜の父後妻と其子の象の爲に舜を廩に上さしめて火を放ち、又井を浚へしめて上より土を埋む、舜怨まず萬章此事を孟子に問へるなり

凡解二文字一。但易二其心一自見レ理。理只是人理。甚分明。如二一條平坦底道路一。詩曰。周道如レ砥。其直如レ矢。此之謂也。

或曰。聖人之言。恐不レ可下以二淺近一看中他上。曰。聖人之言。自有二近處一。自有二深遠處一。如二近處一。怎生強要下鑿教中深遠上得。揚子曰。聖人之言遠如レ天。賢人之言近

凡そ文字を解すること、(一)但だ其心を易にせば自ら理を見ん。理は只だ是れ人理にして、甚だ分明なり。一條の平坦底なる(二)道路の如し。詩に曰く、周道砥の如し。其直きこと矢の如しとは、此の謂ひなり。

(一)唯だ其心を平かにして觀よ必ず自ら其理を明かにせん　(二)底はそへ字にて意なし

或曰く、聖人の言、恐らくは淺近を以て他を看るべからずと。曰く、聖人の言、自ら近き處あり、自ら深遠なる處あり。(一)近き處の如き、怎生強ひて鑿つて深遠ならしめんと要するを得ん。(二)揚子曰く、聖人の言は遠くして天の如し、賢人の言は近くして地の如しと。(三)頤之を改めんと欲す、曰く、聖人の言は、其遠きこと天の如く、其近きこと地の如しと。

(一)聖人近き處を言ふにも拘らず強ひて穿鑿を加へて深遠ならしめん必要はなきぞとの意　(二)漢の揚雄、法言を著す　(三)伊川自ら名を稱す

不レ得處。始復尋思明辨。乃爲二善學一也。若二告子一。則到二說不レ得處一。遂已更不二復求一。

求めず。

伊川先生曰。凡看二文字一。先須レ曉二其文義一。然後可レ求二其意一。未レ有二文義不レ曉。而見レ意者一也。

伊川先生曰く、凡そ文字を看ば、先づ須らく其文義を曉るべく、然る後に其意を求むべし。未だ文義曉らずして、意を見る者はあらじ。

以下經書を讀むの心得

學者要二自得一。六經浩渺。乍來難二盡曉一。且見二得路徑一後。各自立二得一箇門庭一。歸而求レ之可矣。

學者は自得せんことを要す。(一)六經浩渺として、乍來に盡く曉り難し。(二)且つ路徑を見得て後、各自一箇の(三)門庭を立て得、歸つて之を求むれば可なり。

㈠ 易・書・詩・春秋・禮・樂の六經は、水の大いなるが如く、事理廣大にして、たやすく皆曉りつくすこと難しとなり　㈡ まづ以て其すぢみちを見　㈢ 讀解に關する規模綱領の義

博學二於文一者。只要レ得二習坎心亨一。蓋人經二歷險阻艱難一。然後其心亨通。

義理有レ疑。則濯二去舊見一。以來二新意一。心中有レ所レ開。即便劄記。不レ思則還塞レ之矣。更須レ得二朋友之助一。一日間。意思差別。須二日日如レ此講論一。久則自覺レ進也。

凡致レ思。到二說

博く文を學ぶには、只だ習坎して心亨らんことを得るを要す。蓋し人は險阻艱難を經歷して、然る後に其心亨通す。

(一)習坎心亨とは易の坎卦の辭なり、習はかさなること、坎は險難なり、人は險難をかされて始めて心通るとの謂なり

義理に疑あるときは、則ち舊見を濯ひ去りて、以て新意を來せ。心中開くる所あらば、卽便劄記せよ。思はざるときは則ち還之を塞ぐ。更に須らく朋友の助を得べし。一日の間に、意思差や別ならん。須らく日日此の如く講論すべし。久しうするときは則ち自ら進むことを覺えん。

(一)疑義通ずるあらば卽刻劄記して忘れざれ、未だ得ざるものは猶進んで釋かんことを努めよ、之を思はざるときは記憶の道塞がりて增益する所なし (二)劄しるす意、悉く之をしるせと也

凡そ思を致して、說き得ざる處に到りて、始めて復た審思明辨するをば、乃ち善く學ぶとなす。告子の若きは、則ち說き得ざる處に到れば、遂に已めて更に復

之言三性與二天道一。不レ可二得而聞一。既言二夫子之言一。則是居常語レ之矣。聖門學者。以レ仁爲二己任一。不下以二苟知一爲上レ得。必以二了悟一爲レ聞。因有二是說一。

義理之學。亦須二深沈方有一レ造。非二淺易輕浮之可一レ得也。

學不レ能三推二究事理一。只是心麤。至レ如二顏子未レ至二於聖人處一。猶是心麤。

ふときは、則ち是れ居常之を語るなり。聖門の學者は、仁を以て己の任と爲す。（二）苟も知れるを以て得たりと爲さず、必ず了悟を以て聞けりと爲す。因つて是の說あり。

（一）端木賜字子貢、孔子の門人なり　（二）かりそめに只師說を聞き知れるを以て之を得たりとなす事なく、必ず悟り了つて以て聞けりと云爲す

義理の學は、亦須らく（一）深沈にして方に造ることあるべし。淺易輕浮の得べきにあらず。

（一）深き工夫を積みて。「深沈」一に「深玩」に作る

學の事理を推究すること能はざるは、只だ是れ心（一）麤ければなり。顏子の未だ聖人の處に至らざる如きに至りても、猶ほ是れ心麤きなり。

（一）精しからざる貌、顏子猶は一毫の精しからざるありて或は一毫の間斷ありて聖人の處に至らず

性知レ天。學至ニ於知ヒ天。則物所ニ從出一。當ニ源源自見一。知レ所ニ從出一。則物之常レ有常レ無。莫レ不ニ心論一。亦不ニ待レ語而後知一。諸公所レ論。但守レ之不レ失。不レ爲下異端所レ劫。進進不レ已。則物怪不レ須レ辨。異端不ニ必攻一。不レ逾ニ朞年一。吾道勝矣。若欲下委ニ之無窮一。付レ之以レ不レ可レ知。則學爲レ疑撓。智爲レ物昏。交來無レ閒。卒無ニ以自存一。而溺ニ於怪妄一必矣。

心に諭らずといふことなし。亦(三)語るを待つて後に知るならず。(四)諸公の論ずる所、但だ之を守つて失はず、異端の劫む所とならず、進進として已まずんば、則ち物怪辨ずるを須たず、異端必ずしも攻めざるも、(五)朞年を踰えずして、吾が道勝たん。若し之を(六)無窮に委ね、之を付するに知るべからざるを以てせんと欲せば、則ち學は疑の爲に撓み、智は物の爲に昏み、交ゝ來りて閒なく、卒に以て(七)自ら存することを無くして、怪妄に溺れんこと必せり。

(一)物怪はたゞならぬ物、あやしき物、神變は鬼神の人をたぶらかす類 (二)水のわいて絶えざる貌 (三)人の語るを待たずして先づ知る (四)諸君と云ふ意 (五)一年、とし一めぐり (六)世の理の窮りなく測り知るべからざる所に委付してそのまゝに過ぎんとすれば、解けやらぬ疑のために修めたる學は撓折し、あらぬ迷ひに智の鏡打曇りて、疑念邪念とかはるがはる間なく隙なく襲ひ來りて (七)自ら守る所を失ひて怪妄なる淵の底に溺れんとなり

子貢謂。夫子

(一)子貢謂ふ、夫子の性と天道とを言ふは、得て聞くべからず。既に夫子の言と言

思曰レ睿。睿作レ聖。致レ思如レ掘レ井。初有二渾水一。久後稍引二動得清者一出來。人思慮始皆溷濁。久自明快。

問。如何是近思。曰。以レ類而推。

學者先要レ會レ疑。

横渠先生答二范巽之一曰。所レ訪物怪神姦。此非レ難レ語。顧語未二必信一耳。孟子所レ論知レ

思ふに睿と曰ふ。睿は聖を作す。思を致すは井を掘るが如し。初め渾水あり。久しうして後稍清める者を引動し得て出で來る。人の思慮も始め皆溷濁し、久しうして自ら明快なり。

(一) 九四頁の註に出づ　(二) にごり水

問ふ、如何にして是れ近く思ふかと。曰く、類を以て推す。

(一) 論語子夏の言に「博く學んで志を篤くし切に問うて近く思ふ、仁其の中に在り」

學者は先づ疑を會せんことを要す。

(一) 會得の前には疑あり

横渠先生范巽之に答へて曰く、訪ふ所の物怪神姦は、此れ語り難きにあらず。顧ふに語るも未だ必ずしも信ぜざらんのみ。孟子の論ずる所、性を知り天を知る、學天を知るに至るときは、則ち物の從つて出づる所、當に源源として自ら見るべし。從つて出づる所を知るときは、則ち物の當に有るべきと當に無かるべきと、

問。觀レ物察レ己。還因レ見レ物。反求ニ諸身一否。曰。不ニ必如レ此說一。物我一理。纔明レ彼即曉レ此。此合ニ內外一之道也。又問。致レ知先求ニ之四端一如何。曰。求ニ之情性一。固是切ニ於身一。然一草一木皆有レ理。須ニ是察一。又曰。自ニ一身之中一。以至ニ萬物之理一。但理會得多相次。自然豁然有ニ覺處一。

問ふ、物を觀て己を察すること、(一)還つて物を見るに因つて、反つて諸を身に求むるや否やと。曰く、必ずしも此の如くに說かず。物我は一理なり。纔に(二)彼に明かなれば即ち此を曉る。此れ內外を合するの道なり。又問ふ、知を致すこと、先づ之を(三)四端に求めば如何と。曰く、之を情性に求むること、固に是れ身に切なり。然れども一草一木皆理あり。須らく是れ察すべし。

又曰く、一身の中より、以て萬物の理に至るまで、但だ理會し得ること多くして相次げば、自然に(四)豁然として覺る處あり。

(一) 大學の格物致知をば、物の理を見て己が知を察すといふ義に取る說は、己は本にて物は末なるに、其末なる物の理を見て、之を本なる我身に反り求めて其知を致すにやと也 (二) 彼は物を指し此は自己を指す (三) 孟子に出づ。惻隱は仁の端、羞惡は義の端、辭讓は禮の端、是非は智の端なり。之を四端といふ (四) おしひらけて明かなる貌

貫通處一。又曰。所レ務二於窮理一者。非レ道三盡窮二了天下萬物之理一。又不レ道下是窮二得一理一便到上。只要二積累多後一。自然見去。

思曰レ睿。思慮久後。睿自然生。若於二一事上一思未レ得。且別換二一事一思レ之。不レ可三專守二著這一事一。蓋人之知識。於二這裏一蔽著。雖二強思一亦不レ通也。

問。人有レ志二於學一。然知識蔽固。力量不レ至。則如二之何一。曰。只是致レ知。若智識明。則力量自進。

（一）思ふに睿と曰ふ。思慮久しうして後に、睿自然に生ず。若し一事上に於て思うて未だ得ざれば、且く別に一事を換へて之を思へ。專ら這の一事を守著すべからず。蓋し人の知識たる、（二）這の裏に於て蔽著すれば、強ひて思ふと雖も亦通ぜず。

㊀ 此語一句書の洪範に出づ。睿はあきらかと訓ず、思ふ所の通ぜざるなきをいふ、思慮の明かなる也　㊁ 知識も其事の内に於て蔽はれて暗き事あり其時には

問ふ、人、學に志あり。然れども知識蔽固して、（一）力量至らざるときは、則ち之を如何と。曰く、只だ是れ知を致せ。若し智識明かなるときは、則ち力量自ら進まん。

㊀ おほはれ固まりて通ぜず

亦多端。或讀書講明義理。或論古今人物別其是非。或應接事物而處其當。皆窮理也。或問。格物須物物格之。還只格一物而萬理皆知。曰。怎得便會貫通。若只格一物。便通衆理。雖顏子亦不敢如此道。須是今日格一件。明日又格一件。積習既多。然後脱然自有

は事物に應接して其當を處る。(一)皆理を窮むるなり。或ひと問ふ、物に格ると、須らく物物につき之に格るべきか、還只だ一物に格つて萬理皆知るかと。曰く、怎ぞ便ち貫通を會することを得ん。若し只だ一物に格つて、便ち衆理に通ぜんこと、(二)(三)顏子と雖も亦敢て此の如く道はざらん。須らく是れ今日一件に格り、明日又一件に格るべし。(四)積習既に多くして、然る後に脱然として自ら貫通する處あり。

又曰く、窮理に務むる所の者は、盡く天下萬物の理を窮め了ると道ふにあらず。又是れ一理を窮め得て便ち到るとも道はず。只だ積累(五)多くして後、自然に見去らん(六)ことを要す。

(一) 當否をはかりて之を行ふ (二) 一物に格りて卽ち萬理に貫通する事を會得するは得がたき事ぞと也 (三) 顏子の如き大賢にてもさうは云ひ難き事也 (四) 習得をつみたるもの (五) つもりかさなりたるもの (六) 見得て貫通し行くを要す

守㆑之。非㆓固有㆒之也。未㆑致㆑知。便欲㆑誠㆑意。是躐㆑等也。勉強行者。安能持久。除非燭㆑理明。自然樂㆑循㆑理。性本善。循㆑理而行。是順理事。本亦不㆑難。但爲㆓人不㆑知旋安排著㆒。便道㆑難也。知有㆓多少般數㆒。煞有㆓深淺㆒。學者須㆓是眞知㆒。纔知㆓得是㆒。便泰然行將去也。某年二十時。解㆓釋經義㆒。與㆑今無㆑異。然思今日覺得意味。與㆓少時㆒自別。

知に(一〇)多少般の數あり。煞だ深淺あり。學者須らく是れ眞に知るべし。纔に是を知り得れば、便ち泰然として行ひ將て(一一)去る。某(一二)年二十の時、經義を解釋すること、今と異ることなし。然れども思ふ、今日覺り得たる意味と、少時のものと自ら別なることを。

(一) 知ることを先となすべし苟も知らざればいかに皮相に於てよくするも内容に於て缺くる所あつて何の益なし (二) うかゞひ見て (三) たちゐふるまひ (四) 子は汝と云ふ意 (五) 篤く信じて固く守るものにて固より知ることを致せるものにあらず (六) 忠信たらんとするなり (七) 順序を踏まざるもの也 (八) 知ること至らずして勉強して忠信を行ふ者は久しからず (九) 私意を以て强ひて爲しての意、著はをへ字にて意なし (一〇) 多き少き様々の (一一) 行ひゆきてなやむ事なし (一二) 伊川自らのこと、前に頤と云へるに同じ

凡一物上有㆓一理㆒。須㆔是窮㆓致其理㆒。窮㆑理

凡そ一物上に一理あり。須らく是れ其理を窮致すべし　理を窮むること亦多端なり。或は書を讀みて義理を講明し、或は古今の人物を論じて其是非を別ち、或

之須三熟玩二味聖人之氣象一。不レ可下只於二名上一理會上。如レ此。只是講二論文字一。

に名義や文義を講論することは眞の理會にあらず

問。忠信進レ德之事。固可二勉强一。然致レ知甚難。伊川先生曰。學者固當二勉强一。然須二是知了方行得一。若不レ知。只是觀二却堯一學二他行事一。無二堯許多聰明睿知一。怎生得レ如二他動容周旋中一レ禮。如二子所一レ言。是篤信而固

問ふ、忠信德に進むの事は、固に勉強すべし。然れども知を致すことは甚だ難しと。伊川先生曰く、學者固に當に勉強すべし。然れども須らく是れ知り了り(一)て方に行ひ得べし。若し知らずんば、只だ是れ堯を觀却(二)して他の行事を學ぶとも、堯の許多の聰明睿知なくば、怎生ぞ他の動容周旋(三)禮に中るが如くなることを得ん。(四)子が言ふ所の如きは、(五)是れ篤く信じて固く之を守る。固より之あるにあらざるなり。未だ知を致さずして、便ち意(六)を誠にせんと欲するは、是れ等(七)を踰ゆるなり。勉強して行ふ者は、安ぞ能く持久せん。除非理を燭すこと明かなれば、自然に理(八)に循ふことを樂む。性は本善なり。理に循つて行ふは、是れ順理の事にして、本亦難からず。但だ人知らずして旋(九)安排著するが爲に、便ち難しと道ふ。

實。疾病之來。聖賢所不免。然未聞自古聖賢因學而致心疾者。

今日雜信鬼怪異說者。只是不先燭理。若於事上。一一理會。則有甚盡期。須只於學上理會。

學原於思。

所謂日月至焉。與久而不息者。所見規模雖略相似。其意味氣象迥別。須心潛默識。玩索久之。庶幾自得。學者不學聖人則已。欲學

今日鬼怪異說を雜信する者は、只だ是れ先づ理を燭さず。若し事上(一)に於て、一一理會せば、則ち甚の盡くる期あらん。須らく只だ學上(二)に於て理會すべし。

(一) 怪異の事實の上に於て一々之を理會して其理を明かにせんとせば際限なきことなり　(二) 學問上に於て理を究めて其根柢を理會すべし

學は思ふに原く。

所謂日に月に至る(一)と、久しうして息まざる者とは、見る所の規模略相似たりと雖も、其意味氣象迥に別なり。須らく心潛に默識すべし(二)。玩索(三)すると久しうせば、庶幾はくは自得せん。學者、聖人を學ばずんば則ち已む(四)、之を學ばんと欲せば、須らく熟ゝ聖人の氣象を玩味すべし。只だ名の上に於てのみ理會すべから(五)ず。此の如きは、只だ是れ文字を講論するなり。

(一) 論語に出づ、孔子の諸弟子の仁の境界に至ること、或は日に一たび至り、或は月に一たび至る、只顏子は三月仁に違はず、卽ち久しうして息まざる者也　(二) 首肯と同意　(三) 玩味索求の意　(四) それまでの話也　(五) 徒ら

至此。故意騷偏。而言多窒。不出入時有之。更願完養思慮。涵泳義理。他日自當條暢。

の照す所の者は目の視る所の如し。纖微盡く之を識る、考察して至る者は、物を揣料して髣髴を約見するが如きのみ、能く差ふこと無からんや」(二) 中道にはづれて少しく出入する所 (三) 涵はひたす、泳はおよぐ。心を義理にひたし入るゝことなり (四) ふさがりたる所すぢ分れ、とゞこほりたる所のびて、自然に理に通達すべし

欲知得與不得。於心氣上驗之。思慮有得。中心悅豫。沛然有裕者。實得也。思慮有得。心氣勞耗者。實未得也。强揣度耳。嘗有人言。比因學道。思慮心虛。曰。人之血氣。固有虛

得ると得ざるとを知らんと欲せば、心氣上に於て之を驗みよ。思慮得ることありて、中心悅豫し、(一)沛然として(二)裕なることある者は、實に得たるなり。思慮得ることあれども、心氣勞耗(三)する者は、實に未だ得ざるなり。強ひて揣度(四)するのみ。嘗て人あり言ふ、比道を學ぶに因り、思慮して心虛(五)すと。曰く、(六)人の血氣、固に虛實ありて、疾病の來ること、聖賢も免れざる所なり。然れども未だ聞かず、古より聖賢の、學に因つて心疾を致せる者あるを。

(一) よろこぶ (二) 大雨にうるほふ如く (三) つかれ衰ふる (四) おしはかる (五) 心氣つかれ衰へたりと (六) 血氣虛なるときは疾病來りて冒すこと聖賢と雖も免れず

門人曰。孔孟之門。豈皆賢哲。固多衆人。以衆人觀聖賢。弗識者多矣。惟其不敢信己。而信其師。是故求而後得。今諸君於頤言。纔不合。則置不復思。所以終異也。不可便放下。更且思之。致知之方也。

衆人を以て聖賢を觀ば、識らざる者多からん。惟だ其れ敢て己を信ぜずして、其師を信ず。是の故に求めて後に得。今諸君頤(二)が言に於て、纔(三)に合はざるときは、則ち置いて復思はず。終に異なる所以なり。便ち放下(四)すべからず。更に且つ之を思へ。知を致すの方なりと。

(一) 平凡の人　(二) 伊川の名。自ら稱するなり　(三) 少しにても意の投合せざるときは捨置きて再び其言を思ふことをせずつひに相隔りて異なるものなり　(四) なげやりにする勿れ

伊川答橫渠先生曰。所論大槩有苦心極力之象。而無寛裕溫厚之氣。非明睿所照。而考索

伊川橫渠先生に答へて曰く、論ずる所大槩心を苦め力を極むるの象ありて、寛裕溫厚の氣なし。(一)明睿の照す所にあらずして、考索して此に至る。故に意屢〻偏して、言多く窒がり、小出入(二)、時に之あり。更に願はくは思慮を完養し、義理に涵泳(三)せよ。他日自ら當に條暢(四)すべしと。

(一) 智の明かに睿(サト)きが照し見る所に非ずして、思慮を以て考へもとめてこゝに至れりと也。本註に曰く、「明

卷之三

致知類　凡七十八條

伊川先生答二朱長文一書曰。心通二乎道一。然後能辨二是非一。如下持二權衡一以較中輕重上。孟子所謂知レ言是也。心不レ通二於道一。而較二古人之是非一。猶下不レ持二權衡一。而酌中輕重上竭二其目力一。勞二其心智一。雖レ使二時中一。亦古人所謂億則屢中。君子不レ貴也。

伊川先生朱長文に答ふる書に曰く、心道に通(一)じて、然して後能く是非を辨ずるは、權衡(二)を持つて以て輕重を較るが如し。孟子の所謂言を知る(三)とは是れなり。心道に通ぜずして、古人の是非を較るは、猶は權衡を持たずして、輕重を酌るがごとし。其目力を竭し、其心智を勞して、時に中らしむと雖も、亦古人の所謂億(四)れば則ち屢〻中るといふものにて、君子は貴ばず。

㊀ さとる義　㊁ はかり　㊂ 天下の言其理を究めて其是非の然る所以を識らざることなきを云ふ　㊃ 論語に出づ、孔子が子貢の智を評したる語也

伊川先生答二

伊川先生門人に答へて曰く、孔孟の門、豈に皆賢哲ならんや。固(一)に衆人多し。

耳目役二於外一。攬二外事一者。其實是自隳。不二肯自治一。只言二短長一。不レ能レ反レ躬者也。

學者大不レ宜二志小氣輕一。志小則易レ足。易レ足則無二由進一。氣輕則以レ未レ知爲二已知一。未レ學爲二已學一。

耳目外に役せられて、(一)外事を攬る者は、其れ實に是れ自ら墮るなり。肯て自ら治めずして、只だ(二)短長を言ふは、躬に反ること能はざるものなり。

(一) 自己に關係なき他の事まで自らひきとりて關與する者は、自ら己の德をやぶる者也　(二) 人の才の長短を評する者は

學者は大に宜しく志小に氣輕かるべからず。志小なれば則ち足り易し。足り易ければ則ち由つて進むなし。氣輕きときは則ち未だ知らざるを以て已に知れりと爲し、未だ學ばずして已に學びたりと爲す。

(一) 學者の戒

吾誠。顧レ所レ患。日力不レ足而未レ果二他爲一也。學未レ至。而好レ語レ變者。必知二終有一レ患。蓋變不レ可二輕議一。若驟然語レ變。則知二操レ術已不一レ正。

ぐが如くきりさりて　㊄ 新說を作すどころが、寧ろ爲すべきわざの爲しおほせざらんを患ふべしと也

學未だ至らずして、變を語ることを好む者は、必ず終に患あらんことを知る。蓋し變は輕々しく議すべからず。若し驟然㊀として變を語るときは、則ち術㊁を操ることの已に正しからざるを知る。

㊀ にはかにするさま　㊁ 其操る所の學術の

凡事蔽蓋不レ見レ底。只是不レ求レ益。有レ人不下肯言二其道義所レ得所一レ至。不レ得レ見レ底。又非下於二吾言一無上レ所レ不レ說。

凡そ事蔽蓋㊀して見さゞる底㊁は、只だ是れ益を求めざるなり。人あり、肯て其道義の得る所至る所を言はずして、見ることを得ざる底は、又吾が言㊂に於て說ばずといふ所なきにあらず。

㊀ その事につきて我が心事をおほひかくして人に示しあらはさゞるは、他の批評訓戒を受け容れざらんとするものなれば、畢竟自己の爲めに益を求めざる也　㊁ 底はそへ字にて意なし　㊂ 孔子が顏子の默々として其言を聞き居るを評して「吾が言に於て悅ばずといふことなし」といへる類には非ずと也

以二功業一爲レ意者。於レ學便相害。既有レ意。必穿鑿創意。作二起事端一也。德未レ成。而先以二功業一爲レ事。是代二大匠一斲。希レ不レ傷レ手也。

既に意あれば、必ず穿鑿創意(一)して、事端を作し起す。德未だ成らずして、先づ功業を以て事と爲すは、是れ大匠(二)に代つて斲るなり。手を傷けざること希なり。

(一) 技藝の事をはりうがち、新しき事をたくみ出して、道にかなはぬ事の端を起し出す　(二) 大匠は大工也、大工まで至らぬ者が大工の眞似をすれば得て怪我をするとの喩

竊嘗病。孔孟既沒。諸儒囂然。不レ知二反レ約窮一レ源。勇二於苟作一。持二不逮之資一。而急レ知二後世一。明者一覽。如レ見二肺肝一然。多見二其不一レ知レ量也。方且創二艾其弊一。默二養

竊に嘗て病ふ、孔孟既に沒し、諸儒囂然として、約に反り(一)源を窮むることを知らず、苟作に勇み、不逮の資を持して、後世に知られんことを急にす。明者一たび覽ば、(二)肺肝を見るが如く然らん。多に其の(三)量を知らざるを見る也。方に且つ其弊を創艾(四)して、吾が誠を默養せば、顧ふに患ふる所は、日の力足らずして未だ他(五)の爲すことを果さゞることならん。

(一) 博きより約まやかなるに反り、末より源を窮めて、己の爲めの實學を爲す事を知らずして、皆みだりに新說を立つるに勇み　(二) 其心の底の底までも直に見拔くべし　(三) 其人が自ら自己の量を知らざることを　(四) 草をな

有レ疑。必有ニ不レ行處一。是疑也。

心大則百物皆通。心小則百物皆病。

人雖レ有下功不上レ及ニ於學一。心亦不レ宜レ忘。心苟不レ忘、則雖レ接ニ人事一。即是實行。莫レ非レ道也。心若忘レ之。則終レ身由レ之。只是俗事。

合ニ內外一平ニ物我一。此見ニ道之大端一。

既學而先有下

なり。

(一)眞實に工夫を廻らし之を試みざるによる

心大なれば則ち百物皆通じ、心小なれば則ち百物皆病む(一)。

(一)滯り通ぜずして我を病ましむ

人功の學に及ばざることありと雖も、心亦忘るべからず。心苟も忘れざれば、則ち人事(一)に接すと雖も、即ち是れ實行(二)にして、道にあらずといふことなし。心若し之を忘れば、則ち身を終ふるまで之によるとも、只だ是れ俗事のみ。

(一)學問をしても妨ありて其功の及ばざる事ありとも　(二)己の爲めにする眞實の行にして

內外(一)を合せ物我を平かにす。此れ道(二)の大端を見るなり。

(一)內に思ふ所と外に行ふ所とを一致させ、自他をへだてずして等しく道のまゝに處置す　(二)道の精微をきはめしにはあらねど、其大きなる端を見たる謂也

既に學びて、先づ功業を以て意とすることある者は、學に於て便ち相害ふ。

多聞不レ足三以
盡二天下之故一。
苟以二多聞一而
待二天下之變一。
則道足四以酬三
其所二嘗知一。若
劫二之不測一。則
遂窮矣。
爲レ學大益。在四
自求三變二化氣
質一。不レ爾皆爲レ
人之弊。卒無レ
所二發明一。不レ得レ
見二聖人之奧一。
文要二密察一。心
要二洪放一。
不レ知レ疑者。只
是不二便實作一。
既實作。則須レ

多聞は以て天下の故を盡すに足らず。苟も多聞を以て天下の變を待つときは、則ち道は以て其の嘗て知れる所に酬ふるに足るのみ。若し之を不測に劫すときは、則ち遂に窮せん。

㊀ 其道は只自分の知りたる筋のみに應ずべくして未知の變に應ずるに足らず　㊁ 測り知る範圍の外のこと

學を爲すの大益は、自ら氣質を變化することを求むるにあり。爾らざれば皆人の爲にする弊ありて、卒に發明する所なく、聖人の奧を見ることを得ず。

㊀ 自ら氣質を變化するを求むるは自己の爲めにする實學也、然らざるは皆人の爲めにして功名を求むる類にて何等發明する所なし

文は密察ならんことを要し、心は洪放ならんことを要す。

㊀ 心の大にしておしひらくをいふ、狹滯の反對

疑ふことを知らざる者は、只だ是れ便ち實に作さゞればなり。既に實に作すときは、則ち須らく疑ふことあるべし。必ず行はれざる處あらば、是れ疑

一副當世習一。便自然脫洒也。又學レ禮。則可二以守得定一。

須二放心寬快一。公平以求レ之。乃可レ見レ道。況德性自廣大。易曰。窮レ神知レ化。德之盛也。豈淺心可レ得。

須らく放心寬快(一)、公平にして以て之を求むべし、乃ち道を見るべし。況や德性自ら廣大なるをや。易に曰く、神を窮め化を知るは、德の盛なるなりと。豈に淺心(二)にして得べけんや。

(一)心をおしひらきてゆるやかに快くし　(二)あさはかな心

人多以二老成一。則不三肯下問一。故終レ身不レ知。又爲下人以二道義先覺一處上レ之。不レ可三復謂レ有レ所レ不レ知。故亦不三肯下問一。從レ不三肯下問一。遂生二百端一。欺二妄人我一。寧終レ身不レ知。

人多く老成(一)を以て、則ち肯て下問せず。故に身を終ふるまで知らず。又人道義(二)の先覺を以て之に處するが爲に、復知らざる所ありと謂ふべからず。故に亦肯て下問せず。肯て問はざるより、遂に百端(三)を生じて、人我を欺妄す。寧ろ身を終ふるまで知らず。

(一)老大家ぶる(不遜なる意)　(二)自分自ら先生と褒め任ずる故に知らざる所ありとは謂ひ得ず　(三)さまざまの誠ならざる端生じ來りて人をも我身自身をも欺きて結局生涯知らざる者に成了る

讀レ書求二義理一。編レ書須下理中會有も所二歸著一。勿二徒寫過一。又多識二前言往行一。此問學上益也。勿レ使レ有二俄頃閑度一。逐レ日似レ此三年。庶幾有レ進。

然寫して通るのみにては不可也

爲二天地一立レ心。爲二生民一立レ道。爲二去聖一繼二絶學一。爲二萬世一開二太平一。載所三以使二學者先學一レ禮者。只爲三學レ禮則便除二去了世俗一副當習熟纏繞一。譬二之延蔓之物一。解二纏繞一即上去。苟能除二去了

天地の爲に心を立て、生民の爲に道を立て、去聖(一)の爲に絶學を繼ぎ、萬世の爲に太平を開く。

(一)心を公に用ふべく只一身の私に心を立て用ふる勿れと也 (二)世を去りし聖人の爲に絶えたる學をつぐと也

載(一)が學者をして先づ禮を學ばしむる所以は、只だ禮を學ぶときは、則ち便ち世(二)俗一副當の習熟纏繞を除去し了ふるが爲なり。之を延蔓(三)の物に譬ふ。纏繞を解けば即ち上り去る(四)。苟も能く一副當の世習を除去し了らば、便ち自然に脫洒(五)せん。又禮を學ぶときは、則ち以て守り得て定まる(六)べし。

(一)張横渠の名、自稱の語也 (二)副當は俗語、つき添へるものをいふ。學者先づ禮を學ぶときは、則ち習俗のわづらひを除去し得ればなりと也 (三)つたかづらの類をいふ (四)もとの木の幹が上り行く (五)さつぱりとぬけ去るべし (六)安定にして物に動かされざらん

執レ之乃立。擴二充之一則大。易視レ之則小。在二人能弘上レ之而已。

今且只將下尊二德性一而道中問學上爲レ心。日自求。於二問學者一有レ所レ背否。於二德性一有レ所レ懈否。此義亦是博文約禮。下學上達。以レ此警策一年。安得レ不レ長。每日須レ求下多少爲レ益二知所レ亡。改得少中不善上。此德性上之益。

大なり。易く(二)之を視れば則ち小なり。人能く之を弘むるにあるのみ。

(一)人格の獨立を得べし　(二)之を輕視すれば

今且つ只だ德性を尊びて問學に道る(一)を將つて心と爲し、日に自ら求めよ。問學する者に於て背く所ありや否や、德性に於て懈る所ありや否やを。此の義亦是れ博文約禮(二)、下學上達なり。此を以て警策(三)すること一年ならば、安ぞ長ぜざるを得ん。每日須らく多少亡き所を益知することを爲し、改め得て不善を少くせんことを求むべし。此れ德性上の益なり。書を讀みては義理を求めよ。書を編みては須らく歸著する所あらんことを理會すべし。徒に寫過することなかれ。又多く前言往行を識れ。此れ問學上の益なり。俄頃も閑(四)に度ることあらしむるなかれ。日を逐ひて此のごとくすること三年ならば、庶幾はくは進むことあらん。

(一)我が進むべき道として之に由る意　(二)論語の文　(三)いましめむちうつこと、自らはげますをいふ　(四)漫

思多之致レ疑。既知レ所レ立。惡ニ講治之不レ精。講治之思。莫レ非ニ術內一。雖レ勤而何厭。所三以急ニ於可レ欲者。求下立ニ吾心於不疑之地一。然後若レ決ニ江河一。以利中吾往上。遂ニ此志一。務時敏。厥修乃來。故雖ニ仲尼之才之美一。然且敏以求レ之。今持ニ不逮之資一。而欲三徐徐以聽ニ其自適一。非レ所レ聞也。

つる所を知れば、講治の精からざることを惡む。(二)講治の思は、術の內にあらずといふことなし、(三)勤むと雖も何ぞ厭はん。欲すべきに急なる所以は、(四)吾が心を不疑の地に立てゝ、然して後に江河を決するが若くにして、(五)以て吾が往くを利くせんことを求むるなり。此志を遂にし、務めて時に敏くすれば、(六)厥の修むること乃ち來る。(七)故に仲尼の才の美と雖も、然も且つ敏くして以て之を求めたり。今不逮(八)の資を持して、徐徐(九)として以て其自適に聽せんと欲するは、聞く所にあらざる也。(一〇)

(一) 學ぶ者心を善道に確立する事を知らざる間は、寧ろ心を專一にすべし、思ふ所多くしてその爲めに懷疑に陷るは最も忌むべき事也 (二) 講明修治精細を極むべし (三) 皆學術の內なれば (四) 學者の善に急なる所以は。孟子に「欲す可き之を善と謂ふ」 (五) 其進み往く勢の盛にして止むべからざるに喩ふ (六) 我が心に存する所を道理になびき順へ (七) 我が修むる道流れ來りて我手に入る (八) 劣りたるうまれつき (九) ぐづ〱して (一〇) 自らの分に甘んじ其心のゆくまゝにまかせて、道に順ひ勉めんとせざるが如きは、學問の道として我嘗て聞かざる所也

明レ善爲レ本。固

善を明かにするを本と爲す。固く之を執れば乃ち立つ。(一)之を擴充すれば則ち

乃進而不レ固矣。忠信進レ德。惟尙レ友而急レ賢。欲レ勝レ己者親一。無レ如ニ改レ過之不一レ吝。

急にせよ。己に勝れる者の親まんを欲せば、過を改むることの吝ならざるに如くはなし。

(一)固滯するとなし　(二)賢者に近づくを以て急とすべし

横渠先生謂ニ范巽之一曰。吾輩不レ及ニ古人一。病源何在。巽之請問。先生曰。此非レ難レ悟。設ニ此語一者。蓋欲ニ學者存レ意之不一レ忘。庶游レ心浸熟。有ニ一日脱然如ニ大寐之得一レ醒耳。

横渠先生(一)范巽之に謂つて曰く、吾輩の古人に及ばざるは、病源何にかあると。巽之請ひ問ふ。先生曰く、此れ悟り難きにあらず。此語を設くるものは、蓋し學者の意を存して忘れざらんことを欲す。庶くは(二)心を遊ばしめて浸熟せよ、一日脱然として(三)大寐の醒むることを得るが如きものあらんのみ。

(一)范育字巽之、横渠の門人　(二)心を其理中に游ばせ、其心道理と相ひたり合ひ相ねれ熟するに至らば　(三)はつきりと心に悟る所あらんと也

未レ知レ立レ心。惡ニ

(一)未だ心を立つることを知らざれば、思多きの疑を致さんことを惡む。既に立

四體。謂二己當然一。自誣也。欲二他人己從一。誣レ人也。或者謂下出二於心一者上。歸レ咎爲二己戲一。失二於思一者。自誣爲二己誠一。不レ知下戒二其出レ汝者一。歸中咎其不レ出レ汝者上。長レ傲且遂レ非。不智孰甚レ焉。橫渠學堂雙牖。右書二訂頑。左書二砭愚一。伊川曰。是起二爭端一。改二訂頑一曰二西銘一。砭愚曰二東銘一。

出づる者を戒め、咎を其の汝に出でざる者に歸するを知らず。傲を長じ且つ非を遂ぐ。不智孰か焉より(八)甚しからんと。橫渠學堂の雙牖(九)、右に訂頑を書し、左に砭愚を書す。伊川曰く、是れ爭端(一〇)を起さんとて、訂頑を改めて西銘と曰ひ、砭愚を東銘と曰ふ。

(一) 張橫渠の學堂の左右にかゝげし銘の中、左なるものをいふ、後に東銘とよぶ、砭は石針也、我が愚なる處を石針にてさす如くさとし正す意 (二) 戲言はことさらに戲れたる言、戲動は豫め謀りて作す戲の行 (三) 過言は心ならずも言ふ、過動は誠よりするにあらぬ行ひ (四) 其過失の爲めにもとらし迷はせて (五) 之を過とする事を恥ぢて自分として當に然るべき事爲すべき所となすは (六) 他人も亦我に從ひてそを當然なりと思はしめんとするは (七) 戲言戲動也 (八) 過言過動也 (九) 兩方のまど (一〇) 訂頑砭愚の文字の樣なるが爲めに人の論爭の端を起す恐ありとて

將レ脩レ己。必先厚重以自持。厚重知レ學。德

將に己を脩めんとせば、必ず先づ厚重にして以て自ら持せよ。厚重にして學を知るときは、德乃ち進みて固(一)ならず。忠信は德に進む。惟だ友を尙びて賢(二)を

蒙。西銘之書。推レ理以存レ義。擴二前聖所一レ未レ發。與二孟子性善養氣之論一同レ功。豈墨氏之比哉。西銘明二理一而分殊一。墨氏則二レ本而無レ分。分殊之蔽。私勝而失レ仁。無分之罪。兼愛而無レ義。分立而推二理一一。以止二私勝之流一。仁之方也。無レ別而迷二兼愛一。以至二於無レ父之極一。義之賊也。子比而同レ之過矣。且彼欲レ使二人推而行一レ之。本爲レ用也。反謂レ不レ及。不二亦異一乎。

に暗くして只分殊の義のみ知る時は、其蔽はるゝ所、自己の爲めにする私意勝ちて至愛の徳たる仁を失ふ（一一）親疎の分別を知らざる罪は、人を皆平等に兼愛してその宜しきを制するの義なし（一二）親疎の分を立て、根本の一理を推し行ひて、以て私意勝つの流弊を止むるは、これ仁を求むるの方也（一三）子が此二者即ち、仁の方と義の賊とを類比混同するは誤也（一四）用に及ばずといふは

又作二砭愚一曰。戲言出二於思一也。戲動作二於謀一也。發二於聲一。見二乎四支一。謂レ非二己心一。不明也。欲三人無二己疑一。不レ能也。過言非レ心也。過動非レ誠也。失二於聲一。繆二迷其

又（一）砭愚を作りて曰く、（二）戲言も思ふに出で、戲動も謀るに作る。聲に發れ、四支に見るゝを、己が心にあらずと謂ふは不明なるなり。人の己を疑ふことなからんを欲するも能はざるなり。（三）過言は心にあらず、過動は誠にあらず。聲に失し、其四體を（四）繆迷して、己が（五）當然といふは、自ら誣ふるなり。（六）他人の己に從はんことを欲するは、人を誣ふるなり。或は心に出づる者を謂つて、咎を歸して己が戲と爲し、思に失する者をば、自ら誣ひて己が誠と爲す。其の（七）汝に

位。自別有二見處一。不レ可二窮レ高極一レ遠。恐於レ道無レ補也。又曰。訂頑立心。便達二得天德一。又曰。游酢得二西銘一讀レ之。卽渙然不レ逆二於心一。曰。此中庸之理也。能求二於言語之外一者也。楊中立問曰。西銘言レ體而不レ及レ用。恐其流遂至二於兼愛一。何如。伊川先生曰。橫渠立レ言。誠有二過者一。乃在二正

を言つて用に及ばず。恐らくは其流(五)遂に兼愛に至らん、何如と。伊川先生曰く、橫渠の言を立つること、誠に過ぎ(六)たるものあり。乃ち正蒙(七)にあり。西銘の書は、理を推して以て義を存し、前聖の未だ發せざる所を擴む。孟子の性善養氣の論と功を同じうす。豈に墨氏(八)の比ならんや。西銘は理は一にして分殊(九)あることを明かにすれども、墨氏は則ち本を二にして分なし。分殊(一〇)の蔽は、私勝ちて仁を失ひ、無(一一)分の罪は、兼愛して義をなみす。分立ちて理一を推し、以て私勝の流を止むるは、仁の方なり。別なくして兼愛に迷ひ(一二)、以て父をなみするの極に至るは、義の賊なり。子の比して之を同じうする(一三)は過てり。且つ彼、人をして推して之を行はしめんと欲す。本用を爲さんとてなり。反つて及(一四)ばずと謂ふは、亦異ならずや。

(一) 訂頑は其心を立つる所大公無私の仁に體するにあるを以て、それによりてよく人爲の累なき天然の大德に通達し得べしと也　(二) 程子の高弟　(三) 疑のとけたる貌　(四) 楊時字中立、程子の門人　(五) 流弊　(六) 過當なる　(七) 橫渠の著せる書名　(八) 墨翟、兼愛の說を主張したるもの　(九) 疏親の等あつて其分自ら殊なるあり　(一〇) 理

其功也。無レ所レ逃而待レ烹。申生其恭也。體ニ其受ー而歸レ全者。參乎。勇ニ於從ー而順レ令者。伯奇也。富貴福澤。將レ厚ニ吾之生ー也。貧賤憂戚。庸玉ニ汝於成ー也。存吾順事。沒吾寧也。

事をいふ　（二四）晉の獻公の子申生が、繼母の讒により殺されんとせし時、弟重耳が國外に逃げよと勸めしを聞き、「われ父を弑せんとすと讒せられたり、かゝる名を立てられし以上、何處にゆきたりとて父なきの國あらんや」と。遂にくびれて死せり　（二五）參は孔子の門弟曾參なり。曾參が「父母全うして之を生めり。子全うして之を歸すは孝なり」といひしをいふ、蓋し以て天賦の德性を汚さずして其終を全うすべきをいふ也　（二六）周の尹伯奇が繼母のために父より放逐せらるゝもなほ父の命に順ひしをいふ

明道先生曰。訂頑之言。極醇無レ雜。秦漢以來學者所レ未レ到。又曰。訂頑一篇。意極完備。乃仁之體也。學者其體ニ此意一。令レ有ニ諸己一。其地位已高。到ニ此地

明道先生曰く、訂頑の言は、極めて醇にして雜なし。秦漢より以來、學者の未だ到らざる所なりと。又曰く、訂頑の一篇、意極めて完備す。乃ち仁の體なり。學者其れ此意を體して、諸を己に有せしめば、其地位已に高し。此地位に到らば、自ら別に見る處あらん。高きを窮め遠きを極むべからず。恐らくは道に於て補無からんと。又曰く、（一）訂頑の立心、便ち天德に達得すと。又曰く、（二）游酢、西銘を得て之を讀み、即ち（三）渙然として心に逆はず。曰く、此れ中庸の理なりと。能く言語の外に求めたる者なり。（四）楊中立問うて曰く、西銘は體

兄弟之顚連而無レ告者也。于時保レ之。子之翼也。樂且不レ憂。純二乎孝一者也。違曰二悖德一。害レ仁曰レ賊。濟レ惡者不才。其踐レ形惟肖者也。知レ化則善述二其事一。窮レ神則善繼二其志一。不レ愧二屋漏一爲レ無レ忝。存レ心養レ性爲レ匪レ懈。惡二旨酒一。崇伯子之顧レ養。育二英材一。潁封人之錫レ類。不レ弛レ勞而底レ豫。舜

すは、舜が其功なり。(一四)逃るゝ所なしとして烹らるゝを待つは、申生が其恭なり。其受けたるを體して全きを歸す者は參か。(一六)從ふに勇んで令に順ふ者は伯奇なり。(一五)富貴福澤は、將に吾が生を厚うせんとす。貧賤憂戚は、庸て汝を成るに玉にす。存するときは吾れ順つて事へ、沒するときは吾れ寧しと。

(一) 張橫渠が其學堂の左右の壁に座右の銘をかゝげたるもののうち、右方なる者、後西銘といふ、訂はたゞす、頑はかたくなにて、不仁をたゞし惡を爲すを戒むる義也 (二) 小なる形容 (三) 天地の間に充ち塞りたる陰陽の氣の凝りて我體となる、卽ち其氣は我體たる也 (四) 天地の理氣の內に主宰となりて恰も將帥の如くなるは吾か心の德性也 (五) 其中にて天と德を合せたる者也 (六) 疲癃は腰かゞみ背の丸くなれる片輪者。殘疾は傷つきたる病者。惸獨は兄弟を有せざるもの。鰥寡はつれあひを失へるもの也 (七) 逢にあひて逆境にある意 (八) 子として親の遺體をつゝしみ守る譯也 (九) 孟子に「惟聖人にして然して後以て形を踐むべし」とあるに取る、我が身に備はる天理を踐み行ふ者は、天地の德と相肖て違はずと也 (一〇) 詩經「大雅に、爾の室に在るをみる、屋漏にも愧ぢざらんことをこひねがへ」とある意なり、屋漏とは室の西北隅にして奥まりたる處なり、此意は人なき處たりとも、しばらくも敬畏の念を去ることなく、常に其心にはづることをなすなかれとなり (一一) 旨酒はうまき酒、崇伯は禹の父なり。儀狄といふもの美酒を禹に奉りしに、禹は後世國をはろぼすは酒ならんとて以後之をしりぞけたり (一二) 秀でたる人材を養ふは、恰も潁考叔が其母に孝なる心を推して、其兄の莊公をして孝ならしめたるが如く、己の得る所は則ち亦人に及ぼすべきことを、なんぢの類にたまへる也との意 (一四) 舜が不慈の親に事へて之を德化せし

横渠先生作ニ訂頑一曰。乾稱レ父。坤稱レ母。予玆藐焉。乃混然中處。故天地之塞吾其體。天地之帥吾其性。民吾同胞。物吾與也。大君者。吾父母宗子。其大臣。宗子之家相也。尊ニ高年一。所三以長ニ其長一。慈ニ孤弱一。所三以幼ニ其幼一。聖其合レ德。賢其秀也。凡天下疲癃殘疾。惸獨鰥寡。皆吾

横渠先生訂頑(一)を作りて曰く、乾を父と稱し、坤を母と稱す。予が玆に藐焉(二)たる、乃ち混然として中に處る。故に天地(三)の塞は吾が其體なり。天地(四)の帥は吾が其性なり。民は吾が同胞、物は吾が與なり。大君は、吾が父母の宗子なり。其大臣は、宗子の家相なり。高年を尊ぶは、其長を長とする所以なり。孤弱を慈むは、其幼を幼とする所以なり。聖(五)は其の德を合せたるなり。賢は其秀でたるなり。凡そ天下の疲癃殘疾(六)、惸獨鰥寡、皆吾が兄弟の顚連(七)して、告ぐることなき者なり。于時に之を保つは、子(八)の翼めるなり。樂みて且つ憂へざるは孝に純なる者なり。違ふを悖德と曰ひ、仁を害ふを賊と曰ふ。惡を濟す者は不才なり。其の形(九)を踐むは惟れ肖たる者なり。化を知るときは則ち善く其事を述べ、神を窮むるときは則ち善く其志を繼ぐ。屋漏(一〇)にも愧ぢざるは、忝むることなしと爲す。心を存し性を養ふは、懈らずと爲す。旨酒(一一)を惡むは、崇伯が子の養を顧へるなり。英材(一二)を育ふは、穎封の人が類に錫へるなり。勞(一三)を弛めずして豫を底

而上也。通二晝夜一而知。其知崇矣。知及レ之。而不二以レ禮性レ之。非二己有一也。故知禮成レ性而道義出。如二天地位而易行一。

而も、(二)禮を以て之を性とせざれば、己の有にあらず。故に知禮性を成して道義出づ。天地位して(三)易の行はるゝが如し。

(一) 無形の道也　(二) 禮を以て行ひ其知を性とせざれば、知は眞に自己のものとなりしに非ず　(三) 陰陽の變易

困之進レ人也。爲二德辨一。爲二感速一。孟子謂下人有二德慧術智一者。常存中乎疢疾上。以レ此。

(一)困の人を進むることは、德の辨かなるが爲なり、感の速かなるが爲なり。孟子が、人の德慧術智ある者は、常に(二)疢疾に存すと謂へるは、此を以てなり。

(一) 困とは易の困卦なり。進退窮して振ふ能はざる象となす。其繫辭に、困は德のあきらかなるなり、と有り　(二) 災患なり。わざはひうれへ

言有レ教。動有レ法。晝有レ爲。宵有レ得。息有レ養。瞬有レ存。

(一)言に敎あり。動に法あり。(二)晝に爲すことあり。宵に得ることあり。息に養ふことあり。瞬に存することあり。

(一) 一言一動皆先生の敎法あり　(二) 晝は爲す事ありて善に進み、夜は靜に心を養ひて得る所あり、一息一瞬の間も必ず德性を存養する所ありと也

其視二天下一。無二一物非一レ我。孟子謂二盡レ心則知レ性知一レ天以レ此。天大無レ外。故有レ外之心。不レ足三以合二天心一。

(一) 身、事物の内に入りてよく其理を究見す、即ち我よく事物の體となり、事物即ち我となる也 (二) 見聞の爲めに心拘束せらるゝ事なし

仲尼絶レ四。自二始學一至二成德一。竭二兩端一之敎也。意有レ思也。必有レ待也。固不レ化也。我有レ方也。四者有レ一焉。則與二天地一爲レ不二相似一矣。上達反二天理一。下達徇二人欲一者歟。知崇天也。形

仲尼四を絶つ。(一)始學より成德に至るまで、(二)兩端を竭すの敎なり。意は思ふことあるなり。(三)必は待つことあるなり。(四)固は化せざるなり。(五)我は方あるなり。(六)四者、一にてもあるときは、則ち天地と相似ずと爲す。

(一) 意・必・固・我なり、論語に出づ (二) 始めて學ぶ時より德成就の時に至るまで、首尾を貫きて一なる敎也 (三) これこれと思を掛くる思 (四) 思ひ掛けたる所を期待する意 (五) 期待する所に滯りて通ぜざる意 (六) 己私に滯りて方所の指すべきある意

(一)上達は天理に反り、下達は人欲に徇ふものならんか。

(一) 論語の上達下達を釋す、天理に反るは日に高道に趨き、人欲に徇ふは日に沈溺に趨く

知崇きは天なり、(一)形而上なり。晝夜に通じて知る、其知崇し。知之に及ぶも、

德。窮レ理盡レ性。則性天德。命天理。氣之不レ可レ變者。獨死生脩夭而已。莫レ非レ天也。陽明勝則德性用。陰濁勝則物欲行。領レ惡而全レ好者。其必由レ學乎。

は、獨り(二)死生脩夭のみ。

(一) 德とは人の天よりうけたる本然の理をいふ。全文の意は、人その本然の理たる德を以つて、氣質の偏するものに勝たざれば、性命は皆氣に役せらるとの意なり　(二) 死・生・壽・夭なり、脩は長生、夭は早死の義

天にあらずといふこと莫し。陽明勝つときは則ち德性用ひられ、陰濁勝つときは則ち物欲行はる。惡しきを領めて好きを全うするは、其れ必ず學に由らんか。

大二其心一。則能體二天下之物一。物有レ未レ體。則心爲レ有レ外。世人之心止二於見聞之狹一。聖人盡レ性。不下以二見聞一梏中其心上。

其心を大にするときは、則ち能く(一)天下の物に體す。物の未だ體せざるあるときは、則ち心外ありと爲す。世人の心は見聞の狹きに止る。聖人は性を盡し、見聞(二)を以て其心を梏せず。其の天下を視るや、一物として我にあらずといふことなし。孟子が、心を盡すときは則ち性を知り天を知ると謂へるは、此を以てなり。天は大にして外なし。故に外あるの心は、以て天心に合するに足らず。

精レ義入レ神。事豫ニ吾内一。求レ利ニ吾外一也。利レ用安レ身素利ニ吾外一。致レ養ニ吾内一也。窮レ神知レ化。乃養盛自至。非ニ思勉之能強一。故崇レ德而外。君子未レ或致レ知也。

形而後有ニ氣質之性一。善反レ之。則天地之性存焉。故氣質之性。君子有ニ弗レ性者一焉。

德不レ勝レ氣性命於レ氣。德勝ニ其氣一性命於レ

せんことを求むるなり。(二)用を利して身を安んずるは、素より吾が外を利して、吾が内を養ふことを致すなり。神を窮め化を知ることは、乃ち養盛なれば自ら至る。思勉の能く強ふるところにあらず。故に德を崇うするより外には、君子未だ知を致すことあらざる也。

(一) 易繫の語を釋する也、義理を精しくきはめて神妙の處に至るは、事の理を豫めわが心の内に定めて以て我が外に行ふ所を順利ならしめんとする也との意 (二) 行ひ用ふる所を順利にして吾が内を養ふことを致すは德を崇うする義なり

形ありて後に氣質の性あり。善く(一)之に反るときは、則ち天地の性存す。故に氣質の性は、(二)君子性とせざる者あり。

(一) 氣質の偏を改めて本來の善に反るときは (二) 孟子が、性惡といひ或は性善惡混ずといふが如き氣質の性を斥け、本然の性に立脚して性善と說ける類也

(一)德氣に勝たざれば、性命、氣に於てす。德其氣に勝つときは、性命、德に於てす。理を窮め性を盡すときは、則ち性は天德、命は天理なり。氣の變ずべからざる者

日事如何。對曰。天下何思何慮。伊川曰。是則是有二此理一。賢却發得太早在。伊川直是會三鍛二煉得人一。說了又道三恰好著二工夫一也。

をか慮らん。伊川曰く、(二)是れに則ち是れ此理あり。(三)賢却つて發し得て太だ早く在りと。伊川直に是れ人を鍛煉し得ることを會す。(四)說き了りて又恰好に工夫を著くることを道ふ。

(一) 近頃如何なる事に工夫を用ふるか　(二) 天下のこと皆自然の理あり、何ぞ必ずしも思慮するをもちひんやと也　(三) まことに然り、されど御身としては發し得ること早きに過ぎたりと戒め給へる也。賢とは對敬稱の語、伊川が謝氏を指していへる代名詞也　(四) よく會得せり

謝顯道云。昔伯淳敎誨。只管著二他言語一。伯淳曰。與レ賢說話。却似レ扶二醉漢一。救二得一邊一。倒二了一邊一。只怕三人執二著一邊一。

謝顯道云ふ、昔伯淳の敎誨せしとき、只管他の言語に著けり。伯淳曰く、賢と說話するは、却つて醉漢を扶くるに似たり、一邊を救ひ得れば、一邊に倒れ了る。只だ人の一邊に執著せんことを怕ると。

(一) 明道先生のあざな　(二) 其言語に執着して其一邊に工夫を用ひたり　(三) こちらに手をそへると今度はあちらへ倒れる

横渠先生曰。

横渠先生曰く　(一)義を精しくして神に入るは、事吾が内に豫して、吾が外を利

其論或太高。伊川不㆑答。良久曰。累㆑高必自㆑下。

明道先生曰。人之爲㆑學。忌三先立二標準一。若循循不㆑已。自有㆑所㆑至矣。

尹彦明見二伊川一。後半年。方得二大學西銘一看。

有㆑人說二無心一。伊川曰。無心便不㆑是。只當㆑云㆑無二私心一。

謝顯道見二伊川一。伊川曰。近

きを累ぬるは必ず下きよりすと。

(一)張繹といふ程子の門人なり　(二)學等を踰えざるを戒むる語、下きより修養を累ねて此の高遠に至るべしと也

明道先生曰く、人の學を爲すこと、先づ標準(一)を立つるを忌む。若し循循として已まずんば、自ら至る所あらんと。

(一)學をなすに目あてを置きて、それに向つて功を急ぐときは、會得不十分なれば之を忌むとの謂なり。志を立つることを忌むとにはあらず

尹彦明(一)伊川に見ゆ。後半年にして、方に大學・西銘を得て看る。

(一)尹焞字彦明、伊川の門に入るや、伊川は先づ學をなすの心得を聽かしめ、半年にして始めて大學、西銘を學ばしめきとなり

人あり無心(一)を說く。伊川曰く、無心は便ち是ならず。只だ當に私心なしといふべしと。

(一)學を爲すには無心なるべしと說く者あり

謝顯道伊川に見ゆ。伊川曰く、(一)近日の事如何。對へて曰く、(二)天下何をか思ひ何

性靜者可ニ以爲レ學。

弘而不レ毅則無ニ規矩一。毅而不レ弘則隘陋。

㈠弘にして毅ならざるときは則ち規矩なし。㈡毅にして弘ならざるときは則ち㈢隘陋なり。

㈠弘は寛大、毅はつよきこと　㈡のりとするところなし、とりしまりなしとなり　㈢せまくいやし、かたくななり

知ニ性善一。以ニ忠信一爲レ本。此先立ニ其大者一。

性の善なるを知り、忠信を以て本とするは、此れ先づ其大なる者を立つるなり。

伊川先生曰。人安重則學堅固。

伊川先生曰く、㈠人安重なるときは則ち學堅固なり。

㈠論語の文を釋す、安重はおちつきておも〳〵しきこと

博學レ之。審問レ之。愼思レ之。明辨レ之。篤行レ之。五者廢ニ其一一非レ學也。

㈠博く之を學び、審かに之を問ひ、愼んで之を思ひ、明かに之を辨じ、篤く之を行ふ。五者其一を廢するも學にあらず。

㈠中庸の文を論ず、此の五つの中一つを缺きても既に學にあらずとなり

張思叔請問。

㈠張思叔請ひ問ふ。其論或は太だ高し。伊川答へず。良や久しうして曰く、㈡高

善思。然後可ニ與適一レ道。思而有レ所レ得。則可ニ與立一。立而化レ之。則可ニ與權一。

し。立つて之を化するときは、則ち與に權る(三)べし。

(一) 聖人を以て志を立つるの標的とする也　(二) ひとり立ちすべし　(三) 事の輕重をはかりて其宜しきに從ふべし

古之學者爲レ己。其終至ニ於成一レ物。今之學者爲レ物。其終至ニ於喪一レ己。君子之學必日新。日新者日進也。不ニ日新一者必日退。未レ有ニ不レ進而不一レ退者。唯聖人之道無レ所ニ進退一。以ニ其所レ造者極一也。

古の學者は己の爲にして、其終は物を成すに至り、今の學者は物の爲にして、其終は己を喪ふに至る。君子の學は必ず日に新なり。日に新なる者は日に進む。日に新ならざる者は必ず日に退く。未だ進まずして退かざる者あらず。唯だ聖人の道のみ。進退する所なし。其の造る所の者極まれるを以てなり(一)。

(一) 其道に至る所既に窮極なれば也

明道先生曰。

明道先生曰く、性靜なる者は以て學を爲すべしと。

學二何事一。爲レ名與レ爲レ利。清濁雖レ不レ同。然其利心則一也。

(一)名を捨てゝ實を取れ　(二)根本義　(三)利己の心

回也其心三月不レ違レ仁。只是無二纖毫私意一。有二少私意一。便是不仁。

(一)回や其心三月仁に違はず。只だ是れ(二)纖毫の私意なければなり。少しく私意あれば、便ち是れ不仁なり。

(一)顏回なり。事は論語の雍也篇に出づ　(二)少しの私心

仁者先レ難後レ獲。有レ爲而作。皆先レ獲也。古人惟知レ爲レ仁而已。今人皆先レ獲也。

仁者は難きを先にし獲ることを後にす。(一)爲にすることありて作すは、皆獲ることを先にするなり。古人は惟だ仁を爲すことを知るのみ。今人は皆獲ることを先にす。

(一)今人は爲にすることありて獲ることを先にす故に仁に入ること難し

有下求レ爲二聖人一之志上。然後可二與共學一。學而

(一)聖人たらんことを求むるの志ありて、然る後に與に共に學ぶべし。學びて善く思ひ、然る後に與に道に適くべし。思うて得る所あるときは、則ち與に(二)立つべ

曰。敬只是持レ己之道。義便知レ有レ是有レ非順レ理而行。是爲レ義也。若只守ニ一箇敬一。不レ知レ集レ義。却是都無レ事也。且如レ欲レ爲レ孝。不レ成三只守ニ著一箇孝字一。須下是知中所ニ以爲レ孝之道上。所ニ以侍奉一當ニ如何一。溫凊當ニ如何一。然後能盡ニ孝道一也。

是あり非あることを知りて、理に順ひて行ふ、是を義となす。若し只だ一箇の敬を守りて、義を集むることを知らざれば、却つて是れ都て事とすること無きなり。且つ(二)孝を爲さんと欲するが如き、只だ一箇の孝の字を守著することを成さず、須らく是れ孝たる所以の道を知るべし。侍奉する所以は當に如何にかすべき、(三)溫凊は當に如何にかすべきと。然る後に能く孝道を盡すなり。

(一) 義は理に順ひて行ふの謂也　(二) 孝を爲さんとする場合一箇の孝の字に執着すること勿れ　(三) 父母に捧ぐる衣食の類をば、冬は溫くし夏は凊（すゞ）しくするをいふ。本文「凊」字「淸」の通用也

學者須下是務ニ實一。不レ要レ近レ名方是。有レ意レ近レ名。則是僞也。大本已失。更

學者は須らく是れ實を(一)務むべし。名に近づかんことを要めずして方に是なり。名に近づくに意あるときは、則ち是れ僞なり。(二)大本已に失す、更に何事をか學ばん。名の爲にすると利の爲にすると、淸濁同じからずと雖も、然も其(三)利心たるは則ち一なり。

等。才如此說。便是自棄。雖與不能居仁由義者。差等不同。其自小一也。言學便以道爲志。言人便以聖爲志。

差等同じからずと雖も、其自ら小にするは一なり。學を言はゞ便ち道を以て志と爲し、人を言はゞ便ち聖を以て志とせよ。

(一) 學者の志す所高遠、自ら第一等の事を以て任ずべしと也

問。必有事焉。當用敬否。曰。敬是涵養一事。必有事焉。須用集義。只知用敬。不知集義。卻是都無事也。又問。義莫是中理否。曰。中理在事。義在心。

問ふ、(一)必ず事とすることあるには、當に敬を用ふべしや否や。曰く、敬は是れ涵養の一事なり。必ず事とすることあるには、須らく(二)集義を用ふべし。只だ敬を用ふることを知りて、義を集むることを知らざれば、却つて是れ都て事とすることなきなり。又問ふ、義は是れ理に中ることなきや否や。曰く、(三)理に中るは事にあり、義は心にあり。

(一) 孟子が浩然の氣を養ふ工夫について述べたる語、或人その語を引きてその工夫には敬を用ふべきか否かを問へる也 (二) 義に從ふ工夫を積み集むるをいふ (三) 義は吾心の裁制、理に中るは事理の宜しきに合ふなり、故に事と心と別なり

問。敬義何別。

問ふ、敬義何にか別たん。曰く、敬は只だ是れ己を持するの道なり。(一)義は便ち

今爲レ文者。專務二章句一。悦二人耳目一。既務レ悦レ人。非二俳優一而何。曰。古者學レ爲レ文否。曰。人見二六經一。便以謂。聖人亦作レ文。不レ知下聖人亦攄二發胸中所上レ蘊。自成レ文耳。所謂有レ德者。必有レ言也。曰。游夏稱二文學一何也。曰。游夏亦何嘗秉レ筆學レ爲二詞章一也。且如下觀二乎天文一以察二時變一。觀二乎人文一以化中成天下上。此豈詞章之文也。

し、人文を觀て以て天下を化成するが如きは、此れ豈に詞章の文ならんや。

㊀文を爲るといふ一局部に限られて大道に通ずる能はず ㊁呂大臨字與叔、張程の門人 ㊂詩の意は、元凱(杜預)は深く左傳を好みて其解をつくりしが、自ら謂つて我に左氏の癖ありとなせる如く、學は一方に固執すれば、好む所とゞこほりて病となる。文は司馬相如の如く人の意を迎へ、ざれごとのみを弄すれば、殆ど俳優の類と一般となる。此等二人は世に名をなすと雖も、孔門に立たしめば一の用もなさず。却つて顏回が心を深くして己にかへりみることの切なりしに如かず、となり ㊃司馬相如字は長卿、最も賦に長じ、子虛・上林等の賦あり ㊄人の耳目を悦ばしむるに務むるは俳優の業なり ㊅聖人は胸中に蘊む所を攄發して文を爲ることを工まず ㊆のべひらきて發表す ㊇論語の語 ㊈論語所出孔門の十哲に、文學には子游子夏とあり

涵養須レ用レ敬。進レ學則在レ致レ知。

莫レ說下道將二第一等一讓二與別人一。且做中第二等上。

㊀德性の涵養

(二)涵養には須らく敬を用ふべし。學に進むは則ち知を致すにあり、

(二)第一等を將つて別人に讓與し、且く第二等を做さんと說き道ふことなかれ。纔に此の如く說かば、便ち是れ自棄なり。仁に居り義に由ること能はざる者と、

問。作ㇾ文害ㇾ道否。曰。害也。凡爲ㇾ文。不ㇾ專ㇾ意則不ㇾ工。若專ㇾ意。則志局二於此一。又安能與二天地一同二其ノ一也。書曰。玩ㇾ物喪ㇾ志。爲ㇾ文亦玩ㇾ物也。呂與叔有ㇾ詩。云。學如二元凱一方成ㇾ辭。文似二相如一殆類ㇾ俳。獨立二孔門一無二一事一。只輸三顏氏得二心齋一。此詩甚好。古之學者。惟務養二情性一。其他則不ㇾ學。

問ふ、文を作るは道を害すや否や。曰く、害す。凡そ文を爲るに、意を專にせざれば則ち工ならず。若し意を專にすれば、則ち志此に局らる。又安ぞ能く天地と其大を同うせんや。書に曰く、物を玩ぶときは志を喪ふと。文を爲るも亦物を玩ぶなり。(二)呂與叔に詩あり、云く、(三)學は元凱が如くにして方に辭を成し、文は相如に似て殆ど俳に類す。獨り孔門に立つて一事なく、只だ顏氏の心齋を得るに(四)輸ると。此詩甚だ好し。古の學者は、惟だ務めて情性を養ひ、其他は則ち學ばず。今の文を爲る者は、專ら章句を務めて、人の耳目を悅ばしむ。(五)既に人を悅ばしむることを務むるは、俳優にあらずして何ぞ。曰く、古者も文を爲ることを學びしや否や。曰く、人六經を見て、便ち以謂へらく、聖人も亦文を作ると。(六)聖人亦胸中の蘊む所を(七)攄發して、自ら文を成しゝを知らざるのみ。所謂(八)德ある者は必ず言あるなり。曰く、(九)游・夏文學を稱するは何ぞや。曰く、游・夏亦何ぞ嘗て筆を秉りて詞章を爲ることを學ばん。且つ天文を觀て以て時變を察

所ㇾ當ㇾ爲。不㆓必待㆒ㇾ著ㇾ意。纔著ㇾ意。便是有㆓箇私心㆒。這一點意氣。能得㆓幾時子㆒。

得ん。

㊀一箇の　㊁子は添へ字にて意味なし

知ㇾ之必好ㇾ之。好ㇾ之必求ㇾ之。求ㇾ之必得ㇾ之。古人此箇學。是終身事。果能顚沛造次必於ㇾ是。豈有ㇾ不ㇾ得㆓道理㆒。

之を知れば必ず之を好む。之を好めば必ず之を求む。之を求むれば必ず之を得。古人此れ箇の學は、是れ終身の事なり。果して能く顚沛造次必ず是に於てせば、豈に道理を得ざることあらんや。

㊀如何なる場合にても。論語の語にて前にも註せり

古之學者一。今之學者三。異端不ㇾ與焉。一曰文章之學。二曰訓詁之學。三曰儒者之學。欲ㇾ趨ㇾ道。舍㆓儒者之學㆒不可。

古の學なる者は一、今の學なる者は三、異端は與らず。一に曰く文章の學、二に曰く訓詁の學、三に曰く儒者の學。道に趨かんと欲せば、儒者の學を舍てゝは不可なり。

㊀只一つの儒者の學

公便喚做ㇾ仁。公而以ㇾ人體ㇾ之。故爲ㇾ仁。只爲ㇾ公則物我兼照。故仁所㆓以能恕㆒。所㆓以能愛㆒。恕則仁之施。愛則仁之用也。

する所以、能く愛する所以なり。恕は則ち仁の施、愛は則ち仁の用なり。

㊀ 用の義　㊁ 仁は天地萬物を一となす、其理至公にして私なし、體するに人を以てすれば則ち其の寛平普博の中自然惻怛慈愛の意あり、斯れ所謂仁と言ふなり、朱子曰く公なるときは情なく仁なるときは愛あり公の字は理に屬し愛の字は仁に屬す

今之爲ㇾ學者。如ㇾ登㆓山麓㆒。方㆓其迤邐㆒。莫ㇾ不㆓闊步㆒。及ㇾ到㆓峻處㆒便止。須㆔是要㆓剛決果敢以進㆒。

今の學を爲す者は、山麓に登るが如し。其迤邐(一)たるに方りて、闊步せざるなく、峻處に到るに及んで便ち止る。須らく是れ剛決果敢以て進まんことを要すべし。

㊀ 山路のうね〳〵として連なるさま

人謂ㇾ要㆓力行㆒。亦只是淺近語。人既能知㆓見一切事皆

人、力め行はんことを要すと謂ふは、亦只だ是れ淺近の語なり。人既に能く一切の事皆當に爲すべき所なるを知見すれば、必ずしも意を著くることを待たず。纔に意を著くれば、便ち是れ箇(一)の私心あり。這の一點の意氣、能く幾(二)時子を

往往以游夏爲小。不足學。然游夏一言一事却總是實。後之學者好高。如人游心於千里之外。然自身却只在此。

けるは其序中の語也　(四)とけちる貌　(五)よろこぶ貌　(六)孔門の子游子夏の略

修養之所以引年。國祚之所以祈天永命。常人之至於聖賢。皆工夫到這裏。則有此應。

(一)修養の、年を引ぶる所以、(二)國祚の、天の永命を祈むる所以、常人の聖賢に至る、皆(三)工夫這裏に到るときは、則ち此應あり。

(一)道家にて精氣を煉り養ひて壽をのぶる術　(二)國家を享け持つ意、天子の在位をいふ　(三)一旦の功にて幸に得るにあらず、それぞれ工夫を積みて其驗を得べき裏に到りたる時はじめて應あり

忠恕所以公平。造德則自忠恕。其致則公平。

忠恕は公平なる所以なり。徳に造るは則ち忠恕よりす。其致せるときは則ち公平なり。

仁之道。要之只消道一公字。公只是仁之理。不可將

仁の道は、之を要するに只だ一の公の字を道ふことを消ふ。(一)公は只だ是れ仁の理なり。公を將つて便ち喚んで仁と做すべからず。公にして人を以て之を體とす。故に仁と爲す。只だ公なれば則ち物我兼照すと爲す。故に仁にして、能く恕

要ニ思得ヒ之。了レ此便是徹上徹下之道。

弘而不レ毅。則難レ立。毅而不レ弘。則無ニ以居ヒ之。

（一）弘にして毅ならざれば、則ち立ち難し。（二）毅にして弘ならざれば、則ち以て之に居ることなし。

㊀弘は寛大、毅は剛毅　㊁本註に「西銘（張子の西銘）は弘の道を言ふ」

伊川先生曰。古之學者。優柔厭飫。有ニ先後次序一。今之學者。却只做ニ一場話說一。務レ高而已。常愛ニ杜元凱語一。若ニ江海之浸。膏澤之潤。渙然冰釋。怡然理順。然後爲レ得也。今之學者。

伊川先生曰く、古の學者は、（一）優柔厭飫にして、先後次序あり。今の學者は、却つて只だ（二）一場の話說を做して、高きを務むるのみ。常に愛す、（三）杜元凱の語に、江海の浸し、膏澤の潤すが若く、（四）渙然として冰釋し、（五）怡然として理順ひ、然して後に得たりと爲すといへるを。今の學者、往往（六）游・夏を以て小にして學ぶに足らずと爲す。然れども游・夏は一言一事却つて總て是れ實なり。後の學者は高きを好む。人の、心を千里の外に遊ばしむるも、然も自身は却つて只だ此に在るが如し。

㊀優柔はゆたかにやはらかなること、厭飫は食にあくこと、轉じてゆとりあること。共に功を用ふるに著實にしてせまらざる義也　㊁徒に論議談說して高遠を務むるのみ　㊂晉の杜預字は元凱、左傳の解を作る、本文に引

力レ外者。坤道也。

凡人才學便須レ知二著レ力處一。既學便須レ知二得レ力處一。有レ人治二園圃一。役二知力一甚勞。先生曰。蠱之象。君子以振レ民育レ德。君子之事。唯有二此二者一。餘無レ他焉。二者爲レ己爲レ人之道也。

收斂裁節するの道

凡そ人才に學ばゞ、便ち須らく力を著くる處を知るべし。既に學ばゞ、便ち須らく力を得る處を知るべし。

人あり園圃を治む。知力を役すること甚だ勞せり。先生曰く、蠱の(一)象に、君子以て民を振し德を育ふと。君子の事、唯だ此二者あり。餘は他なし。二者は己を爲し人を爲すの道なり。(二)

(一) 易を引く　(二) 成すの義。一に「己が爲めにし人の爲めにす」と訓ず、亦通ずべし

博學而篤志。切問而近思。何以言三仁在二其中一矣。學者

博く學んで篤く志し、切に問ひて近く思ふ。何を以てか仁其中にありと言ふ。學者思うて之を得んことを要す。(一)此を了すれば便ち是れ徹上徹下の道なり。

(一) 此理を明かに悟了すれば

已。故切問而近思。則仁在二其中一矣。言忠信。行篤敬。雖二蠻貊之邦一行矣。言不二忠信一。行不二篤敬一。雖二州里一行乎哉。立則見三其參二於前一也。在レ輿則見三其倚二於衡一也。夫然後行。只此是學。質美者明得盡。査滓便渾化。却與二天地一同レ體。其次惟莊敬持養。及二其至一則一也。

と雖も行はれん。言忠信ならず。行篤敬ならずんば、州里と雖も行はれんや。立つときは則ち其の前に參るを見、輿にあるときは則ち其の衡に倚るを見る。夫れ然して後に行はれんと。只だ此れ是の學なり。質美なる者は明らめ得盡して、(四)査滓便ち渾化し、却つて天地と體を同じうす。(五)其次は惟だ莊敬持養す。其至るに及んでは則ち一なり。

(一) 昔人の馬車などの通る時、前を驅り、むちにて人を逐ひ辟（ヒラ）くこと。學をなすには徒らに外に功を用ふることなく、内にかへり、己に近く功をつけよとなり (二) 論語に出づ、夫子が子張の行はれん事を問へるに答へし語也 (三) えびすのくに (四) かす、私欲の未だ消滅せざるをいふ (五) 質美なる者の次なる氣質の者

忠信所二以進一レ德。修レ辭立二其誠一所二以居一レ業者。乾道也。敬以直レ内。義以

(一)忠信は德に進む所以なり、辭を修めて其誠を立つるは業に居る所以なりとは、(二)乾道なり。敬以て内を直くし、義以て外を方にすとは、(三)坤道なり。

(一) 乾坤文言の文義を釋す (二) 乾は健を主とし動を主とす進んで息まざるの意 (三) 坤は順を主とし靜を主とす

利一。明二其道一不レ計二其功一。孫思邈曰。膽欲レ大而心欲レ小。智欲レ圓而行欲レ方。可二以爲一レ法矣。

大抵學不レ言而自得者。乃自得也。有二安排布置一者。皆非二自得一也。

視聽思慮動作皆天也。人但於二其中一。要三識二得眞與一レ妄爾。

明道先生曰。學只要二鞭辟近レ裏著一レ己而

と。孫思邈曰く、膽は大ならんことを欲し、而して心は小ならんことを欲す。智は圓ならんことを欲し、而して行は方ならんことを欲すと。以て法と爲すべし。

(一)前漢の儒者　(二)隋唐間の人、老莊を談じ醫藥を精究す　(三)膽大なれば義を爲すに勇み、心小なれば理を察するに密なり。智圓妙なれば通じて滯らず、行方正なれば守る所ありて亂れず

大抵學言はずして自得する者は、乃ち自得なり。安排布置することある者は、皆自得にあらず。

(一)學んで得る處あり欣然として自得する者眞の自得なり、安排布置は即ち是れ意を著けて強ひてなすなり眞の自得にあらず

視聽・思慮・動作は皆天なり。人但だ其中に於て、眞と妄とを識得せんことを要するのみ。

(一)天然にして誰しも皆ある事なり

明道先生曰く、學は只だ鞭辟して、裏に近く己に著けんことを要するのみ。故に切に問ひて近く思へば、則ち仁其中にあり。言忠信、行篤敬ならば、蠻貊の邦

敬義夾持。直上達二天德一自レ此。
懈意一生。便是自棄自暴。
不レ學便老而衰。
人之學不レ進。只是不レ勇。
學者爲二氣所レ勝。習所レ奪。只可レ責レ志。
內重則可三以勝二外之輕一。得深則可三以見二誘之小一。
董仲舒謂。正二其義一不レ謀二其

敬義夾（一）持すれば、直に上りて天德に達すること此よりせん。

（一）はさみもつこと、身に持すること

懈（一）意一たび生ずれば、便ち是れ自棄自暴なり。

（一）怠るの心

學ばざれば便ち老いて衰ふ。

人の學の進まざるは、只だ是れ勇ならざればなり。

學者、氣に勝たれ、習に奪はるゝ、只だ志（一）を責むべし。

（一）志氣のふるひたゝざるを責めよと也

內（一）重きときは則ち以て外（二）の輕きに勝つべく、得（三）ること深きときは則ち以て誘（四）の小なるを見るべし。

（一）道義の重きこと（二）外物の欲念輕きこと（三）循理の體得深きこと（四）外誘の嗜欲小なること

（一）董仲舒謂へらく、其義を正して其利を謀らず、其道を明かにして其功を計らず

殺ニ一不辜一。有レ所レ不レ爲。有ニ分毫私一。便不ニ是王者事一。

論レ性不レ論レ氣不レ備。論レ氣不レ論レ性不レ明。二レ之則不レ是。

性を論じて氣を論ぜざれば備はらず、氣を論じて性を論ぜざれば明かならず。之を二にするときは則ち是ならず。

（一）二つ別々の事として說くは可ならず

論レ學便要レ明レ理。論レ治便須レ識レ體。

學を論ぜば、便ち理を明かにせんことを要とせよ。治を論ぜば便ち須らく體を識るべし。

曾點漆雕開已見ニ大意一。故聖人與レ之。

（二）曾點・漆雕開已に大意を見る。故に聖人之を與す。

（二）曾晳に同じ、其志を言ひしことは論語先進篇に、漆雕開のことは論語公冶長篇に出づ。

根本須ニ是先培壅一。然後可レ立ニ趨向一也。趨向既正。所レ造淺深。則由ニ勉與一レ不レ勉也。

根本をば須らく是れ先づ培壅すべし。然して後趨向を立つべきなり。趨向既に正しければ、造る所の淺深は、則ち勉むると勉めざるとによる。

參也竟以ㇾ魯得ㇾ之。

明道先生。以二記誦博識一爲二玩物喪志一。

禮樂只在二進反之閒一。便得二性情之正一。

父子君臣天下之定理。無ㇾ所ㇾ逃二於天地之閒一。安二得天分一不ㇾ有二私心一。則行二一不義一。

(一)曾參は魯鈍、而も魯鈍なるを以ての故に其學誠篤、遂によく孔子の道を傳へ得たりとなり

明道先生、記誦博識を以て玩物喪志となす。(一)

(一)本註に「時に經語を以て錄して一冊と作す、鄭轂云く、嘗て顯道先生（謝）に見ゆ、云く、某洛中に從つて學べる時、古人の善行を錄して別に一冊と作す、明道先生之を見て曰く、是れ玩物喪志なりと、蓋し言ふこゝろは、心中宜しく絲髮の事を容るべからずとなり。胡安國云く、謝先生初め記問を以て學問と爲し、該博を自負す、明道に對して史書の成篇を擧げ、一字を遺せず。明道曰く、賢（貴君の意）卻て許多を記得す、玩物喪志と謂ふべしと、謝此語を聞いて、汗流れて背に浹く、面、赤を發す、明道の史を讀むを看るに及んで、又卻て逐行看過して一字も蹉かず、謝甚だ服せざりしが、後來省悟して卻て此事を將つて話頭と做して、博學の士を接引す」と見ゆ

禮樂は只だ進反の閒に在りて、(一)便ち性情の正を得。

(一)進退といふに同じ

父子君臣は天下の定理にして、天地の閒に逃るゝ所なし。天分に安んじ得て私心あらざれば、則ち一の不義を行ひ、一の不辜(一)を殺すことをも、(二)せざる所あり。分毫の私あれば、便ち是れ王者の事にあらず。

(一)無實の罪人　(二)それによりて天下を得るの利ありとも爲さずと也

可不遠且大。然行之。亦須量力有漸。志大心勞。力小任重。恐終敗事。

恐らくは終に事を敗らん。

㊀一歩々々と漸次向上すべし

朋友講習。更莫如相觀而善工夫多。須是大其心使開闊。譬如爲九層之臺。須大做脚方得。

朋友の講習は、更に相觀て善くするの工夫多きに如くなし。須らく是れ其心を大にして開闊ならしむべし。譬へば(一)九層の臺を爲るが如し。須らく大に(二)脚を做して方に得べし。

㊀九階のうてな　㊁基脚、土臺

明道先生曰。自舜發於畎畝之中。至孫叔敖擧於海。若要熟也。須從這裏過。

明道先生曰く、(一)舜は畎畝の中に發るといふより、(二)孫叔敖は海に擧げらるといふに至るまで、若し熟せんことを要せば、須らく(三)這の裏より過ぐべしとなり。

㊀孟子告子下篇に見ゆ　㊁楚の賢人　㊂舜、孫叔敖等の經驗せるが如き艱難の中より己をみがき來れとなり。
このうちとはかゝる艱難の中の意

(二)參や竟に魯を以て之を得たり。

又曰。學者要ニ學得不レ錯。須三是學ニ顏子一。

明道先生曰。且省ニ外事一。但明ニ乎善一。惟進ニ誠心一。其文章雖レ不レ中不レ遠矣。所レ守不レ約。泛濫無レ功。

㊀ 手掛りなし、本文の意蓋し孟子は天才にして學びて及びがたく顏子は勉強して成りたる人物なれば學びて至るべしと也　㊁ 本註に「準的有り」

明道先生曰く、且つ外事を省け。但だ善を明かにして、惟だ誠心を進めよ。其文章は、中らずと雖も遠からず、守る所約ならざれば、泛濫(一)して功なし。

㊀ くだ〳〵しくのみなりて德に進むの功なし

學者識ニ得仁體一。實有ニ諸己一。只要ニ義理栽培一。如レ求ニ經義一。皆栽培之意。

昔受ニ學於周茂叔一。每令レ尋ニ顏子仲尼樂處一。所レ樂何事。

所レ見所レ期。不レ

學者、仁の體を識り得て、實に諸を己に存せば、只だ義理もて栽培せんことを要す。經の義を求むる如きは、皆栽培の意なり。

昔學を周茂叔に受けしとき、每に顏子・仲尼の樂む處を尋ねしめぬ、樂しむ所は何事ぞと。

見る所期する所、遠くして且つ大ならずんばあるべからず。然れども之を行ふは、亦須らく力を量りて漸(二)あるべし。志大にして心勞し、力小にして任重くば、

居之處一。有ㇾ可ㇾ居之處一。則可ニ以修ㇾ業也。終日乾乾。大小大事。却只是忠信所ニ以進ㇾ德。爲ニ實下ㇾ手處一。修ㇾ辭立ニ其誠一。爲ニ實修ㇾ業處一。

用ふべき　(七)乾の九三の本文　(八)忠信進德を力を用ふる處とし修辭立誠を業を修むる處とす

伊川先生曰。志ㇾ道懇切。固是誠意。若迫切不ㇾ中ㇾ理。則反爲ニ不誠一。蓋實理中自有ニ緩急一。不ㇾ容ㇾ如ㇾ是之迫一。觀ニ天地之化一乃可ㇾ知。

伊川先生曰く、道に志すこと懇切なるは、固より是れ誠意なり。若し迫切(一)にして理に中らざれば、則ち反つて不誠と爲す。蓋し實理の中、自ら緩急あり。是の如く迫るべからず。天地の化(二)を觀て乃ち知るべし。

(一)功を急ぎて急速にせまるをいふ　(二)天地の化は春生じ夏長じ秋成り冬堅まりて一息の止む間なけれど決して迫切にして成るにはあらず

孟子才高。學ㇾ之無ㇾ可ニ依據一。學者當ㇾ學ニ顏子一。入ニ聖人一。爲ニ近有ㇾ用ㇾ力處一。

孟子は才高し。之を學ばんに依據(一)すべきなし。學者當に顏子を學ぶべし。聖人に入るに、近く力を用ふる處ありと爲す。又曰く、學者たるもの學び得て錯らざらんことを要せば、須らく(二)是れ顏子を學ぶべし。

下。由レ經以求レ道。勉レ之又勉。異日見下卓爾有中立二於前一。然後不レ知二手之舞足之蹈一。不レ加レ勉而不レ能二自止一矣。

明道先生曰。修レ辭立二其誠一。不レ可レ不二子細理會一。言能修二省言辭一。便是要レ立レ誠。若只是修二飾言辭一爲レ心。只是爲レ僞也。若修二其言辭一。正爲レ立二己之誠意一。乃是體二當自家敬以直レ内。義以方レ外之實事。道之浩浩。何處下レ手。惟立レ誠。纔有レ可レ

明道先生曰く、辭を修めて其誠を立つといふこと、子細に理會せずんばあるべからずと。言ふこゝろは、能く言辭を修省するは、便ち是れ誠を立つるを要す、若し只だ是れ言辭を修飾するのみを心と爲さば、只だ是れ僞を爲すなり。若し其言辭を修むること、正に己の誠意を立てんが爲ならば、乃ち是れ自家、敬以て内を直くし、義以て外を方にすることを體當するの實事なり。道の浩浩たる、何處にか手を下さん。惟だ誠を立つるにのみ、纔に居るべきの處あり。居るべきの處あれば、則ち以て業を修むべきなり。終日乾乾たるは、大小の大事、却つて只だ是れ忠信徳に進む所以をば、實に手を下す處と爲し、辭を修めて其誠を立つるをば、實に業を修むる處と爲す。

(一) 易の乾の文言の意を說く (二) 其言辭を修省するはそれにたよりて誠を立てんが爲なり (三) 言辭を修飾する者は中に誠なし故に虛飾にして僞なり (四) 身に體得し心によく考へ當る (五) 流行盛大の貌 (六) 何處にか力を

己。欲レ得二之於己一也。今之學者爲レ人。欲レ見レ知二於人一也。

伊川先生謂二方道輔一曰。聖人道坦如二大路一。學者病レ不レ得二其門一耳。得二其門一。無二遠之不一レ可レ到也。求レ入二其門一。不レ由二於經一乎。今之治レ經者亦衆矣。然而買レ櫝還レ珠之蔽。人人皆是。經所二以載一レ道也。誦二其言辭一。解二其訓詁一。而不レ及レ道。乃無用之糟粕耳。覬足

伊川先生、方道輔(一)に謂うて曰く、聖人の道は、坦かなること大路の如し。學者其門を得ざることを病ふるのみ。其門を得ば、遠くとも到るべからざることなからん。其門に入らんことを求めば、經に由らざらんや。今の經を治むる者亦衆し。然れども櫝を買うて珠を還すの蔽、人人皆是れなり。經は道を載する所以なり。其言辭を誦し(二)、其訓詁を解するも、而も道に及ばざるは、乃ち無用の糟粕のみ。覬はくは足下、經に由りて以て道を求め、之を勉めて又勉めよ。異日卓爾とし(三)て前に立つことあるを見ん。然して後手の舞ひ足の蹈むところを知らず、勉を加へずして自ら止むこと能はざらん。

(一) 伊川の友、名は元寀(シン) (二) 韓非子に出づ、楚人あり、木蘭の櫝を造り珠玉を以て飾り、其外觀を美にし其中に珠をもりて鄭人に賣れり、然るに鄭人は其櫝の美なるを見て、櫝のみをとり、珠をかへせりといふ。其意は外見に囚はれて精神を沒却せるを譏りしなり、卽ち枝葉に拘りて根本を忘れたるを笑ふなり (三) 道を學び得て其道高く眼前に立つを見んと也。論語に出でたる語

阻。必自省於身。有失而致之乎。有所未善。則改之。無歉於心。則加勉。乃自修其德也。非明則動無所之。非動則明無所用。習重習也。時復思繹。浹洽於中。則説也。以善及人。而信從者衆。故可樂也。雖樂於及人。不見是。而無悶。乃所謂君子。古之學者爲

ならざる所あれば、則ち之を改む。心に歉（二）ることなければ、則ち加〻勉む。乃ち自ら其德を修むるなり。

（一）易の蹇の義、此節は易蹇卦の象に、山上有水蹇、君子以反身修德とあるを釋する也　（二）歉は不滿足の意、心に不足なき時は益々其善を勉むと也

明（一）にあらざれば則ち動いて之く所なし。動にあらざれば則ち明用ふる所なし。

（一）易の豐卦の傳下離上震、離は明、震は動なり

習（二）は重習なり。時〻に復た思繹して、中に浹洽するときは、則ち說ぶ。善を以て人に及ぼして信從する者衆し。故に樂むべし。人に及ぼすことを樂むと雖も、是とせられずして而も悶ることなきは、乃ち所謂君子なり。

（二）論語學而篇の首章にある習とは、重ねて習ふことなり、より〳〵に益に習へる所を思ひたずねて忘るることなければ、久しうして義理自ら中心にしみわたり、自然に心たのしくよろこぶに至るべしとの意なり

古の學者は己が爲にす、之を己に得んと欲するなり。今の學者は人の爲にす、人に知られんことを欲するなり。

憧往來。朋從ニ爾思。傳曰。感者人之動也。故咸皆就ニ人身一取レ象。四當ニ心位一而不レ言レ咸ニ其心一。感乃心也。感之道無レ所レ不レ通。有レ所ニ私係一。則害ニ於感通一。所謂悔也。聖人感ニ天下之心一。如ニ寒暑雨暘一。無レ不レ通。無レ不レ應者。亦貞而已矣。貞者虛中無我之謂也。若下往來憧憧然。用ニ其私心一以感上レ物。則思之所レ及者。有ニ能感而動一。所レ不レ及者。不レ能レ感也。以ニ有レ係之私心一。既主ニ於一隅一事一。豈能廓然無レ所レ不レ通乎。

る所あれば、則ち感通に害あり。所謂悔なり。聖人天下の心を感ずること、寒暑(七)雨暘の如し。通ぜざるなく、應ぜざるなき者も、亦貞のみ。貞とは虛中無我の謂なり。(八)往來憧憧然として、其私心を用ひて以て物を感ずるが若き、則ち思の及ぶ所の者は、能く感じて動くことあり、及ばざる所の者は、感ずること能はざるなり。係ることあるの私心を以て、既に一隅一事に主たらば、豈に能く廓然として通ぜざる所なからんや。

㈠ 易の咸の象なり　㈡ 伊川の易傳也　㈢ 易の卦の下より算へて四番目にあたるものにして、それが陽なる場合にいふ　㈣ 前に出づ　㈤ 九四なり　㈥ 心の私に係合ふ所あれば悔を生ぜんことを云ふ　㈦ かわく、雨濕の反對也　㈧ 又私心の係ることある場合を說く

君子之遇ニ艱

(一)君子の艱阻に遇ふや、必ず自ら身を省る、失ありて之を致せるかと。未だ善

匪レ正有レ眚。不レ利レ有レ攸レ往。

辭なり

人之蘊蓄由レ學而大。在三多聞二前古聖賢之言與レ行。考レ跡以觀二其用一。察レ言以求二其心一。識而得レ之。以蓄二成其德一。

人の蘊蓄は學ぶに由りて大なり。(一)多く前古聖賢の言と行とを聞くにあり。跡を考へて以て其用を觀、言を察して以て其心を求め、識りて之を得、以て其德を蓄へ成す。

◉ 聖賢の言行を識りて其德を蘊蓄すべきを云ふ

咸之象曰。君子以虛受レ人。傳曰。中無二私主一。則無二感不レ通。以レ量而容レ之。擇レ合而受レ之。非二聖人有レ感必通之道一也。其九四曰。貞吉悔亡。憧

(一)咸の象に曰く、君子以て虛しうして人を受くと。(二)傳に曰く、中に私主なきときは、則ち感じて通ぜざることなし。量を以て之を容れ、合ふを擇んで之を受くるは、聖人感ずることあれば必ず通ずるの道にあらざるなり。(三)其九四に曰く、(四)貞なれば吉にして悔亡ぶ。憧憧として往來し、朋爾の思に從ふと。傳に曰く、感とは人の動くなり。故に感は皆人身に就いて象を取る。(五)四、心位に當つて而も其心に咸ずと言はざるは、感ずるは乃ち心なればなり。感の道通ぜざる所なし。(六)私係す

立而內直。義形而外方。義形於外。非在外也。敬義既立。其德盛矣。不期大而大矣。德不孤也。無所用而不周。無所施而不利。孰爲疑乎。

て、其德盛なり。大なることを期せずして大なり。德は孤ならざるなり。用ふる所として周からざるなく、施す所として利からざるなし。孰か疑ふことを爲さんや。

㈠ 易の坤の文言を說く ㈡ 內は心、外は行爲 ㈢ 義の用は外に達するのみ、外にあるにあらず

動以天爲無妄。動以人欲則妄矣。無妄之義大矣哉。雖無邪心。苟不合正理則妄也。乃邪心也。既已無妄。不宜有往。往則妄也。故無妄之象曰。其

動くに天を以てするを無妄と爲す。動くに人欲を以てすれば則ち妄なり。無妄㈠の義大なるかな。邪心なしと雖も、苟も正理に合はざれば則ち妄なり。乃ち邪心なり。既已に無妄なり、宜しく往㈡くことあるべからず。往くときは則ち妄なり。故に無妄の象㈢に曰く、其れ正にあらざれば眚あり。往くところあるに利からずと。

㈠ 此章は易の无妄の卦を說けるものなり。此卦は下を震の卦となし、上を乾の卦となすなり。震は動をあらはし、乾は天をいふ、故に動くに天を以てすといふ、妄とは邪なり偽なり、動いて天理に純なるときは則ち邪偽なけれども、人欲を以てすれば邪あり偽ありとの意なり ㈡ 之に止れとなり、所謂至善に止るの謂なり ㈢ 易の卦の象

內積二忠信一。所二以進一レ德也。擇レ言篤レ志。所二以居一レ業也。知レ至至レ之致知也。求二知所一レ至。而後至レ之。知レ之在レ先。故可レ與レ幾。所謂始二條理一者。智之事也。知レ終終レ之。力行也。既知レ所レ終。則力進而終レ之。守レ之在レ後。故可三與存二レ義。所謂終二條理一者。聖之事也。此學之始終也。

內忠信を積むは、德に進む所以なり。言を擇び志を篤うするは業に居る所以なり。至る（一）を知りて之に至るは致知なり。至る所を求め知りて、而して後之に至る。（二）之を知ること先に在り。故に幾を與にすべし。所謂條理を始むるは、智の事なり。終を知りて之を終ふるは力行（三）なり。既に終る所を知るときは、則ち力め進みて之を終ふ。（四）之を守ること後にあり。故に與に義を存すべし。所謂條理を終ふるは、聖の事なり。此れ學の始終なり。

（一）至善の意　（二）至るに先だつてまづ知る、即ち重んずる所は知るに在り　（三）幾は現はれんとするきざし、所謂幾微也。上述の如く至善に至るは先づ之を知るに在る譯なれば、知る者とは以て事の機微を共にすべしと也。次に條理を始むるといへる其始むるは即ち幾を知るの義也　（四）まづ終へて然して後守る、前の先づ知ると反對也。斯く力行して事を終へ然して後之を守る者とは以て共に義を存すべし

君子主レ敬以直二其內一。守レ義以方二其外一。敬

君子（一）は敬を主として以て其內（二）を直くし、義を守りて以て其外を方にす。敬立ちて內直く、義形れて外方なり。（三）義外に形る。外にあるにあらず。敬義既に立つ

一不制。則生人之道有不足矣。聖賢之言。雖欲已得乎。然其包涵盡天下之理。亦甚約也。後之人始執卷。則以文章爲先。平生所爲。動多於聖人。然有之無所補。無之靡所闕。乃無用之贅言也。不止贅而已。既不得其要。則離眞失正。反害於道必矣。來書所謂。欲使後人見其不忘乎善。此乃世人之私心也。夫子疾沒世而名不稱焉者。疾沒身無善可稱云爾。非謂疾無名也。名者可以厲中人。君子所存非所汲汲。

きも闕くる所なし、乃ち無用の贅言なり。止だ贅たるのみならず、既に其要を得ざれば、則ち眞を離れ正を失ひ、反つて道に害あること必せり。(七)來書に所謂、後(八)人をして其の善を忘れざりしを見しめんと欲すと。此れ乃ち世人の私心なり。夫子が世を沒ふるまで名の稱せられざるを疾むは、身を沒ふるまで善の稱すべきものなきを疾むと爾云ふなり、名なきを疾むと謂ふにあらざる也。名は以て中人を厲すべきも、(九)君子の存する所は汲汲たる所にあらず。

(一) 伊川の友 (二) 聖賢は言はてものことを言はず、其言ふ所は悉く言はて已む能はざることのみ (三) 耒耜はすきの類にして、柄を耒といひ、先を耜といふ。陶はやきものを造るかま、冶は金屬を鑄る器なり。此等の器具にして其一つにても之を缺くときは生民の用をなす道に不足を生ずとなり (四) 聖賢の言廣くして大なり而も亦甚だ簡にして約かなり (五) 後世の人のなす所を擧げて叱す (六) 言を作爲する所 (七) 朱長文より來れる書を指す (八) 人の文を作るは、後人をして之を見て以て其人の常に善道を忘れざりしを知らしめんと欲する也と (九) 君子の心に存する所は名に汲々たる所にあらずして善を行ふの實にあり

其身。行二其庭一。不レ見二其人一。孟氏亦曰。所レ惡二於智一者。爲二其鑿一也。與二其非レ外而是レ內。不レ若二內外之兩忘一也。兩忘則澄然無事矣。無事則定。定則明。明則尚何應レ物之爲レ累哉。聖人之喜以二物之當レ喜。聖人之怒。以二物之當レ怒。是聖人之喜怒。不レ繫二於心一而繫二於物一也。是則聖人豈不レ應二於物一哉。烏得下以二從レ外者一爲レ非。而更求二在レ內者一爲上レ是也。今以二自私用智之喜怒一。而視二聖人喜怒之正一。爲二如何一哉。夫人之情。易レ發而難レ制者。惟怒爲レ甚。第能於二怒時一。遽忘二其怒一。而觀二理之是非一。亦可レ見二外誘之不レ足レ惡。而於レ道亦思過レ半矣。

聖人の心は大公なるが故に廓然として來る物に順應すとなり (五) 到底なぞらへ難し、非常の相違なり (六) 人情最も制し難きものは怒也 (七) 怒を制して理の是非を觀る是亦大公順應の一例

伊川先生答二朱長文一書曰。聖賢之言不レ得レ已也。蓋有二是言一則是理明。無二是言一則天下之理有レ闕焉。如二彼耒耜陶冶之器。

伊川先生、朱長文(一)に答ふる書に曰く、聖賢(二)の言は、已むを得ざればなり。蓋し是の言あれば則ち是の理明かなり。是の言なければ則ち天下の理に闕くることあり。彼の耒耜陶冶の器の、一も制せざるときは、則ち生人の道足らざることあるが如し。聖賢(三)の言、已まんと欲すと雖も得んや。(四)然して其の天下の理を包涵し盡し、亦甚だ約なり。(五)後の人始めて卷を執るときは、則ち文章を以て先と爲す。平生の爲る所、(六)動もすれば聖人より多し。然して之れ有るも補ふ所なく、之れな

除。將見滅於東而生於西也。非惟日之不足。顧其端無窮。不可得而除也。人之情各有所蔽。故不能適道。大率患在於自私而用智。自私則不能以有爲爲應迹。用智則不能以明覺爲自然。今以惡外物之心。而求照無物之地。是反鑑而索照也。易曰。艮其背。不獲

きを以てす。聖人の怒は、物の當に怒るべきを以てす。(一四)是れ聖人の喜怒は、心に繫らずして物に繫ればなり。是れ則ち聖人も豈に物に應ぜざらんや。烏ぞ外に從ふ者を以て非と爲し、而して更に內に在る者を求むるを是と爲すことを得んや。今自私用智の喜怒を以て、聖人の喜怒の正しきに視へば(一五)、如何とかせんや。(一六)夫れ人の情の、發し易くして制し難き者は、惟だ怒を甚しと爲す。第だ能く、怒る時に於て、遽に(一七)其怒を忘れて、理の是非を觀ば、亦外誘の惡むに足らざるを見るべく、道に於ても亦思ひ半に過ぎん。

(一) 常に心をしづめて安定ならしめんとすれども得ず (二) 送迎の意、物の去るを送ることなく、其來らざるを迎ふることとなしとなッ (三) 心を內とし、物を外とするが如きへだてなし (四) 性の內外ありとするに對して一棒を加ふ (五) 咸卦の爻辭なり、貞は正しく固き義、悔亡ぶは悔恨絕滅の意、憧々は往來絕えざる貌、朋爾の思に從ふとは善惡各〻我が思ふ所に從て來るとの意 (六) 强ひて自ら求めつとむる時は (七) 自ら私して智術を用ふることの患となるを說く (八) 有爲とは無爲の反對、有爲なれば必ず應迹あり、自ら私するものは能はず (九) 明覺とは循理の自然を知る智慧 (一〇) 外物を惡むの心は是れ自ら私するの心なり (一一) 艮の卦辭なり (一二) 自然に順はずして穿鑿に陷る (一三) 橫渠の間に答ふるなり、廓然として大公、物來りて順應するに若くは莫しの意を再說す (一四)

者爲レ在レ內。是有レ意三於絕二外誘一。而不レ知三性之無二內外一也。既以二內外一爲二二本一。則又烏可二遽語一レ定哉。夫天地之常。以下其心普二萬物一而無心上。聖人之常。以下其情順二萬事一而無情上。故君子之學。莫レ若下廓然而大公。物來而順應上。易曰。貞吉悔亡。憧憧往來。朋從二爾思一。苟規二規於外誘之

くはなし。易に曰く、貞なれば吉にして悔亡ぶ。憧憧として往來し、朋爾の思に從ふと。苟も外誘(五)を除くに規規(六)たらば、將に東に滅えて西に生ずるを見んとす。惟だ日の足らざるのみにあらず、顧ふに其端窮りなく、得て除くべからざらん。人の情各〻蔽はるゝ所あり。故に道に適くこと能はず。大率患(七)は自ら私して智を用ふるところに在り。自ら私するときは則ち有爲を以て應迹(八)と爲すこと能はず。智を用ふるときは則ち明覺(九)を以て自然と爲すこと能はず。今(一〇)外物を惡むの心を以て、無物の地を照さんことを求むるは、是れ鑑を反して照さんことを索むるなり。易に曰く、其背(一一)に艮つて其身を獲ず。其庭を行きて其人を見ずと。孟氏亦曰く、智に惡む所の者は、其鑿(一二)つが爲なりと。其外(一三)を非として內を是と、せんよりは、內外の兩ながら忘れんに若かず、兩ながら忘るれば則ち澄然として無事なり。無事なれば則ち定まる。定まれば則ち明かなり。明かなれば則ち倘ほ何の物に應ずるをかこれ累と爲さんや。聖人の喜は、物の當に喜ぶべ

者。守レ之也。非レ化レ之也。以二其好レ學之心一。假レ之以レ年。則不レ日而化矣。後人不レ達。以謂聖本生知。非二學可一レ至。而爲レ學之道遂失。不レ求二諸己一。而求二諸外一。以二博聞強記。巧文麗辭一爲レ工。榮二華其言一。鮮下有レ至二於道一者上。則今之學。與二顏子所一レ好異矣。

橫渠先生問二於明道先生一曰。定レ性未レ能レ不レ動。猶累二於外物一何如。明道先生曰。所謂定者。動亦定。靜亦定。無二將迎一。無二內外一。苟以二外物一爲レ外。牽レ己而從レ之。是以二己性一爲レ有二內外一也。且以レ性爲レ隨二物於外一。則當二其在レ外時一。何

・橫渠先生、明道先生に問うて曰く、性を定むれども未だ動かざること能はず。猶ほ外物に累はさるゝ何如と。明道先生曰く、所謂定まるとは、動にも亦定まり、靜にも亦定まり、將迎なく、內外なし。苟も外物を以て外と爲し、己を牽いて之に從ふは、是れ己が性を以て內外ありとするなり。且つ性を以て物に外に隨ふとなすは、則ち其の外に在る時に當つて、何者をか內に在りと爲さん。是れ外誘を絕つに意ありて、性の內外なきことを知らざるなり。既に內外を以て二本と爲すときは、又烏ぞ遽に定まることを語るべけんや。夫れ天地の常なるは、其心萬物に普くして無心なるを以てなり。聖人の常なるは、其情萬事に順つて無情なるを以てなり。故に君子の學は、廓然として大公、物來りて順應するに若

謂自レ明而誠也。誠レ之之道。在二乎信レ道篤一。信レ道篤。則行レ之果。行レ之果。則守レ之固。仁義忠信不レ離二乎心一。造次必於レ是。顛沛必於レ是。出處語默必於レ是。久而弗レ失。則居レ之安。動容周旋中レ禮。而邪僻之心無二自生一矣。故顏子所レ事則曰。非レ禮勿レ視。非レ禮勿レ聽。非レ禮勿レ言。非レ禮勿レ動。仲尼稱レ之則曰。得二一善一。則拳拳服膺而弗レ失レ之矣。又曰。不レ遷レ怒。不レ貳レ過。有二不善一未二嘗不レ知。知レ之未二嘗復行一也。此其好レ之篤。學レ之之道也。然聖人則不レ思而得。不レ勉而中。顏子則必思而後得。必勉而後中。其與二聖人一相去一息。所レ未レ至

假(一四)すに年を以てせば、則ち日ならずして化せん。後人達(一五)せずして、以謂、聖は本生れながらに知る、學んで至るべきにあらずと。而して學を爲すの道遂に失し、諸を己に求めずして、諸を外に求め、博聞強記、巧文麗辭を以て工と爲し、其言を榮華にして、道に至ることある者鮮し。則ち今の學は、顏子の好む所と異なり。

(一) 或人の問と伊川先生の答とを擧ぐ (二) 情は性の發露する所なれど、火の熾なるが如く、水の流るゝ如く、その起るまゝにすれば却て性をそこなふと也 (三) 振動かすなり (四) 明かに覺るの士 (五) 覺者の反對 (六) 梏はてがせなり。性を拘束して其自然を害ふをいふ (七) 勇み進みてたゆむ事なく道を行ふ (八) 造次はかりそめのとき、顛沛は失意流浪のとき、卽ち如何なる時にもの意 (九) 出て仕ふる時も隱れ居る時も (一〇) たちゐふるまひ (一一) むねのあたりに捧げもつ義、大切に守るをいふ (一二) 思慮を費さず勉强せずして自ら其理を得、行爲其道に的中す (一三) 顏子の聖人に至らざるは道を勉め守りて之を變化して渾然其迹を泯するに非ざる所に存すと也 (一四) 顏子をして長命ならしめば (一五) 上述の如く學んで聖人に到るべきの理に達せずして

智信。形既生矣。外物觸二其形一。而動二其中一矣。其中動。而七情出焉。曰。喜怒哀樂愛惡欲。情既熾而益蕩。其性鑿矣。是故覺者約二其情一。使レ合二於中一。正二其心一。養二其性一。愚者則不レ知レ制レ之。縱二其情一而至二於邪僻一。梏二其性一而亡レ之。然學之道。必先明二諸心一知レ所レ養。然後力行以求レ至。所

こと篤きときは、則ち之れを行ふこと果なり。之れを行ふこと果なるときは、則ち之れを守ること固し。(七)仁義忠信心に離れず、(八)造次にも必ず是れに於てし、顚沛にも必ず是れに於てし、(九)出處語默必ず是に於てす。久しうして失はざるときは、則ち之に居ること安く、(一〇)動容周旋禮に中つて、邪僻の心自ら生ずることなし。故に顏子の事とする所は則ち曰く。禮にあらざれば視ること勿れ、禮にあらざれば聽くこと勿れ、禮にあらざれば言ふこと勿れ、禮にあらざれば動くこと勿れとなり。仲尼之を稱して則ち曰く、一善を得るときは、(一一)則ち拳拳服膺して之を失はずと。又曰く、怒を遷さず、過を貳たびせず、不善あれば未だ嘗て知らずんばあらず。之を知れば未だ嘗て復行はずと。此れ其好むことの篤うして、之を學ぶの道なり。然して聖人は則ち思はずして得、(一二)勉めずして中る。顏子は則ち必ず思うて後に得、必ず勉めて後に中る。其の聖人と相去ると一息なり。(一三)未だ至らざる所のものは、之を守りて、之を化するにあり。其の學を好むの心を以て、之に

或問。聖人之門。其徒三千。獨稱㆓顏子㆒爲ㇾ好ㇾ學。夫詩書六藝。三千子非ㇾ不㆓習而通㆒也。然則顏子所㆓獨好㆒者何學也。伊川先生曰。學以至㆓聖人㆒之道也。聖人可㆓學而至㆒歟。曰。然。學之道如何。曰。天地儲ㇾ精。得㆓五行之秀㆒者爲ㇾ人。其本也。眞而靜。其未ㇾ發也。五性具焉。曰。仁義禮

或問ふ、聖人の門、其徒三千、獨り顏子を稱して學を好むと爲す。夫れ詩書六藝、三千子習ひて通ぜざるにあらず。然らば則ち顏子の獨り好む所の者は何の學ぞや。伊川先生曰く、學は以て聖人に至るの道なりと。聖人學んで至るべきか。曰く、然り。(一)學の道如何。曰く、天地精を儲ふ。五行の秀を得たる者を人と爲す。其本や、眞にして靜なり。其未だ發せざるとき、五性具はる。曰く、仁・義・禮・智・信。形既に生り、外物其形に觸れて、其中を動かす。其中動いて、七情出づ。曰く、喜・怒・哀・樂・愛・惡・欲。(二)情既に熾にして益〻蕩(三)すれば、其性鑿たる。是の故に覺者は其情を約にして、中に合はしめ、其心を正しうし、其性を養ふ。愚者(四)は則ち之れを制することを知らず、其情を縱にして邪僻に至り、其性を梏(五)して之れを亡す。然して學の道、必ず先づ諸を心に明かにして養ふ所を知り、(六)然して後力め行うて以て至らんことを求む。所謂明かなるよりして誠なるなり。之れを誠にするの道は、道を信ずること篤きに在り。道を信ずる

濂溪先生曰。聖希天。賢希聖。士希賢。伊尹顏淵大賢也。伊尹恥其君不爲堯舜。一夫不得其所。若撻于市。顏淵不遷怒。不貳過。三月不違仁。志伊尹之所志。學顏子之所學。過則聖。及則賢。不及則亦不失於令名。聖人之道。入乎耳。存乎心。蘊之爲德行。行之爲事業。彼以文辭而已者陋矣。

卷之二

爲學類　凡百十一條

濂溪先生曰く、聖は天を希ひ、賢は聖を希ひ、士は賢を希ふと。伊尹顏淵(一)は大賢なり。伊尹は、其君の堯舜たらず、一夫も其所を得ざるを恥づること、市に撻たるゝが若し。顏淵は怒を遷さず、過を貳たびせず、三月仁に違はず。伊尹の志す所を志し、顏子(二)の學ぶ所を學ばゞ、過ぐるときは則ち聖、及ぶときは則ち賢、及ばざるも則ち亦令名(三)を失はじ。

(一) 顏回字子淵　(二) 顏回　(三) 名譽

聖人の道は、耳に入りて心に存し、之を蘊め(一)ば徳行と爲り、之を行へば事業と爲る。彼の文辭のみを以てする者は陋し(二)。

(一) 内心に蘊蓄すれば　(二) 徒らに文辭の末にのみ留るゝは陋なり

難○薄者開レ之也易○開則達二于天道一○與二聖人一一○

難易の別はあれども、既に開く時は天道に達し聖人の性と同一也

而無レ不レ覺。不下待二心使一至レ此而後覺上也。此所謂感而遂通。不レ行而至。不レ疾而速也。

て遂に通じ、行かずして至り、疾くせずして速なるなり。

㈠ 天地の化は陰陽の両端ありて而も両端もと一氣なるが故に其用神妙にして通ぜざるなし ㈡ どこに一寸觸れてもすぐ様感覺す

心統二性情一者也。

㈠心は性情を統ぶる者なり。

㈠ 統は主宰の義、心は性と情との主なり、故に心は性情を統ぶと云ふ也

凡物莫レ不レ有二是性一。由二通蔽開塞一。所三以有二人物之別一。由三蔽有二厚薄一。故有二智愚之別一。塞者牢不レ可レ開。厚者可二以開一而開レ之也

㈠凡そ物として是の性あらざるなし。㈡通蔽開塞に由つて、人物の別ある所以なり。蔽に厚薄あるに由つて、故に智愚の別あり。㈢塞がる者は牢として開くべからず。㈣厚き者は以て開くべくして、之を開くこと難し。薄き者は之を開くこと易し。開くときは則ち天道に達して、聖人と一なり。

㈠ 一物皆一性を具ふと也 ㈡ 通る、蔽はる、この二つは人の性也、塞がるは物の性也、これに對して人の性の「開く」べきをいへる也、即ち「通」「蔽」「開」の性を具すれば人たり、「塞」の性を具すれば物たりと也 ㈢ 物は開くべからず ㈣ 人の性、蔽に厚薄あり、共に開くべきも、其厚きものは開く事困難に、其薄きものは容易也、

物生既盈。氣日反而遊散。至之謂レ神。以二其伸一也。反之謂レ鬼。以二其歸一也。

て遊散す。至る之を神と謂ふ、其の伸ぶるを以てなり。反る之を鬼と謂ふ。其の歸るを以てなり。

●しげり長ず　㊁神と伸、鬼と歸、共に音通を假って意を釋する也

性者萬物之一源。非レ有二我之得私一也。惟大人爲三能盡二其道一。是故立必俱立。知必周知。愛必兼愛。成不二獨成一。彼自蔽塞。而不レ知レ順二吾理一者。則亦未二知レ之何一矣。

性は萬物の一源、我が得て私することあるにあらず。惟だ大人のみ能く其道を盡すと爲す。是の故に立つときは必ず倶に立ち、知るときは必ず周く知り、愛するときは必ず兼ね愛し、成るときは獨り成らず。彼の自ら蔽塞して、吾が理に順ふことを知らざる者は、則ち亦未だ之を如何ともすることなし。

●大人己が性を盡して能く人の性を盡す、己立てば人と倶に立ち、己知れば人にも知らしめ、己愛すれば必ず衆愛し、成る時は獨成らず人をも成らしむ、是れ大人の心に存する所なり　㊁通ぜずして理に順はざるもの

一故神。譬二之人身一。四體皆一物。故觸レ之

一なるが故に神なり。之を人身に譬ふるに、四體皆一物、故に之に觸れて覺らずといふことなし。心使此に至るを待つて而して後覺るにあらず。此れ所謂感じ

循環不レ已者。立二天地之大義一。

天體レ物不レ遺。猶二仁體レ事而無一レ不レ在也。禮儀三百。威儀三千。無二一物而非一レ仁也。昊天曰明。及レ爾出王。昊天曰旦。及レ爾游衍。無二一物之不一レ體也。

天の物に體として(一)遺さゞるは、猶ほ仁の事に體として在らざる無きがごとし。禮儀三百、威儀三千、一物として仁にあらざるなし。(二)昊天曰に明なり。爾と出で、王く。昊天曰に旦なり。爾と游衍す、と。(三)一物の體たらざることなき也。

(一) 物の體となりて　(二) 詩經大雅板に出づ。全意は、天道は明かなり、凡そ人の往來し或は游び息ふ所すべて此理あらざるはなしとなり。衍はゆたかなる義　(三) 此詩の意は即ち天が何物にも體となりて一物をも遺さざる意を表はすと也

鬼神者二氣之良能也。

鬼神は二氣(一)の良能なり。

(一) 二氣とは陰陽二氣をいふ。良能とは之をなすことなくして自然に之を能くするもの、則ち鬼神は陰陽二氣の自然のはたらきなりとの意

物之初生。氣日至而滋息。

物の初めて生ずる、氣日に至りて滋息(一)す。物生じて既に盈つれば、氣日に反つ

心生道也。有二是心一。斯具二是形一以生。惻隱之心。人之生道也。

心は生道なり。是の心あれば、斯に是の形を具へて以て生ず。惻隱の心は人の生道なり。

横渠先生曰。氣坱二然太虛一。升降飛揚。未二嘗止息一。此虛實動靜之機。陰陽剛柔之始。浮而上者陽之淸。降而下者陰之濁。其感遇聚結。爲二風雨一。爲二霜雪一。萬品之流レ形。山川之融結。糟粕煨燼。無レ非レ敎也。

(一)横渠先生曰く、氣(二)太虛に坱然として、升降飛揚し、未だ嘗て止息せず。(三)此れ虛實動靜の機、陰陽剛柔の始なり。浮いて上る者は陽の淸なり。降りて下る者は陰の濁なり。其の感遇聚結して、風雨と爲り、霜雪と爲る、萬品の形を流く、山川の融結する、糟粕(四)煨燼も、敎にあらずといふことなし。

(一) 張載字子厚　(二) 元氣盛大にして虛空に充ち滿つ　(三) 以下皆道體の流行なり、故に至敎にあらざることなし
(四) 火のもえさしの殘灰

游氣紛擾。合而成レ質者。生二人物之萬殊一。其陰陽兩端。

游氣紛擾して、合して質を成す者は、人物の萬殊を生ず。其陰陽の兩端、循環して已まざる者は、天地の大義を立つ。

實一也。心本善。發二於思慮一。則有レ善有二不善一。若既發則可レ謂二之情一。不レ可レ謂二之心一。譬如レ水。只可レ謂二之水一。至レ如下流而爲レ派。或行二於東一。或行中於西上。却謂二之流一也。

ち之を情と謂ふべし。之を心と謂ふべからず。(二)譬へば水の如し。只だ之を水と謂ふべきも、流れて(三)派と爲りて、或は東に行き、或は西に行くが如きに至りては、却つて之を流と謂ふ。

(一) 心はもと善なり情に發して善となり不善となる (二) 喩を水に假りて説明す (三) 水の分流をいふ

性出二於天一。才出二於氣一。氣清則才清。氣濁則才濁。才則有レ善有二不善一。性則無二不善一。性者自然完具。信只是有二此者一也。故四端不レ言レ信。

(一)性は天に出で、才は氣に出づ。氣清きときは則ち才清く、氣濁るときは則ち才濁る。才には則ち善あり不善あり。性には則ち不善なし。

(一)性は自然に完く具はる。信は只だ是れ此れを有る者なり。故に(二)四端には信を言はず。

(一) 性は天の命なり、才は已の氣に生ず、故に善と不善とあり、性には不善なし

(一) 性は自然に仁義禮智の四者を完具す、實にこの四者を有するものを信とす (二) 孟子の説ける所にして、惻隱の心は仁の端、羞惡の心は義の端、辭讓の心は禮の端、是非の心は智の端なりといふを指す

大槩研中窮之上。二三歲得レ之。未レ晩也。

性卽理也。天下之理。原二其所一レ自。未レ有二不善一。喜怒哀樂未レ發。何嘗不善。發而中レ節。則無二往而不一レ善。故凡言二善惡一。皆先レ善而後レ惡。言二吉凶一。皆先レ吉而後レ凶。言二是非一。皆先レ是而後レ非。

性は卽ち理なり。天下の理、其の自る所を原ぬるに、(一)未だ不善あらず。喜怒哀樂の未だ發せざる、何ぞ嘗て不善ならん。發して節に中れば、(二)則ち往くとして善ならざることなし。故に凡そ善惡を言へば、皆善を先にして惡を後にす。吉凶を言へば、(三)皆吉を先にして凶を後にす。是非を言へば、皆是を先にして非を後にす。

(一)其根源をたづね明かにするに　(二)發して節に中れば善、發して節に中らざれば不善　(三)事の初は善也吉也是也、故に人の詞自然に亦之を先にすと也

問。心有二善惡一否。曰。在レ天爲レ命。在レ物爲レ理。在レ人爲レ性。主二於身一爲レ心。其

問ふ、心に善惡ありや否や。曰く、天に在りては命と爲し、物に在りては理と爲し、人に在りては性と爲し、身に主としては心と爲す。其實は一なり。心は本(一)善なり。思慮に發するときは、則ち善あり不善あり。若し既に發するときは、則

愛自是情。仁自是性。豈可ニ專以レ愛爲レ仁。孟子言。惻隱之心仁之端也。既曰ニ仁之端一。則不レ可三便謂ニ之仁一。退之言ニ博愛之謂レ仁。非也。仁者固博レ愛。然便以ニ博愛一爲レ仁。則不可。

爲すは、則ち不可なり。

㊀ 仁を問ふ人々を指す ㊁ 身に體してよく其眞理を認め知るべし ㊂ 情と性と混同すべからず ㊃ 仁の端緒、仁の由つて來る緒口にして仁其物に非ず ㊄ 韓退之「原道」の語

問。仁與レ心何異。曰。心譬如ニ穀種一。生之性便是仁。陽氣發處乃情也。

問ふ、仁と心と何ぞ異なる。曰く、心は譬へば穀種の如し。生の性は便ち是れ仁、陽氣の發する處は乃ち情なり。

㊀ 心を穀種に喩へて說明す ㊁ 性と情との別を說く

義訓レ宜。禮訓レ別。智訓レ知。仁當ニ何訓一。說者謂。訓レ覺訓レ人。皆非也。當下合ニ孔孟言レ仁處一。

義を宜と訓じ、禮を別と訓じ、智を知と訓ず。仁は當に何とか訓ずべき。說く者謂ふ、覺と訓じ人と訓ずと。皆非なり。當に孔孟の仁を言ふ處を合せて、大槩に之を研窮すべし。二三歲にして之を得とも、未だ晩からざる也。

㊀ 訓とは他の字を假りて其字義を解する也、仁は心の全德なれば某の一字もて訓ずべからず ㊁ 說を爲す者

之氣。生生之理。自然不レ息。如三復卦言二七日來復一。其間元不二斷續一。陽已復生。物極必返。其理須レ如レ此。有レ生便有レ死。有レ始便有レ終。

(一)六頁の註に出づ　(二)日は月なり故に七日は七月のことゝす、陽五月に消えて十一月に生ず、凡て七月なり、消極まつて生ず、物極まれば必ず返るは理の自然なり

明道先生曰。天地之間。只有二一箇感與一レ應而已。更有二甚事一。

明道先生曰く、天地の間、(一)只だ一箇の感と應とあるのみ。更に甚の事かあらん。

(一)前の感應の處を見よ

問レ仁。伊川先生曰。此在二諸公自思一レ之。將二聖賢所レ言仁處一。類聚觀レ之。體二認出來一。孟子曰。惻隱之心仁也。後人遂以レ愛爲レ仁。

仁を問ふ。伊川先生曰く、此れ諸公自ら之を思ふに在り。聖賢仁を言ふ所の處を將つて、類聚して之を觀て、(二)體認し出し來れと。孟子曰く、惻隱の心は仁なりと。後人遂に愛を以て仁と爲す。(三)愛は自ら是れ情、仁は自ら是れ性、豈に專ら愛を以て仁と爲すべけんや。孟子言ふ、惻隱の心は(四)仁の端なりと。既に仁の端と曰ふときは、則ち便ち之を仁と謂ふべからず。(五)退之は博く愛する之を仁と謂ふと言ふ。非なり。仁者は固より博く愛す。然れども便ち博く愛するを以て仁と

已應不二是後一。如下百尺之木。自二根本一至二枝葉一。皆是一貫上。不レ可レ道下上面一段事。無レ形無レ兆。却待二人旋安排一。引入來教レ入二塗轍一。既是塗轍。却只是一箇塗轍。

し。上面一段の事、形なく兆なく、却つて人の旋〻安排するを待つて、引き入れ來つて塗轍(二)に入らしむと道ふべからず。(三)既に是れ塗轍あれば、却つて只だ是れ一箇の塗轍なり。

(一) 無色無臭無香無兆にして靜かなる中に萬象已に具はる　(二) みちすぢ　(三) 既にこれ理路あれば、此のみちすぢは一箇にして二致あるにあらずとなり。朱子曰く「父の慈、子の孝の如き、只是れ一條路、源頭より下り來るなり」と、蓋し此義也

近取二諸身一。百理皆具。屈伸往來之義。只於二鼻息之間一見レ之。屈伸往來只是理。不下必將二既屈之氣一。復爲中方伸

近く諸を身に取れば百理皆具はる。屈伸往來の義、只だ鼻息の間に於て之を見よ。屈伸往來只だ是れ理なり。必ずしも既に屈するの氣を將つて、復方に伸ぶるの氣と爲すにあらず。生生の理、自然に息まざるなり。(一)復の卦に、(二)七日にして來復すと言ふが如き、其間元斷續せずして、陽已に復生す。物極まれば必ず返る。其理須らく此の如くなるべし。生あれば便ち死あり。始あれば便ち終あり。

廳中非レ中。而堂爲レ中。言二一國一則堂非レ中。而國之中爲レ中。推二此類一可レ見矣。如下三過二其門一不上レ入。在二禹稷之世一爲レ中。若レ居二陋巷一則非レ中也。居二陋巷一在二顏子之時一爲レ中。若下三過二其門一不上レ入則非レ中也。

りては中たり、陋巷に居るが若きは則ち中にあらず。陋巷に居ること、顏子の時に在りては中たり、三たび其門を過ぎて入らざるが若きは、則ち中にあらざる也。

㊀ 中庸の「君子にして時に中す」とは何ぞ ㊁ 一の官廳の建物についていふときは ㊂ 禹が治水に從ふこと九年、其家の前を通ること三たびなるも、暇あらざるを以て入らざりし故事 ㊃ 其場合に於ける禹稷の立場としては ㊄ 其場合に於ける顏子の立場としては

無妄之謂レ誠。不レ欺其次矣。

（一）無妄之を誠と謂ふ。欺かざるは其次なり。

㊀ 一念一動みな自然の理にかなひ、一も僞なきをいふ。本註に「李邦直云はく、欺かざるを誠と謂ふと、便ち欺かざるを以て誠と爲す、徐中車云はく、息まざるを誠と謂ふと、中庸に言ふ、至誠は息む無しと、息む無きを以て誠を解するに非ざる也、或ひと以て先生に問ふ、先生曰く云々と」云々は卽ち本文の言ふ所を指す也

沖漠無朕。萬象森然已具。未レ應不二是先一。

（二）沖漠無朕、萬象森然として已に具はる。未だ應ぜざるも是れ先ならず、已に應ずるも是れ後ならず。百尺の木の、根本より枝葉に至るまで皆是れ一貫なるが如

不レ爲。擧子又摩レ頂放レ踵爲レ之。此皆不レ得レ中。至レ如二子莫執レ中。欲レ執二此二者之中一。不レ知怎麼執得。識得則事事物物上。皆天然有三箇中在二那上一。不レ待二人安排一也。安排著則不レ中矣。

す。此は皆是れ中を得ず。子莫(二)、中を執るが如きに至つては、此の二者の中を執らんと欲す。知らず怎麼(三)ぞ執り得ん。識得(四)するときは、則ち事事物物の上、皆天然に箇の中那の上に在るありて、人の安排するを待たず。安排著(五)するときは則ち中ならず。

㊀ 楊朱は利己説をなせる人なれば、天下のために一毛をぬくことも之をなさず。墨翟は兼愛説をなせる人なれば天下のためとならば頂の上よりかゝとに至るまで之を爲すとなり ㊁ 魯の賢人 ㊂ 中は一定の點に非ず、時にとりての理の當然なれば、之を執り得るものに非ず ㊃ 道理を也 ㊄ 著は助字也

問。時中如何。曰。中字最難レ識。須二是默識心通一。且試言。一廳則中央爲レ中。一家則

問ふ時中如何。曰く、中の字最も識り難し。須らく是れ默識心通すべし。且つ試(一)に言はんに、一廳(二)は則ち中央を中と爲す。一家は則ち、廳の中、中にあらずして、堂を中と爲す。一國を言ふときは、則ち堂は中にあらずして、國の中を中と爲す。此類を推して見るべし。三(三)たび其門を過ぎて入らざる如き、禹稷の世に在

思。不レ知二手之舞レ之足之蹈レ之也。

中者天下之大本。天地之間。亭亭當當。直上直下之正理。出則不レ是。惟敬而無レ失最盡。

伊川先生曰。公則一。私則萬殊。人心不レ同如レ面。只是私心。

凡物有二本末一。不レ可下分二本末一爲中兩段事上。灑掃應對是其然。必有三所二以然一。

楊子拔二一毛一

中は天下の大本、天地の間、亭亭當當、(一)直上直下(二)の正理なり。出づるときは(三)則ち是れならず。(四)惟だ敬して失ふことなきは最も盡くせり。

㊀ まつすぐにして、ほどにあたりたる義 ㊁ 上下左右に通じてさはりなき義 ㊂ 此中發して外に出づる時は既に中ならず（和也） ㊃ 敬して其中を失はざるは中を存養するの工夫として最も盡せる也

伊川先生曰く、公なるときは則ち一なり。私なるときは則ち萬殊(一)なり。人心の同じからざること面の如くなるは、只だ是れ私心なり。

㊀ 種々樣々

凡そ物本末あり。本末を分ちて兩段の事と爲すべからず。灑掃應對(一)是れ其れ然り。必ず然る所以あり。

㊀ 灑掃應對は弟子の禮節にて修養上の事としては末節なれども其修養たる理に於ては本末精粗あるなしと也

楊子(一)は一毛を拔くこともせず、墨子は又頂を摩つて踵に放るまでも之を爲

命一以至二於教一。我無二加損一焉。此舜有二天下一而不レ與焉者也。

觀二天地生レ物氣象一。

萬物之生意最可レ觀。此元者善之長也。斯所謂仁也。

滿腔子是惻隱之心。

天地萬物之理無レ獨。必有レ對。皆自然而然。非レ有二安排一也。每二中夜以

天地の物を生ずる氣象を觀る。(一)

㊀人、天地生々の氣を觀て、其本然の性に歸るときは、良心油然として起るべしとなり。本註に「周茂叔看る」とあり、蓋し周子が窓前の草を除かしめずして、生意自家と一般なりといへるに基き、此事程子に始まらざるを明かにする也

萬物の生意最も觀るべし。此れ元(一)は善の長なり。斯れ所謂仁なり。

㊀易の乾の卦の文言に「元亨利貞」とある中の元なり

滿腔子(一)是れ惻隱の心。

㊀滿腔子とは滿身といふに同じ。惻隱の心とは人をあはれむの心、仁の心なり

天地萬物の理獨りなるなし、必ず對あり。皆自然にして然り。安排(一)あるにあらず。中夜(二)以て思ふ每に、手の之を舞ひ足の之を蹈むことを知らず。

㊀強ひて爲すことにてはなしとの義 ㊁この理を思ふごとに條理通達して愉快の情禁じがたしと也

者善也者。猶二水流而就一レ下也。皆水也。有二流而至レ海。終無レ所レ汚。此何煩二人力一之爲也。有二流而未レ遠。固已漸濁。有二出而甚遠。方有レ所レ濁。有二濁之多者一。有二濁之少者一。清濁雖レ不レ同。然不レ可下以二濁者一不上レ爲レ水也。如レ此。則人不レ可レ不下以不上加二澄治之功一。故用レ力敏勇。則疾清。用レ力緩怠。則遲清。及二其清一也。則却只是元初水也。不三是將レ清來換二却濁一。亦不下是取二出濁一來置中在一隅上也。水之清則性善之謂也。故不下是善與レ惡在二性中一爲二兩物一相對。各自出來上。此理天命也。順而循レ之則道也。循レ此而修レ之。各得二其分一則敎也。自二大

來りて濁れると換(六)却するにあらず。亦是れ濁れるを取り出し來りて一隅に置在(七)するにあらず。水の清めるは則ち性善の謂なり。故に是れ善と惡と性の中に在りて、兩物と爲り相對して、各自に出で來るにあらず。此理は天命なり。順ひて之に循ふは則ち道なり。此に循つて之を修め、各々其分を得るは則ち敎なり。天命より以て敎に至るまで、(八)我加損することなし。此れ舜が天下を有ちて與らずといへる者なり。

(一) 善と惡とを云ふ　(二) 本註に「后稷の克く岐に克く嶷なる、子越椒の始めて生るゝとき、人其必ず若敖氏を滅さんとを知れる類」　(三) 樂記に「人生而靜天之性也」といふ、ノ初めて生れて人欲起らざる時以て性の說を容るべし、それより以上は既に生後の氣質に動かされてまた本然の性に非ず、卽ち性の說を容るべからずと也　(四) 易繫の「一陰一陽之謂レ道、繼レ之者善也、成レ之者性也」の義を以て說くのみと也　(五) 水をすましむること　(六) 修養を積むに喩ふ、すつかりとりかへる義　(七) おく　(八) 天理のまゝにして我之を增減せず

生氣稟理有善惡。然不是性中元有此兩物。相對而生也。有自幼而善。有自幼而惡。是氣稟有然也。善固性也。然惡亦不可不謂之性也。蓋生之謂性。人生而靜以上不容說。才說性時。便已不是性也。凡人說性。只是說繼之者善也。孟子言性善是也。夫所謂繼之

よりして善なるあり、幼よりして惡なるあり。是れ氣稟の然ることあるなり。善は固より性なり、然れども惡も亦之を性と謂はざるべからず。蓋し生を性と謂ふ。人生れて(三)靜なるの以上は說を容れず。才に性と說く時は、便ち已に是れ性にあらず。凡そ人の性を說くに、只だ是れ之を繼ぐ者は善なるを說く也。孟子性善を言ふ是なり。夫の所謂之を繼ぐ者は善なりとは(四)、猶ほ水の流れて下に就くがごとし。皆水なり。流れて海に至つて、終に汚るゝ所なきあり。此れ何ぞ人力を煩はすことをせん。流れて未だ遠からずして、固より已に漸く濁るあり。出でて甚だ遠くして、方に濁る所あるあり。濁ることの多き者あり。濁ることの少き者あり。淸濁同じからずと雖も、然も濁れる者を以て水と爲さずんばあるべからず。此の如きときは、則ち人以て(五)澄治の功を加へざるべからず。故に力を用ふること敏勇なれば、則ち疾く淸み、力を用ふること緩怠なれば、則ち遲く淸む。其淸めるに及びては、則ち却りて只だ是れ元初の水なり。是れ淸めるを將ち

醫書言二手足痿痺一爲二不仁一。此言最善名狀。仁者以二天地萬物一爲二一體一。莫レ非レ己也。認二得爲上レ己。何所レ不レ至。若不レ有二諸己一。自不三與レ己相干一。如二手足不仁一。氣已不レ貫。皆不レ屬レ己。故博施濟衆。乃聖之功用。仁至難レ言。故止曰。己欲レ立而立レ人。己欲レ達而達レ人。能近取レ譬可レ謂二仁之方一也已。欲レ令四如レ是觀レ仁。可三以得二仁之體一。

醫書に手足の痿痺するを言ひて不仁と爲す。此言最も善く名狀す。仁者は天地萬物を以て一體と爲す。己にあらずといふこと莫し。(一)己たることを認め得ば何ぞ至らざる所あらん。若し諸を己に有せずば、自ら己と相干らず。手足の不仁、氣已に貫かずして、皆己に屬せざるが如し。故に博く施し濟ふこと衆きは、乃ち聖の功用なり。仁は至つて言ひ難し。故に止だ曰く、(二)己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す。能く近く譬を取るを、仁の方と謂ふべきのみと。是の如く仁を觀て、以て仁の體を得べからしめんことを欲す。

(一) 天地萬物皆自己と一體なるを體認し得ば心何物にもゆきとゞきて至らざるなし　(二) 論語に出でたる孔子の言

生之謂レ性。性卽氣。氣卽性。生之謂也。人

生を性と謂ふ。性は卽ち氣、氣は卽ち性、生の謂なり。人生の氣稟、理として善惡あり。然れども是れ性の中元此の(一)兩物ありて、相對して生ずるにあらず。(二)幼

體則謂二之易一。其理則謂二之道一。其用則謂二之神一。其命二于人一則謂二之性一。率レ性則謂二之道一。修レ道則謂二之教一。孟子去二其中一。又發二揮出浩然之氣一。可レ謂レ盡矣。故說。神如レ在二其上一。如レ在二其左右一。大小大事。而只曰。誠之不レ可レ揜如レ此夫。徹上徹下不レ過レ如レ此。形而上爲レ道。形而下爲レ器。須レ著二如レ此說一。器亦道。道亦器。但得二道在一。不レ繫二今與レ後己與レ人。

去りて、又浩然の氣を發揮し出す。盡せりと謂ふべし。故に說く、神其上に在すが如く、其左右に在すが如しと。(六)大小の大事にして、只だ曰ふ、(五)誠の揜ふべからざること此の如きかと。(七)徹上徹下此の如くなるに過ぎず。(八)形而上なるを道と爲し、(八)形而下なるを器と爲す。須らく此の如き說を著くべし。器も亦道なり。道も亦器なり。但だ(九)道在ることを得れば、今と後と己と人とに繫らず。

(一) 忠信とは眞心と實誠なり (二) 勉めてやまざる貌 (三) 在天とは天に在る上帝を指す。原文に對越とある越の字は於と同義の助字なり。全意は、君子は終日天帝に對して敬畏することを忘るべからず、然らば自ら忠信に進むべしとなり (四) 一說「其中に去りて」と訓じ、去をゆくの義とす、亦通ず (五) 中庸の語 (六) 多少と同義 (七) 徹頭徹尾此理以外に出でず (八) 形體を超越したるもの、卽ち形なきものを形而上といひ、形體あるものを形而下といふ。則ち形而上は本體にして形而下は現象なり (九) 人よく道に體し、道我に在ることを得れば彼我現未の別なく往くとして皆道に適ふと也

道者。孰能識レ之。

仁者天下之正理。失二正理一則無レ序而不レ和。

明道先生曰。天地生レ物。各無二不足之理一。常思天下君臣父子兄弟夫婦。有二多少不レ盡レ分處一。

(一) 動靜相推し陰陽移り行きて間斷なきこと循環の端なきが如し、道は固より間斷なく端なく始なし

仁(一)は天下の正理なり。正理を失ふときは、則ち序なくして和せず。

(一) 人不仁なるときは則ち私慾交々亂れて正理を害す固より舛逆して序なかるべく乖戾して和せざるべしとなり

明道先生(一)曰く、天地の物を生ずる、各々不足の理なし。常に思へ、天下の君臣・父子・兄弟・夫婦、多少分を盡さゞる處あらんを。(二)

(一) 程顥伯淳(伊川の兄) (二) 人々其日々に行ふ處其分を盡せりや否やを省みよとなり

忠信所二以進一レ德。終日乾乾。君子當三終日對二越在一レ天也。蓋上天之載。無レ聲無レ臭。其

(一)忠信は德に進む所以。終日乾乾(二)すとは、君子は當に終日在天(三)に對すべしと也。蓋し上天の載は、聲もなく臭もなし。其體は則ち之を易と謂ふ。其理は則ち之を道と謂ふ。其用は則ち之を神と謂ふ。其人に命ずるをば則ち之を性と謂ふ。性に率ふをば則ち之を道と謂ふ。道を修むるをば則ち之を敎と謂ふ。孟子(四)其中より

唯自暴者拒レ之以レ不レ信。自棄者絕レ之以レ不レ爲。雖二聖人與居一不レ能二化而入一也。仲尼之所レ謂下愚也。然天下自棄自暴者。非二必皆昏愚一也。往往強戾。而才力有二過レ人者一。商辛是也。聖人以三其自絕二於善一。謂二之下愚一。然考二其歸一則誠愚也。既曰二下愚一。其能革レ面何也。曰。心雖レ絕二於善道一。其畏レ威而寡レ罪。則與レ人同也。唯其有二與レ人同一。所以知三其非二性之罪一也。

は、則ち誠に愚なり。既に下愚と曰ふ、其能く面を革むる(七)は何ぞや。曰く、心善道を絶つと雖も、其の威を畏れて(八)罪を寡くするは、則ち人と同じ。唯だ其れ人と同じきあり、其の性の罪にあらざることを知る所以なり。

㊀ 易の爻辭に「小人は面を革む」といふ如く其内を革むべからざるものあるは何ぞや ㊁ 論語に「上智と下愚とは移らず」と。其昏弱の極まる者善に移らざるを云ふ ㊂ 孟子「言禮義を非(ソシ)る之を自暴と謂ふ、吾が身仁に居り義に由る能はざる之を自棄と謂ふ」と。自暴とは善を信せず自ら其德を暴害する者、自棄とは其善を知ると雖も怠廢して爲さず其性を棄絶する者、共に下愚 ㊃ 孔子のあざな ㊄ 殷の紂王 ㊅ 歸結、結局の所 ㊆ 內心は兎もあれ外面を改め飾ることなり ㊇ 刑の威を畏れて罪を作らぬやうに心掛くること

在レ物爲レ理。處レ物爲レ義。

(一)物に在るを理と爲し、物を處するを義と爲す。

㊀ 物事必ず理あり、其理に合ふやうに物事を處理するを義とす

動靜無レ端。陰陽無レ始。非レ知レ

(二)動靜端なく、陰陽始なし。道を知る者にあらずんば、孰か能く之を識らん。

非二一定之謂一也。一定則不レ能レ恒矣。唯隨レ時變易。乃常道也。天地常久之道。天下常久之理。非二知レ道者一。孰能識レ之。

ち常の道なり。天地常久の道、天下常久の理、道を知る者にあらずんば、孰か能く之を識らん。

㊀ 恒とはいつも同一狀態にありて變化せずとの謂に非ず、變易して窮りなきの謂ぞと也

人性本善。有二不レ可レ革者一何也。曰。語二其性一則皆善也。語二其才一則有二下愚之不レ移。所レ謂下愚有レ二焉。自暴也。自棄也。人苟以レ善自治。則無二不レ可レ移者一。雖二昏愚之至一。皆可二漸磨而進一。

人性は本善なり、革むべからざる者あるは何ぞや。曰く、其性を語るときは則ち皆善なり。其才を語るときは則ち下愚の移らざるあり。所謂下愚に二あり。(三)自暴なり、自棄なり。人苟も善を以て自ら治むるときは、則ち移るべからざる者なし。昏愚の至と雖も、皆漸磨して進むべし。唯だ自暴の者は之を拒んで以て信ぜず。自棄の者は之を絶つて以て爲さず。聖人と與に居ると雖も、化して入ること能はず。(四)仲尼の所謂下愚なり。然れども天下の自棄自暴の者は、必ずしも皆昏愚なるにあらざるなり。往往强戾にして、才力人に過ぎたる者あり。(五)商辛是なり。聖人其の自ら善を絶つを以て、之を下愚と謂ふ。然して其歸を考ふるとき(六)

皆以靜爲見天地之心。蓋不知動之端。乃天地之心也。非知道者。孰能識之。

に非ずんば、孰か能く之を識らん。

（一）一陽來復の意なり

仁者天下之公。善之本也。

仁は天下の公、善の本なり。（一）

（一）一片の私心なきを云ふ

有感必有應。凡有動皆爲感。感則必有應。所應復爲感。所感復有應。所以不已也。感通之理。知道者默而觀之可也。

感あれば必ず應あり。（一）凡そ動くことあれば皆感を爲す。感ずるときは則ち必ず應あり。應ずる所復感を爲し、感ずる所復應あり。已まざる所以なり。感通の理、道を知る者默して之を觀ば可なり。

（一）感は心の動き、應は其動きを受けて動く心的作用也

天下之理。終而復始。所以恆而不窮。恆

天下の理、終りて復始まる、恆にして窮らざる所以なり。（一）恆とは一定の謂にあらず。一定なるときは則ち恆なること能はず。唯だ時に隨つて變易するは、乃

之理。變二於上一則生二於下一。無二間可レ容レ息也。聖人發二明此理一。以見下陽與二君子之道一不上レ可レ亡也。或曰。剝盡則爲二純坤一。豈復有レ陽乎。曰。以レ卦配レ月。則坤當二十月一。以二氣消息一言。則陽剝爲レ坤。陽來爲レ復。陽未二嘗盡一也。剝二盡於上一。則復二生於下一矣。故十月謂二之陽月一。恐レ疑二其無一レ陽也。陰亦然。聖人不レ言耳。

に當る。氣の消息を以て言ふときは、則ち陽剝して坤と爲り、陽來りて復と爲る。(三)陽未だ嘗て盡きず。上に剝盡するときは、則ち下に復生す。故に十月を陽月と謂ふは、其の陽なきを疑はんことを恐れてなり。陰も亦然り。聖人言はざるのみ。

(三) ䷖を剝の卦と稱し、陰卽ち が勝ちて陽卽ち一は只だ 爻だけ存せり。これ恰も果實の多く落ちつくして只だ大なる果實の一個だけ存するが如し、此一果はまた種を生ずべしとなり。易の卦に於て陰陽の孰れか一を爻といふ、則ち一卦は六爻よりなる。而して下の爻より漸次上爻に算して、其爻が陰のみなれば初六・六二・六三・六四・六五・上六と呼び、陽のみなる時は初九・九二・九三・九四・九五・上九と稱す。剝の卦の一陽は卽ち上九なり ䷁ 坤の卦は六爻とも陰よりなる。故に剝の卦の上九が陰となり則ち上六に變ずるときは坤の卦となる ䷁ 復の卦は ䷗ にして、則ち剝の卦に比すれば上九（陽）去りて初九（陽）の新に復生せし象なり。月に配して十一月にあたる。

一陽復二於下一。乃天地生レ物之心也。先儒

(二)一陽下に復するは、乃ち天地物を生ずるの心なり。先儒皆靜を以て天地の心を見ると爲す。蓋し動の端は乃ち天地の心なることを知らざるなり。道を知る者

五常之仁。偏言則一事。專言則包二四者一。

則ち四者を包ぬ。

(一) 元亨利貞をいふ、易の語なり。元は卽ち其第一字にて、仁義禮智信に於ける仁の如しと也 (二) 仁を一方にかたよせ他の四（義禮智信）と相對していへば仁なる一事にして、仁そのものの實質を總括し專一にして之を言へば他の四は其内に包容さる、四德亦然りと也

天所レ賦爲レ命。物所レ受爲レ性。

天の賦(一)する所を命と爲し、物の受くる所を性と爲す。

(一) 賦與なり、生れながらに天よりうくるをいふ

鬼神者造化之迹也。

鬼神は造化の迹なり。

剝之爲レ卦。諸陽消剝已盡。獨有二上九一爻一尙存。如下碩大之果不レ見レ食。將上レ有二復生之理一。上九亦變則純陰矣。然陽無レ可レ盡

剝(一)の卦たる、諸陽消剝して已に盡きんとす。獨り上九の一爻の尙ほ存するあり、碩大の果の食はれずして、將に復生ずるの理あらんとするが如し。上九も亦變ずるときは、則ち純陰なり。然れども陽盡くべきの理なければ、上に變ずるときは則ち下に生じ、間に息を容るべきなし。聖人此理を發明して、以て陽と君子の道との亡ぶべからざることを見す。或は曰く、剝盡くるときは則ち純坤と(一)爲る、豈に復た陽あらんやと。曰く、卦を以て月に配するときは、則ち坤は十月

體而言者。有指用而言者。惟觀其所見如何耳。

乾天也。天者乾之形體。乾者天之性情。乾健也。健而無息之謂乾。夫天專言之則道也。天且弗違是也。分而言之。則以形體謂之天。以主宰謂之帝。以功用謂之鬼神。以妙用謂之神。以性情謂之乾。

所如何と觀るのみ。

乾は天なり。天は乾の形體にして、乾は天の性情なり。乾は健なり。健にして息むことなき、之を乾と謂ふ。夫れ天は(一)專ら之を言ふときは則ち道なり。(二)天すら且つ違はずといふは是なり。分つて之を言ふときは、則ち形體を以て之を天と謂ひ、(三)主宰を以て之を帝と謂ひ、功用を以て之を鬼神と謂ひ、妙用を以て之を神と謂ひ、性情を以て之を乾と謂ふ。

㊀ 本註「寂然として動かざる是れ也」　㊁ 本註「感じて遂に天下の故（コト）に通ずる是也」

㊀「專言」と訓ずるも可、蓋し其實質を總括し一なる全體として言ふ義にて各方面より分ちて之を言ふの反對也　㊁ 易の乾卦文言の文に見ゆ。聖人と天とは一體にして違はざるをいへる也　㊂ 上に居て下をつかさどるといふ側より見て

四德之元。猶

(一)四德の元は、猶ほ五常の仁のごとし。(二)偏言すれば則ち一事にして、專言すれば

誠無爲。幾善惡。德愛曰仁。宜曰義。理曰禮。通曰智。守曰信。性焉安焉。之謂聖。復焉執焉。之謂賢。發微不可見。充周不可窮。之謂神。

（一）誠は無爲なり。（二）幾に善惡あり。德は愛するを仁と曰ひ、宜しきを義と曰ひ、（三）理あるを禮と曰ひ、通ずるを智と曰ひ、守るを信と曰ふ。性のまゝにし安んずる、之を聖と謂ふ。（四）復り執る、之を賢と謂ふ。發すること微にして見るべからず、充つること周くして窮むべからざる、之を神と謂ふ。

（一）亦周茂叔の言を錄する也　（二）動かんとするはづみ　（三）條理　（四）本然の性にかへり、之を執り守る

伊川先生曰。喜怒哀樂之未發謂之中。中也者言寂然不動者也。故曰。天下之大本。發而皆中節。謂之和。和也者言感而遂通者也。故曰。天下之達道。

（一）伊川先生曰く、（二）喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふと。中とは寂然として動かざる者を言ふなり。故に曰く、天下の大本なりと。發して皆節に中る、之を和と謂ふ。和とは感じて遂に通ずる者を言ふなり。故に曰く、天下の達道なりと。

（一）程頤字正叔（明道の弟）　（二）中庸の語をあげ易の文を合はせて其意を釋く也

心一也。有指

心は一なり。（一）體を指して言ふ者あり、（二）用を指して言ふ者あり。惟だ其見はるゝ

太極本無極也。五行之生也。各一二其性一。無極之眞。二五之精。妙合而凝。乾道成レ男。坤道成レ女。二氣交感化二生萬物一。萬物生生。而變化無レ窮焉。惟人也。得二其秀一而最靈。形既生矣。神發知矣。五性感動。而善惡分。萬事出矣。聖人定レ之。以二中正仁義一而主レ靜。立二人極一焉。故聖人與二天地一合二其德一。日月合二其明一。四時合二其序一。鬼神合二其吉凶一。君子修レ之吉。小人悖レ之凶。故曰。立二天之道一曰二陰與レ陽。立二地之道一曰二柔與レ剛。立二人之道一曰二仁與レ義。又曰。原レ始反レ終。故知二死生之說一。大哉易也。斯其至矣。

せ、月日と其明を合せ、四時と其序を合せ、鬼神と其吉凶を合す。君子は之を修めて吉なり。小人は之に悖りて凶なり。故に曰く、(一二)天の道を立てゝ陰と陽と曰ひ、地の道を立てゝ柔と剛と曰ひ、人の道を立てゝ仁と義と曰ふと。又曰く、始を原ねて終に反る。故に死生の說を知ると。大なるかな易や。斯れ其の至れるなり。

(一)周敦頤字茂叔　(二)無極即ち太極は周茂叔の學說に於ては宇宙の本體を指す、即ち絕對の一也、本條は則ち太極より陰陽を生じ、次で五行・男女・萬物等を生ずる順序を說けるもの也　(三)陰陽兩體の容儀、蓋し天地の生成對立して易らざるをいふ　(四)五行即ち水火木金土の氣なり。順布はしたがひて普く天地の間に流れしくの謂也　(五)春夏秋冬　(六)陰陽五行の精純の氣　(七)精神の氣陽發して智開け物事をわきまへ知る　(八)五常即ち仁義禮智信の性　(九)此句の下に朱子の本註あり「聖人の道は仁義中正のみ」と。以下本註といふは皆朱子本註の謂也　(一〇)本註「欲無し故に靜也」　(一一)人に於ける太極　(一二)易の說卦傳の語

濂溪先生曰。無極而太極。太極動而生陽。動極而靜。靜而生陰。靜極復動。一動一靜。互爲其根。分陰分陽。兩儀立焉。陽變陰合。而生水火木金土。五氣順布。四時行焉。五行一陰陽也。陰陽一太極也。

近思錄卷之一

道體類　凡五十一條

(一)濂溪先生曰く、(二)無極にして太極なり。太極動いて陽を生ず。動くこと極つて靜なり。靜にして陰を生ず。靜なること極つて復動く。一動一靜、互に其根と爲り、陰に分れ陽に分れて、(三)兩儀立つ。陽變じ陰合して、水・火・木・金・土を生ず。(四)五氣順布し、(五)四時行はる。五行は一陰陽なり。陰陽は一太極なり。太極は本無極なり。五行の生ずるや、各〻其性を一にす。無極の眞、(六)二五の精、妙合して凝る。乾道は男を成し、坤道は女を成す。二氣交感して、萬物を化生す。萬物生生して、變化窮りなし。惟だ人や、其秀を得て、最も靈なり。形既に生じ、(七)神發して知る。(八)五性感動して、善惡分れ、萬事出づ。聖人之を定むるに、(九)中正仁義を以てし、而して(一〇)靜を主として、(一一)人極を立つ。故に聖人は天地と其德を合

淳熙乙未之夏。東萊呂伯恭來自東陽。過予寒泉精舍。留止旬日。相與讀周子程子張子之書。歎其廣大閎博。若無津涯。而懼夫初學者。不知所入也。因共掇取其關於大體而切於日用者。以爲此編。總六百二十二條。分十四卷。蓋凡學者所以求端用力。處己治人。與夫所以辨異端。觀聖賢之大略。皆粗見其梗槩。以爲窮鄉晩進。有志於學。而無明師良友以先後之者。誠得此而玩心焉。亦足以得其門而入矣。如此然後求諸四君子之全書。沈潛反覆。優柔厭飫。以致其博。而反諸約焉。則其宗廟之美。百官之富。庶乎其有以盡得之。若憚煩勞。安簡便。以爲取足於此而可。則非今日所以纂集此書之意也。五月五日。朱熹謹識。

近思錄既成。或疑。首卷陰陽變化性命之說。大抵非始學者之事。祖謙竊嘗與聞次緝之意。後出晩進。於義理之本原。雖未容驟語。苟茫然不識其梗槩。則亦何所底止。列之篇端。特使之知其名義。有所嚮望而已。至於餘卷所載。講學之方。日用躬行之實。具有科級。循是而進。自卑升高。自近及遠。庶幾不失纂集之指。若乃厭卑近而騖高遠。躐等陵節。流於空虛。迄無所依據。則豈所謂近思者耶。覽者宜詳之。淳熙三年四月四日。東萊呂祖謙謹書。

しも朱子派の如く、事物につき其理を窮むるを要せず。又知るも行はざるの弊害を生ぜざるなり、何となれば知行の分離は、致良知ならざるに生ず。故に王陽明は朱子の大學章句を否定して、從來の大學を信じ、爲に古本大學旁注を著はせり。

なほ陽明の四言敎、及び門人につき論ずべきこと頗る多きも、紙數限りあるを以て之を略す。近時陽明に關する著述には、文學博士三宅雄次郎氏の王陽明、文學博士高瀨武次郎氏の陽明學新論、ヘンケの王氏陽明哲學 (Henke's Philosophy of Wang Yang-Ming, 1916) 等あり。

小柳司氣太

く、「好色ヲ好ミ惡臭ヲ惡ムガ如シ、好色ヲ好ムハ行ニ屬ス、好色ヲ見ルトキ已ニ好ミタル者ニシテ、見了ハリテ後ニ始メテ別ニ好ムト云フ心生ズルニアラズ」(傳上) 要するに見るも好むも同一體の心の作用のみ、かく知行は同一體なるにも拘はらず、孝を知りて之を行はざるは何ぞや、是れ人欲に隔斷せらるゝの爲なり。故に行はざれば、以て眞の知と爲すに足らざるなり。されば知といふも行といふも、其の指す所は一にして二ならず、唯だ教學の便宜上、之を分つに過ぎざるを知るべし。

第三良知說。朱子は主智說(Intellectualism)にして、大學の格物致知の知を知識と解したるに反し、陽明は主意說を執りて之を良知と解す。前述の如く心即理なるも、人欲の爲に隔斷せらるゝの恐れあり、故に之を掃ひ去らば本然の光を發揮すること、恰も浮雲の掩蔽を脫したる明月の如し。故に吾人の行爲は、極力人欲を去りて、天理に就くを要す、此天理即良知なり。之を徹底的に實踐するを致知即致良知といふ。故に致良知を克くすれば、天下の萬事に應酬して節に中り宜に適す、必ず

求むるの人欲より行ふときは、眞の孝に非ず、故にかゝる人欲あらば、之を正して純然たる天理に本づき、誠意より之を實行せざるべからずと。今朱王二子の說を並觀するに、朱子は二元論・經驗論にして、陽明は一元論・直覺論なりといふべし。

第二知行合一。前述の如く朱子は萬物の理を究めざれば、眞の道德的行爲を遂げがたしと稱す。卽ち先知後行なり。一步を進むるも、知行並進なり。朱子の意は、固より然らざるも其の末流に至りては、後には講究に急にして實踐を後にする者多し、陽明曰く「人必ズ食ヲ欲スルノ心アリテ然ル後ニ食ヲ知ル、食セント欲スルノ心ハ卽是レ意、卽是レ行ノ始ナリ、食味ノ美惡ハ、必ズ口ニ入ルヲ待チテ後ニ知ル、豈ニ口ヲ侍タズシテ、已ニ先ヅ知ル者アランヤ」（傳中）是に於てか陽明の行とは、吾人の所謂行爲のみを指す者に非らずして、一念の動く所卽意志變動の事實をも稱するを知るべし。行は知るよりも先きに發生する者なりといふ、陽明の見解は、今の心理學の傾向と頗る同じ者にして、主意說（Voluntaryism）と稱すべし。陽明又曰

即ち朱子の性に外ならず、人欲の夾雜する點よりいふ時は、朱子の所謂心は性情を兼ぬる者と同じ。　故に陽明も亦曰く、心ノ本體、即性、性即チ理（傳習錄卷上）

然れども朱王二子の異なる所は、朱子は客觀的の事物皆天理あらざるなし、故に事物の理を究めざれば、我が具有の理を徹底的に實踐し、効果を奏し難し、即主觀的の性と客觀的の理と一致せざれば、眞の知識といふべからず、眞の知識を得ざれば眞の道德的行爲も、亦遂げ難し、是れ大學の格物致知を以て、誠意正心に先んずる所以なりとなす。　陽明曰く、然らず、我心の本體既に衆理を具有す、唯だ憂ふる所は、其心の動くや、私欲の來りて之を蔽ふあるのみ。　故に心を動すの際、即意志發動の時に臨みて、誠意を要す、之を大學に徵するに、其の格物致知は、朱子の言ふ如く、事物につきて其理を推窮するに非ずして、吾心を正すの謂ひなり、故に曰く、「物ハ事ナリ、凡ソ意ノ發スル所、必ズ其事アリ、意ノアル之ヲ物トイフ、格トハ正ナリ、其ノ不正ヲ去リテ以テ正ニ歸スルナリ。」　之を例するに孝ならんとするの事あるも、若し虛名を

所謂大學の格物致知なり。格物致知とは、事物の理を究めて、我が固有の知識を徹底せしむるといふ。例すれば孝を行はんとする者は、先づ孝道といふ事物に關する知識卽理を十分に究めざるべからず、然らざれば自己の孝と爲して行ひし者も、或は其實不孝なるやも知るべからず。之に對して陽明曰く、心卽理なり、心は善惡を超絕したる至善にして、衆理を藏する者なり。唯だ其れ意念の動く所、惡に陷るなきを保せず、故に大學の所謂誠意を要す。心旣に衆理を具有す。故に誠意によりて此心の本體を全くする時は、天下事物の理自ら明ならざるはなし。親に事ふるは、此心を外にして、別に父母に求むべからず、其の工夫は只だ天理を存し、人欲を去るに在るのみ、天下又心外の事、心外の理あらんやと。今朱王二子の意を案ずるに性卽理といひ心卽理といふもの、究竟するに、其用語の解釋の差違に歸する者の如し。朱子は心をば善惡を兼ぬる者となし、性をば絕對善となす。陽明は心をば絕對善となすも、人類の欲あるが故に、誠意の必要を主張す。故に絕對善の本體は、

理學又は宋學といふ、此れ其第三期なり。　而して王陽明は、朱子の後殆んど三百年に生れ、遙かに朱子の競爭者たる陸象山の學統を繼ぎ、別に一家言を開き、其門人天下に遍く、更に海を渡りて遠く我國に波及し、三輪執齋・中江藤樹・熊澤蕃山以下綿々として絕えず、以て今日に傳ふ、是れ實に支那哲學掉尾の大觀といふべし。　故に陽明の哲學思想を述ぶるに、先づ朱子の哲學思想を知らざるべからず、故に簡明に之を竝叙せんとす。

第一心卽理。　朱子は周濂溪の太極圖說に本づき、說を立てゝ曰く性卽理なり、性とは天より直路一下、吾人に賦與せられたる絕對的善なり、換言すれば天理と同一體なり、人人皆此性あらざるはなし、然るに惡を爲す者は、情ありて之を害するに外ならず、心とは此性情を兼ねたる者なり、故に心に善惡の別あれば、其行爲の標準となすべからざること明けし。　朱子又曰く、世間一切の事物、盡く天理を有せざるなし、故に之を討究せざれば、以て吾心の理と一致し、以て本然の性を實現し難し、是れ

ふ。其詳傳を知らんと欲せば、明史一百九十五の本傳、及び全書中の年譜等を見よ。

第三　王陽明の哲學思想

支那の哲學思想は、孔老二氏に起り、春秋の末より戰國に亙りて二百餘年間、諸子百家並び起る。或は申商韓非の軍國主義を唱ふるあり、或は墨子の博愛平等主義を唱ふるあり、楊朱の利己快樂說あり、公孫龍子の論理學、鬼谷子の辨論術あり、恰も華萠の艷を競ふが如し、此れ其第一期なり。漢武帝(西曆紀元前二世紀)に至り、民心の統一を圖り、儒教に與ふるに國教の地位を以てす、是に於て六經の研究非常に發達して、後漢の鄭玄(西曆二世紀)に至り、精を極め微を穿つ、之を訓詁又漢學といふ。然るに一方に於ては、後漢の半頃より佛教支那に來り、老莊の思想も亦之に伴ふて發達し、魏晉六朝三百餘年間、互に鼎立して以て唐に至る。此れ其第二期なり。五代を經過し、趙宋の半頃に及び、周濂溪・張橫渠・程明道・程伊川・邵康節等比肩して興り、皆儒教に本づきて佛老二氏を融和し、朱子(西曆十二世紀)集めて之を大成す、之を性

聖人の遺言に徴するも、決して誤まらず、良知の二字は、實に聖聖相傳の一滴なりと。
已にして武宗崩じ、世宗位に卽くに及び、陽明の功績は始て認められ、南京兵部省尙書に任ぜられ、新建伯に封ぜらる、其の嘉德六年五月、命を奉じて廣西省地方の反徒を征し、凱旋の途中、病を得て南安（福建省內）に沒す、時に十一月二十九日辰刻なり、享年五十有七。其病源明ならずと雖も、年譜に「先生起坐咳喘不已」とあれば、恐くは肺患に非ざるか。疾篤きや門人周積來り謁す、陽明問ふて曰く、子が近來の學業如何と、又曰く病勢太だ危し、然れども死せざる者は元氣のみと。廿九日に至り、周積再び入見す、陽明今や昏睡の境に在りしが、やがて目を開いて積を見て曰く、吾去らんと、積涕泣して遺言を問ふ、微笑して曰く、「此心光明、亦復何言」と。其十一月之を洪溪に葬る、會者千餘人、皆哲人の長逝を嘆ぜざるなし。陽明は父を華（字德輝）、母を鄭氏といふ、其先世は晉の有名なる書家王右軍義之なり。陽明初め子なし、弟の子正憲を養ふて後となす、晩年子正億を生む、穆宗の隆慶年間新建伯の號を襲ぐとい

刻も、皆此間に行はる。
正徳十四年、四十八歳の時、江西に在るや、其の六月十五日寧王宸濠兵を擧げて反す、宸濠は皇族にして、江西省南昌に封ぜらる、久しく禍心を包藏し、今や機を得て、一擧に南康を破り、九江を陷れ、直に帝都北京を犯さんとす、遠近皆風を望んで潰ゆ。陽明之を聞いて、變事を上奏し、義兵を糾合し、連戰連勝遂に宸濠を虜にす、日を費すこと數旬に過ぎず。然るに宦者陽明の大功を忌みて讒陷至らざるはなく、誣ふるに陽明が大兵を擁して、反亂を企つるを以てす。然れども陽明は憂へず、驚かず、草庵の中に宴坐し、或は同志と質疑講學するのみ。如此にして五十歳の時「致良知」の教を立つ。是れ陽明思想の第三歩にして、かの三十六歳、龍場驛に於て始めて心卽理を發揮し、其翌年知行合一の旨を明かにしたるより、是に至るまで實に十五年なり、此三諦は陽明學の骨子又神髓なれば、此に至りて大成の境に達したりといふべし。陽明曰く、吾が此の良知說は百死千難の中より鍛鑄し來りたる者にして、之を

にして、朱子の格物致知の解釋は、甚だ聖人の眞意と異なることを知り、かねて記憶せる經書を以て、此を證するに、歴々として吻合せざるはなし、是に於て五經臆說を著して之を發揮す。是れ實に陽明が始めて自家獨得の思想を建設せし第一歩にして、之を心卽理の說といふ。實に武宗の正德三年、三十七歳の時なり。其翌年、始めて更に知行合一の旨を論ず。是れ陽明思想の第二歩なり。已にして三十九歳の時、劉瑾退けられ、陽明の寃罪自ら雪がれしかば、赦されて廬陵縣の知縣となり、諸官に歴任して、四十七歳の時、都察院右副都御史に拜し、世襲百戶を賜ふ。此七八年間は、或は中央府に出でて學政を掌り、或は福建省地方の蠻賊土匪を掃蕩し、恩威並行はれて大功あり。而して門人同志を蒐め、講學讀書、未だ嘗て一日も廢せざるなり。故に門人かつて書を贈りて、其戰功を賀するや、陽明答へて曰く、「破二山中賊一易、破二心中賊一難、區區剪二除鼠賊一何足レ爲レ異、若諸君掃二蕩心胸之寇一以收二廓淸平定之功一此誠大丈夫不世之偉績」と、以て其の志の在る所を知るべし。古本大學の印刻も、傳習錄の初

亡命無賴の徒のみ。談ずべきの人なく、讀むべきの書なし。陽明は如此き蠻烟瘴霧の地に在りて、如何なる態度を取りたるか。世上の區々たる得失榮辱は、已に彼が心を動かすに足らず、然れども生死の一念、未だ脫却せざる者あり。乃ち石槨を爲りて自ら誓つて曰く、吾は惟だ運命の來るを俟つのみと。日夜靜坐澄心、以て內省を凝らせしかば、胸中も自ら洒々落々たるを覺ゆ。されば其の從者は、皆病み勞れて氣力なかりしかば、自ら薪水の勞に當りて、看護至らざるなく、又時としては雅調俚歌とりまぜて面白く歌ひ聞かせ、彼等をして無聊と疾苦とを忘れしめたり。かくて數旬の後、竊かに以爲へらく、若し聖人をして此地に處らしめば如何なる處置を取るか、訪ふべきの師なく、讀むべきの書なし、目を擧ぐれば山河の異を見るのみと。一夜忽然として格物致知の眞意を直覺し、覺えず歡喜の聲を揚げて、躍り出でしかば、從者皆驚きたり。乃ち聖人の道はすでに吾心に於て具はれり、何ぞ他に求むるを要せん、書籍なきを憂へず、師友なきを恐れず、既往の精神修養は、全然誤謬

ことゝて、虎穴の附近なりしかば、夜半の頃、羣虎廟邊を繞りて大に吼えしかども、幸にも侵入せずして、曉に至りぬ。寺僧は陽明の虎害に罹りしことを推察し、彼の財嚢を剝ぎ取らんため、尋ね來りしに、其の熟睡に一驚を喫し、其膽勇に心折し、寺に迎へて、厚く前夜の無禮を謝せり。然るに僧中の一人は、偶々二十年前鐵柱宮に於ける相識の人なりしかば、互に其奇遇に驚く。陽明は彼に前後の事情を語りしに、其人曰く、君若し朝命の如く龍場に赴かざる時は、彼の劉瑾は更に怒つて守仁こそ朝命を蔑にして、踪跡をくらましたる逆賊なれ、今は其父をも捕ふべしと謂はん。かくては不孝の罪免れじと。陽明其言の理あるに服し、意を決して龍場驛に至り、驛丞の職務を執りぬ。當時陽明詩あり「險夷原不滯胸中何異浮雲過大空夜靜海濤三萬里月明飛錫下天風」と。

　龍場の地たる、貴州の西北に僻在し、千山萬岳に取り圍まれたる僻邑にして猛獸毒蛇頗る多く、其土人は教化に浴せず、言語も不通にして、偶々中原の人あれば、多く

十六七年を費せり。

陽明すでに意を決して、再び世に用ひられんことを求めしかば、三十三歳の時、命ぜられて山東の郷試を主どり、更に兵部省に出仕す。其翌年憲宗崩じて、武宗皇帝位に卽く。是時に當りて宦者劉瑾、君寵を恃んで頗る專橫なり。戴銑等之を諫めて、反つて獄に囚へらる。陽明首として上疏して、銑等の忠直を述べ、瑾の罪惡を糾彈す。劉瑾大に怒りて之を獄に下し、四十杖の罰を科して、貴州の龍場驛丞に左遷せしむ、實に正德元年にして、三十五歳の時なり。是に於て陽明は都を後にして、遙に貴州を指して赴きしが、奸佞なる劉瑾の事なれば、人をして之を追跡せしめ、機を見て殺さんことを計畫せり。陽明豫め之を知り、揚子江に投身せるまねして、危くも虎口を逃れ、商船に投乘して、舟山(浙江省の群島)を通過せしに、暴風に遇ふて、閩界(福建省沿岸)に吹き附けらる。漸く上陸し、一寺を叩きて宿泊を求めしに、僧之を拒んで聽さず。乃ち野廟に至り、香案に臥して、困憊を一睡の中に送りぬ。深山の

しかども、故鄕の父と祖母とを念ふの情は、容易に滅すべくもあらず、山林に遁れて風月と友とせんか、膝下の奉養を闕くを如何せん、奉養を盡さんか、煩悶の已まざるを如何せんと、陽明の當年は、實に此「チレンマ」の解決に苦みたり。已にして忽然大悟して曰く、骨肉の至情は天賦にして、赤子の時より存在する者なり、此性なくんば、人類の絕滅久しと。遂に遁世の意を飜し、老莊の道を捨てゝ、復び儒敎に入り、以て精神修養を實行せんとするの勇氣を起せり。是れ實に其の三十二歲の時なり。されば其翌年西湖地方に遊び、偶〻或る禪僧が坐禪入定するを見るや、之を喝して曰く、和尙、終日何をか說き、何をか看ると。僧驚いて其故を語る。陽明其の家庭の狀を推問して曰く、子は母を思はざるか。對へて曰く、其一念は止めんとするも止むる能はずと。陽明之に告ぐるに、人倫の本性を以てし、佛老の之に背くを諭す。僧淚を流して、之に謝したりといふ。かくして十六七歲の時より始終胸中に徂徠せし修養問題は、今や始めて解決と慰安との光明を窺ふに至れり、而して其間實に

れたりといふ。然れば其政治的生活を棄てゝ、思想界に沒頭するに至りしは、此前後なるべし。十八歳の時、婁諒（一齋）に會して、程朱格物の學を知り、慨然として聖人の道に志し、朱子が光宗に上りし書中の「居敬持志、爲讀書之本、循序致精、爲讀書之法」を服膺す。是迄善謔和易なりし性質も、一變して謹嚴莊重となりしかば、知人皆其豹變に驚く。然れども一日宋儒格物窮理の說を驗するが爲に、竹を取り來りて熱心に研究せしも、別に得る所なかりしかば、竊に疑を抱きて樂まず。以爲へらく聖人學んで至るべからざるか、宋儒の格物說、果して信なるかと。大に煩悶し、之が解決を求めんとするも、良師なきに苦しむ。故に老莊養生の說を聽きて、之に傾く。二十八歳の時、進士出身の資格より歷官して兵部・刑部兩省に出仕す。其間或は邊防の事を論奏し、或は獄囚を審判す。然れども退いて自ら省れば、何等得る所なし。遂に職を辭して越に歸り、室を陽明洞に築き（陽明洞は貴州修文縣の北にして舊名東洞）長生術を練習す。世人是によりて陽明先生と稱す。遁世の念、如此く盛なり

遺二十八條、晚年定論を以てす。又附錄には大學問・示徐曰仁應試・諭俗四條・客坐私祝・略年譜を收む。王陽明には此外王陽明全書三十八卷其他數書あるも本書は其の精粹を蒐めたる者にして、恰も朱子の近思錄に於けるが如し。是を以て陽明學派、皆之を重んずること經典の如し。參考書には三輪執齋の標注傳習錄、及び佐藤一齋の傳習錄欄外書、最も世に著はる。今本書の內容を論じ、之を批評するに先だち、陽明の簡單なる履歷を述ぶるの要あり。蓋し陽明の一言一行は、盡く其の實歷中より鍛鑄し來りたる者なればなり。

第二　王陽明の傳

王守仁、字は伯安、明の憲宗皇帝成化八年九月三十日(西曆一四八二)浙江省餘姚に生る。豪蕩不羈にして、功名に意あり、十五歲の時、既に居庸關地方を巡遊して、親しく塞外の形勢を視察し、兵法騎射に熟達す。而して其文藻また人を驚かす者あり、十七歲の時、夫人諸氏を娶るに當り、道士と長生の道を鐵柱宮に談論して、其日を忘

傳習錄解題

第一　傳習錄の由來

傳習錄三卷は、明の陽明先生王守仁の語錄なり。今其の來歷を案ずるに、正德四年陽明四十一歲の時、門人徐愛始めて陽明論學の語を錄し、名づけて傳習錄といふ。蓋し論語學而第一の傳不習乎に本づく。嘉靖三年陽明五十三歲の時、門人南元善これに次ぎて陽明論學の書八編を輯む。嘉靖七年陽明五十七歲を以て沒するや、門人錢德洪、王汝中と計りて更に遺言を收錄して之に加へ、後には大學問等の諸篇を附錄となす。其刻本また多く、互に異同あり、今は我國三輪執齋の校輯本廣く行はるゝを以て、此に由りて其の體裁を述ぶべし。上卷には徐愛・陸澄・薛侃三子の錄する所、總べて百二十條。中卷には、答人論學書以下總べて十一篇、下卷には、陳九川・黃以方・黃修易・黃省曾・錢德洪五子の錄する所、總べて百十五條。之に加ふるに補

は、前に述べたるが如きものなれば、宋學の大體を知らんとするには、此書より捷徑なるはなし。若し之に加ふるに、更に宋學を大成せられたる朱子の語を輯錄せし續近思錄を以てせば、完璧に庶幾からん。朱子の語を輯めしものは、朱子の門人蔡覺軒の近思續錄、明の丘瓊山の朱子學的等の數種ありと雖も、就中、清の張伯行の撰せし續近思錄を善しとす。此書は、本文の外、集解ありて頗る閱讀に便なるものなり。

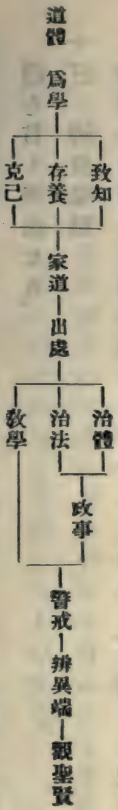
文學博士　林　泰　輔

なきに非ずと雖も、支那儒學史中に於て一大光彩を放ち、元明以後、上は王公より下は庶民に至るまで之を講究せざるものなく、社會一般に影響を及ぼしたることは、誠に偉大なるものなり。

第五　我邦に於ける近思錄の傳播

宋學の我邦に傳來せしは、元の末葉にて、卽ち我が南北朝の頃に當れり。されども足利時代は未だ大に行はるゝに至らざりしが、德川氏の初、藤原惺窩・林羅山等の出づるに及びて、漸く勃興の運に向へり。殊に山崎闇齋の京都に起るや、峻刻嚴厲なる朱子學を唱道し、その門に入るもの前後六千餘人の多きに至る。而してその人を敎ふる四書・小學・近思錄を以て學問の規矩準繩とし、博聞多識を尙ばず。其他、中村惕齋、貝原益軒等も亦各ゝ近思錄の注解を作れり。是に於て德川時代は、他の古學・折衷學・考證學等の行はるゝにも拘はらず、近思錄を講究するもの尠からざりき。近時に至りては、學風漸く變じ、その流行前日の如くならず。されども近思錄

以上十四篇、その大綱はたゞ道體と爲學とのみ。第三篇以下は、都て爲學中の事にして、皆道體を己れに全うする所以なり。致知は、道體を明かにする所以なり。存養克己は、道體を存して之を害するものを去る所以なり。家道は、道體を家に推し及ぼす所以なり。出處・治體・治法・政事・教學は、道體を邦國に推し及ぼす所以なり。警戒は、徹頭徹尾、道體を愼み守りて之を失はざらしむる所以なり。辨異端は、道體を亂るものを擯斥する所以なり。觀聖賢は道體を身に全うせしものを見はす所以なり。今之を圖に見はせば左の知し。



宋學の體系、之によりて粗ゝ大要を窺ふべし。その主張する所、或は議すべきもの

の警戒すべきを知りて、老成の時に至るも、己を修め人を治むる上に於て、常にこの意を忘るべからざることを知らず。故に特にこの篇を設くるは、前の數篇を貫く所以なり。

十三、辨異端類

異端は儒學と主義主張を異にするものなり。苟も自己の學ぶ所を信じ、以て己を修め人を治めてその道を天下に行はんと欲せば、之に反對する意見を主張するものに對しては、力を極めて辨駁せざるべからず。故にこの篇は、當時最も流行せる佛氏の說を論ずるもの多し。

十四、觀聖賢類

堯舜以來相傳の道統を論じて、荀卿・董仲舒・揚雄等の如き一世に鳴るの大儒をその間に附し、周程張子を以て之が歸結となす。爲學の成功、必ず此に至るべきことを指示する所以なり。

ざれば、治安の功を奏すること能はず。されども必ず治體治法相須つて、始めて德治主義の政治を行ふべし。これ特にこの兩篇を設けたる所以なり。

十、政事類

政事は、政に臨み事を處するの心得にして、道德的立脚地に據りて制度法令を運用するの方法なり。故にこの篇は、上に事へ下を撫し、同僚を待し賢才を用ふるの類、すべて職務を行ふ上に於て注意すべきことを論ぜり。

十一、敎學類

政事と敎育とは相待つて離るべからざるものなるが故に、この篇は敎育の道を論ず。たゞ周程張子は皆進んでその道を行ふことを得ず、退きて英才を敎育せしものなれば、その方の事を述べたるもの多し。

十二、警戒類

警省戒謹は、少より老に至るで一刻も忘るべからざるものなり。人或は少時

七、出處類

身既に修まり家既に齊へば、君に仕へ職に任じてその學ぶ所の道を社會に行ふべし。されどもその出處進退の際は、十分愼重にして勢位利欲の爲めにその心を動さず、善く義理の在る所を審かにし、出づべき時に出で、處るべき時に處るは、君子身を處するの大節なり。

八、治體類

君に仕へ職に任ずるものは、治體・治法・政事の三道を講究せざるべからず。治體は政治家の基礎となるものにて、卽ち自己に於ける道德的立脚地を確立するにあり。若しこの基礎の確立するに非ざれば、眞に王道を斯世に行ふこと能はざるなり。

九、治法類

治法は、制度法令なり。如何なる政治家と雖も、制度を立て法令を定むるに非

ふるかといふに、心を引締めて些の怠慢なければ性情自ら涵養せられて、知識を推し極むるにも己に克ち身を修むるにも、綽々として餘裕あり。故に存養は前の致知と後の克己との中間にありて、兩者を貫けるものなり。今日の如き多忙の世にありて學問に從事するものは、この心得尤も必要なるべし。

五、克己類

克己は、己が身の私欲に克ち去るをいふ。身を修むるに害あるものを除かざれば、善に進むこと能はず。譬へば雜草を除かざれば、佳苗の生長せざるが如し。故に克己は修身の要諦なり。

六、家道類

致知・存養・克己の三方法を以てその身を修むれば身既に修まる、故に一家の主としてその家を齊ふることを得べし。これ自己の修養せる所を他人に及ぼすの始なり。

する所以なり。故に學とは、自己の未だ知らざる所を求めてその知を明かにし、自己の未だ行ふこと能はざる所を努めて、その身を修むることにて、知と行との兩方面を兼ね言へるなり。

三、致知類

致知は、知識を推し極めて之を明かにするをいふ。知識明かならざれば、何事も爲すこと能はず。譬へば闇夜路を行くに、燈光なければ如何ともすることは能はざるが如し。されば爲學の方法中第一著に力を用ふべきものは、致知より先なるはなし。故に此篇には、致知の細目として、或は書を讀みて義理を講明し、或は古今の人物を論じてその當否を別ち、或は事物に應接してその當に處する等の事を擧げ、且讀書の方法を論述せり。

四、存養類

存養は、心を存し性を養ふをいふ。心を存し性を養ふには、如何なる方法を用

宋學の興起する所以は、既に前に述べたるが如し。是に於て宋學を大成せる朱子が、その根據とする所の周程張子の說を編輯するに當りて、その組織せる學術上の見解に本づきて之を分類するは、固より然るべきことなり。されば近思錄の分類を見る時は、宋學の趣旨を究むるに於て、思半ばに過ぐといふべし。因つてまづその目を掲げ、且その大要を略說すること左の如し。

一、道體類

道體は、道の形體にして、學問の標的となす所のものなり。卽ちこの篇の載する所は、太極・陰陽・誠・德・中和・性命・鬼神等の說明にして、初學の遽に了解すること能はざるものなれども、一應その大要を知りて學問の方針を誤らざらしめんが爲に、之を卷首に掲げたるなり。

二、爲學類

爲學は學問を爲すの方法にして、卽ち道體篇に述べたる所の道を自己に體得

然らしむる所なるべしと雖も、この間に於て所謂宋學なるもの、漢唐以來行はれたる學問と頗るその趣を異にし、哲學的研究の態度を取るに至りたるものは、必ずその故なくんばあらず。熟〻宋代以前の學界の形勢を察するに、精神的方面に力を用ふるもの、多くは佛家の徒にして、儒者は徒らに文字訓詁に拘泥し、或は詩賦文章に耽ることゝなれり。然るに唐代以來隆盛を極めたる佛教は、宋代に至りて益〻行はれ、殊に禪學は一時を風靡するの勢なりしかば、苟も書を讀み學を講ずるものにありては、禪書を讀み禪僧に交らざるもの殆ど稀なり。是に於て儒學者も亦、文字訓詁の講習のみにて滿足すること能はず、更に進んで精神的方面の研究を試み、以て佛家に對抗せんと欲するに至るは自然の勢なり。況んや一般の學術界は、思想の尤も活動せる時運に遭遇せるに於てをや。宋學の興起する決して偶然に非ざるなり。

第四　近思錄の分類

父の遺命によりて胡憲・劉勉之等を師とせしが、後に李延平（名は侗）が程伊川の高弟楊龜山（名は時）の門人羅豫章（名は從彥）に學び、道を樂しみ隱居せるを聞き、往て之に從ひ、終にその學統を受くるに至れり。朱子は博學洽聞、書として讀まざるなく、躬行實踐、動止苟もする所なし。善く周程張子の說を綜合してその異同を辯析し、長を取り短を捨て、その缺漏を補ひ、宋學の組織を完成して、益々光輝を發揚せり。著はす所四書章句集注・詩集傳・易本義・小學等甚だ多し。

朱子名は熹、字は仲晦、晦菴と號し、文公と諡す、婺源（安徽徽州に屬す）の人なり。初、

第三　宋學興起の原因

支那歷代を通觀するに、學術勃興、思想活動の尤も盛なるは、上古にありては周代、中古にありては宋代を以て稱首と爲さゞるを得ず。宋代は國勢振はず、武備頽弛、契丹・女眞の侵略に對して、頗る之を苦めり。されども學術の方面に於ては、獨り周程張朱の學派のみならず、其他にも進步發達せしもの尠からず。之れ蓋し時運の

人なり。兩人共に少年の時、周濂溪に從つて學ぶ。明道は資性人に過ぎ、修養道あり、温和純粋にして門人朋友の之に從ふもの、未だ嘗て忿怒の色を見たることなしといふ。その學を爲すこと甚だ廣く、初は老子・佛氏の說にも出入せしが、後に孔孟の道に歸著せり。著す所定性書等あり。程伊川は太學に入り胡安定に從つて學び、十八歲の時試に應じて顏子好學論を作り、名聲頗る揚る。天資剛正にして道を守ること甚だ嚴なり。著はす所、易傳・孟子解等あり。二程子の著述及び門人の記せし語錄は、皆二程全書の内に收載せり。

張横渠名は載、字は子厚、陝西郿縣横渠鎭の人なり、故に世人横渠先生といふ。横渠は少年の時、兵を談ずることを好みしが、范仲淹之に勸めて中庸を讀ましむ。然れども猶ほ足らずとして、佛氏・老子の說を攷究せり。後、二程子と道學の要を語るに及びて、盡く舊學を棄てゝ聖賢の道を講ずるに至る。著はす所、正蒙・西銘・理窟等あり。

れ此書を讀む者の爲めにその心得を示したるなり。

第二　周子二程子張子及び朱子の學統

周程張四先生の學統は、その源を周濂溪に發し、二程子之を繼ぎ、張横渠亦その流を汲み、朱子の出づるに及びて之を大成せり。その學は、勿論孔孟を祖述し、千載不傳の道統を繼ぎたりと稱すと雖も、亦一家の見解を具へて、その論說する所或は孔孟學術の範圍を出づるものなきにあらず、故に世之を目して宋學といふ。宋學の鼻祖周濂溪、名は惇頤、字は茂叔、道州（湖南省永州に屬す）濂溪の人なり。その學は何人に就て學びしや詳ならざれども、儒學の外、道教及び佛說をも兼ね修めたるが如し。博學力行にして人品甚だ高し。黃山谷嘗て之を稱して、胸中灑落たること光風霽月の如しといへり。著はす所、太極圖說・通書等あり。

程明道名は顥、字は伯淳、その沒後、文彥博衆論を採りその墓に題して明道先生といふ。程伊川名は頤、字は正叔、明道の弟なり、世之を稱して伊川先生といふ、河南の

近思錄解題

第一　近思錄の編輯と其名義

近思錄は、宋の大儒朱子が、その親友呂東萊と共に編輯せしものなり　今その由來を考ふるに、宋淳熙二年四月、呂東萊は朱子を武夷山(福建省崇安縣の南にあり)の寒泉精舍に訪ひ、滯在すること十餘日に及べり。　因つて相共に周濂溪・程明道・程伊川・張橫渠の書を讀み、その廣博にして初學の者の要領を得る能はざらんことを恐れ、その大體に關し、日用に切なるものを鈔錄して、此書を編輯せしなり。　されども其後、訂正を加へたるは專ら朱子の手に出でたれば、之を朱子の書といふも亦可なり。　之を名づけて近思錄といへるは、論語子張篇子夏の語に、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣とあるに取りたるなり。　近思とは、學問上修養上、すべて吾身に適切なるものに就て思索を爲し、漠然として空理空想などに耽ることなきをいふ。　こ

卷之下

——（目次終）——

目次

近思錄 (一―三九六)

傳習錄 (三九七―九〇五)

例言

一近思錄及び傳習錄各全部を收めて本書一卷とす。

一上欄に揭ぐる所の原文は、近思錄は流布の和刻集解本(建安葉采集解)により、傳習錄は佐藤一齋の欄外書本による。

一訓讀及び註解に關しては、近思錄は集解本を主とし、傍ら邦儒の解釋兩三種を參酌して其宜しきに從ひ、傳習錄は主として三輪執齋の標注と佐藤一齋の欄外書とを參考せり。

一下欄書下し文の一字下りに始まるは原本の一項を爲す所、其然らざるは譯註者の私見により便宜行を改めたる所と知るべし。

一近思錄原文中、往々括弧を施し、之に對する譯文を小活字とせるものあり、之れ原註の文にして特に必要なりと認めたるものを摘錄せる所也。

近思錄 全

傳習錄 全

